

仙台市文化財調査報告書第191集

下飯田遺跡

発掘調査報告書

平成7年3月

仙台市教育委員会
日本道路公団

仙台市文化財調査報告書第191集

下飯田遺跡

発掘調査報告書

1995年3月

仙台市教育委員会
日本道路公団



調査場所空撮
(S→N)



3、4区空撮
(E→W)

序 文

仙台市では現在約700ヶ所の遺跡の存在が確認されています。それらの分布を見ると河川が丘陵部をぬけて平野部に入ったあたりの自然堤防上に多く、地区的に言うと、西中田、大野田・富沢、岩切地区と集約できるようです。

しかしながら近年、仙台バイパスより東側で、南道路や東部道路建設とともに確認調査を実施したところ、新たに高田B遺跡、下飯田遺跡が発見され、その他中在家南遺跡や藤田新田遺跡、今泉遺跡などの調査とも合わせて、仙台市東部の浜堤上の遺跡の様子も次第に知られるようになって来ております。

この報告書は、仙台市東部の海岸平野を南北に通る、仙台東部道路の建設に先立って発掘調査が行われた下飯田遺跡の内容をまとめたものです。海岸まで約3kmの位置にある当地で、古代の堅穴住居跡や溝跡など、また河川跡では捨てられた貝がらが層をなしている状況で発見されました。まさに古代の「貝塚」です。遺物には関東系土器が多量にあり、当地の性格を考える良好な資料です。その他、鎌倉時代ごろの掘立柱建物跡などの発見もありました。

同じ東部道路関連で、県教育委員会が調査した藤田新田遺跡がすぐ北側にあり、成果も公表されておりますので、合わせて参考にしていただければ、この地区の各時代の様相が一段と鮮明にご理解いただけるものと思います。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行まで多くの方々のご指導、ご協力をいただきましたことに対しまして、心より感謝申し上げます。今後とも文化財保護行政についてご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成7年3月

仙台市教育委員会

教 育 長 坪 山 繁

例　　言

1. 本書は日本道路公団仙台建設局が担当する仙台東道路建設設計画に伴う下飯田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書における土色についての記述は「新版標準土色帖」(小山・竹原：1976)を使用した。
3. 本書の第1図は建設省国土地理院発行の1/25,000「仙台東南部」を複製して使用した。
4. 調査区のグリッド軸は道路センターライン上の方向に沿って設定してあり、平面直角座標系Xによる国家座標に位置づけている。
5. 発掘調査および整理・報告書の作成に際しては、次の方々からご助言やご教示を賜った(50音順、敬称略)。

青山 博樹 石本 弘 糸川 道行 岩見 和泰 山内 敏行 佐藤 敏行 菅原 祥夫 須藤 隆辻 秀人 永島 正春 仲山 秀樹 長谷川 厚 藤島 久 光谷 拓実 村田 晃一 梁木 誠
6. 本書で使用した造語略号は次のとおりである。

S I : 穴住居跡 SD : 溝跡 SK : 土坑 SE : 井戸跡 SR : 河川跡 P : ピット、柱穴
7. 本書の記載は2区からになっている。1区は2区の北側になるが、試掘調査のみで本調査に至っていない。
8. 本書の遺物整理・執筆・編集は文化財課職員と協議のうえ、中富が行った。ただしVの分析等に関するご指導、ご執筆は、次の方々にお願いした(掲載順、敬称略)。
- 松本 秀明 守田 益宗 高橋 利彦 大越 龍嗣 富岡 直人 松谷 晓子 古環境研究所 三辻 利一
9. 穴住居跡の記載はその番号順に行っているが、S I 7・10・12・17・20については欠番であり、記載していない。
10. S E 2 井戸跡出土の曲物の井筒について、奈良国立文化財研究所の光谷拓実氏に年輪年代測定を依頼したが、年代を推定できる有効な結果は得られなかった。
11. 調査成果については現地説明会資料、年報13・14でも紹介してあるが、内容が異なる場合は本書が優先する。
12. 発掘調査・整理作業には次の方々が参加した(50音順、敬称略)。

相澤せい子 粟野ちよ子 猪狩 和子 板垣 祝子 伊藤 普也 上野 美子 臼井美津子 遠藤 清遠藤 扇男 遠藤 徳子 遠藤 文子 大泉 勇 大泉 照美 大内 松夫 大木百合子 大越 麻弥大友 悅子 大友 敬子 大友 孝子 大友ちえ子 大友 恒子 大友とみ子 大友 實男 大友 広美大友 泰子 大友よし江 小佐野章子 小野さよ子 小野 純也 小野寺圭穂 角田 紀隆 片貝 葉子加藤 若子 金沢 君代 神坂勝太郎 川村 秋子 菅野やゑ子 菊地 和江 菊地 京子 草刈 昭代黒瀬クラコ 後藤 幸子 後藤ひとみ 小林みよ子 今野よし子 斎藤 理恵 酒井 正雄 佐久間幸子佐々木かつみ 佐々木陽子 佐藤ケイコ 佐藤忠二郎 佐藤つよし 佐藤 正敏 佐藤 良正 佐藤 良次佐藤 玲子 真田 貞愛 篠原 良子 柴田 明 柴田 徳郎 庄子カツイ 菅原 浩樹 菅原 光子杉船比佐子 杉山 隆良 鈴木 淳敷 鈴木 恵美 鈴木貴美子 鈴木 節子 鈴木 春江 鈴木 文平鈴木 由美 関内 久子 関根 昭雄 平 照子 高橋 健寿 常盤 歌子 橋本ひろみ 長谷川 貴林崎 恵 針生せつ子 平野 真美 藤代まゆみ 藤田 光男 細谷 広枝 堀江 幸雄 堀口百合子松崎 純子 松葉美代子 武藏美代子 山崎 光雄 渡辺 純子 渡辺みどり
13. 発掘調査の記録や整理した資料・出土遺物は仙台市教育委員会が管理・保管している。

目 次

卷頭カラー	
序 文	
例 言	
目 次	
I 調査に至る経過	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 基本層序	11
IV 発見された遺構と遺物	
1. 積穴住居跡	12
2. 掘立建物跡柱	68
3. 土 坑	79
4. 井 戸 跡	108
5. 溝 跡	121
6. 円形周溝遺構	164
7. 小溝遺構群	167
8. 河 川 跡	176
9. 遺構の年代観	220
V 分析・同定	
1. 2つの河川跡 (SR 1, SR 2) の地形学的背景	221
2 - 1. 下飯田遺跡の花粉分析 (4区SR 1河川跡)	227
- 2. 下飯田遺跡 (3区SR 4河川跡) の花粉分析	241
3. 下飯田遺跡出土木製品の樹種同定結果	271
4. 下飯田遺跡出土の貝類	291
5. 下飯田遺跡出土脊椎動物遺存体	295
6. 仙台市下飯田遺跡から検出された穀物の灰像	299
7. 仙台市下飯田遺跡におけるプラント・オペール分析	303
8. 下飯田遺跡出土土師器の螢光X線分析	309
VI ま と め	313
出土遺物集成図	315
参考・引用文献	337
写 真 図 版	339
抄録・奥付	

写真図版目次

本文中に組み込んだ写真図版以外で、巻末にまとめたものについて掲載する。

写真図版16 遺跡・遺構写真	339
17 土師器（A群）	376
18 土師器（B群）	376
19 土師器（C群）	376
20 〃	377
21 土師器（D群）	377
~29 〃	385
30 土師器（E群）	385
31 〃	386
32 土師器（F群）	386
33 〃	387
34 土師器（G群）	387
35 須恵器	387
~37 〃	389
38 繩文土器・弥生土器	389
39 陶器・磁器	389
40 瓦	389
~42〃	391
43 土製品	391
~44 ~	392
45 金属製品	392
46 石製品	392
47 木製品（1）	393
~60 〃（14）	405
61 土器拡大写真（1）	406
~71 〃（11）	416
72 自然遺物（1）貝、骨、種子	417
~78 〃（7） 〃	423

I 調査に至る経過

仙台東道路は、仙台市内の通過交通を分離して現道の機能回復を図るとともに、建設省及び宮城県が事業中の仙塩バイパス・松島有料道路と一体となり、仙台湾岸地域の幹線道路として機能するとともに、国際化を進めている仙台空港・仙台新港の連絡道路として仙台都市圏の発展に寄与しようとするものである。

本道路は、仙台湾高規格幹線道路の一部として三陸縦断自動車道と連結し、宮城県亘理町中泉の一般国道6号線を起点として仙台市宮城野区中野の一般国道45号線を終点とする延長約26.3kmの路線である。このうち日本道路公団は、仙台空港ICから仙台東ICまでの延長約14.1kmの区間を一般有料道路事業として施行することになった。

昭和56年12月に提示された計画案では周知の埋蔵文化財包蔵地は避けられていたが、ルートは阿武隈川と名取川の河口に開けた仙台沖積平野を南北に縦断することから、自然堤防や浜堤部分には遺跡の存在する可能性が想定され、宮城県教育委員会では日本道路公団仙台建設局と協議をし、平成元年3月に対象となる路線全域の詳細分布調査を各市・町教育委員会とともに実施した。

これらうち仙台市域においては、微高地に位置する下在家地区・藤田新田地区で遺物の散布が見られ、また同様に微高地に位置する下飯田地区でも遺跡の存在する可能性もあることから、平成元年10月に宮城県教育委員会では、下在家地区から下飯田地区にかけての約3kmにわたるほぼ全線の試掘調査を実施した。その結果、藤田新田地区と下飯田地区で古墳時代の堅穴住居跡や溝跡などが多数発見され、両地区とも古墳時代の集落跡であることが判明した。路線敷にかかる面積は藤田新田遺跡が約24,400m²、下飯田遺跡が約7,500m²である。

藤田新田遺跡・下飯田遺跡の発掘調査については、宮城県教育委員会と仙台市教育委員会が協議しながら協力してあたることとし、宮城県教育委員会が藤田新田遺跡を、仙台市教育委員会が下飯田遺跡をそれぞれ担当して実施した。

平成3年3月に日本道路公団仙台建設局長から埋蔵文化財の発掘通知が提示され、同年4月に日本道路公団の委託を受けて、5月15日より発掘調査に着手した。

調査要項

- 1 遺跡名 下飯田遺跡（宮城県遺跡登録番号 01434）
- 2 所在地 仙台市若林区下飯田 地内
- 3 調査面積 約7,500m²
- 4 調査期間 平成3年5月15日～平成4年3月
平成4年4月13日～9月30日
- 5 調査主体 仙台市教育委員会
- 6 調査担当 仙台市教育委員会文化財課
- 7 担当職員 金森安孝 工藤哲司 中富 洋
- 8 調査協力 日本道路公団

II 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

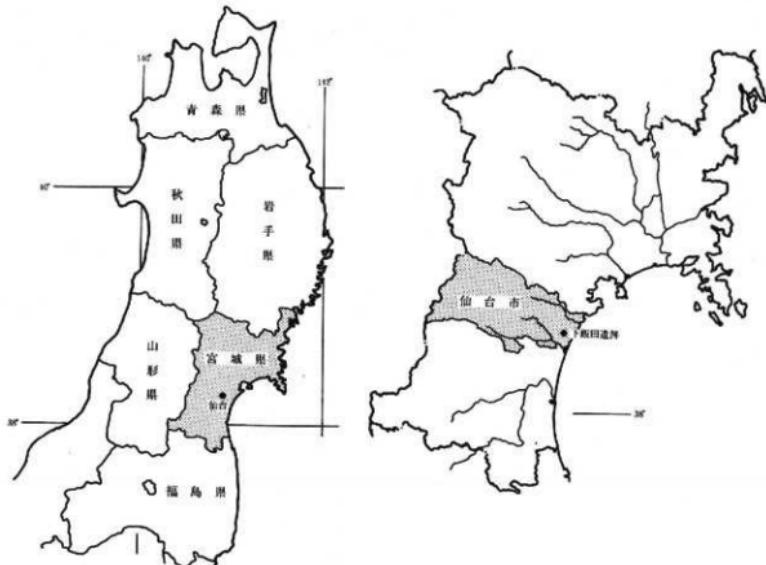
下飯田遺跡は仙台市若林区下飯田にあり、JR東北線仙台駅の南東7.5kmの地点に位置している（第5図）。

この地域は南北に仙台平野が広がり、東方は3km程で仙台湾に面した海岸線に至り、南方は2.5km程のところを名取川が東流し、西方は4km程のところを国道4号仙台バイパスが通り、市街地が広がっている。周辺一帯は、標高が1m前後ときわめて低く、近年急速に市街化、宅地化が進行しているが、藩政時代からの市街地となっている西部地区とは対照的に、近世初期の新田開発に伴って成立した集落が、一面に広がる水田地帯の中に点在している。

仙台市街地の地形は西半部と東半部とに大きく二分される。

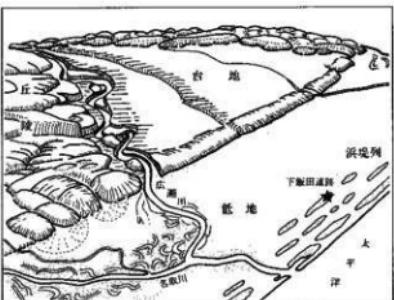
西半部は奥羽山脈から派生する七北田・青葉山・高館丘陵と名取川の支流である広瀬川がその中流域に形成した段丘地形からなる。この段丘は上位から青葉山段丘・台ノ原段丘・上町段丘・中町段丘・下町段丘と命名され、近世初頭、伊達政宗の開府以来、現在に至るまで、仙台の中心市街地はこれらの段丘上に営まれ拡大してきた。

これに対し東半部は幅約10kmに及ぶ宮城野海岸平野が北は宮城郡七ヶ浜町から南は亘理郡山元町まで約40kmにわたって三日月形に広がっている。この沖積平野は奥羽山脈を水源とする七北田川・名取川・阿武隈川の運搬物によって形成され、流域には扇状地・自然堤防・後背湿地・旧河道など冲積地特有の地形を形成している。特に海岸に近い東部付近一帯では、浜堤や自然堤防などの微高地が隨所に発達している。松本秀明氏によれば、この地域には海岸線と平行して南北に延びる4本の浜堤列が認められ、最も内陸側（西側）に位置する第I浜堤列が最も古く、形成年代は約5000～4500年前頃、同じく第II浜堤列は約2600～1700年前頃、第III浜堤列は約1000～700年前頃と見られている（註1）。本遺跡は北から下在家～藤田新田～下飯田と連なる第I浜堤列上にあたっている（第2図）。



第1図 下飯田遺跡の位置

原状では耕地整理のため平坦な水田となっており、本来は浜堤と後背湿地からなる地形に小さな河川が入り組むなど、変化に富んだ地形であったようであるが、旧地形を知ることができない。なお、本遺跡の主体をなす造構群の属する時代である古代～中世の頃は、第Ⅲ浜堤列の形成期前後とみられ、現在の海岸線より約1km内陸で、遺跡の東約2kmにあったものと考えられる。



第2図 下飯田遺跡周辺の地形模式図

2. 周辺の遺跡と歴史的環境

下飯田遺跡が立地している名取川左岸域について、周辺遺跡のこれまでの調査成果をもとに概観する。

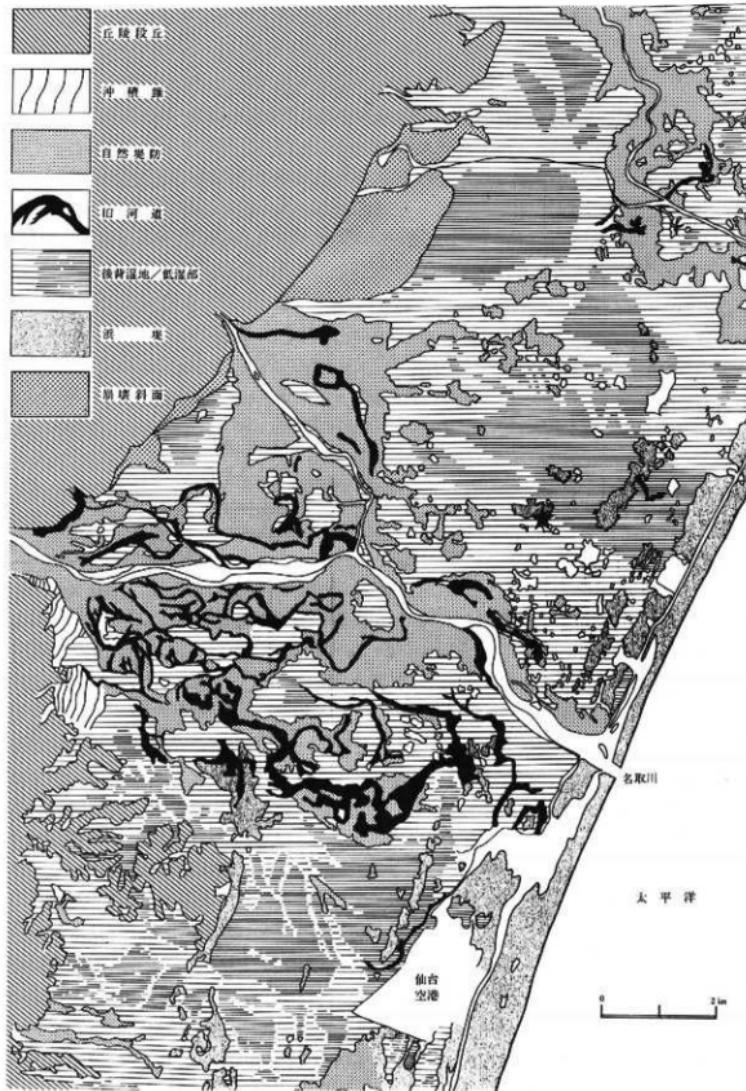
縄文時代の遺跡は、高田B遺跡・今泉遺跡がある。高田B遺跡は2km程南西方に位置し、後期中頃の竪穴住居跡1棟の他、後期後半・晚期の土器が発見されている。今泉遺跡は高田B遺跡の北東に隣接しており、同時期の土器片が出土し、当地区に集落が形成されたことが考えられる。縄文時代の後期中頃には名取川下流域にまで集落が形成され、人々が定住生活を営みはじめたことが伺えるが、この2遺跡の他には縄文時代の遺跡はみられず、広範な人々の活動は後背湿地に水田耕作が開始される弥生時代以前のこととみられる。

弥生時代の遺跡は、前述の高田B遺跡・今泉遺跡の他、藤田新田遺跡・南小泉遺跡・中在家南遺跡・押口遺跡などがある。高田B遺跡では、中期中頃の遺物包含層の下層から土坑・柱穴などの他、水路を伴って50区画をこえる水田跡が確認された。また、河川跡が発見され、中期中頃の土器と共に農耕具を中心とする多量の木製品が出土している。石器・木製品の中には未製品が多く含まれており、これらの製作作業がここで行われていたことが判明した。今泉遺跡では、高田B遺跡と同期の壺形土器・石窓・片刃石斧などの石器が発見されている。藤田新田遺跡は、北側500mで隣接しており、中期中頃の壺形土器の他、石窓・片刃石斧が出土している。南小泉遺跡は、北西方3km程から西方一帯に広がる大遺跡で、東西約1.5km、南北約1km、総面積約125haを擁し、仙台平野でも弥生・古墳時代を代表する遺跡である。これまでの30次をこえる発掘調査の結果、発見された遺構・遺物は弥生時代から近世まで各時代にわたる。弥生時代では、護目飛行場の拡張工事の際に発見された15基の合口土器棺がある他、中期中頃の土器類を中心に多くの土器・石窓・石斧などの石器が出土している。中在家南遺跡は北方3km程に位置し、土墳墓・土器棺墓の他、河川跡が発見され、中期中頃の土器群と共に農耕具・建築部材など多量の木製品や石器・骨角器・自然遺物などが出土している。高田B遺跡と同様、木製農具の中には未製品も多く含まれており、製作工程を知ることができる貴重な資料である。河川跡から出土の木製品は弥生時代のものが主体をしめるが、近世に至る各時代のものがある。押口遺跡は中在家南遺跡の北西に隣接し、同一河川跡の流路にあたっている。中在家南遺跡と同様、中期中頃から近世に至る各時期の土器・木製品などが多く出土している。両遺跡間の約800mにわたる流路は同様の状況が想定されよう。

古墳時代の遺跡は、前述の高田B遺跡・今泉遺跡・藤田新田遺跡・南小泉遺跡・中在家南遺跡・押口遺跡などが継続して營まれている他、遠見塚古墳・下飯田薬師堂古墳などの高塚古墳がある。高田B遺跡は河川跡から建築部材や農耕具などの木製品が大量に発見された。今泉遺跡は前期・中期の土坑から土器群が一括して発見され、周辺に集落の存在が想定される。藤田新田遺跡は前期の竪穴住居跡、方形周溝墓など、中期の竪穴住居跡のはか、所属



第3図 調査地点周辺現況図



松本(1981)を基準 (★印は下飯田遺跡の位置を示す)

第4図 名取川下流域の地形分類図

時期不明の竪穴住居跡が多数発見されており、この時代に集落が大きく展開している。また河川跡からは木製品や自然遺物が多数出土している。南小泉遺跡は東北南半地域の土師器型式編年。南小泉式の標式遺跡であり、これまでの調査で竪穴住居跡は中期に属するもの50数棟、後期から終末期に属するもの10数棟が発見されている。中期の集落は遠見塚古墳のある遺跡東半部を中心に展開している。中在家南遺跡は前期の方形周溝墓の他、河川跡からは前期・中期を通じて農耕具をはじめとする木製品が大量に発見された。押口遺跡からも中在家南遺跡と同一の河川跡から同時期の木製品が大量に発見された。遠見塚古墳は北西方3.5km程に位置し、主軸長110mの前方後円墳で、4世紀末頃の築造と考えられ、仙台市内では最大規模の古墳である。下飯田薬師堂古墳は本遺跡の東300m程に隣接しており、直径10m程の円墳であるが未調査で詳細は不明である。

飛鳥時代の遺跡は、周辺では本遺跡以外には、広瀬川対岸の郡山遺跡が見られるのみであるが、関東系土師器や郡山廃寺と同様の瓦類が出土し、密接な関連性が考えられる。

奈良・平安時代の遺跡は、前述の郡山遺跡の他、南小泉遺跡、神柵遺跡、中在家南遺跡、藤田新田遺跡、仙台東郊条里跡などがある。南小泉遺跡は奈良時代の遺構は遺跡の北側に若干の竪穴住居跡がみられる他は希薄であるが、平安時代の竪穴住居跡が遺跡南部地域に多く分布し、平安期の集落が南側に展開している。多くの墨書き土師器や石帯、陸奥国分寺・尼寺の瓦など通常の集落とは異なった遺物が出土している。神柵遺跡は北西3.5km程に位置し、奈良時代後半から平安時代初頭の掘立柱建物跡、廻跡などとともにへラ書き土師器、円面鏡などが出土している。東一帯に広がる条里跡との関連から郡などに関わる公的施設の跡と考えられている。南小泉遺跡、中在家南遺跡では平安時代の烟跡、藤田新田遺跡では平安時代の水田跡が発見されている。仙台東郊条里跡は、南小泉・古城地区的東方にあたる、中倉から霞日、沖野、上飯田一帯に広がる条里地割跡のあった地区である。昭和30年代までは方格地割が明瞭に観察されたが、その後圃場整備によりほとんど湮滅した。地区内には「三ノ坪」「尼坪」などの字名が残っていた。条里制施行の初現は明らかでないが、奈良時代には始まっていたものと考えられる。

中世の遺跡は、沖野城跡、今泉遺跡（城跡）、南小泉遺跡などがある。沖野城は北西方3km程に位置し、「仙臺領古城書上」（註2）によれば、四方百間で粟野大膳の出城とあり、発掘調査により堀跡が確認された他、土塁なども観察され、城館の付近には「館」「要害」などの字名が残っている。今泉城跡は同書によれば、東西三十六間、南北四十五間で、城主は須田文蕃とある。発掘調査により、建物跡や区画溝跡が発見され、全体規模も200m四方と推定される。南小泉遺跡は数次にわたる発掘調査により、建物跡や区画溝跡、土塁などが発見され、城館や複数の屋敷があったことが明らかになっている。

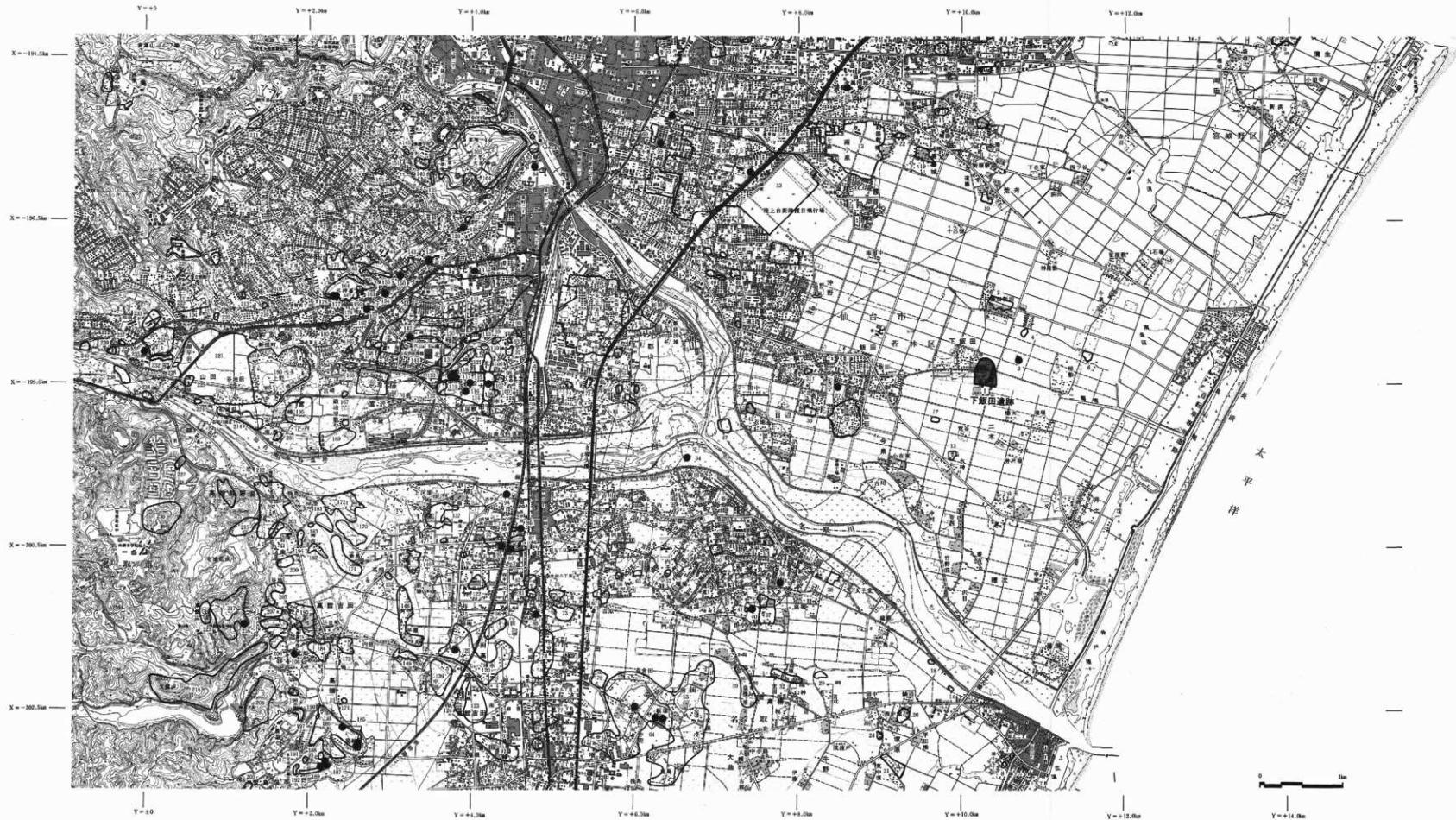
江戸時代の遺跡は、若林城跡、南小泉遺跡、養種園遺跡、今泉遺跡などがある。若林城跡は北西方4.5km程に位置し、江戸時代初頭に仙台藩主伊達政宗の晩年の居所として築城されると、南小泉遺跡、養種園遺跡を含む周辺一帯は城下町として整備されたが、政宗の死去以後、城の建物は移築ないしは取り壊され、周辺の城下町並も衰退の途をたどり、近世村落・耕作地に姿を変えていく。養種園遺跡は北西方5km程に位置し、発掘調査により屋敷跡や庭園跡が明らかとなり、伊達家の御仮屋および別荘の跡と考えられた。今泉遺跡では、江戸時代初頭まで城館が存続している。本遺跡のある下飯田は水沢留守家の臣属足輕によって構成された開拓部落で屋敷割も整然としていた。

明治22年、町村制実施の際、飯田・沖野・日辺・二木・今泉・種次・井土浜・藤塚浜の8部落が合併して、六郷村となり、昭和16年には仙台市に編入された。旧六郷村は名取郡に属するが、下飯田の北に隣接する藤田新田の集落は旧七郷村の内の一部落で、旧七郷村は宮城郡に属していたことから、下飯田は名取郡の北端に位置し、ここが宮城郡との郡境となっていた。

本遺跡がある国道4号仙台バイパスの東部一帯は、市内の他地区と比較すると遺跡の分布密度は希薄であったが、最近の大規模な道路建設事業や区画整理事業に伴う発掘調査により、新たに発見されたり、範囲の拡大するものがあり、今後本遺跡周辺を含め、浜堤・後背湿地における分布確認調査により、各時代の様相がより明らかになっていくものと考えられる。

註1 松本秀明「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準微変動」『地理学評論第57巻第10号』1984

註2 「仙台叢書」第4巻（復刻版）宝文堂 1971



第5図 周辺の遺跡

No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代
1 下飯田	糞堆	古墳・奈良・平安・中世・近世		61 北川居跡	自然堤防	古墳・江戸	
2 藤田御田	糞堆	牟牛		62 次ノ上里	自然堤防	古墳・奈良・平安	
3 下飯田遺跡占領	糞堆	古墳		63 次ノ上Ⅱ	自然堤防	古墳・奈良・平安	
4 畠牧東	糞堆	古墳・平安		64 駒形古墳群	自然堤防	古墳(後期)	
5 田母新屋跡	自然堤防	近世		65 駒形北	自然堤防	古墳・奈良・平安	
6 四崎館	糞堆	中世・近世		66 駒形中	自然堤防	古墳・奈良・平安	
7 沙入東城	自然堤防	古墳・奈良・平安		67 次ノ上Ⅲ	自然堤防・後背堤防	六朝・奈良・平安・中世	
8 東城	自然堤防	古墳・奈良・平安		68 久米	自然堤防・後背堤防	古墳・奈良・平安	
9 野原敷	自然堤防・後背堤防	平安		69 後河原	自然堤防	奈良・平安・中世・近世	
10 下鬼井	自然堤防	平安		70 八王子原跡	自然堤防	中世	
11 地藏塚	自然堤防・後背堤防	中世		71 駒山	自然堤防・後背堤防	奈良・古墳・奈良	
12 夏月船跡	自然堤防	中世		72 駒ノ瀬	自然堤防	古墳・奈良・平安	
13 二木船跡	糞堆	安土・桃山		73 中田南	自然堤防	奈良・平安	
14 明照堂	自然堤防	古墳・奈良・平安		74 の場	自然堤防	奈良・平安	
15 神山	自然堤防	古墳・平安		75 西古墳	自然堤防	古墳(後期)・奈良・古墳	
16 北堀敷	自然堤防	平安・中世・江戸		76 北	自然堤防	奈良・平安	
17 備道	糞堆	奈良・平安		77 武口	浜堤	奈良・古墳・奈良・平安	
18 大塚	自然堤防	古墳・奈良・平安		78 上田余	自然堤防	奈良・平安	
19 美音城跡	自然堤防	中世		79 下田高南	自然堤防	奈良・平安	
20 寺田	自然堤防	中世		80 天神坂古墳	自然堤防	古墳	
21 金中塚	自然堤防	不詳		81 墓原	自然堤防	奈良・平安	
22 中庄家	自然堤防	平安		82 織田船跡	自然堤防・後背堤防	中世	
23 佐古東源免免跡	自然堤防	奈良・平安		83 稲原	丘陵斜面	編文	
24 鶴見寺跡	自然堤防	中世		84 安堵古墳	自然堤防	古墳	
25 今泉城跡	自然堤防	鶴見(淡路・淡磯)・秀吉・古墳・平安・中世		85 云霧寺穴群	段丘	古墳	
26 青利影明神古墳	自然堤防	古墳		86 伊豆野鹿廻古墳	自然堤防	古墳	
27 駒塚古墳	自然堤防	古墳		87 安久美	自然堤防	秀吉・古墳・奈良・平安・中世・近世	
28 新井北	自然堤防	奈良・平安		88 田中神社裏	自然堤防	古墳・平安	
29 比	自然堤防	奈良・平安		89 安久東古墳	自然堤防	古墳	
30 高田	自然堤防	後背堤防・奈良・平安		90 美町六丁目	自然堤防	奈良・平安	
31 上越家	自然堤防	古墳・奈良・平安		91 六幡	自然堤防	古墳(後期)・奈良・平安	
32 中北城	自然堤防	奈良・平安		92 黄砂	自然堤防	奈良・平安	
33 小李家	自然堤防・後背堤防	秀吉・古墳・奈良・平安・中世・近世		93 大久保	自然堤防	奈良・平安	
34 内野城跡	自然堤防・後背堤防	中世		94 上古川	自然堤防	近江・山陰	
35 各首駆跡	自然堤防	中世		95 安久萬壽古墳	自然堤防	古墳	
36 碓丸古墳	自然堤防	古墳		96 西田	自然堤防	奈良・平安	
37 四郎丸古墳	自然堤防	中世		97 安久	自然堤防	奈良・平安	
38 戸ノ内	自然堤防	秀吉・古墳・奈良・平安		98 本郷歌	自然堤防	奈良・平安	
39 伊原ノ原	自然堤防	奈良・平安		99 金業田	自然堤防	奈良・平安	
40 井天路古墳	自然堤防	古墳		100 烏町清水	自然堤防	古墳?	
41 神村	自然堤防	古墳・奈良・平安		101 上織	段丘	編文(後期)	
42 白羽跡跡	自然堤防	奈町		102 安堵山腰穴群	丘陵斜面	古墳・奈良	
43 波多野古墳	自然堤防	古墳		103 大平山寺穴群	丘陵斜面	古墳	
44 志波	自然堤防	奈良・平安		104 鹿瀬土手(杉手)	丘陵・桜丘	江戸	
45 丹原城	自然堤防	古墳・奈良・平安		105 五ヶ鳴城跡	丘陵	近江・守町	
46 中横西	自然堤防	秀吉・古墳・奈良・平安		106 大野田	自然堤防	編文(後期)・秀吉	
47 木辺	自然堤防	古墳		107 三丁・塙古墳	自然堤防	古墳	
48 神塚	自然堤防	鶴見・秀吉・古墳・奈良・平安		108 三丁・櫻	自然堤防	編文(後期)・秀吉・古墳・奈良・中世・近世	
49 伊押室	自然堤防	古墳・奈良・平安		109 鶴原歌	自然堤防	編文・奈良・平安	
50 中田町中	自然堤防	古墳・奈良・平安		110 えり見	自然堤防	奈良・平安	
51 住吉殿分尼寺跡	自然堤防	奈良・平安		111 宮代道路	後背堤防	田石等(後期)・鶴見(草野・青野・中野・坂道)・秀吉・古墳・近江・守町・奈良・平安・中世	
52 稲井1	自然堤防	古墳・奈良・平安		112 金岡八幡古墳	後背堤防	古墳	
53 木余田	自然堤防	古墳(中野)・奈良・平安		113 鶴丈	自然堤防	古墳・平安	
54 大原山古墳	自然堤防	古墳		114 大野田古墳群	自然堤防	古墳	
55 神塚分寺跡	自然堤防	奈良・平安		115 大野田土塁	自然堤防	古墳	
56 佐原塚古墳	自然堤防	古墳		116 寺内社古墳	自然堤防	古墳	
57 内手	自然堤防	奈良・平安		117 丸山本郷島	自然堤防	寺内	
58 若林跡跡	自然堤防	古墳・平安・戰國～江戸		118 五ヶ田古墳	自然堤防	古墳	
59 朝雲古墳	自然堤防	古墳		119 丸山石標墓	自然堤防	古墳	
60 食糸園	自然堤防	平安		120 清水	自然堤防	秀吉・古墳・奈良・平安	

第1表 遺跡地名表(1)

No	遺跡名	立地	時代	No	遺跡名	立地	時代
121	六尺田	自然堤防	國文(中期・後期・晚期)・弥生・古墳・奈良・平安・江戸	161	舞子上	自然堤防	奈良・平安
122	集	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安	162	舞子中	自然堤防	奈良・平安
123	原	自然堤防	國文・弥生・古墳・奈良・平安	163	手下土	自然堤防	奈良・平安
124	舞来	自然堤防	弥生・奈良・平安	164	川上	冲積堆	國文(後期)・弥生(中期)・奈良・平安・中世
125	舞来古墳	自然堤防	古墳	165	吳輪古地区古墳跡	丘陵	古墳(中期)
126	笛田	自然堤防	古墳・奈良・平安	166	今野野	丘陵	國文(中期・後期・晚期)・弥生・古墳・奈良・平安
127	地野合敷	段丘	古墳・奈良・平安	167	箕輪谷地区古墳跡	丘陵	古墳(後期)
128	坂谷頭	教育園地	古墳	168	南之宮跡	丘陵斜面	奈良・平安
129	西原一丁目	段丘	國文・弥生・奈良・平安	169	北原跡	丘陵斜面	平安・中世
130	東堺跡	自然堤防・後背高地	國文(前期)・弥生・古墳・平安	170	今野野貝塚	丘陵	國文(前期)
131	下ノ内瀬	段丘	奈良・平安	171	南之宮	丘陵	奈良・平安
132	伊古田	自然堤防	國文(後期)・古墳・奈良・平安	172	北原篠穴跡	丘陵斜面	奈良・平安
133	下ノ内	自然堤防	國文(後期)・古墳・奈良・平安	173	鹿野野	沖積堆	國文・弥生・古墳・奈良・平安
134	萩ノ丘	丘陵	國文・奈良・平安	174	岩手中	丘陵地	古墳・奈良・平安
135	二ノ井篠穴跡	丘陵斜面	古墳	175	南之宮	自然堤防・後背高地	弥生・平安
136	二ノ井古墳	教育園地	古墳	176	西之宮古墳	冲積堆	古墳(後期)
137	櫛谷合篠	自然堤防	奈良・平安	177	金輪寺貝塚	丘陵	國文(前期・後期・晚期)
138	篠東	自然堤防	平安	178	木之間	丘陵	國文(前期)・奈良・平安
139	元ノ田	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安	179	上野	段丘	國文(中期)・奈良・平安
140	萩ノ丘・丘	丘陵	國文	200	丘山の南	扇狀地	古墳・奈良・平安
141	山田	自然堤防・後背高地	國文(中期・後期・晚期)・弥生・古墳・奈良・平安	201	萬葉山西	自然堤防	奈良・平安
142	蕨谷古墳	教育園地	古墳	202	新宮古社跡跡跡	冲積堆	中世
143	砂利古墳	段丘	奈良・平安	203	岩口下	扇狀地	古墳・奈良・平安
144	向山古墳	丘陵	國文(中期)	204	東ノ原	丘陵	國文(中期)・奈良・平安
145	八木古跡	丘陵	國文・奈良・平安	205	鹿野	丘陵地	國文
146	圓閣	自然堤防	古墳・奈良・平安	206	高瀬	冲積堆	國文(中期・後期)・弥生(中期)・古墳・奈良・平安
147	雷	自然堤防	平安	207	那智神社前跡跡	丘陵	中世
148	北宮神明	自然堤防	奈良・平安	208	兔足形跡	丘陵	中世
149	東内瀬	自然堤防	古墳(後期)・奈良・平安	209	西成武	丘陵	國文
150	御津古墳	段丘	古墳	210	八幡	段丘	古墳・平安
151	二ノ井	丘陵	國文	211	長ノ丘	丘陵	國文
152	篠田	自然堤防	奈良末・平安	212	岩口上	段丘	古墳・奈良・平安
153	十三ノ内瀬跡	丘陵斜面	奈良・平安?	213	铁田	段丘	奈良・平安
154	金糞泥古墳	段丘	古墳	214	船形前	段丘	國文(中期・後期)・弥生・奈良・平安
155	青山二丁目	丘陵	奈良・平安	215	大門山古跡跡所	丘陵斜面	中世
156	西宮古墳	段丘	古墳	216	高瀬古墳	丘陵	古墳(後期)
157	西町野原	段丘	平安	217	高瀬城跡	丘陵	中世
158	篠井南木	自然堤防	奈良・平安	218	川上大崩跡	丘陵	中世
159	富士内瀬跡	自然堤防・後背高地	國文	219	武鹿山	段丘	國文
160	十ノ内	丘陵	國文・奈良・平安	220	町	段丘	國文・古墳・平安
161	今山黒原	段丘	古墳	221	山田糸堂造跡	段丘	奈良?
162	原東	段丘	古墳・奈良・平安	222	御室堂萬葉墓跡	丘陵斜面	古墳(後期)・奈良
163	土ノ内瀬穴跡	丘陵斜面	古墳	223	御野谷御社御室跡	丘陵	中世
164	三神谷	自然堤防	國文(前期・中期)・平安	224	御室原	段丘	國文・平安
165	富士上ノ台	段丘	國文・平安	225	竹ノ内舟	段丘	奈良・平安
166	篠ノ内	自然堤防	古墳・奈良・平安	226	御室平	丘陵斜面・段丘	國文(中期)・平安・中世
167	鶴ノ森	自然堤防	國文・奈良・平安	227	小原(古跡)跡	丘陵	中世
168	御室奈良古	自然堤防	國文・奈良・平安	228	円田通B	段丘	平安
169	六本松	自然堤防	奈良・平安	229	野丘	段丘	國文
170	櫻馬	自然堤防	奈良・平安	230	御室空太郎跡	丘陵	中世
171	高瀬	自然堤防	弥生・古墳・奈良・平安	231	山田上・台	段丘	御室跡(前期・後期)・國文(中期・後期・中世)・奈良・平安・江戸・平安・後世
172	八ノ口	自然堤防	奈良・平安・中世	232	御田通A	段丘	國文・平安
173	内瀬	自然堤防	奈良・平安	233	北原	段丘	御室跡(前期・後期)・國文(中期・後期・中世)・奈良・江戸
174	八木田	後背高地	弥生	234	丸方	段丘	奈良・平安
175	御台城跡	丘陵	江戸	235	山田上・台原	段丘	國文・奈良・平安
176	河ノ口	丘陵	國文(早期末・前葉期)・弥生・平安	236	青葉山	丘陵	御室跡(前期・後期)・國文(前葉期・後葉期)
177	三神谷古墳	段丘	古墳	237	羽黒堂跡	段丘	國文・古墳・平安
178	武鹿城跡	段丘	古墳・奈良・平安	238	千代原	段丘	古墳・奈良・平安
179	原	段丘	弥生・古墳・平安	239	羽黒堂A	段丘	國文・古墳・平安
180	西台跡	段丘	奈良・平安?	240	羽黒原	段丘	國文・奈良・平安

第2表 遺跡地名表 (2)

III 基本層序

確認した基本層序

本遺跡は仙台平野にみとめられる5列の浜堤列のうち、第3浜堤列上に立地しており、同じ沖積地でも、これまで多数の調査事例がある市内仙台平野の後背湿地の遺跡とは、際立った堆積環境の差異がうかがわれる。

今回の調査で確認された基本層序の様相は、第3表のとおりであるが、基本層序として区分されるのは次の2層である。

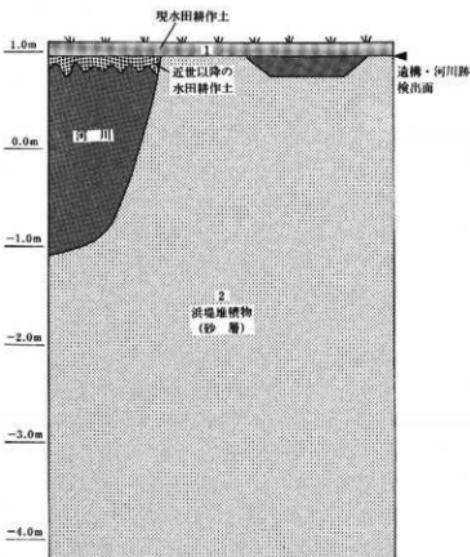
1層は現代の水田耕作土で、調査区全域に分布している。調査地点は第3図でみるとおり、調査開始前年の1994年まで全域が水田として利用されていた。全体的に灰褐色を呈するシルト質粘土層で、層厚は30cm前後、下面には斑駁の集積がみとめられる。

2層は1層直下にみとめられる砂層で、調査区全域で同様の様相を示している。この砂層は浜堤の堆積物とみられ、全遺構の調査終了後、重機により掘り下げを行ったが、少なくとも5m以上は同様の状況が連続することを確認した。

なお、この層の上面が今回の調査における遺構検出面である。

層序	色調	種類	備考
1	10YR4/2 黄褐色	シルト質粘土	全域に分布。層厚30cm前後。下面に斑駁の集積。
2	10YR6/6 明黄褐色	砂	全域に分布。層厚6m以上。標高0m以下ではグライ化。上面が遺構検出面。

第3表 基本層序



第6図 基本層序模式図

IV 遺構と遺物

今回の調査で確認した遺構の種類は以下のとおりである。

竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡、小溝造構、円形周溝、水田跡、河川跡、性格不明の遺構。

この章ではこれらの遺構の状況と、出土した遺物の内容について触れていくが、井戸跡、土坑、溝跡、小溝造構、円形周溝については、遺構番号順ではなく、検出位置が北に位置するものから順に記載している。

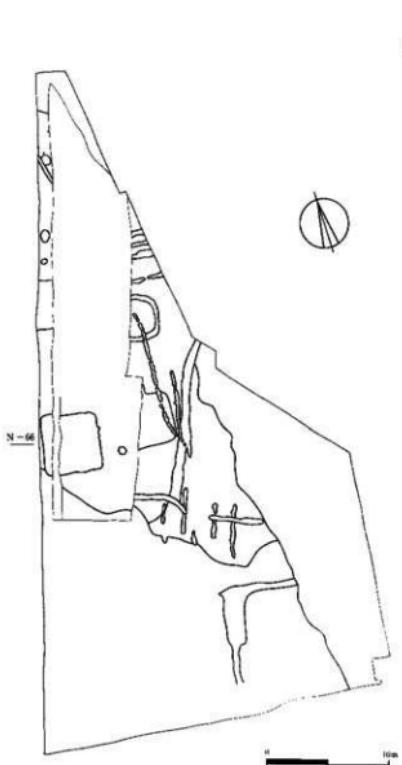
1. 竪穴住居跡

竪穴住居跡は、合計で21棟確認したが、調査区ごとの内訳は2区2棟、3区14棟、4区は5棟である。

(1) S 11 竪穴住居跡

遺構状況（第11図）

遺存状況 4区S-55、W-1付近で確認した。SD 2・4 溝跡およびSB 2 掘立柱建物跡に切られている。



第7図 2区遺構配置図

検出した平面形は南北に長い長方形を呈するが、

W-E 遺構の東半部は削平により失われている。確認部分も全体的に削平を受けていて、遺構の確認面は掘方の埋土におよんでいるものとみられる。床面、カマド等の残存は確認されなかった。

確認した規模は東・西辺7.04m、南・北辺がそれぞれ6.16m・4.56mである。削平が及んでいることから、全体的な規模は不明だが、比較的残存が良かった西辺から推定して、7m四方程度の規模が推定される。

西辺を基準とした南北軸の方向は、N-30°-Eである。

堆積土 いずれも掘り方の埋め戻し土とみられ、3層に区分された。各層とも黄褐色系の砂である。

柱穴 確認面で検出された2基のピットが、柱穴に相当するものと考えられる。P 1・P 2ともに円形を基調に掘られている。

掘り方 掘り方の底面は全体的に平で大きな起伏は認められないが、西・南辺では溝状に掘られている。出土遺物（第12図）

堆積土中より土師器片が出土したが、磨滅の進んだ細片が大部分で、図示をなし得たものは1点のみである。

1は土師器の杯である。残存約1/8の小片で詳細は判然としないが、器形や内面を横ナデで仕上げている調整方法などに特長がみられる。

柱穴の搜査			柱間寸法	
ピットNo.	直 縄 約	深 さ 約	ピットNo.	柱間寸法 [m]
P 1	0.84×0.72	0.66	P 1～P 2	3.90
P 2	0.72×0.64	0.70		

第4表 S I I 壇穴住居跡柱穴計測表

なお、このほかに図化できなかった土師器片のなかに壺が2点あり、一方には内面黒色処理が施されているが、一方は1同様に、ナゲ調整が最終調整となっている。

(2) S I 2 壇穴住居跡

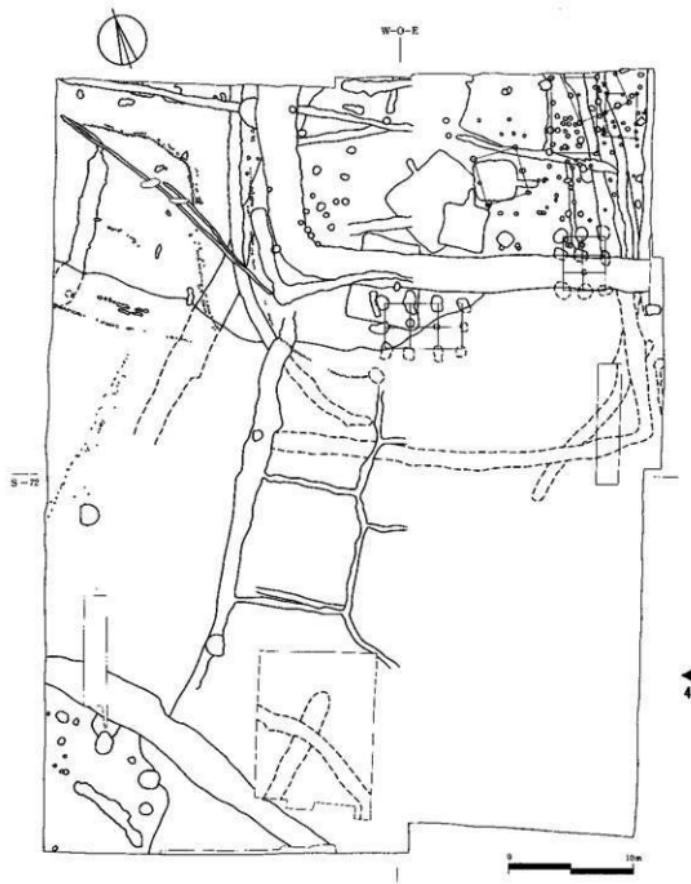
遺構状況（第13図）

遺存状況 4区S-51、E-3付近で確認した。SD 3溝跡、およびS I 23・24壇穴住居跡に切られている。

平面形は比較的整った隅九方形を呈するが、全体的に削平を受けていて、遺構の確認面はほぼ床面におよんでいる。カマドも袖部分の痕跡だけが確認された。



第13図
3区遺構配置図



◆第9図
4区遺構配置図

完全に確認した北・西辺の長さはそれぞれ6.44m、6.36mを計り、これから復元推定される床面積は約41m²である。

中軸の方向はN-25°-Wとなっている。

堆積土 全体で23層に細分された。1層は床面となった黄色の粘土である。2~11層は柱穴、ピットの堆積土で、部分的に粘土をはさんでいるものの、砂を主体としている。12~14層はカマドの堆積土で、多量の灰・炭化物・焼土が混入している。15~16層はカマド煙道部の堆積土で、灰・炭化物・焼土を含んでいる。18~23層は黄褐色系の砂で、掘り方の堆積土である。

床面 挖り方埋め戻し土の上面に粘土を貼って床面としたものとみられるが、削平を受けていて、平面図網かけ部分でのみ残存がみられた。貼床に使われた粘土は粒子が細かく、砂などの混入物の少ないもので、よく縮まっている。

る。

床面ではP 1～6の6基のピットを検出したほか、カマドの痕跡を確認した。

柱穴 5基のピットのうちP 1～4が柱穴に相当するものと考えられるが、いずれからも柱痕跡は検出しなかった。なお、床面ではこのほかP 5・6のピットを確認しているが、性格は判然としない。

柱穴の概要			柱間寸法	
ピットNo.	直 径 (m)	深 さ (m)	ピットNo.	柱間寸法 (m)
P 1	1.0×0.76	0.68	P 1～P 2	3.64
P 2	1.0×0.92	0.64	P 2～P 4	3.64
P 3	0.72×0.72	0.64	P 2～P 3	3.64
P 4	0.76×0.60	0.48	P 3～P 1	3.52

第5表 S I 2 堅穴住居跡柱穴計測表

カマド 北辺のはば中央部で確認した。袖部は削平によってほぼ失われていたが、平面図中のプランのように、黄色粘土が残存しており、この部分がカマド袖基部の残存と考えられる。燃焼部は長軸1.1mほどの橢円形の窪みとして検出され、堆積土には灰・炭化物・焼土が多量に混ざっている。

煙道の検出全長は1.2m、幅は40～50cm前後であるが、先端部分は削平で失われているものとみられる。

なお、カマド堆積土の14層ではきわめて多量の灰が検出されたが、灰像分析の結果、稻藁・初穀を起源とするものであることが判明した。のことから、カマドの燃料として、これらの中ものが使用されていたことが推定される。掘り方 荒く掘られていて、底面には細かい起伏がみとめられた。床面上面からの深さは30cm前後を計る。堆積土は基本層序の砂と同質のもので、住居構築時に一旦掘り起こした土砂を埋め戻したものと推定される。

出土遺物（第14図）

床面、掘り方堆積土中より土師器片が出土したが、図示をなし得たものは次の1点だけである。

1は土師器の杯である。残存約1/5の小片で詳細は判然としないが、内面にはヘラミガキの後、黒色処理が施されている。

このほか、図化のできなかった土師器杯、および甕壺類の細片がそれぞれ10点、325点出土したが、いずれも非クロ成形のものとなっている。

(3) S I 3 堅穴住居跡

遺構状況（第15図）

遺存状況 3区S-23、W-1付近で確認した。遺構の中央部分をS D 5溝跡に大きく切られている。

平面形は比較的整った隅丸方形を呈しているが、全体的に削平を受けていて、遺構の確認面は床面におよんでいる。

すべてのコーナーを検出した北・西辺の長さはそれぞれ5.56、5.60mを計り、これから復元推定される床面積は約31m²である。

中軸の方向はN-33°-Wとなっている。

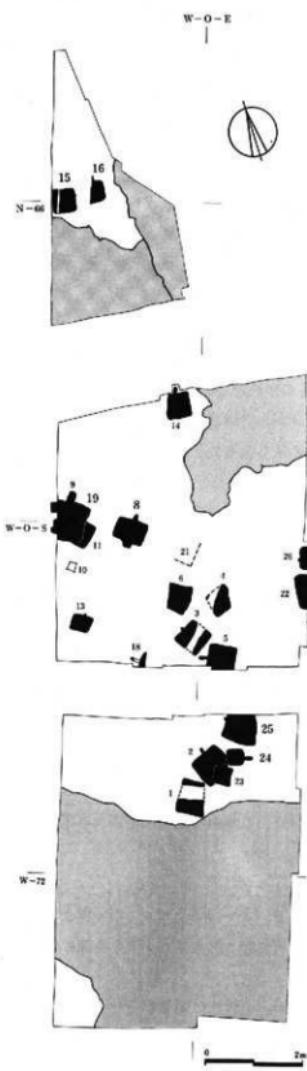
堆積土 全体で19層に細分された。2層は床面となった黄褐色系の粘土である。3～12層はピットの堆積土で、砂を主体としている。13層は煙道、14～17層はカマドの堆積土であるが、灰・炭化物・焼土ブロックを多量に含んでいる。18～19層は掘り方埋土である。

床面 掘り方埋め戻し土の上面に、粘土を貼って床面としたものとみられるが、全体的に削平を受けていて、平面図網かけ部分でのみ残存がみられた。貼床に使われた黄褐色の粘土は粒子が細かく、砂などの混入物の少ないもので、よく締まっている。カマド跡周囲では灰・焼土小ブロックが上面でみとめられた。

床面ではP 1～4の4基のピットを検出したほか、カマド燃焼部および袖の一部を確認した。

柱穴 検出された4基のピットが柱穴に相当するものと考えられるが、いずれからも柱痕跡は確認されなかった。

なお、P2はSD5溝跡との重複で大半が失われていて詳細は不明である。



第10図 壁穴住居跡位置図

柱穴の規模			柱間寸法	
ピットNo.	直 径 cm	深 さ cm	ピットNo.	柱間寸法 cm
P1	0.76×0.72	0.52	P1～P2	2.84
P2	—	0.56	P2～P4	3.08
P3	0.80×0.60	0.44	P4～P3	2.84
P4	1.0×0.80	0.44	P3～P1	2.72

第6表 S13壁穴住居跡柱穴計測表

カマド 北辺のはば中央部で確認した。わずかに残存した袖部はうすく細砂が混入する黄褐色系の粘土で築かれていて、両袖の先端幅は90cmである。燃焼部分は長軸90cmの橢円形の窪みとして検出され、堆積土には多量の灰、炭化物、焼土ブロックが混入する。煙道の検出全長は60cm、上幅は40cm前後を計る。

掘り方 荒く掘られていて、底面では細かい起伏がみとめられた。床面上面からの深さは10～30cm前後である。

堆積土は基本層序と同質の砂で、住居構築時に掘り起こした土砂を埋め戻したものと推測される。

出土遺物（第16図）

床面、カマド堆積土、柱穴堆積土、および掘り方堆積土から土師器、須恵器、土製品が出土したが、図示をなし得たものは次の4点である。

1はカマド堆積土から出土した土師器の杯である。小破片で詳しい様相の把握は困難であるが、内外面とも漆処理が施されている点に特徴がある。2は床面より出土した土師器の壺である。3は床面より出土した須恵器壺で、外面に沈線および波状文が観察されるが、細片であるため詳細は不明である。4は土鍾である。P4柱穴堆積土から出土した。

このほか、図化のできなかった土師器杯および壺類の細片がそれぞれ6点、186点出土したが、いずれも非クロ成形のものとなっている。

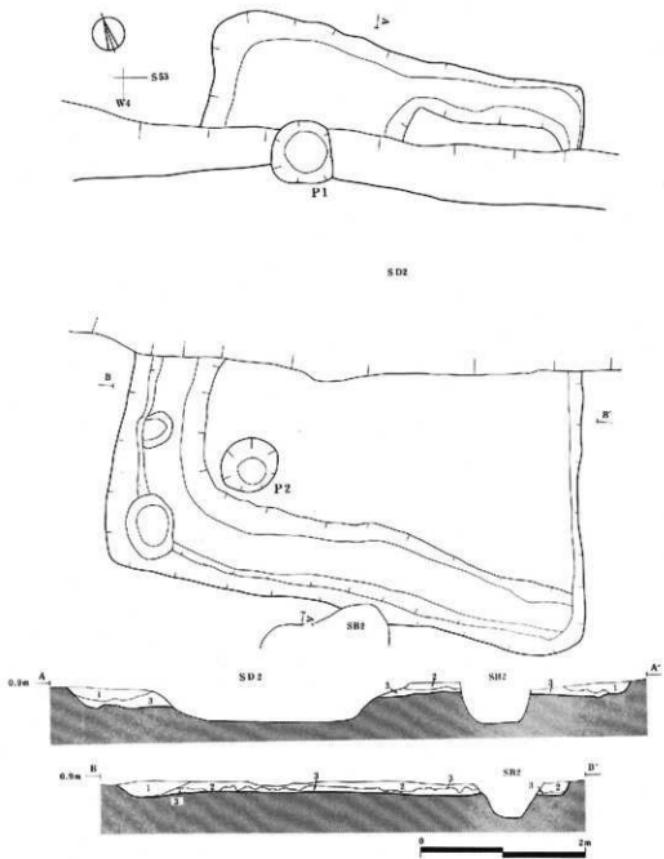
(4) S14壁穴住居跡

遺構状況（第17図）

遺存状況 3区S-16、E-4付近で確認した。SD5・7遺構に大きく切られている。

検出した平面形はやや不整な方形を呈しており、すべてのコーナーを確認した南・西辺の長さは、それぞれ5.16m、4.28mを計る。カマドは検出されなかった。

西辺を基準とした南北軸の方向はN-15°-Wとなっている。



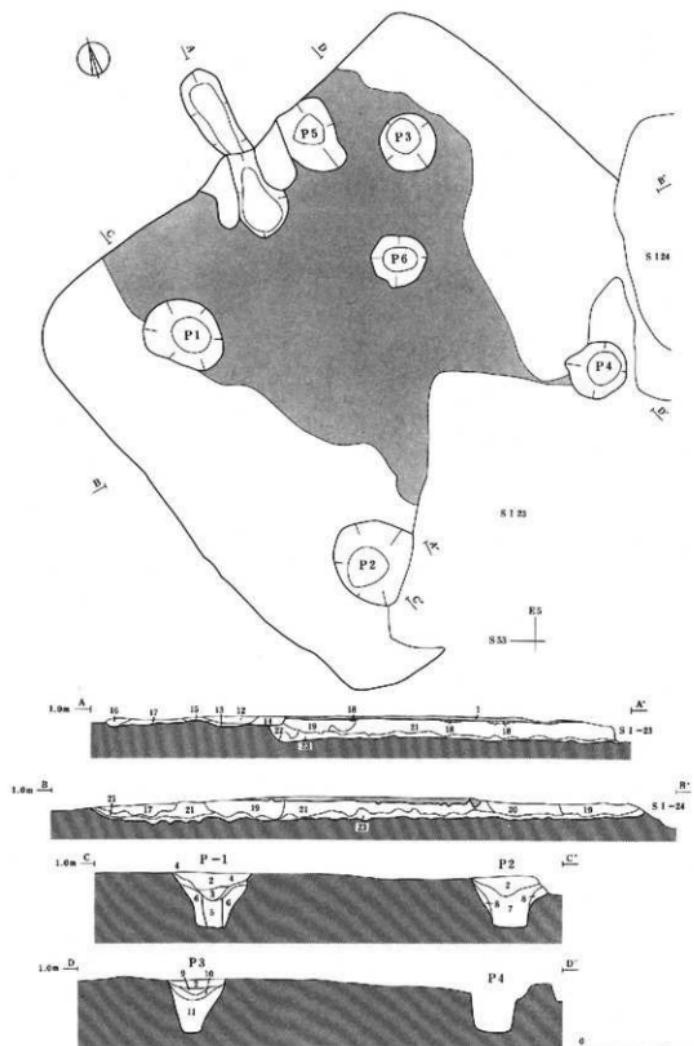
第11圖 S-1 穩穴住居跡平而・断面図

番号	色 調	種類	備 考	番号	色 調	種類	備 考
1	10 YR 3/3	暗褐色	砂	裏り方理上。	3	2.5 YS/4	黃褐色
2	10 YR 5/4	紅褐色	砂	裏り方理上。			



第12図 S.I.1 穫穴住居跡出土遺物

堆積土 全体で12層に細分されたが、このうち1層は住居廃絶後の堆積土とみられ、自然流入によるものと考えられる。2層は床面となった黄灰色の粘土層である。3～4層は掘り方の堆積土である。5～12層はピットの堆積土



層序	色 調	固 相	種 類	標 名	層序	色 調	固 相	種 類	標 名
1	2.5Y 6/3	赤い黃色	粘土。	P1	13	10Y R3/3	にふく黄褐色	砂質シルト	カマツ堆積物。炭化物、礫土を含む。
2	2.5Y 3/2	三褐色	砂	P1堆積物。	14	10Y R3/1	黒褐色	砂質シルト	カマツ堆積物。炭をきわめて多量に含む。
3	2.5Y 5/1	灰褐色	粘土	P1堆積物。炭を含む。	15	10Y R3/2	灰黄褐色	粗上質シルト	絶滅堆積物。炭化物、灰土を含む。
4	2.5Y 4/2	赤灰褐色	粘土	P1堆積物。	16	10Y R4/1	褐色	砂	絶滅堆積物。炭土を含む。
5	2.5Y 5/2	暗灰褐色	砂	P1堆積物。柱状か、灰黄色の粘土を含む。	17	10Y R3/4	にふく黄褐色	砂	絶滅堆積物。炭を含む。
6	2.5Y 4/3	チャーブ褐色	砂	P1堆積物。	18	2.5Y 4/1	黒褐色	砂	細力方堆土。
7	2.5Y 4/2	暗灰褐色	砂	P2堆積物。	19	10Y R4/3	にふく黄褐色	砂	細力方堆土。
8	2.5Y 4/3	チャーブ褐色	砂	P2堆積物。	20	2.5Y 4/2	オリーブ褐色	砂	細力方堆土。
9	2.5Y 4/1	灰褐色	砂	P2堆積物。灰黄色の粘土を多く含む。灰。	21	2.5Y 4/4	オリーブ褐色	砂	細力方堆土。
10	2.5Y 4/3	チャーブ褐色	砂	塊土を少許含む。	22	2.5Y 5/3	青褐色	砂	細力方堆土。
11	2.5Y 4/2	チャーブ褐色	砂	P2堆積物。	23	2.5Y 5/4	青褐色	砂	細力方堆土。
12	10Y R5/2	灰褐色	粘土質シルト	カマツ堆積物。炭、炭化物、礫土を多量に含む。					

第13図 S1-2 積穴住居跡平面・断面図

番号	住居跡番号	形態	出土位置	底面				外表面調整	内面調整	残存	分類	備考	写真図版
				口縁	壁高	壁厚	底高						
1	C-433	土器部 片		(14.4)	-	-	-	横ナゲ	ミガキ 黑色處理	(1/5)	D-4		

第14図 S I 2 穫穴住居跡出土遺物

で、砂を主体としている。

床面 挖り方埋め戻し土の上面に粘土を貼って床面としたものとみられるが、平面図網かけ部分でのみ検出した。

貼床は黄灰色の粘土を主体としているが、全体的に砂が混入している。

床面ではP 1～4の4基のピットを検出した。

柱穴 床面で検出した4基のピットが柱穴に相当するものと考えられるが、柱痕跡は確認できなかった。

柱穴の規模			柱間寸法	
ピットNo.	直 径 (m)	深さ (m)	ピットNo.	柱間寸法 (m)
P 1	0.48×0.44	(0.16)	P 1～P 2	2.44
P 2	0.72×0.68	0.56	P 2～P 3	2.36
P 3	0.76×0.72	0.56	P 3～P 4	2.40
P 4	0.76×0.60	0.52	P 4～P 1	2.28

第7表 S I 4 穫穴住居跡柱穴計測表

掘り方 荒く掘られていて、底面には起伏がみとめられる。床面上面からの深さは10～20cm前後となっている。

出土遺物（第19図）

床面、掘り方堆積土から土器部および須恵器片1点が出土したが、図示をなし得たものは以下の6点である。

1～3は土器部の杯で、いずれも床面からの出土である。1の内面には黒色處理がみとめられない。2は外表面最終調整がヘラミガキとなっている。3は口縁部のごく小さな破片で全体の様相は知り得ないが、内面に漆處理が観察される。4、5はそれぞれ土器部の甕、鉢で、ともに床面からの出土である。6は掘り方堆積土から出土した須恵器で、壺とみられる。細片であるため、詳細は不明である。

このほか、図化のできなかった土器部杯および甕壺類の細片がそれぞれ5点、108点出土したが、いずれも非クロ成形のものとなっている。

(5) S I 5 穫穴住居跡

遺構状況（第19図）

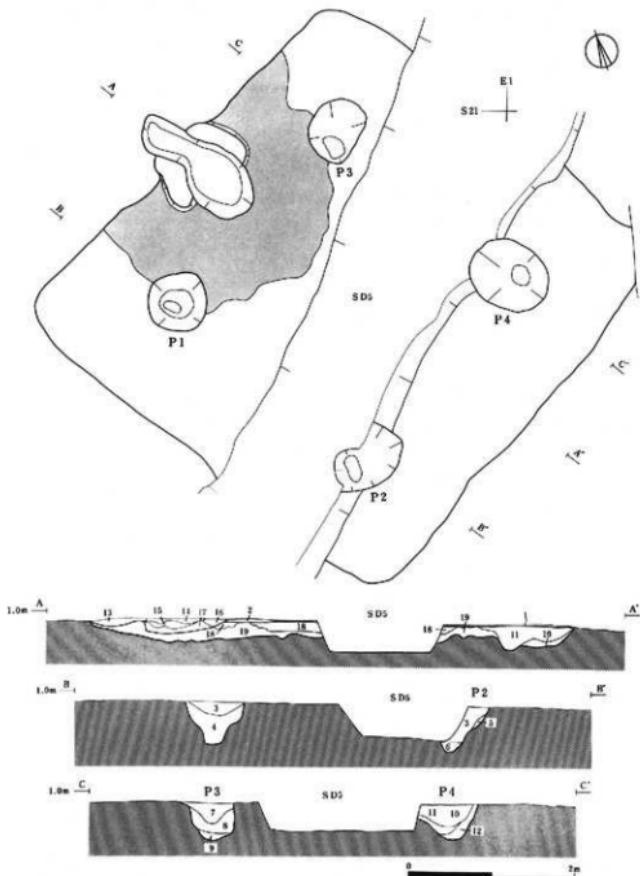
遺存状況 3区南壁に沿って確認したが、遺構の南半部は調査区外に延びている。SK45土坑を切り、ピットおよび水田暗渠排水水管の掘り方に切られている。

確認部分の平面形は隅丸方形を呈しており、完全に検出した北辺の長さは5.7mとなっている。東・西辺はさらに調査区外へと続いている。

西辺を基準とした南北軸はN-29°-Eである。

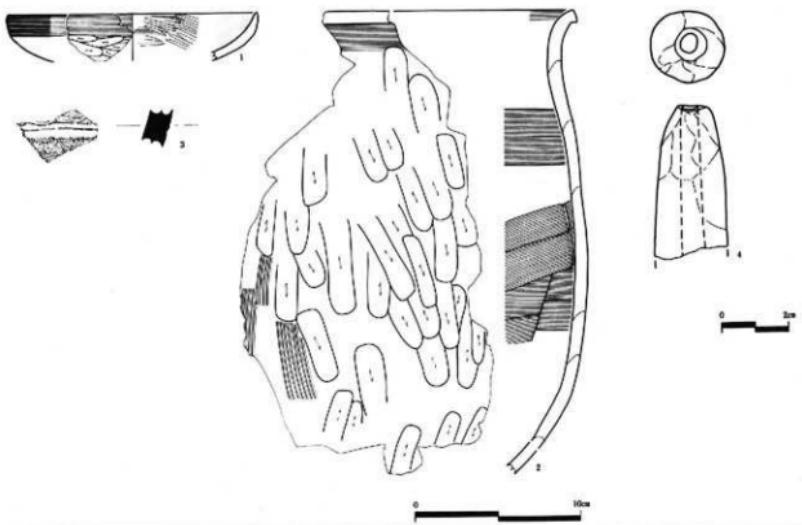
堆積土 全体で20層に細分されたが、このうち1層は住居廃絶後の堆積土とみられ、自然流入によるものと考えられる。2層は床面となった灰黄色の粘土である。3～8層はピットの堆積土で、砂を主体としている。9～12層は土坑の堆積土であるが、上部を中心に炭化物の混入がみられる。13、14層はカマドの堆積土で、灰や焼土のブロックが多く混入している。15層は煙道部堆積土、17～20層は掘り方の堆積土である。

床面 挖り方埋め戻し土上面に粘土を貼って床面としたものとみられるが、平面図網かけ部分でのみ検出した。貼床に使われた灰黄色の粘土は粒子が細かく、砂などの混入物が少ないもので、よく縮まっている。



順序	色 調	種 類	地 質	面 方	順序	色 調	種 類	地 質
1	3.5Y4/2	褐色	砂	地盤上。	11	2.5Y5/3	黄褐色	砂
2	10YR4/2	灰褐色	粘土	粘土。上面の一部に灰。地上ブロック、炭化物がある。	12	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂
3	2.5Y4/2	褐色	砂	P1、2層粘土。	13	2.5Y5/2	暗灰褐色	砂
4	2.5Y5/3	黄褐色	砂	P1層粘土。	14	2.5Y5/2	暗灰深色	シルト質粘土上。
5	2.5Y3/4	黄褐色	砂	P2層粘土。	15	2.5Y5/2	暗灰深色	砂質シルト。
6	2.5Y4/2	褐色		P2層粘土。	16	2.5Y3/2	黑褐色	砂質シルト。
7	2.5Y4/2	褐色	砂	P3層粘土。	17	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂
8	2.5Y4/4	サリーネ褐色	砂	P3層粘土。	18	10YR4/1	褐色	砂土大大きなブロックで多量に含む。炭化物。桃土小ブロックを含む。
9	5Y5/2	灰サリーネ褐色	砂	P3層粘土。	19	2.5Y4/3	オリーブ褐色	黒土。
10	5Y5/2	灰オリーブ褐色	砂	P4層粘土。				黒土。

第15図 S13 穹穴住居跡平面・断面図



番号	材 質 基 礎	種 別 基 礎	出 土 状 況	底 面 調 査			外 面 調 査			内 面 調 査			写真図版
				口 径 長 さ mm	底 面 高 さ mm	第 1 口 径 高 さ mm	底 面 調 査	内 面 調 査	底 面 調 査	底 面 調 査	内 面 調 査	底 面 調 査	
1 C-257	土 器 部 分	柱 穴	(15.2) (3.4) (0.22)	底 面 調 査	底 面 調 査	底 面 調 査	底ナゲ、雨リ 底丸滑	底ナゲ、上ガタ 底丸滑	底ナゲ、上ガタ 底丸滑	(1/16)	E-2 b		
2 C-381	土 器 部 分	柱 穴	-	-	-	-	底ナゲ、ハラナゲ ハラナゲ	底ナゲ、ハラナゲ ハラナゲ	底ナゲ、ハラナゲ ハラナゲ	(1/16)	D-2		
3 E-47	土 器 部 分	柱 穴	-	-	-	-	ロタヨナゲ、柱線文、波状文	ロタヨナゲ、自然輪付着	ロタヨナゲ、自然輪付着	板片			
4 P-34	土 器 部 分	柱 穴	出土状況 長 さ (4.7)	底 面 調 査 長 さ 2.3	底 面 調 査 底 面 幅 0.6	写真図版 E-35							

第16図 S I 3 穫穴住居跡出土遺物

床面ではカマド袖部・燃焼部および、5基のピットと土坑1基を検出した。これらのうちP 5ピット、SK 1土坑の性格は判然としない。

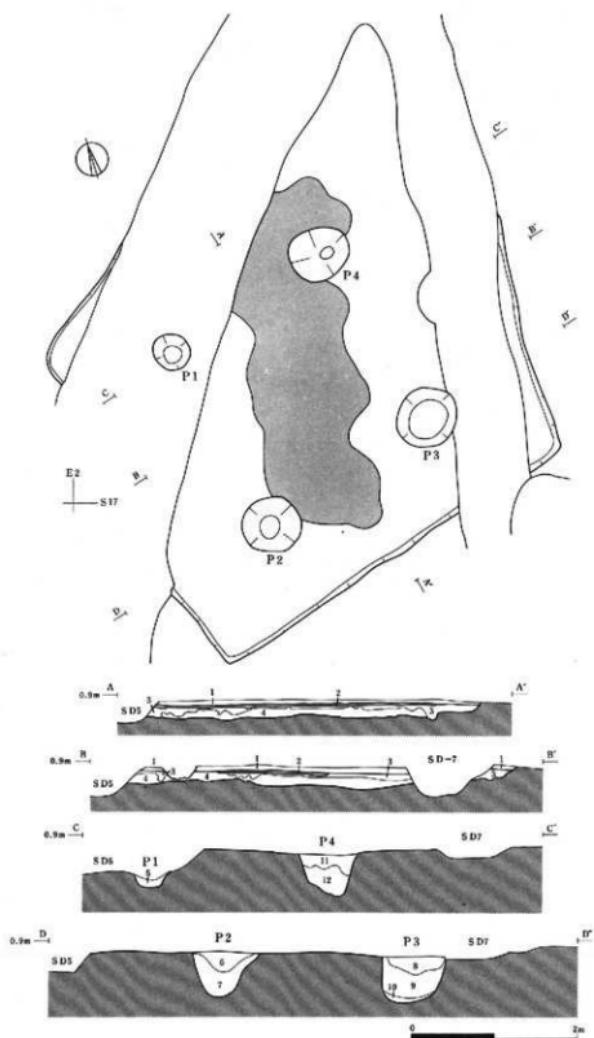
柱穴 確認したピットのうち、P 1～4が柱穴に相当するものと考えられる。柱痕跡はいずれでもみとめられなかった。

柱穴の調査			柱間寸法		
ピットNo.	直 径 mm	深 さ mm	ピットNo.	柱間寸法 mm	柱間寸法 mm
P 1	1.0×0.6	0.55	P 1～P 2		2.5
P 2	0.6×0.5	0.4	P 2～P 4		2.9
P 3	0.7×0.5	0.4	P 4～P 3		2.8
P 4	0.4×0.4	0.35	P 3～P 1		2.9

第8表 S I 5 穫穴住居跡柱穴寸法測定表

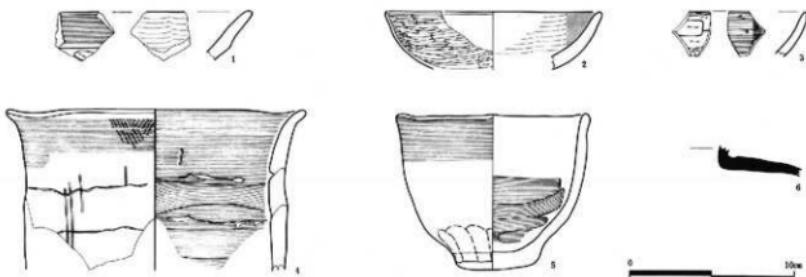
カマド 西辺で確認した。袖部は灰黄色の粘土で築かれている。北側の先端部分は失われているが、袖の先端幅は70cm前後と推定される。燃焼部は長軸1mの窪みとして検出され、堆積土には多量の灰、焼土が混入している。煙道の検出全長は1.9m、幅は40～50cmを計る。

掘り方 中央部分から外側に向かって深く掘られていて、貼床となった2層上面からの深さは10～30cmを測る。底



順序	色	調	種類	備考	順序	色	調	種類	備考
1	10Y R 4/2	灰青褐色	砂質シルト	堆積土。	7	2.5Y 6/4	にじい黄色	砂	P 2 堆積物。
2	2.5Y 6/1	黄褐色	砂	隙床。	8	10Y R 4/3	にじい黄褐色	砂質シルト	P 3 堆積物。
3	10Y R 3/2	黒褐色	砂質シルト	覆り堆積土。	9	2.5Y 6/3	にじい黄色	砂	P 3 堆積物。
4	2.5Y 6/4	にじい黄色	砂	覆り堆積土。	10	5Y R 2/2	同オリーブ色	砂	P 3 堆積物。
5	2.5Y 5/3	黄褐色	砂	P 1 堆積物。	11	10Y R 4/1	海灰色	砂質シルト	P 4 堆積物。
6	10Y R 2/1	黑色	砂質シルト	P 2 堆積物。炭化物を少量含む。	12	2.5Y 5/3	黄褐色	砂	P 4 堆積物。

第17図 S14 穫穴住居跡平面・断面図



番号	出 土 器 種 名	形 質 特 徴	出土状況	内 面 寸 寸 度				外 面 調 査	内 面 調 査	残 存 状 態	分 類	備 考	写真記録
				口 径	底 径	高 さ	壁 厚						
1 C-455	土師器 杯			-	-	-	-	横ナギ、削り	イガキ	破片	D-2		
2 C-187	土師器 杯		(13.2) (13.2)	(3.9) (3.9)	(9.30) (9.30)	-	-	イガキ、削り	イガキ 黒色処理	(1/5)	D-3 b		
3 C-258	土師器 杯			-	-	-	-	削り	イガキ 漆處理	破片	E-5 a		
番号	出 土 器 種 名	形 質 特 徴	出土状況	内 面 寸 寸 度	外 面 調 査	内 面 調 査	残 存 状 態	分 類	備 考	写真記録			
4 C-342	土師器 杯		(18.2) (18.2)	-	-	-	-	横ナギ、ハラナギ、輪郭み底。	横ナギ、ハラナギ、輪郭み底。	(1/4)	D-3 b		28-7
5 C-271	土師器 杯		11.8	4.9	9.6	-	-	横ナギ、ナギ、削り	ヘタナギ、ナギ (口縁部は黒色)	(1/5)	D-2		29-5
6 E-21	土師器 杯			-	-	-	-	平行叩き、ナギ	ロタクナギ。同心円文付え。	破片	4		36-15

第18図 S 14 穴住居跡出土遺物

面には起伏がみとめられる。

出土遺物（第21図）

堆積土、ピット堆積土、掘り方堆積土から土師器が出土したが、大半が小破片で、図化することができたのは次の2点のみである。

1は壺である。口縁部分の破片であり、全体の状況を把握することはできないが、長脚型を呈するものとみられる。掘り方堆積土から出土した。2はP 4柱穴堆積土から出土した蓋であるが、つまみ部分の破片で、詳細は不明である。

このほか、図化のできなかった土師器杯が12点、甕壺類の細片が327点出土しているが、いずれも非ロクロ成形のものである。なお、このうち杯片は11点が内面黒色処理の施されたものであるが、1点は内面の最終調整が横ナゲで、両面に漆処理が観察される資料となっている（登録番号：C 253）。

(6) S 14 穴住居跡

遺構状況（第20図）

遺存状況 3区S-16、W-3付近で確認した。遺構の西半をSD 2溝跡に切られている。

平面形はほぼ隅丸方形を基調としているが、依存状態が悪く不整なものとなっていて、本来の形態は分からず。また全体的に削平がよんどおり、遺構の確認面は掘り方の堆積土中に達しているものとみられる。床面、カマド等の施設は確認されなかった。

完全に検出した東辺の長さは6.16mで、東辺を基準とした南北軸方向はN-27°-Eである。

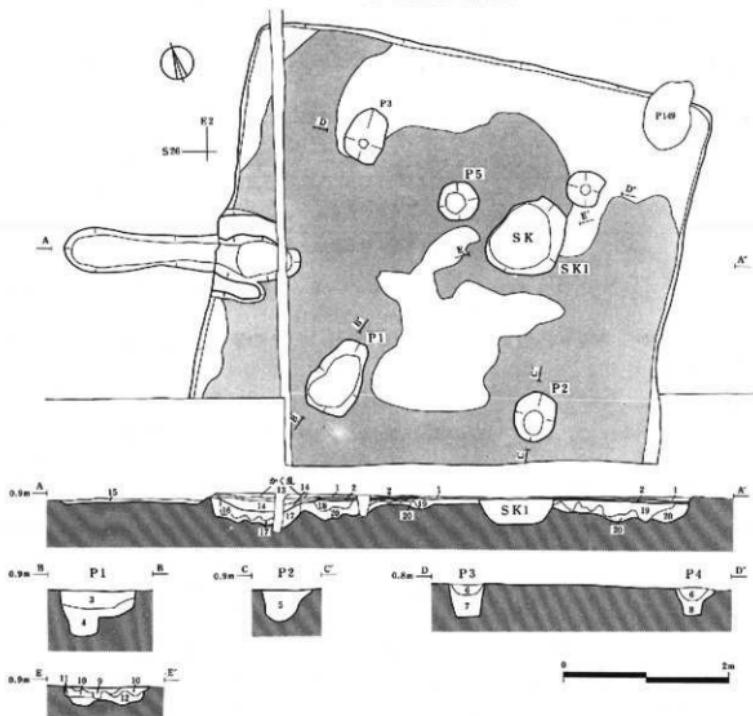
堆積土 全体で16層に細分された。1・2層は掘り方埋土で、黄褐色系の砂である。3~16層はピットの堆積土である。

柱穴 確認面で11基のピットを検出したが、このうちP 1~P 8が主柱穴に相当するものと考えられる。またこのほか、壁に沿って位置するP 9~11にもその可能性は推測されるが判然としない。

P 1~P 8のピットは平面図でみるような重複があり、P 1~4の組み合わせが、P 5~8のそれを切っている。

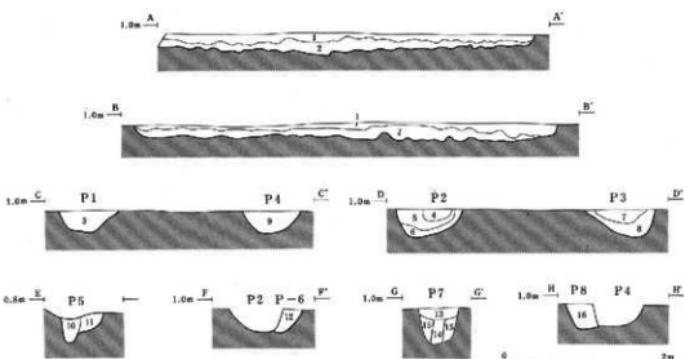
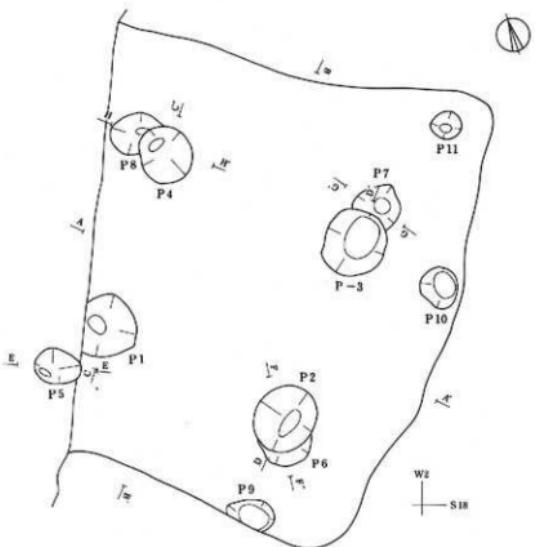
柱穴の規模		柱間寸法		
柱号	直 径 (m)	深 度 (m)	柱間寸法 (m)	
P 1	0.80×0.72	0.28	P 1～P 2	2.52
P 2	0.80×0.76	0.32	P 2～P 3	2.44
P 3	0.84×0.76	0.32	P 3～P 4	2.52
P 4	0.72×0.64	0.28	P 4～P 1	2.28
P 5	(0.56×0.44)	(0.28)	P 5～P 6	2.84
P 6	0.6	0.28	P 6～P 7	3.12
P 7	0.56	0.44	P 7～P 8	3.08
P 8	0.56	0.32	P 8～P 5	3.12

第9表 S I 6 壁穴住居跡柱穴調査表



序号	色 調	固 定	種 類	標 記	考	序号	色 調	固 定	種 類	標 記	考
1	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	堆積土。		11	2.5Y6/6	明灰褐色	砂	SK1堆積物。	
2	2.5Y6/2	灰黑色	粘土	柱孔下近くでは上面に灰、炭化物を含む。		12	2.5Y7/6	明黄褐色	砂	SK1堆積物。炭化物を少量含む。	
3	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	P 1堆積物。炭化物を少量含む。		13	2.5Y4/2	暗灰灰色	シルト質粘土	カット面観察。灰および地上層よりテクノスを量に含む。	
4	2.5Y4/2	オリーブ褐色	砂	P 1堆積物。		14	2.5Y5/2	暗灰褐色	砂	カット面観察。灰、地土小ブロックを含む。	
5	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	P 2堆積物。炭化物を少量含む。		15	2.5Y5/2	暗褐色	砂質シルト	堆積物塊、灰を含む。	
6	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂	P 3、4堆積物。		16	10YR5/2	火成褐色	砂	カット面観察。火成。	
7	5Y4/2	灰オリーブ色	砂	P 3堆積物。		17	2.5Y4/2	オリーブ褐色	砂	カット面観察。火成。	
8	2.5Y5/3	黄褐色	砂	P 4堆積物。		18	10YR4/2	にじ一黄褐色	砂質シルト	断り方理土。	
9	10YR1.7/7	黑色	砂質シルト	SK 1堆積物。炭化物を多く含む。		19	10YR4/2	にじ一黄褐色	砂	断り方理土。	
10	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト	SK 1堆積物。以降物を含む。		20	10YR4/2	にじ一黄褐色	砂	断り方理土。	

第19図 S I 6 壁穴住居跡平面・断面図



番号	色	測	地質	説	考	番号	色	測	地質	説	考
1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	掘り方壁上。		9	2.5Y4/2	暗灰褐色	砂	P 4 地被物。	
2	2.5Y5/4	黄褐色	砂	掘り方壁上。		10	2.5Y4/2	暗灰褐色	砂	P 5 地被物。	
3	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	P 1 地被物。		11	2.5Y4/2	オリーブ褐色	砂	P 6 地被物。	
4	2.5Y3/2	黒褐色	砂	P 2 地被物。		12	2.5Y4/2	暗灰褐色	砂	P 7 地被物。	
5	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色	砂	P 2 地被物。		13	2.5Y4/2	オリーブ褐色	砂	P 7 地被物。	
6	2.5Y5/3	黄褐色	砂	P 2 地被物。		14	2.5Y3/2	黒褐色	砂	P 7 地被物。	
7	2.5Y3/1	黒褐色	砂	P 3 地被物。		15	2.5Y4/2	オリーブ褐色	砂	P 7 地被物。	
8	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	P 3 地被物。		16	2.5Y4/2	オリーブ褐色	砂	P 8 地被物。	

第20図 S16 積穴住居跡平面・断面図

このような柱穴のありようから、当住居跡では少なくとも2回の柱の立替が行われたことが推定される。

掘り方 非常に荒く掘られていて、底面には細かい起伏がみとめられる。確認面からの深さは、10~30cm前後となっている。

出土遺物（第22図）

掘り方堆積土中より土師器および瓦1点が出土したが、図示することができたのは瓦のみである。

1は丸瓦である。小片であるために全体の様相は知り得ないが、凸面には撻叩きとナデによるすり消し、凹面には布目痕が観察される。

このほか、圓化することのできなかった土師器杯5点と壺類42点が、いずれも掘り方堆積土より出土している。摩滅が著しい細片がほとんどで詳しい状況は知り得ないが、ロクロ成形のものはみられないようである。また5点出土した杯には、すべてに内面黒色処理がみとめられる。

(7) S I 8 穫穴住居跡

遺構状況（第23図）

遺存状況 3区S-2、W-15付近で確認した。小溝遺構H群、SD30溝跡を切り、SK4土坑に切られている。

遺存状況は比較的良好で、各辺の検出全長は北辺6.52・南辺5.9・東辺5・西辺4mを計り、東西方向に長い隅丸の長方形を呈している。なお南辺のほぼ中央部分には、他の住居跡ではみられない南北幅1・東西幅1.4m程の方形の張り出しがみとめられ、特長のある形状を呈している。

南北軸の方向はN-39°-Eである。

堆積土 遺構断面図に示した堆積土は、全体で15層に区分される。1層の砂は住居施設後の堆積土とみられ、自然流入によるものと考えられる。2・4b層の粘土は類似した灰黄色の粘土で、ともに貼床の残存とみられる。なお、4a層は4b層直上に分布する灰で、炭化物や焼土の小ブロックを含んでいる。4b層に伴う灰層とみておきたい。3層の砂は4b層から2層の床面へかさ上げする目的で入れられた可能性を推測しておきたい。5~7層の砂は、



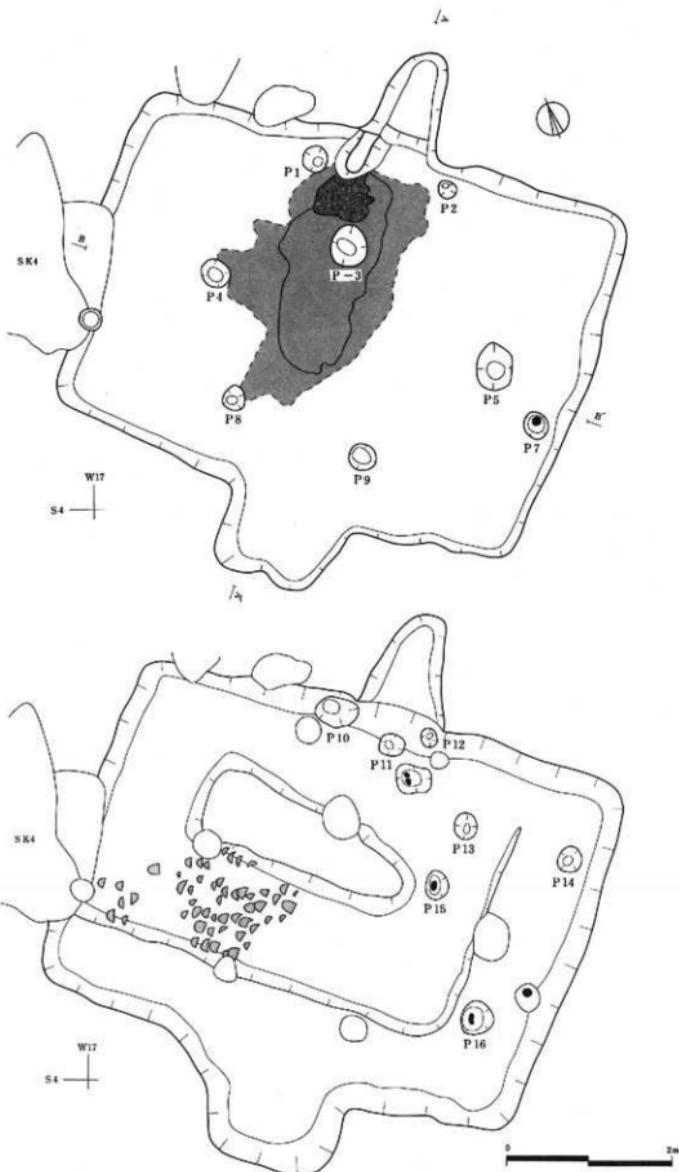
番号	住居跡番号	種別	調査形	出土位置	住居跡			外面調査		内面調査		現存分類	備考	写真図版
					口	底	壁	高	厚	口	底	壁		
1	C-368	土師器		出土位置	3.1	(3.3)	-	-	無り。ミガキ	ナデ。ミガキ	無	D-1		24-3
2	C-346	土師器		出土位置	(22.4)	-	-	口沿部ハケ日、裏ナゲ	無ナデ。一部ナデ。ミガキ	(1/4)	D-2A		29-1 67-1	

第21図 S I 5 穫穴住居跡出土遺物

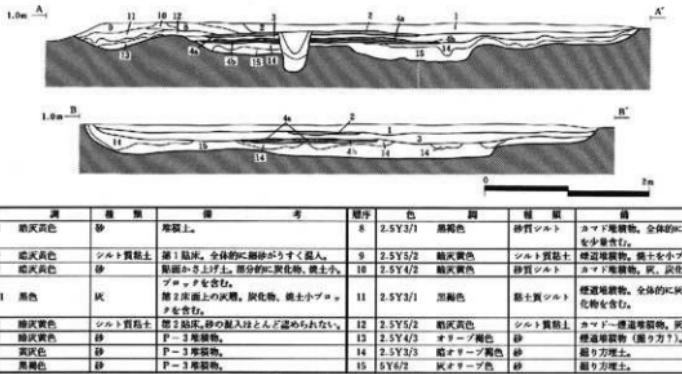


番号	住居跡番号	種別	調査形	出土位置	特			共			分類	写真図版
					凸	凹	面	面	面	面		
1	F-9	瓦	丸瓦		撻叩き、すり消し(ナデ)		年日無		にぼい褐色。			

第22図 S I 6 穫穴住居跡出土遺物



第23図 S18 穴住居跡平面図



第24図 S18 積穴住居跡断面図

柱穴の規模			柱間寸法	
ビット番号	直 径 mm	深 度 mm	ビット番号	柱間寸法 mm
P 1	0.32×0.32	0.24	P 1～2	1.6
P 2	0.24×0.20	0.12	P 8～9	1.7
P 3	0.32×0.44	0.44	P 1～8	3.1
P 4	0.36×0.32	0.38	P 2～9	3.4
P 5	0.60×0.44	0.56	P 4～5	3.5
P 6	0.28×0.28	0.30	P 6～7	5.6
P 7	0.36×0.28	0.26		
P 8	0.32×0.28	0.27		
P 9	0.36×0.32	0.25		

第10表 S18 積穴住居跡柱穴計測表

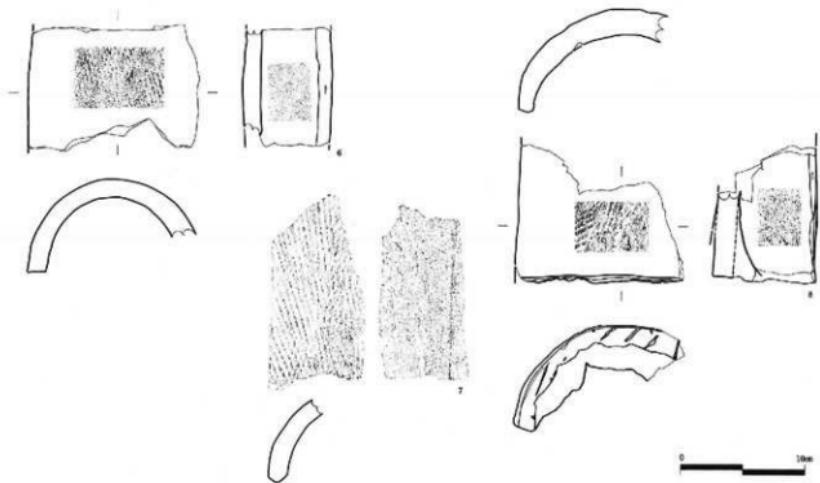
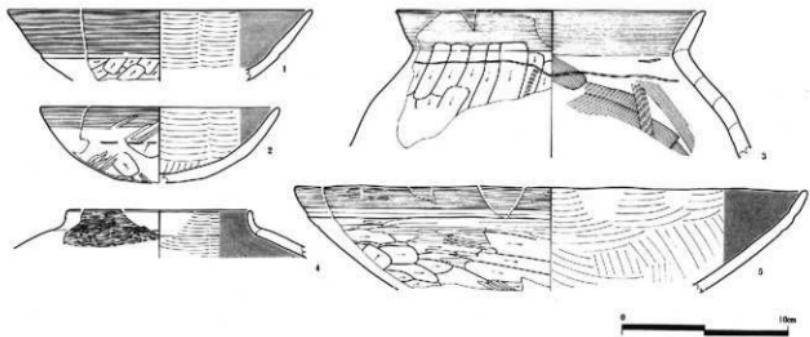
P 3 ビットの堆積土である。8～13層はカマド、煙道の堆積土である。シルトや粘土を主体としていて、全体的に灰、炭化物、焼土などの混入がみとめられる。14・15層は掘り方堆積土である。

床面 部分的ではあるが、床面と考えられる面を2面検出した。古い段階の貼床とみられる4b層（第2床面）の粘土は、掘り方堆積土の直上にみられるもので、平面図網かけ部分実線の範囲で面的な広がりを確認した。なお、この面の直上では、平面図の濃い網かけの範囲で、カマドに由来すると考えられる灰層が検出された。これらの上部に3層の砂を挟んで、新段階の貼床の残存と考えられる2層（第1床面）が、平面図破線の範囲で確認された。

4b層段階の床面上に3層の砂を入れてかさ上げし、この直上に2層の粘土を貼って新たな床面を作り出したものと推測しておきたい。

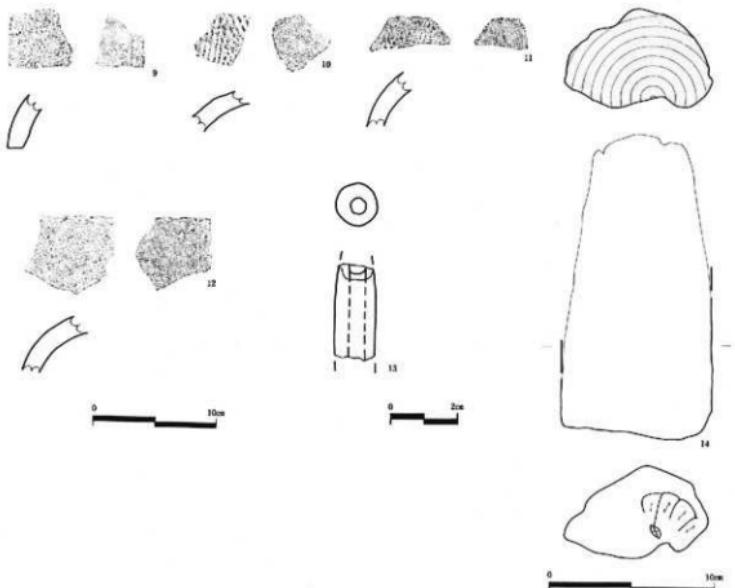
柱穴 第1床面直上から第2床面のレベルでは、P 1～9の9基のビットを確認した。これらのビットが、どのように組み合って柱穴を構成し得るものか判断しないが、配置からP 1・2・8・9の組み合わせや、P 4・5などのビットに主要な柱穴としての可能性が考えられる。また、東辺に沿ったP 7ビットからは柱材とみられる木製品が出土したことから、西辺のP 7ビットとともに、柱穴の可能性が推測される。

なお、床面の調査を終えて、掘り方底面までの掘り下げを行った時点で、新たにP 10～16の7基のビットを新たに検出した。これらのうち、P 15・16ビットでは柱材状の木製品が出土したが、住居の構造に係わる柱穴となるものかどうか、判断することはできなかった。



番号 登録 番 号	種 類	器 種	出土位置	底 面				外 面 調 査		内 面 調 査		残 存 分 類	備 考	写真図版
				口	底	壁	高	縁	口	縁	口	縁		
1 C-111	土器部 底盤			(18.6)	(4.7)	(0.23)	(3.7)	縁カゲ、削り		ミガキ 黒色地質		(1/8)	D-4	
2 C-110	土器部 底盤			(14.6)	(4.7)	(0.32)	-	縁カゲ、削り、ミガキ、幼獣み鉢		ミガキ 黒色地質		1/6	D-3b	
3 C-122	土器部 底盤			(18.8)	-	-	-	縁カゲ、ハタ目、削り	縁カゲ、ハタ目、カゲ、輪幅小窓	ミガキ 黒色地質	(1/5)	D-1b	内外面底部に核 液化物付着。	
4 C-116	土器部 底盤			(11.3)	-	-	-	縁カゲ、ミガキ		ミガキ 黒色地質	(1/8)	D-2a	内外面底部に核 液化物付着。	
5 C-109	土器部 底			(31.4)	-	-	-	縁カゲ、ミガキ、削り		ミガキ 黒色地質	(1/4)		外側口部底に沈 穫あり。	
番号 登録 番 号	種 類	器 種	出土位置	底 面				外 面 調 査		内 面 調 査		長 度	分 量	写真図版
				凸	凹	面	面	縁	面	縁	面	縁		
6 F-2	A	丸瓦		平行叩き、スリ消し(アゲ)				手切り底、奈日底、布甘底、側縁へ テ削り		側面へテ削り。灰白色。			41-2	
7 F-3	A	丸瓦		平行叩き				手切り底、奈日底、布甘底、一部カ ゲ凸面压瓦底。側縁へテ削り。		側面へテ削り。灰色。			41-8	
8 F-1	A	射先瓦		平行叩き、スリ消し(アゲ)				手切り底、布甘底、側縁へテ削り。		瓦当部剥落。広端面にヘク刺み。瓦当 との接合部に粘土付加。側面へテ削 り。灰色。			40-1	

第25図 S-18 穹穴住跡出土遺物(II)



番号	發 見 部 位	種 別	器 種	出土位置	特 徴				考 察	分 類	写真図版	
					凸 面	凹 面	裏 面	寸 法				
9	F-5	瓦	瓦		縫合き、スリ消し（アゲ）				角切り端、有日輪、模様へラ削り			
10	F-6	瓦	瓦		平行引き				角切り端、有日輪、凸凹合瓦頭			
11	F-4	瓦	瓦		縫合き、スリ消し（アゲ）				角切り端、有日輪	灰白色		
12	F-7	瓦	瓦		縫合き、スリ消し（アゲ）				角切り端、有日輪、模様端へラ削り	灰白色	41-19	
番号	発 見 部 位	種 別	器 種	出土位置	特 徴	寸 法	裏 面	寸 法	考 察	分 類	写真図版	
13	P-10	土被品	土被	出土位置	長 さ (12.0)	幅 1.2	厚 0.45	分 量 2	1/3 外面アゲ		43-21	
番号	発 見 部 位	種 別	器 種	出土位置	特 徴	寸 法	裏 面	寸 法	考 察	分 類	写真図版	
14	L-282	木製品	柱材		ハシノキ材の 一組	分断材 (芯持ち 二分割)	木取り	長 (36.8)	幅 (17.7)	厚 (48.0)	底部木口面に切削加工痕あり。上部欠損。	140-9

第26図 S18 穴式住居跡出土遺物(2)

カマド 北辺のはば中央部分で検出した。

袖は西側一方で確認された。貼床の構築土とみられる2・4b層と、きわめて類似した灰黄色系の粘土で作られているが、全体的にうすい砂の混入がみとめられる。残存する長さ・最大幅はそれぞれ70・50cmで、高さは最大で15cmを計る。煙道の検出全長は1.2m、最大幅は1mとなっている。

掘り方 全体的にいねいな掘り込みが行われているが、南・東辺では中心部に向かって深くなる明瞭な段差が確認されたほか、中央部分では島状の高まりがみとめられる。確認面からの深さは周辺部分が20~30cm前後、中心部分では40~50cmとなっている。掘り方堆積土は基本層序と同質の砂であるが、住居構築時に一旦掘り上げた土砂を埋め戻したものと推測される。

なお、底面の一部では土掘り用具の痕跡を集中的に検出した。平面形は整った半円形を呈し、東から西方向への掘り込みを示している。大きさにはややばらつきがみられるが、平面形15×15cm、深さ7cm前後のものが主体をしている。

出土遺物 (第25・26図)

床面やカマド堆積土、ピット、掘り方堆積土、堆積土などから土師器、瓦、土製品、木製品が出土した。

1・2は土師器の杯で、いずれも第1床面2層上面での出土である。1は体部外面にごく軽い段がみとめられる。2は椀型の器形を呈し、外面の最終的な調整にミガキ調整が加えられている。なお、ともに内面には黒色処理が施されている。

3の土師器壺は、第2床面4b層上面からの出土である。体部の下半を欠いているが、胴の張った球形の器形を呈するものとみられる。4は土師器の壺である。口縁部の小片であるために詳細は不明だが、短頸型の器形を呈し、外面はていねいなミガキ調整、内面には黒色処理が施されている。

5は土師器で壺型の製品だが、大型であるため、鉢として分類した。第1床面2層上面から出土した。口縁部直下に軽い沈線が巡り、内面は黒色処理となっている。

6~12は瓦である。このうち6は広端面に刻みが観察されることから、瓦当の剥落した軒丸瓦とみられる。その他の資料はいずれも丸瓦片である。

13の土製品は土錘である。第2床面4b層上面から出土した。

14は柱穴とみられるピットから出土した木製品で、住居に用いられた柱材の残存と推測される。P7ピット底面に、ほぼ直立した状態で出土した。芯持ち・2分割の分割材が用いられていて、残存全長・最大幅はそれぞれ36.8・17.7cmである。樹種はハンノキ属の一種に同定されている。

(b) S I 9 穫穴住居跡

遺構状況（第27図）

遺存状況 3区S-1、W-26付近で、調査区西辺に接して確認した。S I II・19竪穴住居跡および、SD43・109円形周溝を切っている。なお、今次の調査で最大規模の竪穴住居跡でもあり、可能な限り調査域の拡張を図ったものの、遺構の西半部はなお調査区外に延びており、遺構の全容を検出することはできなかった。

遺構の遺存状況は比較的良好だが、ほぼP1・5ピットより南側全域は、ごく最近の工事搅乱によって削平を受けていて、遺構上部が失われている。

平面形は整った隅丸方形を呈しており、完全に検出した東辺の長さは7.7mを計る。北・南・西辺は調査区外へ延びるが、柱穴の配置などから、各辺ともほぼ東辺と同程度の長さを示すものと推測され、今回の調査で確認した竪穴住居跡のなかでは最大規模のものとなっている。

南北軸の方向はN-25°-Eである。

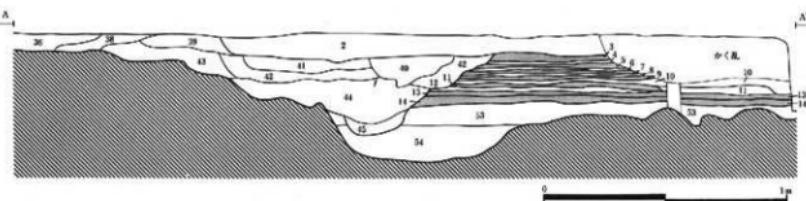
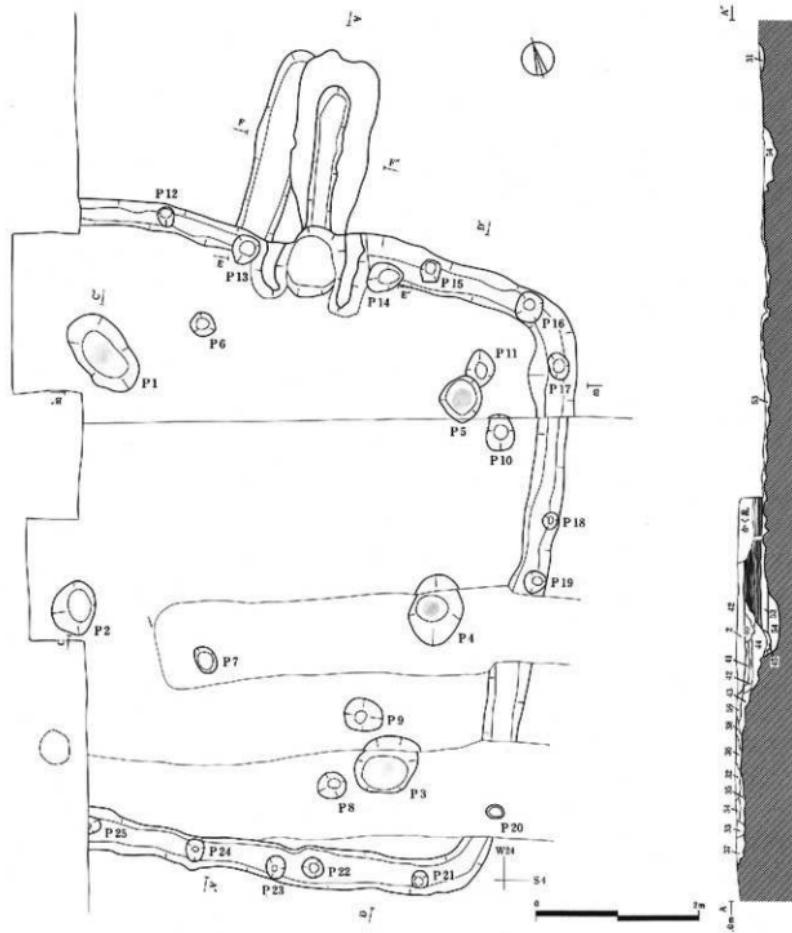
なお、改めて後述するが本住居跡には比較的大がかりな改築・拡張の痕跡がみとめられ、北辺の旧煙道は改築・拡張前の段階に伴うものである。

堆積土 堆積土、周溝堆積土、貼床、床面かさ上げ土、掘り方堆積土、柱穴・ピット堆積土、カマド・煙道堆積土、煙道掘り方堆積土などに区分される。

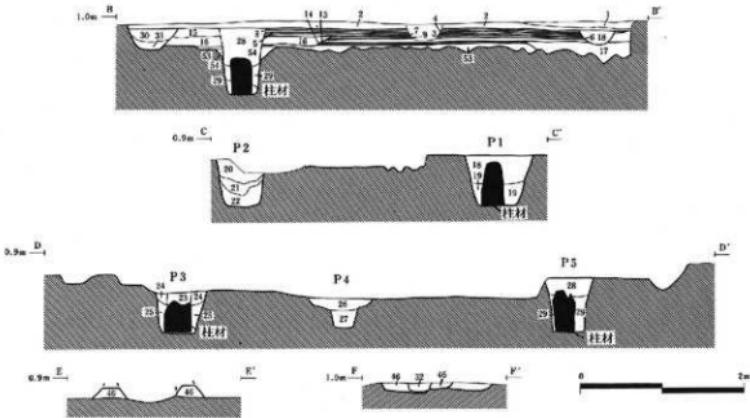
1・2層は住居廃絶後の堆積土とみられ、自然流入によるものと考えられる。

3~14層は薄い粘土層と砂層が互層の状態となっている。3・5・7・9・11・13・14層が粘土層で、層厚は2~5cm前後、全体的によく締まっている。4・6・8・10・12の砂層は、各粘土層の間に挟在する。層厚は10層が5~7cmと最も厚く、それ以外の層は3~5cm前後である。粘土層は貼床、砂層は床面を補修した際のかさ上げ土である可能性を推測しておきたい。

15~17層の砂は、搅乱状況部分の堆積土である。18~29層は柱穴とみられるP1~5ピットの堆積土で、いずれも砂である。30・31層は周溝の堆積土である。32~45層はカマド・煙道堆積土、および煙道掘り方堆積土である。シルト、粘土を主体としているが、カマドの堆積土は全体的に、灰・炭化物や焼土ブロックを多く含んでおり、このうち40~42層は灰の集積層となっている。煙道の堆積部土にも全体的に、灰・炭化物や焼土ブロックなどの混入

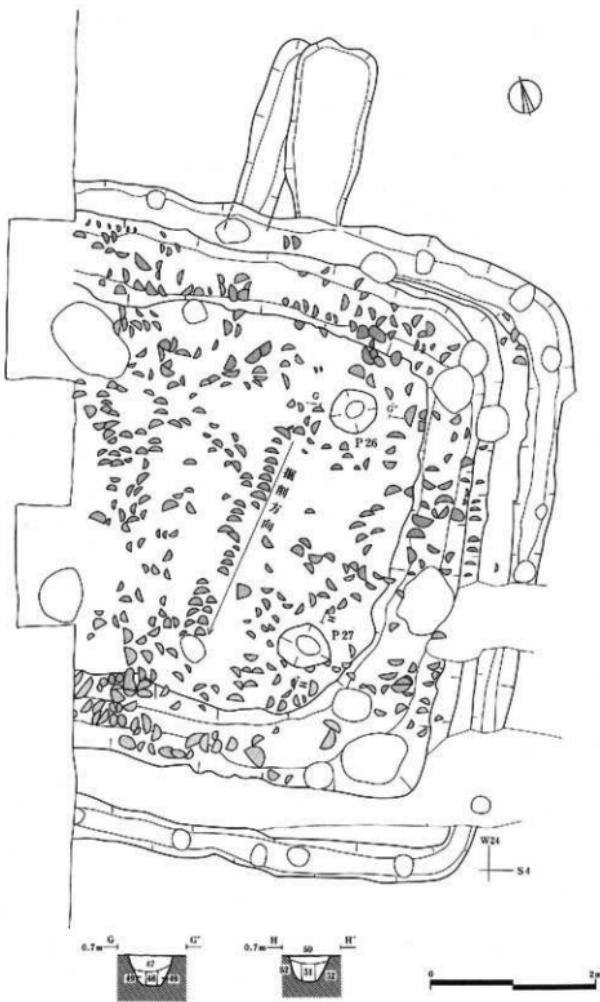


第27図 S I 9 壘穴住居跡平面・断面図(1)



順序	色	調	類	種	備 考			順序	色	調	類	考
					原	固	度					
1	2.5Y3/2	豆褐色	砂	電離土。		28	2.5Y3/3	三褐色	砂	P 5 地植物。		
2	2.5Y4/2	暗豆褐色	砂	電離土。		29	2.5Y4/2	暗豆褐色	砂	P 5 地植物。		
3	2.5Y6/3	豆褐色	粘土	第 1 黏土。全般的に砂がうぐくする。		30	2.5Y3/2	三褐色	砂	鐵道堆積物。		
4	2.5Y5/2	暗豆褐色	砂	底面かさ上げ土。		31	2.5Y4/2	暗豆褐色	砂	鐵道堆積物。灰褐色の粘土を少ブロッケで少量含む。		
5	2.5Y6/3	黃褐色	粘土	第 2 黏土。上面に黑色の灰、炭化物をせざる。		32	2.5Y5/2	暗豆褐色	粘土	鐵道堆積物。		
6	2.5Y5/2	暗豆褐色	砂	底面かさ上げ土。		33	10 YR3/2	黑褐色	シルト	鐵道堆積物。全体的に灰が混入。		
7	2.5Y5/3	黃褐色	粘土	第 3 黏土。上面に黑色の灰、炭化物を加びて、表面に砂をせざる。		34	2.5Y4/2	暗豆褐色	シルト	鐵道堆積物。		
8	2.5Y3/1	黑褐色	砂	底面かさ上げ土。全体的に灰を含む。		35	10 YR3/2	黑褐色	シルト	鐵道堆積物。炭化物、粘土を少含む。		
9	2.5Y5/3	黃褐色	粘土	第 4 黏土。全般的に砂がうぐくする。上面に黒褐色のものがある。		36	2.5Y4/2	暗豆褐色	砂質シルト	鐵道堆積物。灰化土、粘土を少含む。		
10	2.5Y5/2	暗豆褐色	砂	底面かさ上げ土。全般的に灰がうぐくする。		37	2.5Y6/2	豆褐色	粘土	鐵道廻り力場。		
11	2.5Y6/2	暗褐色	粘土	砂。底灰。		38	2.5Y3/2	黑褐色	シルト	鐵道堆積物。全体的に灰が混入。鐵土を大ブロッケで含む。炭化物を少し含む。		
12	2.5Y3/2	豆褐色	砂	豆褐色の粘土を少ブロッケで含む。しまり。黒褐色のもの有る。		39	2.5Y4/2	暗豆褐色	砂質シルト	鐵道堆積物。炭化物、鐵土を少含む。		
13	2.5Y4/2	暗豆褐色	砂	底面かさ上げ土。全般的に灰がうぐくする。		40	2.5Y4/2	暗豆褐色	灰	カマド堆積物。灰の凝集層。炭化物、鐵土を含む。		
14	2.5Y5/2	暗豆褐色	粘土	第 6 黏土。上面に灰及び砂の薄層を含む。		41	2.5Y3/1	黑褐色	シルト	カマド堆積物。全体的に灰を多量に含む。炭化物、鐵土を少含む。		
15	2.5Y3/2	黑褐色	砂	豆褐色の粘土を少ブロッケで含む。炭化物を含む。		42	2.5Y2/1	黑	灰	カマド堆積物。炭化物、鐵土を少含む。		
16	2.5Y4/2	暗豆褐色	砂	黄褐色の粘土を少ブロッケで含む。炭化物を含む。		43	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	鐵道堆積物。炭化物を少含む。		
17	2.5Y4/2	暗豆褐色	砂	黄褐色の粘土を少ブロッケで含む。炭化物を含む。		44	2.5Y3/1	三褐色	砂	カマド堆積物。全体的に灰が多量に混入。炭化物、鐵土を含む。		
18	2.5Y4/2	暗豆褐色	砂	黄褐色の粘土を少ブロッケで含む。炭化物を含む。		45	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	カマド堆積物。にじい褐色の粘土を少ブロッケで含む。		
19	2.5Y4/3	灰		P 1 堆積物。		46	2.5Y6/2	豆褐色	粘土	カマド堆積物。鐵道廻り力場。		
20	2.5Y4/2	豆褐色		P 1 堆積物。		47	2.5Y4/2	豆褐色	砂	P 26 堆積物。		
21	2.5Y4/2	暗豆褐色		P 2 堆積物。		48	2.5Y3/1	三褐色	砂	P 26 堆積物。糞糞塊。		
22	2.5Y4/2	暗豆褐色		P 2 堆積物。黒褐色の粘土を少ブロッケで含む。		49	2.5Y4/2	暗モリーノ	砂	P 26 堆積物。		
23	2.5Y3/1	黑褐色	砂	P 2 堆積物。柱窓か?		50	2.5Y3/1	三褐色	砂	P 27 堆積物。豆褐色の粘土を少ブロッケで少含む。		
24	2.5Y4/1	豆褐色	砂	P 3 堆積物。		51	2.5Y3/1	黑褐色	砂	P 27 堆積物。柱窓か?		
25	2.5Y4/2	モリーノ	砂	P 3 堆積物。		52	2.5Y4/2	暗豆褐色	砂	P 27 堆積物。		
26	2.5Y6/2	豆モリーノ	砂	P 4 堆積物。		53	2.5Y3/3	モリーノ	砂	掘り力場。		
27	2.5Y4/2	豆モリーノ	砂	P 4 堆積物。柱窓か?		54	2.5Y4/2	暗豆褐色	砂	掘り力場上。(旧鐵道堆積物?)		

第28図 S19 堅穴住居跡断面図(2)



第29図 S I 9 壁穴住居跡平面・断面図(3)

がみとめられる。37層の灰黄色粘土は煙道の掘り方埋土であるが、非常に硬く締まっている。46層の灰黄色粘土は、カマド袖の構築土、ならびに煙道掘り方埋土である。区別がつけ難いほどに同質であったため、同番とした。

47~52層は、拡張・改築以前の段階に伴う柱穴とみられる、P26・27ビットの堆積土である。53・54層の砂は掘り方堆積土である。

床面 当遺構の調査に当たっては、床面の判断が困難であったが、以下のような、すくなくとも7期以上の改修・変遷を推定しておきたい。

旧一新の順に、14層（第7床面）、13層（第6床面）、11層（第5床面）、9層（第4床面）、7層（第3床面）、5層（第2床面）、3層（第1床面）。これらの層は、層厚2～5cm前後の締まりの強い粘土層で、これらが貼床の残存と推定される。工事搅乱による削平の及んでいない、P1・5ピット以北全域で面的な広がりを確認したが、いずれの上面でも、カマド跡を中心に灰や炭化物の分布がみられた。

最も古い段階の貼床となっている第7床面が、掘り方埋土の直上に作られた後、なんらかの理由で床面改修の必要が生じ、その都度新たな床面が構築されていったものとみられる。貼床と考えられる粘土層各層の間に、12・10・8・6・4層の砂層が挟在しているが、これらは新たな貼床を行なう際に入れられたかさ上げ土と推測しておきたい。なお、最下の第7床面上面から、第1床面上面の比高差は18cm前後となっている。

第1床面上面では周溝、カマド、柱穴、ピットなどの施設を検出した。

周溝 検出した北・東・南辺に沿って巡っていて、上端幅は30～50cm、深さは20～25cm前後を計る。なお、後述するが周溝底面では、合計14基のピットを検出した。

柱穴 P1～5ピットが主柱穴に相当するものとみられる。また確認はできなかったが、P1～P2延長線上の破線で示した位置に、さらに1基の柱穴が存在する可能性が高く、1×2間の主柱穴を構成するものと理解される。これらの柱穴のうち、P1・3・5ピットからは柱材が出土したほか、P4ピットでは直径約20cmほどの柱痕跡がみとめられた。

このほか周溝底面では、直径15cm前後のものを主体とするP12～25の14基のピットが確認された。うちP15・16・22ピットでは直径8cm前後の柱痕跡を伴っており、これらのピットにも住居跡の補助的な柱穴としての可能性が推測される。側柱穴として理解しておきたい。なお、カマド袖に接して検出されたP13・14ピットは、直径が18～20cmを計るなど、やや様相を異にしており、他のピットと同様の性格であるものか、あるいはカマドに付随するなんらかの施設に伴うものか、判然としない。

柱穴の規模		柱間寸法		
ピットNo.	直 径 cm	深さ cm	ピットNo.	柱間寸法 cm
P 1	1.1×0.6	0.6	P 1～5	4.4
P 2	(0.65×0.55)	(0.58)	P 2～4	4.4
P 3	(0.75×0.7)	(0.5)	P 1～2	3.1
P 4	(0.85×0.65)	(0.38)	P 5～4	2.6
P 5	0.6×0.6	0.8	P 4～3	2.1

第11表 S I 9 穫穴住居跡（新段階）柱穴計測表

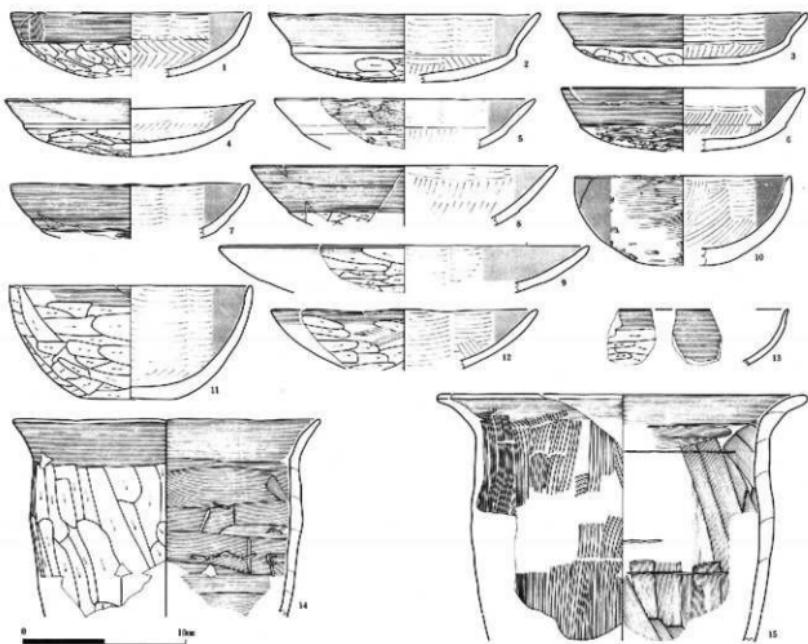
カマド 北辺で確認した。なお、古い煙道は住居跡の旧段階（改築・拡張以前）に伴うもので、別項で後述する。

袖は双方とも残存し、灰黄色の粒子の細かい粘土で塗かれている。西側の袖は下端幅44cm・上端幅21cm・高さ13cm、東側は下端幅34cm・上端幅16cm・高さ15cmとなっていて、両端幅は先端で1.2m、最大1.5mを計る。燃焼部は1.25×0.6mの橢円形を呈し、底面は焼土化している。この部分の堆積土では、多量の灰や炭化物がみとめられた。

煙道は一旦掘り方を掘って灰黄色の粘土を充填し、これを穿って作られており、先端部分では煙出しとみられるピット状の落ち込みを確認した。掘り方部分は検出長2.1m・上端0.55～1m・深さ15cm前後を計り、煙道は長さ1.25m、上幅40cm前後・深さ6cm前後・先端部深さは10cmとなっている。

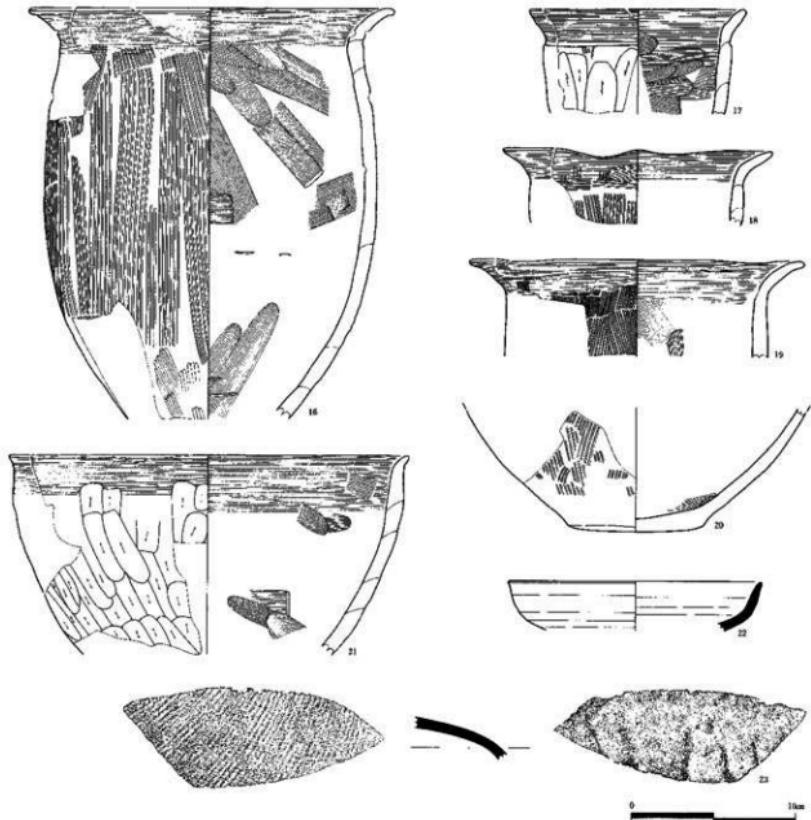
掘り方 本住居跡は、ほぼP1・5ピット以南全体で、掘り方埋土中に達する削平を受けており、掘り方の全体的な様相を知り得ないが、南北ベルトA-A'ライン断面の一部では、確認面から掘り方底面までの深さは35cm前後、カマド部分は深く、約55cmを計る。掘り方堆積土の53・54層は、双方ともに基本層序と同質の砂である。

なお、掘り方底面までの掘り下げを行った時点で、一回り小さい掘り方の痕跡が検出され、当住居跡で拡張が行



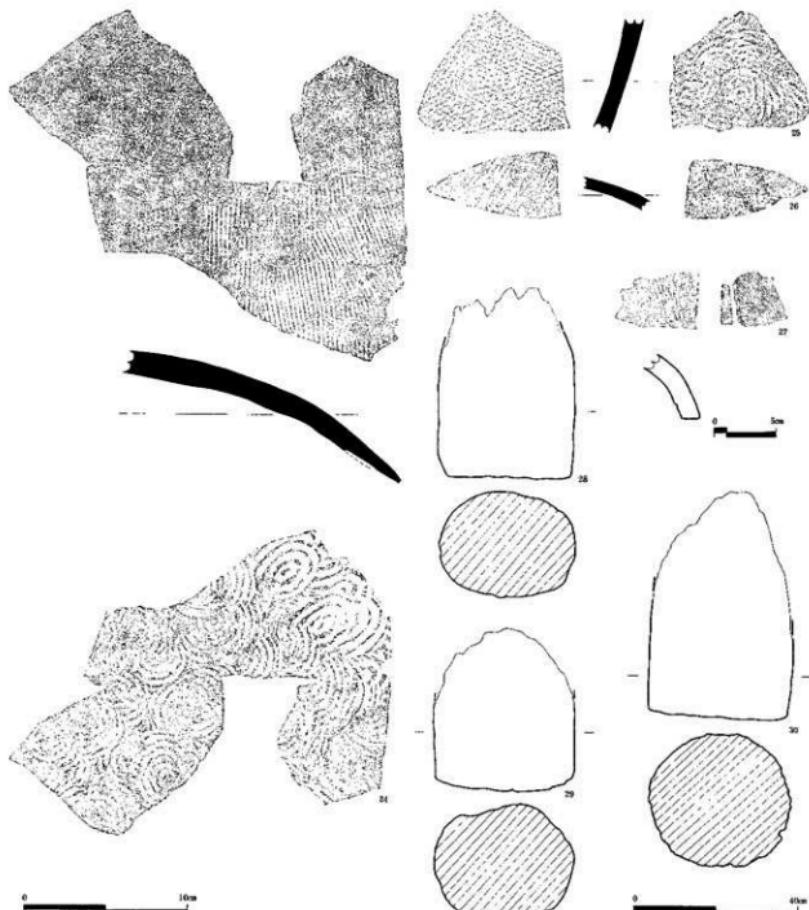
番号	登録番号	種別	出土位置	底			側面			外側調整	内側調整	既存	分類	備考	写真図版
				口	径	高さ	底	口	径						
1	C-105	土器部 环		(14.8)	(4.1)	(9.27)	(2.1)	直ナゲ、一部ナゲ、削り	黒色地埋		1/4	D-2		21-2	
2	C-92	土器部 环		(16.7)	(4.2)	(9.25)	(1.8)	直ナゲ、削り	黒色地埋		1/2	D-3		21-4	
3	C-93	土器部 环		15.4	3.3	9.21	1.2	直ナゲ、削り	黒色地埋		3/5	D-3		21-7	
4	C-89	土器部 环		15.4	3.6	9.23	1.7	直ナゲ、削り	黒色地埋		1/2	D-4		22-3	
5	C-113	土器部 环		(16.0)	(3.9)	(9.24)	(1.7)	直ナゲ、削り	黒色地埋		(1/8)	D-4			
6	C-108	土器部 环		(15.0)	(4.0)	(9.26)	(1.6)	直ナゲ、削り、(イガキ、輪積み底)	黒色地埋		(1/4)	D-4		21-12	
7	C-103	土器部 环		(14.8)	(3.9)	(9.26)	(0.9)	直ナゲ、ハケ目	黒色地埋		(1/4)	D-5		22-12	
8	C-104	土器部 环		(18.8)	(4.5)	(9.24)	(1.7)	直ナゲ、削り、輪積み底	黒色地埋		(1/8)	D-4			
9	C-107	土器部 环		(22.6)	-	-	-	直ナゲ、削り	黒色地埋		(1/8)	D-9 a			
番号	登録番号	種別	出土位置	底			側面			外側調整	内側調整	既存	分類	備考	写真図版
				口	径	高さ	底	口	径						
10	C-30	土器部 环		(12.3)	-	(5.5)	-	削り、(イガキ)	黒色地埋		1/2	D-7 c		21-2	
11	C-91	土器部 环		(15.9)	(5.6)	7.0	(0.4)	直ナゲ、削り	黒色地埋		3/5	D-7 c	削れ口に擦付 有。	23-5 70-4	
番号	登録番号	種別	出土位置	底			側面			外側調整	内側調整	既存	分類	備考	写真図版
				口	径	高さ	底	口	径						
12	C-106	土器部 环		(16.4)	(3.8)	(9.23)	-	直ナゲ、削り、部分的(イガキ)	黒色地埋		(1/8)	D-8 b			
13	C-114	土器部 环		-	-	-	-	直ナゲ、削り	直ナゲ		直片	E-7			
番号	登録番号	種別	出土位置	底			側面			外側調整	内側調整	既存	分類	備考	写真図版
				口	径	高さ	底	口	径						
14	C-94	土器部 環		(19.0)	-	-	-	直ナゲ、削り	直ナゲ、ヘラナゲ、一部ナゲ		(1/5)	D-2		27-5 67-6	
15	C-95	土器部 環		(22.6)	-	-	-	直ナゲ、ハケ目	直ナゲ、ヘラナゲ、一部ナゲ、輪積み 底		(1/4)	D-2		27-1	

第30図 S-I 9 穫穴住居跡出土遺物(1)



番号	發 見 場 所	種 類	測 定 数	出土位置	外 面 調 査			内 面 調 査			残 存 分 類	圖 考	写真図版
					口 径	底 径	高 さ	面 積 cm ²	面 積 cm ²	面 積 cm ²			
16	C-96	土器	(22.3)	—	—	横ナデ、ハケ目、1ガキ		横ナデ、ヘラナデ、ナデ、輪筋み底	(1/5)	D-2			27-8
17	C-99	土器	(13.2)	—	—	横ナデ、ハケ目、削り		横ナデ、ハケ目、ヘラナデ、ナデ	(1/6)	D-2 a	表面に段		25-1
18	C-66	土器	(16.3)	—	—	ハケ目、横ナデ、一部ナデ		横ナデ	(1/8)	D-3 b			
19	C-67	土器	(20.4)	—	—	横ナデ、ハケ目		横ナデ、ナデ、輪筋み底	(1/4)	D-3 b			28-5
20	C-98	土器	—	(8.2)	—	ハケ目、削試		ナデ	(2/2)	D-1 b			
21	C-100	土器	(24.4)	—	—	横ナデ、削り		横ナデ、ヘラナデ、ナデ	(1/4)	D-1			29-3
番号	發 見 場 所	種 類	測 定 数	出土位置	外 面 調 査	内 面 調 査	残 存 分 類	圖 考	写真図版				
22	E-50	土器	(15.4)	—	—	—	ミクロナデ、一部に縦状行筋	ミクロナデ	(1/4)	2			
番号	發 見 場 所	種 類	測 定 数	出土位置	外 面 調 査	内 面 調 査	残 存 分 類	圖 考	写真図版				
23	E-51	土器	—	—	—	平行印き、全面に自然筋行筋。	ミクロナデ	破片					36-8

第31図 S-19 穫穴住居跡出土物(2)



番号	正 規 番 号	種 別	器 形	出上位置	法 量 回			外 面 調 査			内 面 調 査			被 分 類	備 考	写真図版	
					口 径	底 径	厚 さ	高 さ	平行印き、全面に自然軸付着。	同心円支撑え。	被 片						
24	E-15	石器部 要素	石器部 要素		-	-	-	-	平行印き、全面に自然軸付着。	同心円支撑え。	被 片				36-13		
25	E-16	石器部 要素	石器部 要素		-	-	-	-	平行印き	同心円支撑え。	被 片				36-12		
26	E-32	石器部 要素	石器部 要素		-	-	-	-	平行印き、全面に自然軸付着。	ロアロタグ。	被 片				36-11		
番号	正 規 番 号	種 別	器 形	出上位置	法 量 回			外 面 調 査			内 面 調 査			被 分 類	備 考	写真図版	
番号	正 規 番 号	種 別	器 形	出上位置	法 量 回			外 面 調 査			内 面 調 査			被 分 類	備 考	写真図版	
					凸 面	凹 面	縁	縁 切 れ	縁 切 れ	縁 切 れ	縁 切 れ	縁 切 れ	縁 切 れ				
27	F-8	瓦	瓦		凸 面	凹 面	縁	縁 切 れ	縁 切 れ	縁 切 れ	縁 切 れ	縁 切 れ	縁 切 れ			42-2	
番号	正規番号	種別	器形	出上位置	周 長	素 材	本取り	法 量 回	法 量 回	法 量 回	法 量 回	法 量 回	法 量 回	法 量 回	被 分 類	備 考	写真図版
28	L-280	木製品	柱材		79			分断材 (芯去り)	-	(46.0)	33.0	92.0	上部欠損。			51-5	
29	L-281	木製品	柱材		79			分断材 (芯去り)	-	(39.2)	34.0	100.0	上部欠損。			51-3	
30	L-279	木製品	柱材		79			分断材 (芯去り)	-	(35.9)	34.6	107.0	上部欠損。			51-6	

第32図 S 19 穫穴住居出土遺物(3)

われたことが確認された。北・東・南辺でそれぞれ、1.2・1.7・1.1m前後以上の拡張が行われた様相をうかがうことができる。拡張にあたっては、旧段階住居跡の掘り方輪郭を残しながら、床面や埋土を一旦掘り上げたうえで拡張部の掘り方を掘り、その全体を再び砂で埋め戻したものと推測される。

また掘り方底面では、土掘り用具の痕跡を多数検出した。分布には偏りがあり、拡張部分ではまばらとなっている。平面形は整った半円形を呈し、大きさにはややばらつきがみられるが、平面形15~20×6~10cm、深さ7~10cm前後のものが主体をなしている。

旧段階（改築・拡張以前）の住居跡 挖り方底面において、掘り方輪郭の残存と、この段階のものとみられる柱穴2基を検出した。また、新段階住居跡の煙道掘り方に切られている煙道は、この段階のカマドに伴うものと判断される。

旧段階住居跡の規模については判然としないが、掘り方南北軸の長さは6.4m前後を計る。また、掘り方底面で検出したP26・27ピットは、旧段階に伴う柱穴とみられるが、これと組み合った新たな西側の柱列は検出することができなかった。配置からみると、新段階の柱穴P1・2ピットとのバランスがよく、これらの柱穴は旧段階でも機能していた可能性も考慮する必要があるものと考えられる。なお双方のピットで、直径15~18cmの柱痕跡を確認した。カマドについてはソデ、燃焼部の痕跡はみとめられず、北辺で煙道だけを検出した。残存全長は2.3m、上端幅は50cm前後となっている。

柱穴の規格			柱間寸法	
ピット番	直 径 (cm)	深 さ (cm)	ピット番	柱間寸法 (cm)
P26	0.60×0.55	0.38	P26~P27	3.0
P27	0.65×0.55	0.3		

第12表 S19堅穴住居跡（旧段階）柱穴計測表

出土遺物（第30・31・32図）

床面や柱穴、床面かさ上げ土、周溝堆積土、掘り方堆積土などから土器器、須恵器、瓦、木製品などが出土した。

第30図1~13は土器器の杯・碗で、2~4・6・9・10は第1床面、11・12は第3床面からの出土である。杯は体部に段を持ち、内面に黒色処理が施されたものが大半を占めている。13の資料は小片で全体的な様相を知り得ないが、器形・器厚や内面のナデ調整などに特長がみられる。10の碗は内外面ともに、ていねいなミガキ調整と黒色処理が施されている。

第30図14・15、第31図16~20は土器器の甕である。第30図14・15、第31図16・17は第1床面、第31図20は第4床面、2~3は掘り方堆積土からの出土である。長胴型のものがほとんどだが、体部の最終調整はヘラ削りのものとハケ目調整のものとがみられる。第31図20は体部下半から底部の破片であるが、やや大型で球形の器形が推測される。第31図21は土器器の鉢である。

第31図22は須恵器の杯であるが、堆積土からの出土で後の混入と考えられる。体部下半に屈曲がみとめられ、底部切り離し技法は不明である。第31図23、第32図24~26は須恵器の甕であるが、いずれも体部の破片で詳細は知り得ない。

第32図27は丸瓦で、第5床面から第4床面のかさ上げ土である10層から出土した。凸面に繩叩き、凹面には糸切り痕、布目痕が観察される。

第32図28~30は木製品である。それぞれ柱穴のP1・3・5底面に直立した状態で出土し、この住居跡で使用された主要な柱材であったものとみられる。いずれも芯を避けた分割材で、最大径33~約35cm、全周は92~107cmと大型である。樹種はクリに同定されている。

(9) S I 11 竪穴住居跡

遺構状況（第33図）

遺存状況 3区S-3、W-24付近で確認した。S I 9 竪穴住居跡、SK31土坑に切られている。

平面形は隅丸方形を呈しているが、遺構の西半をS I 9 竪穴住居跡に大きく切られていて、本来の形状を知ることはできない。完全に残っていた東辺の検出全長は5.24mである。カマドは確認できなかった。

東辺を基準とした南北軸方向はN-45°-Eである。

堆積土 全体で9層に細分された。1層は住居廃絶後の堆積土とみられ、自然流入によるものと考えられる。2層は部分的にみられる粘土層であるが、貼床の残存と考えておきたい。3、4層は掘り方、6～9層はピットの堆積土である。

床面 面的な広がりとして確認することはできなかったが、掘り方堆積土直上に点在する堆積土2層に、床面としての可能性を想定しておきたい。この層は全体的にうすく細砂が混入する灰黄色の粘土であるが、掘り方堆積土上面に貼って床面を作りだしたものとみられる。

この面では2基のピットを検出した。

柱穴 P 1・2 ピットが柱穴に相当するものと考えられるが、柱痕跡はみとめられなかった。

掘り方 比較的ていねいに掘られていて、底面に高低差はあるものの、著しい凹凸はみとめられない。貼床の残存とみられる2層上面からの深さは10～15cm前後を計る。堆積土は基本層序の砂と同質のもので、住居構築時に一旦掘り起した土砂を埋め戻したものと推測される。

出土遺物（第34図）

床面上部堆積土、掘り方堆積土中より土師器が出土したが、摩滅の進んだ細片が大半で、図示をなし得たのは次の1点だけである。

1は床面上部堆積土から出土した杯である。外面は削り調整、内面にはヘラミガミが観察されるが、黒色処理は施されていない。

このほか、岡化のできなかった杯が1点、甕壺類が16点出土したが、いずれも非ロクロ成形のものである。このうち杯には内面黒色処理がみとめられる。

(10) S I 13 竪穴住居跡

遺構状況（第35図）

遺存状況 3区S-21、W-24付近で確認した。この一帯に集中する小溝遺構5条に切られている。

すべてのコーナーを確認したが、各辺の検出全長は北辺4.1・南辺3.6・東辺3.1・西辺3.0mを計り、東西方向に長い隅丸の長方形を呈している。これから復元推定される床面積は約13畝前後である。

全体的に削平がおよんでいて、遺構の確認面は床面に達しているものとみられる。カマドの煙道と床面残存の一部を確認したが、柱穴は検出することができなかった。

南北軸の方向はN-32°-Eである。

堆積土 全体で4層に区分された。1層は部分的に存在する粘土層であるが、貼床の残存とみられる。2～4層は掘り方の堆積土で、いずれも褐色系の砂である。

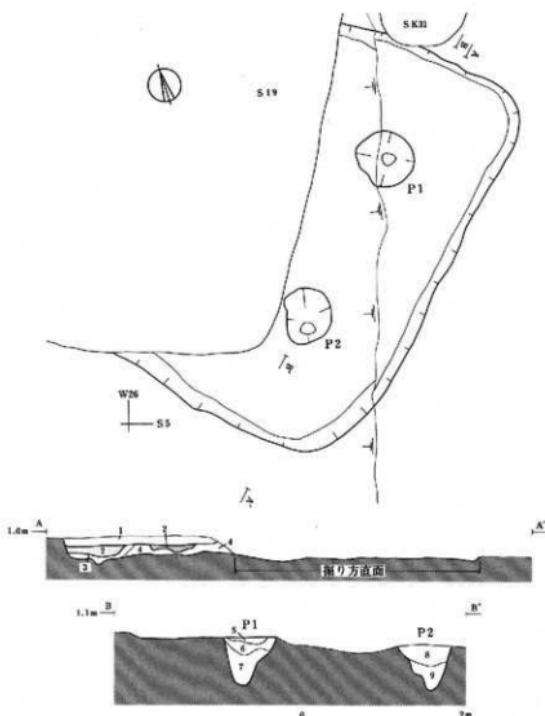
床面 掘り方埋め戻し土の上面に、粘土を貼って床面を作りだしたものと推測されるが、遺存状況が悪く、平面図網かけ部分でのみ検出した。貼床に使われた黄褐色の粘土には、全体的にうすく細砂の混入がみられ、よく締まっている。

床面で、カマド痕跡および柱穴は確認されなかった。

カマド 北辺のほぼ中央部分で煙道の掘りこみだけを確認した。検出全長は68cm、上幅は40cm前後を計るが、先端

柱穴の規模			柱間寸法	
ピットNo.	直 径 (m)	深 さ (m)	ピットNo.	柱間寸法 (m)
P 1	(0.72×0.60)	0.6	P 1～P 2	2.2
P 2	(0.68×0.56)	(0.64)		

第13表 S III 穴住居跡柱穴計測表



編序	色	調	標 領	標	考	編序	色	調	標 領	標	考
1	2.5Y3/1	淡褐色	砂	電離土。		6	2.5Y3/2	黃褐色	砂	P 1 塗飾物。	
2	2.5Y4/2	褐黃色	粘土	細粒風化？全体的に灰褐色の砂がうすく混 る。		7	2.5Y5/4	黃褐色	砂	P 1 塗飾物。	
3	2.5Y4/3	チャーブ褐色	砂	塊々方塊上。		8	2.5Y3/3	暗チャーブ褐色	砂	P 2 塗飾物。	
4	2.5Y4/4	灰褐色	砂	塊々方塊上。		9	2.5Y3/2	黑褐色	砂	P 2 塗飾物。	
5	2.5Y4/2	暗灰褐色	砂	P 1 塗飾物。							

第33図 S III 穴住居跡平面・断面図

番号	發 掘 號	解 説	実 質	出土位置	古 代 遺 跡			外 面 調 査	内 面 調 査	残 存	分 類	備 考	写真図版
					口 径	深 度	高 度						
I	C-68	土器部 床		(13.6)	(3.6)	(0.36)	-	削り、磨滅	1.0m	(1/5)	D-8 b		

第34図 S III 穴住居跡出土遺物

部分は削平により失われたものとみられる。

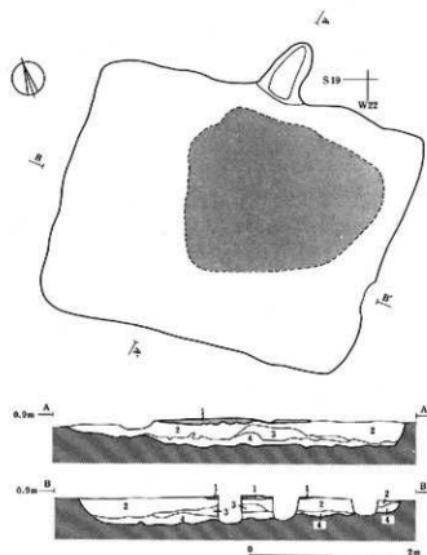
掘り方 荒く掘られていて、底面には細かい起伏がみとめられる。1層上面からの深さは15~30cm前後となってい

出土遺物（第36図）

床面より3点の土製品、掘り方堆積土から土師器が出土したが、図示をなし得たのは以下の土製品3点である。

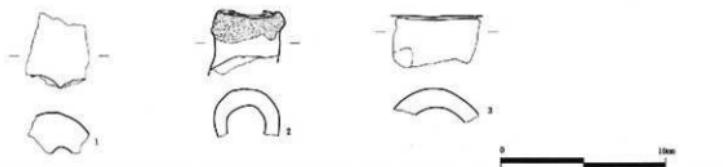
1~3は縁羽口である。2は先端部分に沿着がみられる。いずれも床面からの出土である。

このほか、掘り方堆積土から内面黒処理の施された土師器杯、および壺壺類の破片がそれぞれ2点、39点出土し



順序	色 調 度	特 徴	標 記	順序	色 調 度	特 徴	標 記
1	2.5Y5/3 黄褐色	粘土	貼付。全体的に黄褐色の跡がうすく残る。 炭化物を少含む。	3	2.5Y6/3 オリーブ褐色	砂	掘り方堆積土。
2	2.5Y5/3 緑+リープ褐色	砂	掘り方堆積土。	4	2.5Y5/3 黄褐色	砂	掘り方堆積土。

第35図 S I 13堅穴住居跡平面・断面図



番号	登 録 番 号	形 別	部 分	出 土 位 置	底 存 具	底 存 輪	孔 目	側 面	標 記	写 真 回 数
1	P-50	土製品	羽口		4.6	3.8	-	外曲ナデ		
2	P-7	土製品	羽口		3.95	4.5	2.2	外曲ナデ		44-10
3	P-6	土製品	羽口		3.2	5.6	-	外曲ナデ		

第36図 S I 13堅穴住居跡出土遺物

ている。いずれも細片であるため詳細は知り得ないが、ロクロ成形のものは含まれていない。

なお、床面からの出土遺物のありようが特殊であったため、磁石による精査などを試みたが、鉄滓や銀造剥片等は検出されなかった。

(II) S I 14堅穴住居跡

遺構状況（第37・38図）

遺存状況 3区N-25、W-5付近の、3区北辺中央部分で確認した。遺構の西端部をSD 6溝跡に切られているが、遺存状態は良好である。

平面形は端正な隅丸方形を呈し、完全に検出できた南辺・東辺の検出全長はそれぞれ5.12・5.0mを計る。これから復元推定される床面積は約26m²である。南北軸の方向はN-8°-Eとなっている。

堆積土 遺構断面図に示した堆積土は、全体で26層に区分される。1層の砂は住居廃絶後の堆積土とみられ、自然流入によるものと考えられる。2層は部分的にみられる粘土層であるが、貼床の残存と推定される。また、カマド袖の構築土もこれときわめて類似した粘土であるため、同じ区分とした。3～13層は床面から掘りこまれている周溝の堆積土で、1層と類似した砂となっている。14～17層はカマドの堆積土であるが、このうち14層には多くの灰・炭化物が混入するほか、17層ではきわめて多量の焼土がみとめられた。18～25層は煙道、26層は掘り方の堆積土である。

なお図表には示していないが、P 1～P 4 ピットは暗褐色系の砂、P 5・P 6 ピットは黄褐色系の砂を主体としている。

床面 掘り方埋め戻し土の上面に、粘土を貼って床面を作りだしたものと推定されるが、遺存状況が悪く、平面図網かけ部分でのみ検出された。貼床に使われた灰色の粘土には、全体的にうすく細砂の混入がみられ、よく締まっている。

床面では周溝、ピット、カマドの袖・燃焼部などの施設を確認した。

柱穴 床面で検出したP 1～P 4 ピットが主柱穴に相当するものとみられるほか、掘り方底面近くになって確認したP 5・P 6 ピットにも補助的な柱穴の可能性が想定される。P 1～P 4 ピットは、よく整った方形に配置されている。

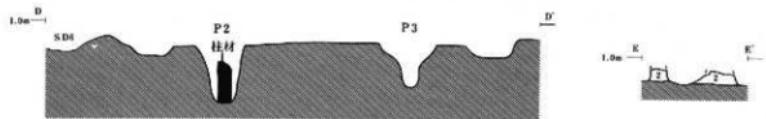
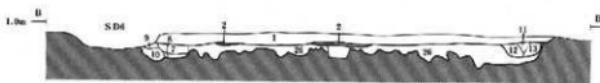
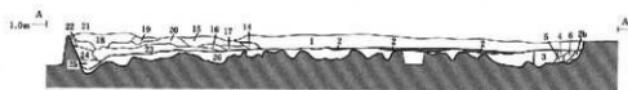
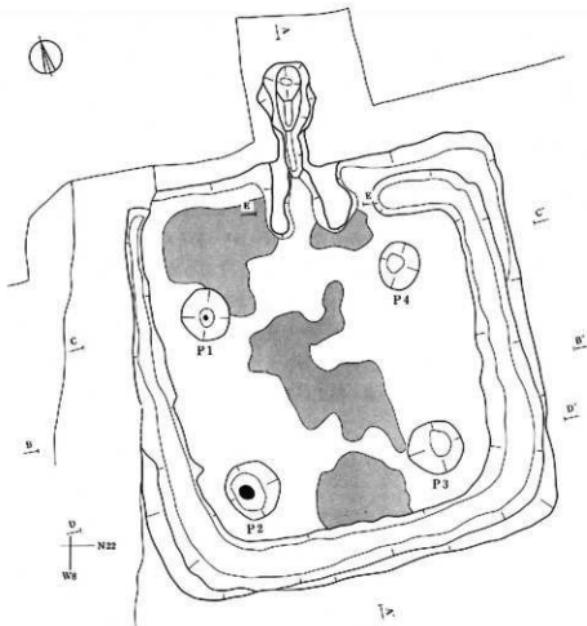
P 1・2・5・6 ピットには柱材が残存していたほか、ピット3では確認面で径14センチ前後の柱穴痕がみとめられた。

カマド 北辺のはば中心部で確認した。高さ15cm前後残存していた両袖は貼床の粘土と同質の灰色粘土で築かれていて、先端幅70cmである。燃焼部では底面の焼土化がみとめられた。この部分の堆積土には全体的に灰・炭化物、焼土ブロックなどが混入するが、14層で検出した灰は灰像分析の結果、稻の藁を起源とするものであることが判明した。このことからカマドの燃料として、稻藁が用いられたことが推測される。

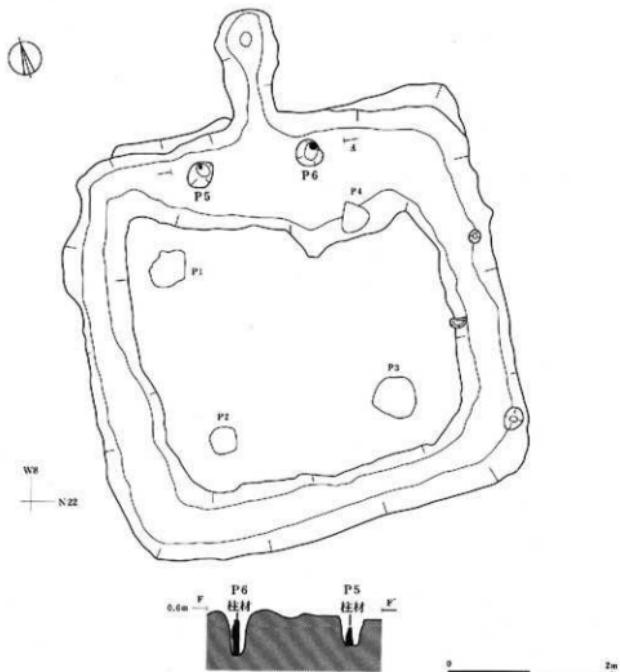
煙道部分も先端部のはば完全に検出された。検出全長は1.4mである。上幅は住居主体部との取り付け部分では37cm前後であるが、中央部付近から権円状に脹らみ、最大70cmを計る。なお、取り付け部分は、掘り方に袖と同質の

柱穴の概要			柱間寸法	
ピットNo	直 径 (mm)	深 さ (mm)	ピットNo	柱間寸法 (mm)
P 1	0.6×40.60	0.48	P 1～P 2	2.24
P 2	0.72×0.64	0.72	P 2～P 3	2.44
P 3	0.68×0.64	0.52	P 3～P 4	2.20
P 4	0.60×0.48	0.56	P 4～P 1	2.36
P 5	(0.4×0.3)	(0.35)	P 5～P 6	(1.4)
P 6	(0.44×0.28)	(0.46)		

第14表 S I 14堅穴住居跡柱穴計測表



第37図 S 114竪穴住居跡平面・断面図(1)



順序	色	周	地	考	順序	色	周	地	考
1	10Y R 3/2	黒褐色	砂	地盤土。	14	10Y R 1.7/1	黒色	シルト質砂	カド堆積物。灰、灰化物、礫土を含む。
2	5Y G 1/1	灰褐色	粘土	粘土、カド堆積土。全体的に砂がうすく混入。	15	2.5Y 4/1	黄褐色	粘土	カド堆積物。全般的に砂を多く含む。粘土を含む。
3	2.5Y 4/2	暗灰褐色	砂	周溝堆積物。	16	5Y 3/1	オリーブ色	粘土	カド堆積物。全般的に砂を多く含む。粘土を含む。
4	5Y 4/2	灰オリーブ色	砂	周溝堆積物。	17	2.5Y 3/1	黒褐色	粘土	カド堆積物。全般的に砂を多く含む。粘土を多量に含む。
5	2.5Y 4/3	オリーブ褐色	砂	周溝堆積物。	18	5Y 5/1	灰色	シルト質粘土	堆積物。
6	2.5Y 4/2	灰オリーブ色	砂	周溝堆積物。	19	2.5Y 4/2	暗灰褐色	シルト質砂	堆積物。
7	10Y R 3/4	暗褐色	砂	周溝堆積物。	20	2.5Y 5/2	暗灰褐色	粘土	堆積物。
8	10Y R 4/4	褐色	砂	周溝堆積物。	21	2.5Y 3/1	黒褐色	シルト質砂	堆積物。
9	2.5G Y 3/1	灰オリーブ色	砂	周溝堆積物。	22	10Y R 2/1	黒色	シルト質砂	カド堆積物。灰褐色の粘土をプロットで含む。
10	2.5Y 4/3	オリーブ褐色	砂	周溝堆積物。	23	10Y R 2/1	黒色	砂	堆積物。
11	10Y R 3/4	暗褐色	砂	周溝堆積物。	24	10Y R 3/2	黒褐色	砂	堆積物。
12	5Y 3/2	オリーブ黒色	砂	周溝堆積物。	25	5Y 3/1	オリーブ色	砂	堆積物。
13	2.5Y 3/2	黒褐色	砂	周溝堆積物。	26	10Y R 4/4	褐色	砂	前り方埋土。

第38図 S114堅穴住居跡平面・断面図(2)

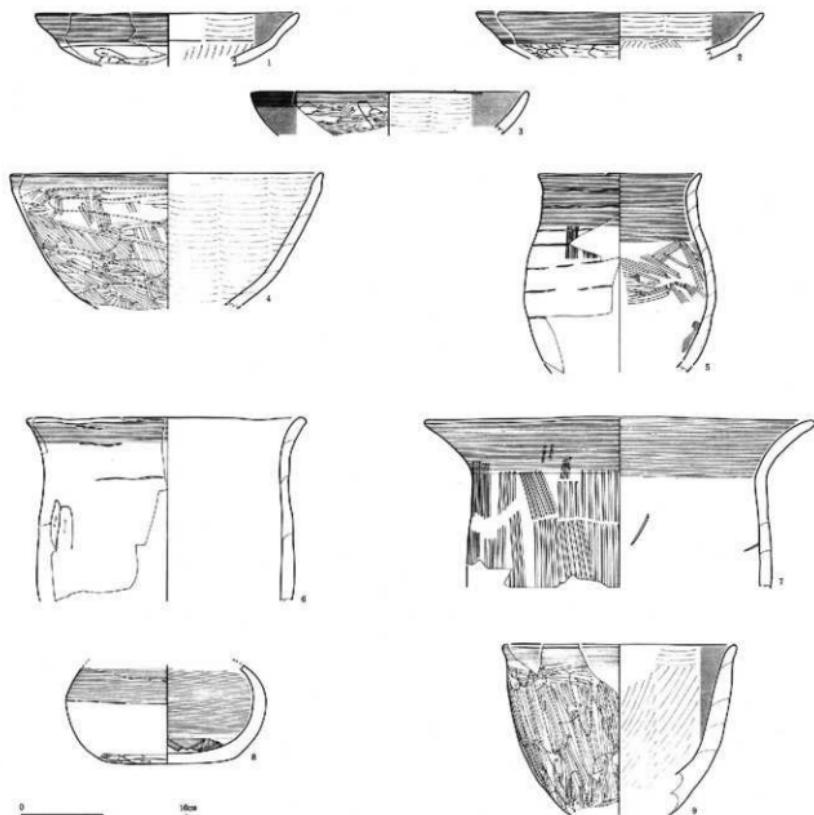
粘土を充填し、さらにそれを穿って構築されている様相がうかがわれる。先端部には煙出しと考えられるビット状の落ち込みがみとめられる。

掘り方 四周の壁に沿って、周溝状に深く掘られている。非常に荒く掘られていて、底面には著しい凹凸がみとめられる。床面とみられる2層上面からの深さは、溝状の部分が12~25cm、それ以外では7~16cm前後となっている。

掘り方の堆積土は基本層序の砂と同質のもので、住居構築時に掘り起こした土砂を埋め戻したものと推測される。出土遺物（第39・40図）

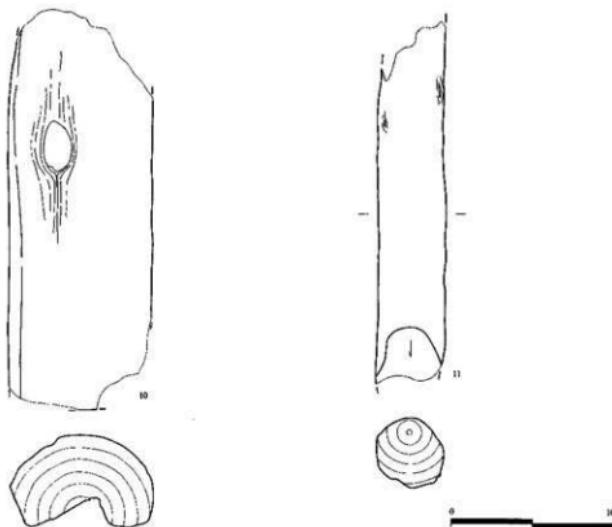
床面、カド下構築土、および柱穴・床面上部・掘り方堆積土から土師器、木製品が出土した。これらのうち次の11点を示すことができた。

1~3は内面黒色処理が施された土師器の壺であるが、1・2では体部外面に段が観察される。4は土師器の碗で、外側の最終調整はヘラミガキとなっており、内面に黒色処理はみとめられない。5は土師器の壺、6・7は長



番号	社 名 號	種 別 器 形	出 土 位 置	底 部 寸 寸				外 面 調 査	内 面 調 査	残 存	分 類	備 考	写真図版
				口 径	底 径	高 度	厚 さ						
1	C-117	上部器 部	环	(16.8)	(3.4)	(9.21)	(1.3)	縹ナゲ、削り	ミガキ 黒色地埋	(1/8)	D-3		
2	C-88	上部器 部	环	(17.6)	(3.5)	(9.20)	-	縹ナゲ、削り	ミガキ 黒色地埋	(1/6)	D-4		
3	C-118	上部器 部	环	(16.9)	-	-	-	縹ナゲ、削り、ミガキ	ミガキ 黒色地埋	(1/8)	D-8 b		
4	C-86	上部器 部	环	(19.0)	-	-	-	縹ナゲ、削り、ミガキ	ミガキ 黒色地埋	(1/5)	D-7 h①		
番号	社 名 號	種 別 器 形	出 土 位 置	底 部 寸 寸				外 面 調 査	内 面 調 査	残 存	分 類	備 考	写真図版
5	C-83	上部器 部	环	(10.6)	-	-	-	縹ナゲ、ハケ目、削り、輪縞み痕	縹ナゲ、ナゲ、ミガキ	(1/4)	D-2		
6	C-81	上部器 部	环	(17.6)	-	-	-	縹ナゲ、削り、輪縞み痕	磨拭	(1/4)	D-3 b		
7	C-82	上部器 部	环	(23.6)	-	-	-	ハケ目、横ナゲ	縹ナゲ、ヘラナゲ	(1/4)	D-3 b		
8	C-87	上部器 部	环	-	-	-	-	縹ナゲ、削り	縹ナゲ、ヘラナゲ	(4/5)	D-3		
9	C-85	上部器 部	环	(14.3)	-	-	-	縹ナゲ、削り、ミガキ	ミガキ 黒色地埋	(1/4)	D-2		

第39図 S-114 穴住居跡出土遺物(1)



第40図 S I 14堅穴住居跡出土遺物(2)

胴形の壺である。8は土器器の小型壺、9は鉢であるが、9の資料は体部以下の最終調整がヘラミガキで、内面には黒色処理が施されている。なお、1～6の出土位置は床面やカマド袖構築土、カマド堆積土などで、いずれもこの住居跡に伴うものである可能性がつよい。

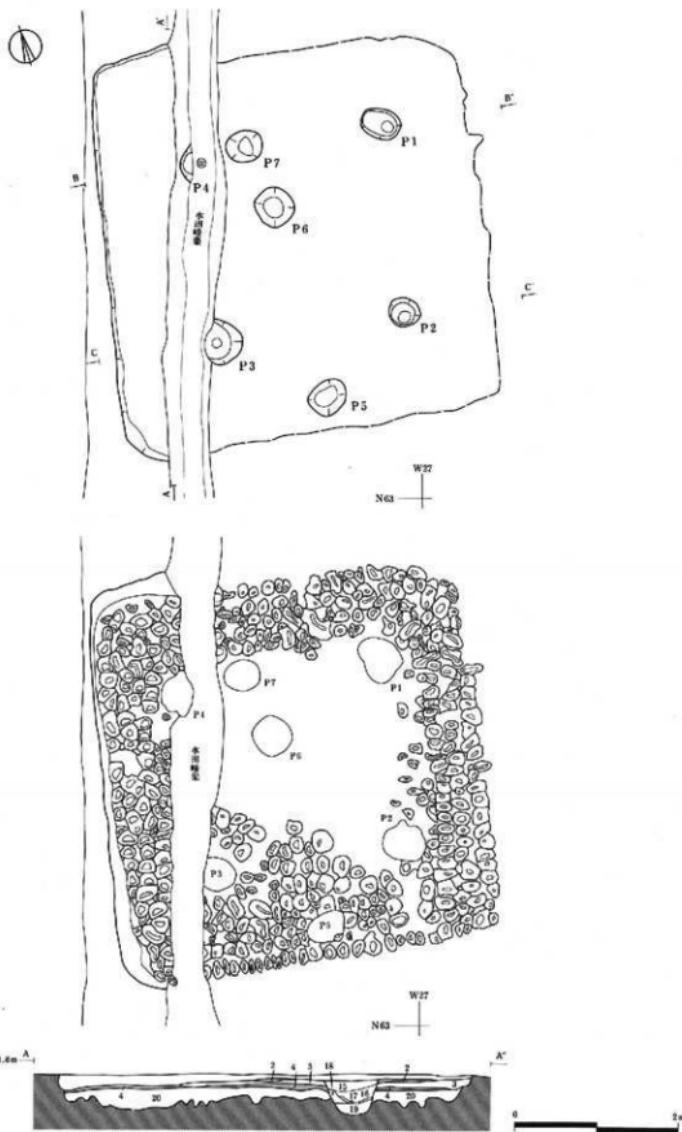
10、11は柱穴とみられるビットから出土した木製品で、ともに当住居跡に用いられた柱材と考えられる。10はP 2ビット底面にはば直立する状態で出土した。芯持ち、2分割の分割材が用いられていて、全長・最大幅はそれぞれ48.6・17.1cmである。樹種はクリに同定されている。11もP 6底面に直立の状態で出土した。芯持ちの丸太材となっており、下端部には加工面が1面と認められる。全長・最大幅はそれぞれ44.2・8.8cmである。樹種はマツ属の一種に同定された。

このほか、図化のできなかった土器器壺、壺壺類の細片がそれぞれ58点、171点出土したが、ロクロ成形の資料は含まれていない。須恵器は1点も出土しなかった。

(d) S I 15堅穴住居跡

遺存状況 2区N-66、W-29付近で確認した。遺構の大部分を、水田暗渠排水管の掘り方と、ごく最近の擾乱に切られている。

検出した平面形は比較的整った隅丸方形を呈しているが、遺構の大半が搅拌等によって失われているので、本来の形状は知ることができない。全体として遺構の四辺を検出しているが、他との重複がないのは西辺だけで、この全長は4.88mである。このほか北辺・南辺・東辺の検出全長は、それぞれ4.54・4.71・4.54mを計る。



なお、暗渠排水溝より東側部分の遺構確認面は、掘り方堆積土中におよんでいる。カマドの残存は確認することができなかった。

西辺を基準とする南北軸の方向はN-13°-Eである。

堆積土 全体で20層に区分された。1層は住居廃絶後の堆積土とみられ、自然流入によるものと考えられる。2・4層は非常に類似していて、灰黄色の粘土が多量に混入する土層である。ともに貼床の残存と考えられる。3層の砂は、4層から2層の床面へ、かさ上げする目的で入れられた可能性を推測しておきたい。5～19層はP 1～4ビットの堆積土である。砂を主体としているが、部分的に炭化物などの混入がみとめられる。20層は掘り方堆積土である。

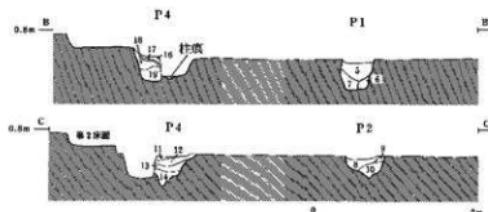
床面 床面とみられる面を2面検出した。古い段階の貼床と考えられる4層（第2床面）は、掘り方堆積土直上にみられるもので、暗渠排水溝より西側全面で面的な広がりを確認した。この上部に3層を挟在して、新しい貼床の残存とみられる2層（第1貼床）が確認されるが、部分的な残存で、連続する面的な広がりとしては検出されなかつた。

4層段階の床面上に3層の砂を入れてかさ上げし、この直上に2層を貼って、新たな床面を作りだしたものと推定しておきたい。

柱穴 7基のビットを確認したが、配置からP 1～4ビットが柱穴に相当するものと考えられる。いずれでも明確な柱痕跡は確認できなかったが、P 2～4ビットでは底面でビット状の窪みを検出し、柱材の痕跡を示すものである可能性も考えられる。なお、P 5～7ビットの性格については判然としない。

柱穴の規模			柱間寸法	
ビットNo.	直 径 (mm)	深 さ (mm)	ビットNo.	柱間寸法 (mm)
P 1	(0.5×0.38)	(0.38)	P 4～P 3	(2.42)
P 2	(0.4×0.36)	(0.29)	P 3～P 2	(2.28)
P 3	(0.54)	(0.4)	P 2～P 1	(2.32)
P 4	-	(0.42)	P 1～P 4	(2.32)

第15表 S I 15号穴住居跡柱穴計測表



順序	色 調	層 厚	層 方	順序	色 調	層 厚	層 方
1	10Y R 2/3 黒褐色	シルト質砂	堆積土。	11	10Y R 2/1 黒褐色	シルト質砂	P 3堆積物。炭化物を含む。泥土の小粒を少量含む。
2	10Y R 3/3 細褐色	シルト質砂	第1貼床。灰褐色の黏土をブロックで多量に含む。上部の一部に炭化物を含む。	12	2.5Y 3/1 黒褐色	シルト質砂	P 3堆積物。
3	10Y R 2/3 灰褐色	シルト質砂	床面からさ上げ。	13	2.5Y 6/3 ないし 黑褐色	砂	P 3堆積物。
4	10Y R 2/3 黑褐色	シルト質砂	第2貼床。灰褐色の粘土をブロックで多量に含む。上部の一部に炭化物を含む。	14	2.5Y 7/4 淡黒褐色	砂	P 3堆積物。
5	10Y R 4/2 灰褐色	シルト質砂	P 1堆積物。灰褐色の粘土を小ブロックで含む。炭化物を含む。	15	10Y R 2/2 黑褐色	シルト質砂	P 4堆積物。
6	2.5Y 6/1 黑褐色	砂	P 1堆積物。柱跡跡か?	16	10Y R 2/2 黑褐色	シルト質砂	P 4堆積物。炭化物を含む。
7	10Y R 4/1 黑褐色	シルト質砂	P 1堆積物。	17	10Y R 2/1 黑褐色	炭化物	P 4堆積物。
8	2.5Y 4/2 灰褐色	シルト質砂	P 2堆積物。	18	2.5Y 5/2 黑褐色	シルト質砂	P 4堆積物。炭化物を含む。
9	2.5Y 7/4 改良色	砂	P 2堆積物。	19	2.5Y 5/2 黑褐色	砂	P 4堆積物。
10	2.5Y 5/2 改良色	シルト質砂	P 2堆積物。	20	10Y R 1/1 色褐色	砂	埋り方壁土。

第42図 S I 15号穴住居跡平面・断面図(2)

掘り方 2層上面からの深さは22~33cm前後を計るが、底面の四周に沿って、おびただしい土掘り用具の痕跡を検出した。平面図は完掘の状況だが、確認時の平面プランは、比較的整った半円形を呈する。大きさにはややばらつきがみられるものの、20~24×12~15cm、深さは5~8cm前後のものが多い。使用用具の特定は困難であるが、鉄製の刃先を持つ鍔などが想定される。

なお、掘り方堆積土は基本層と同質の砂であるが、住居構築時に一旦掘り上げた土砂を埋め戻したものと推測される。

出土遺物

第1床面上部堆積土、および掘り方堆積土から土師器が出土した。器種内訳は壺7点、甕壺類136点であるが、すべて小さな破片であるため、特長など詳しい様相を知ることはできなかったが、いずれも非ロクロ成形のものとなっている。このうち环片についてみると、内面黒処理が施されたものが4点、外外面ともに黒色処理のみとみられる資料が3点である。須恵器は出土しなかった。

(4) S I 16竪穴住居跡

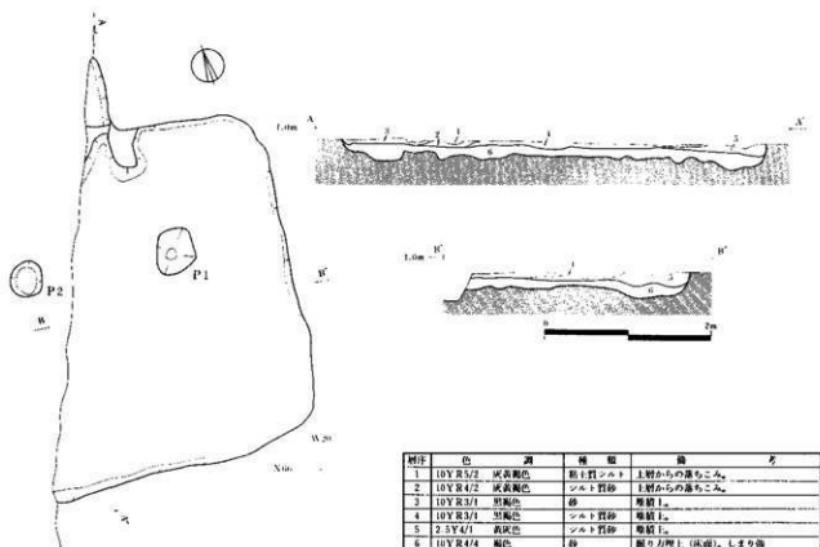
遺構状況（第43図）

遺存状況 2区N-68、W-22付近で確認した。S I 15竪穴住居跡の東に近接して位置しており、遺存状況は全体的に比較的良好であったものとみられるが、遺構の西半部分はごく最近の工事攪乱によって失われている。

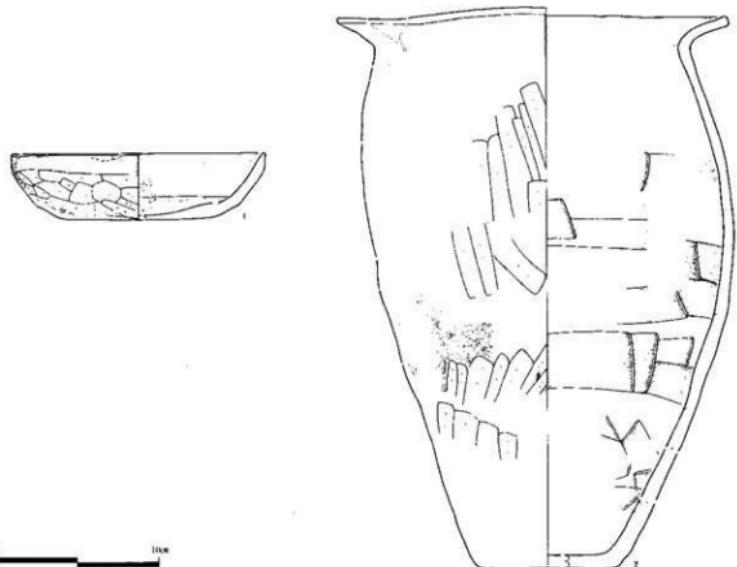
平面形はやや不要な隅丸方形を基調とするものと推定されるが、約1/2が削平されているために、全体的な形状は不明である。完全に確認することができたのは東辺だけで、検出全長はほぼ4mである。

東辺を基準とした南北軸の方向は、N-6°-Eとなっている。

堆積土 全体で6層に区分された。1~5層は住居廃絶後の堆積土とみられ、自然流入によるものと考えられる。6層は褐色系の砂で、掘り方堆積土である。



第43図 S I 16竪穴住居跡平面・断面図



番号	住居 構造 形	出土位置	底 面 寸 法			外 面 調 整		内 面 調 整		残 存 分 量	分 類	備 考	参考文献
			口径	壁 高 度	底 高 度								
1	C-167 上階部 床	(15.6)	4.1	(0.26)	2.8	横ナゲ。削り。ミガキ		横ナゲ。ミガキ		1/3	E-8		31-12
番号	住居 構造 形	出土位置	底 面 寸 法	外 面 調 整	内 面 調 整	残 存 分 量	分 類	備 考	参考文献				
2	C-166 下階部 床	24.1	(8.6)	34.5	横ナゲ。削り	横ナゲ。ヘラナゲ。ナゲ	柱 根 部	F-25	炭化物付着	32-1			

第44図 S-116堅穴住居跡出土遺物

なお、当住居跡ではカマド痕跡の一部を確認したが、この部分の堆積土に灰、炭化物、焼土などカマドに由来するような堆積物は検出されなかった。

床面 ほかの住居跡で確認されているような、貼床と考えられる粘土層は検出しなかったが、掘り方堆積土とみられる6層の砂は締まりがつよく、この層そのものの上面が床面として機能していたか、あるいは直上に床面が存在した可能性が推測される。

柱穴 6層中および、当住居跡の範囲内と考えられる搅乱底面から、それぞれP1・2ピットを検出したが、これらのピットが柱穴に相当するものであるかどうか、判然としない。

カマド 北辺で、カマドの一部を確認した。片方だけ確認した袖は、5~10cm前後の高まりとして残存していて、灰黄色の粘土で築かれている。煙道部分の検出全長は84cmを計るが、西半部は失われている。

掘り方 壁に沿った部分が、周溝状に深く掘られている。掘り込みは非常に荒く、底面には著しい凹凸がみとめられる。確認面からの深さは、溝状の部分が25~32cm、それ以外では15~20cm前後となっている。

出土遺物(第44図)

堆積土、掘り方堆積土から土器が出土したが、図示をなし得たものは次の2点である。

1は平底の壺である。内面の調整が横ナゲ主体となっていて、黒色処理も施されていない点などに特長を見出すことができる。2は長胴形の壺であるが、体部外表面の最終調整は削り調整となっている。また、外表面の一部にター

ル状炭化物の付着がみとめられる。両資料ともに堆積土6層最下層、床面の直上からの出土で、当遺構に伴う資料である可能性が高い。

このほか、図化することのできなかった坏4点と、甕壺類159点が出土している。いずれも細片であるために詳しい特長等を知ることはできないが、ロクロ成形のものは含まれていない。須恵器は出土しなかった。

(4) S 118堅穴住跡

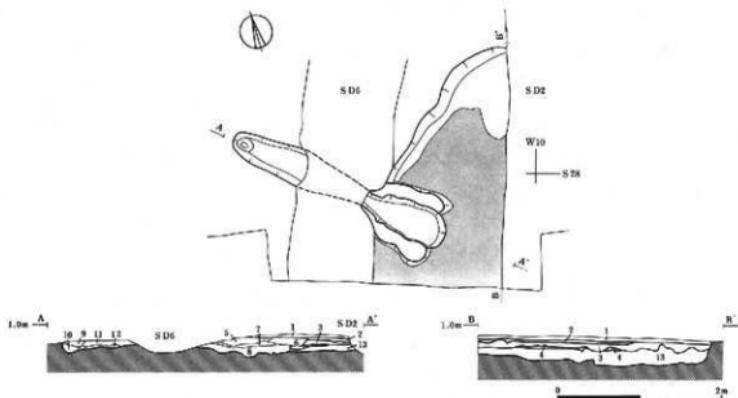
遺構状況(第45図)

遺存状況 3区S-28、W-10付近の、調査区南端で確認した。SD 2・6溝跡に大きく切られているほか、遺構の南半部は調査区外に延びていて、ごく部分的な検出である。そのため、全体的な形状は不明である。

縦道の中軸を基準とした南北方向は、N-50°-Wとなっている。

堆積土 全体で13層に区分された。1層は住跡廃絶後の堆積土とみられ、自然流入によるものと考えられる。2・4層は非常に類似していて、黄褐色・黄色の粘土である。ともに貼床の残存と考えられる。3層の砂は、4層から2層の床面へ、かさ上げする目的で入れられた可能性を推測しておきたい。炭化物や灰の混入がみとめられる。5～8層はカマドの堆積土である。砂を主体としているが、多量の灰、炭化物、焼土ブロックを含んでいる。9～12層は縦道の堆積土で、部分的に灰を含んでいる。13層は掘り方堆積土である。

床面 床面とみられる面を2面検出した。古い段階の貼床と考えられる4層(第2貼床)の粘土は、掘り方堆積土直上にみられるもので、平面図網かけ部分の範囲で、面的な広がりを確認した。この上部に3層を挟在して、新しい貼床の残存とみられる2層(第1貼床)が確認されるが、断片的な残存で、連続する面的な広がりとしては検出



層序	色調	種類	標 期	層序	色調	種類	標 期
1	10Y R 4/2 深黄褐色	砂	堆積土。	8	10Y R 7/1 黒色	灰	カマド堆積物。燒土をブロックできわめて多量に含む。
2	10Y R 5/3 にぶい黄褐色	粘土	第1貼床。全体的に黄褐色の砂がうすく混じる。	9	2.5Y 5/2 黑褐色	砂	縦道堆積物。層を多量に含む。
3	2.5Y 5/4 黄褐色	砂	水面かさ上げ。炭化物、灰を含む。	10	2.5Y 3/3 細オーライグレード	砂	縦道地耕物。
4	2.5Y 6/3 にぶい黄色	粘土	第2貼床。上面を黒色の灰がおおう。	11	2.5Y 3/3 細オーライグレード	砂	縦道地耕物。
5	2.5Y 3/2 黑褐色	砂	カマド堆積物。炭化物、焼土を小ブロックで含む。	12	2.5Y 4/3 オーライグレード	砂	縦道堆積物。灰を含む。
6	2.5Y 3/2 黑褐色	砂	カマド堆積物。焼土を小ブロックで含む。	13	2.5Y 4/3 オーライグレード	砂	掘り方堆積土。
7	2.5Y 2/1 黑褐色	砂	カマド堆積物。多量の灰及び焼土をブロックで多量に含む。				

第45図 S 118堅穴住跡平面・断面図

番号	住居番号	種類	出土位置	底面	側面	外表面調整	内面調整	底面	分類	参考	写真図版	
1	C-64	土器	柱穴	(13.4) (5.3) (0.69)	-	上ガマ 無色処理	ミガキ 無色処理	(1/3)	D-7 b②	22-24		
2	C-65	土器	柱穴	(13.2) (5.0) (0.38)	-	模ナデ、削り(密)	模ナデ、ミガキ	(0/8)	E-2 b	31-1		
3	C-159	土器	柱穴	(12.6) (4.0) (0.32)	(3.2)	模ナデ、削り 口縁部のみ塗処理	模ナデ、ミガキ(放射状) 塗処理	(0/4)	E-2 b	31-2 71-4		
番号	住居番号	種類	出土位置	底面	側面	外表面調整	内面調整	底面	分類	参考	写真図版	
4	C-52	土器	柱穴	(16.0)	-	-	模ナデ、ヘラナデ、削り	模ナデ、ヘラナデ	(0/7)	D-2	26-3	
5	C-61	土器	柱穴	(17.9)	-	-	模ナデ、削り	模ナデ、ヘラナデ	(0/8)	D-1		

第46図 S 118柱穴住居跡出土遺物

されなかった。

4層段階の床面上に3層の砂を入れてかさ上げし、この直上に2層の粘土を貼って、新たな床面を作りだしたものと推定しておきたい。

床面ではカマドの残存を検出したが、柱穴は確認することができなかった。

カマド 西辺で検出した。袖の残存は比較的良好だったが、煙道は取り付け部分から中央にかけて、SD 6溝跡に切られている。

袖は貼床の構築土とみられる2、4層と、きわめて類似した黄褐色系の粘土で作られていて、10cm前後の高まりとして検出した。先端の幅は65cmを計る。燃焼部分は長軸1.1m前後の窪みとして検出され、堆積土には多量の灰や炭化物のはか、焼土ブロックなどを含んでいる。煙道は、取り付け部分を欠いているが、推定全長1.76m、上幅は38~45cm前後となっている。また、先端部分には、煙出しとみられるピット状の落ち込みがみとめられる。

掘り方 荒く掘られていて、底面では大きな凹凸がみられる。2層上面からの深さは15~30cmを計る。なお、堆積土の砂は基本層序のそれと非常に類似していて、住居の構築時に一旦掘り起こした土砂を、再び埋め戻したものと推定される。

出土遺物（第46図）

堆積土や床面、かさ上げ土、カマド袖構築土、掘り方堆積土などから土師器が出土したが、多くが小さな破片で、図示することができたのは以下の5点である。

1・2は第2床面から出土した碗である。1は内外面とともにミガキ調整、黒色処理が施されている。2は全体的な器形や、内面のナデ調整などに特徴がみられる資料となっている。3の杯は第1床面から出土した。2同様に、内面の最終調整はナデ調整が主体となっているが、底部を中心に放射状のミガキ調整が加わっている。また、外面の一部と内面全面に塗処理が観察される。なお、外面で漆の付着がみとめられたのは、口縁部のごく一部分であるが、外面は全体的に磨滅が進んでおり、本来はさらに広い範囲に塗処理が施されていた可能性も考えられる。

4の甕は、第2床面からの出土である。口縁部の破片で詳細は不明だが、長胴形のものと推定される。5は鉢で、

カマド袖の構築土中から出土した。

このほか、図化することのできなかった杯9点と、壺瓶類144点が出土している。いずれも細片であるために詳しい特長等を知ることはできないが、ロクロ成形のものは含まれていない。なお、このうち杯片についてみると、5点には内面黒色処理がみとめられるが、いずれも床面から出土した他の4点は、2・3の資料同様に内面調整が横ナデで、黒色処理が施されていないものとなっている。

(15) S I 19竪穴住居跡

遺構状況(第47図)

遺存状況 3区N-1、W-23付近で確認した。S I 9竪穴住居跡に大きく切られていて、ごく部分的な検出にすぎないが、平面形や堆積土のありようなどから竪穴住居跡と考えておきたい。

全体的な規模や平面形は不明だが、北辺・東辺の検出全長はそれぞれ1.2・2.5mを計り、一ヵ所だけ検出した北東コーナー部分は、隅丸形を呈している。カマドや柱穴は、確認することができなかった。

東辺を基準とした南北方向は、N-41°-Eとなっている。

堆積土 全体で3層に区分された。1層は住居跡廃絶後の堆積土とみられ、自然流入によるものと考えられる。2層は黒褐色の砂を主体としているが、灰黄色の粘土ブロックが多量に混在しており、貼床の残存の可能性を考えておきたい。3層は掘り方堆積土である。

床面 掘り方埋め戻し土の直上に、粘土を貼って床面としたものと考えられ、検出範囲の全面で面的な広がりを確認した。貼床の残存とみられる2層には、全体的に多量の灰黄色粘土が混入しており、よく縮められている。

掘り方 比較的ていねいに掘られていて、底面に大きな起伏はみとめられなかつた。2層上面からの深さは15cm前後を計る。また、堆積土は基本層序の砂と同質のもので、住居構築時に掘りあげた土砂を、再び埋め戻したものと推測される。

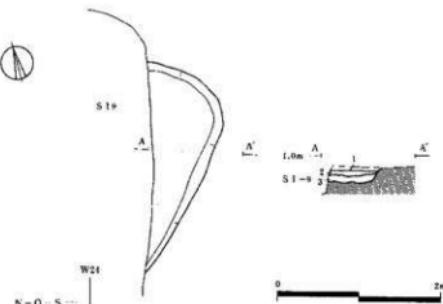
出土遺物

遺物は出土しなかつた。

(16) S I 21竪穴住居跡

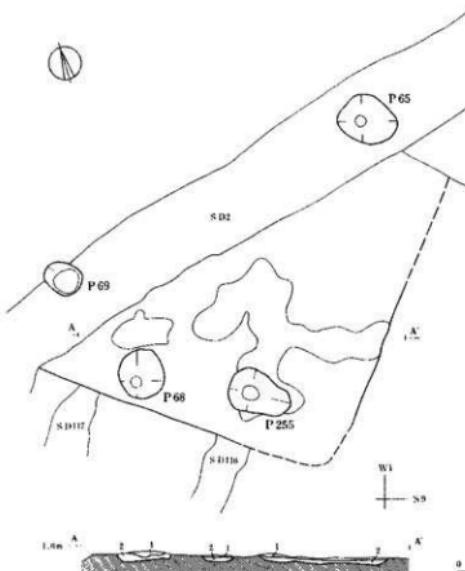
遺構状況(第48図)

遺存状況 3区S-6、W-3付近で確認した。SD116・117溝跡を切り、SD2溝跡、SK43土坑に切られてい る。



番号	色	調	種	相	番	色	調	種	相
1	2.5Y4/2	暗灰黒色	砂	堆積土	3	2.5Y4/4	オーブル褐色	砂	掘り方埋め土
2	2.5Y3/2	黒褐色	砂	粘土。灰黄色の粘土をブロックで多量に含む。土壤。					

第47図 S I 19竪穴住居跡平面・断面図



序号	色	調	種	面	色	調	種	面
1	2.5Y 4/2	蔚青色	砂	貼床残存？灰黄色の粘土をブロックで多量に含む。	2	2.5Y 5/3	蔚青色	砂

第48図 S I 21堅穴住居跡平面・断面図

柱穴の規模			柱間寸法		
ピットNo.	直 径 (m)	深 度 (m)	ピットNo.	柱間寸法 (m)	
P65	—	(約0.17)	P65～P255	3.56	
P69	(0.48×0.36)	(0.3)	P69～P255	2.64	
P255	0.76×0.52	0.3			

第49表 S I 21堅穴住居跡ピット計測表

*注 SD 2 埋跡底面で検出したP65ピットは、水没による崩落で拡大し、平面図は本来の規模をとどめているものではない。

全体的に削平がよんでいて遺存状況が悪く、壁の立ち上がりは南辺・東辺で部分的に検出したにすぎない。確認面は、断片的に残存する床面に達している。

部分的に検出した東辺は、さらに北東方向へ延びていたものと推定され、したがって北辺の位置は不明である。このような確認状況であるために、全体的な規模や形状を知ることはできない。なお、P65・68・69・255ピットは、検出位置から当住居跡に伴う可能性を想定したものである。カマドの痕跡は確認することができなかった。

東辺を基準にした南北軸の方向は、N-40°-Eである。堆積土 2層に区分された。1層は砂を主体としているが、灰黄色の粘土ブロックが多量に混在しており、貼床の残存と推定しておきたい。その直下2層は、掘り方堆積土である。

床面 掘り方埋め戻し土の直上に、粘土を貼って床面としたものと推測される。貼床の残存とみられる2層は全体的に多量の灰黄色粘土が混入しており、よく締められている。遺存状況は悪く、平面図網かけの範囲で検出した。

柱穴 P65・69・255ピットに柱穴の可能性を想定しておくが、特定は避けたい。なお、P65・69ピットでは、直径12cm前後の柱あたりを検出した。

掘り方 比較的ていねいに掘られていて、底面に大きな起伏はみとめられなかった。1層上面からの深さは7~10cm前後を計る。

出土遺物

掘り方堆積土中から土師器が出土した。器種別の内訳は壺1点、甕壺類10点である。いずれも磨滅が著しい細片で、特長など詳しい様相は知り得なかつたが、ロクロ成形のものは含まれていないようである。

(ii) S I 22 竪穴住居跡

遺構状況（第49図）

遺存状況 3区S-14、E-22付近で確認した。調査区東壁に接しており、可能な限りの拡張を行ったが、遺構の東半部はさらに調査区外に延びている。

他遺構との重複状況をみると、SK61・84土坑、SD123・129溝跡、および現代の水田暗渠排水管掘り方に切られている。このうち、SD123溝跡はこの住居跡の西辺部分を切っているが、深さが浅く、部分的な削平にとどまっている。また、この付近はごく最近の浅い工事搅乱がおよんでいて、当遺構も西半の上層部分がこれによって失われている。

西辺の検出全長は5.9mを計り、ここで北西・南西コーナーを検出しているが、SD123との重複によって大きく変形している。そのため、本来の形状を知ることは困難であるが、おおむね方形を基調としているものと推測される。

正確に本来の状況を示すものではないが、確認した西辺を基準にした南北軸の方向はN-19°-Eである。

堆積土 ビットや土坑を含めた堆積土は、全体で17層に区分された。1層は住居廃絶後の堆積土とみられ、自然流入によるものと考えられる。2・4層は様相が非常に類似していて、ともに黄色系の粘土であるが、貼床の残存とみておきたい。3層の砂は、4層から2層の床面へ、かさ上げする目的で人為的に入れられた可能性を推測しておきたい。5~11層はP1~4ビット、13~15層は土坑の堆積土である。12層は、17層上面に局地的にみられた灰層である。多量の炭化物や、焼土などの混入がみとめられる。16・17層は掘り方堆積土である。

床面 床面とみられる面を2面検出した。古い段階の貼床と考えられる4層（第2床面）の粘土は、掘り方堆積土直上にみられるもので、平面図網かけ部分の範囲で、面的な広がりを確認した。この上部に3層を挟在して、新しい段階の貼床の残存とみられる2層（第1貼床）がみとめられる。

4層段階の床面上に3層の砂を入れてかさ上げし、この直上に2層の粘土を貼って、新たな床面を作りだしたものと考えておきたい。

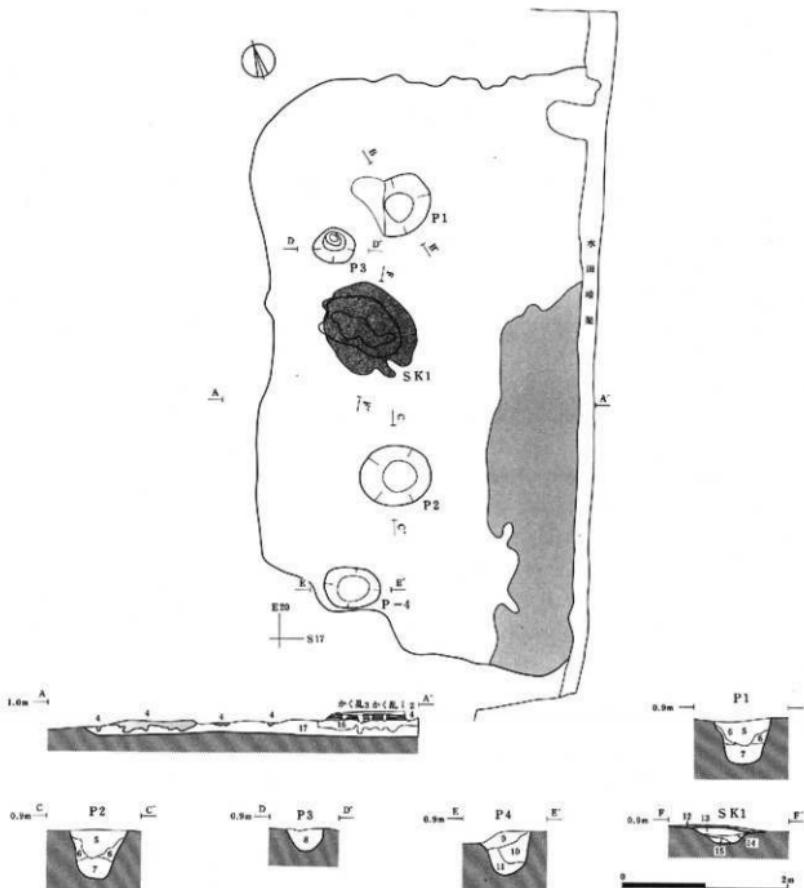
床面直下で4基のビットと土坑を1基検出した。このうちSK1土坑は、貼床とみられる4層直下の17層上面に局地的に分布する灰層（12層）の直下で検出した。堆積土中には、一般的にカマドの堆積物でみられるような炭化物、焼土、粘土ブロックなどを含んでいる。

柱穴 4基のビットを検出しているが、配置や堆積土の類似のありようなどから、柱痕跡は確認されなかつたものの、P1・2ビットに柱穴の可能性を想定しておきたい。P3・4ビットの性格については判然としない。

掘り方 ていねいな掘り込みが行われていて、底面で目立った起伏はみとめられず、ほぼ平らな状態となっていた。確認面からの深さは18cm前後である。なお、堆積土の砂は基本層序のそれと非常に類似しており、住居構築時に掘りあげた土砂を、再び埋め戻した可能性を考えておきたい。

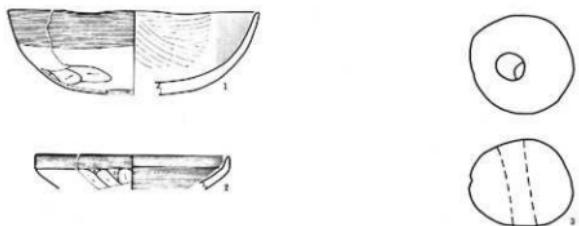
柱穴の規模			柱間寸法	
ビットNo.	直 径 値	深 さ 値	ビットNo.	柱間寸法 値
P 1	長軸0.80	0.52	P 1~2	3.32
P 2	0.88×0.76	0.60		

第17表 S I 22 竪穴住居跡ビット計測表



順序	色調	種類	備考	順序	色調	種類	備考
1	10YR 3/2 黒褐色	砂質シルト	堆積土。	9	10YR 4/2 深黒褐色	砂質シルト	P 4 地植物。
2	2.5YR 3/2 黄褐色	粘土	第1範疇。	10	10YR 5/3 淡い黄褐色	砂質シルト	P 4 地植物。炭化物を少量含む。
3	2.5Y 7/2 黄褐色	砂	底面から3.3上げ上。	11	2.5Y 3/1 黑褐色	砂	P 4 地植物。
4	10YR 7/2 にぶい黄褐色	粘土	第2範疇。上面の一帯に少數の炭化物を含む。	12	10YR 2/1 黑褐色	粘土	S K 1 堆積物。炭化物を多量に含む。底上 小粒を少量含む。
5	10YR 5/2 深黄褐色	粘土	第2範疇の底面から全体的に少數の砂を含む。	13	10YR 4/3 にぶい黄褐色	粘土質シルト	S K 1 堆積物。炭化物を多量に含む。 Tr. 炭化物を多量に含む。
6	2.5Y 5/3 黄褐色	砂質シルト	P 1. P 2 堆積物。褐色の粘土小粒を含む。 Tr. 炭化物を少量含む。	14	10YR 5/1 深褐色	粘土質シルト	S K 1 堆積物。炭化物を少量含む。
7	10YR 4/1 黄褐色	砂質シルト	P 1. P 2 堆積物。炭化物を少量含む。	15	2.5Y 7/4 淡褐色	砂	S K 1 堆積物。炭化物を少量含む。
8	10YR 4/2 深褐色	砂質シルト	P 3 堆積物。	16	2.5Y 7/4 淡褐色	砂	固り方理土。
				17	2.5Y 6/4 にぶい黄色	砂	固り方理土。

第49図 S 12堅穴住居跡平面・断面図



番号	住居番号	種別	測量形	出土位置	底面				外面調整		内面調整		現存	分類	参考	写真図版
					口径	底径	厚さ	壁厚/口径	底高	内面	外側	内面	外側			
1	C-183	土器器	杯	(15.3)	(5.2)	(0.34)	-	横ナデ、削り	1.5cm 黒色処理	1.5cm 1/5	D-8.b			23-11		
2	C-256	土器器	杯	(11.9)	-	-	-	横ナデ、削り	横ナデ	(1/16)	E-2.b					
番号	住居番号	種別	測量形	出土位置	底 幅	底 長	底 大径	孔 径	底 高	底 厚/底下径	重 量 (g)	分類	現存	参考	写真図版	
3	F-30	土製品	土玉		2.7	3.1	0.8	0.9	19.0	1	完形	ナデ、孔の内側にハケ目状の工具跡でねじって孔をあけたような痕跡あり。		43-3		

第50図 S I 22堅穴住居跡出土遺物

出土遺物（第50図）

堆積土、ピット堆積土、および掘り方堆積土から土師器、土製品が出土したが、これらのうち図示をなし得たのは以下の3点である。

1・2は土師器の杯で、ともに柱穴の可能性が考えられるP 1 ピット底面から、重なり合う状態で出土した。1は内面黒色処理が施されたものであるが、2は器形、調整技法ともに特徴のある資料である。内面の最終調整はナデ調整となっていて、黒色処理はみとめられない。

3は土製品の土玉である。堆積土1層からの出土である。

このほか、図化することのできなかった土師器杯10点・甕壺類198点が出土しているが、磨滅の進んだ細片が大部分となっていて、詳しい様相は知り得ないが、ロクロ成形のものは含まれていないようである。

④ S I 22堅穴住居跡

遺構状況（第51図）

遺存状況 4区S-52、E-5付近で確認した。この一帯ではS I 2・23・24の住居跡が密集して重複するが、当住居跡はS I 2堅穴住居跡を切っている。S I 24堅穴住居跡とはきわめて近接しているものの、重複関係はみとめられない。遺存の状況は比較的的良好である。

平面形はやや角ばった隅丸方形を示していて、四辺の検出全長は、北辺3.64m、東辺3.45m、南辺3.60m、西辺3.48mを計る。これから復元推定される床面積は、約12.5m²前後である。

南北軸の方向はN-30°-Eである。

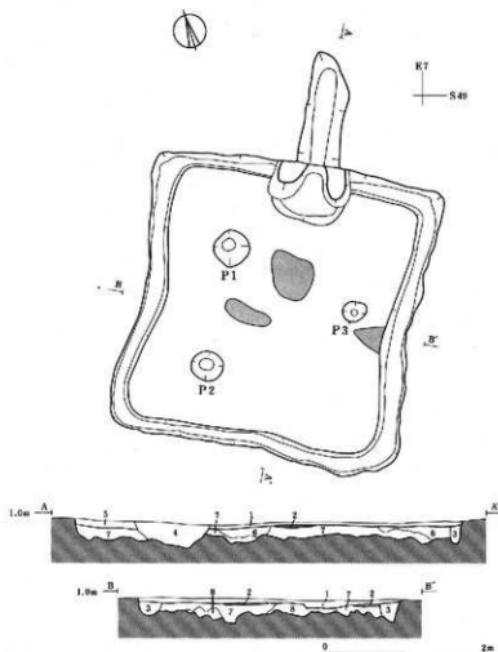
堆積土 ピット堆積土を除き、7層に区分された。1は住居廃絶後の堆積土とみられ、自然流入によるものと考えられる。2層は黒褐色の粘土層で、断片的な分布状況であるが、貼床の残存である可能性を考えておきたい。3層は周溝の堆積土である。4層はカマドの堆積土で、多量の灰や焼土を含んでいる。5層は粘土を主体とする煙道の堆積土で、やはり灰、焼土の混入がみとめられる。6・7層は掘り方堆積土である。

床面 掘り方埋め戻し土の上面に、2層の粘土を貼って床面を作りだしたものと推測されるが、遺存状況が悪く、平面図面かけの部分で、わずかに面的な広がりが確認されたにすぎない。

床面直下の掘り方堆積土上面では、周溝、P 1～3ピット、カマド痕跡などの施設を確認した。このうち周溝は、

柱穴の規模			柱間寸法		
ピットNo.	直 径 (mm)	深 さ (mm)	ピットNo.	柱間寸法 (mm)	
P 1	0.48-0.44	0.25	P 1 ~ P 2		1.5
P 2	0.40 × 0.36	0.2			-
P 3	0.32 × 0.24	0.18			-

第18表 S I 23堅穴住居跡ピット計測表



番号	色 調	層 級	圖	考	番号	色 調	層 級	圖	考
1	2.5Y3/2 黒褐色	砂	堆積土		5	2.5Y5/2 鮎灰褐色	粘土	堆積物。灰、泥土を含む。	
2	2.5Y3/2 黒褐色	シルト質砂上	疊床。全体的に少量の沢が刷り内れている。		6	2.5Y5/2 鮎灰褐色	砂	刷り万葉上。	
3	2.5Y3/2 黒褐色	砂	同疊床物。灰褐色の礫土を少しづつ含む。		7	2.5Y4/3 オリーブ褐色	砂	刷り万葉上。	
4	2.5Y4/2 灰灰褐色	砂	カマド堆積物。灰、礫土を多量に含む。						

第51図 S I 23堅穴住居跡平面・断面図

番号	分類	形	出土位置	外 壁 高 度				外 壁 調 整	柱 存 分類	備 考	写真図版
				左	右	高	壁				
1	C-433	上部壁 片		-	-	-	-	「内壁」 「外気層」	断片	D-4	
2	C-259	上部壁 片	(14.6)	-	-	-	-	「内壁」 「外気層」	(1/12)	E-2 a	

第52図 S I 23堅穴住居跡出土遺物

カマド部分を除いて四周を巡っており、上端幅18~36cm、深さは28cm前後を計る。

柱穴 挖り方堆積土上面でP 1~3の3基のピットを確認したが、いずれでも柱痕跡がみとめられなかったこと、また全体的な位置関係からも、これらが柱穴に相当するものかどうか、判断としない。それぞれのピットの規模等は下表のとおりであるが、堆積土はいずれも黒褐色を呈する砂の単層である。

カマド 北辺のほぼ中央部分で確認された。4~7cm前後の高まりとして検出された袖は黄褐色系の粘土で築かれていって、両袖の先端幅は75cmを計る。燃焼部分は、東西方向を長軸にとする楕円状の窪みとして検出され、堆積土には多量の灰や焼土がみとめられる。煙道の検出全長は1.4m、上端幅は45~50cm前後となっている。

掘り方 荒く掘られていて、底面には著しい凹凸がみとめられる。確認面からの深さは10~30cm前後である。なお、堆積土の砂は基本層序のそれときわめて類似していて、住居構築時に掘りあげた土砂を、再び埋め戻したものと推測される。

出土遺物（第52図）

堆積土やカマド堆積土、掘り方堆積土から土器が出土したが、図示をすることができたのは、次の2点だけである。

1は掘り方堆積土から出土した壺の口縁部破片であるが、内面にはヘラミガキと黒色処理が施されている。2も壺で、小破片であるために詳細は知り得ないが、器形や調整技法のありように特長のある資料である。内面の調整は横ナデで、黒色処理等はみとめられない。堆積土1層からの出土である。

なお、このほかに壺と甕蓋類がそれぞれ4点・75点出土した。磨滅の著しい細片が大半で、詳しい特長等の把握は困難であるが、ロクロ成形のものは含まれていない。なお、これらのうち壺片については、いずれもカマド堆積土から出土し、全点に黒色処理が観察され、このうち1点は内外面に施されている。

⑨ S 124竪穴住居跡

遺構状況（第53図）

遺存状況 4区S-48、E-8付近で確認した。この一帯ではS 12・23・24の住居跡が密集して重複するが、当住居跡はS 12竪穴住居跡を切っている。S 12竪穴住居跡とはきわめて近接しているものの、重複関係はみとめられない。

平面形は隅丸方形呈していて、確認面での四辺の検出全長は、北辺3.64m、東辺3.35m、南辺3.3m、西辺3.28mを計る。南北軸の方向はN-14°-Eである。

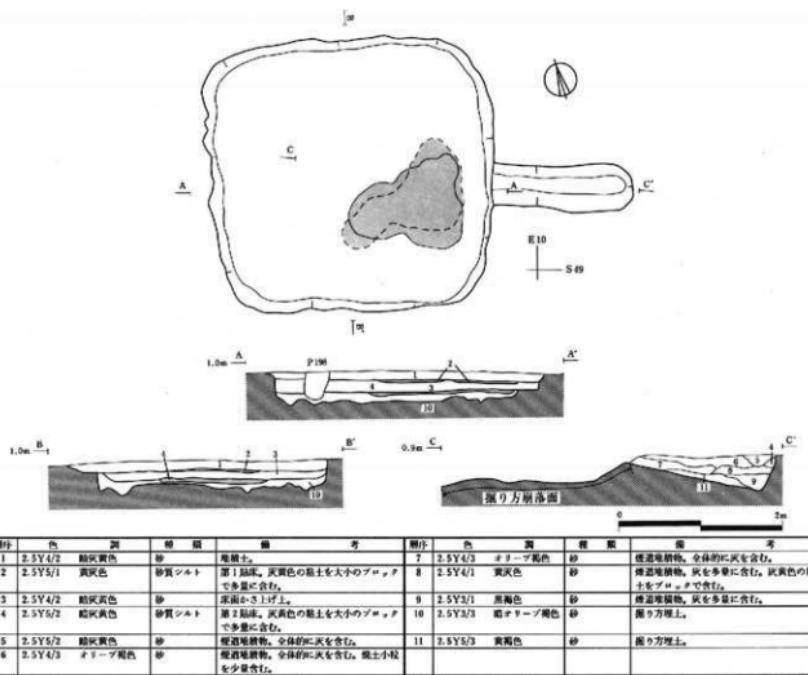
堆積土 全体で11層に区分された。1層は住居廃絶後の堆積土とみられ、自然流入によるものと考えられる。2・4層はともに灰黄色の粘土ブロックを多量に含むシルトで、断片的な分布ではあるが、貼床の残存とみておきたい。3層の砂は、4層から2層の床面へかさ上げする目的で、人為的に入れられた可能性を推測しておきたい。5~9層はカマド煙道の堆積土である。全体的に灰や焼土、粘土の小ブロックなどを含んでいる。10・11層は掘り方堆積土である。

床面 床面とみられる面を2面検出した。古い段階の貼床と考えられる4層（第2床面）は、掘り方堆積土直上にみられるもので、平面図実線の範囲で、面的な広がりを確認した。この上部に3層を挟在して、新しい段階の貼床の残存とみられる2層（第1貼床）が、破線の範囲でみとめられる。

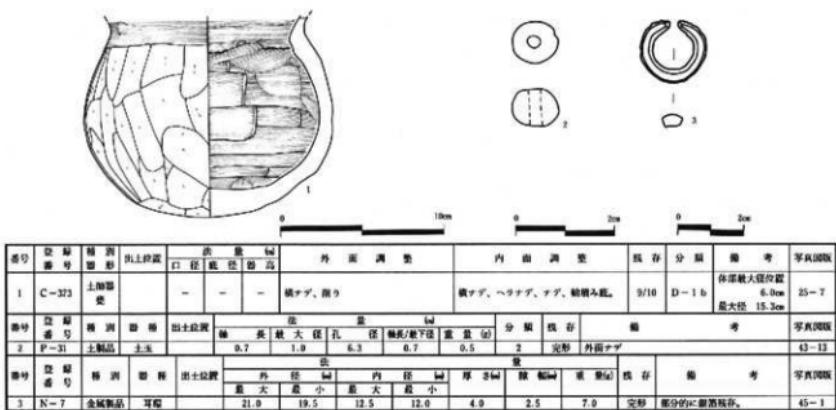
4層段階の床面上に3層の砂を入れてかさ上げし、この直上に2層を貼って、新たな床面を作りだしたものと考えておきたい。

なお、床面やその直下層で、周溝、柱穴、カマドなどの施設は確認されなかった。

カマド 袖、燃焼部の痕跡は確認することができなかったが、東辺で煙道の掘りこみを検出した。後述するが、当住居跡では、第2床面から第1床面への更新に伴って、北・東辺に拡張の痕跡がみとめられる。袖等の施設を検出



第53図 S124堅穴住居跡平面・断面図



第54図 S.I.24豎穴住居跡出土遺物

することができなかつたため、いずれの床面の段階に伴うものか、判断し難い。

煙道の検出全長は1.76m、上端幅は50~58cm前後となっている。掘りこみは先端部分に向かって深くなり、最深で45cmを計る。

掘り方と拡張 断面図に示したように、北・東辺に拡張の痕跡がみとめられる。拡張は第2床面から第1床面の更新時になされたようで、北辺では約20cm、東辺では約25cmの拡大を図っている。拡張時の掘り方は浅く、確認面からの深さは20cm前後である。

第2床面に伴う掘り方は非常に荒く掘られていて、底面には著しい凹凸がみとめられる。確認面からの深さは、30~38cm前後となっている。

出土遺物（第54図）

堆積土、床面、掘り方堆積土などから、土師器、土製品、金属製品が出土したが、図示することができたのは次の3点である。

1は、第1床面から出土した土師器の壺であるが、口縁部分を欠いている。2は小型の土玉で、堆積土1層から出土した。

なお、このほか土師器片8点、甕壺類の破片98点、および須恵器甕片2点が出土しているが、磨滅した細片が大部分で、特長など詳しい様相を把握することはできなかつた。なお、これらのうち土師器には、ロクロ成形のものは含まれていないようである。また、土師器片には全点に内面黒色処理がみとめられる。

26 S 1 25堅穴住居跡

遺構状況（第55図）

遺存状況 4区S-42、E-8付近で、調査区北辺に接して検出した。遺構の北半は調査区外に延びているほか、SD11溝跡、SK26土坑やこの付近に集中するピット群の、8基のピットに切られている。壁の立ち上がりはやや不明瞭であったものの、柱穴やカマドなどの遺存状況は比較的良好である。

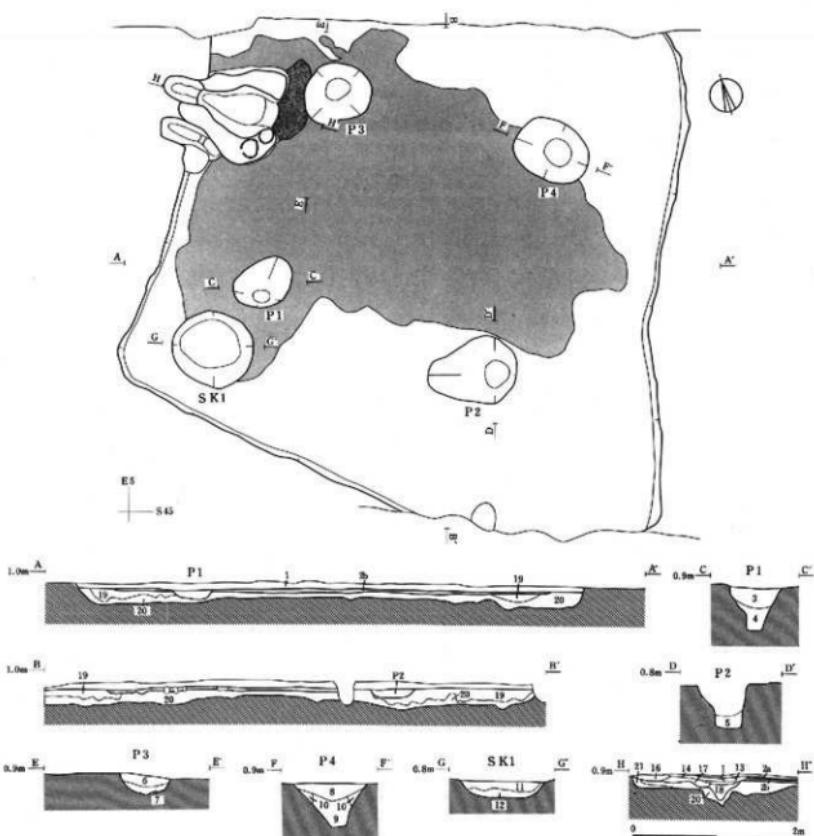
部分的な検出であり、全体の形状は不明確であるが、平面形は不整形な隅丸方形を呈している。四辺のいずれも完全に検出することはできなかつたが、南・東辺延長から推定される南辺の長さは6m前後である。

南北軸の方向はN-35° E前後である。

堆積土 全体で7層に区分された。1層は住居廃絶後の堆積土で、自然流入によるものと考えられる。2b層は黄色の粘土層で、層厚は5~8cm前後である。部分的な分布となっているが、貼床の残存である可能性が考えられる。2a層は、2b層の直上にのる黒色の灰層である。平面図濃い網かけ部分のカマド前面にのみ、局地的に分布する。3~10層は柱穴とみられるP1~4ピットの堆積土である。砂を主体とするが、カマドに近接するP3の堆積土には灰や焼土が混入する。11~12層はSK1土坑の堆積土で、全体的に炭化物・焼土や粘土の小ブロックを含んでいる。13~18層はカマド・煙道の堆積土である。灰・炭化物・焼土が多く混入するが、13層・14層では、それぞれ灰・焼土ブロックが特に多量に集積している。19~20層の砂は、掘り方堆積土である。

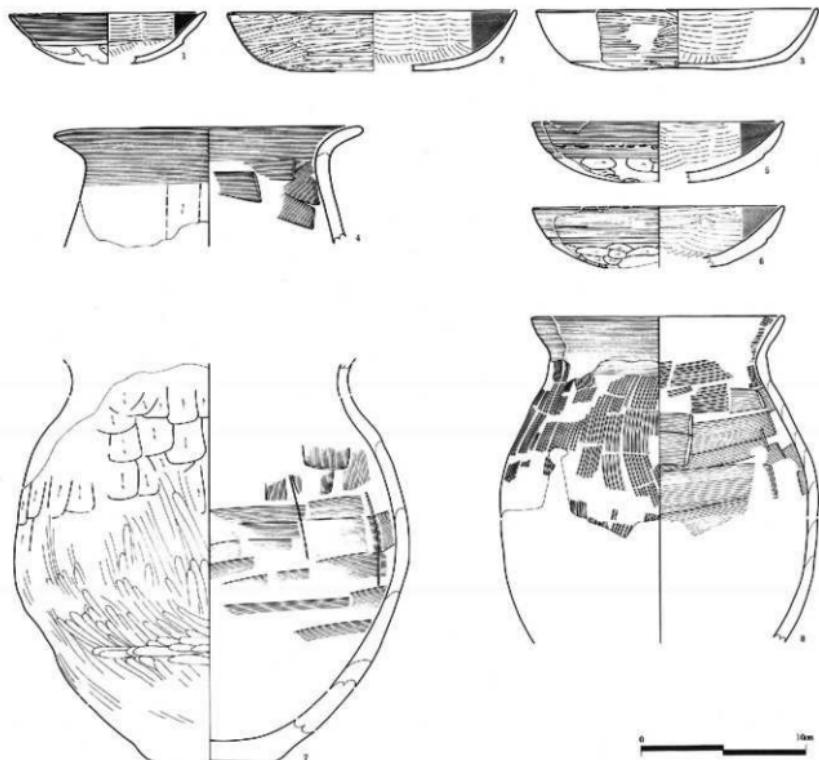
床面 掘り方埋め戻し土の上面に、2b層の粘土を貼って床面を作り出したものとみられるが、削平を受けていて、平面図網かけ部分のように面的広がりを確認した。貼床に使われた黄色の粘土は粒子が細かく、全体的にうすく細砂が混入しており、硬く締まっている。

床面では4基のピット、カマドのはか土坑を1基検出した。土坑は南西コーナー付近で確認され、平面形は1×0.9mほどの、整った円形を呈する。深さは20cm前後と浅い。堆積土は粘土と砂に区分されるが、層中にカマド堆積土中で検出されたものと類似した、炭化物や焼土が混入する。出土遺物はなく、遺構の性格は判然としないが、カマドとの関連も推定される。また、カマドの前面では、これに由来するものと考えられる黒色灰の分布域がみられた。



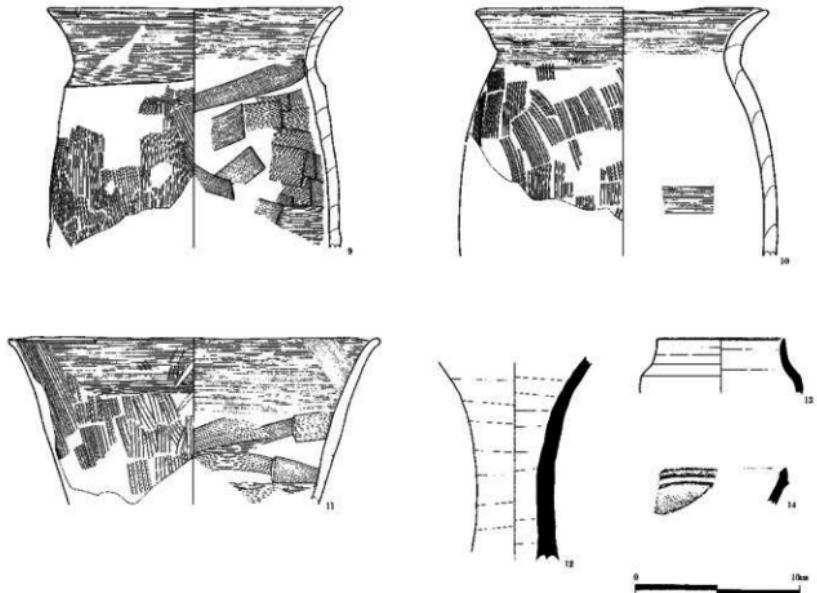
層序	色	調	標	圖	考	層序	色	調	標	圖	考
1	2.5Y4/1	黄灰色	砂質シルト	P1	堆土。	11	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粘土	SK1	無機物、炭化物、燒土を含む。灰黃色の粘土を大小のブロックで含む。
2a	10YR1.7/1	黑色	灰		床面上の灰層。	12	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂		SK1 無機物、炭化物、燒土を含む。灰黃色の粘土を大小のブロックで含む。
2b	2.5Y6/3	にじみ黄色	燒土		燒土。全体的に砂がうすく混入。	13	10YR5/1	褐灰色	シルト		カマド無機物、灰をきらめかせる中に含む。炭化物、燒土を含む。其他の焼土を小ブロックで含む。
3	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質粘土	P1 地面物	灰黃色の粘土を小ブロッケで含む。	14	10YR6/2	灰灰黄色	シルト		カマド無機物、灰をきらめかせる中に含む。灰を含む。燒土を含む。其他の焼土を小ブロックで含む。
4	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	P1 地面物。		15	10YR4/1	暗灰黄色	シルト質粘土		無機物、炭化物、燒土を少量含む。
5	2.5Y3/2	黒褐色	砂	P2 地面物。	炭化物を少量含む。	16	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂		無機物、炭化物、燒土を含む。
6	2.5Y4/1	黄灰色	砂質シルト	P3 地面物。灰および地面上小粒を少量含む。		17	2.5Y2/1	黑色			無機物、炭化物、燒土を含む。灰黃色の粘土を小ブロックで含む。
7	2.5Y4/1	黄灰色	砂質シルト	P3 地面物。		18	2.5Y2/1	灰黄色	砂質シルト		カマド無機物。灰を含む。炭化物および燒土を含む。
8	2.5Y4/1	黄灰色	砂	P4 地面物。	炭化物および燒土を少量含む。灰黃色の粘土を小ブロックで少量含む。	19	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂		鐵器刀劍上。
9	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	P4 地面物。		20	2.5Y5/4	黄褐色	砂		
10	2.5Y5/3	黄褐色	砂	P4 地面物。							

第55図 S125堅穴住居跡平面・断面図



番号	袋 編 號	種 別 類	出 土 位 置	底 盤 高 度			外 面 調 整	内 面 調 整	残 存	分 類	備 考	写真図版		
				口 径	器 高	器 口 底 高								
1	C-177	土器 盤 杯		(12.0)	(3.2)	(0.27)	(1.3)	横ナデ、削り	上ガキ 黒色處理	(1/4)	D-4			
2	C-178	土器 盤 杯		(17.0)	(3.6)	(0.22)	-	ミガキ	上ガキ 黒色處理	1/4	D-9 a	23-19 70-5		
3	C-181	土器 盤 杯		(17.2)	3.7	(0.22)	-	ミガキ	上ガキ	(1/8)	D-9 a			
4	C-370	土器 盤 杯	出土位置 上段	(18.0)	-	-	横ナデ、削り	横ナデ、ヘラナデ、ナデ	(4/5)	D-2		26-4		
5	C-179	土器 盤 杯		(15.3)	(4.0)	(0.26)	(1.7)	横ナデ、削り、輪製小窓	上ガキ 黒色處理	1/4	F-2 a		22-2	
6	C-180	土器 盤 杯		(15.3)	(3.6)	(0.25)	(1.6)	横ナデ、削り、輪製小窓	上ガキ 黒色處理	1/6	F-2 a			
7	C-377	土器 盤 杯	出土位置 L1	口 径	底 盤 高	器 口 底 高	外 面 調 整	内 面 調 整	残 存	分 類	備 考	写真図版		
8	C-362	土器 盤 杯		-	7.0	-	削り、ミガキ	ヘラナデ、削減	(4/5)	F-1	体部最大径位置 13.6cm 最大径 24.0cm 外面部に削あ り、最大径位置 (19.3cm)	33-2		
				(15.4)	-	-	横ナデ、ヘケ目	ハナデ、ヘラナデ、ナデ	(1/3)	F-1	32-3 69-1			

第56図 S1 25穴住居跡出土遺物(1)



番号	目録番号	種類	出土位置	性質			外面調査	内面調査	残存	分類	備考	写真図版	
				上	中	下							
9	C-363	土器部 基盤	(上)655	(18.0)	-	-	横ナゲ、ハケ目	横ナゲ、ヘラナゲ	(2/3)	F-2 a	板面に波	33-1	
10	C-372	土器部 基盤	(上)655	(17.8)	-	-	横ナゲ、ハケ目、輪廻み底	横ナゲ、ヘラナゲ	(1/2)	F-2 b	板面に波	33-3	
11	C-361	土器部 基盤	(上)655	(22.7)	-	-	横ナゲ、ハケ目	横ナゲ、ヘラナゲ	(1/5)	F-1		33-4	
12	E-22	土器部 基盤		-	-	-	ロクロナゲ。一部に灰釉付着。	ロクロナゲ	薄片	(4/5)	1		37-1
13	E-20	土器部 基盤		(7.8)	-	-	ロクロナゲ	ロクロナゲ	(1/8)	3			
14	E-36	土器部 基盤		-	-	-	ロクロナゲ、沈殿文、疊層文	ロクロナゲ	薄片	1			37-4

第57図 S 125堅穴住居跡出土遺物(2)

柱穴の規模			柱間寸法		
ピットNo.	直径 mm	深さ mm	ピットNo.	柱間寸法 mm	柱間寸法 mm
P 1	0.75×0.55	0.5	P 1～P 2	3.0	
P 2	1.1×0.8	0.5	P 3～P 4	2.85	
P 3	0.8×0.7	0.25	P 1～P 3	2.65	
P 4	0.95×0.7	0.55	P 2～P 4	2.8	

第19表 S 125堅穴住居跡柱穴計測表

柱穴 床面で検出したP 1～4のピットが、柱穴に相当するものと考えられるが、柱痕跡はみとめられなかった。カマド 西辺で検出したが、柱穴など全体的な配置からみて、中央よりやや北方向に寄った位置に作られたものとみられる。また、カマド袖に切られる燃焼部と煙道の一部を検出したことから、当住居跡ではカマドの更新がなされたものと判断される。

残存する袖部は双方とも、貼床の粘土と類似した灰黄色系の粘土で築かれており、下端幅は30～45cm、残存高8cm前後、先端部は85cmとなっている。また、南側袖の構築土中には、2点の土器器窓がほぼ直立の姿勢で据えられ

ていた。燃焼部は $1 \times 0.6\text{m}$ の梢円状の窪みとして検出され、底面は焼土化している。煙道は削平を受けたものとみられ、検出全長は45cmと短く、上幅は30cm程度である。

古い段階のカマド痕跡では、検出全長50cmほどの煙道と、燃焼部の一部を確認した。この部分の堆積土は当住居跡堆積土1層で、灰や炭化物、焼土ブロックなどは検出されなかったが、燃焼部底面では焼土化がみとめられた。
出土遺物（第56・57図）

床面やカマド袖構築土、ピット堆積土、掘り方堆積土、堆積土などから土器類、須恵器が出土した。

第56図1～3・5・6は土器類の杯であるが、すべて堆積土中から出土した。1は体部内外面に段がみとめられる。2・3は段、沈線とも持たない平底の資料で、ともに内外面の最終調整はヘラミガキとなっており、3では黒色処理が施されていない。5・6は体部外面に沈線が巡っている。

第56図4・7・8、第57図9・10は土器類の壺である。第56図4・第57図10はカマド袖構築土中、第56図8は床面、7は柱穴のP3ピット堆積土から出土している。

第57図12は須恵器の長頸瓶であるが、頸部破片で詳細は不明である。13は須恵器の壺である。掘り方堆積土から出土した。小型で、短い頸部に特徴がある。5は床面から出土した須恵器で、ごく小片であるものはそうとみられる。

なお、このほか土器類片15点、土器類壺類とみられる破片490点が出土しているが、磨滅した細片が大部分で、特徴など詳しい様相を把握することはできなかった。なお、これらのうち土器類には、ロクロ成形のものは含まれていないようである。また、土器類には全点に内面黒色処理がみとめられる。

2) S 126堅穴住居跡

遺構状況（第58図）

遺存状況 3区S-7、E-22付近で確認した。調査区東辺に接しており、遺構の東半部はさらに調査区外に延びている。S 122堅穴住居跡の北に隣接して位置し、他遺構との重複はない。

部分的な検出であるため、全体の形状は知り得ないが、平面形は隅丸の方形を基調としていて、完全に検出した西辺の長さは4.56m、南北軸の方向はN-15°-Eである。

壁の立ち上がりは比明瞭であるほか、カマドも確認されるなど、遺存状況は比較的良好であるが、柱穴は検出することができなかった。

堆積土 東西A-A'、南北B-B'ライン上の堆積土は、全体で6層に区分される。

1・2層は住居跡廃絶後の堆積土とみられ、自然流入によるものと考えられる。3・4層はカマドの堆積土で、このうち4層には炭化物と焼土が多量に混ざっている。5層は黄色系の砂質シルトであるが、灰黄色の粘土ブロックを含んでおり、貼床の残存である可能性も推測されるが、判然としない。6層は掘り方堆積土である。

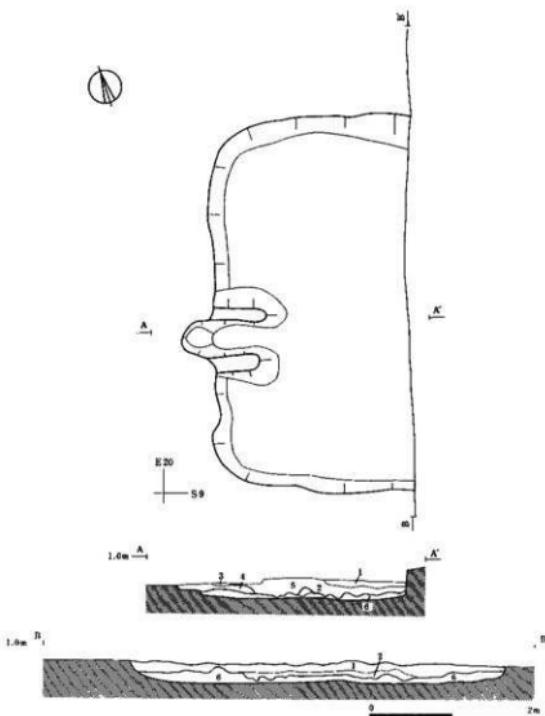
なお断面図では示していないが、カマド袖の構築土は全体的にうすく細砂が混入する、黄灰色の粘土である。
床面 粘土などによる貼床はみとめられず、床面の特定はなし得なかったものの、他住居跡での事例などから、掘り方堆積土直上のところどころ分布する堆積土5層に、貼床の残存である可能性を推測しておきたい。

床面ではカマドを検出したが、柱穴や周溝などの施設は確認することができなかった。

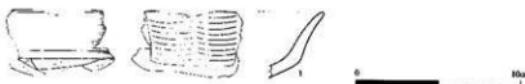
カマド 西辺の、中央よりやや南寄りで確認した。

残存する袖部は、双方ともに黄灰色の粘土で塗かれており、下端幅は50～40cm、残存高18cm前後、先端幅は80cmとなっている。煙道は削平を受けたものとみられ、検出全長は35cmと短く、上幅は40cm程度である。また、燃焼部底面では焼土化がみとめられた。

掘り方 ていねいな掘り込みがなされており、底面に目立った起伏はみとめられない。確認面からの深さは20～30cm前後である。



第58圖 S-126堅穴住居跡平面・斷面圖



番号	位 置 基 本 規 格	出力位置	生 産 規 則			外 面 調 整	内 面 調 整	被 在	分 類	備 考	実用範 囲
			D	径 高 さ 幅 厚	△ □ △/□ △/厚						
1	C-434 千枚板 床	-	-	-	-	被ナ、削り	△/厚 黒色化粧	被庄	D-3		

第59圖 S.I.26號穴住居跡出土遺物

出土遺物（第59図）

堆積土より土師器が出土したが、かろうじて図示をなし得たのは次の1点のみである。

1は堆積土から出土した土師器の环である。口縁部の小破片で、詳細は知り得ないが、体部外面に段がみとめら

れ、内面には黒色処理が施されている。

このほか堆積土中より、土器器の甕壺類とみられる破片が11点出土した。いずれも小片であるため、詳しい特長の把握はできなかったが、ロクロ成形のものは含まれていないようである。

2. 挖立柱建物跡

掘立柱建物跡は合計7棟確認したが、調査区ごとの内訳は3区2棟、4区は4棟である。

なお、これらの建物跡を大別すると次のとおりである。



第60図 掘立柱建物跡位置図

• SB 1 掘立柱建物跡

• SB 2・3 掘立柱建物跡 同時期

• SB 4～7 掘立柱建物跡 SD 2 溝跡に伴う建物群

(1) SB 1 掘立柱建物跡

造構状況（第61図）

確認状況 3区S-17、W-24付近で確認した。小溝遺構群II群に切られていた。

規模・方向 桁行1間、桁行2間の南北棟で、柱列の総長はそれぞれ1.5・3.37mを計る。南北の方向はN-38°-Wである。

柱穴 6基の柱穴で構成される。それぞれの状況は下表のとおりである。

出土遺物（第62図）

6基すべての柱穴から、木製品が出土した。

1～7は柱材とみられる木製品である。いずれも底面に接して検出されたが、P 6 ピットでは3・5の2本が確認され、3の材は5に添うような状態で、底面から離れて出土した。いずれも芯を持つ丸太材となっていて、1、2では底面に加工痕がみとめられる。樹種はすべてクリに同定されている。

土器など、他の遺物は出土しなかった。

(2) SB 2 掘立柱建物跡

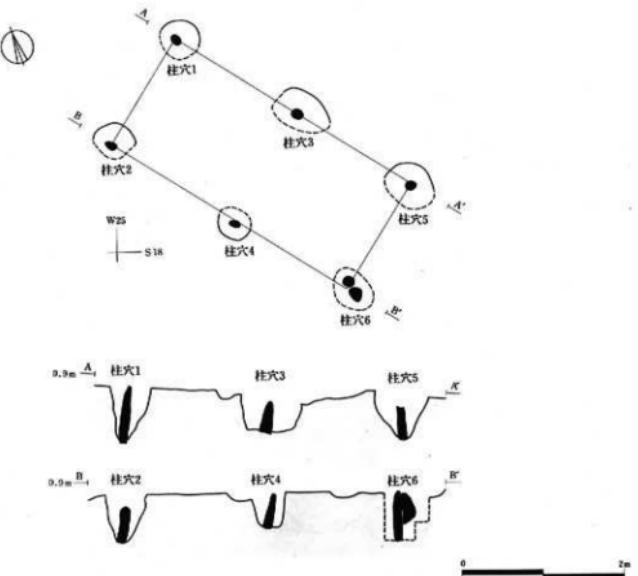
造構状況（第63図）

確認状況 4区S-60、E-1付近で確認した。S I 1 竪穴住居跡を切り、SD 4 溝跡とSR 1 河川跡に切られている。

規模・方向 東西の梁行2間、南北の桁行3間の総柱建物で、柱穴の中心を基準とした柱列の長さは、東・西辺がともに4m、南・北辺は6.3mを計り、規格性の高い柱配置がうかがわれる。

No.	P 1		P 2		P 3		P 4		P 5		P 6	
項目	掘り方	柱跡跡	掘り方	柱跡跡	掘り方	柱跡跡	掘り方	柱跡跡	掘り方	柱跡跡	掘り方	柱跡跡
形状	円形	-	椭円形	-	椭円形	-	円形	-	円形	-	椭円形	-
大きさ	0.51×0.5	-	0.7×0.5	-	0.65×0.5	-	0.45×0.45	-	0.42×0.36	-	0.57×0.42	-
深さ	0.67	-	0.44	-	0.58	-	0.57	-	0.43	-	(0.58)	-

第20表 SB 1 掘立柱建物跡柱穴観察表



第61図 SB 1 据立柱建物跡平面・断面図

No.	P 1		P 2		P 3		P 4		P 5		P 6	
	掘り方	柱痕跡										
形状	椭円形	-	円形	-	円形	-	椭円形	-	円形	-	方形	-
大きさ	0.97×1.27	-	1.09×1.21	-	0.85×0.79	-	0.91×1.45	-	0.61×0.67	-	0.85×1.03	-
深さ	0.36	-	0.36	-	0.48	-	0.42	-	0.12	-	0.35	-
No.	P 7		P 8		P 9		P 10		P 11		P 12	
項目	掘り方	柱痕跡										
形状	円形	-	円形	-	円形	-	椭円形	-	方形	-	円形	-
大きさ	0.85×0.73	-	0.42×0.48	-	0.42×0.79	-	0.79×1.33	-	0.52×0.73	-	0.79×0.85	-
深さ	0.48	-	0.15	-	0.55	-	0.55	-	0.48	-	0.45	-

第61表 SB 2 据立柱建物跡柱穴観察表

東西の方向はN-70°-Wである。

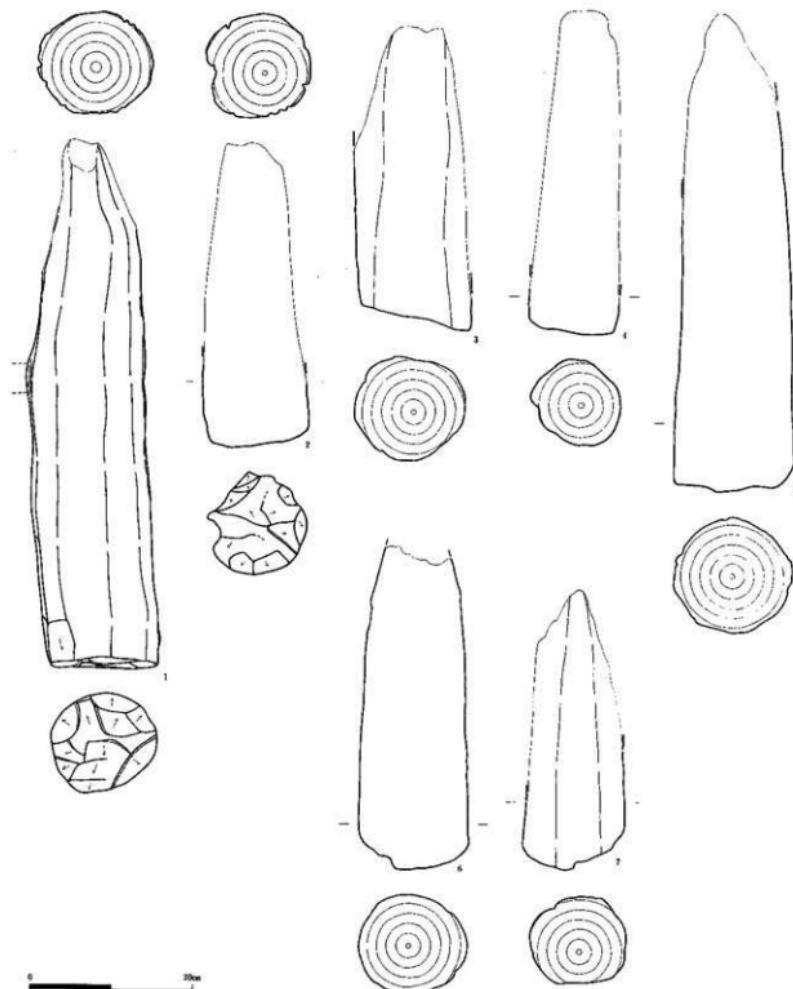
柱穴 P 1 ~ 12の12基の柱穴で構成される。それぞれの状況は上表のとおりである。

出土遺物（第65図）

柱穴の底面および堆積土より、土器と木製品が出土した。

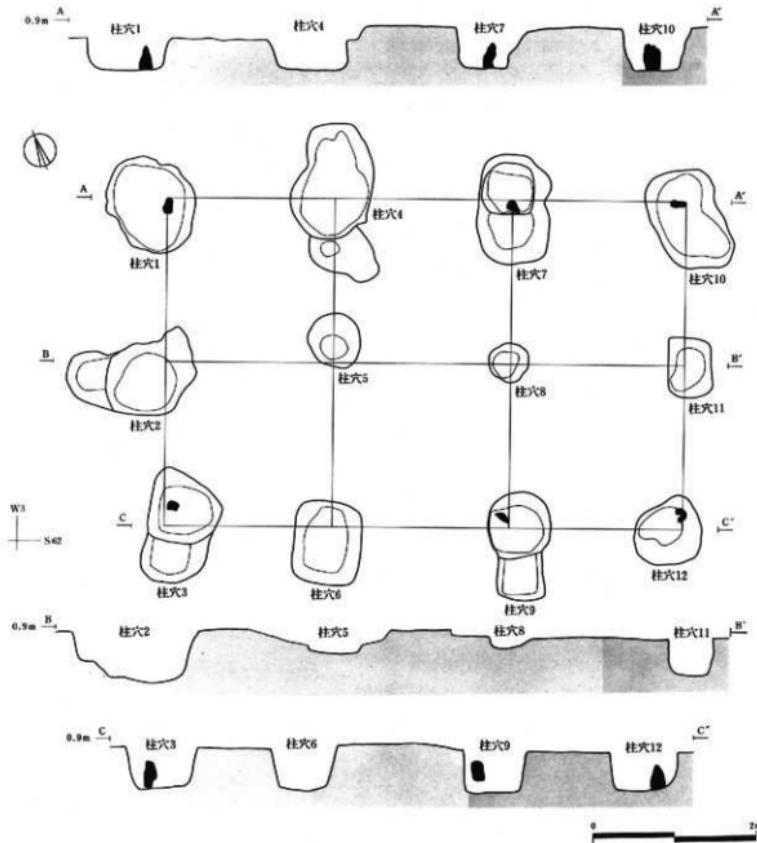
1、2はともに土器の壊である。1はP 1柱穴の堆積土より出土した。口縁部の小破片で、詳しい様相を知り得ないが、内外面に段や稜はみられない。内面黒色処理が施されている。2はP 4柱穴のほぼ底面より出土した。器形や調整技法に特長がみられる。内外面の全面に漆処理が施されている。

3は木製品で、柱材とみられる。P 9柱穴底面には直立する状態で出土した。芯を持つ丸太材で、樹種はクリに同定された。なお、このほかP 1・3・4・12柱穴底面からも柱材と考えられる木製品が出土したが、検出後の劣化が著しく、詳しい観察や図化をすることはできなかった。P 1・4・12柱穴出土材は樹種同定を実施したが、



番号	材種	解説	特徴	器種	出土位置	樹種	高さ	木取り	底面寸			写真図版
									長	幅	厚	
1	L-294	木製品	柱材	アリ	丸太村	—	(64.6)	14.2	44.9	圓形小孔、既存木口面に切断加工面あり、上端部欠損。	51-1	
2	L-320	木製品	柱材	アリ	丸太村	—	(36.7)	(13.0)	(43.0)	既存木口面に切断加工面あり、上端部欠損。	52-2	
3	L-298	木製品	柱材	アリ	丸太村	—	(36.7)	(13.5)	(41.0)	J型欠損。	52-5	
4	L-297	木製品	柱材	アリ	丸太村	—	(26.0)	(11.0)	(33.5)	既存木口面に切断加工面あり、上端部欠損。	52-6	
5	L-295	木製品	柱材	アリ	丸太村	—	(58.1)	14.5	44.9	上端部欠損。	51-2	
6	L-296	木製品	柱材	アリ	丸太村	—	(39.1)	13.2	40.9	既存木口面に切断加工面あり、上端部欠損。	52-3	
7	L-299	木製品	柱材	アリ	丸太村	—	(33.9)	11.7	26.9	上端部欠損。	52-4	

第62図 S B I 据立柱建物跡出土遺物



第63図 S B 2 挖立柱建物跡平面・断面図

いざれもクリに同定された。

これ以外の出土遺物はない。

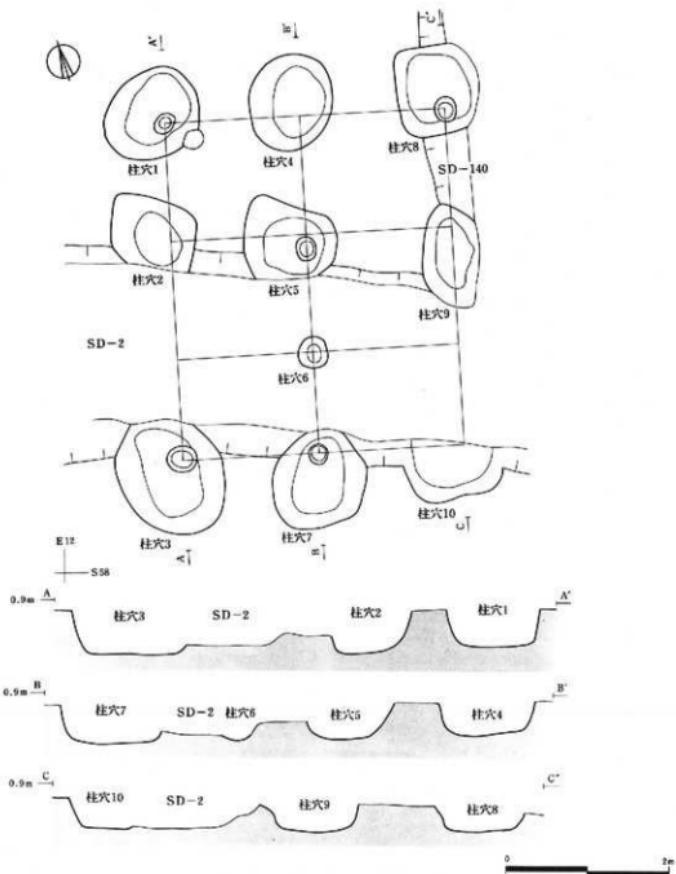
(3) S B 3 挖立柱建物跡

遺構状況（第64図）

確認状況 4区 S - 55、E - 15付近で確認した。SD 2・61・140溝跡に切られている。

後述するように10基の柱穴を確認したが、うちSD 2溝跡底面で確認したP 7柱穴は、堆積土の状況や位置関係から、この建物に伴なう柱穴と判断した。本来はこの東西の延長線上、東辺ではP 6・10の間、西辺ではP 4・8の間に柱穴が存在した可能性が高いものと推測される。

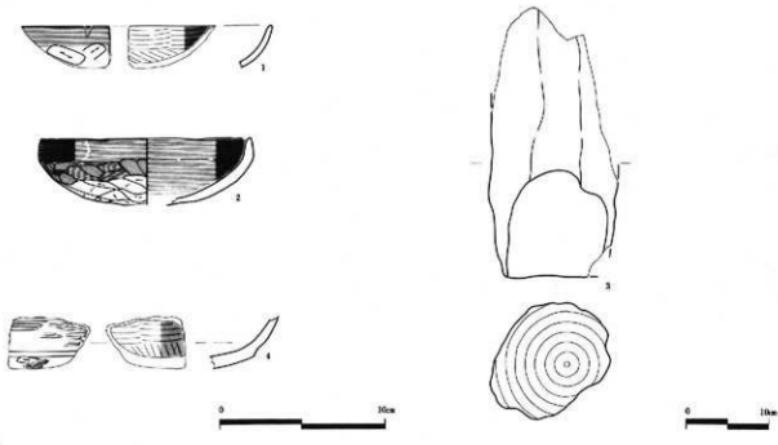
なお、建物跡は柱穴や全体的な規模、方向や柱穴堆積土の共通性から、S B 2 挖立柱建物跡との関連が考えられる。
規模・方向 実際に確認することができたのはP 1～10の柱穴であるが、本来は南北の梁行2間、東西の桁行3間の総柱建物と推定される。柱穴の中心を基準とした柱列の長さは、南・北辺がともに3.4m、東・西辺は4.1mを計



第64図 S B 3 据立柱建物跡平面・断面図

No.	P 1		P 2		P 3		P 4		P 5		P 6	
項目	掘り方	柱軌跡	掘り方	柱軌跡	掘り方	柱軌跡	掘り方	柱軌跡	掘り方	柱軌跡	掘り方	柱軌跡
形状	筋内形	筋内形	筋内形	筋内形	—	筋内形	内形	筋内形	—	内形	筋内形	内形
大きさ	1.09×1.21	0.21×0.30	1.03×1.21	—	1.27×1.51	0.36×0.33	1.03×1.21	—	1.15×1.03	0.21×0.30	0.36×0.39	—
深さ	0.45		0.48	—	0.55		0.39	—	0.42		0.09	—
No.	P 7		P 8		P 9		P 10					
項目	掘り方	柱軌跡	掘り方	柱軌跡	掘り方	柱軌跡	掘り方	柱軌跡	掘り方	柱軌跡	掘り方	柱軌跡
形状	筋内形	内形	方形	内形	筋内形	—	内形	—	内形	—	内形	—
大きさ	1.15×1.27	0.21×0.24	0.97×1.09	0.24×0.30	0.67×1.33	—	1.21×—	—	—	—	—	—
深さ	0.48		0.30		0.36	—	0.36	—	—	—	—	—

第22表 S B 3 据立柱建物跡柱穴観察表



SB 2													
番号	柱 番 号	種 類 形 状	出土位置	柱 直 径 (cm)				外 面 調 査	内 面 調 査	性 質	分 類	備 考	写真回数
				口 径	高 さ	厚 さ	段 数						
1	C-429	土器部 片		-	-	-	-	横ナデ、削り	イガタ 黒色処理	破片	D-8 b		
2	C-260	土器部 片	(12.9) (4.2) (0.33) (2.9)					横ナデ、ナデ、削り	横ナデ	1/4	E-2 a		30-8 71-5
番号	柱 番 号	種 別	基 礎	出土位置	直 径	高 さ	木取り	柱 直 径 (cm)	内 面 調 査	性 質	分 類	備 考	写真回数
3	L-381	木製品	柱材		2.3	丸太材	-	(32.7) (15.6) (45.0)	上断欠損				51-10

SB 3													
番号	柱 番 号	種 類 形 状	出土位置	柱 直 径 (cm)				外 面 調 査	内 面 調 査	性 質	分 類	備 考	写真回数
				口 径	高 さ	厚 さ	段 数						
4	C-186	土器部 片		-	-	-	-	イガタ、削り	イガタ 黒色処理	破片	D-5		

第65図 SB 2・3 据立柱建物跡出土遺物

り、規格性の高い柱配置がうかがわれる。

東西の方向はN-76°-Wである。

柱穴 P 1～10の10基の柱穴を検出した。

それぞれの状態は表のとおりであるが、P 1～4、6～9では確認面で柱痕跡が確認されたほか、P 1・3・5・8・9の底面ではピット状の窪みがみとめられた。

出土遺物（第65図）

柱穴の堆積土より、土器器の小破片が1点出土したのみである。

4は土器器片である。全体的な様相は知り得ないが、外面の底部近くに段がみとめられる。内面には黒色処理が施されている。

（4）SB 4 据立柱建物跡

遺構状況（第66図）

確認状況 3区S-29、E-18付近、調査区南端で確認した。部分的な検出であり、可能性として推測した建物跡である。遺構はさらに調査区外南方向に延びているものと考えられる。

規模・方向 北辺は2間、4.2mを計る。東西辺の規模は不明であるが、東辺P 3・4の柱間は1.2mとなっている。

東西の方向はN-82°-Wである。

柱穴 P 1～4の4基の柱穴を検出した。

それぞれの状況は下表のとおりであるが、P 1～3では確認面で柱痕跡が確認されたほか、P 2では柱材の残存が確認された。

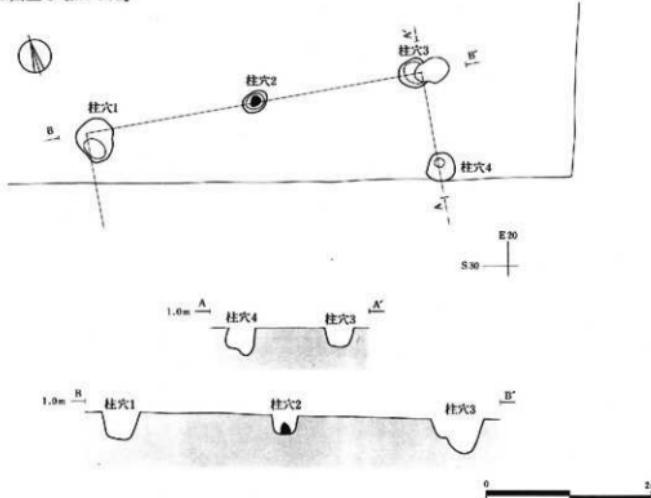
No	P 1		P 2		P 3		P 4	
	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	円形		椭円形		円形		円形	—
大きさ	0.42×0.52		0.39×0.21		0.36×0.36		0.33×0.36	—
深さ	0.33		0.21		0.42		0.24	—

第23表
S B 4 挖立柱建
物跡柱穴観察表

出土遺物

P 2 柱穴底面に直立する状態で、柱材とみられる木製品が出土したが、検出後の劣化が著しく、詳しい観察をすることができなかった。底面の直径は12cm前後、残存長は15cmほどである。

その他の遺物は出土しなかった。



第66図 S B 4 挖立柱建物跡平面・断面図

(5) S B 5 挖立柱建物跡

遺構状況（第67図）

確認状況 4区 S-41、E-17付近、調査区北端付近で確認した。部分的な検出であり、可能性として推測した建物跡である。遺構はさらに調査区北方向に延びているものと考えられる。

規模・方向 梁行1間、桁行2間以上の南北棟と推測されるが、詳細は不明である。

柱間の寸法は次のとおり。P 1～2・3～4はともに4.2m、P 1～3・2～4は2.5m。

南北の方向はN-1°-Eである。

柱穴 P 1～4の4基の柱穴を検出した。

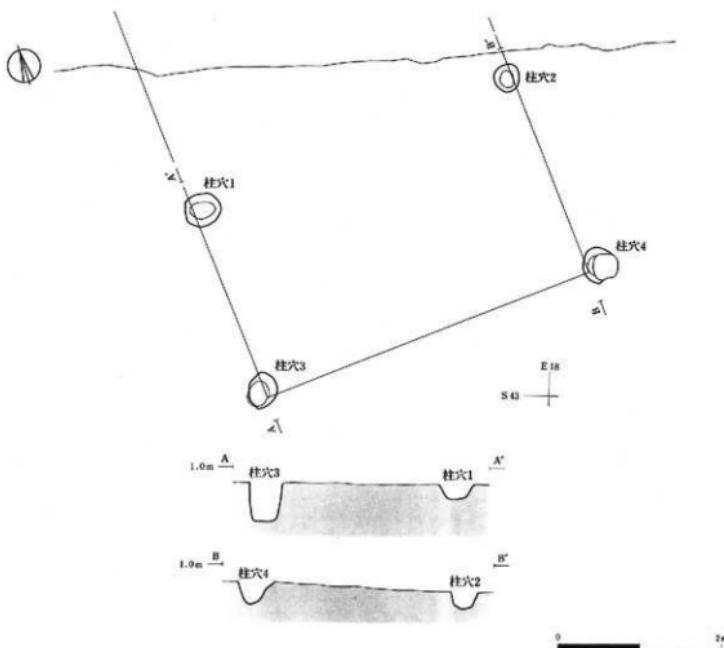
それぞれの状況は表のとおりであるが、P 1～3では確認面で柱痕跡を確認した。

出土遺物

遺物は出土しなかった。

No	P 1		P 2		P 3		P 4	
	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡	掘り方	柱痕跡
形状	円形		円形		梢円形		円形	-
大きさ	0.42×0.39		0.30×0.33		0.36×0.45		0.42×0.42	-
深さ	0.15		0.18		0.48		0.27	-

第24表
S B 5 挖立柱穴観察表
◀物跡柱穴観察表



第67図 S B 5 挖立柱建物跡平面・断面図

(6) S B 6 挖立柱建物跡

遺構状況（第68図）

確認状況 4区S-48、E-8付近で確認した。

なお、本遺構とS B 4・5 挖立柱建物跡は方向が類似しており、関連性も推測される。

規模・方向 梁行1間、桁行2間の南北棟で、柱列の総長はそれぞれ3.5・3.9mを計る。南北の方向はN-38°-Wである。

柱穴 P 1～6の6基の柱穴で構成される。

それぞれの状況は下表のとおりであるが、全ての柱穴で柱痕跡を確認した。

出土遺物

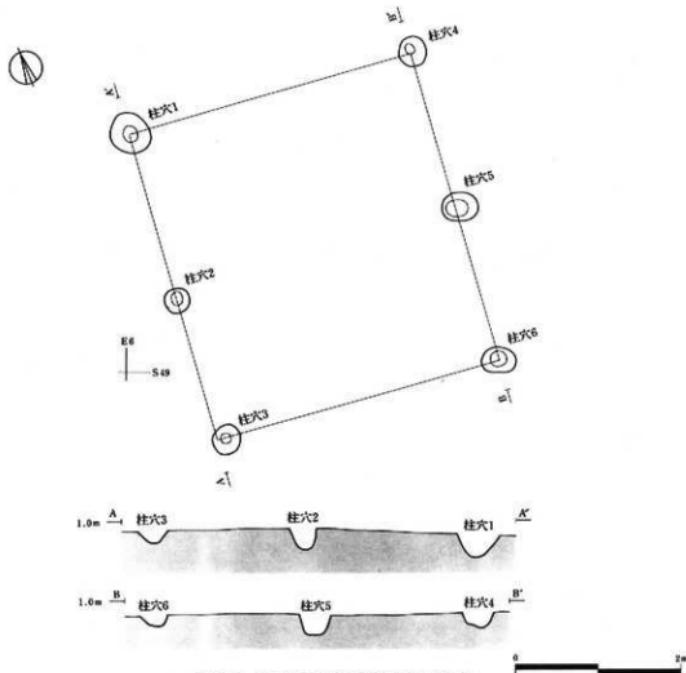
遺物は出土しなかった。

(7) S B 7 挖立柱建物跡

遺構状況（第69図）

No.	P 1		P 2		P 3		P 4		P 5		P 6	
	掘り方	柱痕跡										
形状	円形		円形		円形		円形		扁円形		扁円形	
大きさ	0.51×0.51		0.30×0.30		0.36×0.36		0.36×0.36		0.45×0.36		0.42×0.30	
深さ	0.30		0.24		0.15		0.18		0.24		0.12	

第25表 S B 6 据立柱建物跡柱穴観察表



第68図 S B 6 据立柱建物跡平面・断面図

確認状況 4区S-43、E-15付近、調査区北端部で確認した。

規模・方向 梁行1間、桁行3間の南北棟で、柱列の総長はそれぞれ3.8・6.1mを計る。南北の方向はN-18°-Eである。

柱穴 P 1～8の8基の柱穴で構成される。

それぞれの状況は下表のとおりであるが、P 1～4・8では確認面で柱痕跡を確認したほか、P 7では柱材の可能性が考えられる木製品が確認された。

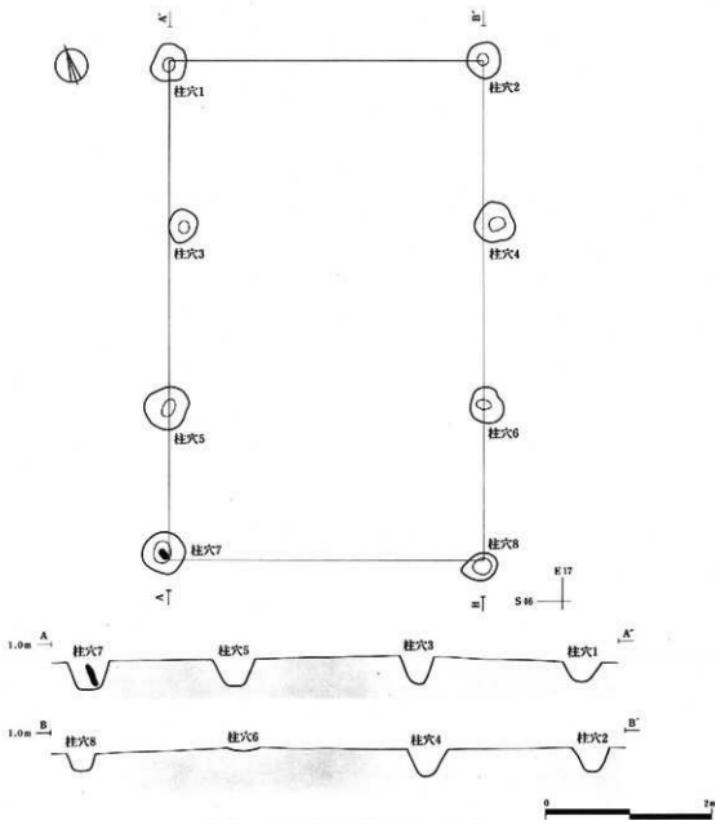
出土遺物

P 7で木製品が出土したが、検出後の劣化が著しく、詳しい観察をすることができなかった。直径は8cm前後、残存長は30cmほどである。

その他の遺物は出土しなかった。

No	P 1		P 2		P 3		P 4		P 5		P 6	
	掘り方	柱痕跡										
形状	円形		円形		円形		円形		円形	—	円形	—
大きさ	0.42×0.48		0.42×0.45		0.36×0.42		0.51×0.51		0.51×0.55	—	0.42×0.42	—
深さ	0.24		0.30		0.33		0.33		0.33	—	0.06	—
No	P 7		P 8									
形状	円形	—	圓形									
大きさ	0.55×0.52	—	0.48×0.33									
深さ	0.36	—	0.18									

第26表
S B 7 挖立柱建物跡柱穴観察表



第69図 S B 7 挖立柱建物跡平面・断面図

(8) S B 8 挖立柱建物跡

遺構状況（第70図）

確認状況 4区S-43、E-18付近、調査区北端部で確認した。

なお、本遺構はほぼ同方向で、S B 7 挖立柱建物跡のすぐ東に接しており、両建物跡の関連性も推測される。

規模・方向 乗行2間、桁行2間の南北棟で、柱列の総長はそれぞれ2.5×3.7mを計る。南北の方向はN-22°-Eである。

柱穴 P 1～8の8基の柱穴で構成される。

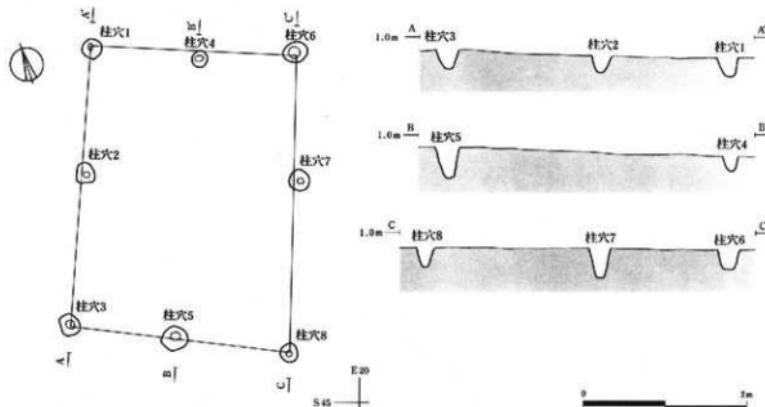
それぞれの状況は下表のとおりであるが、P 1・3・5・6・7・8では確認面で柱痕跡を確認した。

No.	P 1		P 2		P 3		P 4		P 5		P 6	
項目	掘り方	柱痕跡										
形状	円形		円形	—	円形		円形	—	円形		椭円形	
大きさ	0.24×0.24		0.24×0.24	—	0.27×0.27		0.21×0.21	—	0.33×0.30		0.30×0.24	
深さ	0.21		0.21	—	0.24		0.18	—	0.36		0.24	
No.	P 7		P 8									
形状	円形		円形									
大きさ	0.24×0.27		0.21×0.24									
深さ	0.36		0.24									

第27表
S B 8 挖立柱建物跡柱穴観察表

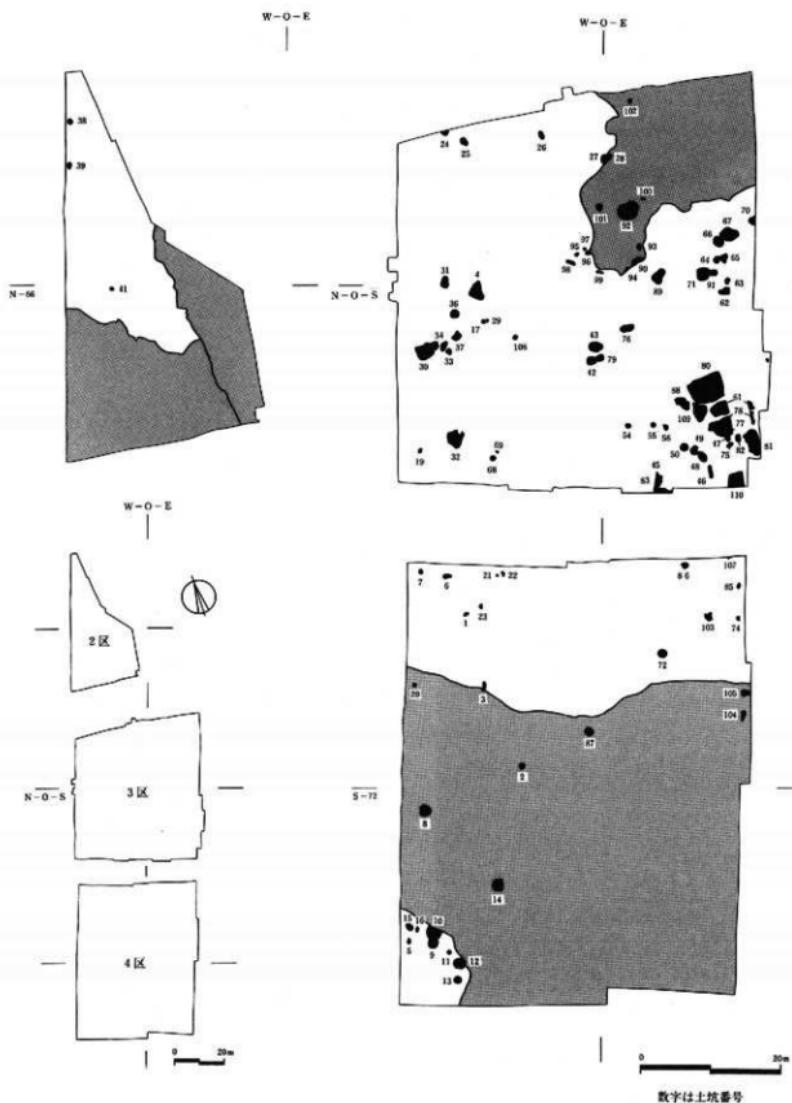
出土遺物

遺物は出土しなかった。



第70図 S B 8 挖立柱建物跡平面・断面図

3. 土坑



第71図 土坑位置図

土坑は2区で3基、3区で64基、4区では28基、合計95基が検出された。ここでは特長のあるもの、あるいは遺物が出土したものに限って記述することとし、それ以外は図、表にまとめて掲載した。

(1) SK 4 土坑

遺構状況 (第72図)

3区N-0、W-18付近で検出された。S I 8堅穴住居跡を切っている。平面形は不整な三角形を呈し、長軸2.5m、最大幅2.15m、深さは29cmほどである。堆積土は2層に分けられるが、いずれも黒色の灰が混ざる砂層である。層中には焼土、炭化物のほか、灰白色粘土のブロックが含まれている。

出土遺物 (第73図)

堆積土中より比較的多量の土器片が出土したが、小破片が多く図示し得たのは次の2点である。1は非ロクロ成形の土器器皿であるが、段から下の底部を欠いている。2は土器器の壺である。張りのある体部に、外反ぎみの短い口縁がつく。頸部には軽い段がみられる。1・2ともに堆積土2層中からの出土である。



第72図 SK 4 土坑平面・断面図



番号	目録番号	施設形態	出土位置	底 面				外面調査	内面調査	残存分類	備考	写真図版
				口 径	底 径	厚 度	器 高					
1	C-119	土器器皿		(17.0)	—	—	—	横ナギ	1.6m 黑色地質	(1/8)	D-5	
2	C-121	土器器皿		(11.2)	—	—	—	横ナギ、削り	横ナギ、ヘラナギ、ナギ	(1/4)	D-1	頸部に段

第73図 SK 4 土坑出土遺物

(2) SK 27 土坑

遺構状況 (第74図)

3区N-8、E-0付近で検出された。平面形は橢円形を呈する。長軸1.36m、短軸86cm、深さは31cm程である。堆積土は3層に分けられいずれも砂であるが、1・2層には炭化物を含んでおり、特に2層には多い。

出土遺物（第75図）

堆積土3層中より、土師器杯が1点出土した。無段でやや浅く、口縁は外傾、丸底風である。内面はヘラミガキのみで、黒色処理はみられない。

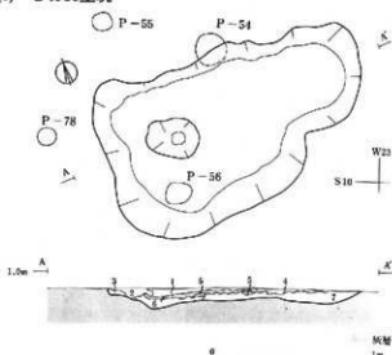


第74図 SK 27土坑平面・断面図



第75図 SK 27土坑出土遺物

(3) SK 30土坑



第76図 SK 30土坑平面・断面図

遺構状況（第76図）

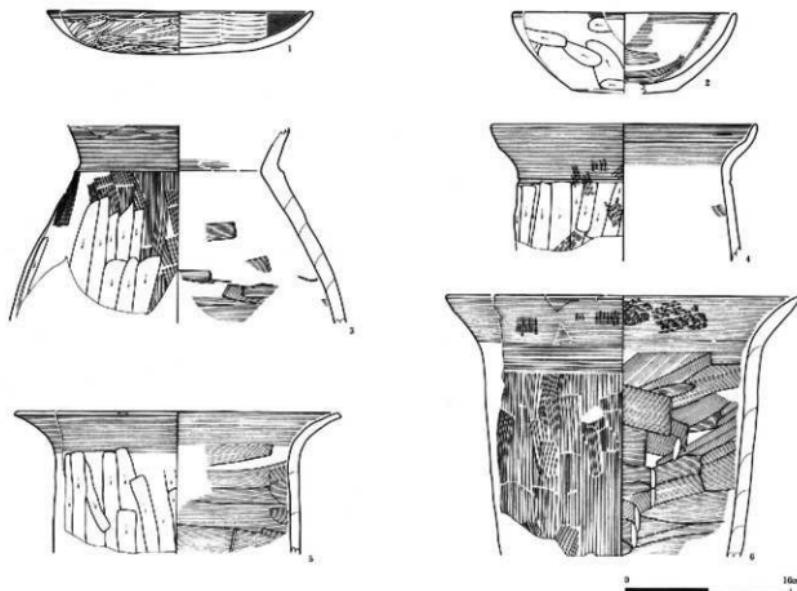
3区S-10、W-24付近で検出された。S D56円形周溝、S D33溝跡、およびピット54を切っている。平面形は隅丸方形であるが、やや不整である。長軸3.32m、短軸は2.18mで、深さは約27cmを計る。堆積土は7層に分けられる。このうち4層は黒色の灰層である。また1層には多量の炭化物を含むほか、1・4層には住居跡の貼床やカマド構築土に類似した灰白色の粘土ブロックや焼土粒を含んでいる。底面ではなだらかたピット状の落ちこみが確認されたほか、ピット56が検出された。

なお、この遺構と重複あるいは近接してピット54・55・56・78が確認されたが、これらは位置関係や堆積土の共通性から、竪穴住居跡柱穴（欠番S 110）の可能性が想定される。併せてSK 30土坑は、この住居跡の掘り方痕跡など、住居跡と何らかの関連を持つ遺構である可能性も考えられる。

第76図 SK 30土坑平面・断面図

出土遺物（第77図）

堆積土中、特に4層から比較的多くの主に土師器片等が出土したが、そのうち図示し得たものは以下の6点である。1は土師器杯であるが、器高が低く皿状の器形を呈している。外面はミガキ調整が主体で、内面には黒色処理が施されている。2も土師器杯であり、内外面とも灰白色を呈する。ほぼ平底状の底部から内窪ぎみに体部が立ち上り、口縁部はごく短い。内面はナデ調整の後、ごくまばらな放射状ミガキが施されていて、黒色処理はみられない。このような特長をもつ杯は、いわゆる在来型土師器杯のなかにはみられないものである。3～6は土師器の甕である。3は体部の張りが大きく、頸部には段が形成されている。体部外面はハケ目調節の後、削り調整が施されている。4・5・6は体部の張りがない長胴形のもので、いずれも頸部は無段である。4は屈曲する口縁部に特長がある。体部外面は4・5がヘラ削りで、6はハケ目調節である。なお、図示はできなかったが、同じく4層中より平瓦の小片が1点出土している。凸面は繩叩きの後スリ消し、凹面には布目痕がみられる。



番号	文書番号	種類	出土位置	法 量 回			外 面 調 整	内 面 調 整	残 存 分 類	備 考	写真図版	
				12	径 深 高	12						
1	C-44	土師器 杯	上部器 群	(16.2)	2.7	(0.17)	—	鏡ナデ、ミガキ	ミガキ 黒色処理	1/2	D-9 a	23-21 65-3
2	C-49	土師器 杯	出土位置 不明	法 量 回	口 径 底 深 高 口	外 面 調 整	外 面 調 整	内 面 調 整	残 存 分 類	備 考	写真図版	
3	C-47	土師器 甕	上部器 群	—	—	—	鏡ナデ、ハケ目、削り	鏡ナデ、テグ、部分的にミガキ(放射 状)	1/6	E-3		
4	C-46	土師器 甕	(16.2)	—	—	—	鏡ナデ、ハケ目、削り、輪郭みぬ	鏡ナデ、ヘラナデ、テグ	(1/2)	D-2	底部に剥離	27-4
5	C-45	土師器 甕	(20.0)	—	—	—	鏡ナデ、口唇部、体部-削り	鏡ナデ、ヘラナデ、テグ	(1/4)	D-3 b		28-3 66-1
6	C-48	土師器 甕	(21.6)	—	—	—	ハケ目、鏡ナデ	ハケ目、鏡ナデ、ヘラナデ	(1/5)	D-3 b		28-6 66-6

第77図 SK 30土坑出土遺物

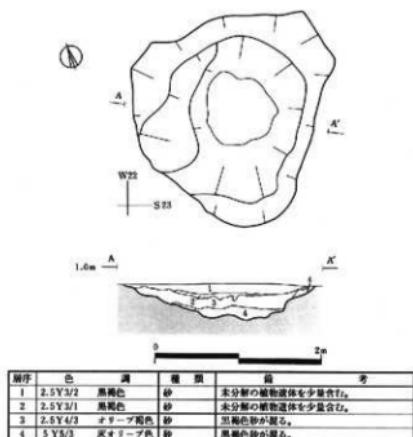
(4) SK 32土坑

遺構状況（第78図）

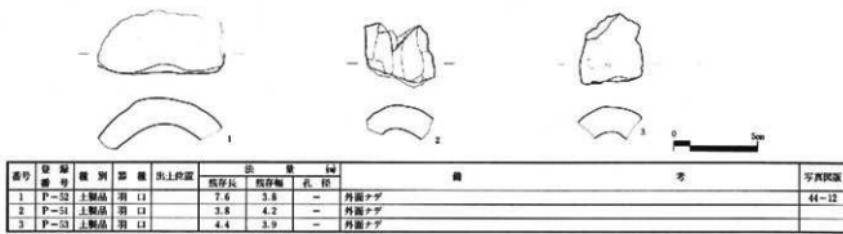
3区S-22、W-21付近で検出された。小溝遺構群を切り、SD29溝跡に切られている。平面形は不整な椭円形を呈している。長軸2.51m、短軸2.49mで深さは56cmを計る。堆積土は4層に分けられ、いずれも砂であるが1・2層は未分解の植物遺体を少量含んでおり、黒褐色を呈している。なお、後述するように出土遺物が製鉄関連のものだけに限定される点に、この遺構の特長を見出すことができる。

出土遺物（第79図）

底面直上の4層中より、罐の羽口が3点と鉄滓1点が出土した。



第78図 SK 32土坑平面・断面図



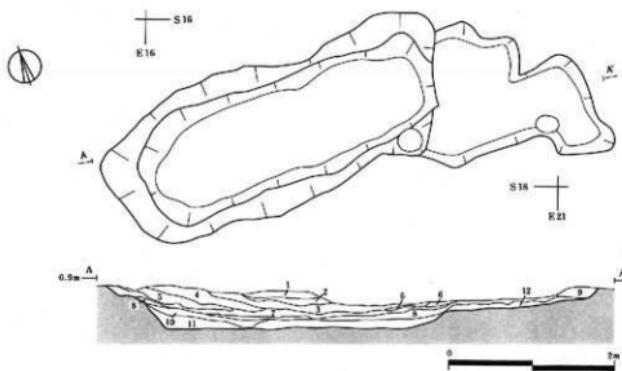
第79図 SK 32土坑出土遺物

(5) SK 61土坑

遺構状況（第80図）

3区S-18、E-18付近で検出された。ピット244・301を切り、SD123に切られている。平面形は整った隅丸の長方形を基調とするが、東側で大きく乱れている。この部分は深さも浅く、本来別遺構であった可能性もあるが平面、断面の観察で重複を確認することができなかったために、同一遺構とした。規模は長軸が6.24m、短軸2.83mで深さは最深で58cmを計る。底面は平らで起伏はほとんどみとめられない。堆積土は12層に区分された。10層以

上では未分解の植物遺体を含んでいるが、特に2・3層で顕著である。このほか1～3層では炭化物の混入が目立っている。



番号	色調	種類	備考	番号	色調	種類	備考
1	10 YR 3/1	黒褐色	粘土質シルト	7	10 YR 1.7/1	黒色	粘土
2	7.5 YR 2/2	黒褐色	粘土	8	5 Y 5/3	灰オーライブ色	砂
3	2.5 Y 2/1	黒色	粘土	9	2.5 Y 2/1	黒色	粘土質シルト
4	10 YR 2/1	黒色	粘土質シルト	10	5 Y 5/2	灰オーライブ色	砂
5	2.5 Y 6/3	にぶい黄色	砂	11	5 Y 3/2	オリーブ黑色	砂
6	2.5 Y 5/3	黄褐色	砂質シルト	12	2.5 Y 5/3	黄褐色	砂

第80図 S K61土坑平面・断面図

出土遺物（第81図）

堆積土中より多量の木製遺物が出土したが、出土位置は8・10層に集中している。また土器はか、ほかの種類の遺物は出土していない。木製遺物の大半は断片で、また用途不明品が多い。1は草履である。左右対称のスギ板を2枚合わせて一対としている。中央からやや下方の側縁には、方形の切り取りがみられる。2～4は胚状薄板の破片であるが、いずれも年輪方向にはほぼ直交してケビキ線が刻まれており、曲物の側板と考えられる。5は容器の底であろうか。側縁に側ってほぼ等間隔で穿孔されている。6は高台のつく小型の漆器皿であるが、内外面ともに黒漆で仕上げられている。文様はない。7～12は先端が細く仕上げられており、箸と想定される。13・14は薄板が用いられた一孔札状の製品であるが用途は不明である。15～18は用途不明の板状製品であるが、15は草履の破片である可能性も考えられる。

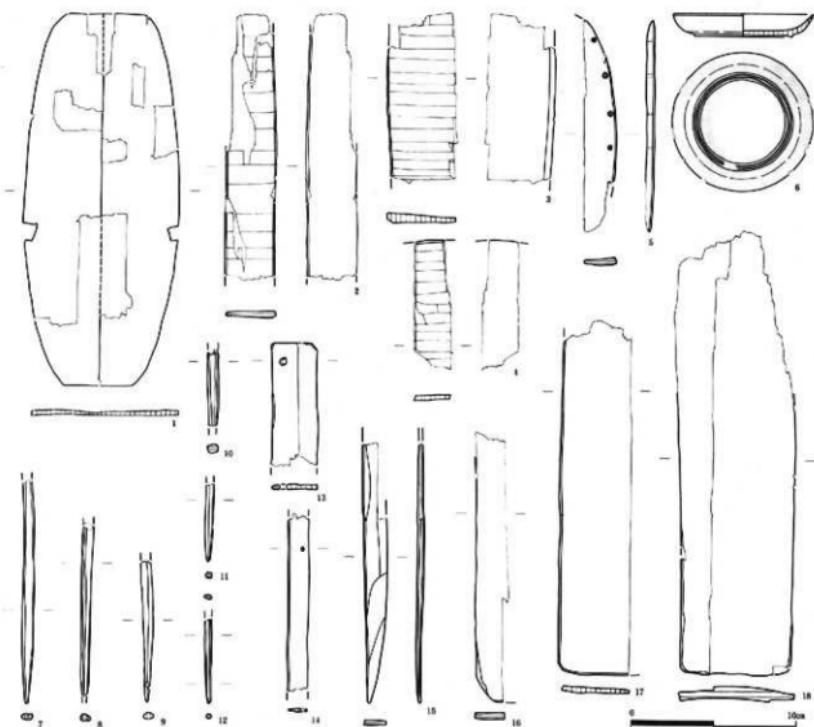
(6) S K75土坑

遺構状況（第82図）

3区S-23、E-18付近で検出された。SD120溝跡を切り、SD123溝跡に切られている。平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸約1m、短軸64cm、深さは30cm程度である。堆積土は上下2層に分けられいずれも粘土が主体であるが、ともに未分解の植物遺体を含み、とりわけ2層で顕著である。また2層には多量の炭化物がブロックで混入している。

出土遺物（第83図）

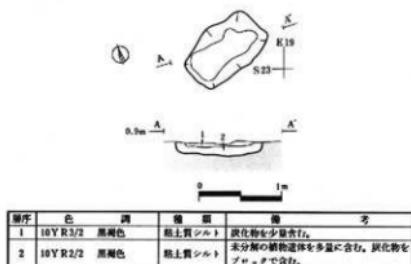
堆積土2層より木製遺物が出土したが、図示し得たのは次の3点である。1は草履と考えられる。欠損が著しい



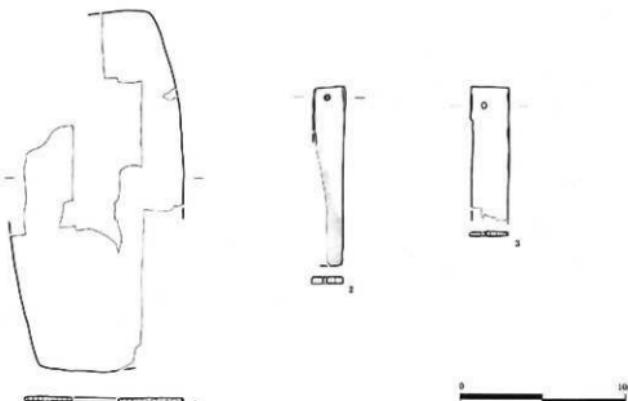
番号	分類 器種	種別	器種	出土位置	固 體	素 材	木取り	寸 長	幅	厚 さ	備 考	写真図版
1	L-49	木製品	車輪		スギ	板材	板	22.9	9.4	0.4	両側面に抜きあり、部分的に欠損。	
2	L-50	木製品	車輪(裏板)		—	板材	板	(16.3)	3.1	0.4	半輪に底穴するレバーキネムが2ヶ所等間隔で残されている、両端欠損。	54-8
3	L-71	木製品	曲物(側板)		スギ	板材	板	(19.2)	4.2	0.6	半輪に底穴するレバーキネムが2ヶ所等間隔で残されている、両端・右側面欠損。	54-6
4	L-35	木製品	曲物(側板)		—	板材	板	(7.7)	(2.2)	0.3	半輪に底穴するレバーキネムが2ヶ所等間隔で残されている、下部・右側面欠損。	54-4
5	L-70	木製品	容器(底)		セイ	板材	板	(15.1)	(2.0)	0.5	底辺に底穴する鉢形(最大径0.3m)5ヶ、両端・左側面殆ど欠損。	55-2
6	L-271	木製品	容器(側)		セイ	板材	板	—	—	—	口徑(約4cm)、底径(6.0cm)、深高(1.4cm)、黒漆塗り、部分的に欠損。	54-6
7	L-35	木製品	器		セイ	板材	板	(13.7)	0.7	0.4	上部欠損。	58-12
8	L-36	木製品	器		—	板材	板	(10.7)	0.7	0.4	両端欠損。	58-13
9	L-85	木製品	器		アヌマ	板材	板	(8.7)	0.6	0.4	上部欠損。	58-14
10	L-52	木製品	器		セイ	板材	板	(4.8)	0.7	0.4	両端欠損。	58-16
11	L-38	木製品	器		—	板材	板	(4.8)	0.5	0.4	上部欠損。	58-17
12	L-37	木製品	器		—	板材	板	(5.2)	0.5	0.4	上部欠損。	58-15
13	L-22	木製品	用途不明 木製品		セイ	板材	板	(7.6)	2.8	0.4	上部に貫通孔(径0.4cm)、下部欠損。	59-10
14	L-24	木製品	用途不明 木製品		—	板材	板	(11.0)	1.3	0.2	貫通孔(径0.2cm)、両端欠損。	59-9
15	L-37	木製品	用途不明 木製品		—	板材	板	(16.0)	1.4	0.3	加工痕あり、上部欠損。	60-14
16	L-36	木製品	用途不明 木製品		セイ	板材	板	(16.2)	(2.0)	0.4	左下部に加工痕あり、上部・右側面欠損。	60-13
17	L-72	木製品	用途不明 木製品		セイ	板材	板	(21.8)	(4.4)	0.3	上部・右側面欠損。	60-1
18	L-73	木製品	用途不明 木製品		—	板材	板	(27.2)	7.0	0.8	上部欠損。	59-5

第81図 SK 61土坑出土遺物

が一枚板で作られており、中央よりやや下方の左側縁には切り取りがみとめられる。2、3は薄板で作られた札状製品であるが、いずれにも上端部付近に小孔が穿たれている。用途は不明である。



第82図 S K75土坑平面・断面図



第83図 S K75土坑出土遺物

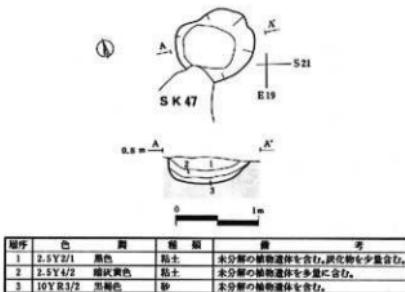
(7) S K77土坑

遺構状況（第84図）

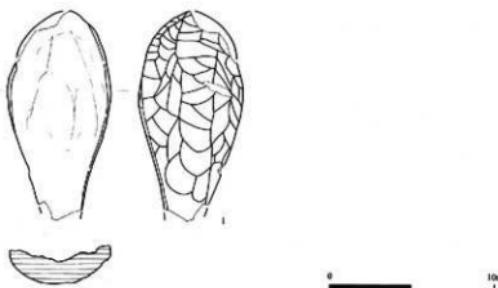
3区S-21、E-18付近で検出された。SK78土坑を切り、SK47土坑、SD123に切られている。平面形は梢円形を呈し、長軸96cm、短軸81cm、深さは36cmである。堆積物は3層に分けられ、全体的に未分解の植物遺体を含んでいる。1層には炭化物の混入がみられる。

出土遺物（第85図）

堆積土2層より1の木製品が1点出土した。柄の部分を欠いているが杓と考えられる。正面はスプーン状にゆるく抉られ、背面には細かな削り加工の痕跡が全面におよんでいる。



第84図 S K 77土坑平面・断面図



第85図 S K 77土坑出土遺物

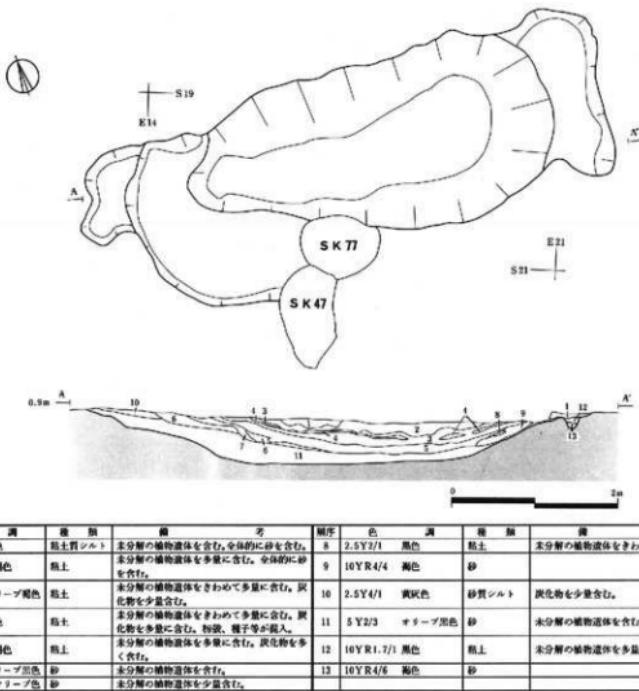
(8) S K 78土坑

遺構状況 (第86図)

3区S-20、E-19付近で検出された。SK47・77土坑に切られている。平面形は隅丸の長方形であるが、東、西の端部で乱れている。規模は長軸6.52m、短軸2.2m、深さは約70cmを計る。堆積土は13層に区分されるが、全体的に未分解の植物遺体を含んでいる。3・4・5・10層中には炭化物の混入がみられる。なお4層は3層中に帶状に入る泥炭質のつよい粘土層であるが、多量の初殻、種子類が検出された。

出土遺物 (第87図)

堆積土中より、木製品、石製品および初殻、種子類が出土した。このうち木製品は破損の著しい用途不明品が多く、図示できたのは以下の7点である。1は草履である。2枚の薄板を左右対称に削って一対としている。先端部分に穿孔があり、中央よりやや下位の両側縁には方形の切り取りがみられる。2は漆器碗であるが漆はほとんど剥落し、内面にごくわずか朱漆の残存がみとめられる。裏面にはロクロ痕跡が明瞭であるが、高台を削り出したのみで中央部分は削り残している。3は漆器碗あるいは皿の底部部分である。裏面でわずかに高台が確認されるが、破損が著しい。両面とも黒漆がみとめられる。4は漆器碗であるが、破損が著しい。内・外表面とも黒漆の残存がみられる。5は容器と考えられる。鉢などの器形が推定されるが、剥り物で両面で明瞭な加工痕が観察され、黒漆が施されている。6は杼目の板材を台形に作り出したものである。差し歛下駄の歯などが想定される。スギの薄板が用いられた7は用途不明の札状製品である。8は砥石である。使用面は2面であるが、いずれの面もきわめて平滑



第86図 SK78土坑平面・断面図

で光沢もみとめられ、細かい擦痕が観察される。

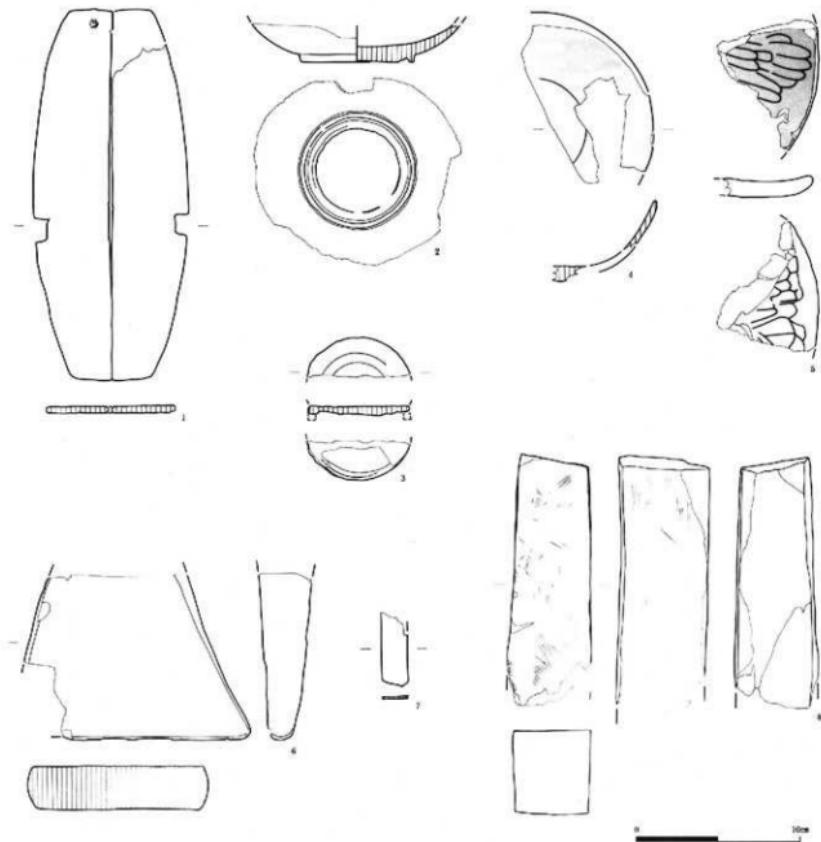
(9) SK80土坑

遺構状況（第88図）

3区S-15、E-16付近で検出された。SD119溝跡を切り、SD123溝跡に切られている。平面形は隅丸の長方形で、長軸6.34m、短軸3.08m、深さは72cm程度である。底面に起伏はほとんどみとめられず平らであるが、東より浅い土坑状の落ち込みがある。堆積土は11層に分けられる。最下層の6層を除き、全体的に未分解の植物遺体を含んでいる。1層には多量の炭化物の混入がみられる。底部に近い5・6層はよわい還元層である。

出土遺物（第89図）

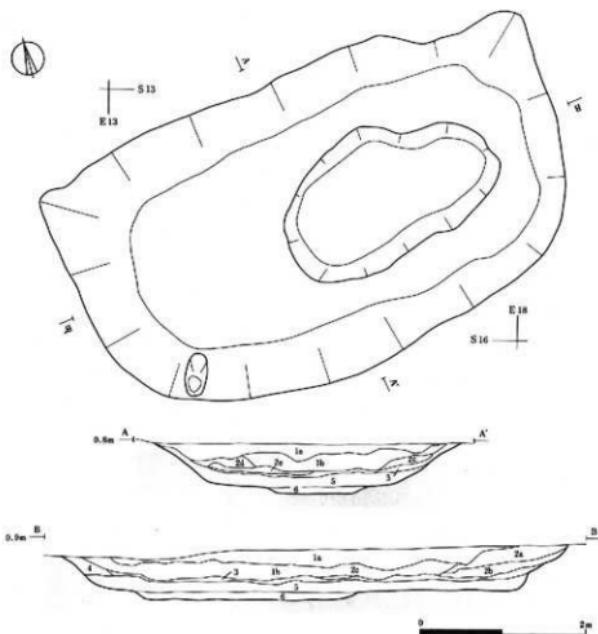
堆積土中より陶器片1点、磁器片1点および多数の木製遺物が出土したが、大半は5層に集中してみられた。なお木製遺物は破損の著しい用途不明品が多く、図示できたものは10点である。1は陶器の鉢である。口縁部は短く直立ぎみで、平らに作り出されている点に特長を見い出すことができる。内外面ともに青灰色を呈し、胎土には粒径の大きい砂粒が目立つ。産地、年代ともに特定は困難であるが、大まかに中世の所産ではないかと推測される。2は中国産磁器で高台付きの碗である。龍泉窯系の製品と考えられ、13世紀代の年代が推定される。3は漆器の椀である。外面底部に小さな台状の削り出しがみられ、高台はつかない。漆の残存は内面の一部にわずかにみとめられるだけで、本来の全体的な塗りの様相は不明である。4は箸と考えられる。柾目角材の両端を削っている。5・



番号	登録 編 号	種 別	器 種	出土位置	形 態	素 材	木取り	法 規 (cm)			写真図版	
								長 さ	幅 き	厚 さ		
1	L-4	木製品	京箋		くに箋の一種	板材	既 日	22.8	9.5	0.4	両側面に抉り口有り。上面に貫通孔(径0.5cm)1ヶある。右上端が火炎。柄ほ定期。	
2	L-39	木製品	漆器箋		タヤキ	-	既 日	-	-	-	直径7.1cm、高さ(2.3cm)。内曲の一部分に朱書きが残存。口縁部が火炎。	
3	L-275	木製品	漆器箋 (底座)		タヤキ	-	既 日	-	-	-	断定直径6.3cm、高さ(3.6cm)。黒漆塗り。底部の約1/2欠損。	
4	L-277	木製品	漆器箋		タヤキ	-	既 日	-	-	-	(1.0) 断定1.0×14.5cm。黒漆塗り。殆ど欠損。	
5	L-273	木製品	青箋		エゾノキ属	-	-	(7.7)	(6.0)	(1.1)	黒漆塗り。両面に加工痕がある(削り跡)。縁辺の一部に殆ど欠損。	
6	L-112	木製品	下駄?		-	板 材	既 日	(10.2)	(11.9)	(3.1)	上端と左下端が欠損。	
7	L-10	木製品	川端千明 木製品		スギ	板 材	既 日	(4.1)	1.65	0.2	上端が欠損。	
番号	登録 編 号	種 別	器 種	出土位置	形 態	素 材	木取り	法 規 (cm)	幅 き	厚 さ	圖 考	写真図版
8	K-12	石製品	砥 石		(35.4)	(5.4)	-	(5.1)	-	-	形状不定	使用面は2面

第87図 SK 78土坑出土遺物

6はやや大型の札状製品であるが用途は不明である。ともにスギの薄板が用いられており、5は板目、6は柾目とに分かれている。7~9も用途不明の札状製品であるが、先端部分をヘラ状に加工している。10~11は小型の札状製



第88図 S K80土坑平面・断面図

品である。形態的に木簡類の可能性が想定されたため、6の製品とともに赤外線テレビによる観察を行ったが、墨書きはみとめられなかった。12・13は先端部分に加工の施された製品である。ともに詳しい用途は不明であるが、組み物などの部材と考えられる。

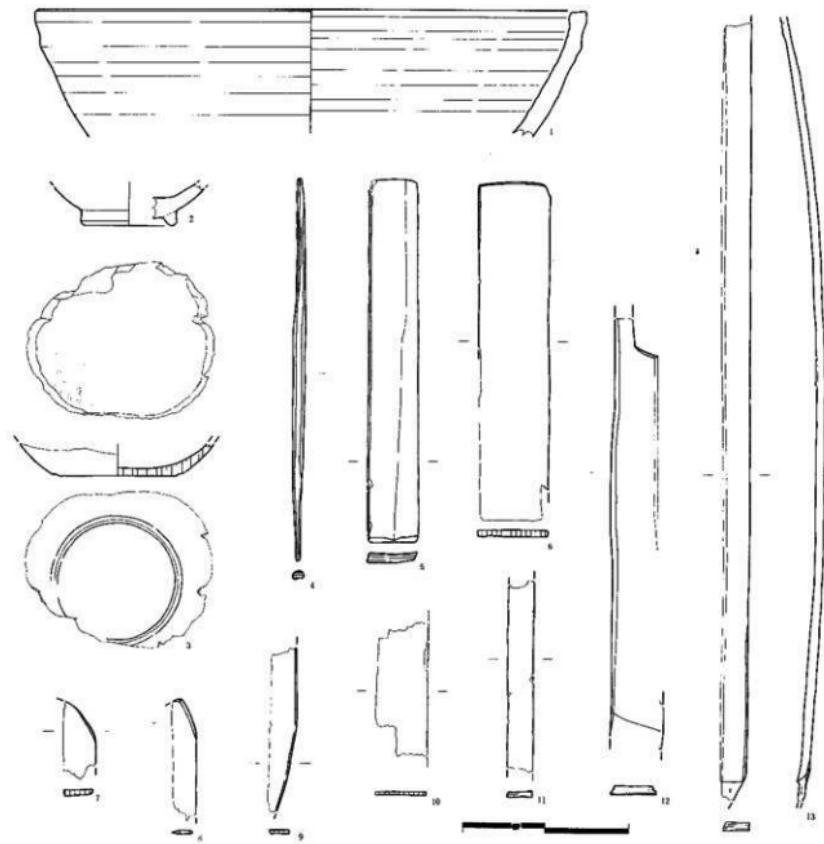
(10) S K81土坑

遺構状況（第90図）

3区S-22、E-22付近で検出された。S X13性格不明遺構を切り、S D123溝跡に切られている。平面形は梢円形を呈するがやや乱れている。長軸3.74m、短軸1.96mで深さは36cmを計る。底面に起伏はほとんどみられず、ほぼ平らに掘られている。堆積土は8層に分けられる。1～5層は粘土主体で6層以下は砂層となっているが、全体的に未分解の植物遺体が含んでいる。また1層には炭化物の混入がみとめられる。

出土遺物（第91図）

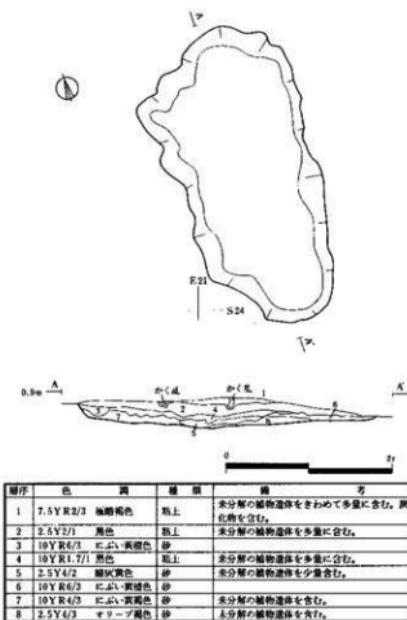
底面および堆積土中より比較的多くの木製品が出土したが、破損の著しい用途不明品がほとんどで、図示し得たのは次の2点である。なお、いずれも底面からの出土である。1は桶など容器類の底板と推定される。1/3程度の残存で、全体の推定直径は14.5cmほどである。スギの柾目板が用いられている。側面には釘穴らしい小孔が3ヶ所



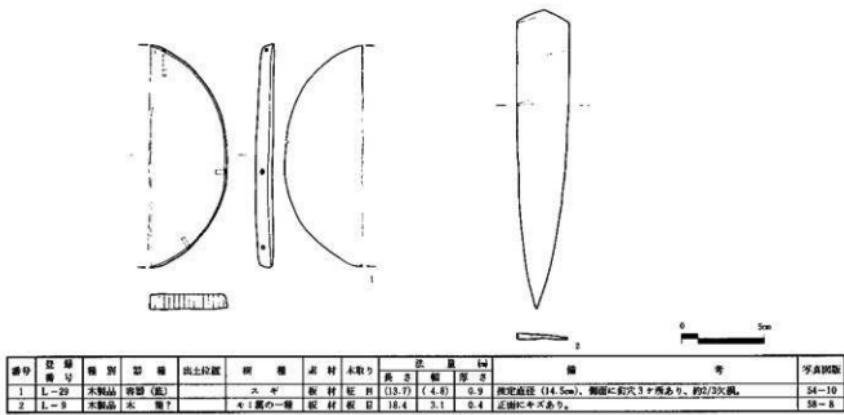
番号	骨 器 種 名	性 別 年 代	出土位置	生 長 回			外 面 調 査				内 面 調 査				分 類	備 考	写真図版	
				口 径	底 径	高 度	木 数 量	長 さ	幅 幅	厚 さ	内 面 形 態							
1	I-18	男 性		(33.6)	-	-	ロクロナゲ				ロクロナゲ				(1/10)		39-1	
2	J-3	男 性 馬内打目		-	(5.5)	-	ロクロナゲ	右高台ヘリクロナゲ			ロクロナゲ				(1/5)	中国産	39-6	
3	L-222	木製品	漆器、陶器				ツヤキ	一 板 材	底 板	-	底径7.3cm、高さ(2.9cm)、黒漆塗り。口部底が欠損。						53-2	
4	L-34	木製品	漆器、陶器				セニスの一種	板 材	底 板	23.5	9.7	0.5	光沢					58-19
5	L-129						スギ	板 材	底 板	22.3	3.1	0.6	下端に加工痕がある。底は変形					60-3
6	L-138						スギ	板 材	底 板	(20.9)	4.4	0.4	両側面の一部が欠損。					60-2
7	L-50						-	板 材	底 板	(4.3)	(2.0)	0.4	下端と左側面が欠損。					60-12
8	L-48						セニスの一種	板 材	底 板	(7.0)	(1.4)	0.3	上端に加工痕がある。下端と左側面が欠損。					60-17
9	L-49						-	板 材	底 板	(9.7)	(1.5)	0.2	上端と左側面が欠損。					60-16
10	L-83						-	板 材	底 板	(8.2)	(3.2)	0.2	右端と左側面が欠損。					
11	L-64						-	板 材	底 板	(11.8)	1.6	0.4	右側面の一部が欠損あり。両端が欠損。					60-15
12	L-140						-	板 材	底 板	(26.5)	(3.2)	0.6	両端に1ヶ所づつ加工痕がある。両端と右側面が欠損。					
13	L-141						スギ	板 材	底 板	(48.0)	(1.8)	0.5	下端に加工痕がある。両端と左側面が欠損。					

第89図 S K 80土坑出土遺物

でみとめられる。2は木筒状製品である。表面には横方向の細かいキズが数条みとめられる。なお両面とも赤外線テレビによる観察を行なったが、墨書を確認することはできなかった。



第90図 S K 81土坑平面・断面図



第91図 S K 81土坑出土遺物

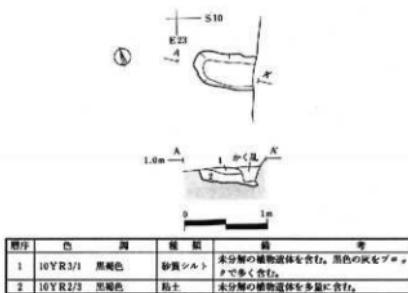
(1) SK 84土坑

遺構状況（第92図）

3区S-11、E-2付近で検出されたが、調査区東壁と接しており、遺構の東半部は調査区外にのびている。水田暗渠の掘り方に切られている。平面形は隅丸の長方形を呈するものと考えられ、規模は確認部分で長軸が73cm、短軸44cmで、深さは24cmほどである。堆積土は2層に分層される。1層は黒褐色の砂質シルトであるが、層中に黒色の灰をブロックで多量に含んでいる。2層は粘土で、未分解の植物遺体を含んでいる。

出土遺物

堆積土2層中より陶器小片2点が出土した。ともに窓体部と考えられる。色調は灰色を呈し、内外面ともにナデ調整がみとめられる。焼成は良好で硬質であるが、胎土中には砂粒が目立っている。産地、年代の特定は困難であるが、大まかに中世の所産と推測される。



第92図 SK 84土坑平面・断面図

(2) SK 90土坑

遺構状況（第93図）

3区N-3、E-5付近で検出された。SD160溝跡を切り、SD2溝跡に切られている。平面形は梢円形を呈し、長軸1.71m、短軸1.08m、深さ41cmを計る。堆積土は4層に区分され、1～3層が砂質シルトで最下層4層は砂である。1・2層は炭化物を含んでいるほか、1層には竪穴住居跡の貼床やカマド構築に用いられているものと類似した灰白色粘土が小ブロックで混入している。

出土遺物（第94図）

底面直上の4層中より、土師器杯が1点出土した。丸底で外面に明瞭な段をもち、口縁部は内湾ぎみに外傾する。外面は全体的にミガキ調整が主体である。内面に黒色処理はみとめられない。

(3) SK 101土坑

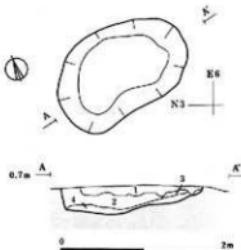
遺構状況（第95図）

3区N-11、W-1付近で検出された。平面形は不整な梢円形を呈し、長軸1.01m、短軸85cm、深さは46cmを計る。堆積土は4層に分けられ、1層が砂質シルトで2層以下は砂である。1層中には多量の炭化物を含んでいる。

出土遺物（第96図）

堆積土1層中より土師器窓1点が出土した。体部の張りが大きく、口縁部は「く」字状に屈曲する。頸部にはごくゆるい段差がみとめられる。

(4) SK 102土坑



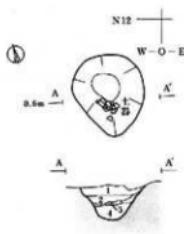
順序	色調	種類	備考
1	10YR 1.7/1 黒色	砂質シルト	未分解の植物遺体を含む。灰白色の粘土を小プロットで含む。炭化物を少量含む。
2	10Y R3/1 黒褐色	砂質シルト	炭化物を多く含む。
3	10Y R5/2 灰黒褐色	砂質シルト	
4	2.5G Y4/1 黑オーブ灰黑色	砂	

第93図 SK 90土坑平面・断面図



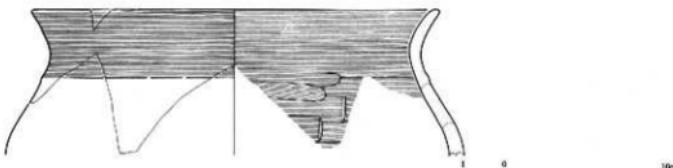
番号	登録番号	種別	出土位置	底面	壁面	口	外	内	残存	分層	備考	写真番号
I	C-386	上部器		(15.4)	(4.6)	(0.30)	(1.5)	削り、ミガキ	1ガキ	(1/6)	D-5	

第94図 SK 90土坑出土遺物



順序	色調	種類	備考
1	10Y R4/2 灰黒褐色	砂質シルト	炭化物を含む。
2	5Y 6/2 灰オーブ灰	砂	炭化物を多く含む。
3	2.5G 1.5/1 オーブ灰	砂	
4	2.5G Y4/1 灰オーブ灰	砂	

第95図 SK 101土坑平面・断面図



番号	登録番号	種別	出土位置	底面	壁面	外	内	残存	分層	備考	写真番号	
I	C-366	上部器		(24.8)	-	-	黄カデ	黄カデ、ヘラカデ、ナデ	(1/4)	D-1 a	外表面部に段	24-6

第96図 SK 101土坑出土遺物

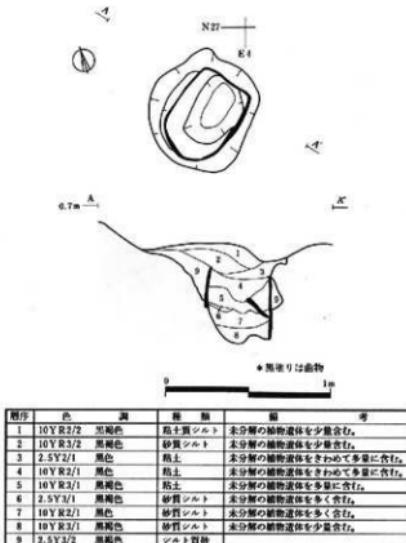
遺構状況（第97図）

3区N-27、E-4付近で検出されたが、堀り込みはS R 4河川跡堆積土5層上面である。平面形は橢円形を呈し、長軸76cm、短軸66cm、深さは57cmを計る。堆積土は9層に分けられるが、このうち9層は曲物を敷設するための堀り方埋土と考えられる。1～8層はシルトおよび粘土で、全体的に未分解の植物遺体を含んでいるが、3～7層では特に顕著で泥炭に近い様相を呈している。9層はシルト質の砂である。

なおこの土坑には平面形が半橢円形で、深さが最大で40cmの曲物が敷設されている。側版のみで、底板は検出されなかった。

出土遺物

曲物側板および9層より非ロクロ土師器の内黒灰小片が1点出土した。曲物側板は劣化がきわめて著しく、取り上げの際に崩壊し、図化はできなかった。断片の観察により、針葉樹の柾目材を用いていることが確認される。



第97図 SK 102土坑平面・断面図

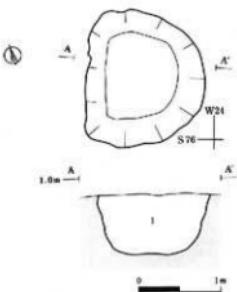
(3) SK 8土坑

遺構状況（第98図）

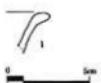
4区S-75、W-25付近で検出された。検出層はS R 1河川跡堆積土1層上面である。平面形は橢円形を呈し、長軸1.59m、短軸1.46m、深さは82cmほどである。堆積土は単層で、一気に埋め戻された様相を示している。また層中には基本層1・2層の水田耕作土をブロックで含んでいる。

出土遺物（第99図）

堆積土中より陶器片2点と磁器片1点が出土したが、いずれもごく小さな破片である。1は陶器で、小型壺、瓶類などが想定される。产地は相馬で、近代以降の所産と考えられる。



第98図 SK 8 土坑平面・断面図

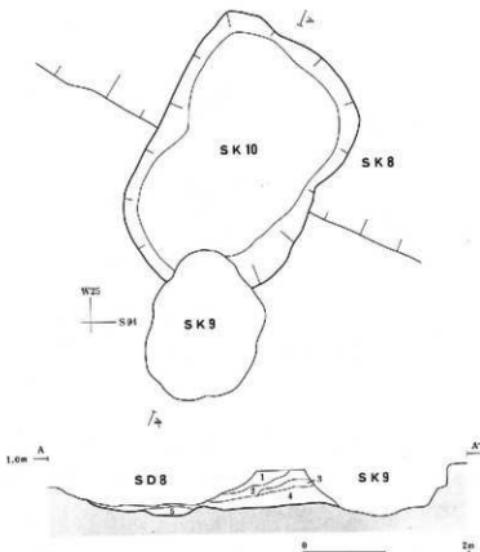


番号	目録番号	種類	出土状況	外観調査	内面調査	残存分類	備考	写真DN
1	1-27	陶器 容器の一部	マクラテ	マクラナダ	マクラナダ	破片	埴輪陶器、粗瓦	39-4

第99図 SK 8 土坑出土遺物

(6) SK 10土坑

遺構状況（第100図）



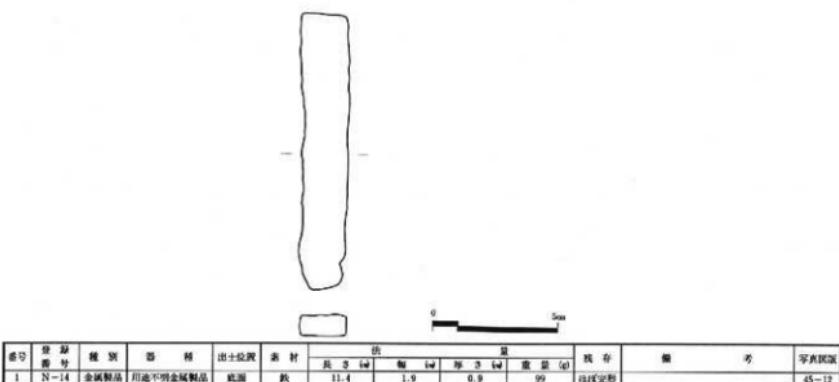
番号	色	調	青	緑	備考	番号	色	調	青	緑	備考
1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	黒褐色のシルトをブロックで多量に含む。		4	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂	黒色の粘土をブロックで多量に含む。	
2	10YR3/2	黒褐色	砂	黒色のシルトをブロックで多量に含む。		5	10Y3/1	オリーブ褐色			
3	10YR1.7/1	黒色	砂質シルト								

第100図 SK 10土坑平面・断面図

4区S-92、W-24付近で検出された。SK9土坑およびSD2溝跡に切られており、遺存状況は不良である。平面形は隅丸の長方形で長軸3.4m、短軸2.24m、深さは53cmを計る。堆積土は5層に区分されるが、1～4層は砂層中に黒～黒褐色のシルトブロックが混入する層相を呈しており、短期間に埋没したかあるいは人為的な埋め戻しが行われた可能性などが想定される。

出土遺物（第101図）

底面より鉄製品2点および鉄滓5点が出土した。1は用途不明の鉄製品である。厚さ9mm程度で、幅の狭い単純な板状を呈している。なお下端部分の丸みは鋸取りの結果で、本来は整った長方形であったものと想定される。なおもう一方の鉄製品は著しい劣化のため図示し得なかったが、出土時の観察によれば10×8cmの方形を呈する単純な板状製品である。



第101図 SK10土坑出土遺物

(17) SK74土坑

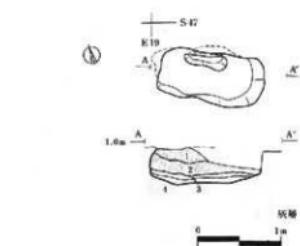
遺構状況

4区S-47、E-19付近で検出された。SD139溝跡に切られている。平面形は隅丸の長方形を呈し、長軸1.25m、短軸63cm、深さ56cmを計る。底面北端部では細長のビット状落ちこみが確認された。堆積土は4層に分けられ

る。1～3層は黒色の灰で、人為的な埋め戻しと考えられる。最下層4層は砂である。

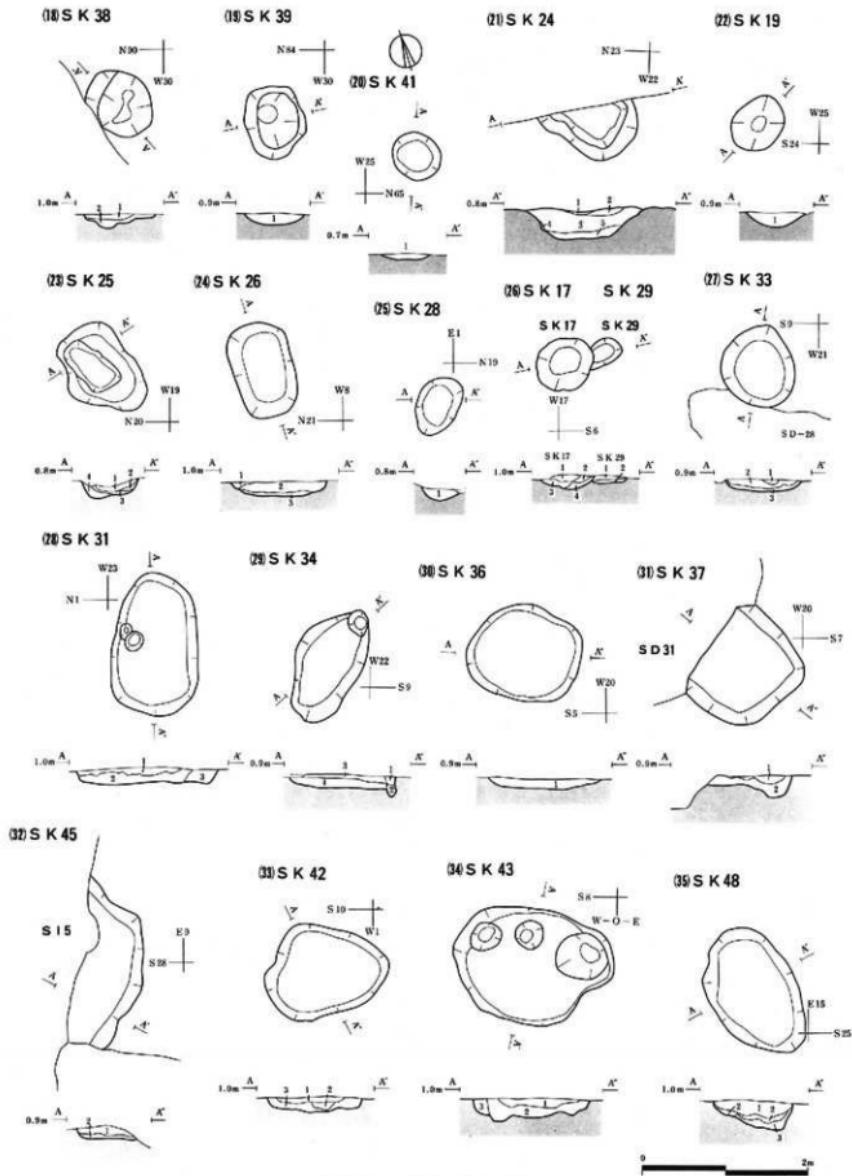
出土遺物

2、3層の灰中より木製品が3点出土した。いずれも破損の著しい断片で図示し得なかったが、柾目薄板材を用いた札状製品である。

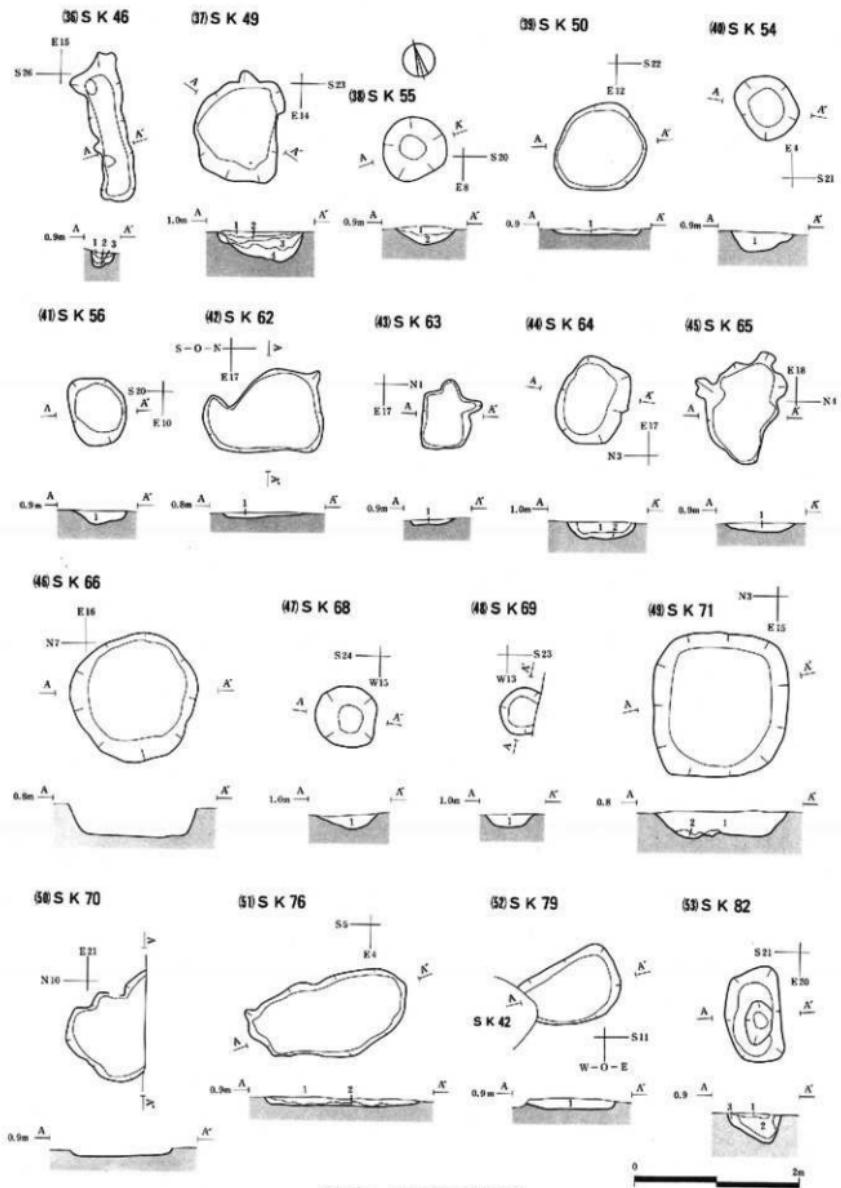


番号	色	層	種類	備考
1	10YR1.7/1 黒色	灰	黒褐色の砂をブロックで多く含む。	
2	10YR1.7/1 黒色	灰	黒褐色の砂を全体的に含む。	
3	10YR1.7/1 黒色	灰		
4	2.5Y4/2 暗灰褐色	砂		

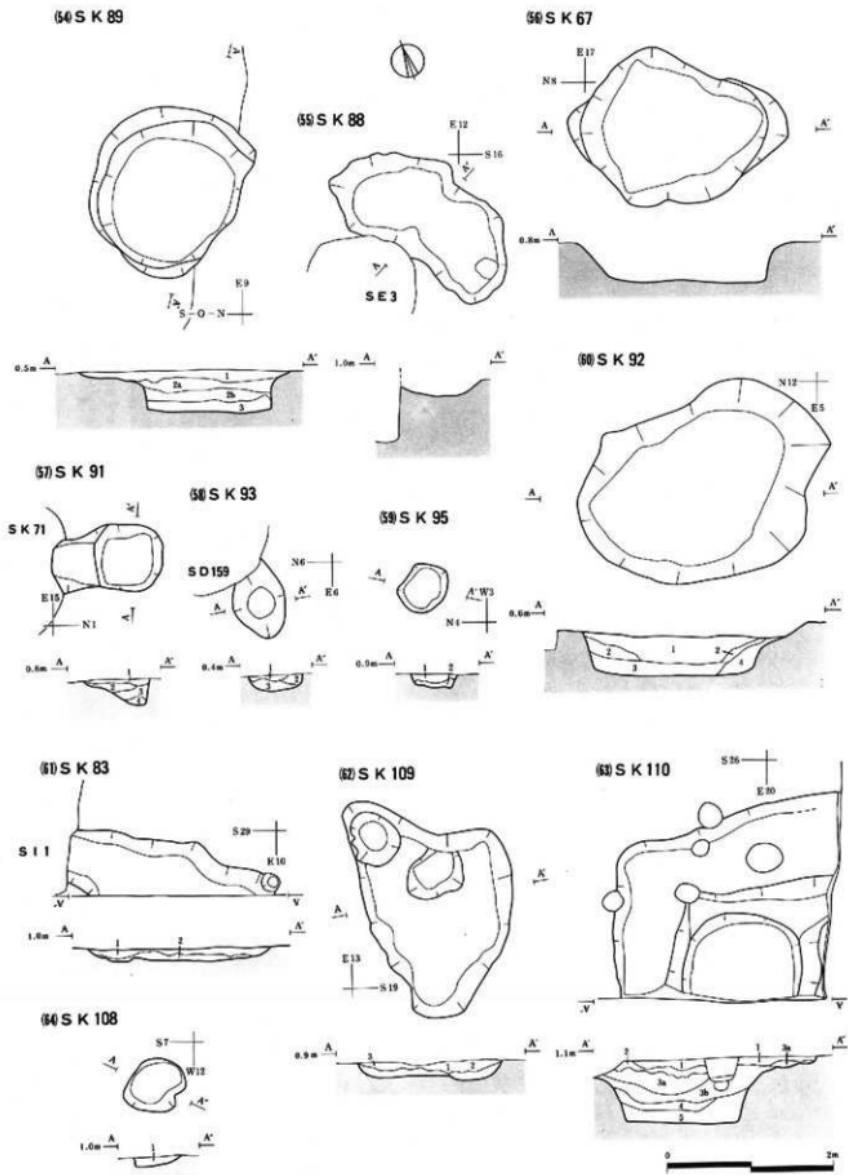
第102図 SK74土坑平面・断面図



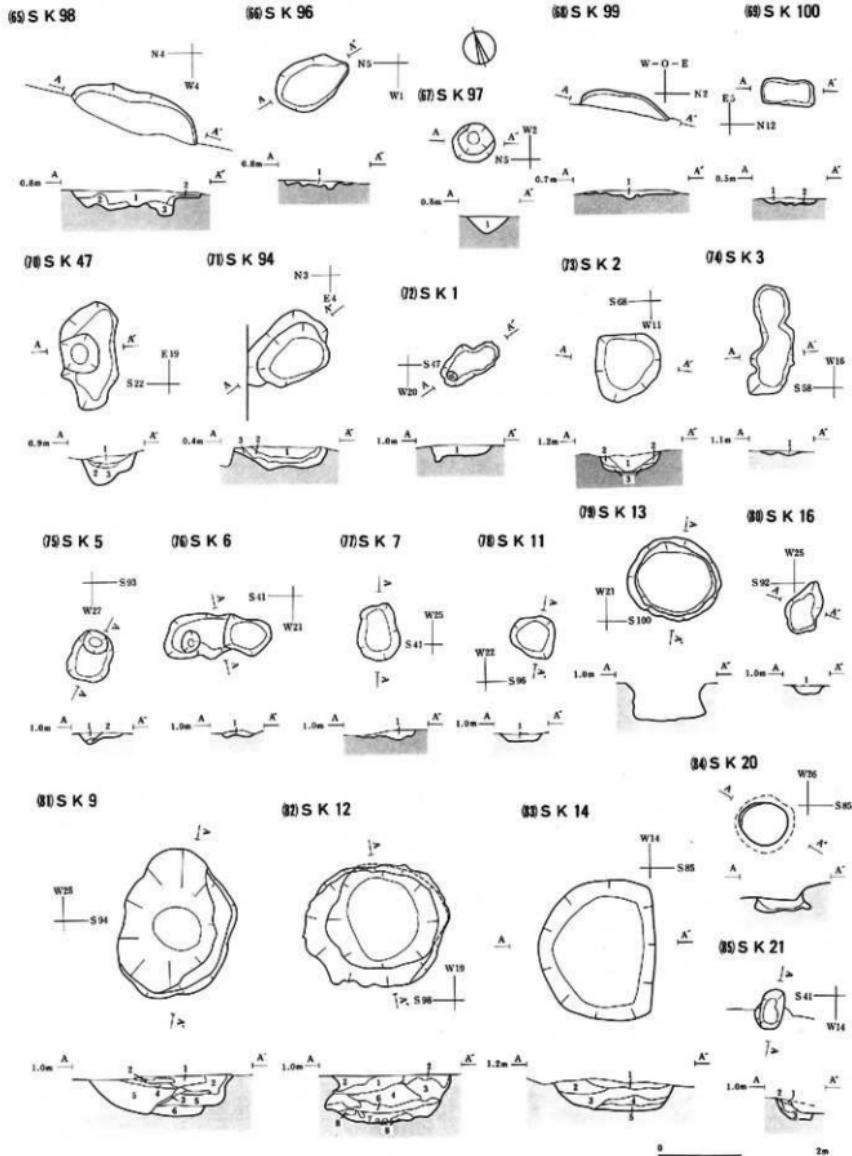
第103図 土坑平面・断面図(1)



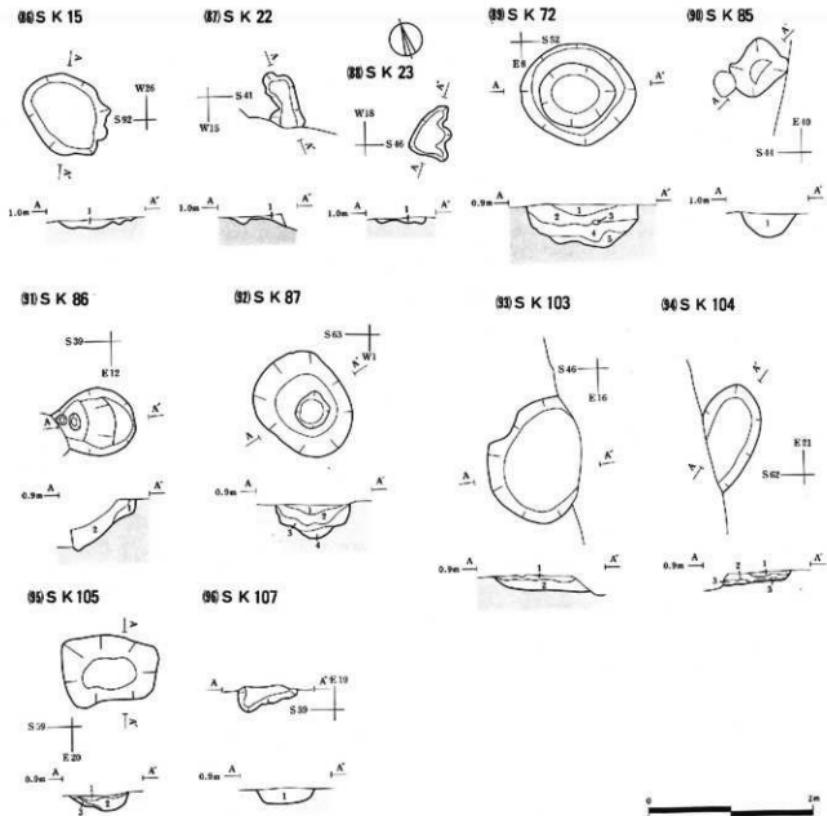
第104図 土坑平面・断面図(2)



第105図 土坑平面・断面図(3)



第106図 土坑平面・断面図(4)



第107図 土坑平面・断面図(5)

No.	遺構名	区	長軸	短軸	深さ	出土遺物	所属時期	No.	遺構名	区	長軸	短軸	深さ	出土遺物	所属時期
18	S.K.28	2	91	71	19			27	S.K.49	2	125	99	22	上漆器片(羽目)	
19	S.K.29	2	91	72	20.6	漆×フロ+土漆器片(内黒灰)		28	S.K.55	2	79	78	20		
20	S.K.41	2	59	39	7			29	S.K.59	3	108	103	4.4	漆×フロ+上漆器片	
21	S.K.14	3	185	90	25.5			40	S.K.64	3	84	67	29.5		
22	S.K.19	3	74	58	16.5			41	S.K.56	3	63	69	17.3		
23	S.K.15	3	123	85	28	木製品(漆油不透明内)		42	S.K.65	3	144	100	11.5		
24	S.K.26	3	118	75	17			43	S.K.63	3	83	61	5.6		
25	S.K.28	3	76	58	15			44	S.K.64	3	106	83	23	漆×フロ+土漆器片	
26	S.K.17	3	75	65	17.8	漆×フロ+土漆器片		45	S.K.65	3	140	107	14.4		
26	S.K.29	3	(47)	29	9	漆×フロ+土漆器片		46	S.K.66	3	169	15.5	29.9	漆×フロ+土漆器片	
27	S.K.33	3	100	94	14			47	S.K.66	3	74	72	20.3		
28	S.K.31	3	175	105	17.8	漆×フロ+土漆器片		48	S.K.69	3	69	44	15.5	漆×フロ+土漆器片	
29	S.K.34	3	151	83	28.1			49	S.K.71	3	177	167	41.7		
30	S.K.36	3	140	120	15.9	漆×フロ+土漆器片		50	S.K.70	3	98以上	129	10		
31	S.K.37	3	112	136	27	漆×フロ+上漆器片		51	S.K.76	3	198	99	11.1		
32	S.K.45	3	205	83	19.1	漆×フロ+土漆器片		52	S.K.79	3	106以上	82	11.4		
33	S.K.42	3	152	115	20.8	漆×フロ+土漆器片		53	S.K.82	3	116	68	40.1	漆×フロ+土漆器片	
34	S.K.43	3	198	142	50.5	漆×フロ+土漆器片		54	S.K.80	3	212	185	51	漆×フロ+土漆器片	
35	S.K.48	3	169	105	33	漆油灰陶片		55	S.K.88	3	243	114	14.7	漆×土漆器片	
36	S.K.46	3	184	42	34.2	漆×フロ+土漆器片									

第28表 土坑観察表(1)

地番	区	表	地物	深さ	出 土 造 物	所属時期	地番	区	表	地物	深さ	出 土 造 物	所属時期	
56	S K67	3	268	195	49.3	陶器片、瓦片(49.3cm)、木製品(用途不明孔状製品)	77	S K7	4	67	52	16.4	青クロ上輪面鏡片	
57	S K91	3	1342上	80	23.9		78	S K11	4	55	51	9.9	青クロ上輪面鏡片	
58	S K93	3	831上	65	31.7	青クロ上輪面鏡片	79	S K13	4	114	104	56		
59	S K95	3	62	51	17		80	S K16	4	66	39	15.7		
60	S K92	3	317	220	65.5	青クロ上輪面鏡片	81	S K9	4	188	136	64.3	木製品(用途不明孔状製品)	
61	S K83	3	2342上	80	18.6	青クロ上輪面鏡片	82	S K12	4	179	151	62.5		
62	S K109	3	284	183	34.1		83	S K14	4	172	142	34.6		
63	S K110	3	266上	255以上	83.7	青クロ上輪面鏡片(内裏环)	84	S K20	4	59	54	29.8		
64	S K108	3	79	66	11.8	青クロ上輪面鏡片	85	S K21	4	51	33	20	青クロ上輪面鏡片	
65	S K98	3	164	51以上	31	青クロ上輪面鏡片	86	S K15	4	113	89	16.7		
66	S K95	3	94	60	12.1	青クロ上輪面鏡片	87	S K22	4	622上	30	4.6	青クロ上輪面鏡片	
67	S K92	3	52	48	26.3		88	S K23	4	68	49	8		
68	S K99	3	103	215以上	10	青クロ上輪面鏡片	89	S K72	4	138	125	56.5	木製品(用途不明材)	
69	S K100	3	65	32	7.9		90	S K85	4	66	54	28.2		
70	S K47	3	133	67	39.8	青クロ上輪面鏡片	91	S K86	4	872上	83	59	青クロ上輪面鏡片	
71	S K94	3	109上	79	29.6		92	S K87	4	132	116	42.5		
72	S K1	4	78	42	25.3		93	S K103	4	158	113以上	18.5		
73	S K2	4	91	78	26.1		94	S K104	4	96	76	17.4	青クロ上輪面鏡片	
74	S K3	4	125	54	5	青クロ上輪面鏡片	95	S K105	4	119	85	34.5		
75	S K5	4	64	52	14.9		96	S K107	4	73	31以上	16.2		
76	S K6	4	131	55	15.5	青クロ上輪面鏡片								

第29表 土坑観察表(2)

18 SK38														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	10Y R 3/2	底褐色	砂			2	2.5Y G/3	オリーブ褐色	砂					
19 SK39														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	10Y R 3/2	暗褐色	砂											
20 SK41														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	10Y R 2/2	底褐色	砂質シルト			3	SY5/2	灰オーブー色	砂					
2	2.5Y G/6	明褐色	砂											
22 SK24														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	10Y R 2/2	底褐色	砂質シルト			4	2.5Y G/1	底褐色	砂					
2	2.5Y G/6	明褐色	砂			5	10Y R 1/7	黑色						
23 SK19														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	10Y R 2/1	底色	シルト質土											
23 SK29														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	2.5Y S/3	底褐色	シルト質砂			2	10Y R 3/4	底褐色	灰					
2	2.5Y S/3	底褐色	砂			4	10Y R 4/1	灰色	砂					
24 SK26														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	10Y R 1/7	底色	シルト質砂	粘性やあります。		3	10Y R 3/4	底褐色	砂					
2	2.5Y S/3	底褐色	砂			4	2.5Y S/1	底褐色	砂					
25 SK25														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	2.5Y S/3	底褐色	シルト質砂	泥化物を全体に多量に含む。		2	10Y R 3/4	底褐色	灰					
23 SK25														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	2.5Y S/3	底褐色	砂	泥化物を多量に含む。										
24 SK17														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	2.5Y A/4	灰風色	砂質シルト	礫土、泥化物を含む。		3	2.5Y A/2	硫黃風色	砂質シルト					
2	2.5Y S/3	底褐色	砂			4	2.5Y G/4	オーリーブ褐色	砂					
24 SK25														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	10Y R 3/1	底褐色	砂	黑色粘土少ブロッサム、鉄土を含む		2	10Y R 4/3	灰褐色	砂	暗褐色土上を小ブロックで少量含む。				
23 SK38														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	2.5Y S/3	底褐色	砂			3	2.5Y G/4	オーリーブ褐色	砂					
2	2.5Y G/3	オーリーブ褐色	砂											
23 SK31														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	2.5Y S/2	底風色	砂			3	2.5Y G/3	オーリーブ褐色	砂					
2	2.5Y S/4	底褐色(1層)	砂			4	2.5Y G/4	オーリーブ褐色	砂					
23 SK36														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	2.5Y S/3	オーリーブ褐色	砂											
23 SK27														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	2.5Y G/4	オーリーブ褐色	砂			2	2.5Y S/4	底褐色	砂					
23 SK45														
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調
1	2.5Y G/3	オーリーブ褐色	砂			2	2.5Y S/6	底褐色	砂					

第30表 土坑堆積土質記表(1)

23 SK42	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y3/2	暗褐色	砂				3	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂				
	2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂											
24 SK43	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y4/2	暗灰褐色	シルト質				3	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂				
	2	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂											
25 SK44	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y3/1	黑色	粘土			未分解の植物遺体を多量に含む。炭化物を 多量に含む。全般的に砂を含む。	3	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂				
	2	2.5Y3/2	暗褐色	砂			黒褐色の粘土を大小のブロックで含む。								
26 SK45	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	7.5YR2/1	黑色	粘土			未分解の植物遺体を多量に含む。炭化物を 含む。	3	10YR5/2	灰灰褐色	砂				
	2	10YR5/6	深褐色	砂											
27 SK46	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y3/1	黑色	砂質シルト			灰白色火成岩をブロックで含む。	3	10YR4/4	褐色	砂			黑色粘土をゾックで少量含む。炭化物を 少量含む。	
	2	7.5YR2/3	深褐色	粘土			未分解の植物遺体を多量に含む。全般的に 黒褐色を少量含む。炭化物を少量含む。	4	10YR4/4	褐色	砂				
28 SK47	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR3/3	暗褐色	砂				2	10YR5/4	灰褐色	砂				
29 SK48	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR4/4	褐色	砂			黒褐色粘土を少ブロックで含む。								
30 SK49	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y6/6	明黃褐色	砂			黑色粘土をゾックで多量に含む。								
31 SK50	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR4/1	褐色	砂			黒褐色粘土を少ブロックで含む。								
32 SK51	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y6/6	明黃褐色	砂											
33 SK52	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR5/4	灰褐色	砂			黒褐色粘土を大小のブロックで含む。未分 解の植物遺体を少含む。								
34 SK53	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR5/4	灰褐色	砂			黒褐色粘土を大小のゾックで含む。未分 解の植物遺体を少含む。								
35 SK54	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y3/2	暗褐色	砂質シルト			上層に炭化物を少量含む。	3	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂			未分解の植物遺体を塊状に含む。	
36 SK55	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR3/3	暗褐色	砂				2	10YR5/4	灰褐色	砂				
37 SK56	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR4/1	褐色	砂											
38 SK57	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR5/4	灰褐色	砂											
39 SK58	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y3/2	暗褐色	砂質シルト			上層に炭化物を少量含む。	3	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂			未分解の植物遺体を塊状に含む。	
40 SK59	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR5/4	灰褐色	砂											
41 SK60	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR5/4	灰褐色	砂											
42 SK61	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂											
43 SK62	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂											
44 SK63	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR5/4	灰褐色	砂			黒褐色粘土を大小のゾックで含む。未分 解の植物遺体を少含む。								
45 SK64	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y3/2	暗褐色	砂質シルト			上層に炭化物を少量含む。	3	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂			未分解の植物遺体を塊状に含む。	
46 SK65	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR5/4	灰褐色	砂											
47 SK66	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂											
48 SK67	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂											
49 SK68	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂											
50 SK69	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂											
51 SK70	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR3/1	暗褐色	粘土質シルト			炭化物粘土を大小ブロックで少量含む。	2	2.5Y6/1	洪灰褐色	砂質シルト				
52 SK71	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR3/1	暗褐色	粘土質シルト											
53 SK72	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y4/3	オリーブ褐色	砂											
54 SK73	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	10YR3/4	灰褐色	砂			未分解の植物遺体を少量含む。								
55 SK74	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考	
	1	2.5Y3/1	褐色	粘土質シルト			未分解の植物遺体を含む。	3	SY5/1	灰色	砂			未分解の植物遺体をごく少含む。	
	2	2.5Y3/1	褐色	砂質シルト			未分解の植物遺体を少量含む。								

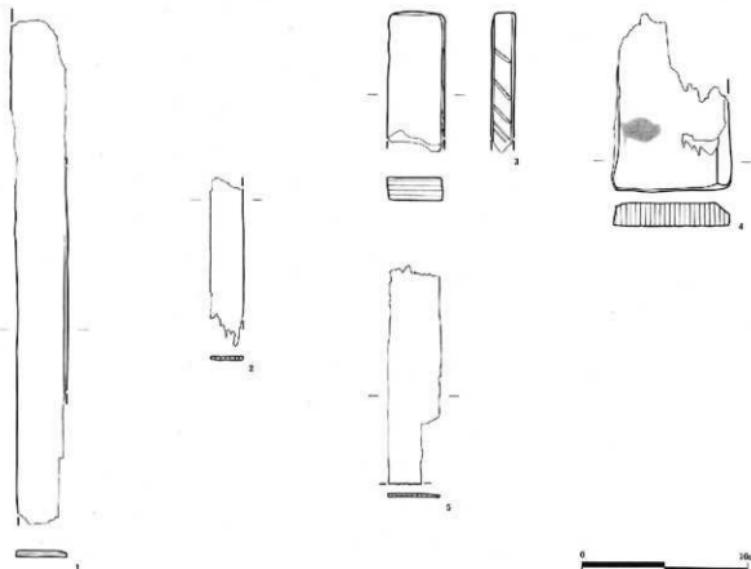
第31表 土坑堆積土註記表(2)

54 SK89	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	10YR 3/3	にじい・黄褐色	砂質シルト	炭化物を少量含む。	2 b	2.5G Y5/1	オーラーピク色	砂	未分解の植物遺体を少量含む。根遺元。	3	2.5G Y4/1	暗オーラーピク色	砂	未分解の植物遺体を含む。
2 a	2.5G Y6/1	オーラーピク色		根遺元										
55 SK95	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	2.5YR 2/1	赤褐色	砂	東上部に灰白色火成岩をブロックで含む。	3	10YR 4/6	褐色	砂						
2	5YR 2/1	褐褐色	砂	灰白色火成岩をブロックで含む。										
56 SK67	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1							記記不備							
57 SK41	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	2.5Y 3/4	にじい・黄褐色	砂質シルト		3	2.5Y 5/3	黄褐色	砂質シルト	黄褐色の粘土小ブロックで少量含む。					
2	2.5Y 6/4	にじい・黄色	砂質シルト		4	2.5Y 5/4	黄褐色	砂質シルト						
58 SK99	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	10YR 3/2	暗褐色	砂質シルト	炭化物を少量含む。	3	2.5Y 6/3	にじい・黄色	砂質シルト						
2	10YR 4/2	灰黄褐色	砂質シルト											
59 SK82	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	10YR 2/1	褐色	砂質シルト	黄褐色の砂を小ブロックで含む。	2	10YR 6/4	にじい・黄褐色	砂質シルト	褐風化の粘土を小ブロックで含む。					
2	5Y 3/2	オーラーピク色	砂	炭化物をごく少量含む。	3	2.5Y 3/1	オーラーピク色	砂	未分解の植物遺体を多量に含む。根遺元。					
3	5Y 6/2	灰オーラーピク色	砂	根遺元。	4	2.5G Y5/1	オーラーピク色	砂	未分解の植物遺体を少量に含む。根遺元。					
60 SK83	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	10YR 3/2	暗褐色	砂		2	10YR 5/3	にじい・黄褐色	砂						
61 SK109	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	2.5Y 2/1	褐色	砂質シルト	未分解の植物遺体を含む。炭化物を斑状に含む。	3	2.5Y 5/4	黄褐色	砂						
2	2.5Y 4/3	オーラーピク色	砂	黒色のシルトを少量含む。										
62 SK110	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	2.5Y 3/2	褐色	砂	黑色の粘土をブロックで少量含む。	3 b	2.5G 4/2	灰オーラーピク色	砂						
2	2.5Y 5/2	褐色	砂	三褐色粘土の小ブロックを斑状に含む。	4	2.5Y 3/2	オーラーピク色	砂						
3 a	2.5Y 4/2	灰褐色	砂		5	2.5Y 4/2	灰オーラーピク色	砂						
63 SK108	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	2.5Y 3/3	泥オーラーピク色	砂											
64 SK98	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	2.5Y 4/2	暗褐色	砂		3	2.5Y 3/1	オーラーピク色	砂						
2	2.5Y 4/6	オーラーピク色	砂											
65 SK96	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	2.5Y 4/2	暗褐色	砂											
66 SK87	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	2.5Y 4/4	オーラーピク色	砂											
67 SK99	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	2.5Y 4/3	オーラーピク色	砂											
68 SK100	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	2.5Y 4/1	灰褐色	砂質シルト	炭化物を多く含む。	2	2.5Y 3/2	黑暗褐色	砂質シルト						
69 SK47	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	7.5Y R 3/2	暗褐色	粘土	未分解の植物遺体を多量に含む。炭化物を多量に含む。	3									
2	2.5Y 6/2	灰褐色	砂											
70 SK46	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	10Y R 4/2	灰褐色	砂質シルト	炭化物を多く含む。	2	2.5Y 2/2	オーラーピク色	砂質シルト						
2	10Y R 3/1	暗褐色	砂質シルト											
71 SK1	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	10Y R 2/2	暗褐色	砂質シルト	未分解の植物遺体を含む。										
72 SK 2	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	2.5Y 3/2	暗褐色	粘土		3	10Y R 2/2	黑暗褐色	砂質粘土						
2	10Y R 4/4	暗褐色	砂											
73 SK 3	順序	色	調	種	類	圖	考	順序	色	調	種	類	圖	考
1	10Y R 2/2	暗褐色	砂質シルト											

第32表 土坑堆積土註記表(3)

93. 土木 K 5											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	10YR 2/3	黒褐色	シルト質粘土	未分解の植物遺体を含む。		2	10Y R 4/2	灰黒褐色	砂		
94. 土木 K 6											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	10YR 3/2	黒褐色	砂質シルト								
95. 土木 K 11											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	2,5Y 3/1	黒褐色	砂質シルト	未分解の植物遺体を含む。							
96. 土木 K 16											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	10Y R 2/2	黒褐色	砂質シルト								
97. 土木 K 9											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	2,5Y 3/1	黒褐色	砂質シルト	未分解の植物遺体を少量含む。		4	(10) YR 4/2 にぶい 黒褐色	砂質		③、④の互換	
2	10Y R 1/1	黑色	灰			5	(2,5) 5/3/1 黑褐色	砂質シルト		③、④の互換	
3	2,5Y 3/1	暗灰褐色	砂質シルト	未分解の植物遺体を少量含む。		6	(2,5) 5/4/2 オリーブ褐色	砂質	灰灰質粘土	未分解の植物遺体を含む。	
4	2,5Y 3/1	黑色	粘土	骨炭灰を含む。未分解の植物遺体を含む。		7	7,5Y 5/2 灰オリーブ色	砂	弱灰化。		
						8	5Y 3/1 オリーブ褐色	砂	弱灰化。		
98. 土木 K 12											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	2,5Y 3/1	黒褐色	砂質シルト			5	2,5Y 1/1 黑褐色	砂質シルト			
2	10Y R 1/1	暗褐色	灰灰質粘土	灰灰質粘土上。		6	2,5Y 2/1 灰色	灰灰質粘土			
3	2,5Y 3/1	暗褐色	砂質シルト	未分解の植物遺体を少量含む。		7	7,5Y 5/2 灰オリーブ色	砂	弱灰化。		
4	2,5Y 3/1	黑色	粘土	骨炭灰を含む。未分解の植物遺体を含む。		8	5Y 3/1 オリーブ褐色	砂	弱灰化。		
99. 土木 K 14											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	5Y 3/1	オリーブ色	粘土質シルト	粘土の水田耕作上。		4	2,5Y 1/1 黑褐色	シルト質粘土	未分解の植物遺体を少量含む。		
2	2,5Y 3/1	黒褐色	砂質シルト			5	7,5Y 3/2 オリーブ色	粘土	未分解の植物遺体を少量含む。		
3	10Y R 1/1	オリーブ黑色	粘土								
100. 土木 K 20											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	10Y R 1/2	黑色	粘土	黑色の砂を少量に含む。		2	10Y R 3/2 暗灰褐色	砂			
101. 土木 K 21											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	2,5Y 1/1	灰色	砂質シルト	暗灰褐色の砂をブロッタ状に含む。		3	2,5Y 4/2 暗灰褐色	砂			
2	2,5Y 5/4	暗褐色	砂								
102. 土木 K 15											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	10Y R 2/2	黒褐色	砂質シルト								
103. 土木 K 22											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	10Y R 1/1	黑色	砂質シルト								
104. 土木 K 23											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	10Y R 3/1	黑色	砂質シルト								
105. 土木 K 25											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	10Y R 2/2	黑色	砂質シルト								
106. 土木 K 26											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	2,5Y 3/2	黑色	砂質シルト			4	2,5Y 3/1 型褐色	砂			
2	7,5Y R	黑色	粘土	未分解の植物遺体を含む。		5	2,5Y 4/2 暗灰褐色	砂			
3	10Y R 4/1	黑色	粘土	全般的に砂を含む。							
107. 土木 K 28											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	7,5Y R 1/1,7/1	黑色	粘土	未分解の植物遺体を多量に含む。							
108. 土木 K 36											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	2,5Y 4/2	オリーブ褐色	砂	氯化物を少量含む。		2	2,5Y 5/4 黑褐色	砂			
109. 土木 K 37											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	10Y R 3/1	黑色	砂質シルト			3	10Y R 2/1 黑色	砂			
2	10Y R 4/2	灰黑褐色	砂質シルト			4	2,5Y 2/1 黑色	砂質シルト	氯化物を少量含む。		
110. 土木 K 103											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	2,5Y 4/2	暗灰褐色	砂			2	2,5Y 4/2 オリーブ褐色	砂			
111. 土木 K 104											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	10Y R 3/2	黑色	砂質シルト			3	10Y R 4/2 灰黑褐色	砂			
2	10Y R 2/2	黑色	砂質シルト	未分解の植物遺体を含む。							
112. 土木 K 105											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	10Y R 2/1	黑色	粘土	未分解の植物遺体を多量に含む。		3	10Y R 4/3 にぶい 黑褐色	砂			
2	2,5Y 4/2	暗灰褐色	砂	未分解の植物遺体を多量に含む。							
113. 土木 K 107											
順序	色	調	種類	固	考	順序	色	調	種類	固	考
1	10Y R 1/1	黑色	粘土質シルト	氯化物を少量含む。							

第33表 土坑堆積土註記表(4)



番号	登録号	種別	器種	出土位置	測定	素材	木取り	寸法(㎜)			写真図版
								長さ	幅	厚さ	
1	L-25	木製品	用途不明 木製品		-	板材	板目	(31.1)	3.2	0.4	両側面欠損 60-5

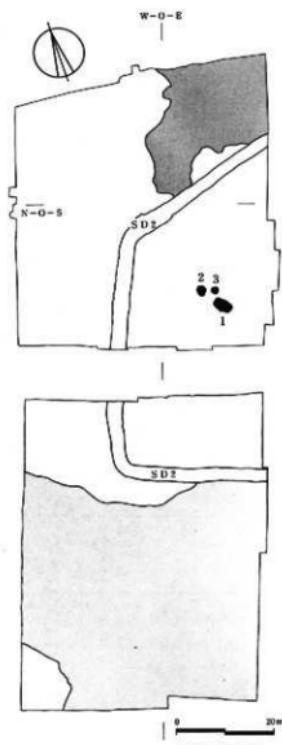
番号	登録号	種別	器種	出土位置	測定	素材	木取り	寸法(㎜)			写真図版
								長さ	幅	厚さ	
2	L-114	木製品	用途不明 木製品		-	板材	板目	(10.3)	2.0	0.3	両端、左側面欠損

番号	登録号	種別	器種	出土位置	測定	素材	木取り	寸法(㎜)			写真図版
								長さ	幅	厚さ	
3	L-75	木製品	用途不明 木製品		ハンノキ調の裏	板材	板目	(8.6)	3.4	1.4	右側面に削みあり、下端欠損。
4	L-76	木製品	用途不明 木製品		-	板材	板目	(10.8)	(7.2)	1.4	一部分に削痕あり、上部、左側面欠損。
5	L-74	木製品	用途不明 木製品		スギ	板材	板目	(13.4)	(2.2)	0.2	上端、両側面欠損。

第108図 SK 9・48・67土坑出土遺物

4. 井戸跡

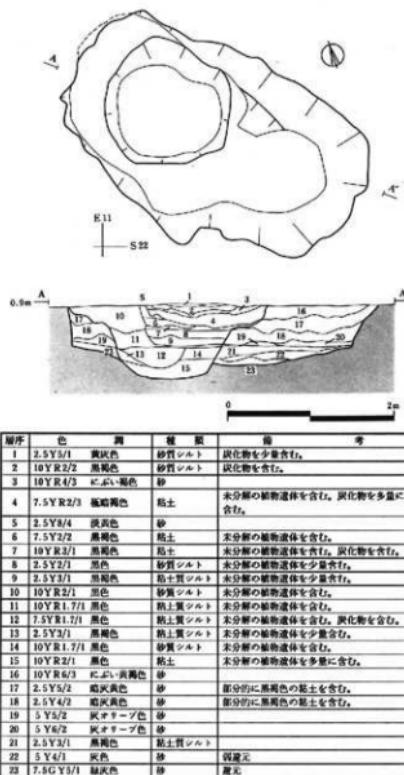
井戸跡は3区で3基が検出されたが、位置的にいずれも近接している。これらのうちSE2、3井戸跡からは井筒や枠材などの施設が確認された。



第109図 井戸跡位置図

(I) SE1井戸跡

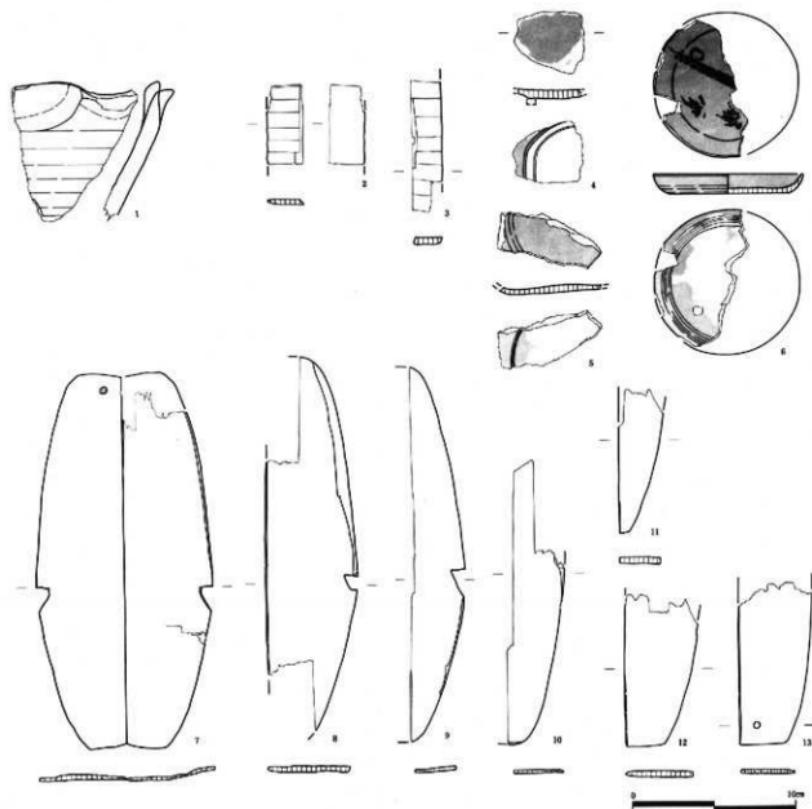
造構状況(第110図)



第110図 SE1井戸跡平面・断面図

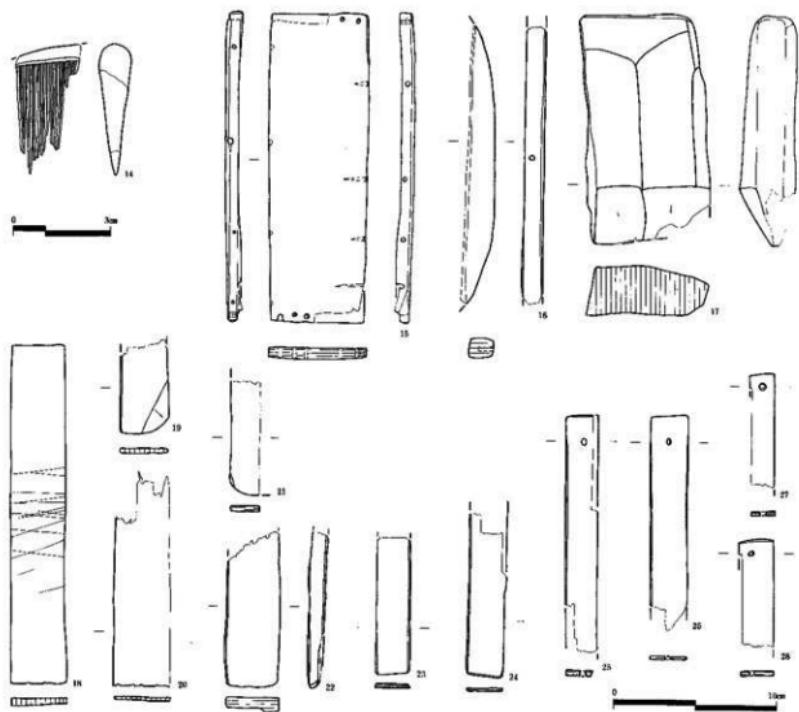
3区S-21、E-12付近で検出された。SD119溝跡を切っている。この土坑は検出当初は2つの平面プランが重複する状態で確認された。このうち重複の新しい内側の径2.5m前後の円形プランの掘り下げを先行して行ったが、井戸枠や井筒などの施設は検出されなかった。しかしこの底面から、曲物の破片が2点出土したことから、後に掘られた円形の土坑は井筒などの施設を撤去するためのものと推定しておきたい。掘り方の平面形はやや乱れた椭円形を呈し、長軸3.82m、短軸は2.35mを計る。深さは最深76cmで、底面高は0.1mである。堆積土は合計で23層に分けられる。このうち1~15層は撤去土坑の堆積土で、全体的に未分解の植物遺体を含んでいる。16~23層は掘り方埋土で砂であるが、底面に近い22、23層は還元されている。

出土遺物（第111・112図）



番号	種類 器物	形 状	出土位置	外 四 調 整			内 四 調 整			現 存	分 類	備 考	写真図版
				取 扱 方	板 材	木取り	長 さ	幅 寸	厚 さ				
1 I-29	陶器 片口部	曲 物	ロドカナゲ	板 材	板 材	板 材	長 さ (4.9)	幅 寸 (2.2)	厚 さ 0.3	右側に点打するケビや縫が、ほほ等間隔で刻まれている。両端と右側面が欠損。			39-3
2 L-113	木製品 (削物)	曲 物	—	板 材	板 材	板 材	長 さ (8.0)	幅 寸 1.0	厚 さ 0.4	右側に点打するケビや縫が、ほほ等間隔で刻まれている。両端と左側面が欠損。			54-7
3 L-98	木製品 (削物)	曲 物	—	板 材	板 材	板 材	長 さ (8.0)	幅 寸 1.0	厚 さ 0.4	右側に点打するケビや縫が、ほほ等間隔で刻まれている。両端と左側面が欠損。			54-5
4 L-97	木製品 (削物)	直 線	テヤキ	—	板 材	板 材	長 さ (8.0)	幅 寸 —	厚 さ —	無縫合り。先端が欠損。底深 (6.2cm)、最高 (0.6cm)			53-3
5 L-276	木製品 (削物)	直 線	テヤキ	—	板 材	板 材	長 さ (8.0)	幅 寸 —	厚 さ —	無縫合り。先端が欠損。底深 (8.2cm)、最高 (0.5cm)			54-1
6 L-274	木製品 (削物)	直 線	テヤキ	—	板 材	板 材	長 さ (8.0)	幅 寸 —	厚 さ —	無縫合り。内側に点打つて草花文様が彫かれている。約1/2欠損。			54-1
7 L-1	木製品 草 履	モノ足の一種	板 材	板 材	板 材	板 材	長 さ 23.2	幅 寸 10.8	厚 さ 0.4	内側に点打つて草花文様があり。先端部に貫通孔 (径0.4cm) 1ヶあり。先端の一帯が欠損。			55-8
8 L-146	木製品 草 履	モノ足の一種	板 材	板 材	板 材	板 材	長 さ (22.0)	幅 寸 5.7	厚 さ 0.1	内側に点打つて草花文様があり。左側面の内側が欠損。			56-2
9 L-20	木製品 草 履	モノ足の一種	板 材	板 材	板 材	板 材	長 さ (22.0)	幅 寸 (2.8)	厚 さ 0.2	右側面に点打つて草花文様があり。左側面が欠損。			56-1
10 L-21	木製品 草 履	モノ足の一種	板 材	板 材	板 材	板 材	長 さ (22.0)	幅 寸 (2.8)	厚 さ 0.2	右側面に点打つて草花文様があり。左側面が欠損。			56-3
11 L-28	木製品 草 履	モノ足の一種	板 材	板 材	板 材	板 材	長 さ (8.0)	幅 寸 (2.6)	厚 さ 0.4	上端が欠損。			56-6
12 L-36	木製品 草 履	モノ足の一種	ス ギ	板 材	板 材	板 材	長 さ (9.4)	幅 寸 (4.5)	厚 さ 0.4	上端が欠損。			56-4
13 L-27	木製品 草 履	モノ足の一種	板 材	板 材	板 材	板 材	長 さ (10.0)	幅 寸 (4.5)	厚 さ 0.3	下端に貫通孔 (径0.4cm) 1ヶあり。上端が欠損。			56-5

第111図 S E 1 戸跡出土遺物(1)



番号	記 記	種 別	器 型	出土位置	材 种	木取り	伝 組	寸	備 考	参考文献
							長	幅	高	厚
							cm	cm	cm	cm
14	L-7	木製品	箱		イヌノキ風の一種	板 材	一	4.0	(2.1)	(1.0)
15	L-149	木製品	用具不明 木製品		ヒノキ風の一種	板 材	板 目	19.1	6.1	1.0
16	L-150	木製品	用具不明 木製品		アスツド	板 材	板 目	(17.3)	(1.8)	1.25
17	L-99	木製品	用具不明 木製品		角 材	板 目		14.2	7.5	3.4
18	L-144	木製品	用具不明 木製品		ス ガ	板 材	板 目	20.9	3.4	0.5
19	L-147	木製品	キノキ風の一種		板 材	板 目	(5.4)	2.0	0.3	
20	L-145	木製品	ヒノキ風の一種		板 材	板 目	(13.2)	(3.5)	0.3	
21	L-148	木製品	キノキ風の 一種		板 材	板 目	(7.1)	(1.8)	0.4	
22	L-77	木製品	用具不明 木製品		—	板 材	板 目	(9.4)	3.3	0.9
23	L-19	木製品	用具不明 木製品		—	板 材	板 目	(8.4)	2.1	0.3
24	L-17	木製品	用具不明 木製品		—	板 材	板 目	(10.0)	2.3	0.2
25	L-18	木製品	用具不明 木製品		—	板 材	板 目	(14.6)	2.0	2.3
26	L-16	木製品	用具不明 木製品		—	板 材	板 目	(13.3)	2.3	0.3
27	L-143	木製品	用具不明 木製品	セミ風の一種	板 材	板 目	(7.0)	1.5	0.3	
28	L-142	木製品	用具不明 木製品	セミ風の一種	板 材	板 目	(6.8)	2.1	0.4	

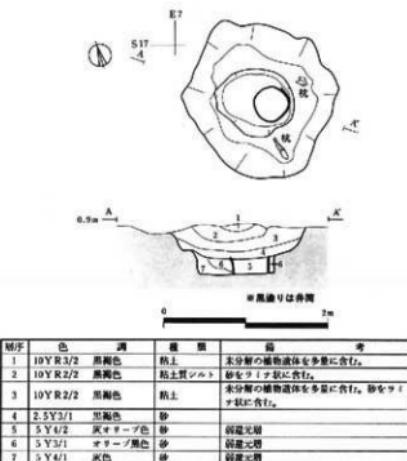
第112図 S E I 井戸跡出土遺物(2)

掘り方埋土から陶器1点、漆器2点が出土したほか、撤去土坑堆積土中より多数の木製遺物が出土した。しかし木製遺物の大半は破損の著しいもので、図化し得たのは11点である。

1は掘り方埋土22層から出土した陶器で、鉄軸の片口鉢である。片口部分は指によるナデ調整がみとめられる。胎土は粗く砂粒が目立ち、焼成もあまくやや軟質である。詳細は明らかでないが、在地産の中世陶器と推定される。2・3は柵目薄板材の断片であるが、片面に年輪方向に直行するケビキ線が刻まれており曲物と判断される。なお双方ともに撤去土坑底面からの出土で、本来井戸跡に敷設されていた井筒の一部である可能性を考えておきたい。4・5は漆器の皿あるいは碗で、ともに底部の破片である。4は高台が削り出されており、内面には黒漆が施されている。外表面は破損しているために明瞭ではないが、高台の内側にもわずかに黒漆の残存がみとめられ、本来は全面に塗りが施されていたものと思われる。5は内面にロクロ痕跡がみられる。高台はつかず、6の形態に近いものと考えられる。外底部で剥落が著しいものの、全面に黒漆がみとめられる。6は掘り方埋土22層から出土した漆器の皿である。木地は薄手で、全面に黒漆を施した後、見込み部分に朱漆で草花文様が描かれている。棒状のものは竹のようにも見える。また全体的に漆が劣化しているため、木地のロクロ痕跡が両面でみとめられる。7~13は草履である。7が最も良好な資料であるが、左右対称に削った柵目の薄板を2枚で一对としている。先端部分には小孔が穿たれ、中央よりやや下方の両側縁には三角形の切り取りがみられる。8~13はいずれも破片であるが8~10には側縁の切り取りがみとめられる。8のものは方形、9は三角形を呈し形状に差異がみられる。13には先端部に小孔がある。14は櫛である。全体的な様相は知り得ないが、棘はゆるい弧を描くものと思われる。櫛歯の間隔はほとんどなく、密につまっている。15は板目の板材が用いられたものであるが詳しい用途は不明である。両側面および表面から裏面への、針穴らしい小孔がみとめられる。箱物の一部である可能性も考えられる。15は円形状製品の端部であるが、断片であるために詳細は知り得ない。側面に小孔があり、曲物などと組む容器類の底（蓋）板などが考えられる。17は用途不明の角材製品である。18~28は薄板で作られた札状の製品である。18は表面中央部分に刃物痕のような細かいキズが多数みとめられる。19・21は先端部がへラ状に加工されている。25~28は端部付近に小孔がみとめられる。なお18~28の札状製品は、赤外線テレビによる観察を行ったが、いずれからも墨跡は確認されなかった。

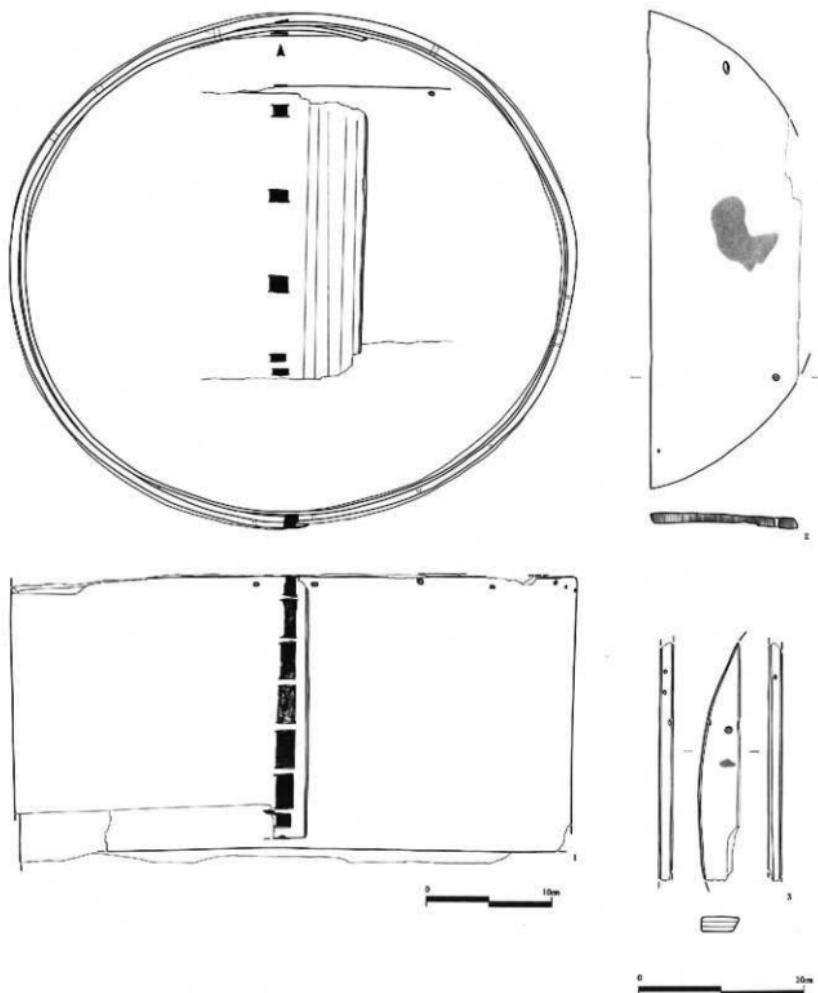
(2) S E 2 井戸跡

遺構状況（第113図）



第113図 S E 2 井戸跡平面・断面図

3区S-18、E-8付近で検出された。SD7溝跡を切っている。平面形は変形しているが方形に近く、長軸1.85m、短軸は1.72mを計る。深さは65cmで、底面の標高は0.2m前後である。掘り方の断面形は上下で異なり、上部は舟底形であるが、下部の井筒掘り方はほぼ垂直な円筒形を呈している。井筒掘り方部分は平面形が橢円形を呈し、長軸1.0m、短軸は82cmを計る。井筒はこの掘り方の東端に寄せて設置されている。なお良好に残存する井筒曲物は1個体のみであるが、この上端外縁に部分的に別の曲物片が密着する状態でみとめられ、機能時には少なくとも2段以上の曲物が横み重ねられていたものと判断される。またこの井戸跡では井側、井桁等の施設は確認されなかつたが、上部掘り方で2本の打ち込み杭が検出され、形態は不明であるものの井戸枠が組まれて



番号	登録番号	種別	器種	出土位置	測定	素材	木取り	直 径 厚 (mm)			写真図版	
								直 径 G 3	幅 幅 G 5	厚 厚 G 5		
1	L-47	木製品	井戸器具			ヒノキ類似樹	板 材 細 日	—	—	1.8	一枚の板材で作られ、とじ痕（締痕）が2ヶ所ある。上端に貫通孔（最大径0.6cm）が1ヶである。年輪に直交するカビト部が4往復間隔で一部分に刻まれている。下端が欠損。直径65.3cm厚さ（23.2cm）。	54-13
2	L-127	木製品	管 管 (束かき)			ヒノキ風の一種	板 材 細 日	—	(12.1)	1.0	横辺に貫通孔（径0.5~1.0cm）が2ヶあり。側面が一帯である。右側縁が欠損。断定直徑(42.5cm)。	55-5
3	L-45	木製品	管 管 (束)			ヒノキ風の一種	板 材 細 日	(14.7)	(2.5)	1.0	正面に貫通孔（径0.4cm）1ヶと側縁に貫通孔（径0.3cm）1ヶ、側面2ヶあり。側面左一部にあり殆ど欠損。	54-9

第114図 SE 2 井戸跡出土遺物

いた可能性も考え得る。堆積土は全体で7層に分けられるが、6・7層は井筒掘り方の埋土である。1～3層は粘土あるいはシルトで、未分解の植物遺体を含んでいる。4層は砂である。井筒内堆積土の5層も4層と類似した砂であるが、よわい還元状態がみとめられる。6・7層は砂である。

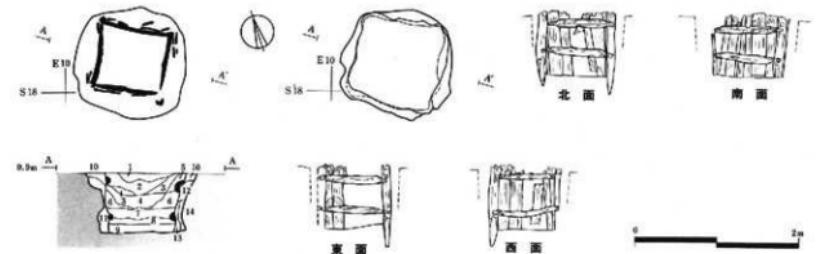
出土遺物（第114図）

木製品が3点出土した。1は底面に井筒として設置されていた曲物であるが、保存状態がきわめて良好である。やや偏平であるが整った円筒形で、直径45.3cm、高さは23.2cmを計る。2枚の征目板を丸め、前後2ヶ所で桜皮による縫じこみを行って固定している。ケビキ線は内面の縫じ合わせ端部でのみ認められる。また上端部には径5～6mm前後の貫通孔が11ヶ所で確認されるが、これらは上部に井筒を重ねる際の釘穴と考えられる。2は堆積土中から出土したもので、容器類の底あるいは蓋と考えられる。破片であるが推定直径は42.5cmほどである。縁辺に2ヶ所で貫通孔がみとめられる。3も円形を呈する製品で、容器類の底、あるいは蓋などが想定される。

(3) S E 3 井戸跡

遺構状況（第115図）

3区S-18、E-10付近で検出された。SK88土坑を切っている。平面形は方形ぎみの円形を呈し、長軸1.37m、短軸は1.35mを計る。深さは78cmで、底面の標高は0.08m前後である。掘り方の断面形は下部が抉れる臼状を呈している。掘り方には井側が組まれている。四隅に柱を打ちこみ、これに上下二段の横桟を組んだ後、外側に縱板を並べている。隅柱の間隔は一部に乱れはあるものの、ほぼ85cm前後で、比較的正確な正方形を呈している。上下2段に渡された横桟の芯距離は、南・北・東面が35cm前後、西面ではやや大きめ45cmほどである。隅柱と横桟の接続は、横桟側のホゾと隅柱側のホゾ穴を組み合わせて行われている。堆積土は合計で14層に区分され、1～9層が井側内堆積土で、10～14層が掘り方埋土である。1～9層はシルト・砂・粘土であるが全体的に未分解の植物遺体を含み、1・2・5層には炭化物の混入がみられる。9層はよわい還元状態を呈している。10～14層は砂である。



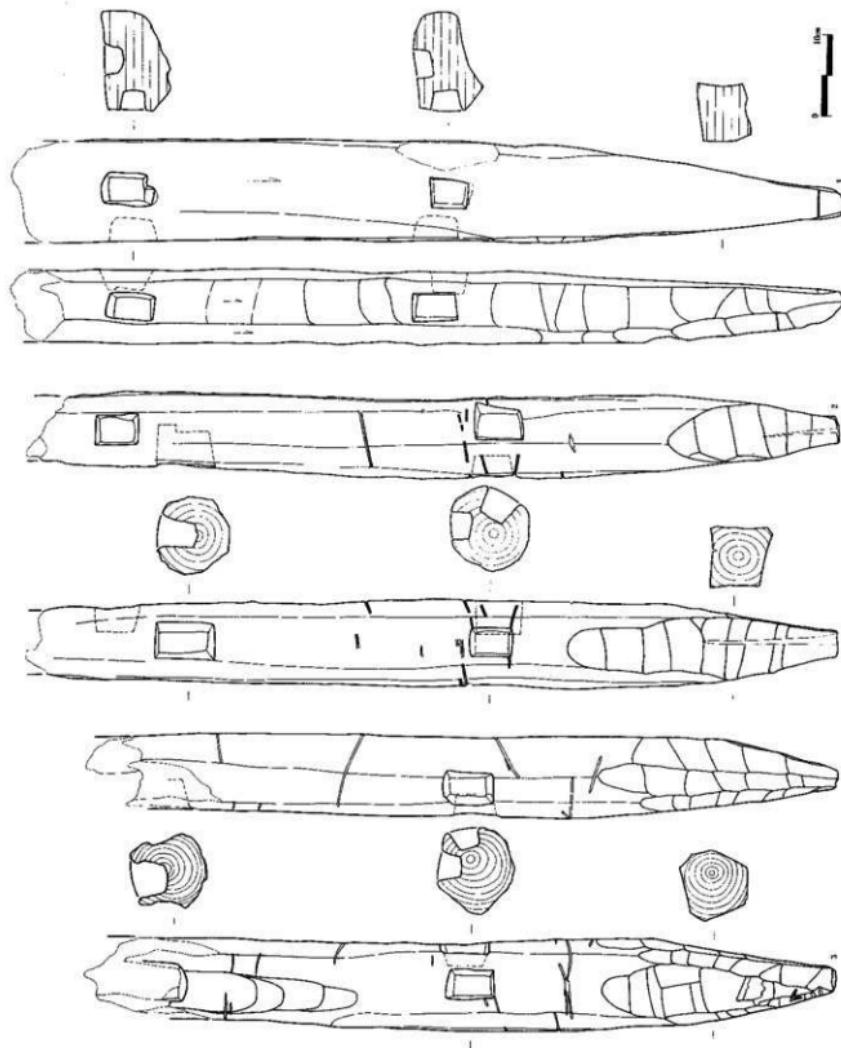
層序	色調	種類	圖号	備考	層序	色調	種類	圖号	備考
1	2.5Y2/1	黒色	粘土質シルト		5	5 Y2/1	黒色		未分解の植物遺体を含む。炭化物を少量含む。
2	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト		6	5 Y3/1	オーラー黒色		表面光。
3	10YR2/1	黒色	粘土質シルト		7	5 YR2/2	赤褐色		表面光の砂を含む。
4	2.5Y2/1	黒色	砂質シルト		8	10YR2/2	黒褐色		表面光の砂を含む。
5	2.5Y2/1	黒褐色	砂質シルト		9	2.5YR4/4	褐色		
6	2.5Y4/1	黄褐色	砂		10	10YR3/1	オーラー黒色		
7	2.5Y3/1	黒色	粘土		11	5.Y3/1	オーラー黒色		
					12				
					13				
					14				

第115図 SE 3 井戸跡平面・断面図

出土遺物（第116図～第122図）

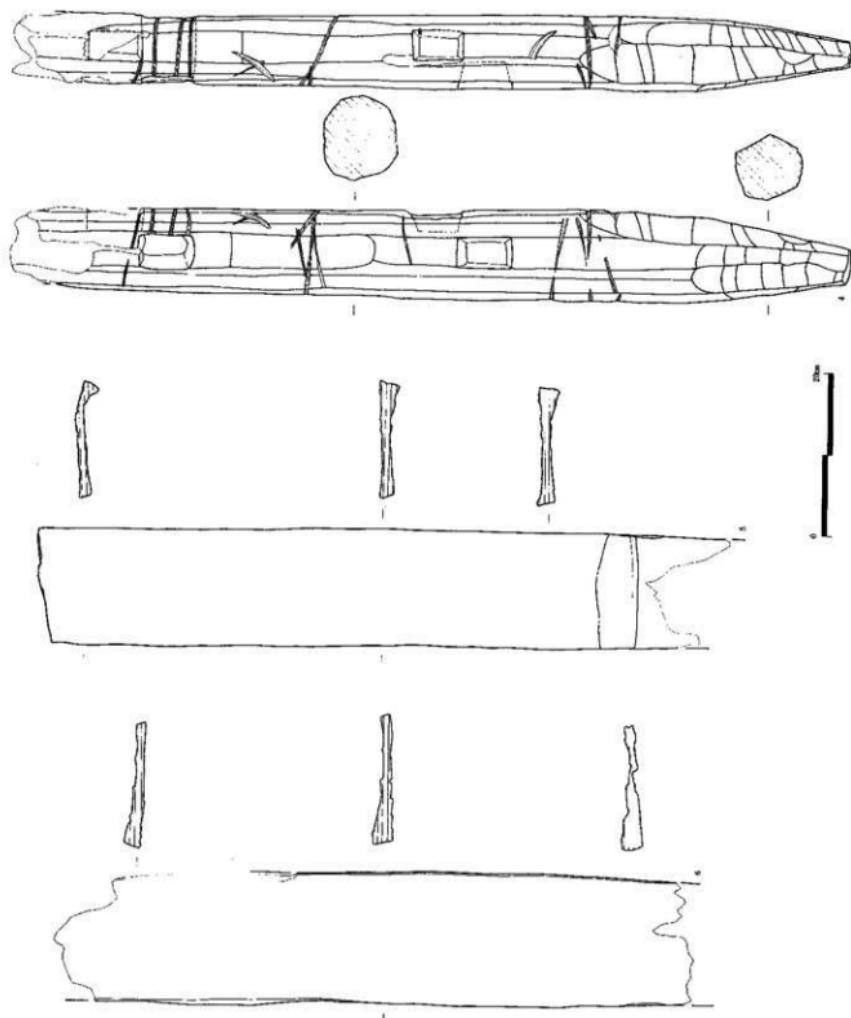
井側材のはか木製および竹製の遺物が出土したが、木製遺物は破損の著しい用途不明品が多く、図示し得たのは井側材を除くと3点である。

1～13、および15～22は井側材である。1～4は隅柱すべてでクリ材が用いられている。1・4は分割材、2・



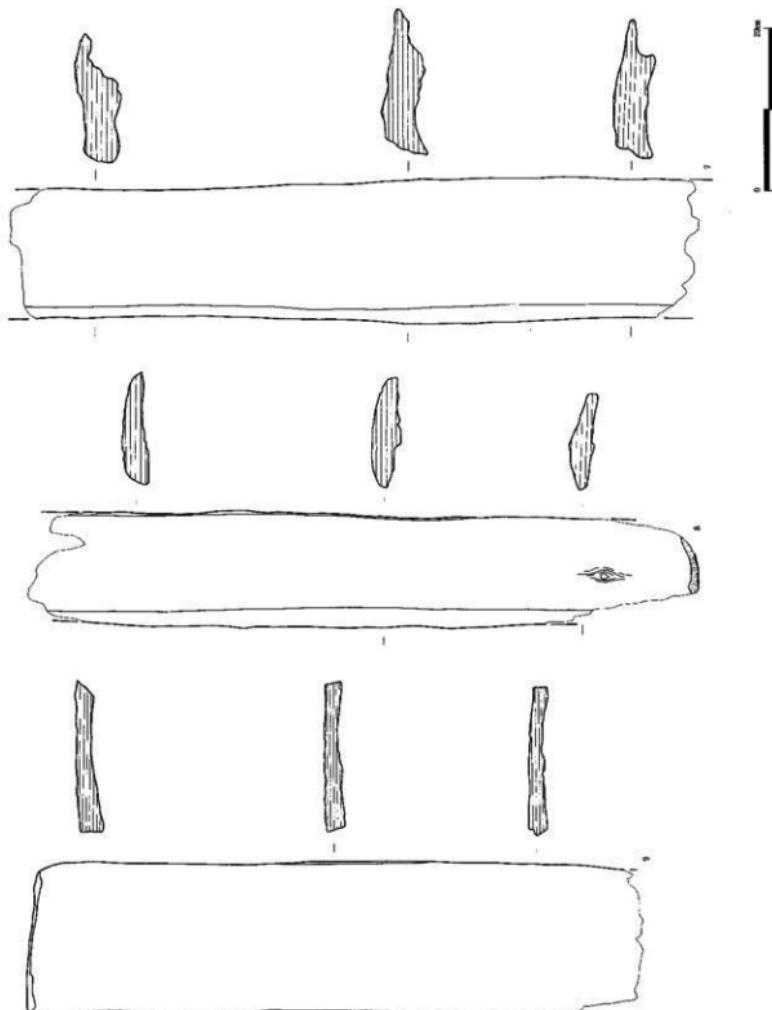
番号	登録番号	種別	原種	出土位置	材種	断面	木取り	寸 長 (cm)			写真版	
								長さ	幅	厚さ		
1	L-225	木製品	井戸枠 (北東枠)		タリ	角材	-	(102.0)	11.4	9.2	内穴が4ヶ所あり、平面は平坦で加工痕がなく、右側面に壓縮痕がある。底の先端部に擦痕あり。上端が欠損。	56-7
2	L-226	木製品	井戸枠 (西南枠)		タリ	丸太材 (芯持ち)	-	(106.0)	-	-	直径10.8cm、内穴が1ヶ所あり。壓縮痕がある。上端が欠損。	56-9
3	L-228	木製品	井戸枠 (北西枠)		タリ	丸太材 (芯持ち)	-	(91.8)	-	-	直径11.2cm、内穴が3ヶ所あり、壓縮痕がある。上端が欠損。	56-10

第116図 S E 3 井戸跡出土遺物(1)



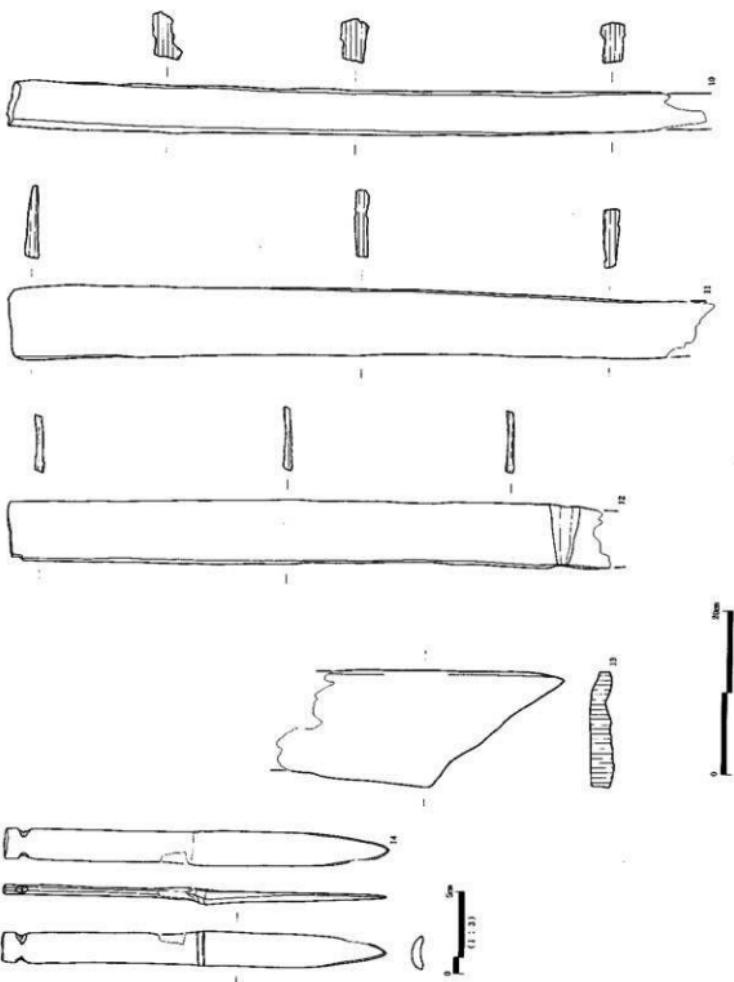
番号	登録 登記 號	種 類	基 礎	出土位置	所 在	木 材	木取り	四 方 面	備 考	写真回数
4	L-227	木製品	月戸棒 (東側柱)		トリ	分割材 (芯あり)	-	(101.7) 11.0 9.0	納穴が4ヶ所あり、裏縫合がある。上端が欠損。	56-8
5	L-234	木製品	月戸棒 (西側柱)	トリ	板	終	板 日	(83.2) 14.4 2.3	軸材の粗筋がある。上端は切断され、下端が欠損。	58-3
6	L-250	木製品	井戸棒 (北壁柱)	トリ	板	終	板 日	(77.3) 16.4 2.5	両端が欠損。	59-4

第117図 SE 3 井戸跡出土遺物(2)



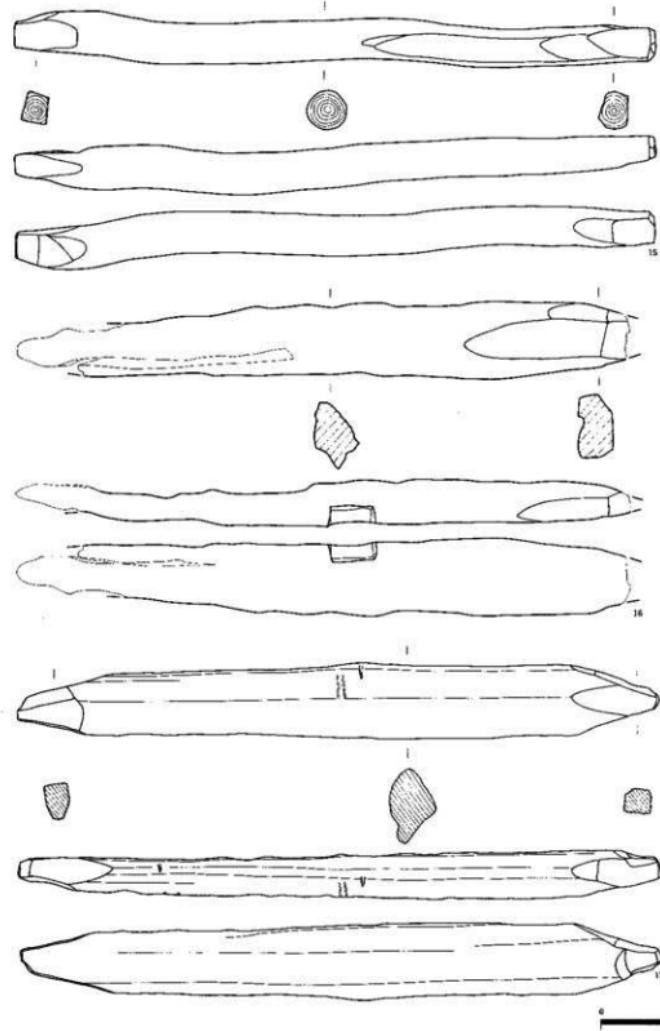
番号	管番号	種別	基部	出土位置	側面	裏面	木取り	形状 長さ 幅 厚さ	備考	写真図版
7	L-230	木製品	井戸枠 (東面枠材)	セイ風の一種	板	材	板	17.7 (83.0)	5.0 両端が欠損。	SE-4
8	L-229	木製品	井戸枠 (東面枠材)	フリ	板	材	板	14.8 (80.0)	3.5 先端部に破損あり。上端が欠損。	SE-2
9	L-241	木製品	井戸枠 (西面枠材)	セイ風の一種	板	材	板	15.6 (74.2)	2.8 下端が欠損。	SE-1

第118図 SE 3 井戸跡出土遺物(3)



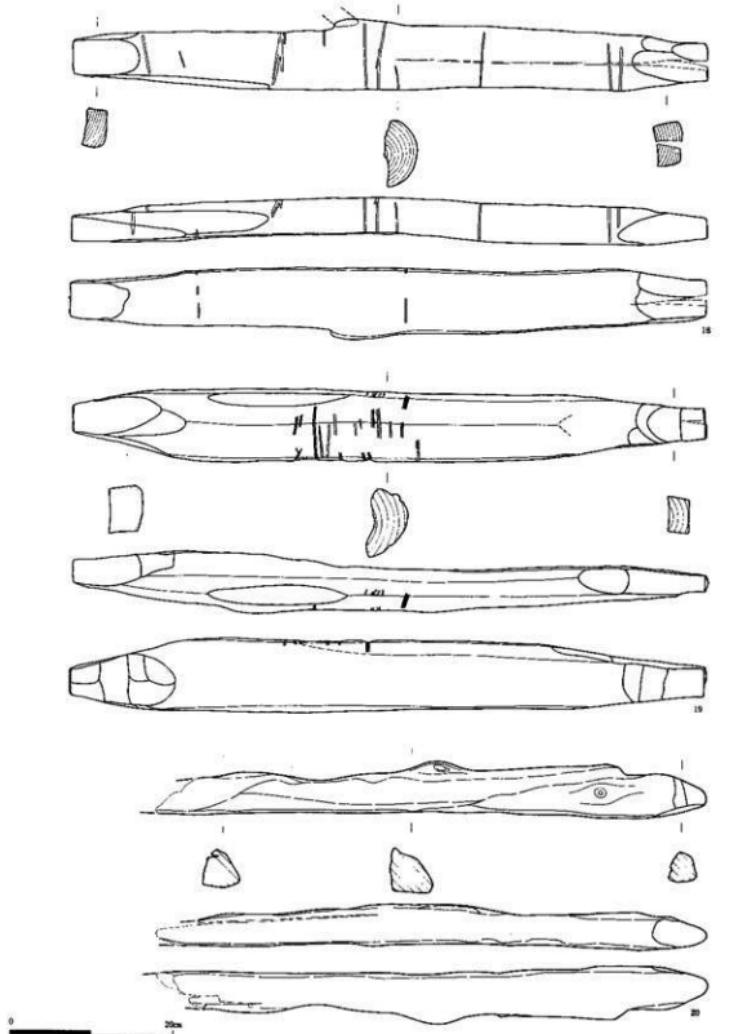
番号	存 留 名	種 別	留 槽	出土位置	固 形	測 定	木取り	寸 法 (mm)			写真図版	
								長さ	幅	厚さ		
10	L-246	木製品	井戸中 (西廻柵付)	セイノミの一種	板 材	横 日	(84.0)	5.5	3.4	上端は切削されている。下端が欠損。	59-2	
11	L-245	木製品	井戸中 (西廻柵付)	セイノミの一種	板 材	横 日	(85.0)	9.0	1.9	下端が欠損。	59-1	
12	L-238	木製品	井戸中 (西廻柵付)	セイノミの一種	板 材	横 日	(72.0)	6.0	1.1	横枠の痕跡がある。上端は切削されている。下端が欠損。	59-3	
13	L-255	木製品	井戸中 (北廻柵付)	クサ	板 材	横 日	(84.7)	14.4	2.8	先端と左側面に欠損ある。下端は切削されている。上端が欠損。	59-15	
14	L-32	木製品	竹べら状 製 品	タケ	-	-	-	23.4	2.1	0.9	上部の両側に抉りあり。ほぼ完形。	58-9

第119図 S E 3 井戸跡出土遺物(4)



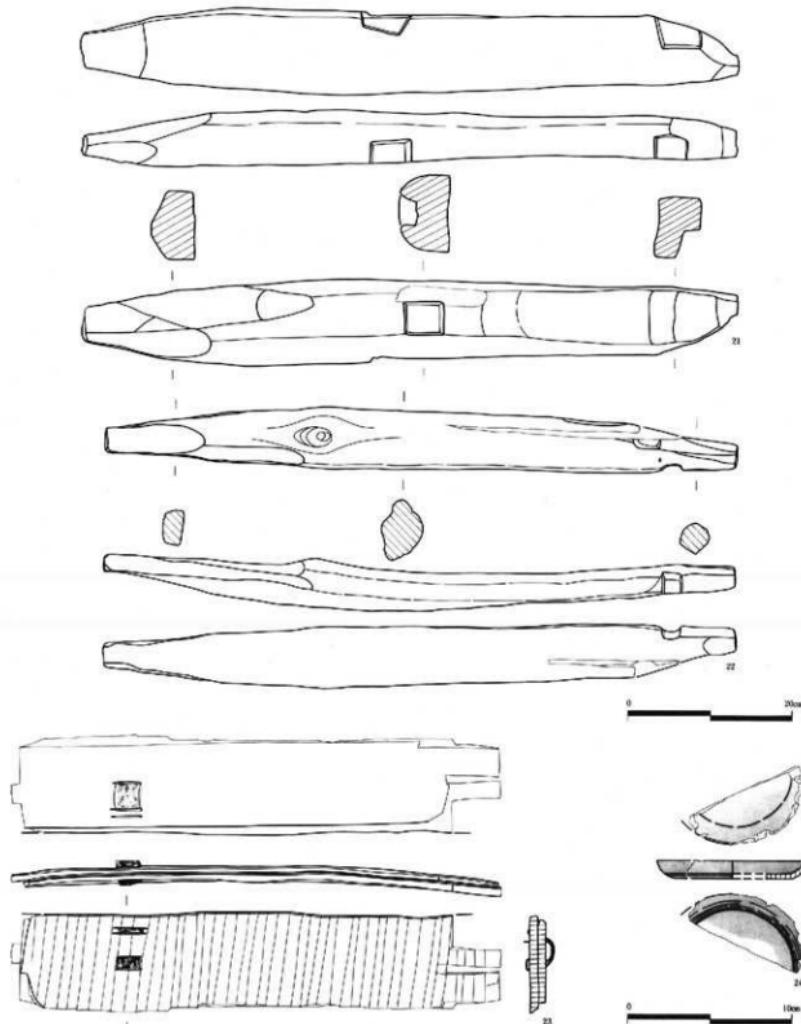
番号	登録番号	種別	器種	出土位置	測定値	高さ	木取り	寸 厘			写真図版
								長さ	幅	厚さ	
15	L-264	木製品	舟戸舟 (破片材)	コナラ属コナラ板 箇コナラ板の一端	大人材	-	77.5	-	-	直徑5.5cm。両端平削。完形。	57-4
16	L-265	木製品	舟戸舟 (破片材)	ク リ (芯抜き)	分割材	-	(74.2)	9.5	5.4	右端が削、軸用材使用か。(洞穴1ヶ所)。両端平削。	57-2
17	L-266	木製品	舟戸舟 (破片材)	ク リ (芯抜き)	分割材	-	78.0	9.2	5.8	両端が削。束縛痕あり。完形。	57-7

第120図 S E 3 井戸跡出土遺物(5)



番号	文 庫 番 号	種 別	器 種	出土位置	直 径	厚 さ	材 質	本取り	寸 法 図			写真回数
									長 さ	幅 き	厚 さ	
18	L-269	木製品	井戸枠 (鉄枠付)	ヲ 5	分断枠 (芯去り)	-	78.1	8.8	4.8	両端が丸。実縫痕があり。堅払い板1ヶ所ある。空形。	ST-6	
19	L-266	木製品	井戸枠 (鉄枠付)	ヲ 5	分断枠 (芯去り)	-	77.8	9.0	4.0	両端が丸。実縫痕がある。空形。	ST-5	
20	L-265	木製品	井戸枠 (鉄枠付)	ヲ 5	分断枠 (芯去り)	-	(67.2)	6.5	4.8	右端が丸。左端が欠損。堅払い板2ヶ所ある。	ST-1	

第121図 S E 3 井戸跡出土遺物(6)



第122図 S E 3 井戸跡出土遺物(7)

番号	件 番 号	種 別	部 位	出土位置	材 質	木取り	寸 量 (mm)			写真図版	
							長さ	幅	厚さ		
21	L-267	木製品	井戸跡 (廻神社)		テ リ	分割材 (芯立り)	—	89.4	16.4	6.7	両端が削、軸用材使用か(枘穴2ヶ所ある。)ねじ穴無。 2ヶ所にある。
22	L-262	木製品	井戸跡 (廻神社)		テ リ	分割材 (芯立り)	—	77.8	7.6	6.0	両端が削、軸用材使用か(枘穴1ヶ所ある。)ねじ穴が1ヶ所にある。
23	L-88	木製品	井 戸		ス タ	—	径 直	(39.1)	(6.0)	1.0	各輪に直交する4ヶ所の縫合部が2ヶ所で割離されている。とじ皮が1ヶ所にある。下端と両側面が欠損。
24	L-275	木製品	井戸跡		カ ャ ハ	—	径 直	—	—	—	筒体直径約112mm、底径約9.2mm、壁厚約7.2mm、蓋厚1.1mm。

3は芯持ちの丸太材が素材となっている。いずれも上端は欠損しているが、先端には細かい連続した削りを加えて尖らせている。ホゾ穴は隅あった2面で上下2段に、計4ヶ所みとめられるのが基本であるが、3の上段には1面でしか確認することができない。また1~4ともに縛綱痕とみられる圧痕が観察される。5~13は合計で33点出土した縦板のうちの代表的なものである。いずれも板目の板材が素材とされ、5・8(柵目材)のみがクリ材で、他はすべてセミ属の一類が用いられている。5~9のような幅の広いタイプと、10~12のような狭いタイプがある。なおともに焼痕をもつ5・8のクリ材の板は、双方とも隙間部分に当てがわれていたもので、ほかからの応急的な転用と考えられる。15~22の8点は横棟である。15のみコナラ節の丸太材を素材とし、他は全てクリの分割材が用いられている。いずれにも両端にはホゾが切られている。なお16、21、22にはホゾ穴がみとめられるが、横棟としての機能には関連が考えられず、何らかの材から転用されたものと理解しておきたい。14は9層から出土した竹製品である。上端部近くの両側縁には小さな抉りが入れられ、先端部は両側面からの削り出しによって尖らせている。用途は明らかではないが、民俗例の使編み用具に類例がみられ、同様の機能をもつ可能性も想定される。23は曲物の断片である。4層から出土した。2枚のスギの柵目薄板を重ね、桜皮で綴じ込んで固定している。内面には年輪方向に直交するケビキ線が、連続して刻まれている。24は漆器の皿で、掘り方底面直上の14層より出土した。木地は薄手で、全面に黒塗がみとめられる。

5. 溝跡

溝跡は2区で1条、3区で17条、4区では29条、合計47条が検出された。小規模でプランの不明瞭なものも多いが、他に3・4区に跨って確認されたものも4条ある。ここでは主に明瞭に検出され、特長をもつ溝跡に限って記述することとし、それ以外のものは図・表にまとめて掲載した。

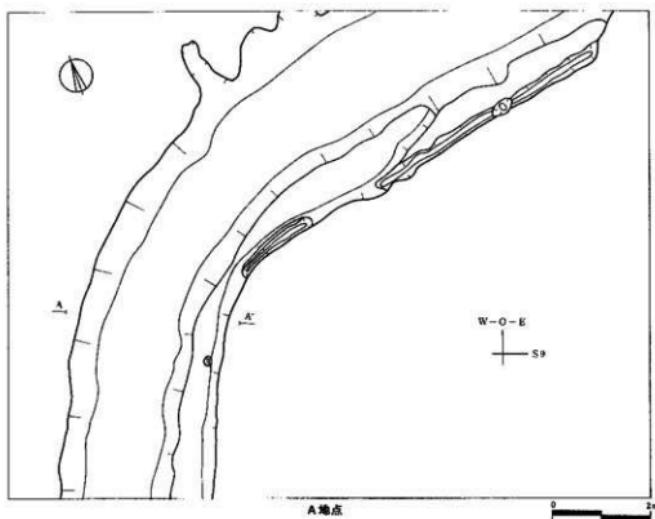
(1) SD 2溝跡

造構状況(第123・124図)

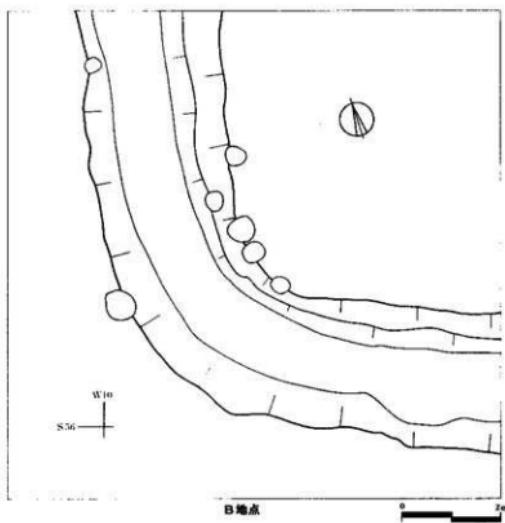
3区・4区に跨って検出された。両調査区のはば中央部分を南北方向に延び、3・4区でそれぞれ東方向に屈曲して調査区外に逃げる。北側の屈曲はゆるやかであるが、南側では直角にちかい。検出全長は約110mである。上端幅は2.85~2.95m、下端幅1.2~1.5m程度で、深さは47cm前後である。底面はほぼ安定しており、ほぼ平らな状況を呈している。壁は西側ではゆるやかに立ち上るが、東側は段掘りがなされていてやや急である。堆積土は3区A地点で11層、4区B地点では10層に分けられる。そのあり方は両地点で類似しており、上位がシルト、中位は粘土で、全体的に未分解の植物遺体を含んでいる。下位の底部付近は砂である。

出土遺物(第125・126図)

堆積土中より土師器・須恵器・瓦・陶器・土製品・銅貨・木製品が出土した。これらのうち土師器・須恵器・瓦については混入と考えられるため、図示による紹介にとどめておきたい。3、4は陶器で、甕あるいは壺と考えられる。3は4区5層からの出土である。体部下端部分にヘラ削りが施されている。内外面ともに青灰色を呈し、胎土は比較的緻密であるものの、まばらに砂粒を含んでいる。細く、直立ぎみの高台に特長がある。産地、年代ともに判然としないが中世陶器と考えられる。4は体部下端に台状の棱がみられる。外面は指によるナデ調整がみとめられる。全体的に赤褐色を呈し、胎土中には砂粒が目立っている。産地は常滑と推定され、時期の特定は困難であるが中世の所産と思われる。3区7層から出土した。6は土製紡錘車で、3区7層から出土した。外面全体にていねいなミガキが施されている。7は元祐通宝である。北宋錢で初鑄年は1086年(元祐元年)とされている。4区の底面直上、8層からの出土である。8~11は木製品であるが、8~10は用途不明である。8は上端部に貫通孔がみとめられる。11は桶など容器類の蓋と推定される。柵目板材が用いられており、推定直径は18.6cmである。大小の貫通孔が一箇所ずつみとめられる。

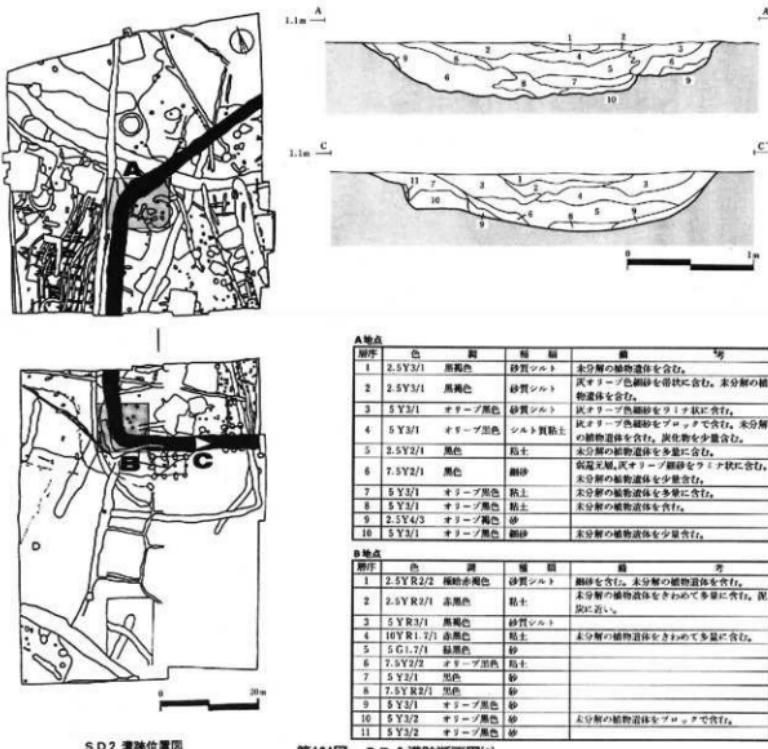


A地点



B地点

第123図 SD2 溝跡平面図(1)



第124図 SD 2溝跡断面図(2)

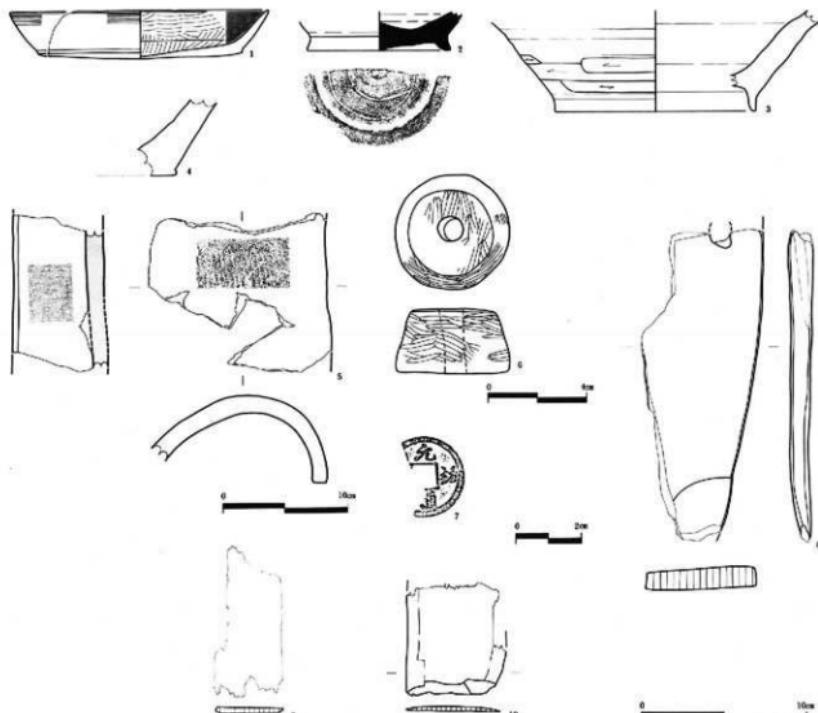
(2) SD 5溝跡

遺構状況(第127図)

3区、4区に跨って検出された。北東から南西方向に直線的に延びるが、3区の北端でSR 4河川跡に、4区南端ではSR 1河川跡に接している。検出全長は約95mである。この溝跡には新旧2時期の変遷がみとめられる。旧溝の埋没後、その東端部に添って新たな掘りこみが行われている。なお部分的にその重複が確認されない箇所があるが、この範囲は埋没した旧溝を再度掘り上げて機能させたものと推測される。旧溝は上端幅1.2m前後(推定)、下端幅40cm前後で、深さは50cm程度である。新溝は上端幅1.0m前後、下端幅は50cmほどで、深さは旧溝と較べて浅く30cm前後を計る。断面形は旧溝がV字状に近い形状を呈するのに対し、新溝は逆台形状で形態的な差異が見られる。また底面では掘削時のものと考えられる鋸痕跡が、ほぼ全域で密集して検出された。(写真図版16の56)。堆積土は全体で8層に区分されるが、1~4層が新溝、5~8層は旧溝の堆積土である。褐色系の砂が主体をなしている。なおSD 5溝跡は4区でSR 1河川跡に接するが、SR 1でこの溝跡の延長線上に杭列が検出されている。溝跡と杭列に関連のある可能性も考えられる。

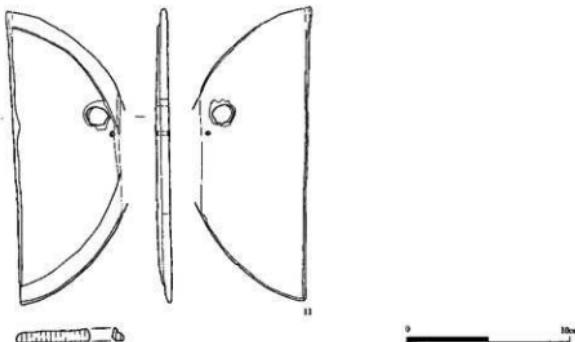
出土遺物(第128・129図)

新、旧溝の堆積土中より土師器、須恵器、瓦、土製品、木製品が出土した。このうち土師器、須恵器は比較的多



番号	社 名	種 別 器 形	出土位置	底			外 面 調 査			内 面 調 査			残 存 分 類	備 考	写真図版
				口	径	高	重	1/1	1/1	底	重	1/1	底	重	
1	C-70	土器部 品		(15.0)	3.0	(0.19)	0.4			横カブ、削り。		1/2	F-1		
										上ガラ 黒色地紋					
2	E-62	陶器部 品	出土位置	口	径	底	高	重	1/1	ヨクロナダ、底面一回転へラ切り、回転 へラ削り、高台部ヨクロナダ、付高台	ヨクロナダ		(1/2)		
3	I-3	陶器 部 品		(12.0)	(6.2)					ヨクロナダ、削り		(1/3)			無釉陶器
4	I-5	陶器 部 品		-	-	-	-			ヨクロナダ					無釉陶器 常滑釉
5	F-10	瓦	瓦												
6	P-36	陶器部 品	前縁取												
7	N-1	金銀製品	古鏡												
8	L-123	木製品	用具不規 則形												
9	L-104	木製品	用具不規 則形												
10	L-103	木製品	用具不規 則形												

第125図 S D 2 溝跡出土遺物(1)



番号	文 論	形 式	形 状	出土状況	測 定	材 材	木取り	生 量	備 考	写真図版
					幅 厘	幅 厘	厚 度	(kg)		
II	L-8	A製品	瓦 瓦	ヒノキの一種	底 幅 11.8-11.4	底 高 6.6	厚 0.8	推定容積 (19.6cm)、貫通孔大 (φ3.4cm) 1ヶ、小 (φ3.2cm) 1ヶあり。右側、底欠損。	54-11	

第126図 SD 2溝跡出土遺物(2)

くの出土があったが、小破片が大部分で、図化できたものは少ない。また量的には新溝の方が圧倒的に多い。1は土師器で壺の口縁部と考えられる。折りかえしがみとめられ、複合口縁である。旧溝、7層からの出土である。2～5は土師器の甕である。2・3は体部の張りが大きく、球形を呈している。口縁部はともに「く」字状に屈曲するが、2は頸部に段がみとめられる。4・5は長胴形のもので、5は体部に張りがなく円筒形を呈している。口縁部は「く」字状に屈曲するが、とりわけ4で顕著である。6・7は土師器壺でともに新溝4層からの出土である。6は平底直上に段がみとめられ、口縁は直線的に外傾する。内面には黒色処理が施されている。7は外面中位に沈線が巡っている。外面の調整はミガキが主体となっているが、口縁部には横ナデがみとめられる。両面に黒色処理が施されている。8は須恵器の蓋である。カエリはなく、リング状のつまみがつく。9は丸瓦片である。凸面は平行叩きで、凹面には型台压痕、布目痕などが観察される。10・11は土錠である。10は小型で紡錘形、11は大型でふくらみのある円筒形を呈している。ともに外面に指によるナデ調整がみとめられる。12・13は木製品で容器類の底とみられる。双方ともに側縁に沿って段がつくられている。なおいずれもヒノキ属の板材が素材となっているが12は征目、13は板目にとられている。

(3) SD 6溝跡

遺構状況（第130図）

3区、4区に跨って検出された南北方向の溝跡である。直線的に延びているが、4区の南端部分で東方向にゆるく弯曲し、SR1河川跡に接続する。検出全長は約98mである。上端幅は1.0～1.3m前後、下端幅は60～70cm程度、深さは16～26cm前後を計る。壁の立ち上りはゆるやかである。底面は安定しており、ピットや鋸痕跡などはみとめられない。堆積土はA地点（3区）、B地点（4区）とともに3層に分けられ、シルト、砂を主体としている。A地点2層、B地点1層は未分解の植物遺体を含んでいるが、とりわけA地点2層では顕著で、泥炭にちかい様相を示している。

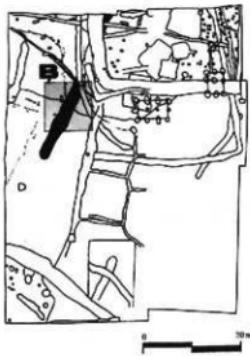
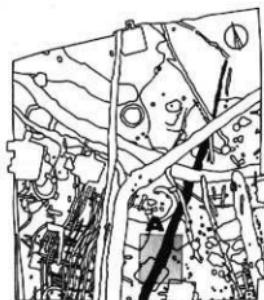
出土遺物（第131図）

堆積土中より土師器・瓦・土製品などが出土した。全体的に遺物の量は少ない。これらのうち土師器片は摩滅の激しい細片ばかりで図示し得なかった。1・2は丸瓦である。ともに凸面綱叩きで凹面には布目痕がみとめられる。

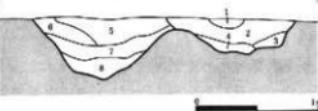
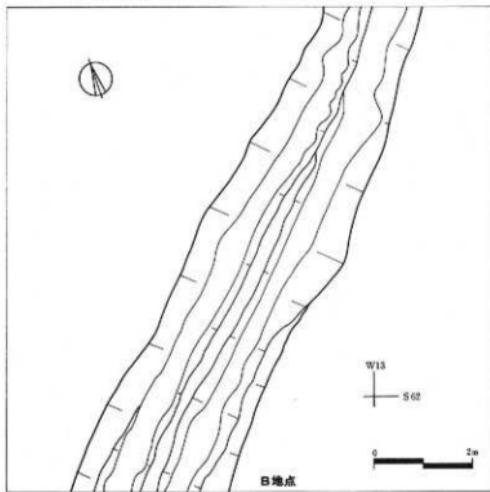
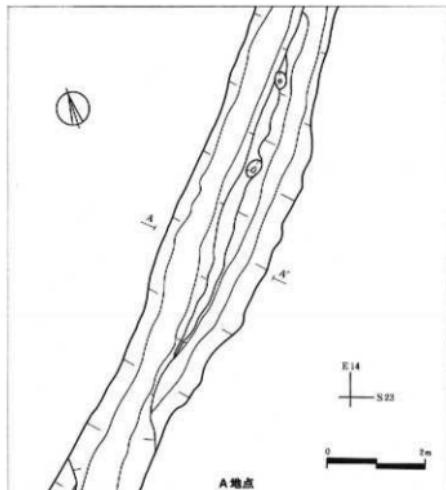
3～6は土錠である。いずれも小型で紡錘形を呈している。

(4) SD 7溝跡

遺構状況（第132図）

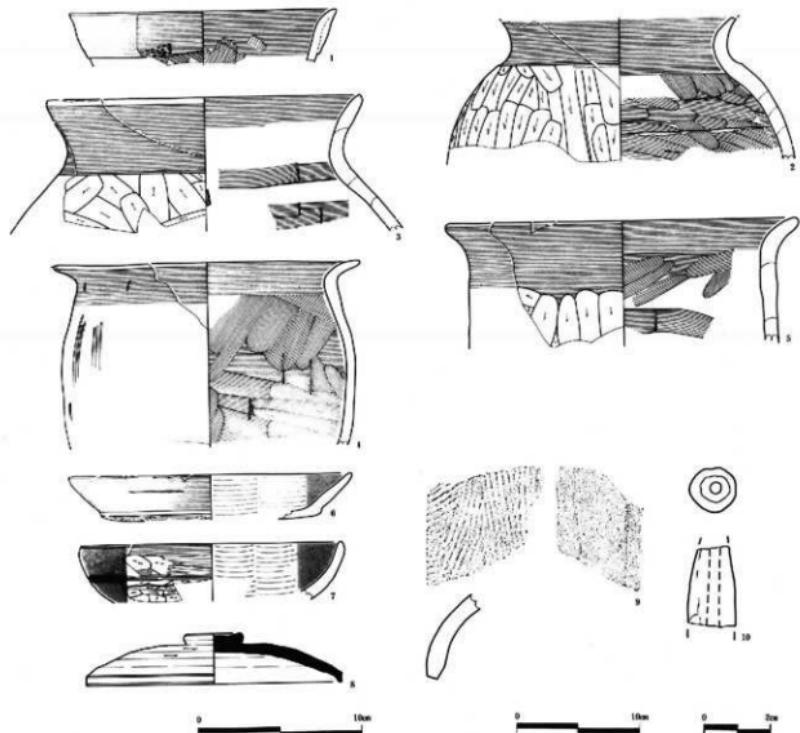


SD 5 溝跡位置図



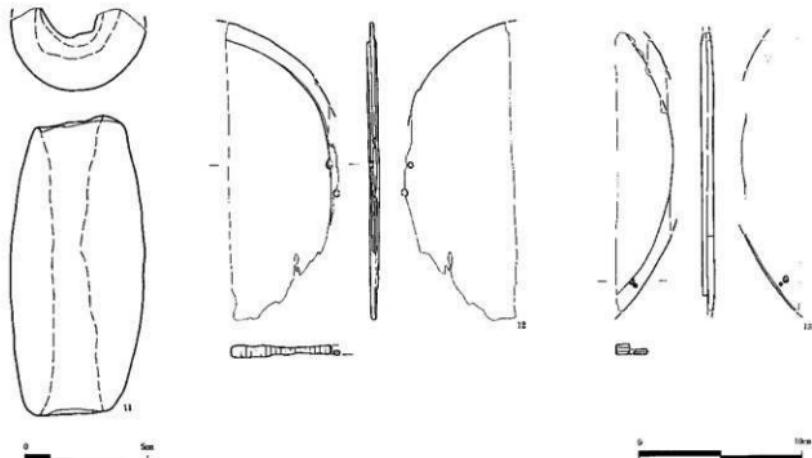
順序	色	用	層	期	考	順序	色	用	層	期	考
1	10YR 8.1/1	黒色	砂			5	10YR 8.2/2	黒褐色	砂		
2	10YR 4/3	にじみ、黄褐色	砂			6	10YR 4/3	にじみ、黄褐色	砂		
3	2.5Y 6/3	にじみ、黄褐色	砂			7	2.5Y 5/3	黄褐色	砂		
4	2.5Y 4/3	*リープ褐色	砂		地層の部分をラミナ状に含む。	8	2.5Y 4/3	にじみ、黄褐色	砂		

第127図 SD 5 溝跡平面・断面図



番号	登録 登録 番 号	種 類 形 式	出土位置	古 董 目			外 面 調 整		内 面 調 整		底 存	分 類	圖 考	写真図版	
				口 径	深 度	最 大 径	口 径	底 径	高 度	ハケ目					
1	C-360	土師器 蓋	(16.4)	-	-	-	-	-	-	ハケ目、底ナデ	底ナデ、部分的にハギキ。	(1/12)	A - I	複合口部。	17-22
2	C-79	土師器 蓋	-	-	-	-	-	-	-	底ナデ、削り	底ナデ、ヘラナデ、ナデ、輪郭み底	(1/4)	D - I a	断面に段	
3	C-365	土師器 蓋	(19.5)	-	-	-	-	-	-	底ナデ、削り	底ナデ、ヘラナデ	(1/4)	D - I b		
4	C-78	土師器 蓋	(18.8)	-	-	-	-	-	-	ハケ目、底ナデ	底ナデ、ヘラナデ、ナデ	(1/3)	D - 2		27-3
5	C-164	土師器 蓋	(21.7)	-	-	-	-	-	-	底ナデ、削り	底ナデ、ヘラナデ、ナデ	(1/8)	D - 3 b		
標号				古 董 目			外 面 調 整		内 面 調 整		底 存	分 類	圖 考	写真図版	
6	C-80	土師器 底	(17.4)	2.9	(9.17)	0.5	-	-	-	底ナデ、削り、ハギキ、輪郭み底、黒色處理	ハギキ、黒色處理	(1/4)	F - 1		
7	C-188	土師器 底	(16.1)	-	-	-	-	-	-	底ナデ、削り、ハギキ、輪郭み底、黒色處理	ハギキ、黒色處理	(1/8)	F - 2 b	外面に沈線	
標号				古 董 目			外 面 調 整		内 面 調 整		底 存	分 類	圖 考	写真図版	
8	E-9	瓦 瓦 器	(15.7)	-	3.3	口 - ロココナデ。天 - 四輪へ2割り	-	-	-	ロココナデ		(1/4)	2		36-2
番号				古 董 目			外 面 調 整		内 面 調 整		底 存	分 類	圖 考	写真図版	
9	F-28	瓦	丸 瓦	平行叩き	-	-	門	面	面			(1/4)			41-7
番号				古 董 目			外 面 調 整		内 面 調 整		底 存	分 類	圖 考	写真図版	
10	F-18	土製品	土 器	出土位置	長さ (2.45)	幅 最大径 (1.4)	孔径 (0.3)	重 量 (g)	分 類	底 存		(2)	1/2	外觀ナデ	43-21

第128図 S D 5 漢跡出土遺物(1)



第129図 SD 5溝跡出土遺物(2)

3区、4区に跨って検出された。南北方向に直線的に延びて、4区で大きく西方向へ屈曲する。なおこの溝跡は3区で一旦途切れるが、位置・方向や堆積土の特長から、4区の溝跡と同一のものと判断した。検出全長は約98mである。4区SD 2溝跡以南はSR 1河川跡堆積土を切って掘り込まれている。上端幅70cm～1.1m、下端幅40～70cmで深さは17～26ほどである。底面は安定しており大部分で平らな状況を呈している。B地点付近では掘削時のものと考えられる鋤痕跡が密集して確認された。鋤痕の平面形は半円形あるいは三角形状を呈し、底辺長8～20cm前後、これに直交する長さは4～10cm程度である。最梁部は全て南側にみられ、鋤が北側から入れられていることが分かる。また重複関係をみると、南側の鋤痕を北側のものが切っており、この部分の掘削は南から北へ後退しながら行われた可能性がある。壁の立ち上りは概ねゆるやかである。堆積土はA・B・C地点でそれぞれ4層・3層・5層に分けられ、A・B地点では砂、C地点では未分解の植物遺体を含む粘土が主体をなしている。またいずれの地点でも上位に灰白色火山灰の混入が確認される。

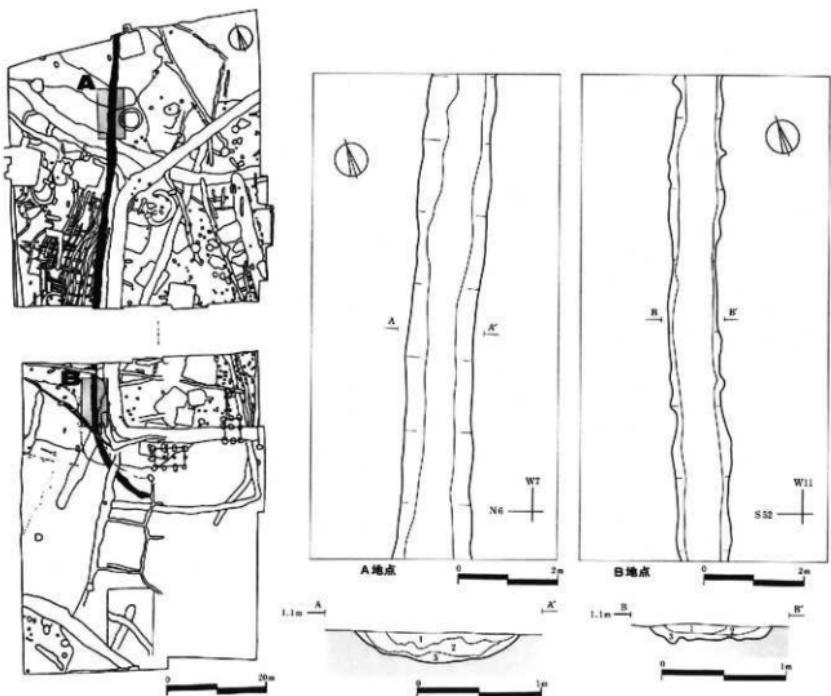
出土遺物（第133・134図）

出土遺物は非常に少なく、堆積土中より土器2点・須恵器1点が出土したのみである。1はロクロ成形土器の壺で、2区3層からの出土である。内面はヘラミガキで黒色処理は施されていない。「寺」の墨書きがある。2は非ロクロ成形土器の壺である。体部は球形を呈し、頸部には段がみとめられる。3は須恵器長頸瓶である。

(5) SD 25溝跡

遺構状況（第135図）

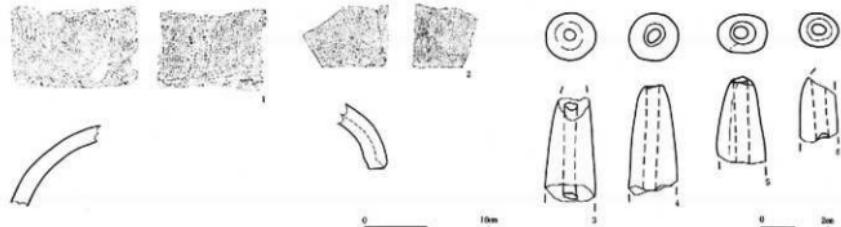
3区北西コーナー付近で検出された。SD 26溝跡の旧溝を切り、SD 26溝跡に切られている。検出全長は約23mである。北西から南東方向にはば直線的に延びるが、平面形は不規則で人為的に掘られた溝か自然の営為によるも



SD 6 溝跡位置図

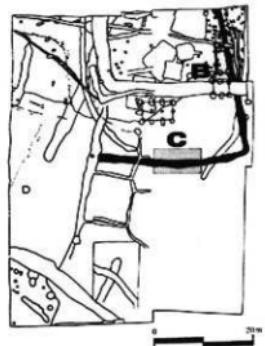
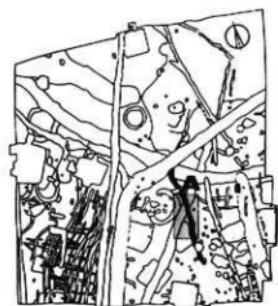
番号	色	調	施加	調	考	番号	色	調	施加	調	考
1	2.5Y2/1	黒色	砂質シルト			1	10YR2/1	黒色	シルト質粘土	高陶色頸部を小ブロックで含む。木分解の	解物遺体を含む。
2	2.5Y2/1	黒色	粘土			2	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	炭化物を少量含む。	
3	2.5Y3/1	黒褐色	砂			3	2.5Y4/3	オーブ褐色	砂		

第130図 SD 6 溝跡平面・断面図

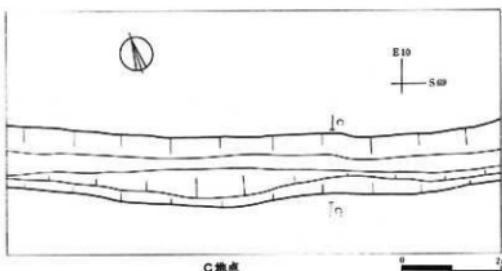
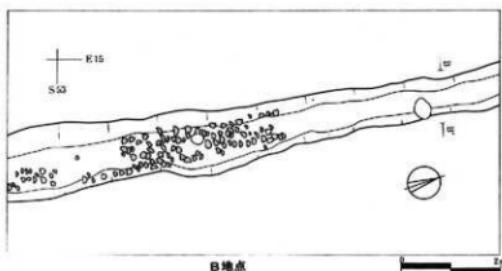
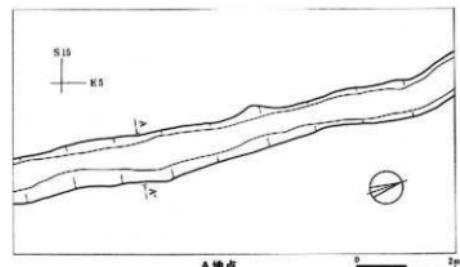


番号	發見 場所	種別	器種	出土位置	特				長				分類 考
					直	横	面	曲	直	横	面	曲	
1	F-12	瓦	瓦		縫合き、スリ潤し(ナダ)		春日瓦(直い)、赤端瓦へラ削り		2	1/2	外面ナダ		41-9
2	F-13	瓦	瓦		縫合き、スリ潤し(ナダ)側縫へラ削り	春日瓦、粘土質合わせ瓦直、側縫、赤端瓦へラ削り、輪瓦自然胎			2	1/2	外端面へラ削り。灰色。		42-1
番号	發見 場所	種別	器種	出土位置	直 長	横 幅	面 厚	曲 厚	直 長	横 幅	面 厚	曲 厚	分類 考
3	F-12	土器底	土	縫	(3.2)	1.5	0.4	-	2	1/2	外面ナダ		43-22
4	F-11	土器底	土	縫	(3.4)	1.45	0.4	-	2	1/2	外面ナダ		43-29
5	F-13	土器底	土	縫	(2.6)	1.5	0.4	-	2	1/2	外端面へラ削り		43-32
6	F-14	土器底	土	縫	(2.9)	1.2	0.4	-	2	1/3	外面ナダ		43-37

第131図 SD 6 溝跡出土遺物



SD 7 溝跡位置図



順序	色	調	種類	特 徴	標 名
1	10YR 3/2	黒褐色	砂	上面に灰白色風化を多少のもの。下に鉄化。	
2	10YR 3/2	暗褐色	砂		
3	10YR 3/2	暗褐色	砂		
4	2.5Y 4/6	オーブー褐色	砂		

順序	色	調	種類	特 徴	標 名
1	2.5Y 7/3	浅褐色	火山灰	生結晶(灰白色火山灰)	
2	2.5Y 3/2	暗オーブー褐色	砂		
3	2.5Y 5/4	黄褐色	砂	上部のある砂層	

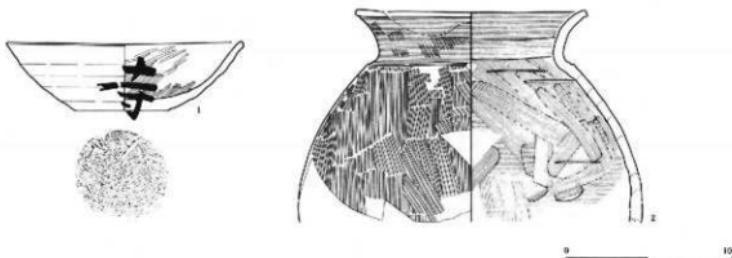
順序	色	調	種類	特 徴	標 名
1	10YR 2/1	黑色	泥炭質粘土	全体的に砂を含む。	
2	10YR 2/1	灰白色	火山灰		
3	10YR 3/1	黒褐色	泥炭質粘土	全体的に砂を多く含む。灰白色火山灰の小 量混入。	
4	10YR 2/2	黒褐色	泥炭質粘土	全体的に砂を多く含む。	
5	5 Y 4/1	灰色	砂	黑色泥炭の小ノリを含む。	

第132図 SD 7 溝跡平面・断面図



番号	登録番号	種類	出土位置	法 規 寸 寸				外 面 調 整	内 面 調 整	残 存	分類	備 考	写真図版
				口 径	底 径	高 さ	厚 さ						
1	E-23	須恵器 丸底盤	-	-	(10.6)	ロクロナゲ	ロクロナゲ	2/3	I	東面底 (底付面?)	37-2		

第133図 SD 7溝跡出土遺物



番号	登録番号	種類	出土位置	法 規 寸 寸				外 面 調 整	内 面 調 整	残 存	分類	備 考	写真図版
				口 径	底 径	高 さ	厚 さ						
1	D-2	土器器 九底坏	-	14.4	5.6	4.3	0.38	ロクロナゲ、一部ナゲ 底-印転赤切り、無調整	ロクロナゲ、部分的にミガキ 底-ナゲ、部分的にミガキ	4/5	G-1	外表面に墨書き 「寺」	34-1
番号	登録番号	種類	出土位置	法 規 寸 寸	底 径	高 さ	厚 さ	外 面 調 整	内 面 調 整	残 存	分類	備 考	写真図版
2	C-264	土器器 丸	(34.1)	-	-	-	-	ハナ目、黄ナゲ	黄ナゲ、ヘラナゲ、ナゲ、輪筋込模	(1/1)	D-1 a	外表面赤泥付段部 大径 底部(20.5cm)	24-7

第134図 SD 7溝跡出土遺物

のか判然としない。上端部は4.3m前後であるが、調査区コーナー部分で広がり7m以上となる。下端幅も55cmから4.6m以上と不規則である。壁の立ち上りは非常にゆるかで、深さは32cm前後を計る。底面はほぼ安定しており、ピット等の起伏はみとめられない。堆積土は3層に分けられ、いずれも砂であるが、最上層1層上部には灰白色火山灰ブロックの混入がみられる。

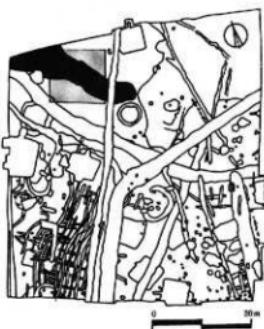
出土遺物（第136図）

堆積土中より土器器・須恵器・瓦などが比較的多く出土したが、磨滅の著しい小破片が多く、図示し得たのは以下のとおりである。1～4は非ロクロ成形の土器器皿であるが、いずれもいわゆる在来型土器器皿にはみられないタイプのものである。1・2は外面上位の段をもち、直立ぎみの短かい口縁がつく。内外面ともに漆処理が施されている。3は丸底の底部から、外傾しながら口縁が立ち上るタイプのもので、やはり両面で漆処理がみとめられる。4は丸底の底部と考えられる破片であるが、内面にナデ調整後の放射状ミガキがみとめられ、漆処理が施されている。5～7は須恵器である。5・6の杯は底部回転ヘラ削りで、切り離しは不明である。8・9は丸瓦片で、凸面縁叩き、凹面には布目痕がみとめられる。

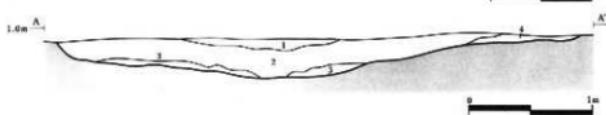
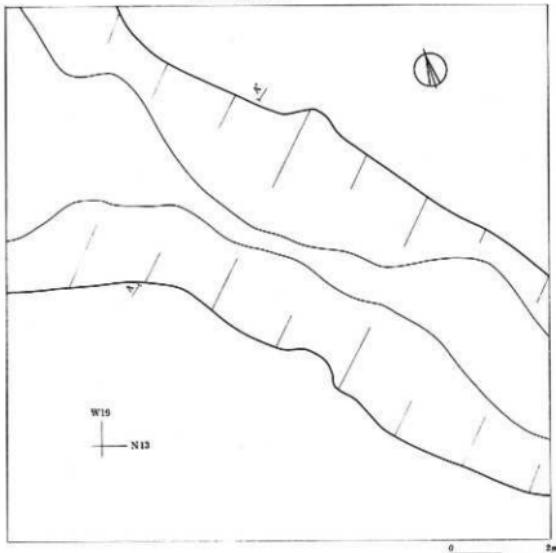
(6) SD 26溝跡

遺構状況（第137図）

3区で検出された。調査区内を北西から南東方向に横断するが、東部で東方向にゆるく弯曲する。東、西ともに

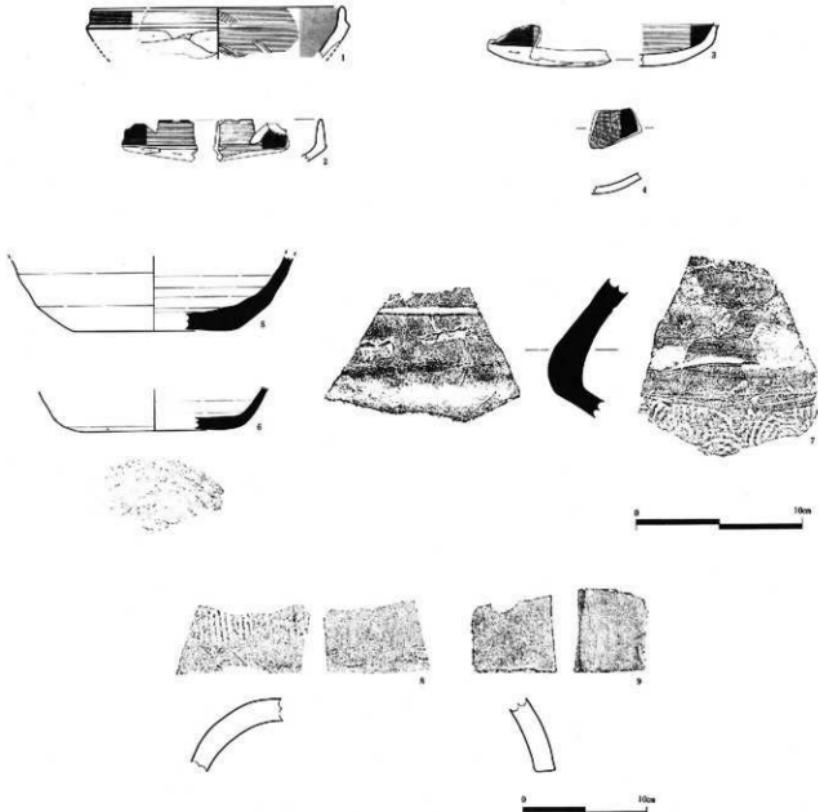


SD 25 漢跡位置図



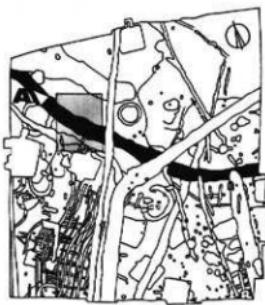
層序	色調	種類	備考	層序	色調	種類	備考
1	10YR 2/2	黒褐色	シルト質砂	3	10YR 4/4	褐色	砂
2	10YR 2/3	黒褐色	砂	4	10YR 3/3	暗褐色	砂

第135図 SD 25漢跡平面・断面図

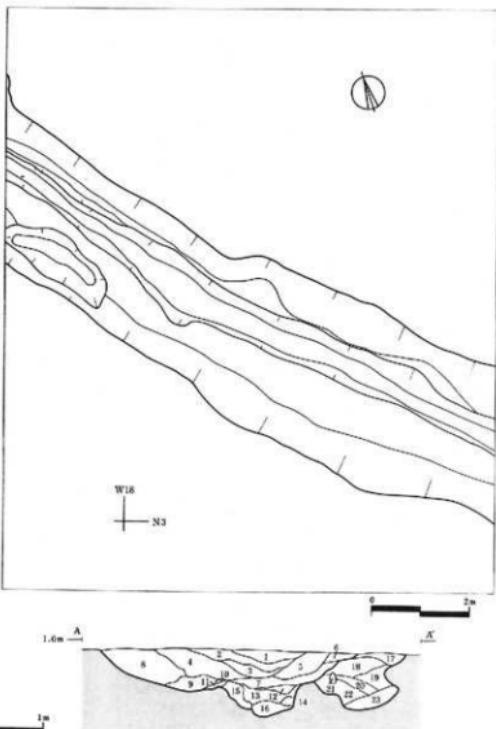


番号	目録番号	施設番号	出土位置	内面調査				外面調査	内面調査	成分	分類	備考	写真図版	
				口径	底径	高さ	成形							
1	C-144		上階部 土壁部	(15.7)	-	-	-	無ナメ、削り痕部分的にミガキ	擦カゲ、一塊ナメ、部分的にミガキ。	(1/6)	E-1 b		30-3	
2	C-127		上階部 土壁部	-	-	-	-	無ナメ、削り	擦カゲ		E-1 b			
3	C-142		土階部 土壁部	-	-	-	-	U縫合のみ塗処理	擦カゲ		E-2 c			
4	C-126		土階部 土壁部	-	-	-	-	削り	ナメ、ミガキ(鉛鉄状)		E-9			
番号	目録番号	施設番号	出土位置	内面調査				外面調査	内面調査	成分	分類	備考	写真図版	
				口径	底径	高さ	成形							
5	E-44			-	(10.3)	(4.6)	-	*クロナメ、底面一部剥離へ2割り、 切り離し不明	*クロナメ	1/4				
6	E-59		痕跡部 痕跡部	-	(10.9)	(2.6)	-	*クロナメ、底面一部剥離へ2割り、 切り離し不明	*クロナメ	(1/3)	6		35-6	
番号	目録番号	施設番号	出土位置	内面調査				外面調査	内面調査	成分	分類	備考	写真図版	
				口径	底径	高さ	成形							
7	E-42		痕跡部 痕跡部	-	-	-	クロナメ、沈殿物、焼灰文	クロナメ、内面火文押え		破片				
番号	目録番号	施設番号	出土位置	特				凸面	凹面	面	分類	写真図版		
				凸面	凹面	面	参考							
8	F-12	瓦	瓦	高岡き。スラッシュ(ナメ)				赤切り瓦、赤目瓦、広端縁ヘラ削り、 再火白焼物	広端縁ヘラ削り、灰色。				41-13	
9	F-11	瓦	瓦	高岡き。スラッシュ(ナメ)				赤目瓦、焼灰ヘラ削り	側面、広端縁ヘラ削り、黄状色。				41-17	

第136図 S D 25溝跡出土遺物



SD 26 溝跡位置図

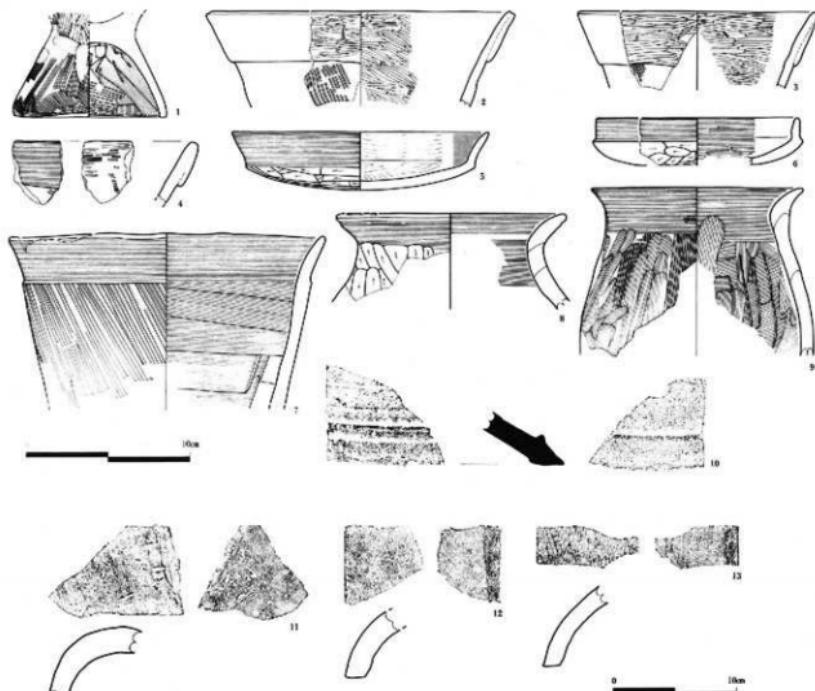


順序	色調	性質	場所	順序	色調	性質	場所	場所
1	10YR 2/1	三色	シルト質砂	12	10YR 1/2/1	黒色	粘土	黒褐色砂を斑状に含む。
2	10YR 2/2	三色	砂	13	2.5Y 4/2	暗灰褐色	砂	
3	10YR 2/2	三色	砂質粘土	14	10YR 2/1	黒褐色	砂	
4	10YR 2/2	三色	砂	15	10YR 2/1	黒褐色	砂	
5	10YR 2/2	三色	砂	16	2.5Y 3/1	黒褐色	砂	
6	10YR 2/2	三色	砂	17	10YR 3/3	暗褐色	砂	
7	10YR 2/2	三色	砂	18	10YR 4/3	にじ、黄褐色	砂	
8	10YR 2/2	三色	灰白色火山灰を大小のブロックで含む。	19	10YR 3/4	暗褐色	砂	
9	10YR 2/2	三色	砂	20	10YR 4/2	灰褐色	砂	
10	10YR 4/2	灰褐色	砂	21	10YR 4/6	褐色	砂	
11	10YR 5/2	灰褐色	砂	22	10YR 3/3	暗褐色	砂	黒褐色の粘土をツリ状に含む。
12	2.5Y 4/2	灰褐色	粘土	23	10YR 2/2	黒色	粘土	全体的に砂を多く含む。

第137図 SD 26溝跡平面・断面図

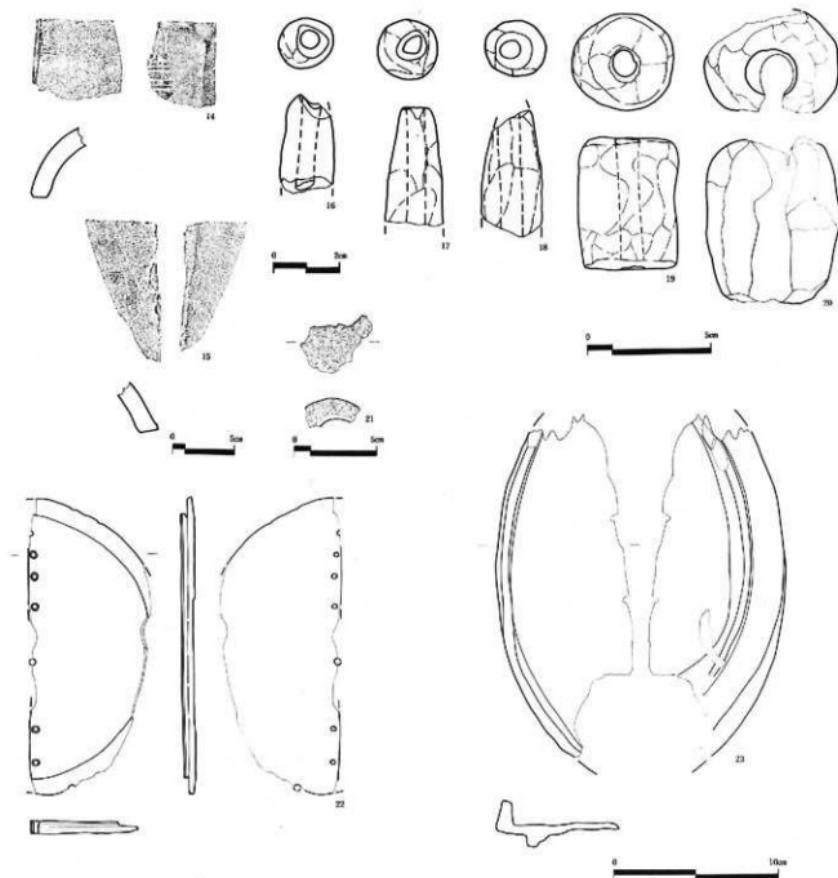
端部は調査区外に延びている。この溝跡には新旧2時期の変遷がみとめられる。旧溝の埋没後、この南側に新らたな掘りこみが行われている。旧溝部分はSD 25溝跡に切られている。またSD 7・119溝跡と本溝跡新溝は一時的に同時に機能し、最終的にこの新溝だけが残った可能性を考えられる。旧溝の上端幅は推定で90cm以上、深さは50cm前後である。壁は概ねゆるやかな立ち上りをみせるが、部分的に下位で大きな抉りを受けて乱れている。新溝は上端幅2.1m前後、下端幅40cm前後で、深さは55cm程度を計る。なお新溝は段掘りがなされており、上、下位で断面形に差異がみとめられる。壁の立ち上りは上部はゆるやかであるが、下部は急である。堆積土は全体で23層に分けられ、1~16層が新溝、17~23層は旧溝の堆積土である。砂を主体とするが、新溝13層は黒色の粘土である。なお新溝7層中には灰白色火山灰が大、小のブロックで混入している。

出土遺物（第138・139図）



番号	住 居 者 名 称 別	出 土 位 置	法 量 (m)	外 面 調 整	内 面 調 整	残 存 分 類	備 考	写真図版
1	C-54	土器部 土器部 土器部 土器部	9.35	ハケ目、ナフ	ヘリナフ、ハケ目	A-1 c		17-12
2	C-122	土器部 土器部 土器部	(18.5)	ハケ目、ミガキ	ハケ目、ミガキ	(1/16)	A-1	複合口縁
3	C-121	土器部 土器部	(14.7)	ミガキ、ハケ目	ハケ目、ミガキ	(1/8)	A-1	複合口縁
4	C-129	土器部 土器部	-	穂ナフ、滑泥付のハケ目。	ハケ目、ミガキ	破片	A-1	複合口縁
番号	住 居 者 名 称 別	出 土 位 置	法 量 (m)	外 面 調 整	内 面 調 整	残 存 分 類	備 考	写真図版
5	C-55	土器部 土器部	(15.8)	3.6 (0.32) 1.1 穂ナフ、擦り	ミガキ 黑色處理	1/4	D-3	21-6
6	C-56	土器部 土器部	(12.4)	2.0 (0.24) 1.6 穂ナフ、擦り	穂ナフ、ミガキ	(1/8)	E-1 b	30-4
番号	住 居 者 名 称 別	出 土 位 置	法 量 (m)	外 面 調 整	内 面 調 整	残 存 分 類	備 考	写真図版
7	C-52	土器部 土器部	(19.3)	-	穂ナフ、ハケ目	(1/4)	D-3 a	腹部に段
8	C-124	土器部 土器部	(14.1)	-	穂ナフ、擦り	(1/4)	D-1 b	口縁部に沈殿
9	C-53	土器部 土器部	(13.8)	-	ハケ目、穂ナフ、ナフ	(1/4)	D-2	最大径部 (14.4cm)
番号	住 居 者 名 称 別	出 土 位 置	法 量 (m)	外 面 調 整	内 面 調 整	残 存 分 類	備 考	写真図版
10	R-3	不 明	-	-	吹出し、明き状斑紋 凹部	-	ナフナフ 自然點付着	破片
番号	住 居 者 名 称 別	出 土 位 置	法 量 (m)	外 面 調 整	内 面 調 整	長 径	分 類	写真図版
11	F-27	瓦 瓦	ハラ割り	赤切り目、右白底	周灰色	41-11		
12	F-18	瓦 瓦	窓押き、スリ洗し(ナフ) 窓押へラ削り	赤切り目、右白底、側縁へラ削り	側縁へラ削り、灰色			41-15
13	F-26	瓦 瓦	窓押き、スリ洗し(ナフ) 窓底自然點	右白底、側縁へラ削り	側縁へラ削り、灰色			

第138図 SD 26溝跡出土遺物(1)



番号	發 現 地	種 別	器 様	出土件数	特				長 考	分 類	写真図版
					高	幅	厚	備			
14	7-25	瓦	丸 瓦	1	縫合き、ストリボシ(ナゲ)、側面へラ削り	赤目灰(赤褐色)、側面、裏面へラ削り	側面 側面へラ削り、青灰色。		41-14		
15	7-17	瓦	丸 瓦	1	縫合き、ストリボシ(ナゲ)、側面へラ削り	赤目灰、側面へラ削り	側面 側面へラ削り、灰白色。		41-6		
番号	位 置	種 別	器 様	出土件数	法 高	幅	厚	重 量 (g)	分 類	考	
16	7-29	土器品	土 席	1	長さ 約 65大径 4mm	20mm	0.6	—	2	1/2 外曲ナデ	写真385b
17	7-38	土器品	土 席	1	(3.0)	1.7	0.6	—	2	1/2 外曲ナデ	43-30
18	7-37	土器品	土 席	1	(3.6)	1.8	0.6	—	2	1/2 外曲ナデ	43-28
19	7-8	土器品	土 席	1	(3.9)	1.9	0.6	—	2	1/2 外曲ナデ	43-24
20	7-9	土器品	土 席	1	5.4	4.1	1.0	101.5	1 b	完形 外曲ナデ	43-18
					(6.8)	5.4	2.1	—	1 a	1/2 外曲ナデ	43-16
番号	位 置	種 別	器 様	出土件数	法 高	幅	厚	重 量 (g)	備	考	
21	7-54	土器品	羽 口	1	残存高 3.5	残存幅 4.3	孔 1個	—	外曲ナデ		写真385c
番号	發 現 地	種 別	器 様	出土件数	法 高	幅	厚	備	備	考	
22	L-44	木製品	骨 管 (鉢)	1	6ノキ属の一種	板 材	板 皿	(18.2) (7.4)	0.8	推定直径 (18.4cm) 黄道孔 (最大Ø9.5cm) 8ヶあり。 部分的に縫合欠損。	写真408
23	L-49	木製品	高台付 骨 管	1	ト ナ	板 材	—	(21.0) (8.3)	2.0	推定直径 (30.0cm) 削り物、厚さ約1.4mm。	47-2

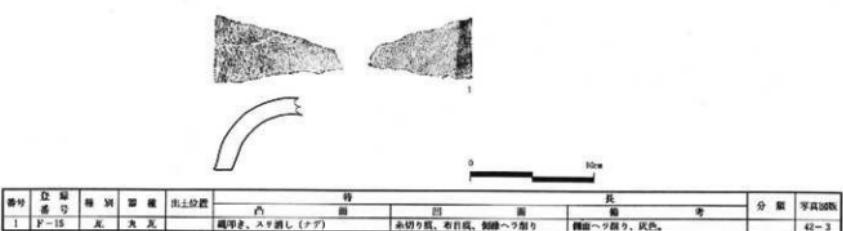
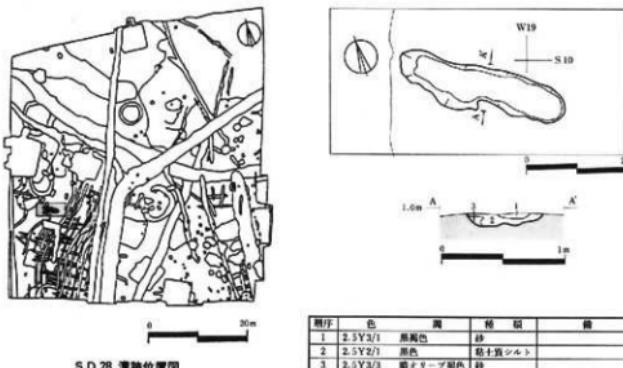
第139図 S-26溝跡出土遺物(2)

堆積土中より土師器・須恵器・瓦・土製品が出土したほか、新溝底面より木製品が出土した。これらのうち土師器片は多量の出土があったが、図示し得たのは掲載のものに限られる。なお小破片のうえ磨滅が激しいため図化は行わなかったが、新旧両溝跡の堆積土中からロクロ成形土師器が出土している。また、この溝跡の所属年代は後述するが、木製品以外の、とりわけ土師器・須恵器については本遺構の年代観とは差異があり、混入品と理解しておきたい。1は土師器で台付甕の台部である。2~4は土師器壺の口縁部分であるが、いずれにも折り返しがみられる。5~6は非ロクロ成形土師器の杯であるが、6は丸底の底部に直立する短い口縁がつくもので、内面はナデ調整の後、横位のミガキがごくまばらに加えられている。黒色処理はみとめられない。このような杯は、在来型土師器杯のなかには見られないものである。7~9は土師器の甕である。このうち7は体部が外傾して立ち上り張りではなく、頸部に段がみとめられる。10は須恵器である。何らかの脚部と推測されるが判然としない。11~15は瓦で、いずれも丸瓦である。16~20は土錠である。16~18は小型で効錠形を呈する。19~20は大型で19は円錠形、20はやや膨みをもっている。21は鶴の羽口と考えられ、外面はガラス化が著しい。22~23は木製品であるが、新溝底面より重なり合った状態で出土した。22は半円形の製品で容器類の底、あるいは蓋かと推測されるが、中央部分に連続した貫通孔がみとめられ判然としない。側縁に沿って段差がつくり出されている。23はトチ材の削り物容器で盆状の形状を呈する。裏面には高台が削り出されている。推定直径は30cmである。

(7) S D 28溝跡

遺構状況（第140図）

3区で検出された東西方向の溝状遺構であるが、検出全長3.3mと小規模なものである。なおこの付近では小溝遺構群が検出されているが、堆積土の状況に大きな差異が伺われ、これらとは別種の遺構と判断される。上端幅60cm前後、下端幅45cm前後で、深さは10cm程度である。底面には小さい起伏がみられ、壁の立ち上りはゆるやかである。堆積土は3層に分けられ、いずれも砂である。



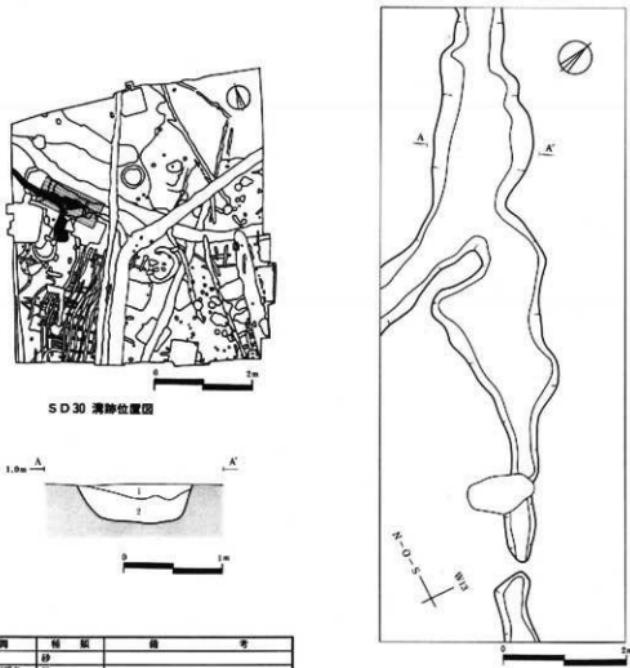
出土遺物（第141図）

堆積土中より瓦片が1点出土した。1は丸瓦である。凸面は繩叩きの後スリ消し、凹面には布目痕などが観察される。

(8) SD 30溝跡

遺構状況（第142図）

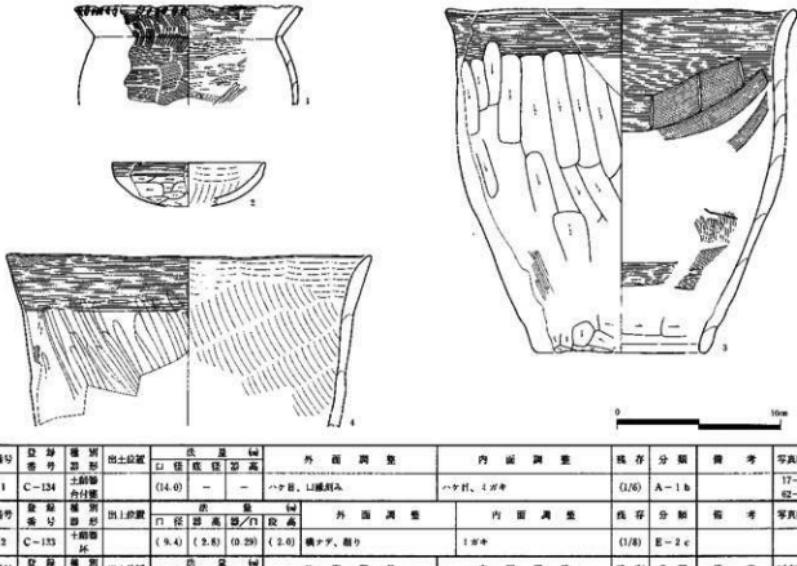
3区で検出された。SD 109円形周溝を切り、SI 8豊穴住居跡、SK 4土坑、SD 2溝跡などに切られている。西端は調査区外に延びている。主体は北西から南東への方向を示すが、中央部分でT字状に分岐する。平面形上端幅は55cm～3.3mと一定せず、それに併せて下端幅も40cm～2.6mと不規則である。底面は安定しており、壁の立ち上りは急である。なおこの溝跡は平面形で不規則な状況を呈しているものの、断面形は比較的整っており人為的に掘られた可能性を考えておきたい。堆積土は2層に分けられいずれも砂であるが、1層は黒褐色を呈している。



第142図 SD 30溝跡平面・断面図

出土遺物（第143図）

堆積土中より非ロクロ成形の土師器および鉄滓が出土した。このうち土師器は比較的多くの破片が出土したが、図示し得たのは掲載した4点のみである。1は2層出土の土師器で台付甕と考えられる。口縁端部にハケ目状工具によると考えられる押圧（刻み）が連続して加えられる。なおこの遺物は本遺構の年代観を示すものとは考えにくく、混入と理解しておきたい。2は土師器の杯であるが、在来型のものとはやや異なる様相が伺われる。丸底の



第143図 SD 30溝跡出土遺物

底部が内弯ぎみに立ち上り、短かい口縁がつく。内面はヘラミガキで黒色処理は施されていない。3は土師器瓶で、4にも同じく瓶の可能性が考えられる。3は体部中央部分によい膨みがあり、口縁部はごくゆるく外反する。体部外面の調整は削りを主体とするが、部分的にミガキ調整がみとめられる。内面はヘラナデを主とし、一部でミガキが観察される。4は体部に張りのない円筒形を呈し、口縁部はわずかに外傾する。外面は口縁部横ナデで、体部は粗いミガキが施されている。内面はいねいなミガキ調整で仕上げられている。

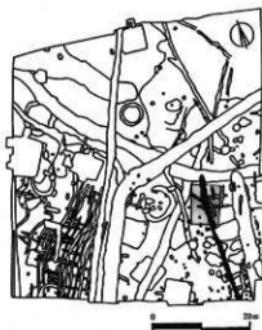
(9) SD 119溝跡

遺構状況（第144図）

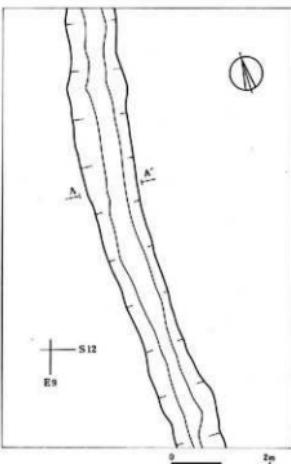
3区で検出された。南北方向に直線的に延び、検出全長は約25mである。なおこの溝跡は3区南端から更に南方へ延びて、4区SD-162溝跡に続く可能性も考え得るが、双方で掘り込みの形状や堆積土の様相が異っており、同一遺構の可能性を指摘しながら、別遺構扱いとしておきたい。また本溝跡は3区の状況から一時的にSD 26溝と接続し、機能していた可能性が考えられる。本溝跡の方が早く機能停止、埋没したものと理解できる。上端幅1m前後、下端幅20~50cmで、深さは25cm前後を計る。底面は安定しており、ほぼ平らな状況を示している。壁の立ち上りはゆるやかである。堆積土は4層に区分されるが、砂混りのシルトを主体とし、最下層4層は砂である。また1層には灰白色火山灰の混入がみとめられる。

出土遺物（第145図）

堆積土中より少量の土師器片が出土した。小破片が大部分で、図示できたのは1点のみである。1は2層から出土したロクロ成形土師器の杯である。内面はロクロナデのみで、ヘラミガキ・黒色処理はみとめられない。

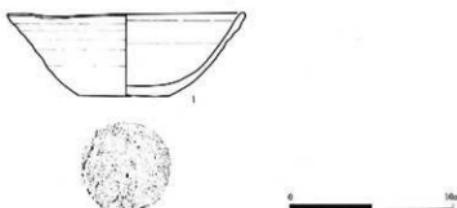


SD 119 溝跡位置図



番号	色 調	種 類	備 考
1	10YR 2/3 黒褐色	砂質シルト	炭化大山灰を少ブロウで含む。
2	2.5Y 3/1 黒褐色	砂質シルト	未分解の植物遺体を多量含む。
3	2.5Y 3/2 黒褐色	砂質シルト	未分解の植物遺体を少量含む。
4	5Y 4/3 黒オーブ色	砂	

第144図 SD 119溝跡平面・断面図



番号	立 築 高	種 別	出土位置	表 重			外 面 調 整	内 面 調 整	版 形	分 類	備 考	写真枚数
				口 径	底 径	高 度						
1	D-4	土器器 年		14.6	5.7	5.2	0.39	ヨタヨタグ、テグ 底一回転あたり、無開口	ヨタヨタグ	柱 柱	G-2	34-2

第145図 SD 119溝跡出土遺物

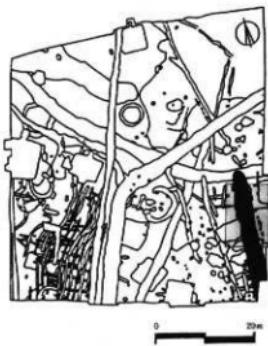
⑩ SD 123溝跡

遺構状況（第146図）

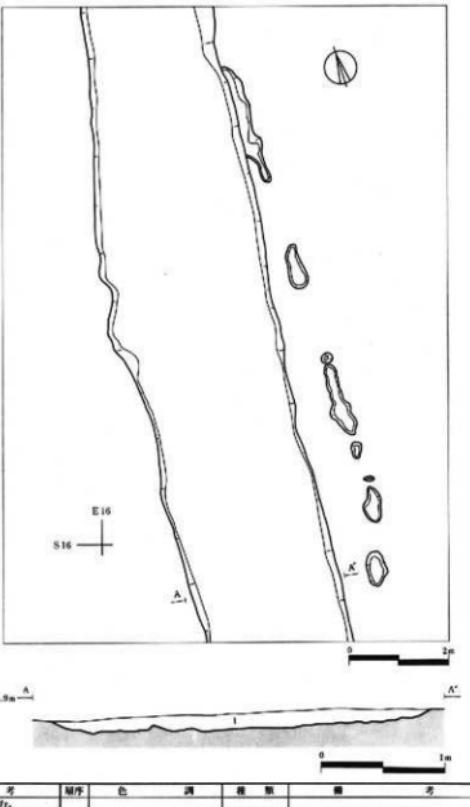
3区で検出された南北方向の溝跡で、南端は調査区外に延びている。SD 26溝跡をはじめ、SK-77、78、81、82土坑などを切っている。なお溝跡の東辺に沿って小溝状の不連続なプランを確認したが、これらは本来のSD 123溝跡の東壁掘り込みの痕跡であったものと推定される。上端幅3.1m前後、下端幅2.5m前後で、深さは30cmほどである。堆積土は単層で、未分解の植物遺体を含む黒褐色の粘土である。

出土遺物

堆積土中より少量の土師器片、須恵器片、および磁器片1点が出土したが、いずれも小破片であるために図示することはできなかった。これらのうち土師器、須恵器については明らかな混入品と判断される。1点出土した磁器は中国産の青磁で碗と考えられる（写真128-5）。龍泉窯系の製品で、13世紀代を中心とする年代が推定される。



S D 123 溝跡位置図



第146図 S D 123溝跡平面・断面図

⑩ S D 134・135溝跡

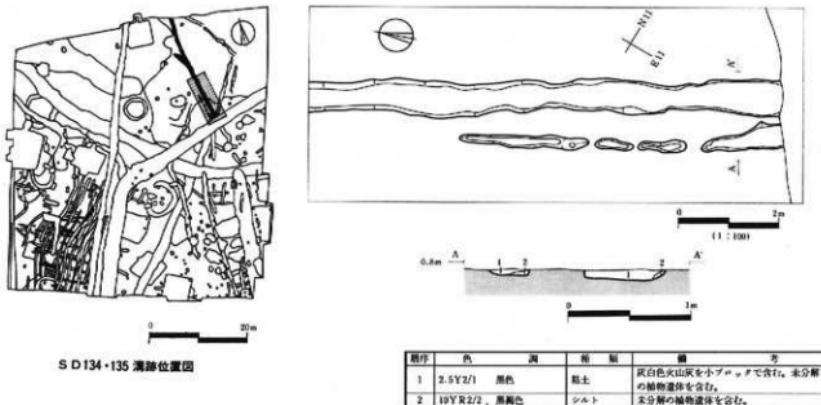
遺構状況（第147図）

S D 134溝跡は3区で検出された南北方向の溝跡であるが、北半部はS R 4河川跡堆積土7層上面の斜面で確認された。検出全長は約29mである。S D 135はS D 134溝跡に平行して断片的に検出された小溝状の遺構であるが、位置的関係や堆積土の類似からS D 134溝跡と同一遺構である可能性が高いものと思われる。S D 134は上端幅65cm前後、下端幅55cm前後で、深さは10cm程度である。底面は安定しており、壁の立ち上りは急である。堆積土は粘土、シルトの2層に分けられるが、全体的に未分解の植物遺体を含んでいる。1層中には灰白色火山灰ブロックの混入がみとめられる。

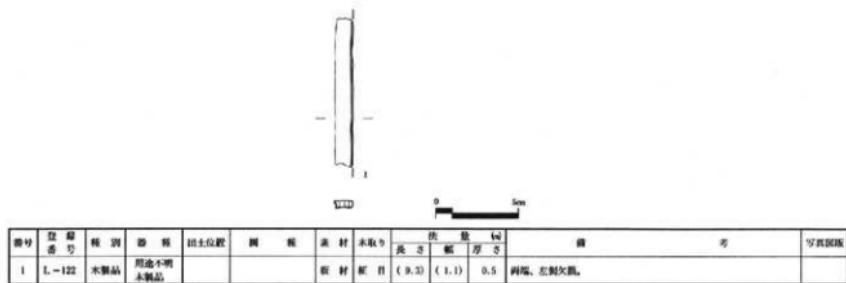
出土遺物（第148図）

S D 134溝跡堆積土中より、少量の土師器片・須恵器片および木製品が出土した。このうち土師器は非ロクロ成形のものに限られるが、これらが本溝跡の年代鏡を示すものとは考えにくく、混入と理解しておきたい。木製品は10数点出土したが、いずれも破損が著しい用途不明品がほとんどで、図示できたのは1点のみである。1は木製品

で用途不明の札状製品である。柾目にとられた薄い板材を素材としている。形状から木簡類の断片である可能性が考えられたため、赤外線カメラによる観察を行ったが、墨書等はみとめられなかった。



第147図 SD 134・135溝跡平面・断面図



第148図 SD 134溝跡出土遺物

(3) SD 1溝跡

遺構状況（第149図）

4区で検出されたL字状に屈曲する溝跡で、検出全長は約17.5mである。SD 2溝跡を切っている。上端幅は最大で1.2mを計るが、東端部に向って狭くなる。下端幅は90~70cm程度で、深さは10cm前後と浅い。底部には連続した起伏がみとめられ、壁の立ち上りはゆるやかである。堆積土は黒褐色粘土の単層である。

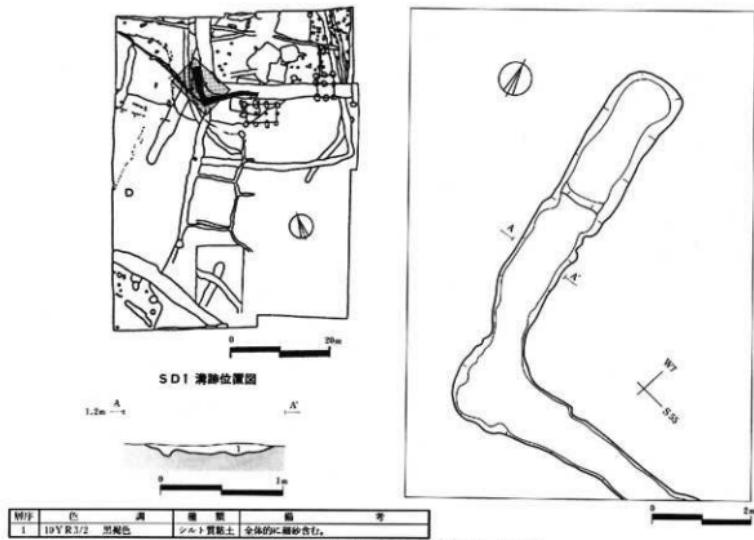
出土遺物

堆積土中より土師器細片が少量出土したが、本遺構の年代観を示すものとは考えられず混入品と判断される。

(3) SD 8溝跡

遺構状況（第150図）

4区南西コーナー付近で検出された。北西から南東方向のはば直線を呈する溝跡で、両端は調査区外に延びている。検出全長は約25mである。上端幅2.0~3.5m、下端幅50cm~1mで、深さは50~55cm程度である。底面には部分的に小さな起伏がみとめられるものの、ほぼ平らな状況を呈している。壁の立ち上りはゆるやかである。堆積土



第149図 SD 1溝跡平面・断面図

は5層に区分されるが、未分解の植物遺体を含む粘土が主体となっている。このうち4層は植物遺体の量がきわめて多量で、泥炭にちかい様相を呈している。

出土遺物（第151図）

堆積土中より須恵器・土師器・陶器・石製品・古銭・木製品が出土した。全体的に小破片が多く、図示できたものは以下のとおりである。なお須恵器・土師器・石製品については本溝跡の年代観を示すものとは考えられず混入品と理解しておきたい。1は須恵器の杯である。2は鉄軸の陶器で鉢と考えられる。口縁端部によろい肥厚がみとめられる。胎土は灰褐色を呈し、やや砂粒が目立っている。常滑産の製品で、13世紀代を中心とする年代が推定される。底面直上の5層から出土した。3は石製模造品で勾玉である。全面に夥しい擦痕が観察される。4は底面出土の北宋銭で、皇宋通宝である。初錢は1039年（宋元祐元年）とされている。5、6の木製品はともに底面からの出土である。5はスギの柾目板が用いられた用途不明製品である。何らかの部材とも考えられる。6は箸と考えられる。

⑭ SD 10溝跡

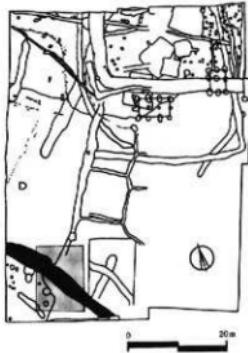
遺構状況（第152図）

4区で検出された南北方向の溝状遺構である。SK20土坑を切り、SD 18・20・24溝跡に切られている。ほぼ直線を呈するが南側で西方向へゆるく弯曲し、南端は調査区外に延びている。上端幅1.3~1.5m前後、下端幅1.0~1.8mで深さは8cm程度とごく浅い。底面では著しい起伏が全面におよんでいる。壁の立ち上りは非常にゆるやかである。堆積土は黒色粘土の単層であるが、全体的に黄褐色の砂を含んでいる。

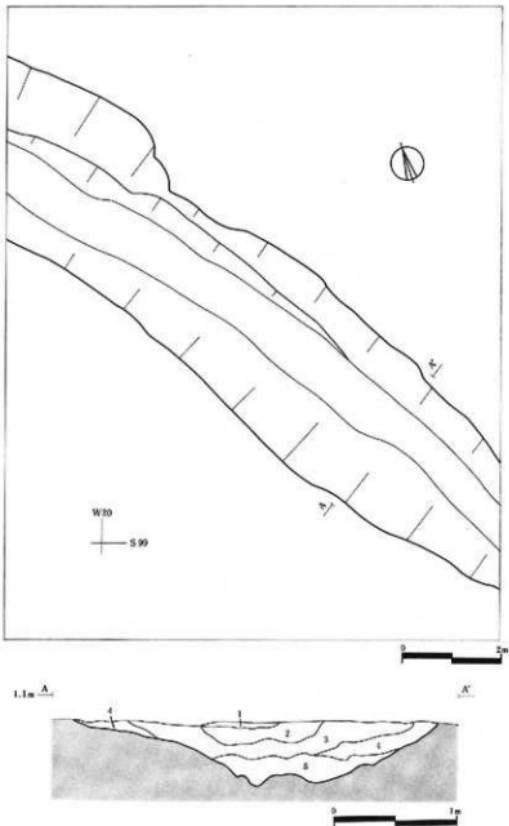
出土遺物（第153図）

堆積土中より1の土師器杯が1点のみ出土した。非ロクロ成形で楕形を呈し、口縁は内湾ぎみに立ち上っている。内外面ともにミガキ調整の後、黒色処理が施されている。

⑮ SD 11溝跡



SD 8 溝跡位置図



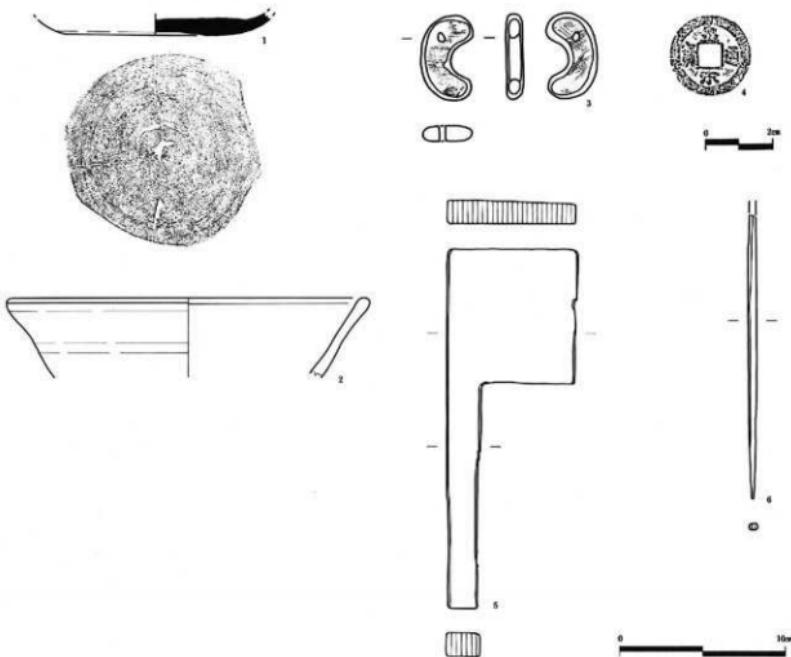
第150図 SD 8 溝跡平面・断面図

遺構状況（第154図）

4区で検出された。北西から南東方向に直線状を呈するが、西端は調査区外に延びている。検出全長は約45mである。S I 25竪穴住居跡・SD 140溝跡などを切り、SD 2溝跡・SB 7堀立柱建物跡はかに切られている。上端幅70cm前後、下端幅20~35cm、深さは14~20cm程度である。底面は安定しており、ほぼ平らな状況を呈している。壁の立ち上りはやや急である。堆積土はA地点で4層、B地点で3層に区分されるがいづれも砂層である。

出土遺物

堆積土中より少量の土器器片と、土錐が1点出土した。このうち土器器片は磨滅の著しい細片ばかりで、特長を把握し得るものは含まれていない。1はA地点4層から出土した土錐である。やや大型で張りのない円筒形を呈する。



番号	立 隊 番 号	種 別 器 形	出 土 位 置	出 土 面 [m]			外 地 調 査			内 地 調 査			残 存	分 類	備 考	写真図版
				口 領	底 領	壁 高	底/口	底 領	壁 高	底/口	内 地 調 査					
1	K-11	須恵器 環状器		-	(10.8)	-	-	ロクロナゲ、底部へ回転ヘラ切り。 回転ヘラ削り。	ロクロナゲ				(4/5)	6	35-7	写真図版
2	1-12	須 漢 器	出土位置	底 領	壁 高	底/口	外 地 調 査	内 地 調 査	内 地 調 査	残 存	分 類	備 考	写真図版			
3	K-3	石 制 環状品	勾 玉	26.0	14.5	5.0	2.5	3.0	完 整	全周に擦痕あり。質透孔有り。				46-3		写真図版
4	N-3	金 制 品	古 繩	出土位置	底 領	壁 高	底/口	底 領	厚 S 領	底/口	底 領	内 地 調 査			写真図版	
5	L-215	木 制 品	用 途 不 明	ス ゾ	板 領	底 領	22.2	7.9	1.5	鐵鋸あり。				59-14		写真図版
6	L-216	木 制 品	木製品	器	セイ	底 領	(17.5)	0.5	0.4	上端無欠損。				58-11		写真図版

第151図 SD 8溝跡出土遺物

(16) SD 139溝跡

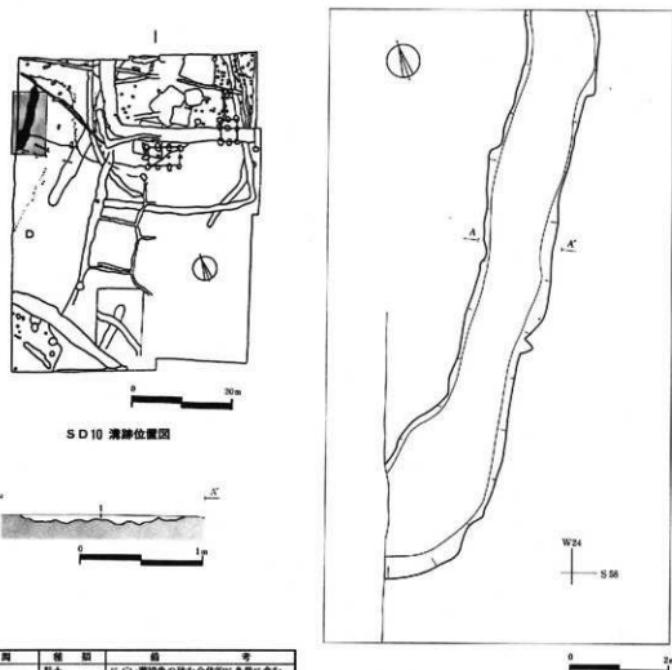
遺構状況(第156図)

4区の北東コーナーから東壁に沿って検出された南北方向の溝跡で、検出全長は約20mである。SD 163溝跡・SK 74土坑を切り、SD 2溝跡に切られている。遺構の東半部は調査区外に延びており上端、下端幅は不明である。深さは20cmで底面にはゆるやかな起伏がみとめられる。堆積土は3層に分けられたが1、3層が黒色～黒褐色の粘土質シルトで、2層は砂である。なお当溝跡はSD 2溝跡との重複部分をすぎた後に消滅してしまうが、方向や堆

積土の状況からこの南側で検出された S D147溝跡と同一のものである可能性も考えられる。

出土遺物（第157図）

2層中より木製品が1点出土したのみである。1は下駄である。板目のクリ材が用いられており、連歯型でやや角ばった形状を呈している。欠損のために詳しい様相は分からぬが、先端と両側部に穿孔がみとめられる。



第152図 SD 10溝跡平面・断面図



第153図 SD 10溝跡出土遺物

(1) SD 162溝跡

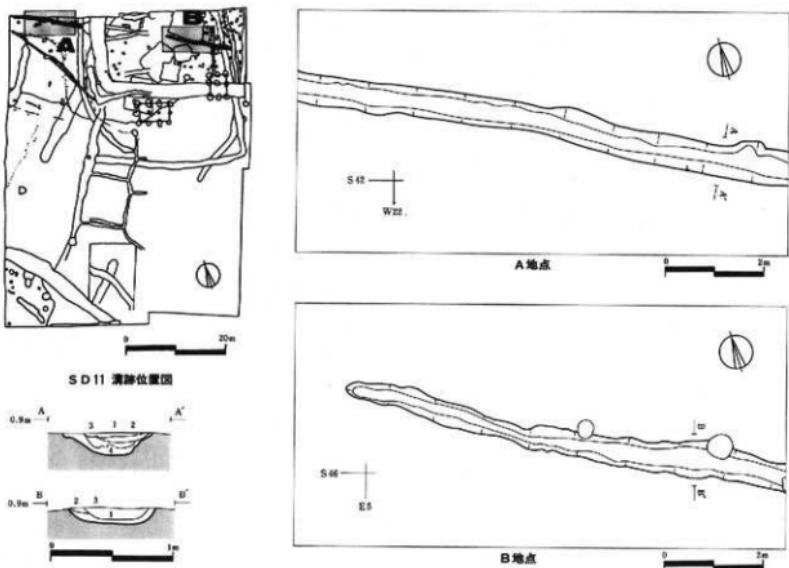
遺構状況（第158図）

4区北東コーナー付近で検出された南北方向の溝跡であるが、北端部分は調査区外に延びており、全体的な様相は不明である。検出全長は約15mを計る。SD 162溝跡を切り、S B 8 据立柱建物跡に切られている。上端幅80cm前後、下端幅15~20cmで深さは45cm程度である。断面形はU字状を呈し、壁の立ち上がりは急である。堆積土は5層に分けられるが、いずれも砂である。なお当遺跡は位置的な関係から、SD 2 溝跡をはさんでこの南側で検出さ

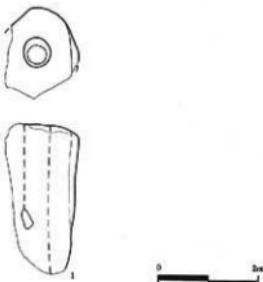
れたSD144溝跡と同一のものである可能性も考えられる。

出土遺物

堆積土中より少量の土器片が出土したがいずれも磨滅の著しい細片ばかりで、特長を把握し得るものは含まれていない。

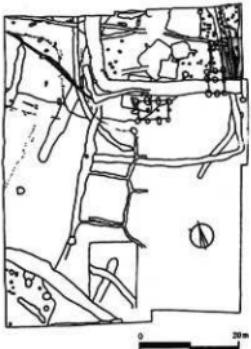


第154図 SD11溝跡平面・断面図

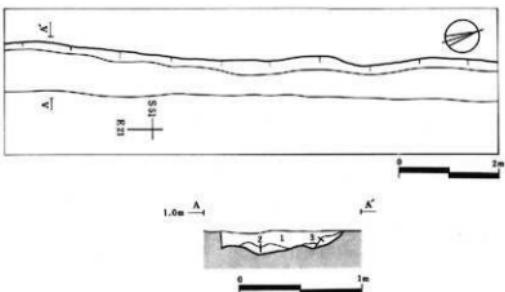


番号	種類	種類	出土地質	出	出	分類	分類	出	写真図版
	標	記		長さ	最大径	孔径	重さ	存	
1	P-21	土器片	土	(6.1)	(2.9)	1.1	-	1.c	43-17

第155図 SD11溝跡出土遺物

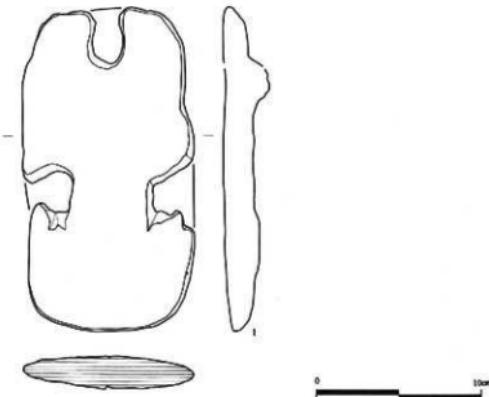


S D 139 溝跡位置図



第156図 S D 139溝跡平面・断面図

順序	色 調	層 面	備 考
1	10YR 1.7/1 黒色	粘土質シルト	
2	10YR 1.7/1 黒色	砂	
3	2.5Y 3/1 黒褐色	粘土質シルト 黄褐色砂をリナ状に含む。	



第157図 S D 139溝跡出土遺物

(18) S D 163溝跡

遺構状況（第159図）

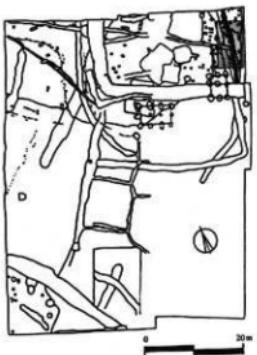
4区北東コーナー付近で検出された。西側のS D 162溝跡に平行して、遺構の西半部分をこの溝跡に切られている。検出全長は約6.5m、深さは15cm前後を計り底面は安定している。断面形は逆台形を呈し、壁の立ち上りは急である。堆積土は2層に分けられ、双方ともに褐色系の砂である。

出土遺物

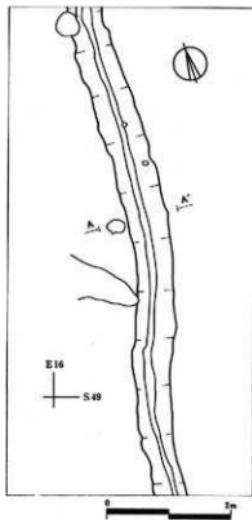
堆積土中より数点の土師器片が出土した。磨滅のすんだものが大部分であるが、非ロクロ成形内面黒色処理の壺が含まれている。

(19) S D 17, 18溝跡

遺構状況（第160図）

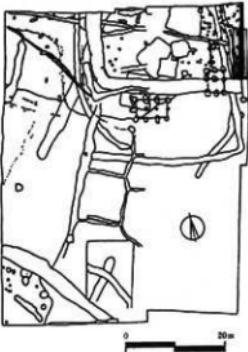


SD 162 溝跡位置図

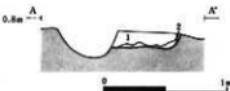
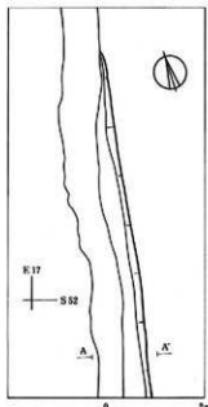


第158図 SD 162溝跡平面・断面図

順序	色	固	種類	層	号
1	2.5Y4/3	オリーブ色	砂		
2	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂		
3	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂		
4	2.5Y4/5	オリーブ褐色	砂		
5	2.5Y5/4	黄褐色	砂	層中に暗灰黃の砂をまだらに含む。	



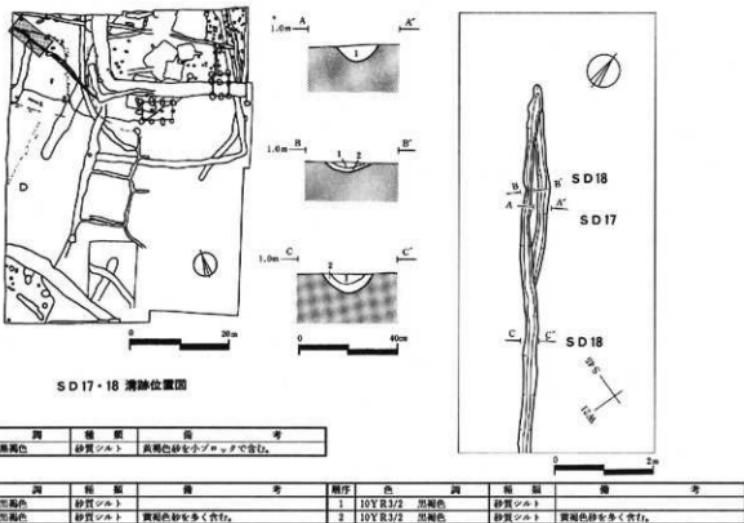
SD 163 溝跡位置図



順序	色	固	種類	層	号
1	10YR4/3	にじく灰褐色	砂		
2	2.5Y4/3	オリーブ色	砂		

第159図 SD 163溝跡平面・断面図

4区北西部で検出された小規模な溝跡で、北西から南東方向にはほぼ直線的に延びている。検出全長はSD17が約3m、SD7は22.5mである。SD18はSD5、6溝跡およびSD19溝跡を切っている。SD17は両端をSD18に切られているが両者には規模・形状・堆積土について共通性がみとめられる。上端幅はともに18~20cm前後で安定しており、深さは5~8cmでごく浅い。また底面のところどころには半円形の鋤痕跡が確認された。堆積土はいずれも黒褐色の砂質シルトが主体となっている。なお、両溝跡は規模・形状から稲作や畑作に伴う耕起痕跡である可能性も想定されたため、SD18溝跡堆積土でプランクトン・オパール分析を実施した。1,500個/gのイネのプランクトン・オパールが検出されたが、他の栽培植物に由来するものは確認されていない。遺物は出土しなかった。



第160図 SD17・18溝跡平面・断面図

20 SD19溝跡

遺構状況（第161図）

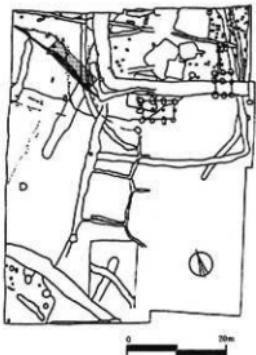
4区北西部で検出された小規模な溝跡でSD18溝跡にほぼ平行して延びるが、遺構の南半部分はこの溝跡に切られている。またSD5、6溝跡を切っている。検出全長は約8.5mである。上端幅18~20cm、深さは5~10cm程度である。底面の数ヶ所では半円形の鋤痕跡がみとめられた。堆積土は黒褐色の砂質シルトが主体となっている。遺物は出土しなかった。なおこの溝跡は規模・形状、堆積土の特長がSD17、18ときわめて類似しており、成因や機能の共通性が推測される。

20 SD9・13・16・20・21・22・23・24溝状遺構・鋤痕跡

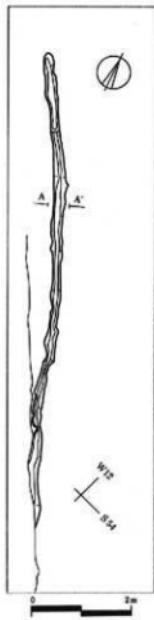
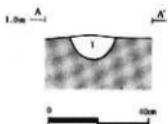
遺構状況（第162~164図）

これらは4区北西部で検出されたごく小規模な溝状遺構（SD9・20・22・23）と、鋤痕跡が列状に並ぶ鋤痕列である。溝状を呈するSD9・20・22・23の底面でも鋤痕がみとめられ、鋤痕列として検出されたものも本来は同様の溝状遺構であった可能性がつよい。溝状遺構のSD9・20・22・23は規模がほぼ共通しており上端幅22~30cm前後、深さは5~8cm程度である。鋤痕列を形成する鋤痕跡の平面形は不整形なものもあるが、いずれも半円形のものを基調としている。大きさは多少のばらつきはあるものの、各列ごとに大きな統一性がみとめられる。

最も良好に検出された S D13B 地点では底辺長 15cm 前後、これに直交する長さ 8 ~ 10cm 前後のものが主体をなしている。深さはいずれの列でもほぼ共通しており 4 から 7cm の間である。堆積土は溝状構造、鋤痕列とともに非常に類似しており、黒色～黒褐色の砂質シルトが主体となっている。遺物の出土は皆無であった。なおこれらの遺構は検出位置にまとまりがあり規模・形状・堆積土等に類似性が伺われることから、時期や機能にも共通性が推測される。遺構の様相から水路や区画溝等の性格は考えにくく前記の S D17 ~ 19 溝跡などとともに本来は畑等の耕作痕と考えられている小溝遺構群の様相を呈していた可能性も考えられる。そのため S D13 鋤痕列堆積土についてプランクトン・オパール分析を実施したが、1,700 個/g のイネのプランクトン・オパールが検出され、ほかの栽培植物に由来するものは確認されなかった。



SD19 溝跡位置図



順序	色	調	堆積土	調	考
I	10YR 3/2 黒褐色		砂質シルト		黄褐色 (第 2 層) を含む。

第161図 SD19溝跡平面・断面図

22 SD144溝跡

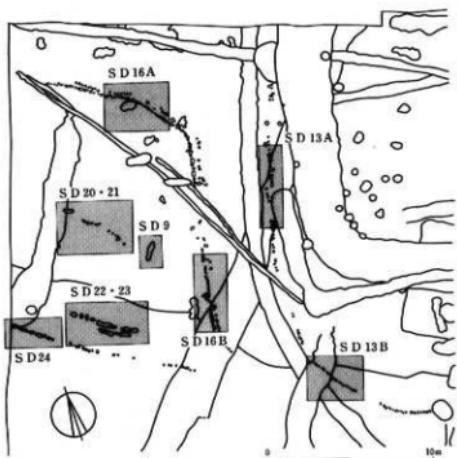
遺構状況 (第165図)

4 区北東部で検出された北東から南西方向の溝跡であるが、位置・形状や堆積土の状況から S D163 溝跡と同一のものである可能性がつよい。検出全長は約 19m である。S D2 + 7 溝跡に切られ、南端部は SR1 河川跡内で消滅する。上端幅 40cm 以上、下端幅は 17cm 前後、深さは 25cm 以上である。底面は安定した状況を呈している。堆積土は図示の箇所では 5 層に分けられ、下位の 4 + 5 層は砂であるが上位は黒～黒褐色系の粘土が主体となっている。3 層には未分解の植物遺体が混じる。なお S D2 と接する南側部分では褐色の砂が主体で、位置による堆積土の相違がみとめられる。

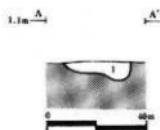
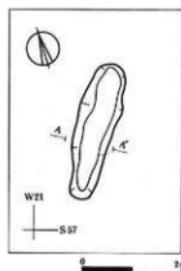
出土遺物

非クロロ成形の土器器坏・甕が数点出土したが、いずれも細片で図化や特長を把握し得るものはみられない。坏に

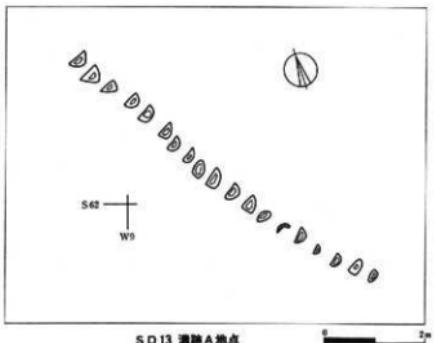
は内面黒色処理が施されている。



S D 9 - 13 - 16 - 20 - 21 - 22 - 23 - 24 溝跡位置図



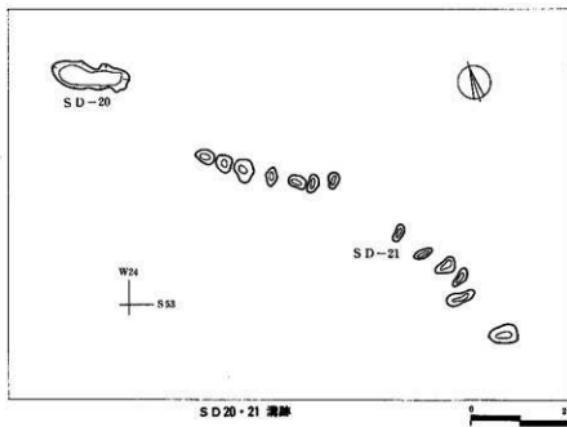
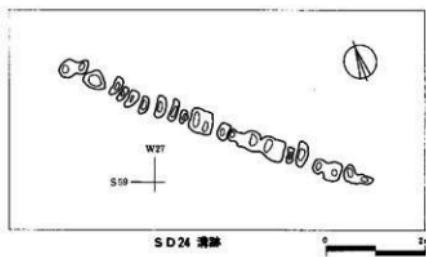
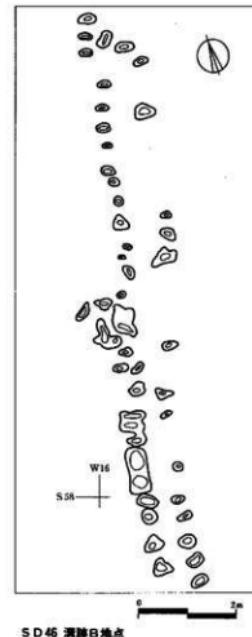
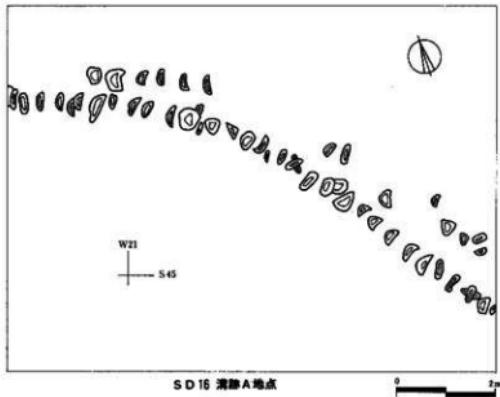
S D 9 溝跡平面・断面図



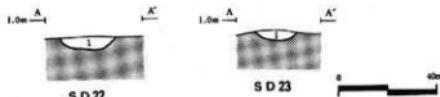
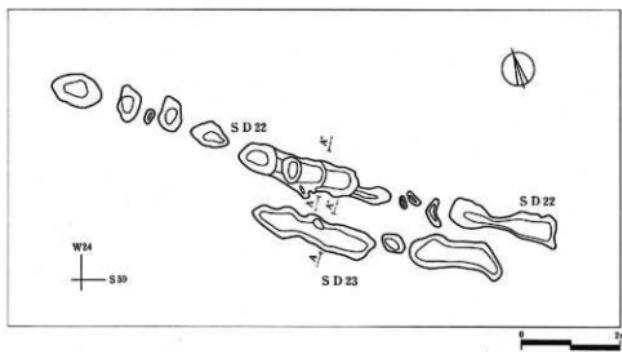
S D 13 溝跡A地点

第162図 S D 9 - 13溝跡平面・断面図

S D 13 溝跡B地点

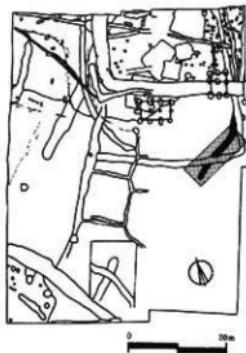


第163图 SD 16·20·21·24漏跡平面图

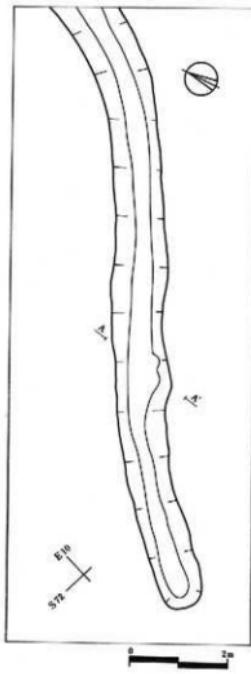


順序	色 調	固 形	種 類	特 考
1	10YR 2/1 黒色	粘土質砂		

第164図 S D 22・23溝跡平面・断面図



S D 144 溝跡位置図



順序	色 調	固 形	種 類	特 考
1	10YR 2/2 黒褐色	粘土	未分解の植物遺体を多量に含む。全体的に 砂を含む。	
2	2.5Y 3/1 黑褐色	砂		
3	10YR 2/1 黒色	粘土	未分解の植物遺体をきわめて多量に含む。 泥炭にもから。	
4	5 Y 2/2 オリーブ黒色	砂		
5	5 Y 3/2 オリーブ黒色	砂		

第165図 S D 144溝跡平面・断面図

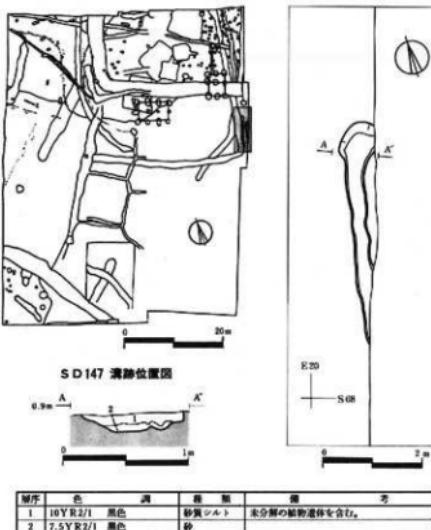
23 SD 147溝跡

遺構状況（第166図）

4区北東部ではほぼ東壁に沿って検出された。検出部分は南北方向を示すが、両端部ともに調整区外に延びており、全体的な様相は不明である。検出全長は約4mを計る。上端幅35~40cm、下端幅25~30cm前後で深さは15cmほどである。堆積土は上下2層に分けられ、上層はやや泥炭質の黒色粘土、下層は砂である。

出土遺物（第167図）

堆積土1層中より木製の櫛が1点出土した。全体的な形状等は知り得ないが、掠はゆるい弧を描き櫛歯の間隔は非常に密である。



第166図 SD 147溝跡平面・断面図



番号	性	解説	種	出上位置	調	層	材	木取り	形	基	高	厚	考	写真図版
1	L-6	木製品	櫛	イヌノヤ脱の一角	板	材	-	4.3 (3.9)	1.0	櫛は細い孔を有し、欠損部多し。			58-5	

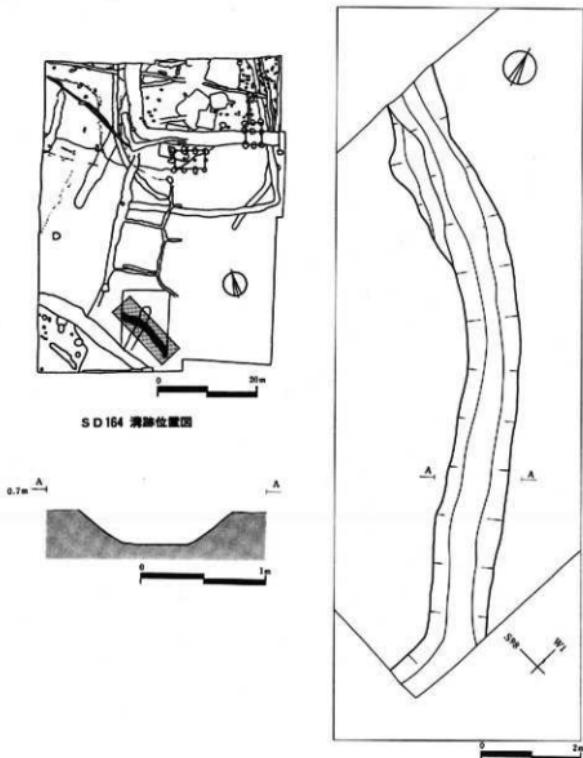
第167図 SD 147溝跡出土遺物

24 SD 164溝状遺跡

遺構状況（第168図）

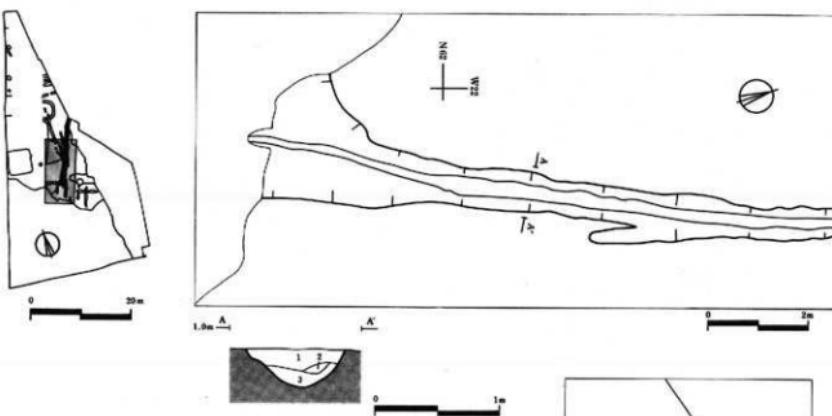
4区南西部に設けたSR 1河川跡試掘トレンチで検出された北西から南東方向の溝跡である。検出層序はSR 1河川跡堆積土3層上面で上端幅1~1.4m、下端幅は60cm前後で、深さは30cm程度である。堆積土は泥炭質の黒色

粘土を主体とし、全体的に粗砂の混入がみとめられる。なおこの延長と考えられる落ちこみが、調査区西壁部分の S R 1 本調査区でも確認されたが、この部分では平面・断面形ともに不安定な状況を呈した。この様相から本溝跡は人为的に掘られたものではなく、S R 1 の埋没過程で一時的に形成された自然流路痕跡である可能性が考えられる。遺物は出土しなかった。

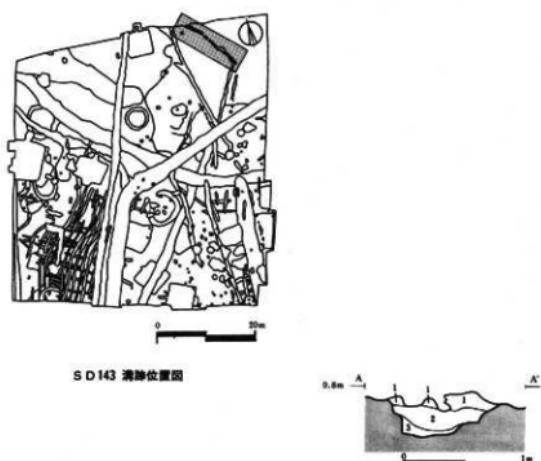


第168図 SD 164溝跡平面・断面図

① SD 100 溝跡

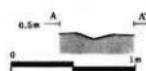
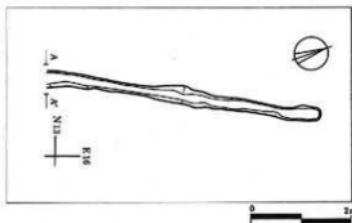
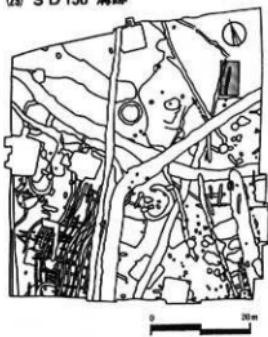


② SD 143 溝跡



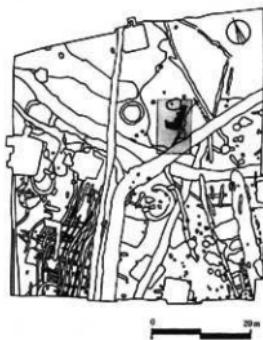
第169図 SD 100・143溝跡平面・断面図

(3) SD 158 溝跡

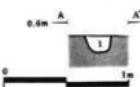
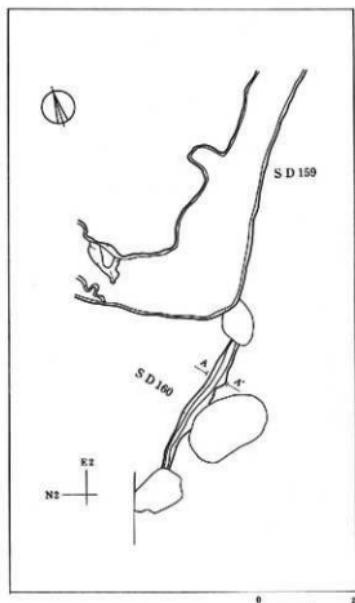


SD 158 溝跡位置図

(3) SD 159・160 溝跡

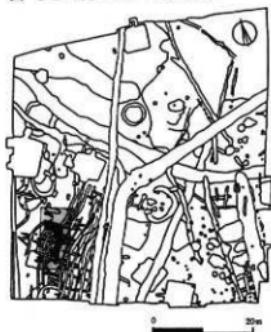


SD 159・160 溝跡位置図

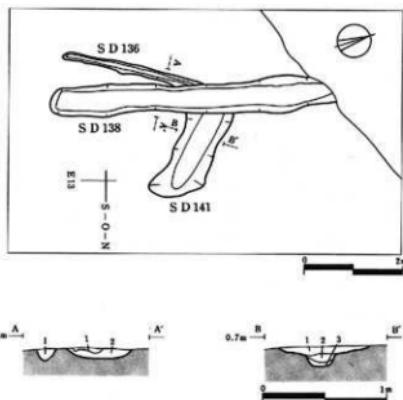


第170図 SD 158・159・160溝跡平面・断面図

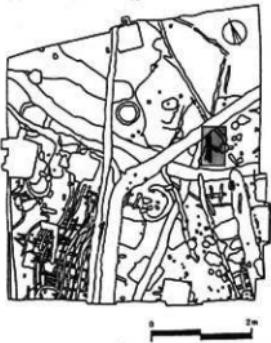
31) SD 138・141・136 溝跡



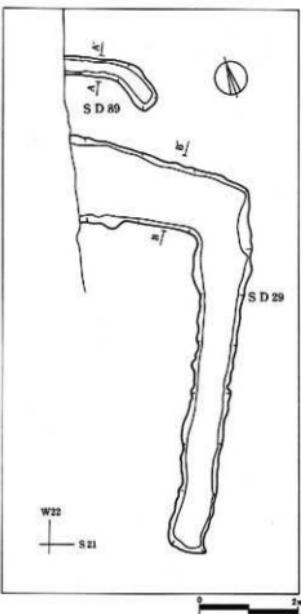
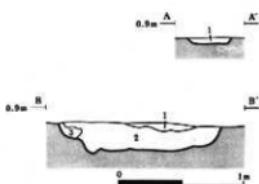
SD 138・141・136 溝跡位置図



32) SD 89・29 溝跡

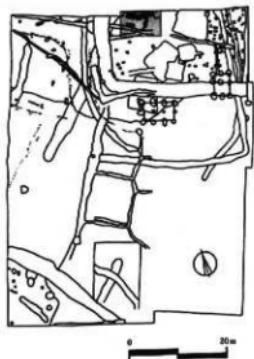


SD 89・29 溝跡位置図

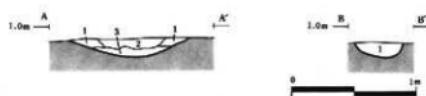
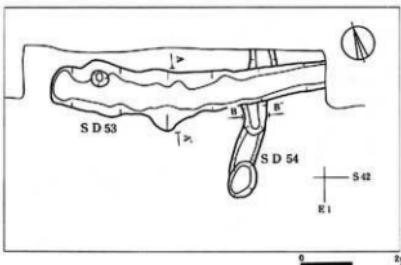


第171図 SD 138・141・136・89・29溝跡平面・断面図

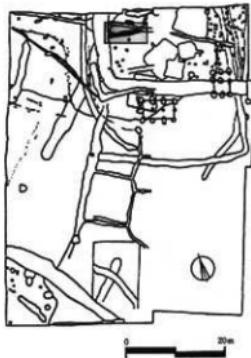
(3) SD 53・54 溝跡



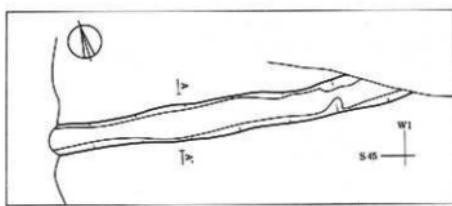
SD 53・54 溝跡位置図



(4) SD 12 溝跡

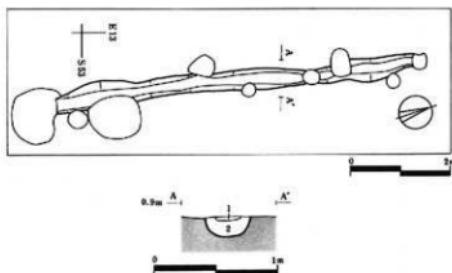
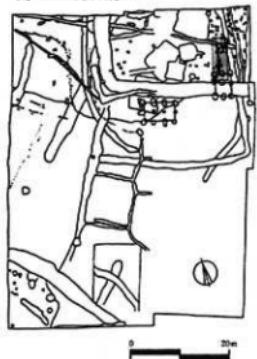


SD 12 溝跡位置図



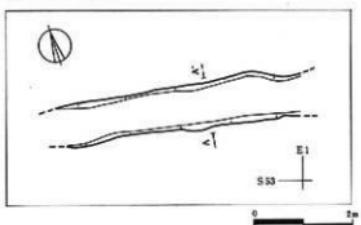
第172図 SD 53・54・12溝跡平面・断面図

(3) SD 161 溝跡



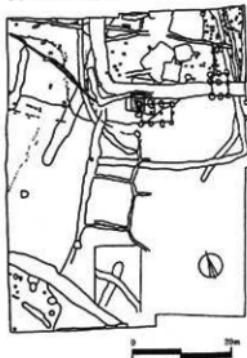
SD 161 溝跡位置図

(3) SD 3 溝跡

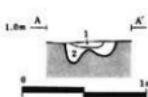
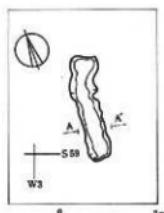


SD 3 溝跡位置図

(3) SD 4 溝跡

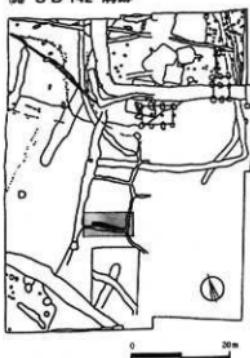


SD 4 溝跡位置図

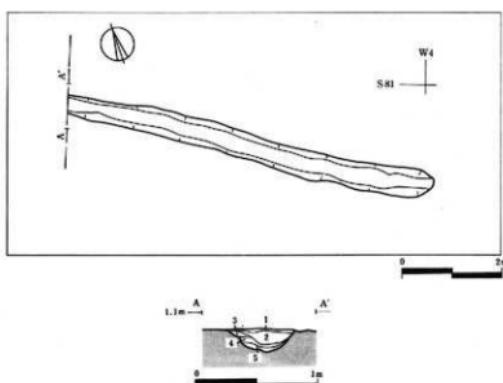


第173図 SD 161・3・4 溝跡平面・断面図

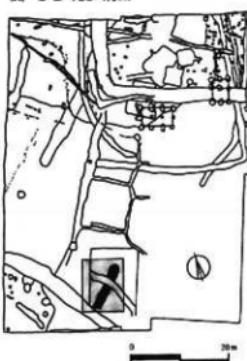
(3) SD 142 溝跡



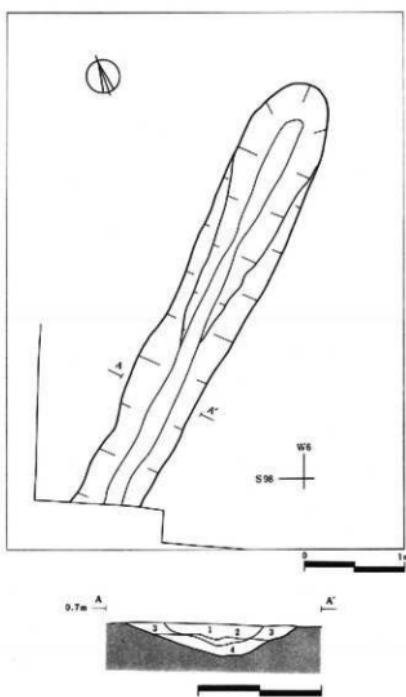
SD 142 溝跡位置図



(4) SD 165 溝跡



SD 165 溝跡位置図



第174図 SD 142・165溝跡平面・断面図

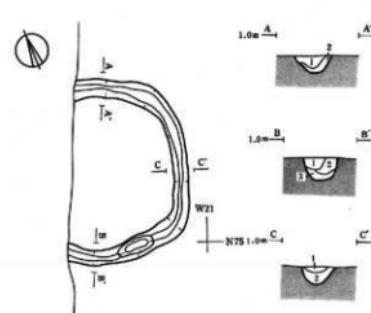
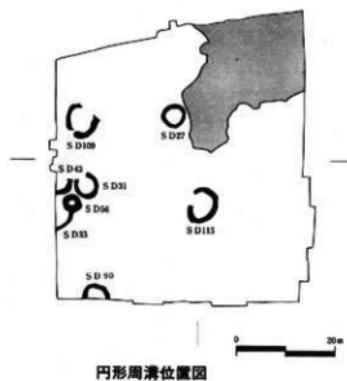
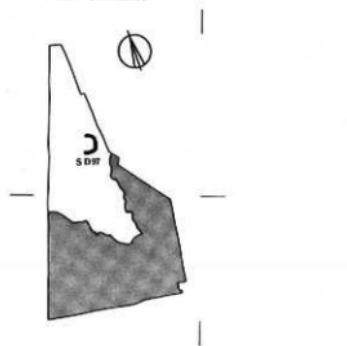
No.	色	調	種	類	度	測定値(cm)	地表高さ(cm)	出土品	No.	色	調	種	類	度	測定値(cm)	地表高さ(cm)	出土品
1	S D109	2	80.0	32.0	17.0	赤	赤	赤	10	S D29	2	130.0	25.0	16.1	D-1号、F-41丸瓦		
2	S D143	3	91.0	37.0	13.0	赤	赤	赤	11	S D53	4	99.0	15.0	5.5	赤		
3	S D158	3	35.0	4.0	1.4	赤	赤	赤	12	S D54	4	38.0	12.0	3.0	赤		
4	S D129	3	—	—	—	赤	赤	赤	13	S D12	4	—	—	6.5	赤		
5	S D169	3	28.0	15.0	6.5	赤	赤	赤	14	S D161	4	29.0	17.0	7.0	赤		
6	S D128	3	55.0	7.0	2.4	赤	赤	赤	15	S D1	4	85.0	9.0	5.0	赤		
7	S D141	3	74.0	16.0	5.0	赤	赤	赤	16	S D4	4	40.0	19.0	2.0	赤		
8	S D126	3	15.0	9.0	2.7	赤	赤	赤	17	S D142	4	53.0	26.0	7.0	赤		
9	S D69	3	35.0	4.0	2.0	赤	赤	赤	18	S D165	4	130.0	27.0	9.5	赤		

第34表 溝跡観察表

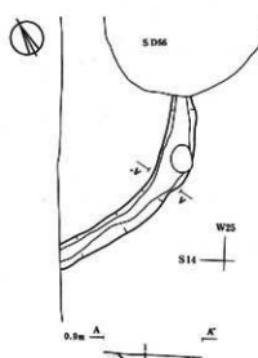
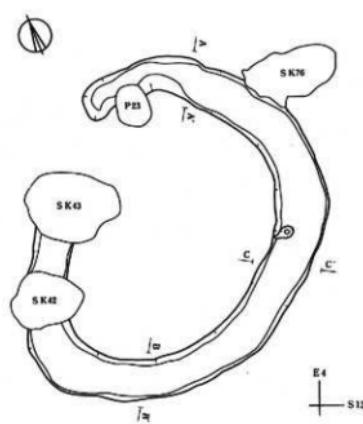
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	2.5Y3/1	赤褐色	シルト質砂						3	2.5Y5/2	褐色	砂						
2	10YR2/3	黒褐色	シルト質砂															
3	S D145								3	2.5Y2/1	褐色	粘土						
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	10YR3/3	暗褐色	シルト質砂						2	2.5Y2/1	褐色	粘土						
2	2.5Y2/1	褐色																
4	S D166																	
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	2.5Y6/2	灰白色	火成岩	火成岩集塊層					2	2.5Y2/1	褐色	粘土質シルト						
5	S D141																	
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	10YR6/5	灰褐色	砂質シルト						3	10YR6/2	灰褐色	砂						
2	10YR5/2	灰褐色	砂															
6	S D126																	
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	2.5Y3/1	黒褐色	粘土質シルト															
9	S D59																	
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	10YR4/6	褐色	砂															
10	S D29																	
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	2.5Y4/2	暗灰褐色	砂質シルト	水田耕作土?					3	2.5Y3/3	暗オーブ褐色	砂						
2	2.5Y3/1	暗褐色	粘土質シルト	水田耕作土?														
11	S D53																	
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	2.5Y4/2	暗灰褐色	砂						3	2.5Y5/2	暗褐色	砂						
2	2.5Y3/2	暗褐色	砂															
12	S D54																	
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	10YR4/4	褐色	砂															
13	S D12																	
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト	変色褐色の砂をブロッタで多量に含む。														
14	S D161																	
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	2.5Y4/2	暗灰褐色	砂						2	2.5Y4/4	セラーブ褐色	砂						
15	S D5																	
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	10YR3/2	暗褐色	砂質粘土	基本層1層に鉄鉱														
16	S D4																	
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	10YR2/3	黑色	シルト質粘土	全般的に腐蝕を含む。					2	10YR2/1	黑色	シルト質粘土	黑色の砂をブロッタで含む。					
17	S D142																	
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	10YR2/2	黒褐色	シルト質砂						4	10YR5/4	にじい褐色	砂						
2	10YR2/1	黒褐色	砂						5	7.5YR1.7/1	黒褐色	粘土質シルト	植物遺体を斑状に含む。					
3	10YR2/1	黒褐色	粘土	水分離の植物遺体を多量に含む。														
18	S D163																	
順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	順序	色	調	種	類	度	測定値	地表高さ	備考	
1	10YR2/1	黒褐色	粘土	水分離の植物遺体を多量に含む。					3	2.5Y3/1	黒褐色	粘土						
2	10YR1.7/1	黒褐色	粘土	水分離の植物遺体を多量に含む。					4	2.5Y3/1	黒褐色	粘土	水分離の植物遺体をきわめて多量に含む。					

第35表 溝跡堆積土計測表

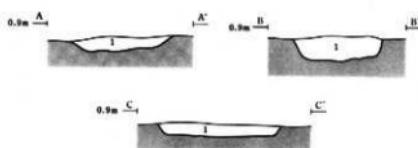
6. 円形周溝遺構



(1) S D 97 円形周溝

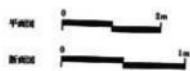


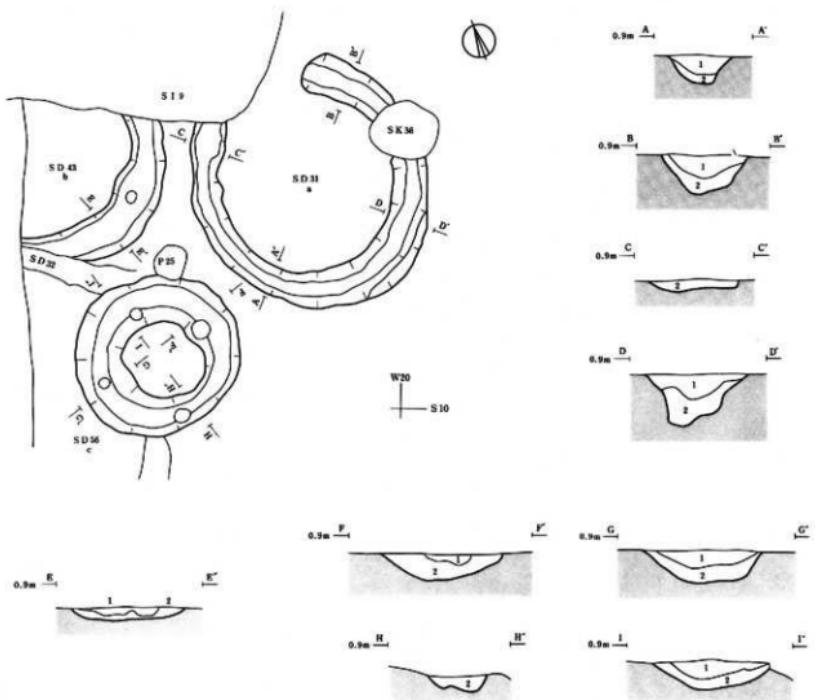
(2) S D 33 円形周溝



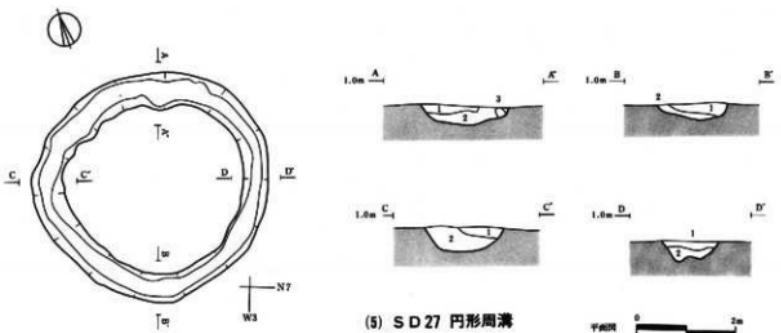
(3) S D 115 円形周溝

第175図 円形周溝平面・断面図(1)

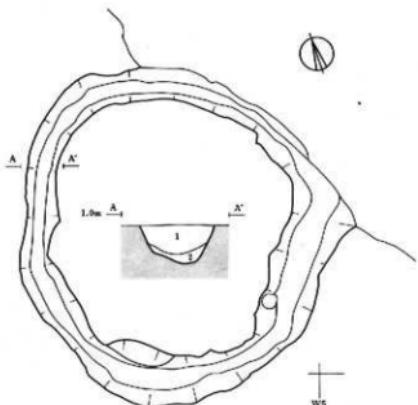




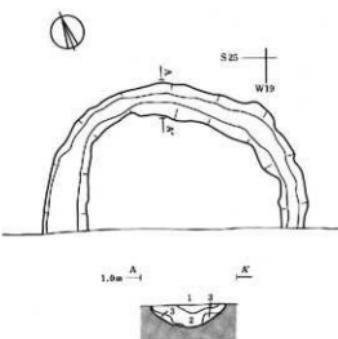
(4) SD 31 + 43 + 56 円形周溝



第176図 円形周溝平面・断面図(2)



(6) SD 109 円形周溝



(7) SD 90 円形周溝



第177図 円形周溝平面・断面図(3)

No.	遺構 No.	径	上 級	底 級	出 土 物	No.	遺構 No.	径	上 級	底 級	出 土 物
1	SD 97	4.0m	28~31cm	14~19cm	なし	4 c	SD 56	3.4×3.3m	49~55cm	15~25cm	赤瓦陶土断面断片
2	SD 33	6.5m	56cm	6.0cm	赤瓦陶土断面断片	5	SD 27	4.9×4.7m	48~72cm	12~20cm	赤瓦陶土断面断片
3	SD 115	7.4×6.5m	73~98cm	11~21cm	赤瓦陶土断面断片	6	SD 109	7.0m	60cm	32cm	なし
4 a	SD 31	5.2m	52~84cm	11~43cm	赤瓦陶土断面断片	7	SD 90	6.0m	60cm	18cm	赤瓦陶土断面断片
6 b	SD 43	(5.2m)	92cm	11cm	なし						

第36表 円形周溝観察表

1 SD 97				2 SD 33				3 SD 115			
順序	色	調	種類	順序	色	調	種類	順序	色	調	種類
1	5 Y 3/1	オリーブ褐色	シルト質砂	1	2.5 Y 4/3	オリーブ褐色	砂	1	10 Y R 6/6	明黄色	沙
2	10 Y R 2/4	暗褐色	砂	2	5 Y 4/1	褐色	砂				
3	5 Y 4/1	褐色	砂								
4 a SD 31				4 b SD 43				4 c SD 56			
順序	色	調	種類	順序	色	調	種類	順序	色	調	種類
1	2.5 Y 4/2	オリーブ褐色	砂	1	2.5 Y 3/3	暗オリーブ褐色	砂	1	2.5 Y 4/4	オリーブ褐色	砂
2	2.5 Y 4/4	暗褐色	砂	2	2.5 Y 4/4	オリーブ褐色	砂	2	2.5 Y 5/3	黄褐色	砂
5 SD 27				6 SD 109				7 SD 90			
順序	色	調	種類	順序	色	調	種類	順序	色	調	種類
1	10 Y R 2/2	暗褐色	シルト質砂	1	10 Y R 2/2	暗褐色	砂	1	2.5 Y 4/2	暗灰褐色	砂
2	10 Y R 2/3	暗褐色	砂	2	2.5 Y 4/3	オリーブ褐色	砂	2	2.5 Y 4/3	オリーブ褐色	砂

第37表 円形周溝堆積土柱記表

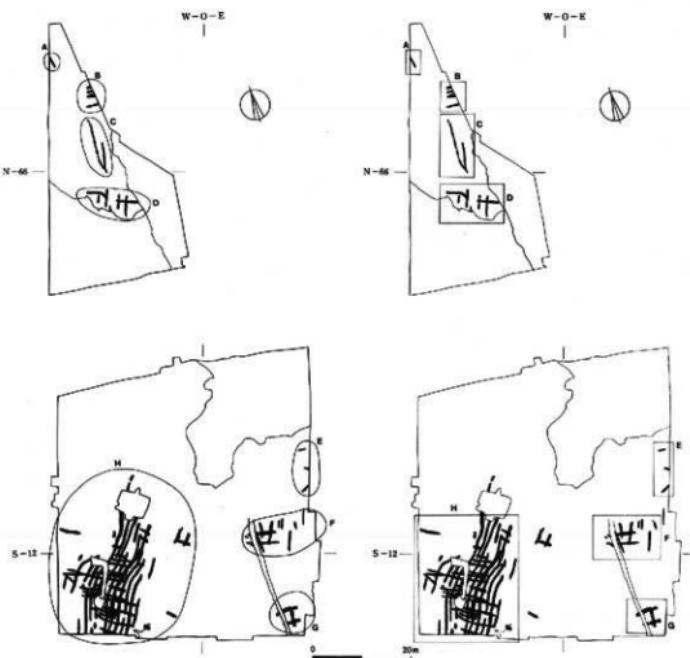
円形周溝は2区で1基、3区で8基、合計9基が確認されたが、SD 27を除きいずれも部分的な検出である。他遺構との重複関係をみると、すべての箇所で他の遺構に切られている。また円形周溝間での重複（SD 33・56）も一箇所でみとめられる。遺構の位置的分布に特に規則性は看取されないが、W-Eラインより西侧に分布し、東側部分にはみられない。また3区の西側部分では近接して5基が集中している。

平面形は比較的整った円形を示しているが、SD 115は偏平で梢円状況を呈している。直径は最小のSD 56が3.4×3.3m、最大はSD 115で長径7.4を計る。溝幅はSD 97が最狭で28~31cm、SD 115が最も広く73~98cmである。

深さは20cm代が平均的であるが、S D31・109などでは一部でやや深くなっている。またS D33は遺存状態がわるく、深さは6cm前後と浅い。溝の底面は概ね安定しており、ピットや掘削時の鋤痕跡などはみとめられない。また溝内側の平場部分には、トレンチを入れるなどして精査につとめたものの、土坑等の施設は確認されなかつた。堆積土はいづれも褐色系の砂を主体とし、自然流入と考えられる。

出土遺物は全体的に非常に少なく皆無のものもあるが（S D97・43・90・109）、S D27・31・56・90・33からは土器片と考えられる土器片が数点ずつ出土した。しかしながらいづれも磨滅の著しい細片ばかりで、器形判別をはじめとして特長を把握し得るものはない。なおこれらのなかには、内黒の資料はみられない。

7. 小溝遺構群



第178図 小溝遺構跡位置図

規模が小さくまとまりをもって検出された溝跡を小溝遺構群とした。2・3区で確認されたが、検出位置からA～Hの8群に区分した。これらのうち明瞭に検出されたのは3区南西部のH群のみで、他のものはいづれも断片的で規則性やまとまりの把握が困難である。なお4区北西部分で検出されたS D9・13・16・20・21・23・24は鋤痕跡を残す点に相違がみとめられたために、今回の報告では別遺構（溝跡）として取り扱ったが、本来は当遺構と同様の性格を有するものである可能性も想定される。

(1) A群

2区北西隅で検出された。南北方向を示すS D92溝跡1条のみである。この溝跡は南端を擾乱に切られているが、

方向や堆積土の状況からC群のSD98溝跡と同一のものである可能性がつよい。上端幅30cm前後、下端幅は15cm程度で深さは8cm前後を計る。底面に鋸痕等はみとめられずほぼ平坦な状況を呈している。堆積土は黒褐色のシルト質砂単層であるが、下位には基本層2層の黄褐色砂が小ブロックで混入している。遺物は出土しなかった。

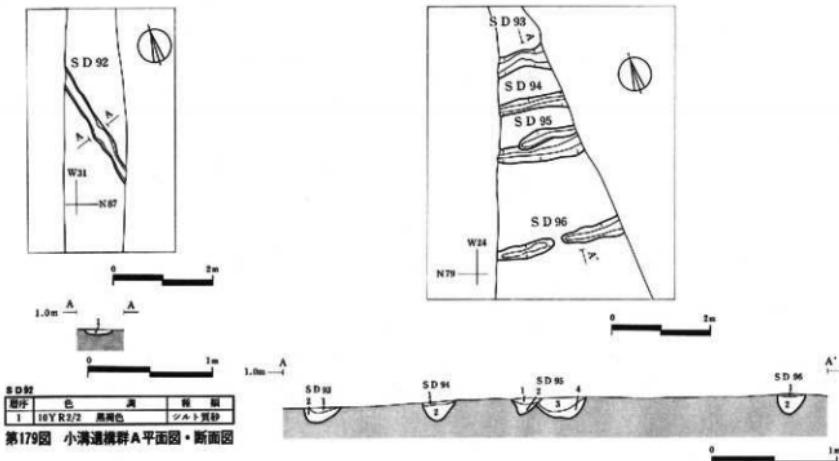
(2) B群

遺構状況（第180図）

2区北半東壁部分で検出された東西方向の5条の溝跡（SD93・94・95a・95b・96）で構成される。西端部は搅乱に切られ部分的な検出である。いずれの溝跡もN-82°-W前後を示し、方向に統一性がうかがわれる。SD95a・95bには重複がみとめられる。上端幅は20cm~30cmであるがSD95bはやや広く35cm程度と推定される。深さは28cm程度で断面形はほぼU字型を呈するがSD95bは底面に鋸痕等はみとめられず平坦な状況を呈している。各溝間の中心間の距離はSD93~95bでは1m前後で掘っているが、SD95b~96は1.9mとなっている。堆積土はいずれの溝跡でも2層に分けられ砂を主体としているが、上層は黒褐色~褐灰色で、下層は基本層2層にちかい、黄褐色系の色調を呈している。

出土遺物

SD95a堆積土2層中より非ロクロ成形の土器器片が1点出土したが、細片であるために図示し得なかった。器種は杯と考えられ、内面黒色処理が施されている。



第179図 小溝遺構群A平面図・断面図

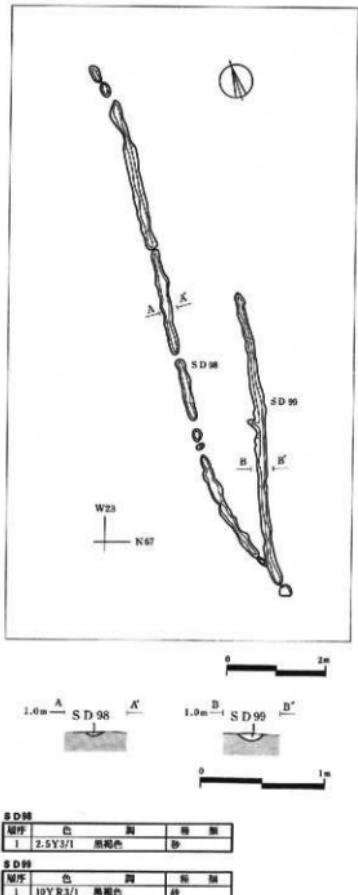


第180図 小溝遺構群B平面図・断面図

(3) C群

遺構状況（第181図）

2区北半で検出された南北方向の2条の溝跡（SD98・99）で構成される。SD97円形周溝・S I 16堅穴住居跡



第181図 小溝遺構群C平面図・断面図

出土遺物 (第188図)

S D106溝跡より土器部が1点出土した。ほかの溝跡からは皆無であった。2は非ヨクロ成形の杯である。丸底で外面有段の資料であるが、段の位置が高く短い口縁部は直線的に外傾する。外面の調整は口縁部横ナデ・底部はヘラケズリである。内面はヘラミガキの後に黒色処理が施されている。

(5) E群

遺構状況 (第183図)

3区北半の東壁部分で検出された東西方向の溝跡3条 (SD131・132・133) で構成される。いずれの溝跡も調査区東壁や他遺構に切られ検出長の短い断片的なものである。SD132はピットにSD133はSK70土坑に切られている。上端幅はSD131が30cm前後、SD132・133は20~25cm程度で、深さは5~10cmを計る。断面形はU字形 (S

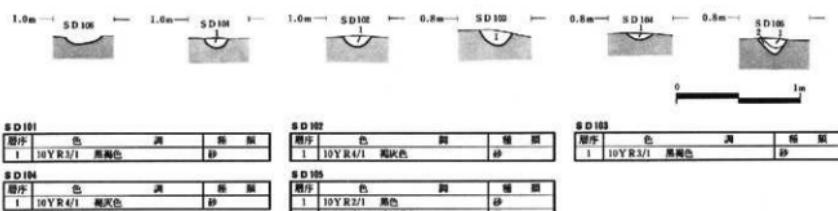
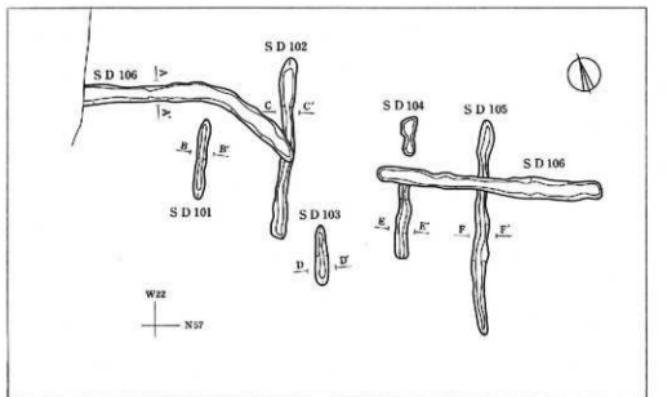
及びSD100溝跡を切っている。検出全長はSD98が11m、SD99は約6.2mでSD98を切っている。方向はSD98がN-2°-E、SD99はN-5°-Eで差異がみられる。形状・規模とともに類似しており上端幅20cm前後、深さは8cm程度である。断面形はゆるやかなU字形を呈している。底面に鋸痕等は認められずほぼ平坦な状況を示している。堆積土は両者とも黒褐色砂の単層であるが、部分的に層下部に基本層2層の小ブロックが混入している。遺物は出土しなかった。

(4) D群

遺構状況 (第182図)

2区南半部で検出された。南北方向を示す5条の溝跡 (SD101~105) と東西方向のSD106、合計6条の溝跡で構成される。SD106は途中で途切れているが、検出面に不明瞭ながら連結する痕跡がみとめられ同一のものと判断された。この溝跡は南北方向の溝跡SD102・104を切っている。西端は搅乱に切られ、SD100溝跡を切っている。東端はSR2河川跡の上端直前で止まっている。検出全長は11mである。上端幅は30~45cmを計り、南北方向の溝跡よりもやや広くなっている。断面形はごくゆるやかなU字形を示し、深さは6~8cm前後である。底面は平坦である。西側の屈曲部を除く全体的な方向はN-70°-W前後である。堆積土は黒褐色を呈する砂の単層である。南北方向の溝跡SD101~105は検出長の短い断片的なもので、最長のSD105が4.3m、最短のSD103は1.2m程度である。各溝の平均的な中心間距離は約1.7mであるが、SD102・103の間は約1mと狭くなっている。いずれの溝跡も上端幅、深さは類似しており前者は30cm前後、深さは16cm程度である。断面形はゆるやかなU字形を呈し、底面はほぼ平坦である。方向は全体的にN-20°-E前後を示し、東西方向のSD106とはほぼ直交している。堆積土は褐灰色砂の単層を基調とするが、下部に基本層2層の黄褐色砂を小ブロックで含んでいる。

D132・133)、ごくゆるやかな船底形 (SD131) を呈し、底面は平坦である。方向は以下のとおりであるが、かなりのばらつきがみられ規則性はみられない。SD131・N-65°-E、SD132・N-60°-W、SD133・N-85°-W。各溝跡間の距離は4m前後を計る。堆積土は共通しており未分解の植物遺体を含む黒色または黒褐色の粘土質シルトを主体としている。遺物は出土しなかった。

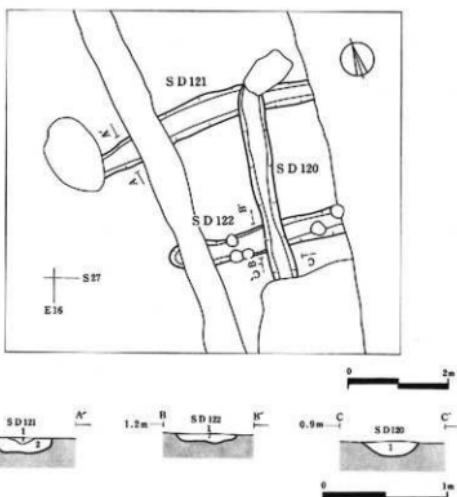
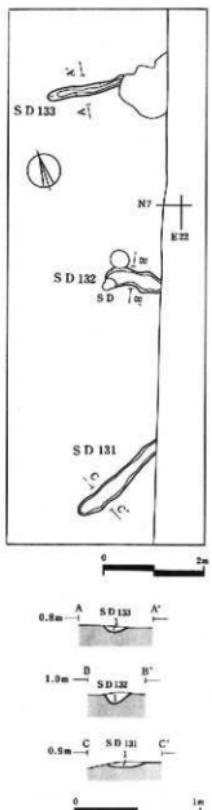


第182図 小溝透構群D平面図・断面図

(6) F群

遺構状況 (第185図)

3区南半の東側で検出された。南北方向の8条の溝跡 (SD153・128・152・151・150・156・148) と東西方向を示す2条の溝跡 (SD154・155) である。これらの溝跡はSD153・128を除外すれば方向や配置に大きな規則性も伺われるが、全体的なまとまりは不明瞭である。SD153・128・152・151の南北方向のものが、東西方向の溝跡SD154・155を切っている。他遺構と本群の主な重複をみると、SD5・119・123溝跡に切られている。各溝跡の規模は次のとおりである。上端幅は20~30cmのものが主体であるが、SD153・154は広い。深さは10cm前後から15cm程度を計る。断面形はゆるやかなU字状と船底形を呈するものがあり一様ではない。底面に動痕等はみられずほぼ平坦な状況である。各溝跡の中心間距離は南北方向のSD152~151~156~149および東西方向のSD154~155では1.5~2mの間で大きな近似性がうかがわれるが、方向の異なるSD153・128やSD150を加えた全体でみるとばらつきが目立っている。堆積土はいずれの溝跡も特長がよく類似しており、褐色系の砂を主体としている。



SD 121		
順序	色	調
1	10YR 4/4	褐色
2	2.5Y 6/4	にぶい黄褐色

SD 122		
順序	色	調
1	10YR 4/4	褐色

SD 120		
順序	色	調
1	10YR 4/4	褐色

第184図 小溝遺構群G 平面図・断面図

出土遺物

S D 153・128・152・151・150・149・154・155の各溝跡から土師器が出土した。磨耗はみられないが細片ばかりで図示し得なかった。特長の把握も困難であるが、ロクロ成形のものは含まれていないようである。

(7) G群

遺構状況（第184図）

3区南東コーナー部分で検出された。南北方向の1条の溝跡（S D 120）と東西方向の溝跡（S D 121・122）2条で構成される。S D 120がS D 121・122を切っている。他遺構との主な重複をみるとS D 119溝跡やSK 48・75土坑等に切られており、ほかの遺構を切る状況はみとめられない。上端幅、深さは各溝跡とも類似しており前者は45~50cm前後、後者は10~13cm程度である。底面に鋤痕等はみとめられずほぼ平坦な状況を呈している。方向は南北方向のS D 120がN-7°-E、東西方向のS D 121・122はN-90°-E前後で直交にちかい様相を示している。S D 121・122の中心間距離は約2.7mを計る。堆積土はいずれの溝跡も非常に類似しており、褐色の砂を主体として下層には基本層2層の黄褐色砂が混入している。

SD 120		
順序	色	調
1	2.5Y 3/1	褐色

SD 122		
順序	色	調
1	10YR 2/2	褐褐色

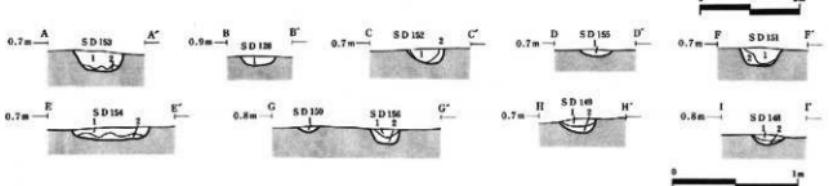
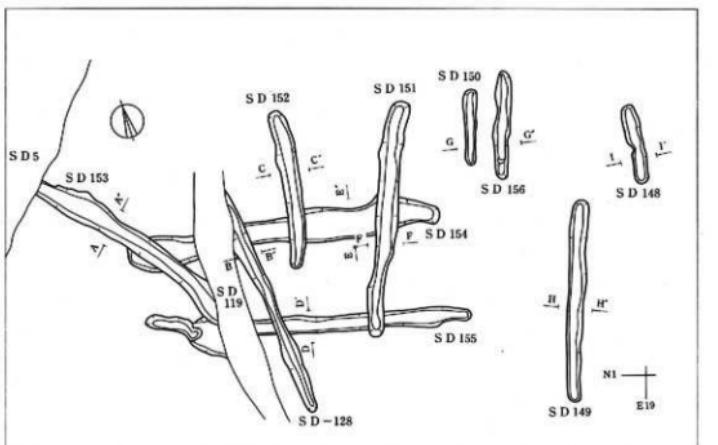
SD 121		
順序	色	調
1	10YR 5/6	黄褐色

第183図 小溝遺構群E 平面図・断面図

小溝遺構群Eは南北方向のS D 120と東西方向のS D 121・122で構成される。S D 120は南北方向の溝跡で、S D 121・122は東西方向の溝跡である。S D 120の南北方向の溝跡は南北方向のS D 120がN-7°-E、東西方向のS D 121・122はN-90°-E前後で直交にちかい様相を示している。S D 121・122の中心間距離は約2.7mを計る。堆積土はいずれの溝跡も非常に類似しており、褐色の砂を主体として下層には基本層2層の黄褐色砂が混入している。

出土遺物

S D 121・122堆積土中より土師器片が数点出土した。いずれにも磨耗はみられないが細片ばかりで図示のできるものはない。ロクロ成形のものは含まれていないようである。



SD 153			
順序	色	調	種類
1	10YR 4/3	にぶい黄褐色	砂質シルト
2	2.5Y 5/3	黄褐色	砂

SD 128			
順序	色	調	種類
1	2.5Y 2/1	黑色	砂質シルト
2	2.5Y 4/2	オリーブ褐色	砂質シルト

SD 155			
順序	色	調	種類
1	10YR 3/3	暗褐色	砂質シルト

SD 151			
順序	色	調	種類
1	10YR 3/1	黑色	粘土質シルト
2	2.5Y 6/4	K-F-1 黄褐色	砂

SD 150			
順序	色	調	種類
1	10YR 4/4	褐色	砂質シルト

SD 156			
順序	色	調	種類
1	10YR 3/2	黑色	粘土質シルト
2	2.5Y 7/3	にぶい黄褐色	砂質シルト

SD 148			
順序	色	調	種類
1	10YR 4/4	褐色	砂質シルト
2	2.5Y 7/6	明るい褐色	砂

SD 152			
順序	色	調	種類
1	2.5Y 2/1	黑色	砂質シルト
2	2.5Y 4/2	オリーブ褐色	砂質シルト

SD 154			
順序	色	調	種類
1	10YR 3/2	暗褐色	砂質シルト
2	2.5Y 7/3	浅黄色	砂

SD 149			
順序	色	調	種類
1	10YR 5/6	深褐色	砂質シルト
2	10Y R 6/4	にぶい深褐色	砂質シルト

第185図 小溝遺構群F平面図・断面図

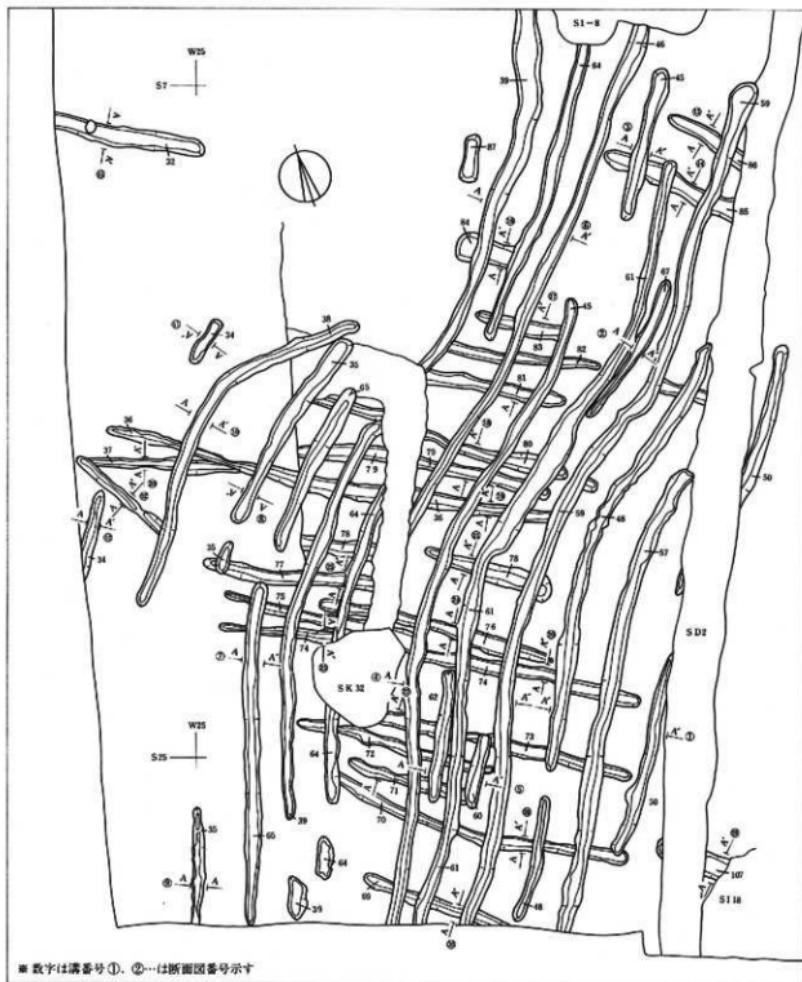
順序	検出長 (m)	上端幅 (m)	深さ (m)	方 向	成 物	順序	検出長 (m)	上端幅 (m)	深さ (m)	方 向	成 物
153	4.5	40	16	N-38°-W	土層部分	156	2.3	23	14	N-18°-E	
128	4.0	30	8	N-4°-W	土層部分	149	4.0	29	11	N-20°-E	上層部
152	3.7	30	12	N-5°-E	土層部分	148	1.7	36	8	N-5°-E	
151	5.0	35	15	N-24°-W	土層部分	154	6.5	62	9	N-80°-W	上層部
150	1.5	20	5	N-17°-E	土層部分	155	6.5	25	5	N-75°-W	土層部分

第38表 小溝遺構群F群観察表

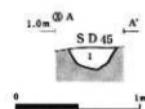
(8) H群

遺構状況 (第186図)

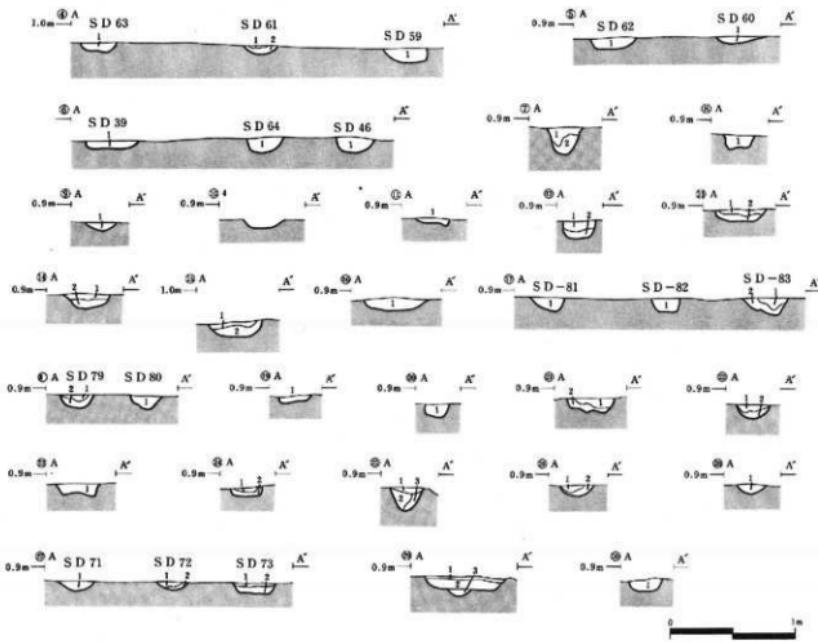
3区南西部で検出された。今回検出された小溝遺構群のうち最も明瞭な一群である。本群は大別すると南北方向の溝跡19条と東西方向の溝跡25条から構成される。溝群としての良好なまとまりを呈しているが、SD 32・111・117・118・119のようにやや離れた位置で断片的に確認されたものもある。遺構の広がりは東西26m程度、南北は



* 数字は溝番号①、②…は断面図番号示す



第186図 小溝遺構群H群平面・断面図



① SD45	順序	色	調	種類
1	2.5Y3/2	黒褐色	砂	

② SD47	順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーブ褐色	砂	

③ SD61	順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーブ褐色	砂	
2	2.5Y4/4	オーブ褐色	砂	

④ SD60	順序	色	調	種類
1	2.5Y4/3	オーブ褐色	砂	

⑤ SD48	順序	色	調	種類
1	2.5Y4/3	オーブ褐色	砂	

⑥ SD66	順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーブ褐色	砂	

⑦ SD68	順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーブ褐色	砂	
2	2.5Y4/4	オーブ褐色	砂	

① SD47	順序	色	調	種類
1	2.5Y4/3	オーブ褐色	砂	

② SD45	順序	色	調	種類
1	2.5Y4/3	オーブ褐色	砂	

③ SD59	順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーブ褐色	砂	

④ SD39	順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーブ褐色	砂	

⑤ SD65	順序	色	調	種類
1	2.5Y3/2	黒褐色	砂	
2	2.5Y4/3	オーブ褐色	砂	

⑥ SD34	順序	色	調	種類
1	2.5Y4/3	オーブ褐色	砂	

⑦ SD65	順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーブ褐色	砂	
2	2.5Y4/4	オーブ褐色	砂	

① SD56	順序	色	調	種類
1	2.5Y4/3	オーブ褐色	砂	

② SD63	順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーブ褐色	砂	

③ SD64	順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーブ褐色	砂	

④ SD35	順序	色	調	種類
1	2.5Y4/3	暗オーブ褐色	砂	

⑤ SD64	順序	色	調	種類
1	2.5Y4/3	暗オーブ褐色	砂	

⑥ SD35	順序	色	調	種類
1	2.5Y4/3	暗オーブ褐色	砂	

⑦ SD51	順序	色	調	種類
1	2.5Y4/3	暗オーブ褐色	砂	
2	2.5Y4/4	オーブ褐色	砂	

⑧ SD32	順序	色	調	種類
1	10YR3/3	暗褐色	砂	
2	10YR4/3	にじく・黄褐色	砂	

第187図 小溝遺構群H群断面図

S D 54			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーラー褐色	砂

S D 55			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーラー褐色	砂
2	2.5Y4/3	オーラー褐色	砂

S D 56			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーラー褐色	砂

S D 68			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーラー褐色	砂
2	2.5Y4/4	オーラー褐色	砂

S D 74			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	黒褐色	砂
2	2.5Y4/4	オーラー褐色	砂
3	2.5Y3/3	黒褐色	砂

S D 71			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーラー褐色	砂

S D 187			
順序	色	調	種類
1	2.5Y4/3	オーラー褐色	砂
2	2.5Y4/6	オーラー褐色	砂

S D 51			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/2	黒褐色	砂

S D 75			
順序	色	調	種類
1	2.5Y4/3	オーラー褐色	砂
2	2.5Y4/4	オーラー褐色	砂

S D 27			
順序	色	調	種類
1	2.5Y4/3	オーラー褐色	砂

S D 77			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーラー褐色	砂
2	2.5Y4/4	オーラー褐色	砂

S D 75			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/2	暗オーラー褐色	砂

S D 72			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーラー褐色	砂
2	2.5Y4/4	オーラー褐色	砂

S D 68			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーラー褐色	砂

S D 42			
順序	色	調	種類
1	2.5Y4/3	オーラー褐色	砂

S D 89			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーラー褐色	砂

S D 78			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーラー褐色	砂
2	2.5Y4/4	オーラー褐色	砂

S D 75			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/3	暗オーラー褐色	砂

S D 73			
順序	色	調	種類
1	2.5Y3/2	暗オーラー褐色	砂
2	2.5Y4/4	オーラー褐色	砂

第39表 小溝遺構群H群堆積土註記表

箇番	被出長 [m]	上端幅 [m]	深さ [m]	方 向	道 物	箇番	被出長 [m]	上端幅 [m]	深さ [m]	方 向	道 物
34	8	30	6	N-48°-E	土師器片	62	7	30	12	N-62°-W	土師器片
38	10	30-40	6	N-86°-E	土師器片	81	4	40	11	N-61°-W	土師器片
35	16	29-45	12	N-32°-E	土師器片・施漆器片	80	8	30-50	12	N-54°-W	土師器片
65	15	30-40	24	N-28°-R	利口・鉢	79	7	40	10	N-63°-W	土師器片
87	1	40		N-28°-E	鉢	36	12	30-45	4	N-61°-W	土師器片
39	26	30-75	6	N-35°-B	利口・鉢	68	3	30	12	N-30°-W	鉢
64	23	25-45	12	N-35°-E	鉢	78	7	40-60	12	N-60°-W	上端器片
45	15	40	12	N-37°-B	土師器片・施漆器片	77	5	50	10	N-65°-W	鉢
45	24	25-35	18	N-36°-E	土師器片	76	6.5	30-50	5	N-59°-W	土師器片
62	4	35	10	N-25°-B	土師器片	75	3	30	5	N-57°-W	利口・鉢
61	22	30-60	8	N-35°-B	土師器片	74	11.5	20-40	20	N-63°-W	上端器片
60	2	40	6	N-31°-E	鉢	73	7	30	8	N-58°-W	鉢
67	4	35	10	N-47°-E	鉢	72	5	20-30	6	N-58°-W	土師器片
59	24	30-45	12	N-36°-E	耳環	71	3	30	8	N-55°-W	土師器片
48	26	25-50	18	N-36°-E	土師器片	70	8	30	5	N-56°-W	土師器片
57	13	50	14	N-34°-E	土師器片	107	2	60	20	N-50°-W	土師器片
56	15	40	6	N-35°-B	土師器片	69	4	30	5	N-52°-W	土師器片
86	40	10	10	N-39°-W		117	3.3	30-60	15	N-39°-E	土師器片
85	45	45	12	N-45°-W		116	2.7	45	14	N-47°-W	土師器片
84	25	55	10	N-57°-W	土師器片	118	2.7	40	13	N-54°-W	土師器片
83	40	40	14	N-58°-W	土師器片						

第40表 小溝遺構群H群鍛造表

25m以上であるが南側では4区への延長はみとめられない。各小溝遺構間の重複は一定で、南北方向のもののが東西方向の溝跡を切っている。他構造との主な重複関係をみるとSD56・90円形周溝とSI13窓穴住居跡を切り、SD2・6溝跡、SI8・18窓穴住居跡に切られている。

南北方向の溝跡は19条を数える。分布域の西端部分ではやや乱れているが全体的な方向はほぼそろっており、各溝跡の弯曲の様子にも規則性がみられる。溝跡の中心間距離はSD56・60・67が入る部分では近接して狭くなるが、それ以外では0.7~1.3m程度である。上端幅と深さとも類似しており前者は80cm程、後者は20cm前後を示すものが多い。断面形はゆるやかなU字状のものと船底状のものがあり、ややばらつきがみられる。底面に鋸痕跡等はみとめられず平坦である。堆積土はいずれもほぼ共通で褐色系の砂を主体とし、層中に基本層2層と考えられる黄褐色砂の小ブロックを含むものが多い。



番号	登録番号	種類	出土位置	生長量 [cm]			外面調査		内面調査		残存	分類	備考	写真版
				口徑	底径	高さ	外面調査	内面調査	外面調査	内面調査				
1	C-358	土器	上端部 台形窓	-	-	-	横ナギ、口縁剥片	ハケB、部分的にミガキ	無	無	A-1c		17-11	
2	C-381	土器	出土位置 SD106	口径 (18.4)	底径 (16.0)	高さ (0.22)	横ナギ、切り	ミガキ	無	無	(1/5)	D-2		
3	C-410	土器	出土位置 上端部 窓	-	-	-	ハケC	ナゲ	無	無	(1/2)	D-3		
4	N-9	金属製品	河床											45-3

第188図 小溝遺跡群出土遺物

8. 河川跡

自然流路跡（河川跡）とみられる遺構を、2区で2条（SR 2・3）、3区で1条（SR 4）、4区で1条（SR 1）確認した。

このうち、3区北端部分で検出したSR 4河川跡については、2区で確認されたSR 2河川跡、あるいはSR 3河川跡と同一のものである可能性も強いが、重複関係を明確に確認することができなかったため、別遺構として取り扱っている。

(1) SR 1河川跡

遺構状況（第190・192図）

確認状況・重複 4区で確認された東西方向の河川跡であるが、調査区面積の2/3以上を占めている。この遺構の調査では、時間的な制約から、調査区西辺に7×28mのトレンチを設け、この部分でのみ掘り下げを行った。なお、この遺構の堆積土中で、水田跡と杭列が検出された。

主な重複関係をみると、SB 2・3掘立柱建物跡を切り、北辺で中世屋敷跡の区画溝とみられるSD 2溝跡、南辺ではSD 8溝跡に切られている。

規模・方向 調査区を東西に横断しており、方向はN-60°-Wである。南岸はほぼ直線状に延びているが、北岸ではふくらみがみられ、平面形は全体的にやや不整である。

上端幅は34m（調査区西辺）～43m以上、深さは西端部分で1.2mとなっている。

堆積土 全体で50層に区分された。各層の状況は第191図のとおりであるが、1～10層は植物遺体を含む黒色の粘土層、11層以下では砂層がそれぞれ主体となっている。

下面に著しい起伏がみとめられる2層は水田耕作土で、この上面において水田遺構が確認された。7層では灰白色火山灰の集積がみとめられる。

水田跡（第190図） 1層中において、2列並行する斑鉄の帯を検出した。1層は目視による層の状況が、市内水田遺構にみられる水田土壌の様相を呈していることやプランツ・オパール分析の結果からも、水田土壌の可能性がきわめて高く、また市内富沢遺跡の水田跡において同様の検出事例が確認されていることなどから、この斑鉄の帯を水田に伴う畦畔の痕跡と判断した。

5条確認された畦畔は、前述のように高まりではなく、2列並行する斑鉄の帯として検出したものである。上幅は、基幹的な畦畔とみられる畦畔1が0.9～2m、そのほかは50cm前後となっており、畦畔1の方向はN-35°～

Eである。

これらの畦畔で区画される水田区画は6区画以上ある。このうち区画2は完全な検出で、南北方向9m、東西方向は約8.5mで比較的整った方形を呈している。その他の区画はいずれも部分的な検出で詳細は不明であるが、同様に方形を基調としているものとみられる。

耕作土1層は層厚15cm前後の黒色粘土で、全体的にうすく砂が混入しており、下面には著しい起伏がみとめられる。

杭列(第192図) 河川堆積土8層中で検出された。

総計で62本の木杭からなる南北方向の杭列で、河川跡の方向にはほぼ直交しており、方向はN-40°-Eとなっている。杭列は大きく東側と西側の2条に区分される。

当遺構の機能については、判断することができなかった。

出土遺物(第193~197図)

河川堆積土より、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、磁器、土製品、古錢、金属製品、木製品などが出土した。図示をなし得たものは次の45点であるが、以下特徴のあるものに限り記述する。

1・2・3は縄文土器で、河川跡のほぼ底面付近で出土した。細片であるために器種等の詳細を知り得ないが、いずれも沈線とLRの充填縄文がみとめられる。4・5は弥生土器とみられる。5は台付注口土器と考えられる。外面は全体的にミガキ調整が施されているが、沈線の間は省略されている。6・7はそれぞれ、器台・高杯である。8・9は土師器の杯で、ともに内面黒色処理が施されている。

14是中国磁器の青磁碗である。外面に画花文がみとめられる。15~17の土製品は土錘である。

22~45は木製品で、8層検出杭列を構成する杭である。樹種同定の結果、大半がヤナギ属である点に特徴がみられる。

(2) SR2河川跡

遺構状況(第198図)

確認状況・重複 2区南部東辺に沿って確認された。部分的な検出であり、全体的な詳しい様相は知り得ない。

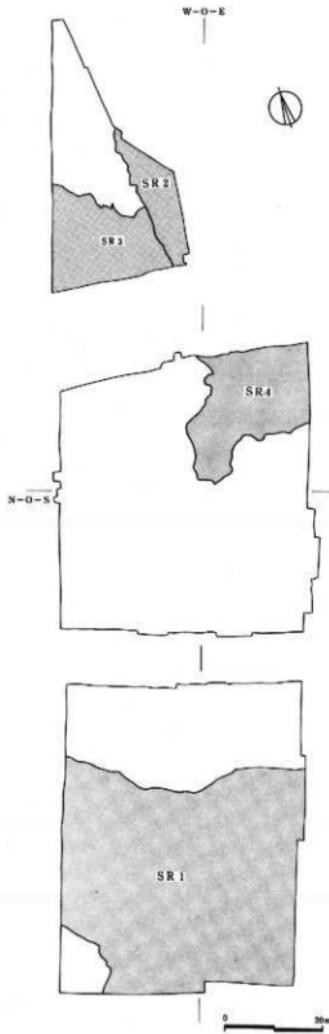
なお、少なくとも埋没の段階ではSR3河川跡を切っている。

規模・方向 検出したのは西岸部分の一部にすぎない。遺構は大きく調査区外へ延びており、全体的な規模・形状や方向は不明である。

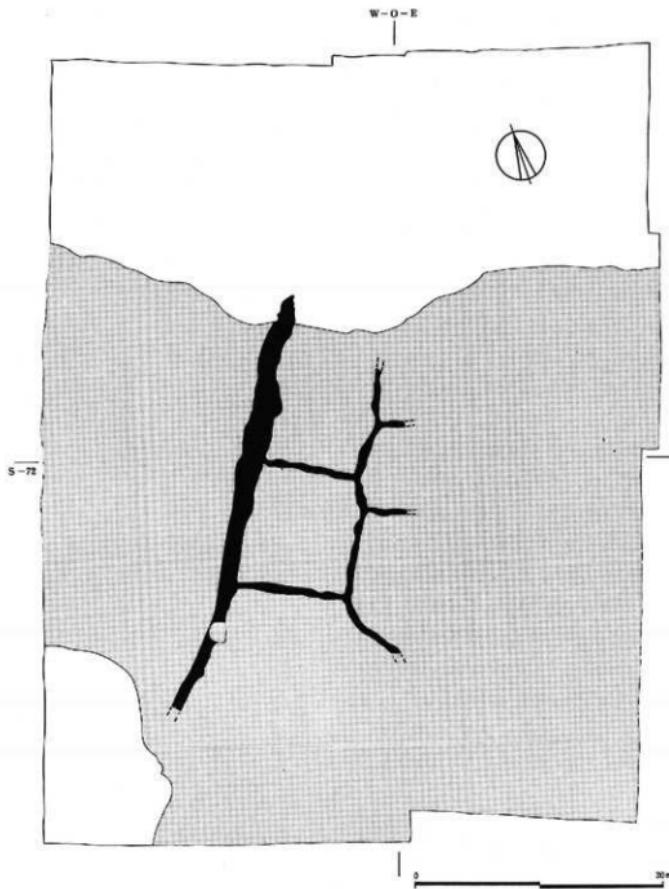
検出長は南北方向に30m、最大幅は9mで、確認することのできた、西岸を基準とする方向はN-10°-Wである。壁の立ちあがりはごく緩やかで、深さは1.5mを計る。

なお底面レベルは、南端部が北端部より約4cm低くなってしまい、北-南北方向に流下したものとみられる。

堆積土 検出部の堆積土は20層に細分されたが、土質の状況から以下のように大別される。



第189図 河川跡配置図



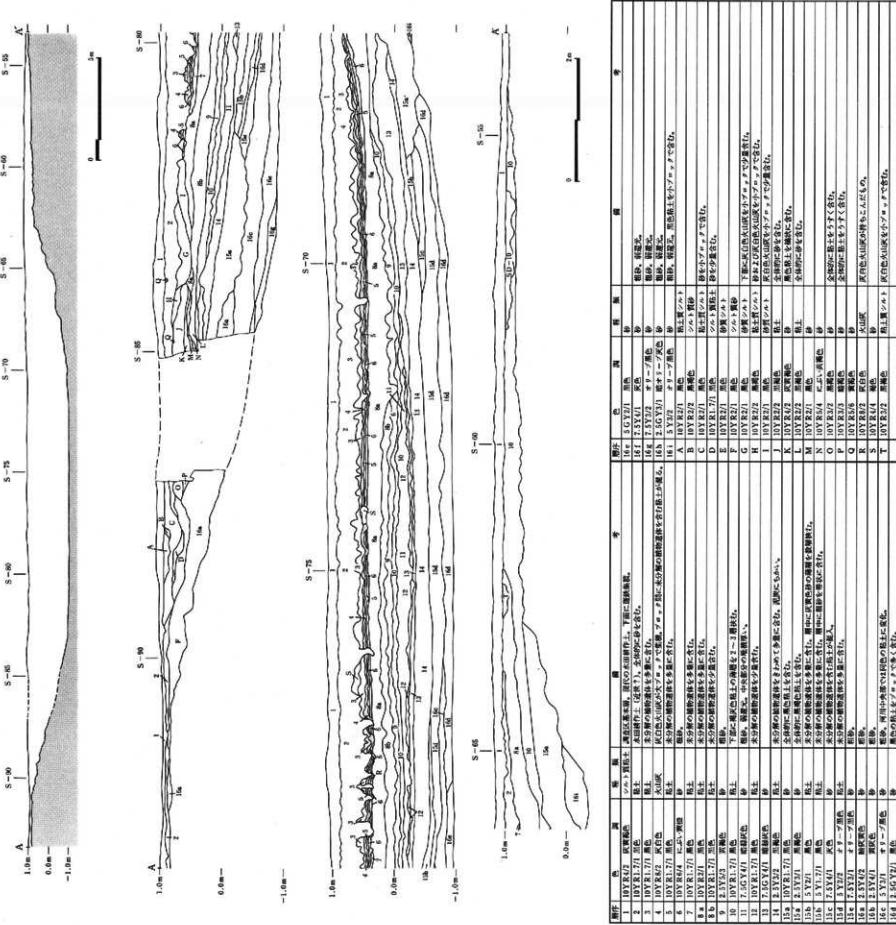
第190図 S R 1 河川跡と検出水田跡

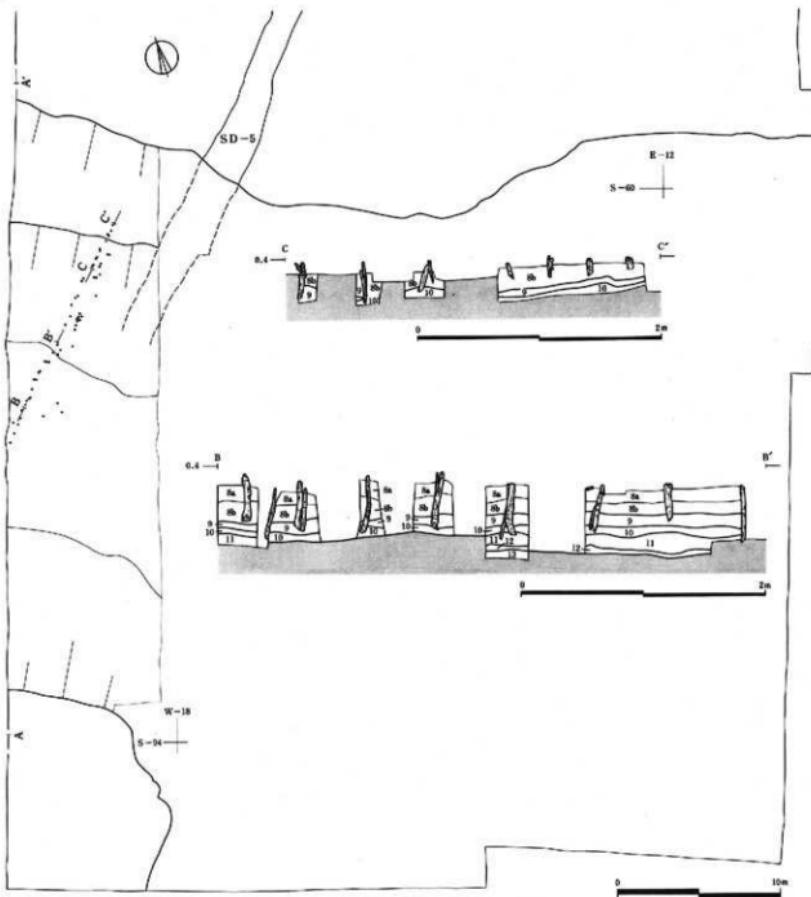
1～10層は、全体的にしまりのない黒色系の粘土が主体となっており、1・2・7層では未分解の植物遺体がみとめられる。11～13層はやや還元状態の粘土層であるが、11・12層には未分解の植物遺体が多量に含まれていて、泥炭層に近い様相を呈している。このうち12層では、枝部を中心とする流木が多量にみとめられた。14層は灰白色火山灰の集積層であるが、粘土ブロックが多く混在しており、2次的な集積と考えられる。15層以下は砂、粘土の互層となるが、溝状に窪む18層の粘土では、未分解の植物遺体がみとめられる。最下部の19・20層は砂層である。

出土遺物（第200～205図）

堆積土中より土師器、須恵器、手捏ね土器、陶器、瓦、土製品、石製品、木製品など、比較的多くの遺物が出土したが、図示をなし得たものは65点である。

1～46は最も多量に出土した土師器である。1は高杯の杯部とみられるが、内外面ともに朱がみとめられる。2





第192図 S R I 河川跡と検出された杭列

は甕の口縁部小片と考えられる。口唇部に連続した押圧が加えられている。3は台付甕の台部とみられる。4は甕の口縁部であるが、折り返しによる複合口縁となっている。

5、6～36は土師器の坏・碗である。いずれも非ロクロ成形である。6以下の坏は、段の有無・位置、底部形状などの器形や、外面の調整技法にバラエティーがみとめられる。内面の様相をみると、ヘラミガキ後に黒色処理が施されている資料が大半を占めているが、34～36ではナデ調整で、器形のうえからも特徴のある資料となっている。なお、7の坏は内外面に多量の漆が付着している。18～26は碗で、大型のものと小型のもの（21～23）がある。外面調整は削り調整主体の資料と（18～22）、ていねいなミガキ調整が加えられるものとがあるが（23・24・26）、25ではハケ目調整となっている。内面はいずれもヘラミガキ後に黒色処理が施されているが、22・23は外面にも黒色処理がみとめられる。

37~44は土器器の甕である。完全な資料はないが、大きく球胴形（37~40・44）と長胴形（42・43）がある。調整技法の特徴を体部外面についてみると、ハケ目調整のものが主体となっているが、39・44ではヘラミガキが最終的な調整として加えられている。

47は手捏ねの成形であるが、内外面に黒色処理が施されている。

48・49は須恵器である。49の杯底部は回転ヘラ削りとなっていて、切り離し技法は分からぬ。

50は陶器である。底部の小破片で、壺壺類とみられる。無釉で茶褐色を呈している。

51は丸瓦である。凸面に繩印き、凹面には布目痕が観察される。

52~65は土製品である。52・53は土鍤であるが、52は小型で鉗錐形、53はやや大型で円錐形を呈している。54~56は土玉、57~65は轆羽口の破片である。

66~68は石製品で、それぞれ石製模造品（劍）、紡錘車、砥石である。

69・70は木製品である。69は蓮瓣型の下駄で、正面先端には指痕とみられる磨減が観察されるほか、「水」の刻字がみとめられる。70は堅忤である。芯去りの分割割が用いられており、撫部と握部の境に焼痕がみとめられる。

なお、図示をなし得なかった遺物も土器類を中心に出土しているが、このうち土器器の出土状況についてみると、16層以下では非ロクロ成形の資料に限られ、これより上層ではロクロ成形のものが混在するようになる。

(3) S R 3 河川跡

遺構状況（第206図）

確認状況・重複 2区南半部で確認された、東西方向の河川跡である。部分的な検出であり、全体的な詳しい様相は知り得ない。

主な重複関係をみると、S R 2に切られ、小溝遺構F群を切っている。

なお、この堆積土中において、水田遺構を検出している。

規模・方向 調査区の南半部を東西に横断する状態で確認されたが、遺構はさらに大きく調査区外へ延びており、全体的な規模・形状や方向は不明である。検出全長は東西方向に25.4mを計り、最大幅は20mで、北岸を基準とする方向はN-80°-Wとなっている。自然地形の傾斜に沿って、西方向から東方向に流下したものと考えられる。

河川跡中心から北岸への壁の立ち上がりは非常に緩やかで、深さは1.1mである。

堆積土 検出部の堆積層は12層に細分されたが、土質の状況等から以下のように大別される。

1、2層は黒色系のシルト質粘土で、水田耕作土である。3a、3b層は火山灰をブロック状に含み、また火山灰層である。3b層は10世紀前半の火山灰堆積層とみられる。

3a~7a層までは黒及び黒褐色（3a層は火山灰層で灰白色）の粘土と砂の互層になっているが、7a層から9層までは砂層となっている。

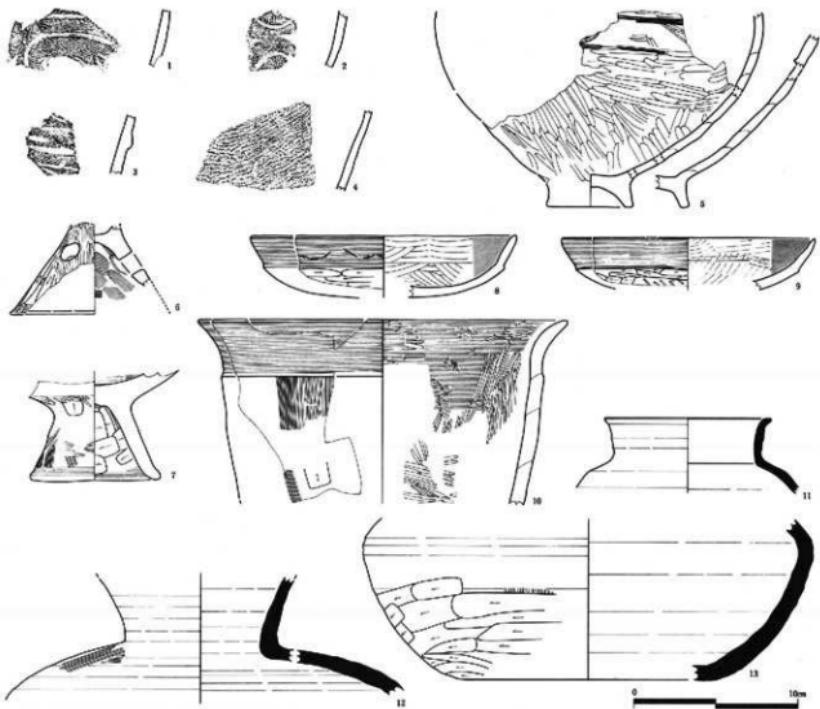
4a層は黒褐色粘土であるが、未分解の植物遺体を多量に含み、また全体的に砂粒を含んでいる。

水田跡（第208図） 1層中において、L字に屈折する斑鐵の帶を確認した。1層はS R 1同様、目視によるこの層の状況が、市内の水田遺構に見られる水田土壤の様相を呈していることや、プラント・オバール分析の結果からも水田土壤の可能性が極めて高く、また富沢遺跡の水田跡においても同様な検出事例が確認されていることなどから、この斑鐵の帶を水田に伴う畦畔の痕跡と判断した。

L字状に確認された畦畔は、前述のように高まりとして検出されたものではなく、斑鐵の帶として検出したものである。南北方向が大畦で幅約1.8m、東西方向が小畦で幅約0.4mである。大畦方向はほぼN-10°-Eである。

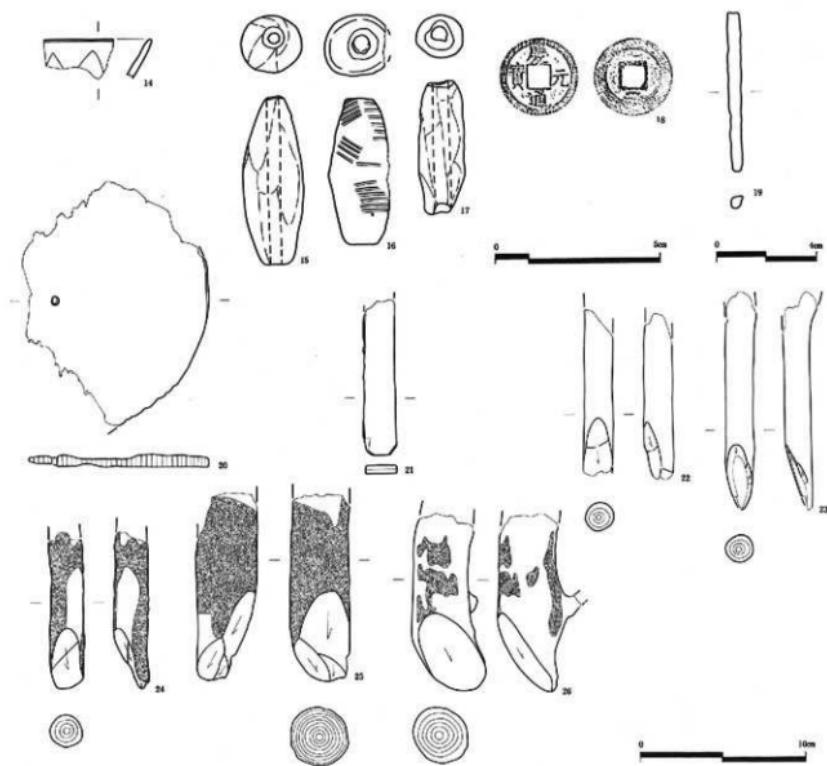
S R 1の水田畦畔とS R 3で検出された畦畔を比較した場合、その方向が若干異なるものの類似しているといえること、検出層位・土壤等にも共通性が認められることなどから、ほぼ同時期に経営されていたものと考えられる。

検出された畦畔の状況から、S R 2で検出されなかったのは、現水田耕作による削平とみられる。

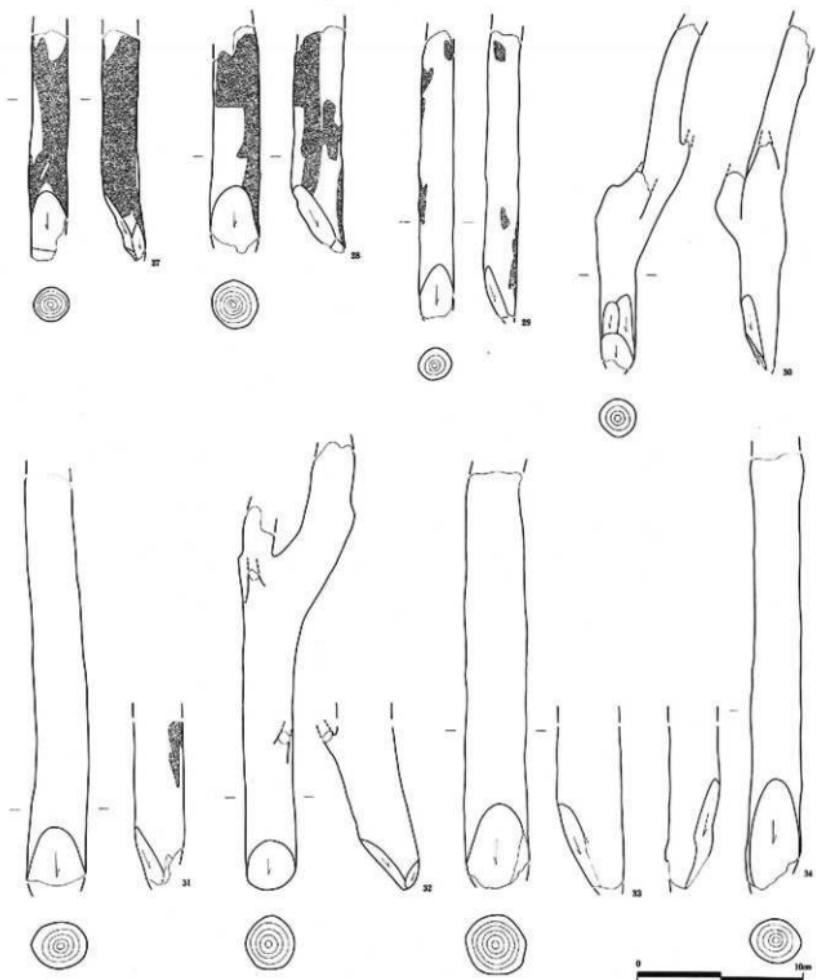


番号	登録番号	種類	出土位置	法化回	外面調査		内面調査		残存	備考	写真図版	
					基盤	高さ	外面調査	内面調査				
1	A-2	陶文土器		-	-	-	沈縞文、光模縞文LR	iガキ	破片		38-3	
2	A-4	陶文土器		-	-	-	沈縞文、光模縞文LR	iガキ	破片		38-4	
3	A-1	陶文土器		-	-	-	降縞文、LR陶文	iガキ	破片		38-5	
4	B-1	陶文土器		-	-	-	LR陶文	iガキ	破片		38-7	
5	B-5	陶文土器 柱(白子)		20.0	5.3	-	沈縞文、iガキ	ナダ	(1/4) 高台付、沈縞間:ガキ黒帯		38-1	
番号	登録番号	種類	出土位置	法化回	出	量(㌘)	外面調査	内面調査	残存	分類	備考	写真図版
6	C-76	陶質			基盤	(10.3)	-	糊り、iガキ	-	ハケ目、ナダ	(2/3)	A-2 三乳スカシ 17-13
7	C-77	陶質			基盤	7.8	-	ハケ目、糊ナデ	iガキ	横ナデ、糊り	D-2 定形	D-2
登録番号	種類	出土位置	法化回	出	量(㌘)	外面調査	内面調査	残存	分類	備考	写真図版	
8	C-72	陶質			口 直 基 四 頂 /1 球 面	(16.3) (3.9) (0.24)	糊ナデ、糊り、糊袋み底	iガキ	黒色處理	(1/6)	D-2	
9	C-74	陶質			口 直 基 四 頂 /1 球 面	(15.5) (3.7) (0.24) (1.7)	糊ナデ、糊り、部分的にiガキ	iガキ	黒色處理	(1/6)	D-5	
登録番号	種類	出土位置	法化回	出	量(㌘)	外面調査	内面調査	残存	分類	備考	写真図版	
10	C-75	陶質			口 直 基 四 頂 /1 球 面	(22.4)	-	糊ナデ、ハケ目、糊り	糊ナデ、iガキ	(1/6)	D-1-a 面部に凹	
11	E-12	陶質			口 直 基 四 頂 /1 球 面	(16.2)	-	ロクロナデ	ロクロナデ	(1/4)	2	
12	E-25	陶質			口 直 基 四 頂 /1 球 面	-	-	ロクロナデ、平行印	ロクロナデ	(1/2)	1	38-14
13	E-28	陶質	平 地		口 直 基 四 頂 /1 球 面	-	15.0	ロクロナデ、平行印、糊り	ロクロナデ	(1/3)	最大径27.4cm	

第193図 S-R 1 河川跡出土遺物(1)

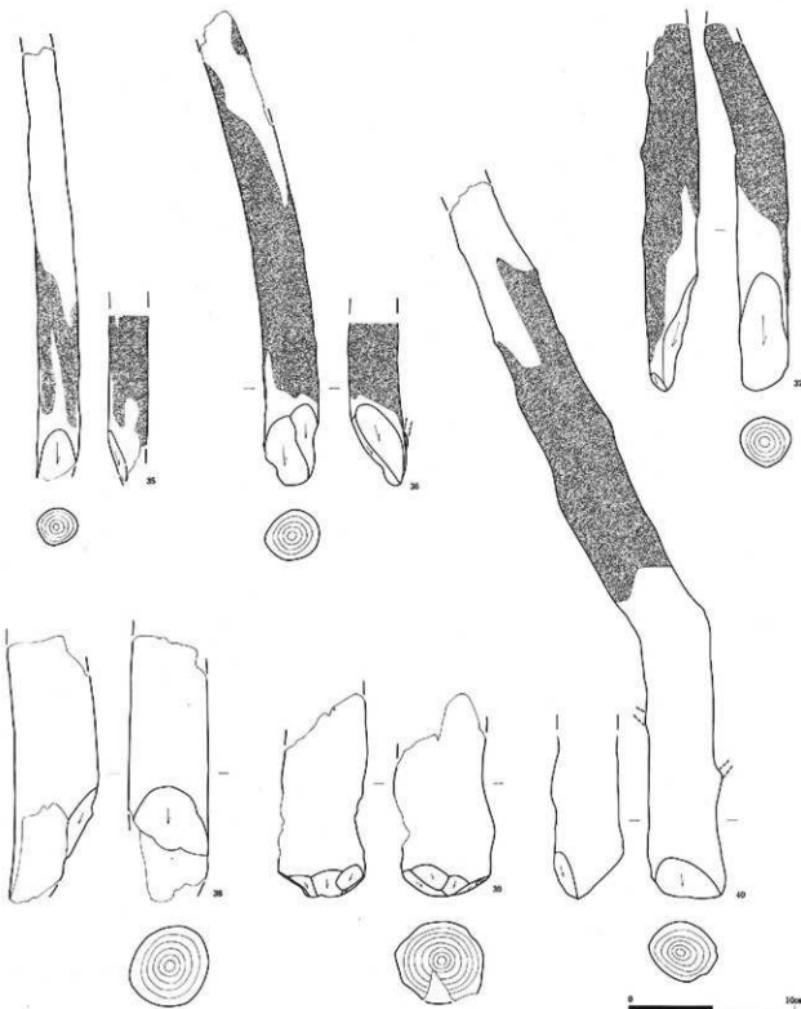


第194図 S R 1河川跡出土遺物(2)



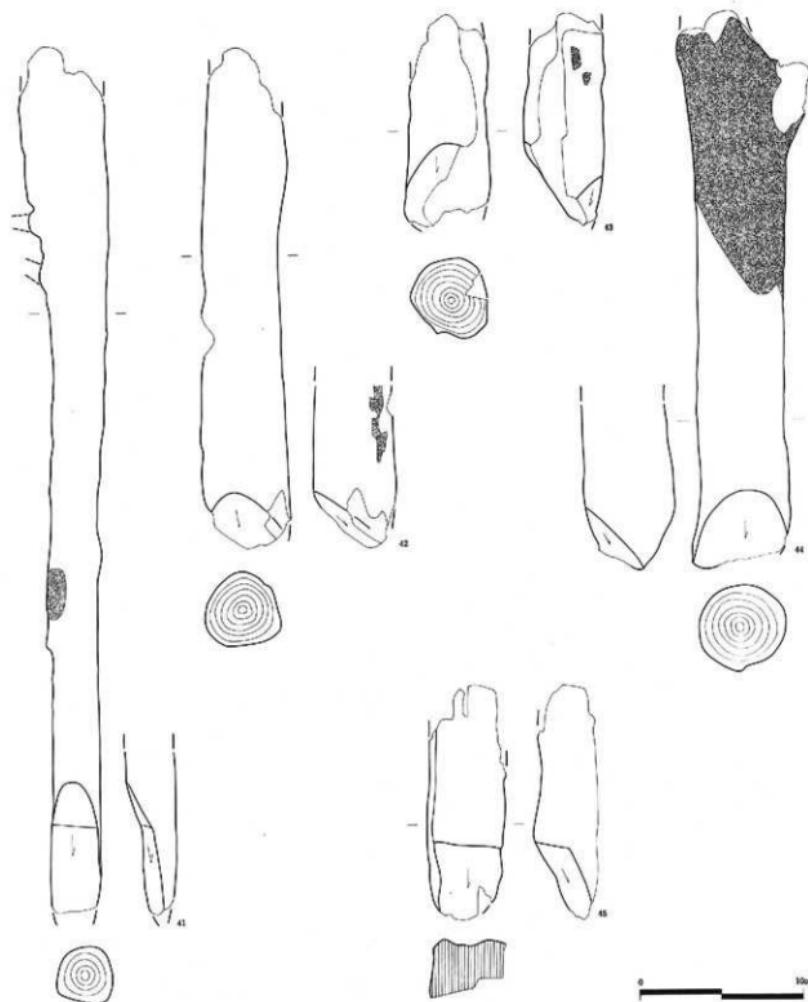
番号	發 見 地 点 番 号	種 別	器 種	出土位置	測 定	測 定	生 長 高 さ	最大径	加工の長さ	加工最大幅	加工面数	分類	備 考	写真図版
27	L-197	木製品	枝		ヤナギ属の一種	丸太材	(14.1)	2.2	(4.3)	2.0	2	I B a	削皮操作	48-13
28	L-156	木製品	枝		ヤナギ属の一種	丸太材	(13.9)	3.0	(4.1)	2.9	1	I B a	削皮操作	49-12
29	L-184	木製品	枝		ヤナギ属の一種	丸太材	(17.6)	2.1	(3.3)	(2.0)	1	I B a	削皮操作	48-12
30	L-169	木製品	枝		ムリカロ	丸太材	(21.1)	2.6	(4.5)	1.9	3	I B a	削私、底2ヶ所あり。	49-8
31	L-200	木製品	枝		ヤナギ属の一種	丸太材	(25.3)	3.5	(3.6)	3.3	1	I B a	削皮操作	50-6
32	L-159	木製品	枝		ヤナギ属の一種	丸太材	(27.5)	3.5	3.0	2.9	2	I B b	削私、底2ヶ所あり。	49-7
33	L-202	木製品	枝		ヤナギ属の一種	丸太材	(25.6)	3.9	(5.2)	(3.1)	1	I B a		50-3
34	L-190	木製品	枝		ヤナギ属の一種	丸太材	(26.8)	3.4	(6.8)	3.0	1	I B a		50-5

第195図 S R 1 河川跡出土遺物(3)



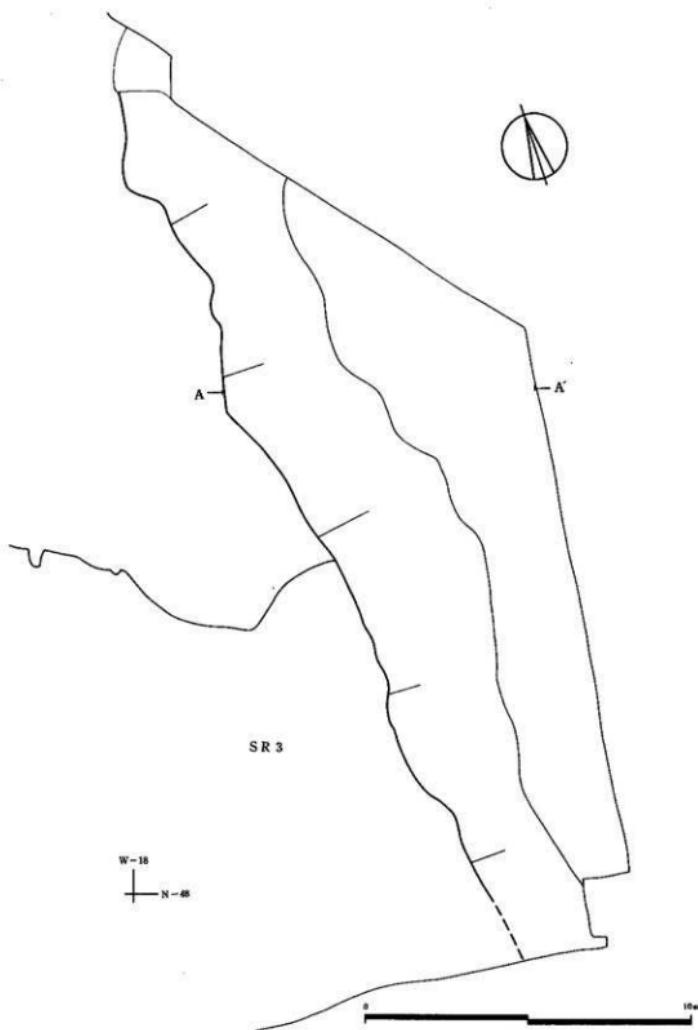
番号	登録番号	種別	断面	出土位置	測定	実測	分類	備考	写真図版		
					長さ mm	最大径 mm	加工長さ mm	加工最大径 mm	加工面数		
35	L-162	木製品	枝	ナガケツの一端	丸太材 (36.5)	2.6 (3.1)	2.1	2.1	1	I B a 側面残存	50-7
36	L-188	木製品	枝	ナガケツの一端	丸太材 (29.1)	3.3	5.0	2.3	2	I B a 側面残存、節私い板1ヶ所あり。	50-8
37	L-157	木製品	枝	ナガケツの一端	丸太材 (22.5)	3.1	7.2	2.9	2	I B b 側面残存	50-3
38	L-181	木製品	枝	ナガケツの一端	丸太材 (16.4)	4.9 (4.3)	6.2	1	I C a	49-13	
39	L-191	木製品	枝	武差池(櫛孔付)	丸太材 (12.4)	5.5	2.0	1.9	10	I C b	49-11
40	L-187	木製品	枝	ナガケツの一端	丸太材 (44.8)	4.5	2.5	3.5	1	側面残存、節私い板2ヶ所あり。	49-4

第196図 S R 1 河川跡出土遺物(4)



番号	登録番号	種類	部類	出土位置	直 縄	材質	法 量	木 壁	部	分類	備 考	平成図版	
41	L-189	木製品	杖		マダガ属の一種	丸太材	長さ 55.2	最大径 5.1	加工の長さ (8.1)	3.0	1	ICa 削成操作、鋸長い板2ヶ所あり。	58-9
42	L-204	木製品	杖		マダガ属の一種	丸太材	30.7	8.3	(3.5)	(3.5)	1	ICa 削成操作	58-4
43	L-174	木製品	杖		マダガ属の一種	丸太材	(13.6)	5.2	(5.1)	(2.1)	2	ICb 削成操作	49-10
44	L-188	木製品	杖		マダガ属の一種	丸太材	(34.2)	5.7	4.7	(5.3)	1	ICb 削成操作	58-1
45	L-193	木製品	杖		マダガ属の一種	角材	(14.5)	-	(4.8)	4.0	1	IC 幅(4.7cm)、厚さ(3.4cm)、木取 5-1部目	49-9

第197図 S R 1 河川跡出土遺物(5)



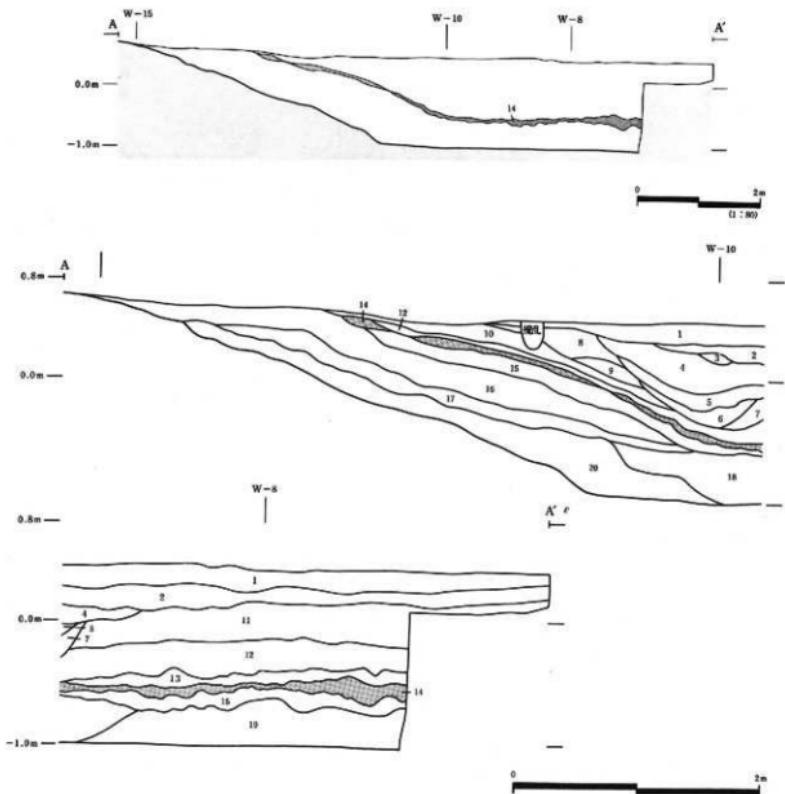
第198図 SR 2 河川跡平面図

出土遺物（第209～211図）

堆積土中より、土師器、須恵器、土製品、瓦などが出土したが、図示をなし得たのは36点である。

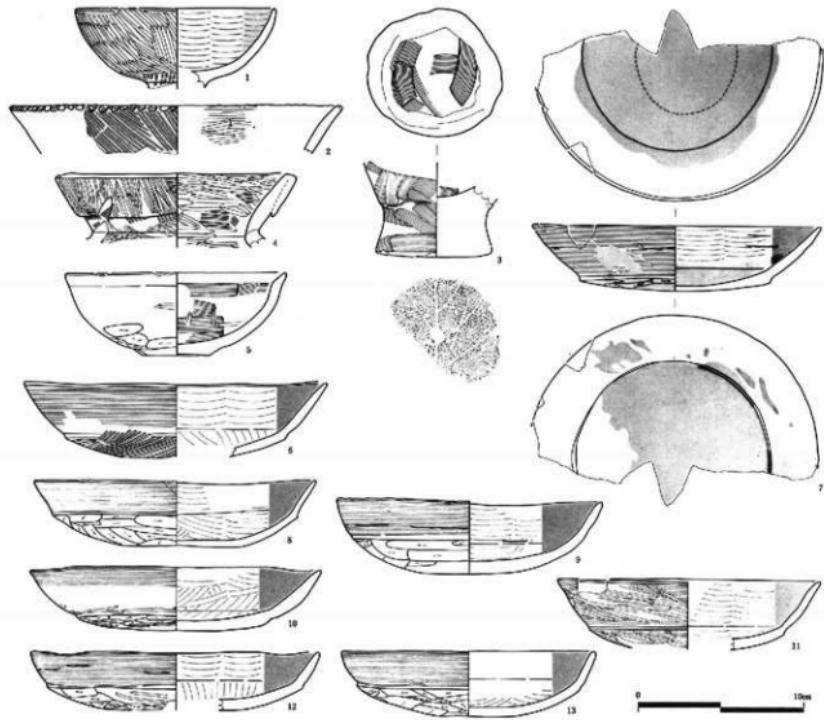
1～28は最も多く出土した土師器である。そのうち1～20までが塙釜式に該当し、21～28のものが栗廻式から国分寺下層式と考えられる。ただし20の高杯片は南小泉式の可能性もある。

1, 2について第209図の注記表では杯と記したが、形状は壺形に近い。また2は内外面朱塗りされているもの



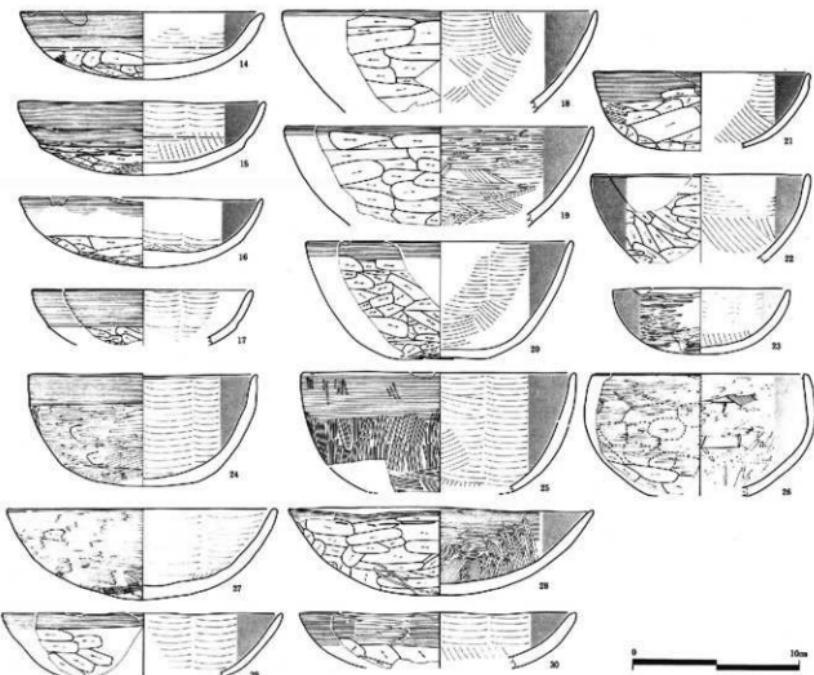
順序	色調	種類	備考	順序	色調	種類	備考
1	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	未分解の植物遺体を多量に含む。全体的に砂を含む。軟化。	11	5 Y2/2 オリーブ黒色	粘土	未分解の植物遺体を含む。
2	5 Y2/2 オリーブ黒色	粘土	未分解の植物遺体を含む。全体的に砂を含む。軟化。	12	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	未分解の植物遺体を含むで多量に含む。洗木(枝)が多く混入。
3	5 Y4/2 暗オリーブ色	砂	無機化粘土を細粒的に含む。	13	5 Y5/3 灰モリーブ色	粘土	灰白色火山灰。灰モリーブ色の粘土ブロックと混在。
4	2.5Y2/2 黒色	粘土	未分解の植物遺体をきわめて多量に含む。泥炭にもかく。軟化。	14	2.5Y8/2 灰白色	火山灰	
5	5 Y2/1 黒色	粘土	未分解の植物遺体をきわめて多量に含む。泥炭にもかく。	15	5 Y2/2 オリーブ黒色	砂	全体的に粘土をうすく含む。
6	5 Y2/2 オリーブ黒色	砂		16	2.5Y2/1 黑色	粘土	全体的に砂を含む。
7	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	未分解の植物遺体を含む。	17	2.5Y2/1 黑色	砂	全体的に砂を含む。
8	2.5Y3/1 黒褐色	粘土	全体に砂を多く含む。	18	2.5Y2/1 黑色	粘土	未分解の植物遺体を含む。全体的に砂を含む。
9	2.5Y2/1 黒色	粘土	泥炭にもかく。砂を帯びて含む。	19	5 Y3/1 オリーブ黒色	砂	粘土をブロックで含む。
10	5 Y2/1 黒色	粘土	未分解の植物遺体をきわめて多量に含む。泥炭にもかく。	20	5 Y3/1 オリーブ黒色	砂	全体的に粘土をうすく含む。

第199図 S R 2 河川路断面図



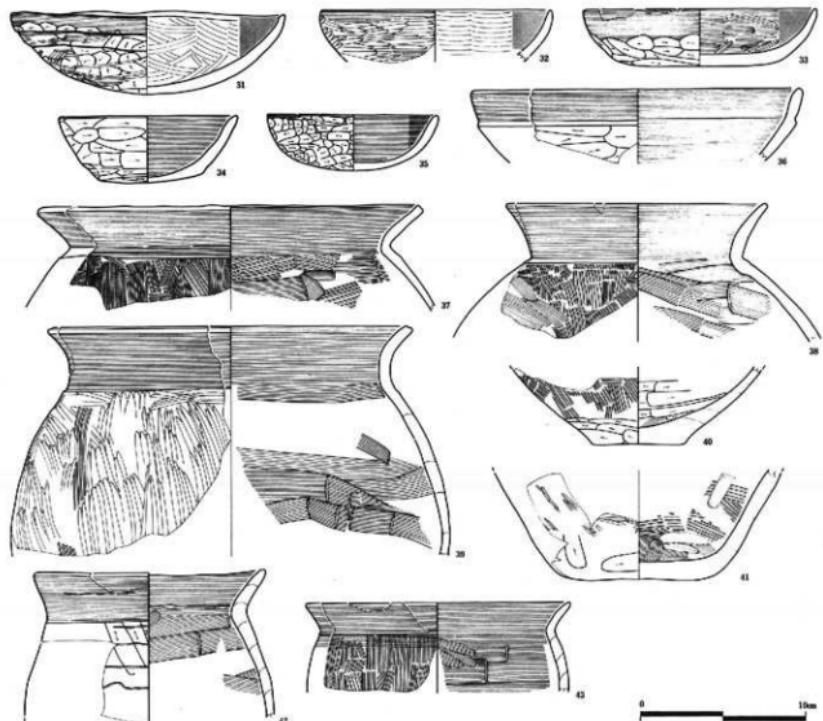
番号	發 音 番 号	種 別 形 態	出土位置	法 量 回 形 狀				外 面 調 整		内 面 調 整		残 存 分 類	備 考	写真図版
				口 徑	底 径	厚 度	高 度	横 幅	縦 幅	厚 度	容 量			
1	C-409	土陶器 高 环	(12.2)	-	-	1.0	ハケ目、ハケ目 朱書き	1.0	1.0	1.0	1.0	A-1		
2	C-147	土陶器 台付壺	(20.2)	-	-	1.0	ハケ目、口縁削込み 朱書き	1.0	1.0	1.0	1.0	A-1 a		
3	C-206	土陶器 台付壺	-	7.1	7.1	1.0	ナダ、輪郭小底 木底底	1.0	1.0	1.0	1.0			
4	C-13	土陶器 壺	(14.6)	-	-	1.0	ハケ目、ハケ目 朱書き	1.0	1.0	1.0	1.0	A-1	複合口縁	写真図版 17-17
5	C-40	土陶器 壺	(13.4) (4.0)	5.1	5.1	0.3	部分的C-1 朱書き	1.0	1.0	1.0	1.0	B-1		18-1
6	C-42	土陶器 壺	(11.8) (6.8) (6.8) (6.8)	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	1.0	D-4		写真図版 21-1 24-1
7	C-36	土陶器 壺	17.6	4.1	0.23	0.7	横ナダ、削り、輪郭小底 朱書き	1.0	1.0	1.0	1.0	D-4	内外面に墨多量 に付着	22-7 70-1
8	C-29	土陶器 壺	17.3	4.2	0.24	1.9	横ナダ、削り 朱書き	1.0	1.0	1.0	1.0	D-4		23-5 64-6
9	C-23	土陶器 壺	16.1	4.7	0.29	2.2	横ナダ、削り、輪郭小底 朱書き	1.0	1.0	1.0	1.0	D-4		21-9
10	C-26	土陶器 壺	17.7	4.9	0.22	0.8	横ナダ、削り、ハケ目 朱書き	1.0	1.0	1.0	1.0	D-4		22-4
11	C-31	土陶器 壺	16.8	(4.5)	(0.28)	1.4	横ナダ、削り、部分的C-1 朱書き	1.0	1.0	1.0	1.0	D-4		21-10 63-2
12	C-33	土陶器 壺	17.6	(3.7)	(0.21)	1.5	横ナダ、削り、部分的C-1 輪郭小底 朱書き	1.0	1.0	1.0	1.0	D-4		22-2
13	C-27	土陶器 壺	15.5	4.1	0.26	2.0	横ナダ、削り 朱書き	1.0	1.0	1.0	1.0	D-4		21-8 64-5

第200図 S2河川跡出土遺物(1)



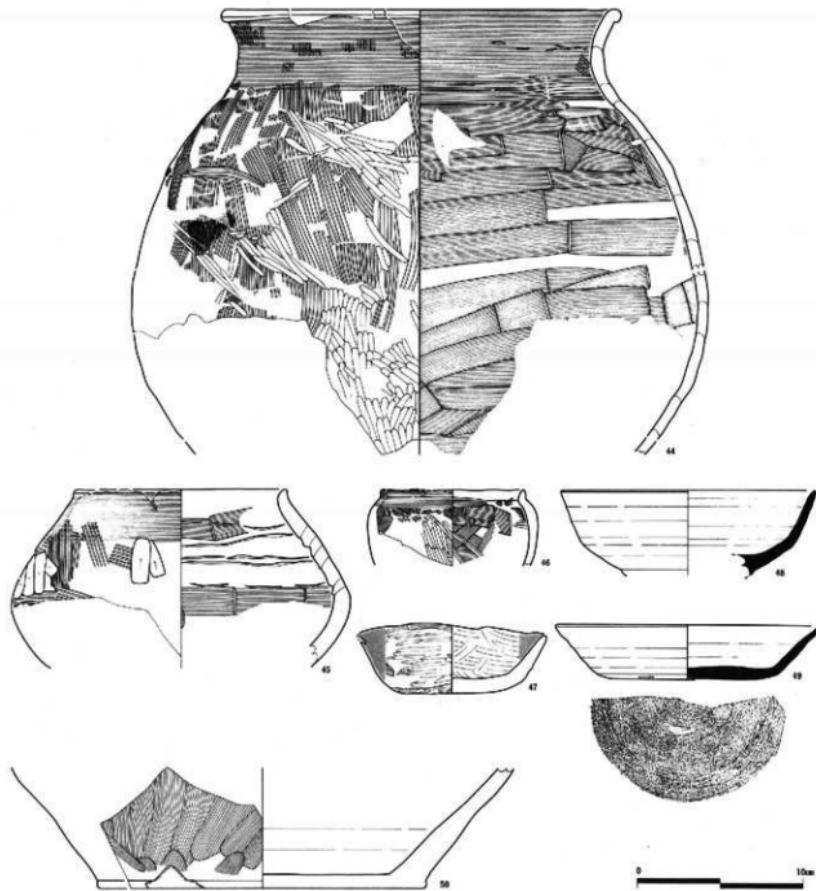
番号	立 着 部 標 本	標 本 形	出土位置	法 長 (cm)				外 面 調 整	内 面 調 整	施 行	分 類	備 考	写真図版
				口	住	経	高						
14	C-32	土縫部 环		14.8	4.1	0.28	1.7	黒ナデ、ハケ目、削り、輪郭み底 黒色處理	ミガキ 黒色處理	住 住 形	D-4		21-11 63-4
15	C-21	土縫部 环		15.0	4.5	0.35	1.7	黒ナデ、削り、部分的にミガキ、 輪郭み底	ミガキ 黒色處理	住 形	D-5		22-14 62-6 70-3
16	C-28	土縫部 环		14.8	4.3	0.29	1.9	黒ナデ、削り	ミガキ 黒色處理	4/5	D-5		22-15
17	C-412	土縫部 环	(13.4)	(4.2)	(5.31)	(2.0)	黒ナデ、削り	ミガキ	(1/8)	D-5			
番号	立 着 部 標 本	標 本 形	出土位置	法 長	住	経	高	外 面 調 整	内 面 調 整	施 行	分 類	備 考	写真図版
18	C-145	土縫部 环	(19.1)	-	-	-	-	黒ナデ、削り	ミガキ 黒色處理	(1/6)	D-7 b①		
19	C-138	土縫部 环	(18.8)	-	-	-	-	黒ナデ、削り	ミガキ 黒色處理	(1/8)	D-7 b②		
20	C-34	土縫部 环	(16.4)	(5.4)	7.2	(0.64)	黒ナデ、削り	黒ナデ、削り	ミガキ 黒色處理	1/8	b①	既/Q-(0.33)	
21	C-24	土縫部 环	13.2	-	4.8	0.37	黒ナデ、削り、部分的にミガキ	黒ナデ、削り	ミガキ 黒色處理	2/4	b②		22-22
22	C-35	土縫部 环	(13.4)	-	(5.8)	(0.43)	削り 黒色處理	ミガキ 黒色處理	(1/4)	D-7 b②		22-23	
23	C-26	土縫部 环	10.7	-	4.1	0.38	ミガキ、削り 黒色處理	ミガキ 黒色處理	ミガキ 黒色處理	住 形	D-7 b②		23-1
24	C-19	土縫部 环	13.9	-	6.9	0.5	黒ナデ、削り、ミガキ	ミガキ 黒色處理	住 住 形	D-7 c		23-4	
25	C-18	土縫部 环	16.8	-	(7.7)	(6.46)	ハケ目、黒ナデ	ミガキ 黒色處理	(1/2)	D-7 c		23-3 64-3	
26	C-135	土縫部 环	(13.2)	-	(7.6)	(0.59)	ミガキ、削り	ミガキ、ヘラナデ 黒色處理	1/5	D-7 d		23-6	
27	C-39	土縫部 环	16.4	-	5.6	0.34	黒ナデ、ミガキ、削り、ハケ目	ミガキ	3/5	D-8 b		23-16	
28	C-41	土縫部 环	18.5	-	5.4	0.29	黒ナデ、削り、部分的にミガキ、 輪郭み底	ミガキ 黒色處理	住 住 形	D-8 b		23-14 65-5	
29	C-136	土縫部 环	(17.5)	-	(4.6)	(0.26)	黒ナデ、削り	ミガキ 黒色處理	(1/8)	D-8 b			
30	C-9	土縫部 环	(16.8)	-	(3.6)	(0.21)	黒ナデ、ミガキ、削り	ミガキ 黒色處理	(1/4)	D-8 b			

第201図 S R 2 河川跡出土遺物(2)



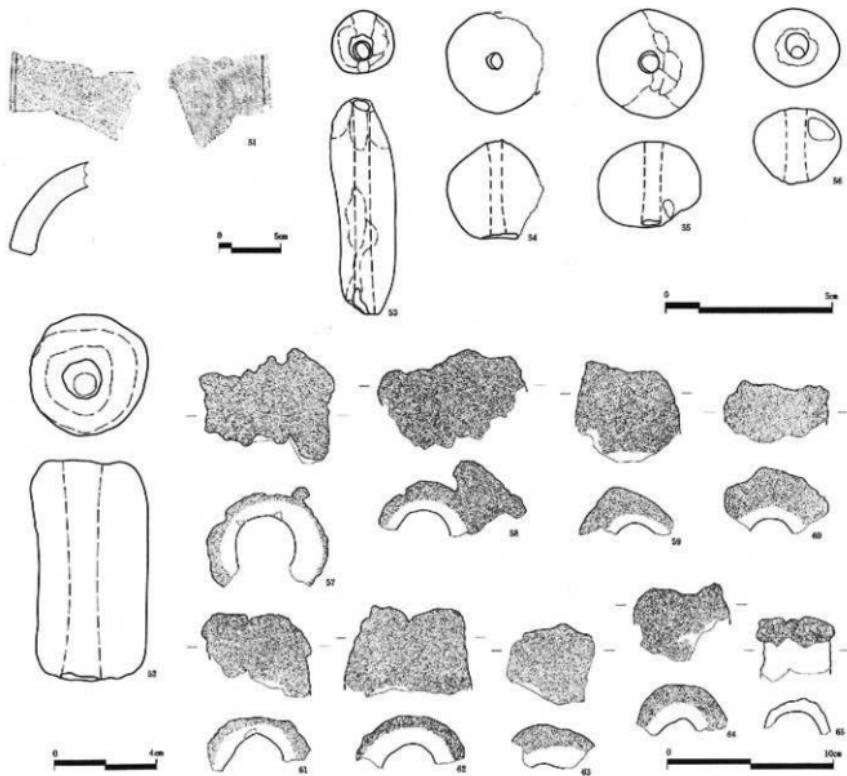
番号	住居 跡 番 号	種 別 形 式	出土位置	压 量 〔kg〕				外 面 調 査		内 面 調 査		残 石 分 類	考 査	写真図版
				口	底	側	高	厚	底	側	底	側		
31	C-22	土器部 片		16.6	5.1	0.30	-	-	横ナゲ、削り、部分的NC、イガキ	イガキ	完形	D-8 c		22-17 66-2
32	C-137	土器部 片	(14.0)	-	-	-	-	-	横ナゲ、イガキ	イガキ	(1/6)	D-8 c		
33	C-37	土器部 片		14.2	6.0	3.5	0.25	横ナゲ、削り	横ナゲ、イガキ	4/5	D-9 a	底/口-0.42	23-18	
34	C-38	土器部 片		10.6	-	4.1	0.38	削り	横ナゲ	残存	E-3		31-6 66-4	
35	C-25	土器部 片		10.5	-	3.4	0.32	横ナゲ、削り	横ナゲ	残存	E-5 b		31-8 71-7	
36	C-411	土器部 片	(20.2)	-	-	-	-	横ナゲ、削り	横ナゲ	(1/8)	E-6 b			
37	C-146	土器部 片	(22.6)	-	-	-	-	横ナゲ、ハケ目	横ナゲ、ハケ目、ヘラナゲ	(1/4)	D-1 a	断面に残	25-3	
38	C-15	土器部 片	(16.0)	-	-	-	-	横ナゲ、ハケ目、一部ナゲ	横ナゲ、ヘラナゲ	(1/4)	D-1 a	断面に残	25-2	
39	C-11	土器部 片	(22.2)	-	-	-	-	横ナゲ、イガキ、ハケ目、口脇部に比較	横ナゲ、ヘラナゲ	(1/4)	D-1 a	横面部に残 最大厚さ2.6cm	24-4	
40	C-397	土器部 片	-	(5.6)	-	-	-	ハケ目、削り	削り、ヘラナゲ、ナゲ	(1/2)	D-1 b			
41	C-296	土器部 片	-	(7.0)	-	-	-	削り、イガキ	ハケ目、ナゲ	(1/3)	D-2			
42	C-16	土器部 片	(14.1)	-	-	-	-	横ナゲ、輪郭み底	横ナゲ、ヘラナゲ、輪郭み底	(1/3)	D-2	断面に残	26-6	
43	C-428	土器部 片	(16.1)	-	-	-	-	横ナゲ、ハケ目	横ナゲ、ヘラナゲ、一部ナゲ	(1/5)	D-2	断面に残		

第202図 S R 2 河川跡出土遺物(3)



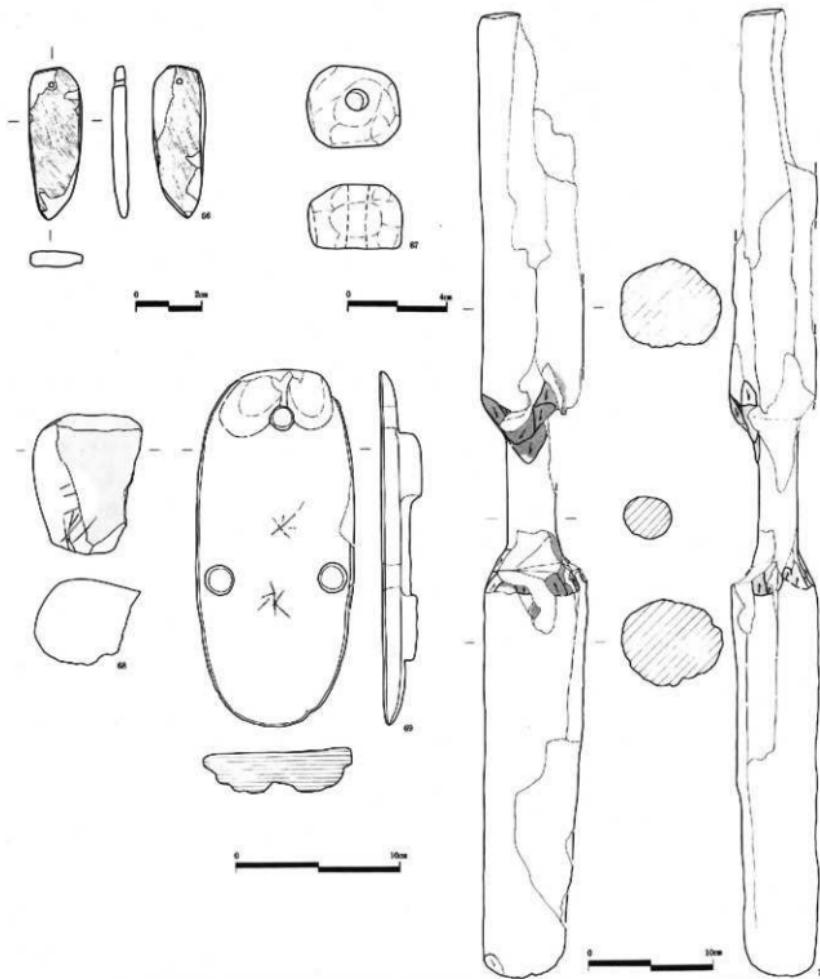
番号	器 種 名	形 状 形	出土位置	外 面 調 査				内 面 調 査				残 存 分 類	備 考	写真図版
				口 径	底 径	厚 さ	底 高	外 面 調 査	内 面 調 査	外 面 調 査	内 面 調 査			
44	C-17	土師器 甕	(24.4)	—	—	ハケ目、網ナデ、ミガキ	ハケ目、横ナデ、ヘラナデ、一部ナデ 輪郭み痕	(1/2)	D-1 b	26-1	体部に泥化物付 着、底大径、体 幅35.0cm			
45	C-12	土師器 甕	(13.5)	—	—	網ナデ、ハケ目、磨り	網ナデ、ヘラナデ、輪郭み痕	(1/4)	D-2 a					
46	C-50	土師器 甕	(8.8)	—	—	横ナデ、ハケ目、ナデ、ミガキ	ハケ目、ヘラナデ、ナデ、部分的に ミガキ	(1/5)	D-2 b					
番号	器 種 名	形 状 形	出土位置	外 面 調 査	内 面 調 査	外 面 調 査	内 面 調 査	外 面 調 査	内 面 調 査	外 面 調 査	内 面 調 査	外 面 調 査	内 面 調 査	写真図版
47	C-30	手捏ね 陶器 甕	(11.5) 5.5 4.4 (8.47)	ナデ、ミガキ 削色處理	ミガキ	2/3								
48	E-2	灰 陶 器 甕	(15.4)	—	—	—	ミクロナデ	ミクロナデ	(1/3)	1				
49	E-1	灰 陶 器 甕	(16.2) (8.0) (3.3) 9.49	ミクロナデ、底面一部輕へタ剥り 剥離し不明	ミクロナデ	1/2	6						35-1	
50	I-2	陶 器 甕	— (20.5)	—	—	ナデ	ミクロナデ	(1/6)		無施釉器、青面 底	39-7			

第203図 S.R.2 河川跡出土遺物(4)



番号	登録号	種別	部類	出土位置	特徴				分類	写真版
					白	青	黒	茶		
51	F-42	瓦	瓦	出土位置	圓窓き、火口溝し(ナゲ)				系切り目、布目調、側縁へり割り	側縁へり割り、灰色
52	F-43	土瓶	土瓶	出土位置	長 9.0	2.9	大 6.7	孔 1.5	重 216.0	1b 完 形
53	F-45	土瓶	土瓶	出土位置	長 6.7	1.9	大 0.6	孔 0.6	重 26.5	2 完 形
54	F-47	土瓶	土瓶	出土位置	長 3.0	2.9	大 0.5	孔 0.5	重 1.03	22.5 (1) 棱江完形
55	F-49	土瓶	土瓶	出土位置	長 2.7	3.2	大 0.6	孔 —	重 0.84	27.0 (1) 外面ナゲ
56	F-50	土瓶	土瓶	出土位置	長 2.3	2.6	大 0.7	孔 —	重 0.88	12.5 (1) 完 形
57	F-41	土瓶	羽口	出土位置	長 7.0	8.2	大 3.6	孔 —		外表面ナゲ
58	F-49	土瓶	羽口	出土位置	長 6.1	8.9	大 3.2	孔 —		外表面ナゲ
59	F-45	土瓶	羽口	出土位置	長 6.2	6.3	大 —	孔 —		外表面ナゲ
60	F-44	土瓶	羽口	出土位置	長 5.8	6.3	大 2.6	孔 —		外表面ナゲ
61	F-43	土瓶	羽口	出土位置	長 5.0	6.7	大 3.8	孔 —		外表面ナゲ
62	F-42	土瓶	羽口	出土位置	長 5.5	7.6	大 3.2	孔 —		外表面ナゲ
63	F-46	土瓶	羽口	出土位置	長 4.9	5.4	大 —	孔 —		外表面ナゲ
64	F-47	土瓶	羽口	出土位置	長 4.8	5.8	大 —	孔 —		外表面ナゲ
65	F-46	土瓶	羽口	出土位置	長 3.9	4.7	大 —	孔 —		外表面ナゲ

第204図 S R 2 河川跡出土遺物(5)



番号	立場 番号	種別	器種	出土位置	法 長さ			横 幅			厚さ			残存	備 考	写真図版
					長 さ	幅	厚 さ	長 さ	幅	厚 さ	長 さ	幅	厚 さ			
66	K-1	石製品	劍		46.5	16	4.5	6.5			12.0	完全		全面に磨痕あり、貫通孔径1.5mm		46-2
67	K-2	石製品	鉗子	出土位置	袖 2.6	上端最大幅 1.7	武曲最大幅 3.3	丸 孔 径 0.9	0.9	0.9	49.0	完全	全面に磨痕あり			46-5
68	K-14	石製品	石	出土位置	法 8.6	幅 6.5	厚 5.3	法 8.6	幅 6.5	厚 5.3	36.0	完全	使用面1.2面			46-7
69	L-2	木製品	下駄		ケヤキ	板材	板目	(21.9)	9.7	2.5						写真図版
70	L-224	木製品	片		コクランコクラン 風	板材 分離材	-	77.8	-	-				2ヶ所に鋸跡「水」?、先端部に擦痕跡、鼻孔孔(最大径1.4cm)3ヶ所あり 側面最大幅8.1cm、側面高さ33.8cm、両端と要部の邊に擦痕あり、両端に欠損あり。		55-6 49-1

第205図 S R 2 河川跡出土遺物(66-72)

である。9～15は甕の口縁部片である。外面に塗釜式の特徴であるハケ目痕と、口唇部に刻みが連続して施されている。18の甕と19の甕の口縁部片は複合口縁になっている。

また6～15の甕口縁内面の調整をみると、6が横ナデ、それ以外はヘラミガキである。10以外にはハケ目調整痕も観察される。

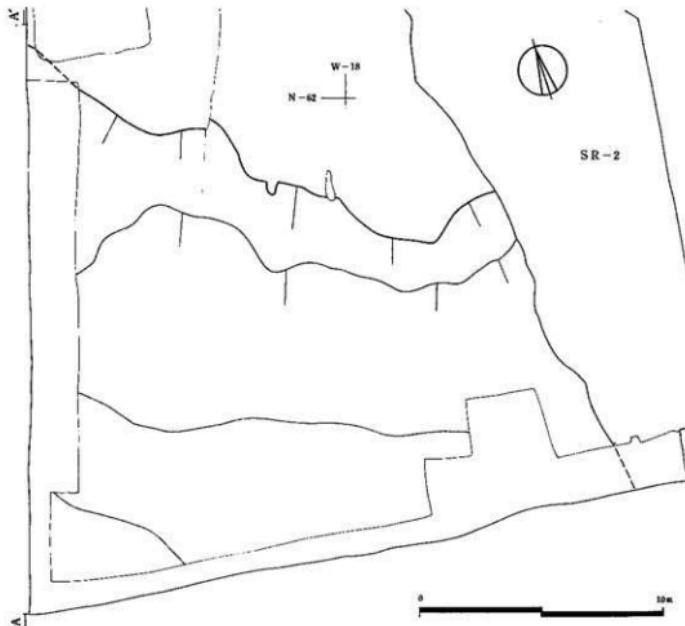
高杯・器台のうち脚部に円孔が穿たれているのがわかるものは3～5である。3には4つの孔、4には3つの孔が、5の器台には2孔が施されている。

21～28は全て杯として登録している。内面が黒色処理されているところと、調整としてヘラミガキされているところが共通点としてあげられる。

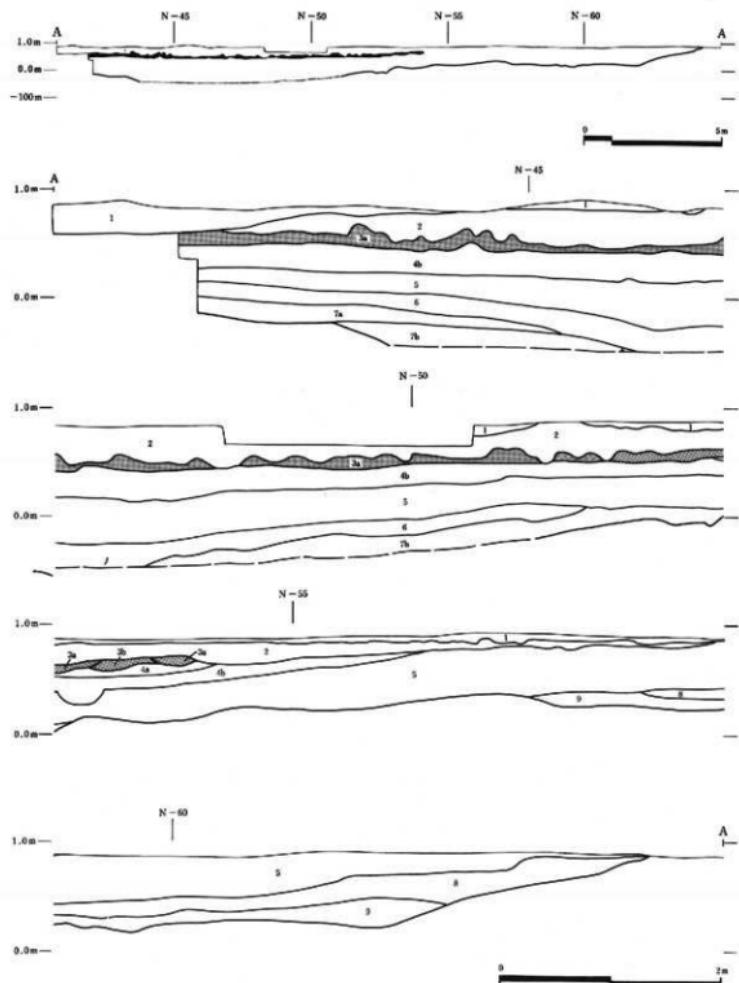
21～25は杯の体部に段を持つのが特徴である。21は外面の段は明瞭であるが、内面は段になつておらず、内弯気味のカーブが口縁部にむかって外反するのが特徴。22・23の杯は、外面のはか、内面にも軽く段を持ち、口縁部は外傾するのが特徴。24、25は外面の段も形骸化し、浅い沈線状のものになっている。内面には段はなく、内弯しながら口唇部まで至るという形状になっている。外面調整は、段より上部がヨコナデ、下部から底面が手持ちのヘラケズリである。底部は平底風の丸底である。

26～28は杯としているが碗形である。外面調整は26がヘラミガキ、27がヘラケズリの後のヘラミガキ、28が横位のヘラケズリとなっている。28は底面が欠損していて不明だが、他の2点は丸底風平底を呈している。

29、30は須恵器の杯片である。断面を観察すると、底部と体部の境が「く」字状に折れおり、外面が軽い稜線となっている共通点がある。31は須恵器の蓋片である。ツマミ部も欠損する小片であり、口端部がカエリ風に折れている。

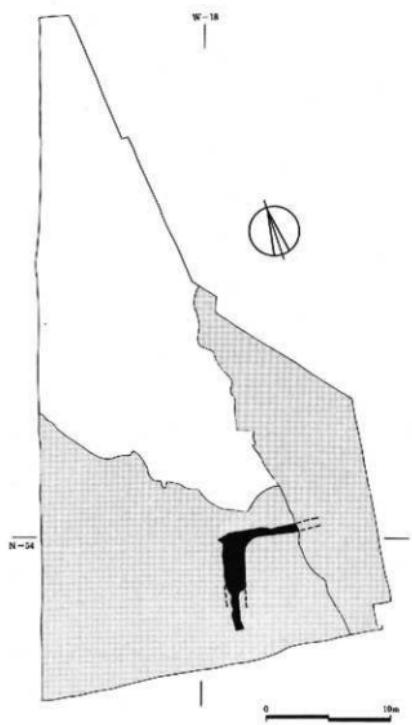


第206図 SR 3河川跡平面図



順序	色 調	種 種	層 号	順序	色 調	種 種	層 号
1	10YR 8/2 黑褐色	シルト質粘土	現代の水田耕作土。	5	10Y R 2/1 黑褐色	シルト質砂	部分的に灰黑色の漸層を挟む。
2	10Y R 2/1 黑色	シルト質粘土	水田耕作土。	6	10Y R 1-7/1 黑色	粘土	中火成に灰黑色の漸層を2層挟む。
3 a	10Y R 3/3 黑褐色	粘土質シルト	灰白色火成岩を大ブロックで大量に含む。	7 a	2.5Y 1/1 黑褐色	砂	
3 b	10Y R 7/1 灰白色	火山灰	2層の複数を受けている。	7 b	2.5Y 6/2 灰黄色	砂	全体的に粘土をうすく挟む。
4 a	10Y R 2/1 黑褐色	粘土	未分解の植物遺体を多く含む。全体的に砂を含む。	8	2.5Y 3/2 黑褐色	砂	
4 b	10Y R 2/1 黑褐色	砂	全体的に粘土をうすく含む。	9	2.5Y 3/1 黑褐色	砂	

第207図 S R 3 河川跡断面図



第208図 SR 3 河川跡検出の水田跡

と考えられるものである。2a～2c層は黒色の粘土層で、未分解の植物遺体が認められる。3層はグライ化した砂層である。5a～5c層はまた未分解の植物遺体を多量に含む黒色の粘土である。また2・5層と同様な層は7層、10層、11a層、11c層にも認められる。6層は灰白色火山灰層であるが、粘土ブロックが多く混在しており、2次的で、10世紀前半以降の堆積と考えられる。

7層以下は砂、粘土の互層となるが、11f、12b層以外は未分解の植物遺体が認められる。最下層の12b層は細砂層である。

特筆されるのは11a～11f層である。7世紀後半の堆積層と考えられ、植物遺体や土器も多く含んでいるが、貝殻を含む層もある。11a～11d層が顕著であり、中でも11cと11d層は純貝層に近い状況であった。Vの貝類の分析・同定で詳しく報告されているが、83%がヤマトシジミ、15%がイガイ、その他が2パーセントである。

出土遺物（第214～228図）

堆積土から多量の遺物の出土があり、その種類は土師器（第214～222図）、須恵器（第222、223図）、瓦（第223図）、土製品・石製品・金属製品（第224図）、木製品（第225～228図）である。出土遺物の多くは土師器と木製品といえる。

図面中の1～105が土師器である。

土製品として固化できたのは32の縄口の小破片1点である。SR 2では多量に出土しており、古代集落では欠かせない道具の一つであったことを伺わせる。

33～36は丸瓦の小片である。外面は繩叩きされているのがナデ消されており、内面には布目跡・糸切り跡を残している。35、36は焼成によるのか、再酸化を受けたのか不明であるが、にぶい橙色や褐灰色を呈している。

(4) SR 4 河川跡

遺構状況（第212図）

確認状況・重複 3区北東部で確認された。部分的な検出であり、全体的な詳しい様相は知りえない。

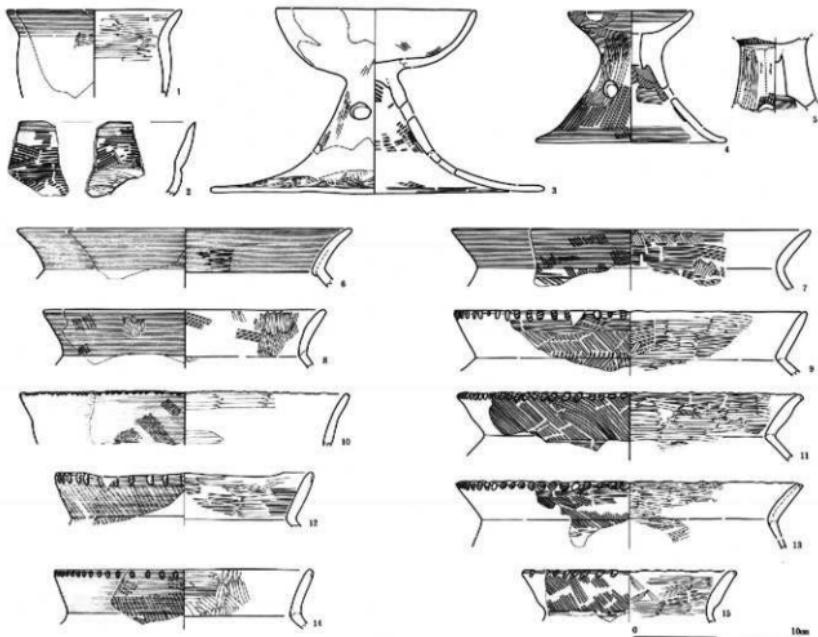
なお、調査区をつないでいないので確実なことは言えないが、位置的状況などから、SR 2もしくは3と同一河川跡と考えられる。

規模・方向 検出したのは西岸部分の一部にすぎない。遺構は大きく調査区外に延びており、全体的な規模・形状や方向は不明である。

検出長は南北方向に21m、最大幅は35mで、確認することができた西岸を基準とする方向はN-25°Wである。壁の立ち上がりはごく緩やかで、深さは1.6mを計る。

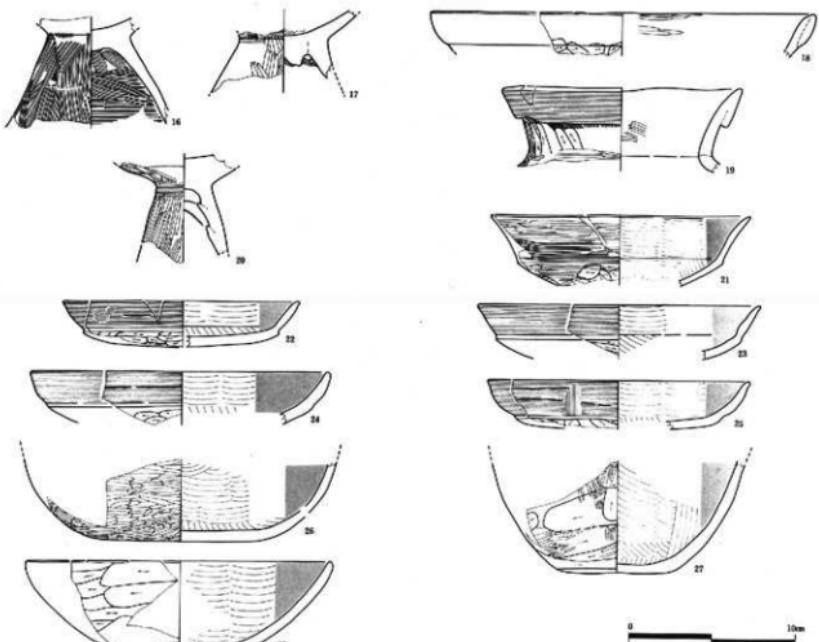
堆積土 検出部の堆積土は21層に細分されたが、土質の状況から以下のように大別される。

1a、1b層は黒色系のシルト質砂で、水田耕作である。1a層は現在のものであり、1b層は近世の耕作土



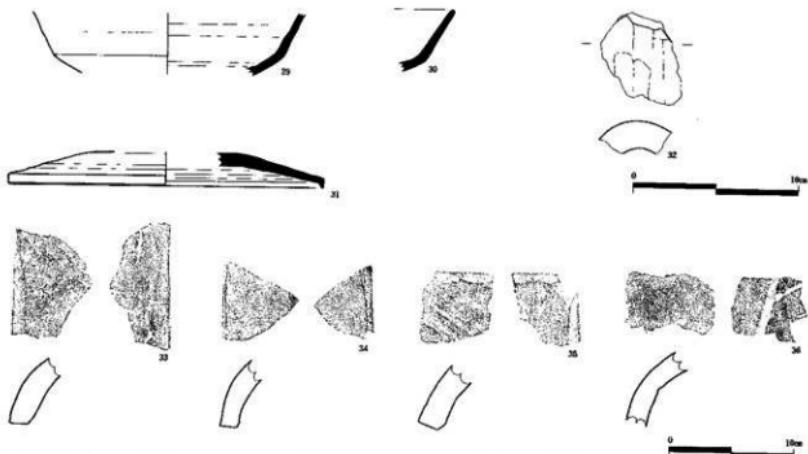
番号	出 土 部 位	形 状	出土位置	底 面			外 面 調 整	内 面 調 整	底 存	分 類	備 考	写真図版	
				口	底	側							
1 C-408	土器部 片			(10.6)	-	-	横ナメ、ミガキ	ミガキ	(1/1)	A-1		17-1	
2 C-153	土器部 片			-	-	-	横ナメ、ハケ目	ハケ目、ミガキ	破片	A-2		17-2	
3 C-8	土器部 片		出土位置	(3.1)	豊高 脚部付	脚部付	外 面 調 整	内 面 調 整	底 存	分 類	備 考	写真図版	
4 C-3	土器部 片		(12.0) (11.3) (20.2)	ミガキ	ミガキ	ミガキ	ハケ目	ミガキ	(3/5)	A-1	四孔スカシ	17-6	
5 C-402	土器部 片		(2.7)	7.7	8.1	11.6	ナメ	ハケ目、横ナメ、 ミガキ	ハケ目	4/5	A-1	三孔スカシ	17-3
6 C-407	土器部 片		(29.9)	-	-	-	横ナメ	ハケ目、横ナメ	(1/7)	A-1			
7 C-406	土器部 片		(21.6)	-	-	-	ハケ目、横ナメ	ハケ目、ミガキ	(1/9)	A-2		61-1 62-4	
8 C-154	土器部 片		(17.2)	-	-	-	ハケ目、横ナメ、部分的にミガキ	ハケ目、ミガキ	(1/4)	A-2			
9 C-150	土器部 片		(21.4)	-	-	-	ハケ目、口縁削み	ハケ目、ミガキ	(1/8)	A-1 a		17-8 61-4	
10 C-148	土器部 片		(26.6)	-	-	-	ハケ目、横ナメ、口縁削み	ミガキ	(1/8)	A-1 a		62-1	
11 C-2	土器部 片		(21.0)	-	-	-	ハケ目、口縁削み	ハケ目、ミガキ、輪縫み痕	(2/5)	A-1 a		17-16 62-2 63-1	
12 C-149	土器部 片		(15.6)	-	-	-	ハケ目、横ナメ、口縁削み	ハケ目、ミガキ	(1/4)	A-1 a		17-4	
13 C-404	土器部 片		(21.9)	-	-	-	ハケ目、ミガキ、口縁削み	ハケ目、ミガキ	(1/10)	A-1 a	複合口縫	17-9 61-6 63-1	
14 C-152	土器部 片		(15.6)	-	-	-	ハケ目、横ナメ、口縁削み	ハケ目、ミガキ	(1/8)	A-1 a		17-10	
15 C-151	土器部 片		(13.0)	-	-	-	ハケ目、口縁削み	ハケ目、ミガキ	(1/7)	A-1 b		17-7 61-5	

第209図 SR 3河川跡出土遺物(1)



番号	登録番号	種別	出土位置	法面高さ[cm]	外面調整		内面調整		既存分類	備考	写真図版
					左	右	左	右			
16	C-399	土器部 台形器	出土位置	基底高さ	-	-	ハケ目	-	ハケメ、一部ナデ	(4/5) A-1 c	17-14
17	C-400	土器部 台形器	出土位置	基底高さ	-	-	ハケ目、ナデ	ハガキ	ハナナデ、削り、 ハガキ	(1/3) A-1 c	
番号	登録番号	種別	出土位置	法面高さ[cm]	外面調整		内面調整		既存分類	備考	写真図版
18	C-405	土器部 台形器	出土位置	口 径 高さ 従量	口 径	高さ	削り	ハガキ	(1/12) A-1	複合口縁	17-23
19	C-7	土器部 台形器	出土位置	(14.6)	-	-	ハケ目、削り、 ハガキ、既ナデ	ハガキ	(2/3) A-1	複合口縁	17-15
番号	登録番号	種別	出土位置	法面高さ[cm]	外面調整		内面調整		既存分類	備考	写真図版
20	C-401	土器部 高 扇	出土位置	基底高さ	-	-	ハガキ	ナデ、ハガキ	ナデ、輪郭み底	(1/3) B-1	18-2
番号	登録番号	種別	出土位置	法面高さ[cm]	外面調整		内面調整		既存分類	備考	写真図版
21	C-4	土器部 环	出土位置	(15.8) (4.8) (0.30)	(0.9)	ハケ目、 黑色地	ハケ目、 黑色地	ハガキ	(1/4) D-3		21-5 63-6
22	C-6	土器部 环	出土位置	(14.3) (2.8) (0.20)	(0.9)	既ナデ、一部ナデ、 削り、輪郭み底	既ナデ	ハガキ	(1/4) D-4		22-6
23	C-413	土器部 环	出土位置	(17.2) (3.9) (0.23)	(0.8)	既ナデ、削り	既ナデ	ハガキ	(1/12) D-4		
24	C-414	土器部 环	出土位置	(18.2) (4.2) (0.23)	(2.0)	既ナデ、削り、 輪郭み底	既ナデ	ハガキ	(1/8) D-5		
25	C-5	土器部 环	出土位置	(15.9) (3.1) (0.20)	(0.7)	既ナデ、一部ナデ、 削り、輪郭み底	既ナデ	ハガキ	(1/4) D-5		22-16
番号	登録番号	種別	出土位置	法面高さ[cm]	外面調整		内面調整		既存分類	備考	写真図版
26	C-156	土器部 环	出土位置	口 径 高さ 従量	-	(9.3)	-	ハガキ	(3/5) D-7 b①		
27	C-157	土器部 环	出土位置	口 径 高さ 従量	-	(7.4)	-	削り、ハガキ	(3/5) D-7 b①		
番号	登録番号	種別	出土位置	法面高さ[cm]	外面調整		内面調整		既存分類	備考	写真図版
28	C-158	土器部 环	出土位置	(18.6) (5.8) (0.31)	-	-	削り	ハガキ	(1/6) D-8 b		

第210図 SR3 河川跡出土遺物(2)



番号	分類	種	原産地	生 品 (回)				外 国 調 査	内 国 調 査	在 存	分 類	備 考	写真図版	
				口	桂	蘭	高							
29	E-46	重瓣桂	日本	-	-	-	-	ミクロナデ	ミクロナデ	(1/6)	2			
30	E-45	重瓣桂	日本	-	-	-	-	ミクロナデ	ミクロナデ	鏡片	2			
31	E-49	重瓣桂	(日本)	(18.1)	-	-	-	ミクロナデ	ミクロナデ	(1/8)	3		36-6	
前番	分類	種	原産地	生 品 (回)				調 査				考		写真図版
P-56	木製品	羽口		5.7	4.9			外國ナデ						44-11
番号	分類	種	原産地	生 品 (回)				調 査				分 類		写真図版
33	F-36	瓦	丸瓦	凸				四				備 考		
34	F-38	瓦	丸瓦	ナゲ、開頭へタ割り				赤切り端、赤瓦端、開頭へタ割り				開頭へタ割り、赤瓦		41-12
35	F-37	瓦	丸瓦	ナゲ、開頭へタ割り				赤切り端、赤瓦端、開頭へタ割り				開頭へタ割り、赤瓦		41-13
36	F-40	瓦	丸瓦	開頭き、スリガシ (<ナゲ>)				赤目端 (赤い)、開頭、瓦端面へタ割り				開頭、瓦端面へタ割り、にぶい赤色		41-14

第211図 SR3 河川跡出土遺物(3)

1～6は壺と壺の口縁部で、塩釜式に比定されるもので、4世紀の遺物である。1～3にはハケ目がみられ、4～6は複合口縁となっている。土師器の中では少量である。

7~13は新式の南小泉式（旧引田式）に該当するものと考えられ、5世紀末から6世紀前葉の年代觀か。9、10は掛形で、9は内外面ヘラミガキと黒色処理されている。

14～55の鉛筆は墨開式を主体とした有段丸底・肉墨の坯である。2世紀のものである。

12、13はそれらと共存する鉢と甕であり、14・27・28・29・31・38・41～43・50・52の11点には内面の黒色処理が目られない。

56~83の殆どは有段丸底の鬼高式期の関東系环と考えられ、内面が横ナデ・漆処理されている。関東系土器と言った場合、いつも問題になるのは、持ち込んだものか現地生産かということであるが、Vの螢光X線分析で詳細が述べられているように、当地の粘土を使って成形・焼成されたものであることが分かった。

88~96は壺で、体部中央付近に最大径をもつ球胴形のものであり（88は球胴か長胴かはっきりしない）、ハケ目調整されているなど塩釜式の特徴を持っているといえよう。共伴関係から栗口式と考えられるD群の杯や壺と一括しているが、古い遺物が混入している可能性もある。97~100の壺は長胴形でハケ目があり、体部と口縁部の境に段を有する栗口式に該当するものと考えられる。101~103も同時期のものとみられる。

106~115は須恵器である。

106～110は坏で、底部の切り離し技法は不明である。ただし106と108は回転ヘラケズリ、107と109は手持ちのヘラケズリである。110は高台付坏で全体がロクロナデされている。

113、114は壺片で、外面に平行叩き痕、内面に青海波文と言われる同心円文押さえ具痕が残っている。

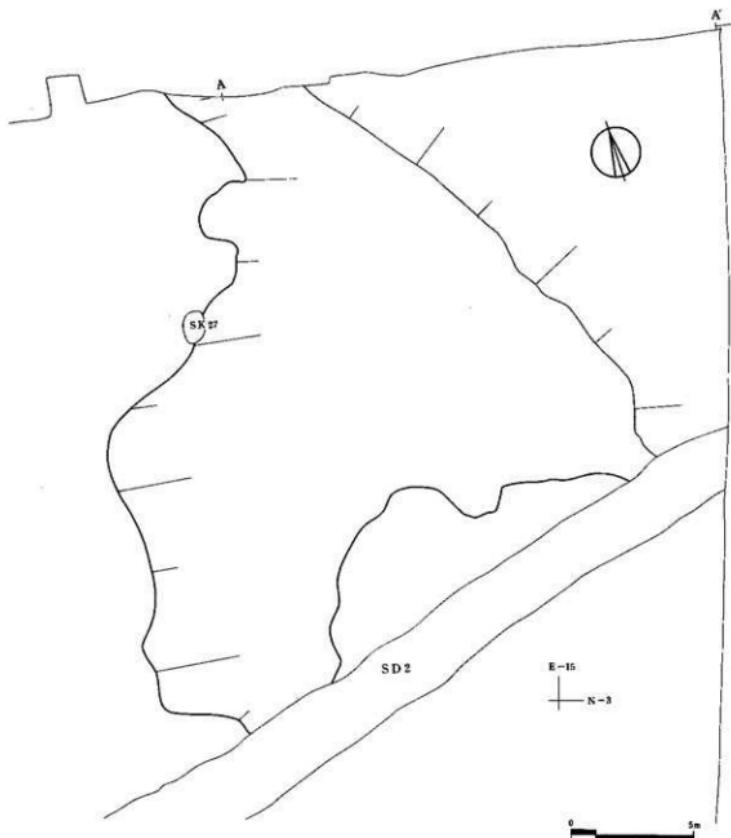
116～119は丸瓦片である。内面に布目痕を残す所謂布目瓦で、外面は繩叩き痕がナデ消されている。

120～125は土玉である。最大径が2.6～4.0cmで、122は全体が朱塗りとなっている。

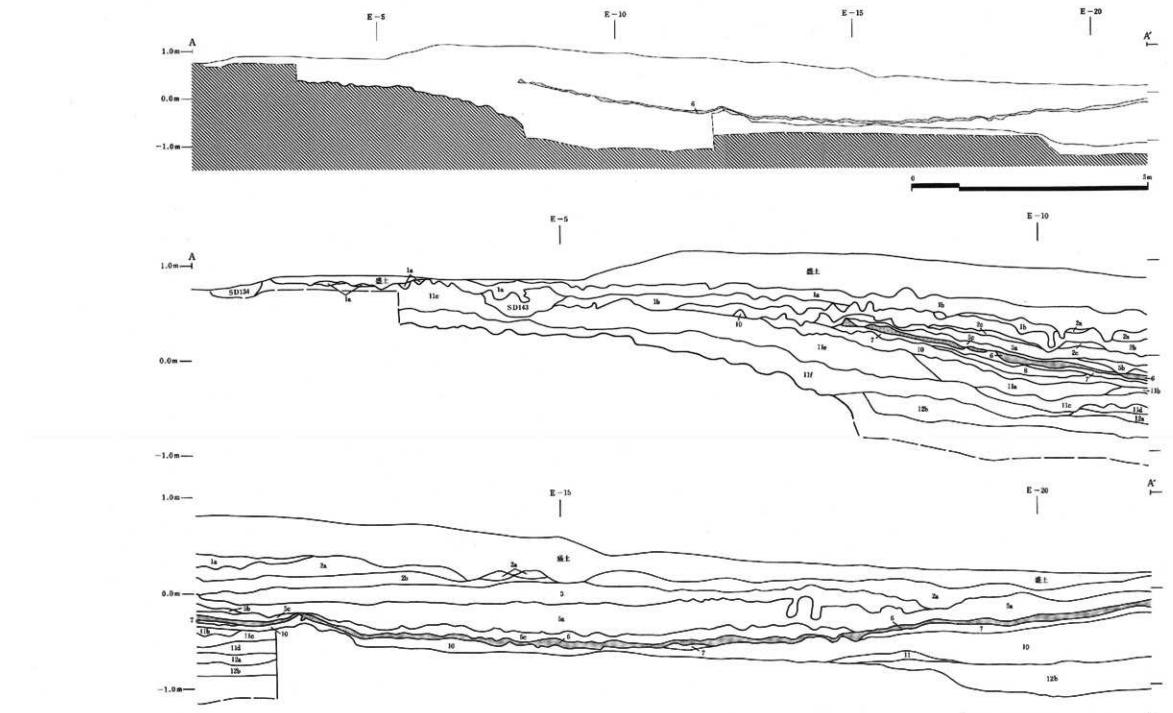
126は大型の劍形の石製模造品である。127と128は金属製品である耳環である。金環と称されるものが多いが、128が銀箔が部分的に付着しており、銀環であったことが知られる。129は碧玉製の管玉、130は石製の鰐鉤車、131は砥石である。

132～154は木製品である。

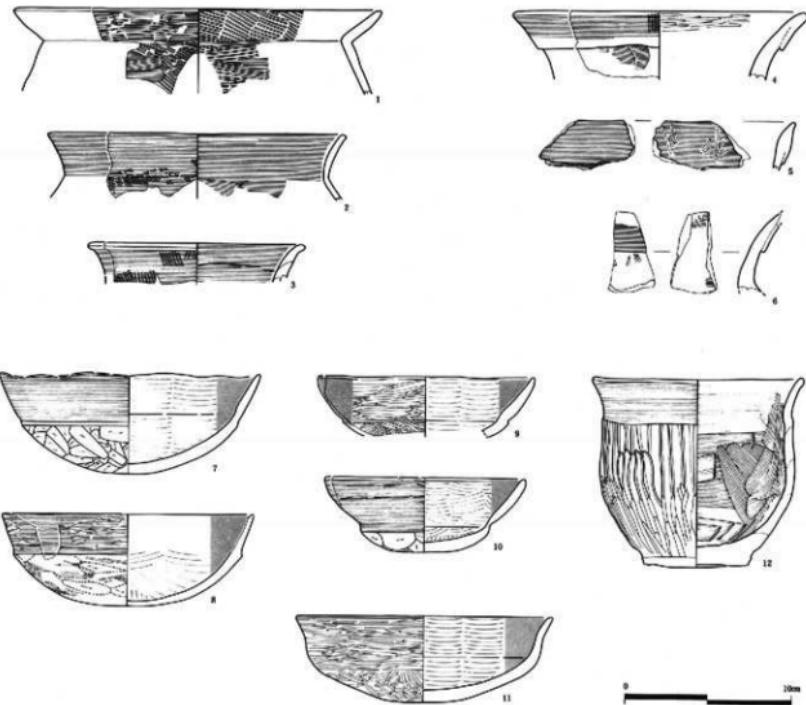
そのうち132～141は円形容器の一部分で、132・134・136～140はその底板である。樹種は分かっているものだけ



第212図 SR 4 河川跡平面図

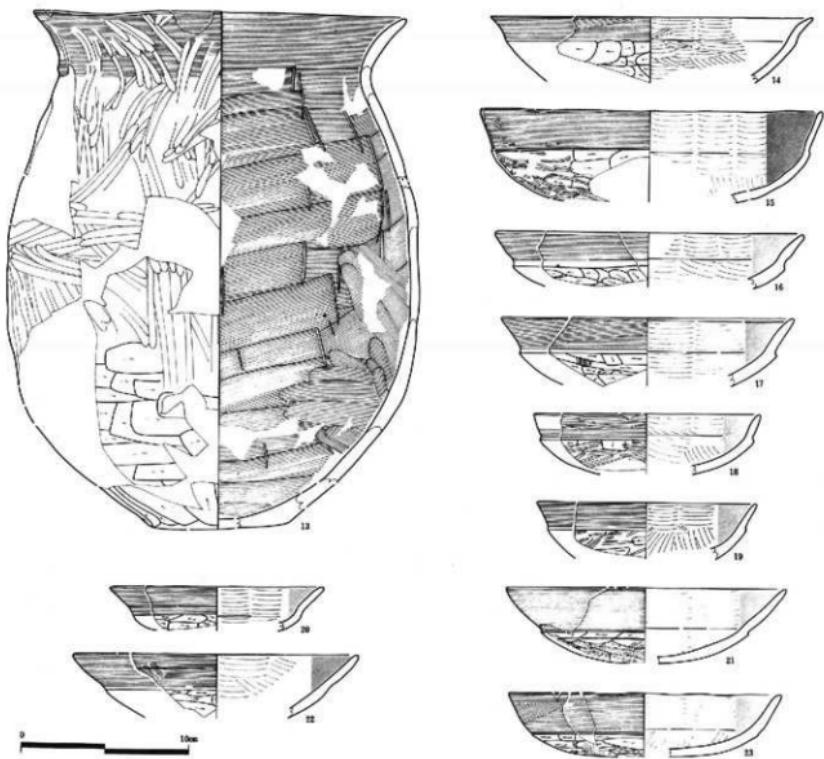


第213図 SR4 河川跡断面図



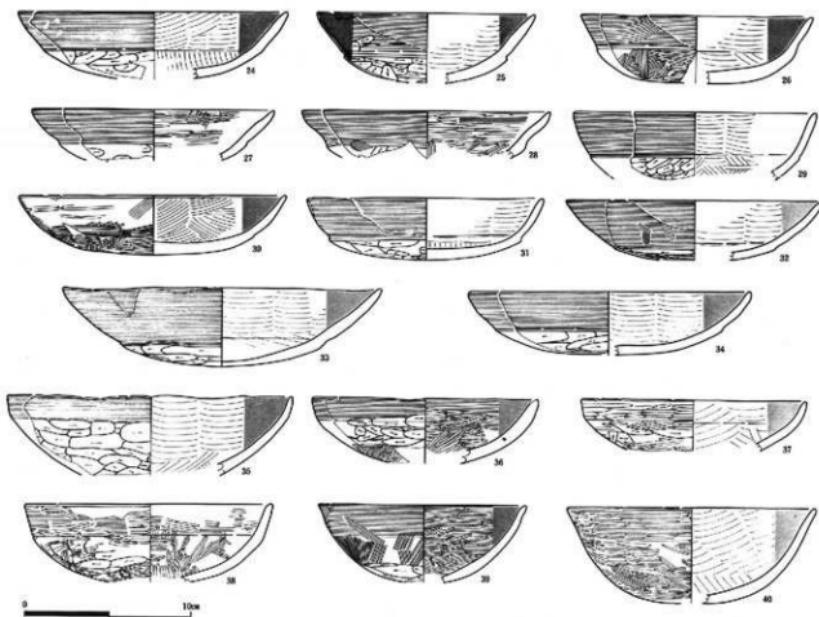
番号	登 載 編 号	種 別 器 形	出土位置	底 面			外 表 調 査	内 表 調 査	残 存	分類	備 考	写真図版	
				口 径	底 径	器 高							
1	C-353	土器		(22.4)	-	-	ハケ目、ナデ	ハケ目、一部ナデ	(1/10)	A-2			
2	C-352	土器		(18.2)	-	-	ハケ目、横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	(1/6)	A-2		61-2	
3	C-358	土器		(13.2)	-	-	ハケ目、横ナデ	横ナデ、縦模み底	(1/6)				
4	C-355	土器		(17.8)	-	-	ハケ目、横ナデ、ナデ	ミガキ	(1/8)	A-1	複合口縁	17-20	
5	C-357	土器			-	-	横ナデ	横ナデ。部分的にミガキ	破片	A-1	複合口縁	17-21	
6	C-356	土器			-	-	横ナデ、ミガキ	横ナデ、ハケ目、ミガキ	破片	A-1	複合口縁	17-19	
番号	登 載 編 号	種 別 器 形	出土位置	底 面			外 表 調 査	内 表 調 査	残 存	分類	備 考	写真図版	
				口 径	底 径	第 1 / 以 及 び 第 2 高							
7	C-190	土器		(15.8)	6.2	(0.39)	3.0	横ナデ、削り	ミガキ	1/2	C-1		19-1
8	C-222	土器		(15.2)	5.7	(0.38)	3.2	横ナデ、ミガキ、削り	ミガキ	2/5	C-1		19-3
9	C-242	土器		(13.2)	(4.2)	(0.32)	(1.4)	横ナデ、ミガキ 周色処理	ミガキ	(1/6)	C-2		20-1
10	C-214	土器		(12.2)	4.6	(0.38)	1.2	横ナデ、削り、縦模み底	ミガキ	(1/6)	C-2		20-2
11	C-215	土器		(15.6)	5.3	(0.34)	2.0	横ナデ、ミガキ	ミガキ 周色処理	3/5	C-3		19-2
番号	登 載 編 号	種 別 器 形	出土位置	底 面			外 表 調 査	内 表 調 査	残 存	分類	備 考	写真図版	
				口 径	底 径	高							
12	C-352	土器		(12.8)	6.3	11.7	横ナデ、ハケ目、下部ミガキ、直部削り	横ナデ、ナデ、ヘラナデ	3/5	C-1	頭部に段	20-3 27-4	

第214図 S R 4 河川跡出土遺物(1)



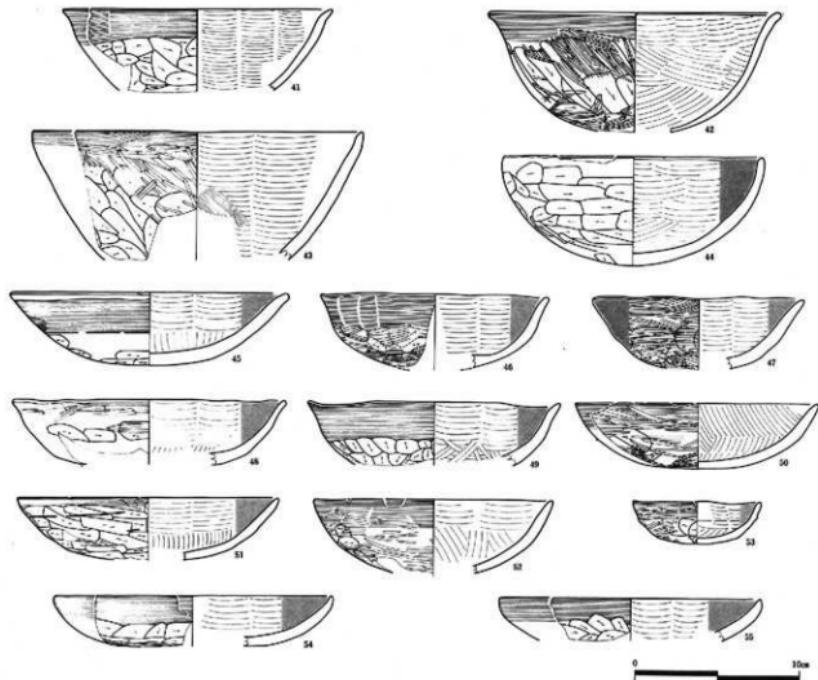
番号	使用 器 名	種 別 形	出土位置	底 盤 寸 寸 径 高 度 幅 度 厚 度				外 面 調 査	内 面 調 査	瓶 存	分 類	備 考	写真図版
				口 径	底 径	高 度	幅 度						
13	C-380	土師器 甕		22.6	8.4	31.8		横ナギ、イガキ、削り、底部一削り	横ナギ、ヘリナギ、ナギ	4/5	C-1	体部最大径位置 14.5cm、最大径 35.0mm	20-4
14	C-217	土師器 甕	(1) 19.6	-	-	-		横ナギ、削り	イガキ	(1/8)	D-7		
15	C-258	土師器 甕	(26.9)	(5.9)	(6.28)	(3.4)		横ナギ、イガキ、削り	イガキ	(1/4)	D-2		21-1
16	C-426	土師器 甕	(18.8)	(4.4)	(6.23)	(2.2)		横ナギ、削り	イガキ	(1/12)	D-2		
17	C-267	土師器 甕	(17.8)	(4.9)	(6.28)	(2.7)		横ナギ、ハナ日、削り	イガキ	(1/12)	D-2		
18	C-315	土師器 甕	(13.8)	(3.9)	(6.28)	(2.3)		横ナギ、イガキ、削り	イガキ	(1/6)	D-2		21-3
19	C-213	土師器 甕	(13.4)	(4.4)	(6.33)	(2.7)		横ナギ、削り、イガキ	イガキ	(1/8)	D-2		71-2
20	C-210	土師器 甕	(13.1)	(3.3)	(6.25)	(1.3)		横ナギ、削り	イガキ	(1/8)	D-3		
21	C-260	土師器 甕	(17.0)	(4.6)	(6.27)	(1.8)		横ナギ、削り、イガキ、輪郭み痕	イガキ	1/4	D-4		
22	C-212	土師器 甕	(17.4)	-	-	-		横ナギ、一部ナギ、削り、輪郭み痕	イガキ	(1/8)	D-4		
23	C-238	土師器 甕	(16.6)	(3.9)	(6.23)	(1.3)		横ナギ、部分的にイガキ、削り	イガキ	1/3	D-4		22-8

第215図 SR4 河川跡出土遺物(2)



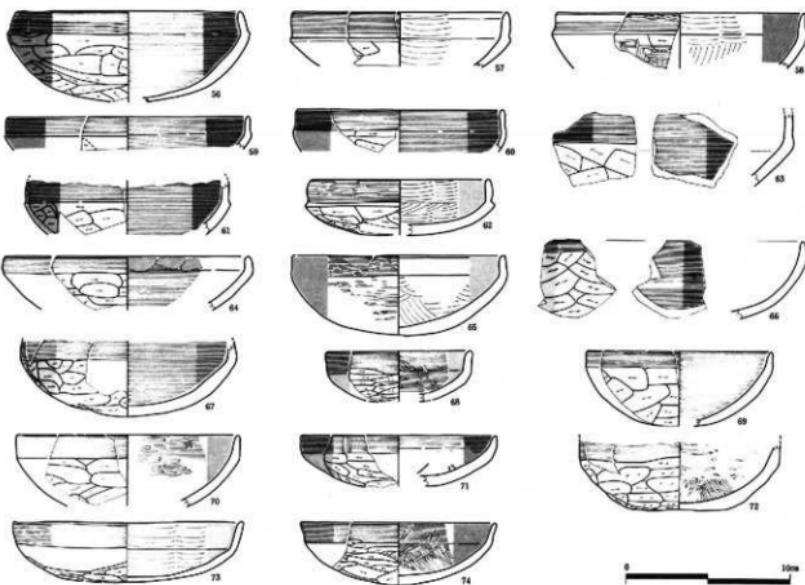
番号	保証番号	種類	形状	出土位置	古 量 目 積 高 面 積/ 寸 段 高				外 面 調 査	内 面 調 査	残 存 分 類	圖 考	写真図版
					横	豎	横/豎	寸					
24	C-247	土器部 片	片	(16.3)	(6.3)	(0.26)	(1.9)		横ナゲ、削り	ミガキ 黒色処理	1/6	D-4	
25	C-232	土器部 片	片	(13.2)	(6.3)	(0.32)	(1.5)		横ナゲ、削り、輪郭み底	ミガキ 黒色処理	1/4	D-4	内部にターナー状の付着物
26	C-229	土器部 片	片	(14.0)	(6.1)	(0.29)	(2.0)		横ナゲ、ミガキ	ミガキ 黒色処理	1/8	D-4	
27	C-197	土器部 片	片	(14.7)	(3.8)	(0.26)	(1.7)		横ナゲ、削り	ミガキ 黒色処理	1/8	D-4	
28	C-230	土器部 片	片	(15.1)	-	-	-		横ナゲ、削り、一部ナゲ	ミガキ 黒色処理	1/6	D-5	
29	C-249	土器部 片	片	(14.6)	(5.2)	(0.35)	(2.4)		横ナゲ、ナゲ、削り	ミガキ 黒色処理	1/8	D-5	
30	C-203	土器部 片	片	(16.2)	3.7	(0.23)	1.2	ハケ目、ナゲ、ミガキ	ミガキ 黒色処理	2/3	D-5	22-11 64-2	
31	C-234	土器部 片	片	(14.4)	3.9	(0.27)	1.2	横ナゲ、削り	ミガキ 黒色処理	1/3	D-5	22-9	
32	C-209	土器部 片	片	(15.6)	(3.7)	(0.34)	(0.7)	横ナゲ、一部ナゲ、削り	ミガキ 黒色処理	1/8	D-5		
33	C-237	土器部 片	片	(19.4)	4.9	(0.25)	1.3	横ナゲ、削り	ミガキ 黒色処理	1/3	D-5	22-10	
34	C-221	土器部 片	片	(17.2)	(3.9)	(0.23)	(1.5)	横ナゲ、削り、ナゲ	ミガキ 黒色処理	1/6	D-5	22-13	
35	C-243	土器部 片	片	(17.3)	-	-	-	横ナゲ、削り	ミガキ 黒色処理	1/4	D-6		
36	C-244	土器部 片	片	(13.8)	(6.2)	(0.38)	(2.8)	横ナゲ、削り、ミガキ、輪郭み底	ミガキ 黒色処理	1/4	D-6		
37	C-248	土器部 片	片	(13.4)	(3.7)	(0.27)	(2.4)	削り、ミガキ	ミガキ 黒色処理	1/8	D-6	22-18	
38	C-224	土器部 片	片	(15.6)	(5.1)	(0.34)	(3.1)	横ナゲ、ミガキ、削り	ミガキ 黒色処理	1/4	D-6	22-17	
39	C-206	土器部 片	片	(12.6)	(4.9)	(0.39)	-	横ナゲ、一部ナゲ、ハケ目、削り	ミガキ 黒色処理	1/4	D-7 a	22-21 64-4	
40	C-229	土器部 片	片	(15.1)	(3.9)	(0.39)	-	横ナゲ、削り、ミガキ	ミガキ 黒色処理	1/3	D-7 a	22-20	

第216図 S.R.4 河川跡出土遺物(3)



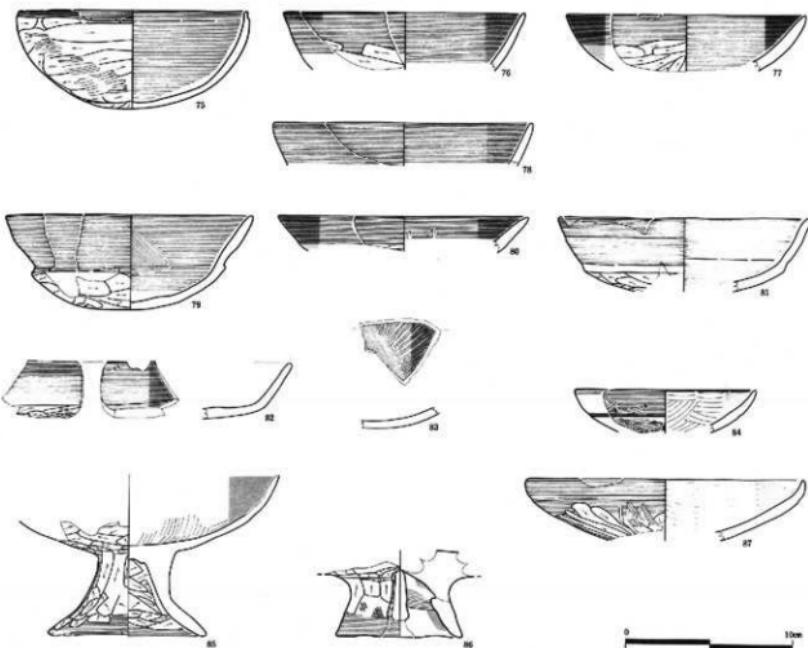
番号	登録番号	種別	実測値	出土位置	横 縦				外面調査	内面調査	馬群	分類	圖考	写真図版
					口径	幅	高さ	口縁/口底						
41	C-191	土器部 片	(16.4)	-	-	-	-	横ナデ、削り、ナデ	Iガキ	Iガキ	1/6	D-7 a		
42	C-204	土器部 片	(17.8)	(7.5)	(8.42)	-	-	横ナデ、削り、Iガキ	Iガキ	Iガキ	1/4	D-7 a	22-19 65-1	
43	C-228	土器部 片	(20.2)	-	-	-	-	横ナデ、削り、Iガキ	Iガキ、一部ナゲ	Iガキ	1/6	D-7 b①		
44	C-229	土器部 片	(15.6)	6.7	(8.43)	-	-	削り	Iガキ	Iガキ	1/4	D-7 d		23-7
45	C-194	土器部 片	(17.8)	4.5	(8.36)	-	-	横ナデ、削り	無色処理	Iガキ	1/3	D-8 a		
46	C-193	土器部 片	(13.9)	(4.8)	(8.34)	-	-	横ナデ、削り、Iガキ	無色処理	Iガキ	1/3	D-8 a		23-8
47	C-219	土器部 片	(12.8)	4.4	(8.34)	-	-	横ナデ、削り、Iガキ、輪郭み底	無色処理	Iガキ	1/3	D-8 a		23-9
48	C-241	土器部 片	(16.7)	-	-	-	-	横ナデ、削り、Iガキ	無色処理	Iガキ	1/4	D-8 a		23-10
49	C-192	土器部 片	(15.4)	-	-	-	-	横ナデ、削り	無色処理	Iガキ	1/4	D-8 a		-
50	C-205	土器部 片	(14.8)	4.0	(8.27)	-	-	横ナデ、削り、Iガキ	Iガキ	Iガキ	1/4	D-8 b		
51	C-199	土器部 片	(16.0)	(3.9)	(8.24)	-	-	横ナデ、削り、巻き上げ底	Iガキ	Iガキ	1/2	D-8 b		23-12
52	C-240	土器部 片	(14.6)	(4.8)	(8.33)	-	-	横ナデ、削り、Iガキ	Iガキ	Iガキ	1/3	D-8 b		23-13
53	C-226	土器部 片	7.9	2.7	8.34	-	-	横ナデ、削り、Iガキ	Iガキ 無色処理	Iガキ	4/5	D-8 b		23-15
54	C-211	土器部 片	(17.0)	(3.2)	(8.19)	-	-	横ナデ、削り	Iガキ 無色処理	Iガキ	1/8	D-9 b		
55	C-246	土器部 片	(16.8)	-	-	-	-	横ナデ、削り	Iガキ 無色処理	Iガキ	1/8	D-9 b		

第217図 SR4河川跡出土遺物(4)



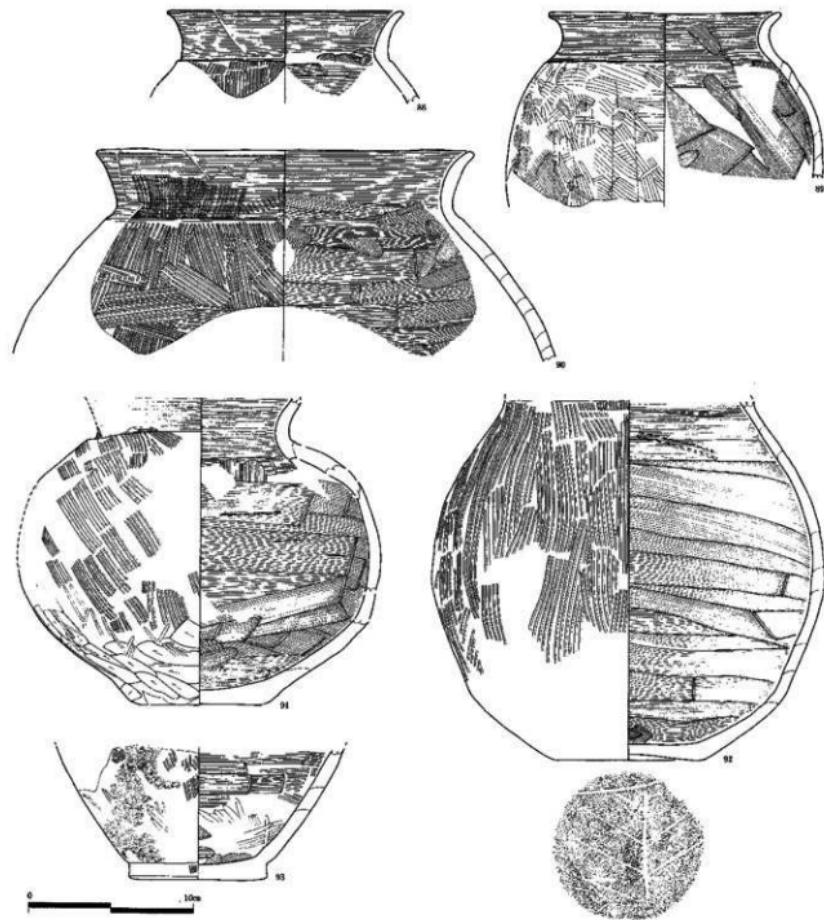
番号	京 関 号	種 別	出土位置	法 番				外 壁 調 整	内 壁 調 整	區 分	分 類	備 考	写真図版
				口 径	径	厚	底 径						
56	C-314	土師器 片		(13.6)	(3.6)	(0.41)	(4.3)	横ナデ、ハケ目、削り 黒處理	横ナデ	1/3	E-1 a		30-1 70-6
57	C-320	土師器 片		(13.2)	-	-	-	横ナデ、削り	ミガキ	(1/16)	E-1 b		
58	C-317	土師器 片		(15.2)	-	-	-	横ナデ、削り、ミガキ 黒處理	ミガキ	(1/16)	E-1 b		30-2
59	C-261	土師器 片		(14.8)	-	-	-	横ナデ、削り 黒處理	横ナデ	(1/16)	E-1 b		
60	C-272	土師器 片		(12.4)	-	-	-	横ナデ、削り 黒處理	横ナデ	(1/8)	E-1 b		
61	C-275	土師器 片	4層	-	-	-	-	横ナデ、削り 黒處理	横ナデ	(1/5)	E-1 b		
62	C-270	土師器 片		(11.0)	(3.4)	(0.31)	(1.8)	横ナデ、削り+ミガキ 黒處理	ミガキ	1/3	E-1 b		30-5
63	C-318	土師器 片		-	-	-	-	横ナデ、削り 黒處理	横ナデ	断片	E-1 b		
64	C-316	土師器 片		(14.6)	-	-	-	横ナデ、削り	横ナデ、ナデ	(1/8)	E-2 a		
65	C-269	土師器 片		12.9	5.0	0.38	3.9	横ナデ、削り、ミガキ 黒處理	ミガキ	4/5	E-2 a		30-7
66	C-218	土師器 片		-	-	-	-	横ナデ、削り 黒處理	横ナデ	断片	E-2 a		
67	C-309	土師器 片	11層	-	-	-	3.7	横ナデ、削り 口-黒色地+縫隙地、底-三色地 黒處理	横ナデ	4/5	E-2 a		30-6 71-1
68	C-311	土師器 片		(9.0)	(3.2)	(0.36)	(1.8)	横ナデ、削り	横ナデ、ミガキ	(1/8)	E-2 b		31-3
69	C-295	土師器 片		(11.4)	(4.6)	(0.46)	(3.6)	横ナデ、削り	横ナデ	(1/8)	E-2 b		
70	C-418	土師器 片	12a層	(13.6)	(3.6)	(0.36)	(3.5)	横ナデ、削り	横ナデ、ミガキ 黒處理	(1/12)	E-2 b		
71	C-271	土師器 片	4層	(12.0)	(3.2)	(0.27)	(2.1)	横ナデ、削り 口-黒處理、底-三色地 黒處理	横ナデ、ヘラナデ	(1/10)	E-2 b		
72	C-306	土師器 片		-	-	-	3.0	横ナデ、削り 黒處理	横ナデ、ミガキ	2/3	E-2 b		30-9
73	C-264	土師器 片	1層	14.1	3.8	0.27	2.4	横ナデ、削り 口縦部のみ黒處理	ミガキ	1/2	E-2 c		31-4 71-6
74	C-417	土師器 片		(12.0)	3.9	(0.33)	2.5	横ナデ、削り 口縦部のみ黒處理	横ナデ、ミガキ 黒處理	1/4	E-2 c		31-5 71-3

第218図 S R 4 沢川跡出土遺物(5)



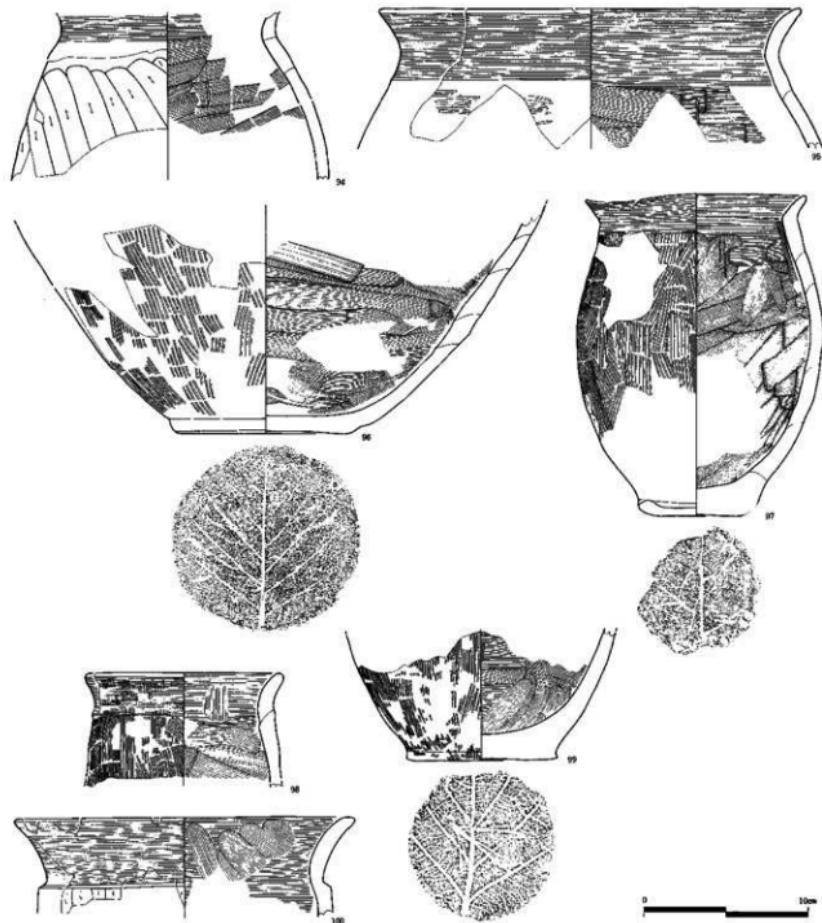
番号	立 葵 号	種 別 形	出土位置	左 右				外 四 面 構		内 四 面 構		残 存 分 類	圖 考	写真図版
				口	径	高	基	底	高	底	高	底		
75	C-233	土器部	16層	13.8	6.0	9.43	5.6	底ナゲ、削り。ミガキ	底ナゲ	4/5	E-4		31-7	
76	C-419	土器部		(14.6)	-	-	-	底ナゲ、削り 口縁部のみ漆處理	底ナゲ	(1/4)	E-5 a			
77	C-287	土器部	6層	(14.4)	-	-	-	底ナゲ、削り 漆處理	底ナゲ	(1/8)	E-5 a			
78	C-288	土器部		(15.8)	-	-	-	底ナゲ 漆處理	底ナゲ	(1/8)	E-5 a			
79	C-296	土器部	7層	15.0	5.9	9.39	2.3	底ナゲ、削り	底ナゲ	2/3	E-6 a		31-9	
80	C-277	土器部		(15.2)	-	-	-	底ナゲ、削り 漆處理	底ナゲ、部分的にミガキ 漆處理	(1/16)	E-6 c		66-3	
81	C-304	土器部	11層	(15.3)	(4.8)	(0.31)	(1.5)	底ナゲ、削り	底ナゲ	1/2	E-6 d		31-10	
82	C-276	土器部	4層	-	-	-	-	底ナゲ、削り 口縁部のみ漆處理	底ナゲ、部分的にミガキ 漆處理	底片	E-6 e		66-5	
83	C-313	土器部		-	-	-	-	削り 漆處理	底ナゲ、底面状ミガキ 漆處理	底片	E-9			
84	C-235	土器部		(11.0)	(3.1)	(0.28)	(1.5)	底ナゲ。ミガキ	底ナゲ 漆處理	(1/8)	P-2 a			
番号	立 葵 号	種 別 形	出土位置	左 右				外 四 面 構		内 四 面 構		残 存 分 類	圖 考	写真図版
				基	高	底	基	高	底	基	高			
85	C-225	高 瓶		-	5.2	9.6	削り	削り	底ナゲ	ミガキ 黑色化皮	4/5	D-1	24-1	
番号	立 葵 号	種 別 形	出土位置	左 右				外 四 面 構		内 四 面 構		残 存 分 類	圖 考	写真図版
				口	径	高	底	部	部	部	部			
86	C-367	土器部		(5.3)	(7.6)	削り		ハチナゲ、削り 底ナゲ	ヘラナゲ	ミガキ	(1/2)	D-3	-孔スカシ	
87	C-227	土器部		(17.0)	-	-	底ナゲ、削り、ミガキ、底端一本	ミガキ 黑色化皮			(1/2)			

第219図 SR 4 河川跡出土遺物(6)



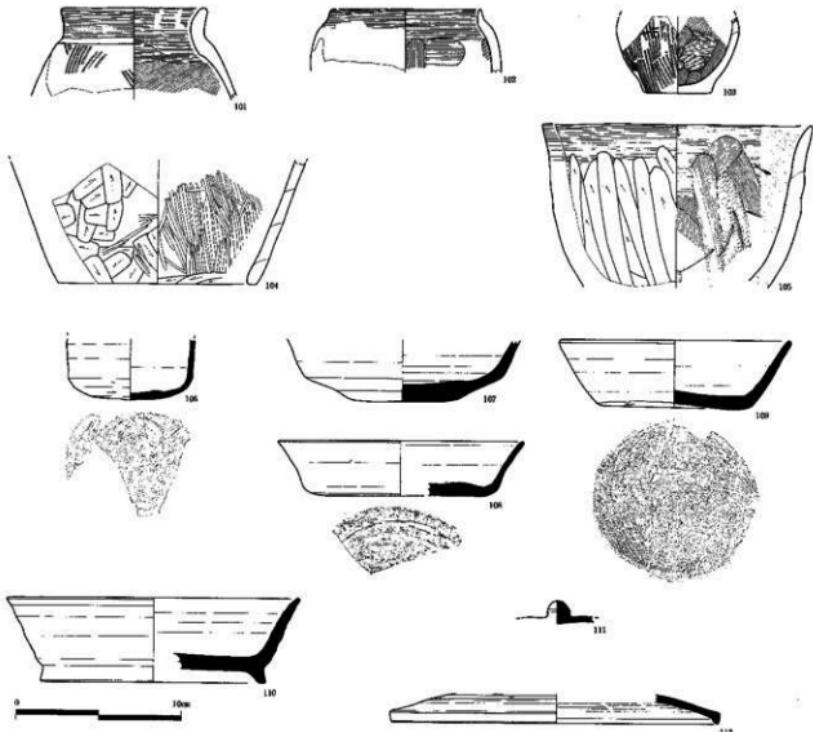
番号	文 様 型	種 類	調 査	出 土 位 置	外 形 (cm)	外 面 調 査	内 面 調 査	推 定	分 類	備 考	写真図版
88 C-344	土師器 型	口	14.3	—	—	横ナゲ、ハケ目	横ナゲ、ナゲ、ヘラナゲ	(1/4)	D-1 a	断面に段	
89 C-369	土師器 型	底	14.0	—	—	横ナゲ、削り、ミガキ	横ナゲ、ヘラナゲ、一部ナゲ	(3/4)	D-1 a	断面V段、体部 最大幅19.2cm	24-9 67-5
90 C-343	土師器 型	底	23.0	—	—	ハケ目、横ナゲ	横ナゲ、ヘラナゲ、ナゲ	(1/4)	D-1 a	断面V段	24-9 67-5 88-5
91 C-378	土師器 型	底	—	7.2	—	横ナゲ、ハケ目、下部削り、ミガキ 底部-削り	横ナゲ、ヘラナゲ、ナゲ、輪模み板	(3/5)	D-1 b	体部最大径約 9.8cm、最大幅 21.8cm	25-4
92 C-379	土師器 型	底	—	8.9	—	ハケ目、底部-木製痕	横ナゲ、ハケ目、ヘラナゲ	1/2	D-1 b	体部最大径約 11.2cm、最大幅 23.8cm	26-2 68-6
93 C-374	土師器 型	底	—	8.5	—	ハケ目、底部-ナゲ、削り	ハケ目、ヘラナゲ、ナゲ、部分的にミ ガキ	(3/5)	D-1 b	外縁に炭化物付 着	25-1 68-3 89-2

第220図 SR 4 河川跡出土遺物(?)



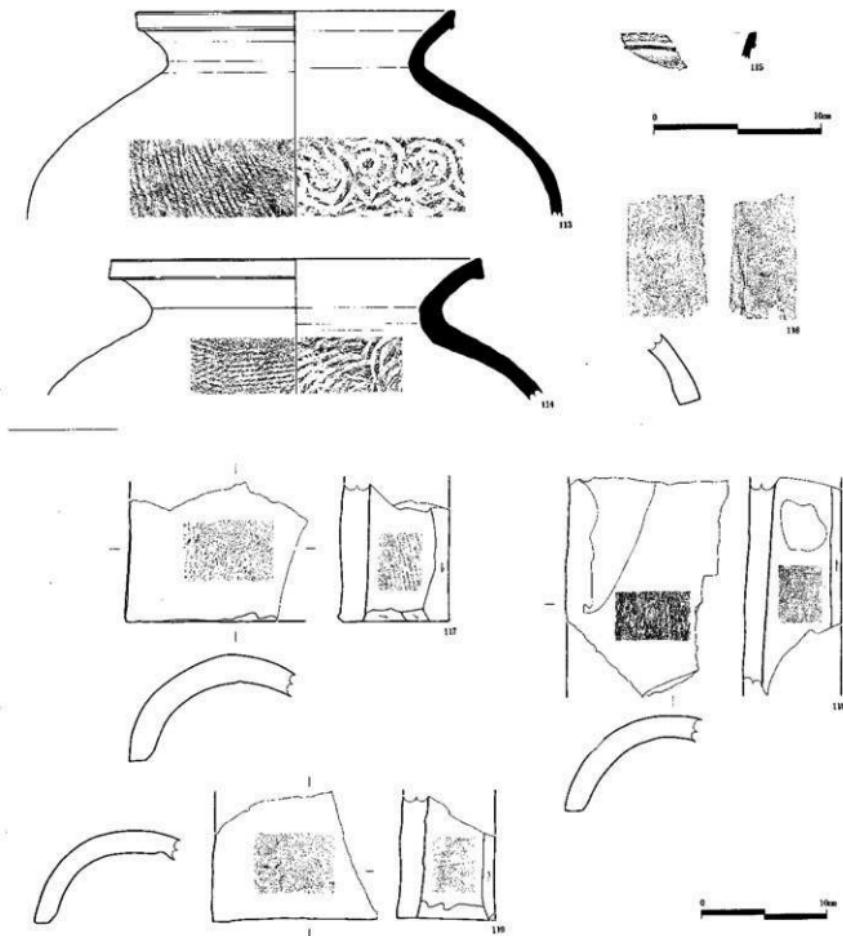
番号	登録号	種別	調査形	出土位置	測定値 [cm]			外観調査	内観調査	残存	分類	備考	写真図版
					口径	底径	厚さ						
94	C-382	小縄目 土器	—	—	—	—	—	表ナゲ、削り	表ナゲ、ヘラナゲ、ナゲ	(2/3)	D-1 b	25-5	
95	C-130	土縄目 土器	(25.4)					表ナゲ、ミガキ	表ナゲ、ヘラナゲ	(1/6)	D-1 b		
96	C-383	土縄目 土器	—	10.2				ハケ目、底部一木葉模	ヘラナゲ、ナゲ	(3/3)	D-1 b	25-6	
97	C-376	土縄目 土器	13.5	7.1	19.75			表ナゲ、ハケ目、下半部は部分的に削り、底部一木葉模	表ナゲ、ヘラナゲ、ナゲ	3/4	D-2	体高最大径位置 11.0cm、最大径 15.1cm	26-7 67-2
98	C-341	土縄目 土器	(12.6)					ハケ目、表ナゲ	表ナゲ、ヘラナゲ、一部ナゲ	(1/4)	D-2	腹部に残	
99	C-384	土縄目 土器	—	9.0	—			ハケ目、底部一木葉模。状態?	ヘラナゲ、ナゲ	(3/3)	D-2		27-6
100	C-347	土縄目 土器	(20.8)	—	—			表ナゲ、削り	表ナゲ、一部ナゲ、ヘラナゲ	(1/6)	D-3 a	腹部に残	28-2

第221図 SR 4 河川跡出土遺物(8)



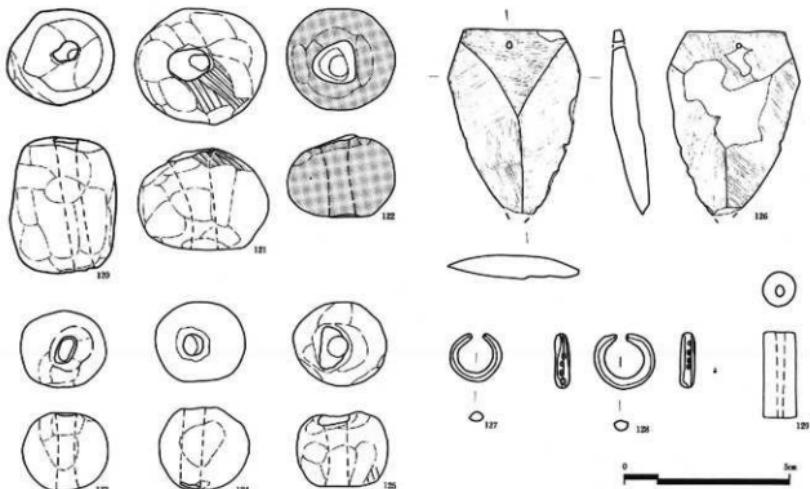
番号	鉢 器 番 号	器 形 態	出土位置	生 長 寸 寸 度 (mm)			外 面 調 査	内 面 調 査	残 存 状 況	分 類	備 考	写真図版	
				口 径	底 径	高 さ							
101	C-354	上縁唇 型		(8.9)	—	—	横ナゲ、ハケ目	横ナゲ、ナゲ	(1/4)	D-1	断面に段		
102	C-351	土師器 型		(9.1)	—	—	横ナゲ	横ナゲ、ナゲ	(1/2)	D-2 b	外面外縁剥離	29-6	
103	C-385	土師器 型		—	4.2	—	ハケ目、底部ナゲ	ナゲ	(1/2)	D-4		29-8	
104	C-350	土師器 型		—	(12.0)	—	割り、ミガキ	ミガキ、下端剥離	(1/7)	D-1 b			
105	C-223	土師器 型		(16.4)	—	—	横ナゲ、斜・割り	横ナゲ、ヘラナゲ、ナゲ 胎色褐色	1/4	D-2		29-4	
番号	鉢 器 番 号	器 形 態	出土位置	生 長 寸 寸 度 (mm)	外 面 調 査	内 面 調 査	残 存 状 況	分 類	備 考	写真図版			
番号	鉢 器 番 号	器 形 態	出土位置	生 長 寸 寸 度 (mm)			外 面 調 査	内 面 調 査	残 存 状 況	分 類	備 考	写真図版	
				口 径	底 径	高 さ							
106	E-6	深腹盤 片		(7.7)	—	(4.9)	ロクロナゲ、底部一回転へラ削り	ロクロナゲ	1/2	I		35-4	
107	E-26	深腹盤 片		—	6.3	—	ロクロナゲ、底部一手持もへラ削 り、切り離し不明	ロクロナゲ	3/5	3		35-5	
108	E-7	深腹盤 片		(15.0)	(10.7)	3.4	0.59	ロクロナゲ、底部一回転へラ削り	ロクロナゲ	(1/5)	4		35-3
109	E-24	深腹盤 片		(14.1)	9.3	4.3	0.66	ロクロナゲ、底部一手持もへラ削 り、切り離し不明	ロクロナゲ	2/3	5		35-2
110	E-30	深腹盤 高台付片		(17.8)	(13.7)	5.2	ロクロナゲ	ロクロナゲ	1/2	2		36-1	
番号	鉢 器 番 号	器 形 態	出土位置	生 長 寸 寸 度 (mm)	外 面 調 査	内 面 調 査	残 存 状 況	分 類	備 考	写真図版			
111	E-27	深腹器 蓋		—	—	—	ロクロナゲ、四軸へラ削り	ロクロナゲ、ナゲ	ツマ1 完 形	1	ツマ1 最大径 1.4cm	36-4	
112	E-8	深腹器 蓋		(19.6)	—	—	ロクロナゲ、四軸へラ削り	ロクロナゲ	(1/12)	3		36-5	

第222図 S R 4 河川跡出土遺物(2)



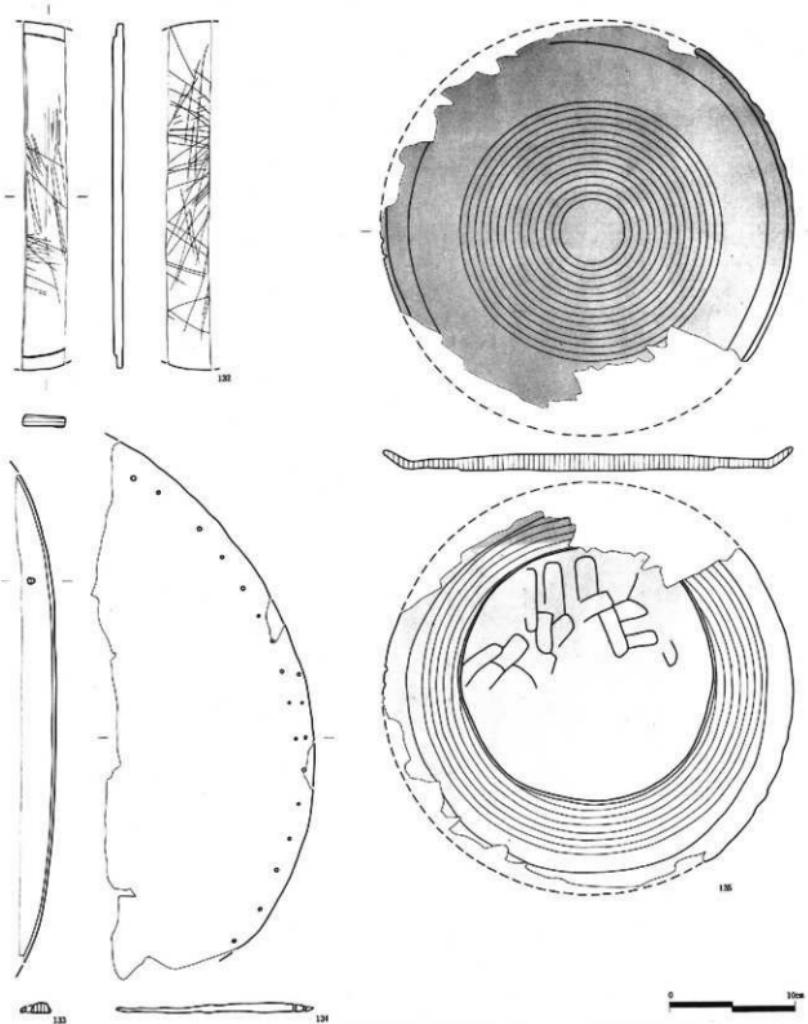
番号	発見場所	種類	形	出土位置	外面調査			内面調査			保存状態	分類	備考	写真図版
					凸	凹	高	面	面	高				
113	E-32	陶器破片	口縁	(19.4)	-	-	-	ヨコナラ、平行印き、ナデ	ヨコナラ、同心円文押え	(2/3)	I	体面最大径 (32.3cm)	36-9	
114	E-5	陶器破片	口縁	(22.4)	-	-	-	ヨコナラ、平行印き	ヨコナラ、同心円文押え	(1/6)	I		36-7	
115	E-31	陶器破片	口縁	-	-	-	-	ヨコナラ、施釉	ヨコナラ	破片	I		37-3	
番号	発見場所	種類	形	出土位置	凸	凹	高	外	内	高	保存状態	分類	写真図版	
116	F-34	瓦	丸瓦		面印き、スリ洗し (ナゲ)			赤切り端、布目質。一張ナゲ、側面と 底面端へ4割り	側面と底面端へ4割り、にぶい褐色				41-5	
117	F-35	瓦	丸瓦		面印き、スリ洗し (ナゲ)、側面へ4割 り			赤切り端、布目質。布目端、一部ナ ゲ側面と底面端へ4割り	側面と底面端へ4割り、にぶい褐色				41-4	
118	F-33	瓦	丸瓦		面印き、スリ洗し			赤切り端、布目質。防上板合せで底板 側面へ4割り	側面へ4割り、にぶい褐色				40-2	
119	F-32	瓦	丸瓦		面印き、スリ洗し (ナゲ)、自然端			布目質、布目じ点、側面へ4割り、底 板側面へ4割り、ナゲ	側面と底面端へ4割り、灰褐色				41-3	

第223図 S R 4 河川跡出土遺物04



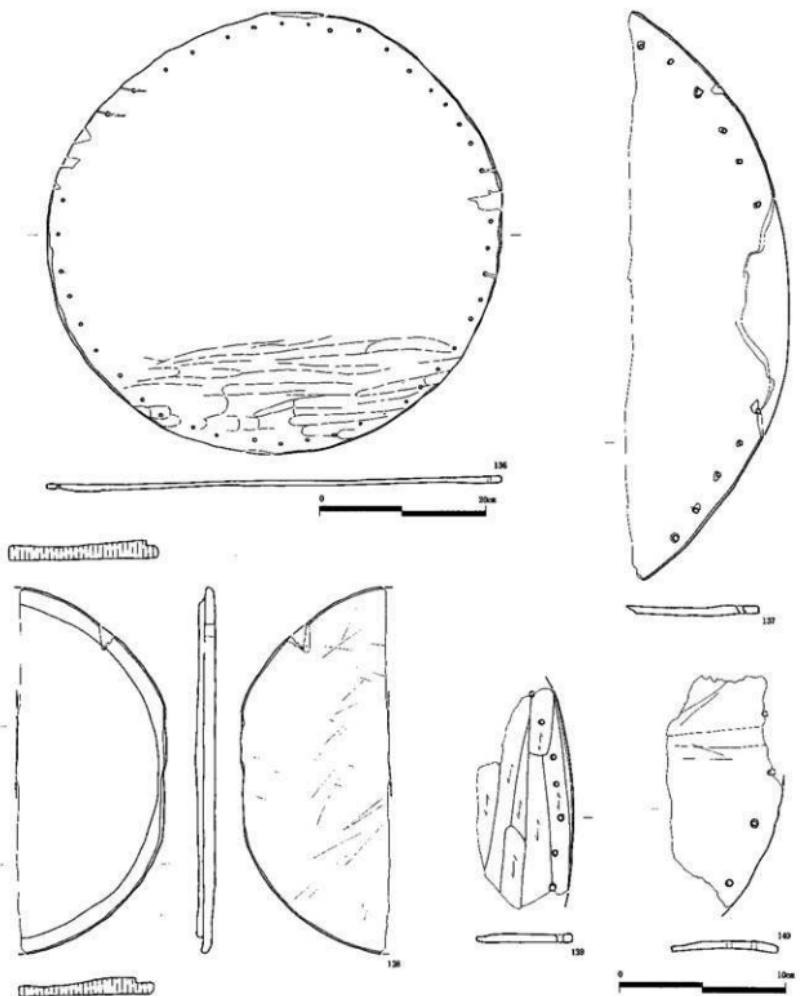
番号	保証 番号	種別 器種	草書	出土位置	法 長 幅 厚 孔 径 重 量 g						分類	既存	備 考	写真図版	
					長	幅	厚	孔 径	孔 深	重 量					
120	P-27	土製品	上 縁		4.2	3.2	0.8	0.8	41.5	1 C	完形	外縫カゲ		43-20	
122	P-28	土製品	器 底											写真図版	
121	P-24	土製品	土玉		3.1	4.9	1.3	0.78		42.5	1	完形	外縫カゲ、一部ハサ目		43-1
122	P-22	土製品	土玉		2.5	3.3	1.0	0.76		27.5	1	完形	外縫カゲ、全面朱塗り		43-8
123	P-23	土製品	土玉		2.4	2.6	0.8	0.94		15.0	1	完形	外縫カゲ		43-6
124	P-25	土製品	土玉		2.5	2.7	0.6	0.93		17.5	1	完形	外縫カゲ		43-5
125	P-26	土製品	土玉		2.3	2.6	1.2	0.94		14.0	1	完形	外縫カゲ		43-10
既 締 目 保 持 器 出 土 位 置															
126	K-5	石 制 器	剣		56.5	40.0	(8.0)	23.0		16.5	完形	全面に鋸歯、先端あり、両面に縫あり、貫通孔(最大孔径1.8mm) 1 所あり。		写真図版	
番号	保 證 番 号	種 別 器 種	草 書	出土位置	法 長 幅 厚 孔 径 重 量 g						既存	備 考	写真図版		
					長	幅	厚	孔 径	孔 深	重 量					
127	N-4	金屬製品	耳環		16.0	15.0	11.0	16.0	3.0	3.5	2.6	完形		写真図版	
128	N-10	金屬製品	耳環		16.0	17.0	12.0	11.0	3.0	3.0	3.3	完形	部分的に銀箔付着。外面に凹点		45-2
既 締 目 保 持 器 出 土 位 置															
129	K-6	石 制 器	管	下	25.5	19.0	1.8-3.0	5.5		完形				写真図版	
既 締 目 保 持 器 出 土 位 置															
130	K-9	石製品	刮削器		2.5	2.7	3.6	0.8		38.0	完形	全面研磨		写真図版	
既 締 目 保 持 器 出 土 位 置															
131	K-13	石製品	敲石		(18.0)	(5.0)	2.2	-		13.5	完形	全面研磨(2面)		写真図版	

第224図 S R 4 河川跡出土遺物(3)



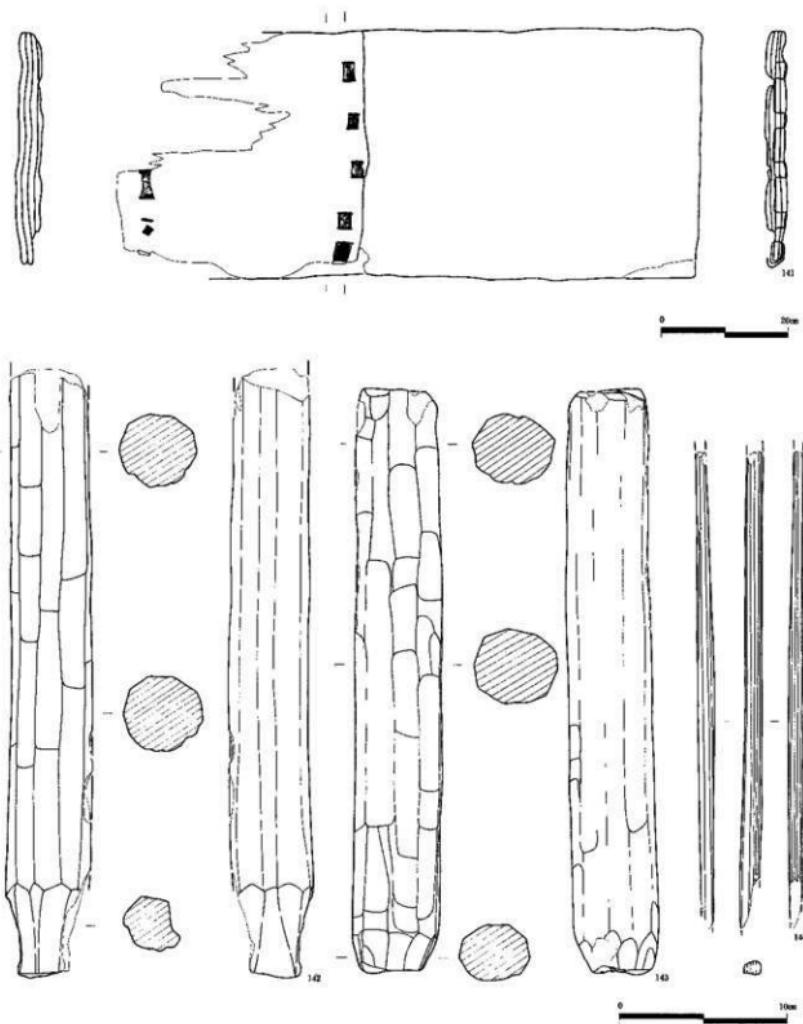
番号	登録番号	材質	寸法	出土位置	固有種	系材	木取り	直径			備考	学芸部
								長さ	幅	厚さ		
132	L-135	木製品	直径 約 (底)	ヒノキ属の一種	板材	板目	板目	(27.9)	(2.4)	0.9	正面の縁辺に複数。正面、背面に傷あり。 両側面欠損。	45-5
133	L-136	木製品 用途不明 木製品	ヒノキ属の一種	板材	板目	板目	板目	(39.3)	(3.4)	0.9	上部に貫通孔(径0.6cm)あり。左側面が欠損。	52-9
134	L-133	木製品 用途不明 木製品	-	-	-	(43.4)	(17.6)	0.8	-	-	側面欠損。縁辺に面って貫通孔(最大径0.4cm)19ヶ あり。約3/4欠損。底定直径56.0cm。	47-4
135	L-132	木製品 盆	タケ	板材	板目	-	-	-	-	1.4	直徑52.8cm。挽き物。両面無漆塗り。裏面台形形 り。底22/3丸孔。	47-1

第225図 S R 4 河川跡出土遺物04



番号	質	解説	基準	出土位置	周 長	基 材	木取り	寸 法			考	写真図版
								底	幅	厚		
130	L-130	木製品	容器(底)		-	-	-	-	-	0.8	樹皮質。全面に加工痕あり。縁辺に沿って貫通孔(最大径0.5cm)4ヶ所あり。直径54.0cm。完形。	47-9
137	L-41	木製品	用途不明	木製品	-	-	(34.8)	(9.9)	0.6		樹皮質。縁辺に沿って貫通孔(最大径0.5cm)6ヶ所あり。直径42.0cm。約4/5欠損。	47-3
138	L-46	木製品	容器(底)	ヒノキ属の一種	板材	板目	22.5	(9.2)	1.2		正面縁辺に斜め。既存部分に桿孔の貫通孔1ヶ所あり。背面に墨跡。既存部完形。	48-1
139	L-67	木製品	用途不明	木製品	-	-	(13.5)	(5.6)	5.5		樹皮質。加工痕あり。貫通孔(最大径0.4cm)2ヶ所あり。凹面と正面削痕欠損。	47-7
140	L-125	木製品	用途不明	木製品	-	-	(14.2)	(7.0)	0.5		樹皮質。縁辺に沿って貫通孔(最大径0.4cm)4ヶ所あり。両端と左側削痕欠損。	47-8

第226図 S R 4 河川跡出土物の図



番号	登録番号	種別	留置場	出土位置	測定値	材質	木取り	断面図			写真図版
								大きさ	幅	厚さ	
141	L-134	木製品 舟形物 (複数)			—	—	延長	(46.5)	20.0	(2.0)	側面輪。とじ皮(複数)が半タケ舟である。左側が殆ど欠損。つぶれている。
142	L-214	木製品 用途不明 木製品 (芯丸)			—	分離材	—	(74.2)	—	—	多角柱。最大径9.6cm。上端と下端の一端欠損。
143	L-218	木製品 用途不明 木製品 (芯丸)			—	分離材	—	71.4	—	—	多角柱。最大径10.5cm。上端の一端誤認化している。
144	L-219	木製品 柄	木製品 柄	木製品 柄	+ (質の一様)	板材	延長	(37.5)	—	—	最大径2.1cm。両端部欠損。

第227図 SR 4 河川跡出土遺物



番号	材種	種別	形態	出土位置	周 長	深 度	本取り	直 径 D	幅 W	厚 S	備 考	李真回譜
145	L-82	木製品	木綿	カツラ屋コウノ屋 裏カツラ屋の一種	分離材 (芯丸り)	—	14.9	8.3	4.5	両側面に抉りあり。	48-7	
146	L-58	木製品	棒	正葉樹(欅丸材)	板材	—	(2.4)	(1.9)	0.6	右側面欠損。齒の先端欠損。	48-5	
147	L-5	木製品	棒	イスノキ葉柄留置	板材	—	3.7	(4.0)	0.9	左側面欠損。齒の先端欠損。	48-4	
148	L-108	木製品	用途不明 木製品	—	—	—	(9.6)	(4.0)	0.8	表面粗。貫通孔(最大径1.7cm) 1ヶあり。上端一部を抜いて接着欠損。	52-7	
149	L-117	木製品	用途不明 木製品	キノキの一種	板材	板目	7.3	6.6	4.2	上端面が無い・切削痕。		
150	L-119	木製品	浮子	ヤツクリ葉留置充填 茎の一種	板材	板目	26.6	3.4	1.8	両端部の両側面に抉りあり。ほぼ完形。	48-9	
151	L-116	木製品	用途不明 木製品	—	板材	板目	(20.6)	2.0	0.6	上端欠損		
152	L-107	木製品	箸	—	板材	板目	(10.9)	0.6	0.4	両端欠損		
153	L-106	木製品	箸	—	板材	板目	(11.2)	0.4	0.4	両端欠損	48-3	
154	L-105	木製品	用途不明 木製品	—	板材	板目	3.8	4.5	0.6	中心付近に貫通孔(径0.3cm) 1ヶあり。完形。	52-6	

第228図 S R 4 河川跡出土遺物

だが、ヒノキ属の一種である。134・136・137・139・140は樹皮製である。141は側板であり、桜皮で縫じられている曲物である。135は直径約33cmのケヤキ製の盆で、表裏面とも黒漆塗りとなっている。

142・143は用途不明。多面取りされて丸棒風に仕上げられており、一端が細くなるように削られている。144がこれらと比べて大変細いが、杓などの柄と思われるもので、この両者も容器の柄とも考えられよう。

145～154は鍤・櫛・浮子・箸、その他用途不明品である。

9. 遺構の年代観

前段で記載した遺構の年代観をつかんでいただくために、V-6の灰像分析の結果を参考のために前記しておきたい。

S I 2 竪穴住居跡	7世紀後半	S K 9 土坑 中世
S I 3 竪穴住居跡	"	S K26土坑 古代（7世紀後半？）
S I 4 竪穴住居跡	"	S K27土坑 中世以降
S I 5 竪穴住居跡	"	S K30土坑 7世紀後半
S I 8 竪穴住居跡	"	
S I 9 竪穴住居跡	"	
S I 10 竪穴住居跡	"	
S I 14 竪穴住居跡	"	
S I 18 竪穴住居跡	"	
S I 25 竪穴住居跡	"	

V 分析・同定

1. 2つの河川跡（SR1、SR2）の地形学的背景

東北大大学理学部 松本 秀明

1. 仙台平野と下飯田遺跡の地形学的位置

(1) 仙台平野と浜堤列

仙台平野は利府町から山元町に至る南北約50kmの臨海沖積平野であり、北から七北田川、名取川、阿武隈川が流下し、地表には自然堤防、浜堤列、後背湿地および旧路などの微地形が明瞭に分布している（第229図）。地下には層厚20~40mの沖積層が堆積しており、沖積層の堆積構造については長谷（1967）、小元ほか（1978）などによって調査されているが、松本（1981）は沖積層を8層に細分し、沖積層の基底の深度は現海岸線直下において最大で-80m（阿武隈川地下の埋没谷）におよぶと考えた。その後、ボーリング資料や¹⁴C年代試料の蓄積とともに、それまで沖積層として区分されていた下部の砂礫層の年代が、26,000yBPあるいは33,000yBPより古いことが求められ、松本（1981）の中部陸成シルト粘土層直下の砂礫層を沖積層の基底とすべきとの修正が加えられている（松本、1986、1988、1994）。

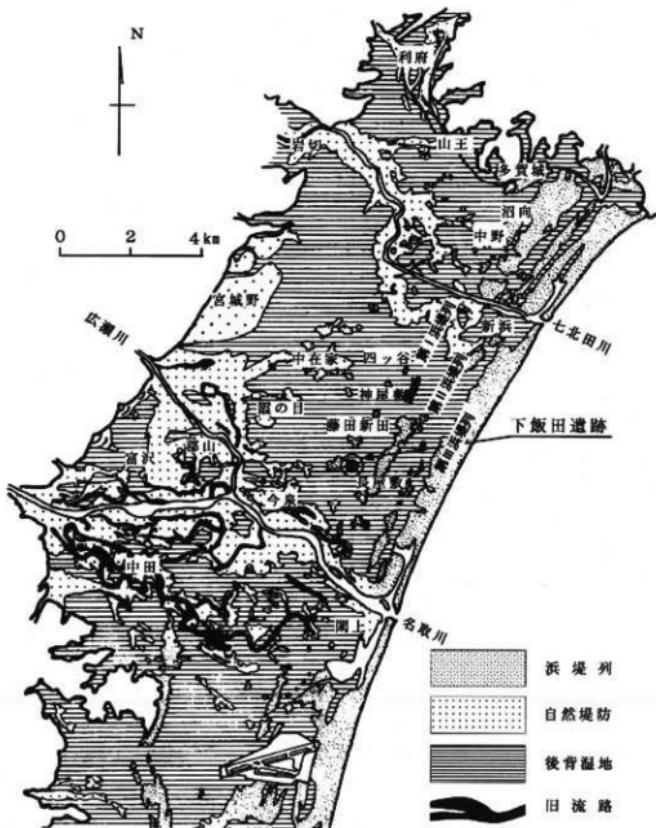
仙台平野の浜堤列は連続性や曲率の違い、堤間湿地の深さなどから現在の海岸線に沿うものを含めて地表では3列に区分されており、内陸側から第I浜堤列、第II浜堤列および第III浜堤列と呼ばれている。仙台平野北部地区においては第I浜堤列は、沼向一中野一四ツ谷一神屋敷一藤田新田一下飯田東部を通過し、第II浜堤列は新浜一笠屋敷一長屋敷一三本塚に連なる。第III浜堤列はほぼ現在の海岸線に沿うものである。いずれの浜堤列も七北田川、名取川の河道付近で分断されており、内陸側のものほど地表での連続性は乏しい。

浜堤列は、約7,000年前以降の沖積平野の拡大期において、汀線堆積物とその上を覆う風成堆積物の堆積高度が時間の経過とともに上下振動することにより形成された地形であることが明らかにされている（松本、1984）。すなわち、地表で確認される各浜堤列は、海岸線の海側への連続的な前進と海面高度の上下微変動とを背景として、海面が相対的に上昇した時期に堆積した海浜堆積物（汀線堆積物と風成堆積物）の頂部が現在の地表で砂堆として確認されている地形と解釈される（第230図参照）。各浜堤列の形成時期である海面の一時的上昇期はそれぞれ5,000yBP（第I浜堤列に相当）、3,100yBP（第I'浜堤列）、2,000yBP（第II浜堤列）および700yBP～現在（第III浜堤列）とされている。

仙台湾岸の沖積平野において得られた年代試料およびその産出高度から求められた過去6,000年間の連続的な海面微変動は第231図（松本、1994）に示す通りである。すなわち、①約6,000年前の海水準は-3m付近（現海面を0mとする）にあり、その後上昇速度をゆるめながら約4,500年前には最終氷期最盛期以降最高の+1mに達した。②4,500年前以後、海面はやや急速に低下し、約3,700年前には-4m付近に到達したが、海面は再び上昇に転じ約3,100年前には-1m付近に達した。③さらにその後は約2,500年前にかけて海面は低下に転じ、-2mまで落ち込んだ後、3度目の上昇期を迎える約1,800年前には-1m前後の高度に達した。④その後、海面は低下傾向に転じ約1,000年前に-2m以下に下がった後、最終的には現在の高度に到達している。

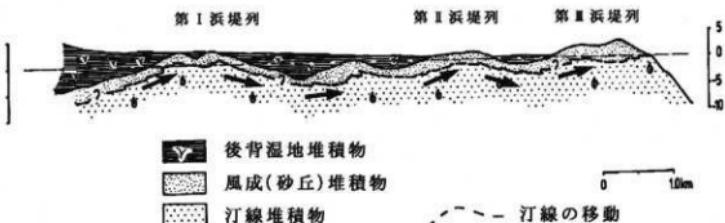
(2) 下飯田遺跡の地形学的位置

下飯田遺跡は仙台平野北部、名取川左岸に位置し、仙台平野に分布する3列の浜堤列のうち、もっとも内陸側に認められる第I浜堤列の海側の斜面上に位置する（第229図）。第I浜堤列は現在の海岸線から約3km地点を通過し、北北東一南南西に延びており、約5,000年～4,500年前の高海水準期に形成された海浜の砂堆である。下飯田遺跡の地表面付近には小規模砂丘を構成する風成の細粒砂質堆積物が確認され、地表面下約2mの海拔0.1m以下には浜

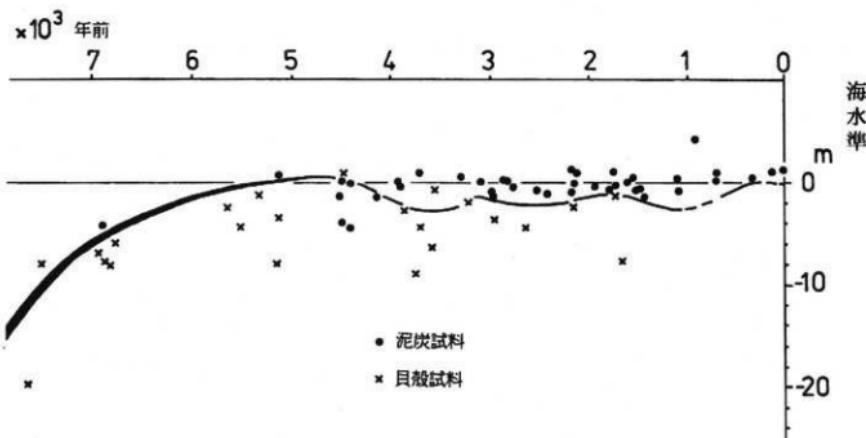


第229図 仙台平野北部地区の地形と下飯田遺跡の位置
(松本 1984による)

堤の核ともいえる汀線の粗粒砂質堆積物が確認される。また海側の第Ⅱ浜堤列上に相当する長屋敷の集落までは約700mの距離があり、その間の地帶は低湿な後背湿地となっている。第Ⅰ浜堤列は、形成後、周辺部分から後背湿地を構成する堆積物により徐々に覆われ現在の地表面では敷高地としての性格は失われているが、形成時およびその後のしばらくの期間は周囲の湿地帯よりも地盤が高く、沖積低地の中にあって比較的乾燥した土地を提供していたと考えられる。



第230図 浜堤列形成の模式図
海水準の変動を背景に汀線位置が前進している



第231図 仙台湾岸の沖積層から求められた完新世後期の海面変動

2. 2つの河川跡

下飯田遺跡およびその周辺には、幅30m前後の河川跡が幾つか認められている。いずれの河川跡も、地表面から河底までの深度は2m前後であり、主に粘土分を多く含むやや分解した泥炭質層によって埋積されており、調査区域の西方（上流側）および東方（下流側）に明瞭に追跡される（第232図）。ここではSR2およびSR1の河川跡についての調査結果について報告する。

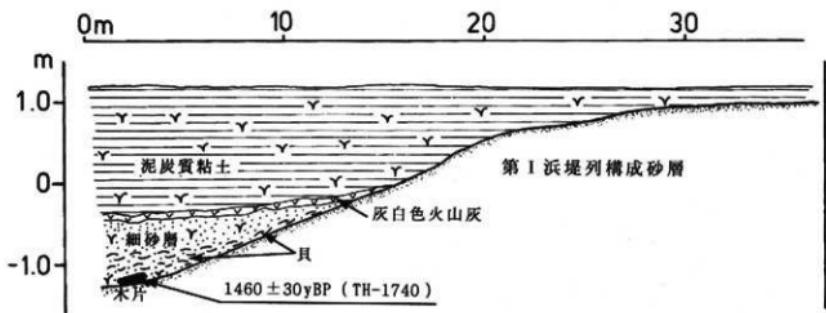
(1) SR2

SR2は調査区域の北東端を西北西から東北東へ通過する河川跡である。調査区においては河川跡の右岸側が確認されるのみであるが、ハンドオーガーによる試掘によると幅約40mにおよぶ河川が西方から流下し東へ通過しているのが分かる。河川跡は第I浜堤列を構成する砂層を下刻して形成されている。河底付近の-1.0～-0.75m

a.s.l.（現海面を基準とした高度）にはマシジミの貝殻を含んだ細粒砂層が堆積しており、貝殻を含む層は当時の地表面に沿って右岸側に海拔高度を増している。貝殻層の直下の河底にある砂層からは木片が採取され、その¹⁴C年代は $1,460 \pm 30$ yBP (TH-1740) である（第233図）。このことから、河川の最下刻期は、約1,500年前であったと考えられる。したがって、この河川跡は第I浜堤列が形成された約5,000～4,500年前以後のある時期から約1,500年前にかけて下刻・形成されたもので、河底面は-1.25m a.s.l.付近まで低下していたものと考えられる。



第232図 2つの河川跡



第233図 SR2 の東壁断面図

1,500年前以降はしだいに中粒砂により埋積が開始され、-0.5m a.s.l. 付近からは泥炭層による埋積へと変化している。さらに、-0.25～-0.30m a.s.l. 付近には特徴的に灰白色火山灰 (To-a) が3～5cmの厚さでほぼ水平に堆積している。

これらの状況から、それ以前のある時期から約1,500年前にかけて海面が低下し、その後は海面は上昇傾向に転じ、河川跡の埋積が進んだものと考えられる。埋積の初期には流水があったと考えられるが、次第に水の流れは停滞し、泥炭質粘土を堆積させながらゆっくりと埋積が進行したものと考えられる。

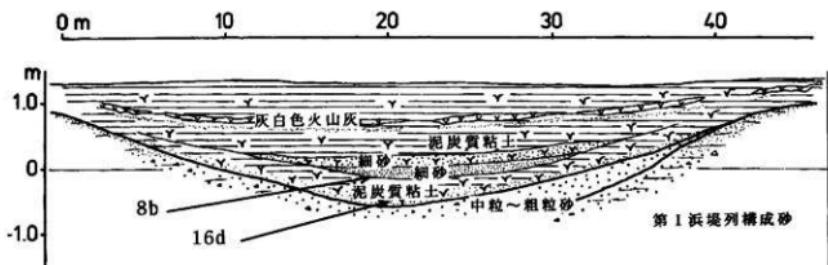
(2) SR 1

SR 1は、調査区域の南側に位置し、ほぼ東西方向に延びた河川跡である。調査区の西側壁面において谷幅は約40mであり、第I浜堤列を構成する砂層を下刻し地表面から河底までは約2mである。河底の高度は-0.8m a.s.l. 付近にある（第234図）。河川跡を埋積しているのは泥炭を多量に含む粘土質堆積物であるが、一部には細砂層および中粒砂層がレンズ状に薄く堆積している。また河川跡の中央付近で+0.7m a.s.l.、両岸部で+1.0～1.2m a.s.l. には灰白色火山灰 (To-a) が3～5cmの厚さで連続して堆積している。河川跡を埋積した堆積物中から弥生時代の遺物（16d層）、および7世紀後半の遺物（8b層）が出土している。この河川跡断面において、河底は二重構造を示している。すなわち、はじめに第I浜堤列を下刻して、16d層を河底とする弥生時代の河川が形成され、それが泥炭質粘土層によりゆっくりと埋積された。その後に再び泥炭質粘土層が削り取られ、細粒砂層や中粒砂層を河底に堆積させた7世紀後半の2つ目の河川が成立しているようである。これら2期の河川跡をそれぞれ下位の河川跡、上位の河川跡とすれば、上位の河川跡の成立年代は、SR 2（第233図参照）で得られた年代試料の年代値1,500yBPと時代的にもほぼ一致している。

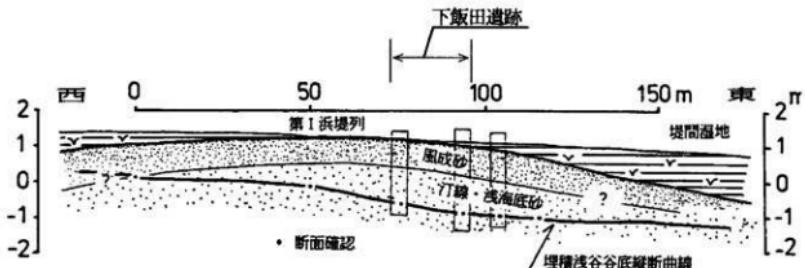
SR 1の下位の河川跡を上流側と下流側に追跡した河道の縦断面形は第235図に示した通りであり、計測を行った上流端で-0.1m a.s.l.、下流端で-1.0m a.s.l. の高度を示し、勾配は7.8/1,000である。この勾配は冲積平野を流れる河川としては極めて急勾配である。このことから、河川跡SR 1については、当時第I浜堤列の海側に広がっていたと考えられる潟湖から延びる瀬筋（Tidal channel）に連続する広く浅い感潮河川ではないかと考えている。

3. 2つの河川跡と完新世後期の海面高度

前述のように、仙台湾岸の沖積平野において产出された年代資料をもとに、完新世後期（5～6,000年前以降現在まで）の海面変動が求められている（松本、1994）。河川跡はいずれも河底が-1.0m a.s.l. 以下に達しており、また、これらの河水面は海面高度の指標となる潟湖の水面に連続していた可能性が高い。第I浜堤列を2度にわたり下刻した河川跡の成因を海面高度の一時的な低下と関連づけて考えるとすれば、SR 1の下位の河



第234図 SR 1の西壁断面図



第235図 SR1の下位河川跡の河床縦断

川跡は約2千数百年前の海面の低下（第231図参照）により下刻・形成された河川であり、SR1の上位の河川跡およびSR2の河川跡は約1,700年前以降の海面の低下期に下刻・形成された河川と考えて時期的な矛盾はない。

このような考え方方に立つと、①SR1の下位の河川跡が形成された弥生の時代（ここでは2,700～2,000年前）には海面が低下し、海岸線の位置も沖合へ移動し、下飯田遺跡の東方に存在したと考えられる潟湖はかなり縮小・乾燥化していた。②それに引き続く時期には海面は上昇傾向に転じ、潟湖やその周囲の湿地帯が拡大し、約2,000年前～1,700年前にかけて第Ⅱ浜堤列が形成され、同時にSR1の下位の河川跡は埋積された。③さらに、約1,700年前頃からは海面が再び低下し、SR1の上位の河川跡およびSR2の河川跡が形成され、東方の潟湖や湿地帯は縮小・乾燥化していた。④そして、その後約1,500年前頃から海面は再び上昇しSR1の上位の河川跡およびSR2の河川跡が埋積され現在に至るものと考えられる。

仙台平野北部では、現在いくつかの考古学上の発掘調査が行われており、その多くの発掘調査において河川跡が発見されている。これらの河川跡の形成と過去の海面高度の変化とを結びつけて考えて行くことにより、仙台平野の全域にわたる面的な地形環境変化の復元を行うことが可能であり、沖積低地の河川跡の存在は今後注意深く追跡して行く必要があると考えている。

注) 第Ⅰ'浜堤列は下飯田遺跡付近では確認されていない。しかし、仙台平野南部をはじめ、石巻平野臨海部や秋田県八郎潟南部平野ではその存在が明確に認められている（松本、1984）。

文献

- 小元・大内（1978）：仙台平野の完新世海水準変化に関する資料。地理学評論。51. 158-175.
- 長谷弘太郎（1967）：宮城県沖積平野の地質学的研究。東北大地古邦報。64. 1-37
- 松本 秀明（1981）：仙台平野の沖積層と後水期における海岸線の変化。地理学評論。54. 72-85
- （1984）：海岸平野に見られる浜堤列と完新世後期の海水準微変動。地理学評論。57A. 720-738.
- （1986）：仙台平野の地下に認められる埋没段丘と沖積層。岩手大学文化論集。第2輯。89-100.
- （1988）：仙台平野における沖積層基底の形態－埋没緩急と基底をなす砂礫層の分布・年代－。昭和61-62年度科学研究費補助金研究成果報告書
代表 井関弘太郎 53-58.
- （1994）：仙台市史特別編「自然」。仙台市史刊行委員会編 264-277

2-1. 下飯田遺跡の花粉分析（4区SR1河川跡）

東北大大学理学部 守田 益宗

はじめに

下飯田遺跡は、仙台市若林区下飯田および三本塙地内の名取川によって形成された仙台平野の浜堤上に位置している。発掘調査の結果、古墳時代後期～奈良時代にかけての集落跡や3条の河川跡が見つかっており、4区河川跡の最下部からは弥生式土器片が出土している。また、10世紀前半に降下したとされる“灰白色火山灰”（山田・庄子1981、山田・井上1990）も検出されている。

本報告では、上記4区河川跡の堆積物の花粉分析結果をもとに遺跡周辺の植生や堆積環境の変化などについて考察を加えた。

試料および方法

花粉分析用試料は、基本層の1～16d層より計35試料を採取した。特に、16dの砂層から15dの粘土層にかけては堆積物が漸移的に変化するため採取間隔を短くした。

試料の処置法、花粉・胞子の同定および出現率の算出は、これまでの報告と同様にして行なった（例えば、守田1988など）。

結果および考察

各試料について検出された花粉・胞子を第41表に示し、主要な花粉・胞子の消長を第236図に示す。主な花粉・胞子の消長から、下部より次のI～IVの各時代を区別できる。

I時代（試料No.35～28）

Quercus（コナラ属）は35～40%前後の出現率で最優勢を示し、*Fagus*（ブナ属）、*Carpinus*（アカシデ属）がこれに次いで多く、*Cyclobalanopsis*（アカガシ属）も比較的多く出現する。*Pinus*（マツ属）、*Cryptomeria*（スギ属）などの針葉樹の花粉の出現率は低い。現生から判断して *Quercus* はミズナラとコナラから主に由来したと考えられる。これらは、いずれも自然林を何度も伐採した後にできる二次林を形成する樹種である。しかし、ミズナラは古い時代には自然林を形成していたと考えられている（日比野1983）。*Fagus* は山地帯に生育するブナと丘陵帯のイヌブナから由来したと考えられる。*Carpinus* は大部分がアカシデからであり、一部はイヌシデ、サワシバなどであろう。*Cyclobalanopsis* はアカラシ、ウラジロガシ、*Pinus* はアカマツ、クロマツ、*Cryptomeria* はスギである。これらは、海岸付近にも生育するアカマツ、クロマツを除き、いずれも丘陵以上で見られる植物であることから、ここで示された花粉組成は主に丘陵以上の植生を反映したものと考えてよいであろう。当時はナラ類を主とし、イヌブナ、アカシデなどからなる落葉樹林が繁茂していたと言える。しかし、ミズナラの自然林や二次林がどの程度の広がりをもっていたかは、今回の結果からは判断できない。*Cyclobalanopsis* は本時代の出現率が最も高い。しかし、筆者の知る限りでは、過去には食料源として、あるいは、材として重要なカシ類の堅果や材が宮城県からは報告がない。また、より丘陵部に近い富沢遺跡の同時代の分析結果では増加傾向が認められず（守田1987）、過去に現在よりもカシ類が多く生育していたかどうか疑わしい。なお、浜堤上に林があったとすれば、花粉出現率から判断してナラ類の可能性が高い。（ハンノキ亜属）

Alnus（ハンノキ亜属）をはじめ低木花粉は、本時代を含め全試料を通じて極めて低率である。平野部の湿地林として重要なハンノキ林は、本地点付近では今まで発達しなかったと判断される。

草本花粉ではGramineae（イネ科）の野生型（WildType）と *Artemisia*（ヨモギ属）が大部分を占め、Cyperaceae（カヤツリグサ科）は比較的低率である。*Myriophyllum*（フサモ属）もわずかではあるが連続的に出

現する。また、試料No.32では海水中に生育する藻類の仲間である Dinoflagellata (渦鞭毛藻類) が検出されていることから、海水の影響を受ける環境下にあったと推定される。しかし、海成堆積物では草本花粉が極めて低率なのが一般的であることから、汽水であったと考えられる。こうしたことから、水域にはキンギョモガ、水ぎわや湿地にはヨシなどが、浜堤の乾いた場所にはヨモギ属を主とする植生が存在していたと推定される。

II時代（試料No.27～17）

Pinus および *Cryptomeria* がやや増加することで特徴づけられる。*Pinus* の増加の原因は、海岸付近のアカマツやクロマツが増加したか、あるいは、丘陵地の植生に人手が加わったことによるアカマツ二次林の増加が考えられる。スギは、東北地方の日本海側では約3,000～2,500年前から増加するが（川村1977）、宮城県内ではスギの自生地は限られており、この時代に植林も考え難いことから、*Cryptomeria* は遠距離から飛来した花粉が原因であろう。

草本花粉では Gramineae の野生型や *Artemisia* が減少して、Cyperaceae が高率を占めるようになりカヤツリグサ科の湿地が広がったことを物語る。小生植物は種類も多く、その出現が目立つようになる。海水の影響は認められなくなり、*Nuphar* (コウホネ属)、*Nymphaea* (ヒツジグサ属)、*Trapa* (ヒシ属)、*Salvinia* (サンショウウオ属) など浮葉植物が検出されることから停滯した水域が広がっていたと見られる。なお、粗砂を所々に挟むことは、しばしば洪水による土砂の供給があったことを物語っている。

III時代（試料No.16～3）

Fagus が増加するとともに、相対的に *Quercus* が減少することで特徴づけられる。本時代の始まりは8b層より出土した土器片より7世紀末～8世紀初めとみられ、終末は近世と考えられる。また、試料No.8は“灰白色火山灰（10世紀前半）”層からのものであるが、花粉・胞子をかなり含むことから二次堆積の可能性がある。

この時代はすでに指摘したように（守田1991）、以下のように考えるのが妥当である。他の樹種より伐採に弱いとされるブナ属がこの時代に実際に増加したとは考え難いことから、丘陵部の植生に人手が加わったものの、アカマツ試料No.12、13でみられる *Oryza* 型は、遺跡周辺部からもたらされたものであろう。本地点で水田耕作が行なわれるようになったのは試料No.6の時代以降である。

なお、*Menyanthes* (ミツガシワ属) が散発的ではあるが検出され注目される。ミツガシワは、宮城県では山地帯以高の湿地や水辺に生育する植物として知られているが、過去には平野部にも普通に生育していたのである。

IV時代（試料No.2～1）

現在の耕作土である。*Pinus*、*Cryptomeria* が急増し、*Fagus*、*Quercus* をはじめとする落葉樹の花粉は減少して低率となる。

丘陵部以上の植生に対する人間活動が強くなってしまってはやナラ類の二次林も維持できなくなり、アカマツの二次林や植林、スギの植林が増加した結果と言える。アカマツ二次林の急増期は約1,500年前で、西日本ではこれより古く、東日本では新しいことが知られているが（安田1980）、仙台付近ではかなり新しい時代（近世以後？）の出来事であったと言える。

草本花粉では *Oryza* 型がさらに高率となる。これは、稻作の集約化の結果と考えられる。

引用文献

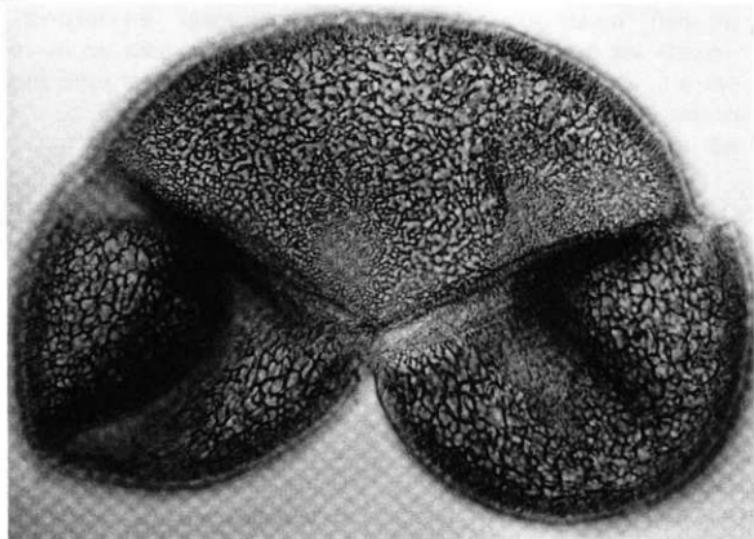
- 日比野龍一郎 (1983) 泉市の18000B.P.以降の植生変遷. 泉の自然調査報告. 泉市教育委員会. 20-27
川村 智子 (1977) スギ (*Cryptomeria japonica*) の分布に関する花粉分析的研究 (I. 秋田県). 花粉.
11: 8-20
守田 益宗 (1987) 富沢遺跡の花粉分析的研究. 富沢遺跡第15次発掘調査報告書. 仙台市教育委員会. 439-460
守田 益宗 (1988) 富沢遺跡(第28次調査)の花粉分析. 富沢遺跡第28次発掘調査報告書.

- 守田 益宗 (1991) 富沢遺跡 (第30次調査) の花粉分析、富沢遺跡 (第30次調査) -近世・繩文時代編-
- 山田 一郎・庄子 貞雄 (1981) 宮城県に分布する新期の灰白色火山灰について、土肥誌、52: 155-158
- 山田 一郎・井上 克弘 (1990) 東北地方を覆う古代の珪長質テフラ“十和田一大湯浮石”の同定、第四紀研究、29: 121-130.
- 安田 喜憲 (1980) 環境考古学事始、NHKブックス、日本放送出版協会、270pp.

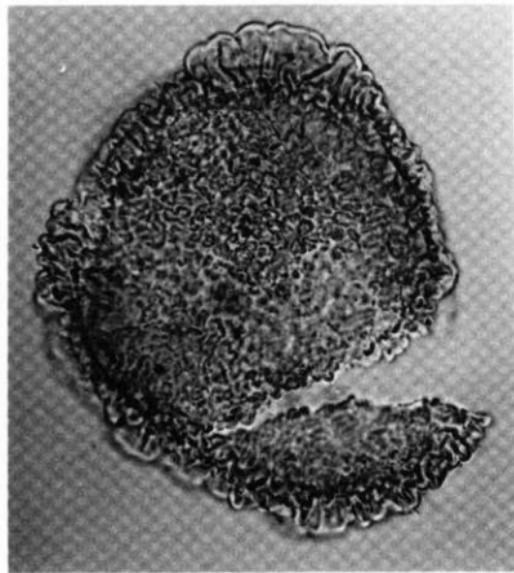
写真図版 (1~5) 説明

- | | |
|------------------------------------|--|
| 1. <i>Abies</i> , №14 | 32. <i>Vicia</i> , №3 |
| 2. <i>Tsuga</i> , №26 | 33. <i>Lythrum</i> , №6 |
| 3. <i>Juglans</i> , №7 | 34. <i>Rotala</i> , №2 |
| 4. <i>Pterocarya</i> , №5 | 35. <i>Trapa</i> , №18 |
| 5. <i>Pinus</i> , №22 | 36. <i>Nelumbo</i> , №13 |
| 6. <i>Cryptomeria</i> , №22 | 37. <i>Epilobium</i> , №23 |
| 7. <i>Salix</i> , №13 | 38. <i>Umbelliferae</i> , №4 |
| 8. <i>Fagus</i> , №22 | 39. <i>Myriophyllum</i> , №20 |
| 9. <i>Quercus</i> , №22 | 40. <i>Actinostemma</i> , №4 |
| 10. <i>Cyclobalanopsis</i> , №2 | 41. <i>Carduoideae</i> , №23 |
| 11. <i>Castanea</i> , №2 | 42. <i>Artemisia</i> , №13 |
| 12. <i>Celtis-Aphananthe</i> , №27 | 43. <i>Menyanthes</i> , №3 |
| 13. <i>Ulmus-Zelkova</i> , №13 | 44. <i>Uticularia</i> , №21 |
| 14. <i>Alnus</i> , №1 | 45. 1-lete type FS, №17 |
| 15. <i>Alnaster</i> , №2 | 46. <i>Salvinia</i> , №1 |
| 16. <i>Carpinus</i> , №13 | 47. Gramineae (Wild type), №2 |
| 17. <i>Corylus</i> , №14 | 48. 同上、位相差像 |
| 18. <i>Betula</i> , №6 | 49. Gramineae (Wild type), №22 |
| 19. <i>Acer</i> , №13 | 50. 同上、位相差像 |
| 20. <i>Aesculus</i> , №13 | 51. Gramineae (Wild type), №7 |
| 21. Iridaceae, №6 | 52. 同上、位相差像 |
| 22. <i>Alisma</i> , №3 | 53. Gramineae (<i>Oryza Type</i>), №2 |
| 23. <i>Sagittaria</i> , №3 | 54. 同上、位相差像 |
| 24. <i>Monochoria</i> , №3 | 55. Gramineae (<i>Oryza type</i>), №22 |
| 25. Cyperaceae, №1 | 56. 同上、位相差像 |
| 26. <i>Typha</i> , №13 | 57. Dinoflagellate, №32 |
| 27. <i>Fagopyrum</i> , №6 | 渦鞭毛藻類 |
| 28. <i>Persicaria</i> , №22 | |
| 29. <i>Rumex</i> , №5 | |
| 30. Caryophyllaceae, №1 | |
| 31. Cruciferae, №1 | |

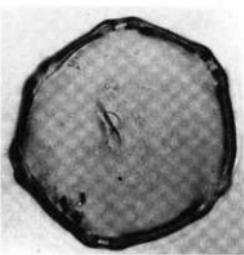
写真図版 I



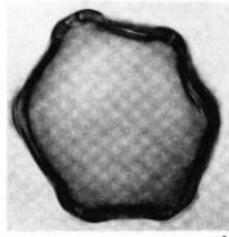
1



2

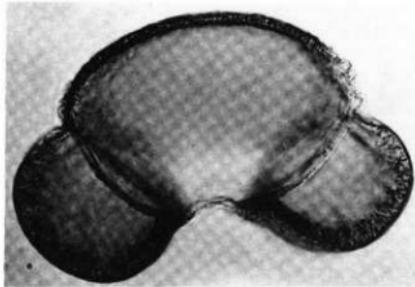


3

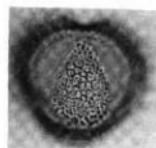


4

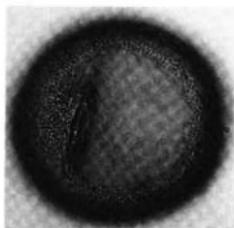
写真図版 2



6



7



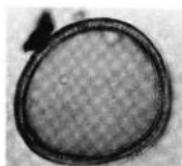
8



10



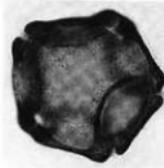
11



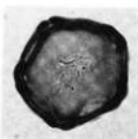
12



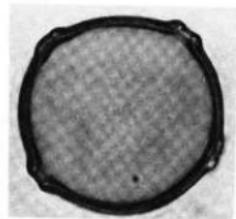
13



14



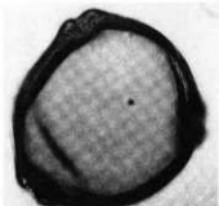
15



16



17



18

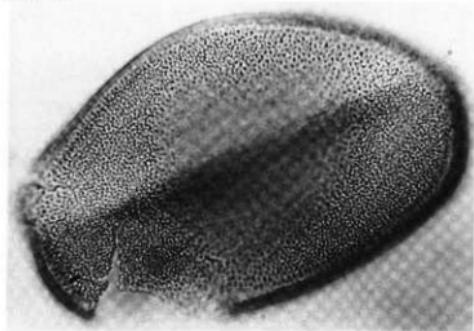


19

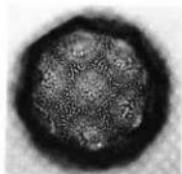


20

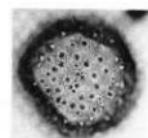
写真図版 3



21



22



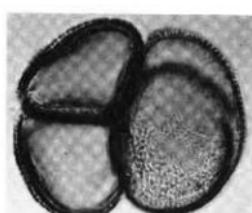
23



24



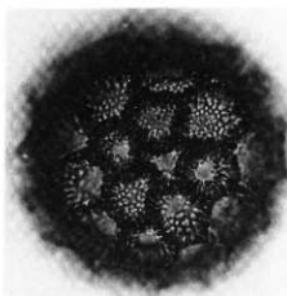
25



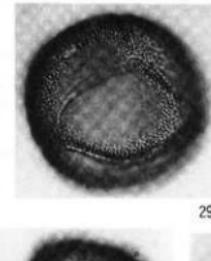
26



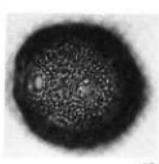
27



28



29



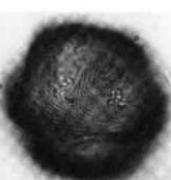
30



31



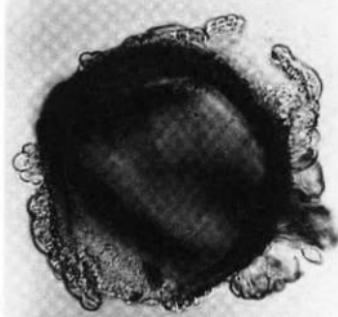
32



33

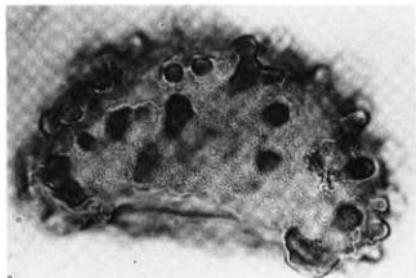
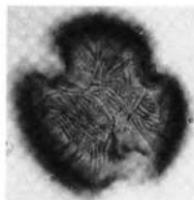
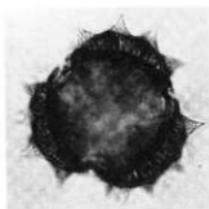
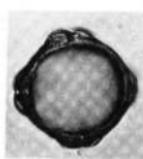
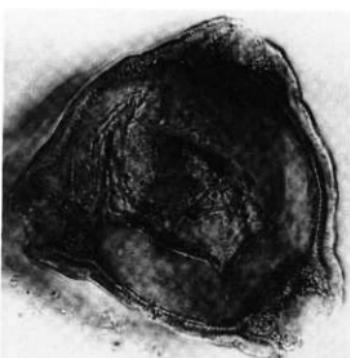


34

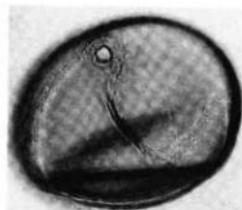


35

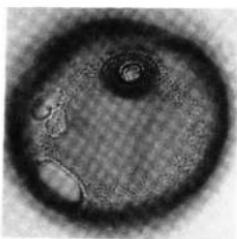
写真図版4



写真図版 5



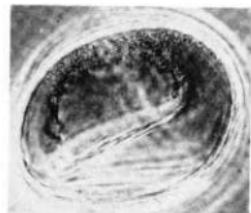
47



49



51



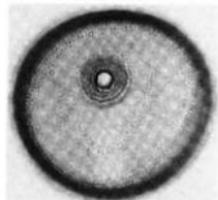
48



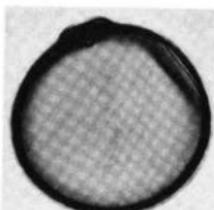
50



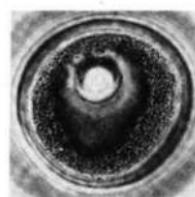
52



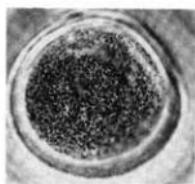
53



55

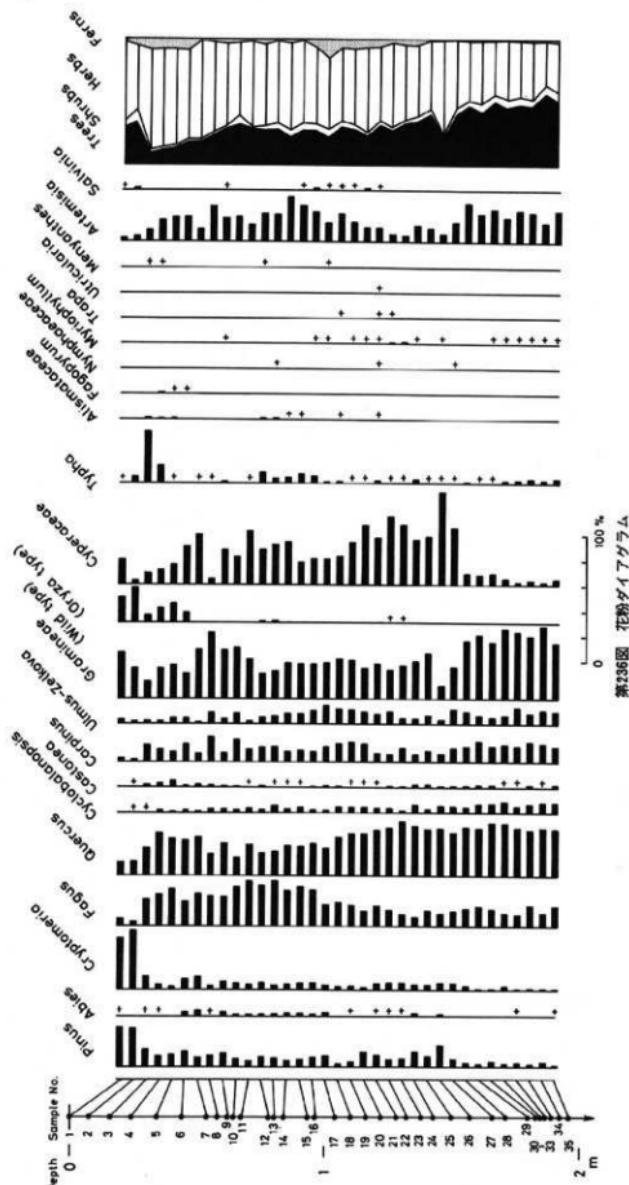


54



56

57



第41表 花粉・胞子出現表

	No. 1	No. 2	No. 3	No. 4	No. 5	No. 6
<i>Pinus</i>	ツノ風	71	74	31	17	19
<i>Aster</i>	セイヨウ	1	2	2	1	5
<i>Ficus</i>	トウヒ風			1		1
<i>Tsuga</i>	シカ風		1			
<i>Cryptomeria</i>	スギ風	96	119	25	12	9
<i>Sciodipterix</i>	セイヨウキナリ					
<i>Tridacne</i>	トリダクネ	1		3	4	8
<i>Phragmites</i>	ハラグミ	1		2		2
<i>Juglans</i>	クルミ風	3	1	1	2	2
<i>Betula</i>	カバノキ風	4	1	10	5	4
<i>Carpinus</i>	カシノキ風	7	8	21	21	13
<i>Zelkova</i>	シカツノキ風	14	11	53	69	47
<i>Quercus</i>	コナラ風	26	30	55	77	65
<i>Cyclobalanopsis</i>	アカガシ風	2	2	5	3	4
<i>Castanea</i>	タリ風	2	6	7	12	3
<i>Ulmus</i> — <i>Zelkova</i>	ニレ風—ケヤキ風	11	5	8	7	13
<i>Celtis Aphanantha</i>	カシラ風	1				
<i>Ceratopeltidium</i>	カシラ風					
<i>Acer</i>	カエデ風	1	6			
<i>Aesculus</i>	トチノキ風					
<i>Tilia</i>	シナノキ風					
<i>Salix</i>	ヤナギ風					
<i>Corylus</i>	ハンノキ風	4	2	10	18	14
<i>Alnus</i>	ハンノキ風	31	55	23	12	9
<i>Alnaster</i>	ヤマシキシ面風	6	8	21	2	10
<i>Fraxinus</i>	カツラ風					1
<i>Phellodendron</i>	ヤハズ風					
<i>Orixa</i>	ロクサギ風					
<i>Ilex</i>	モガシノキ風					
<i>Rhus</i>	モガシノキ風					
<i>Hedera helix</i>	シタ風					
<i>Vitis</i>	ブドウ風	1				
<i>Cornus</i>	イズヤ風					
<i>Araliaceae</i>	ウコギ科					
<i>Eriocaulaceae</i>	エリコウム科					
<i>Drimia</i>	トネリコ風	2	7	3		2
<i>Lomatostylis</i>	イボタノキ風				1	
<i>Viburnum</i>	ガマズイ風					
<i>Gramineae</i>	イネ科	322	254	465	573	606
<i>Cyperaceae</i>	カヤツリグサ科	114	19	219	198	236
<i>Dyno</i>	ガマ風	5	27	898	213	9
<i>Sagittaria</i>	オヤギノリ風			31	20	12
<i>Alisma</i>	ヘオオダカ風		1	2	3	
<i>Monochoria</i>	ヌメノイ風	1		8	15	23
<i>Lemnaceae</i>	ヌメノイ風					5
<i>Moraceae</i>	クワ科					
<i>Urticaceae</i>	イラクサ科				1	1
<i>Papaverum</i>	シノイ風					1
<i>Pterisaria</i>	ヌイハダテ風	3	2	12	20	9
<i>Psilotum</i>	ヌイハダテ風					3
<i>Caryophyllaceae</i>	ナフコ科	3	3	6	8	15
<i>Chenopodiaceae</i> — <i>Amaranthaceae</i>	アカザ科—ヒーリー科	4	2	8	4	1
<i>Thalictrum</i>	カラマツソウ風	1		1		2
<i>Bunneulus</i>	シナノウジ科	1				
<i>Hydrocharitaceae</i>	ジンケイ風					
<i>Nelumbo</i>	コウホネ風					
<i>Nuphar</i>	ヒツジグサ風					
<i>Nymphaea</i>	マダラ風					
<i>Menyanthes</i>	タブナ科	10	20	6	17	13
<i>Ceratopteris</i>	フレモコラ風	1	1			
<i>Sanguisorba</i>	バラ科					1
<i>Other Rosaceae</i>	ミヅハヤ風	1	1	1	1	3
<i>Ligustrum</i>	カカシゴサ風	3		5	9	4
<i>Rubella</i>	ゴキズル風				1	
<i>Actinostemma</i>	ヒシ風					
<i>Trapa</i>	トリノタケ風					
<i>Eriogonum</i>	トリノタケ風	1				1
<i>Urticularia</i>	フサ科					
<i>Plantago</i>	オミナエシ風	2	1			
<i>Parthenocissus</i>	オクモミノキ風					1
<i>Xanthium</i>	オモギ風					
<i>Artemisia</i>	ロモギ風	15	23	205	262	266
<i>Carduoideae</i>	キク科	4	2	2	2	6
<i>Cichorioideae</i>	タンポポ科					
1-late type FS	単条型シダ胞子	16	22	178	119	118
3-late type FS	三條型シダ胞子		1	18	17	9
<i>Osmundaceae</i>	ゼンマイ科					
<i>Selvinia</i>	サンジョウモ風	2	13			
<i>Sphagnum</i>	ミズゴケ風					
Trees	高木花粉	235	253	236	219	228
Shrubs	低木花粉	42	25	35	31	25
Herbs	草花粉	412	368	1885	1367	1244
Ferns	シダ胞子	17	36	196	136	127
Unknown	不明	29	28	53	67	55
<i>Oryza</i> type/Gramineae	イネ属花粉/イネ科	37/100	54/100	34/100	34/100	37/100
						28/100

その1

(第41表) 花粉・胞子出現表

		No.21	No.22	No.23	No.24	No.25	No.26
<i>Pinus</i>	マツ属	25	18	16	32	21	40
<i>Abies</i>		2	2	1	5		3
<i>Ulmus</i>	モクシ属			1			
<i>Tilia</i>	タガ属				1		2
<i>Cryptomeria</i>	スギ属	16	18	16	12	15	15
<i>Sciadopitys</i>	コウヤマキ属				1		
<i>Taxaceae</i>	イチイ科						
<i>Fraxinus</i>	エラズモ属	13	15	10	11	13	11
<i>Juglans</i>	タリミ属	6	9	7	6	10	4
<i>Betula</i>	カバノキ属	3	3	6	2	3	3
<i>Carpinus</i>	クマシブ属	22	18	29	18	28	16
<i>Fagus</i>	ブナ属	21	42	28	25	40	25
<i>Ginkgo</i>	ゴケラ属	108	117	113	111	112	94
<i>Cyclobalanopetala</i>	アカガシ属	12	11	5	18	9	14
<i>Castanea</i>	クリ属	1	4	3	6	6	3
<i>Ulmus - Zelkova</i>	ニレ属 - ケヤキ属	25	29	15	16	22	9
<i>Celtis - Aphananthe</i>	セイヨウヒクノキ属		2		1	1	
<i>Coccolypnum</i>	エラシタ属			1			
<i>Acer</i>	カルダ属	3	2	3	3	2	1
<i>Aesculus</i>	トナノキ属	2	6	2	4	3	1
<i>Tilia</i>	シナノキ属	1					
<i>Salicis</i>	ヤナギ属	3					
<i>Coronis</i>	ハンゼイミ属	6	11	6	12	11	9
<i>Alnus</i>	ハンノキ属	14	6	5	9	7	4
<i>Alnaster</i>	ヤシナブン属	4	6	5	9	8	3
<i>Euptelea</i>	エサクツク属						
<i>Ficus</i>	エラズモ属				1		
<i>Phellodendron</i>	エバタ属						
<i>Orriza</i>	コタツギ属				1		
<i>Ilex</i>	モザンキ属						
<i>Rhus</i>	ウルシ属						
<i>Daphnocrinuss</i>	ダフニス属						
<i>Laurus</i>	ブドウ属						
<i>Cornus</i>	ミズキ属						
<i>Araliaceae</i>	ウコギ科					1	
<i>Eriacaceae</i>	ツツジ科				3		
<i>Prunus</i>	トマト属	5	5	2		1	
<i>Ligustrum</i>	トボロノヤ属						
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属						
<i>Gramineae</i>	イネ科	160	173	143	152	150	94
<i>Cyperaceae</i>	クモリグサ科	237	414	246	180	161	66
<i>Typhaceae</i>	タヌキ属	20	1	4	16	3	1
<i>Sagittaria</i>	オカダカ属	1					
<i>Alisma</i>	ヘラモモダカ属						
<i>Monochoria</i>	ミズオイ属	1		1			
<i>Iridaceae</i>	スミレ科						
<i>Nymphaeace</i>	タガキ属						
<i>Urticaceae</i>	イクラク属	1	1	2		2	
<i>Fragopyrum</i>	ソバ属						
<i>Persicaria</i>	セザンヌア属	8	13	7	3	5	4
<i>Rumex</i>	スイカズラ属						
<i>Cyperophylloaceae</i>	タクジ科	1		1			
<i>Chenopodiaceae - Amaranthaceae</i>	シカザメ科 - ヒニワ科					3	
<i>Thalictroides</i>	カラミツツク属		2	1	1	5	6
<i>Ranunculus</i>	キンポウゲ属						
<i>Hedera</i>	シカツツイ属						
<i>Nuphar</i>	コウホネ属	1					
<i>Nymphaea</i>	ヒシジグサ属						
<i>Malvaceae</i>	タケニグサ属						
<i>Cruciferae</i>	アブラナ科						
<i>Scrophulariaceae</i>	シレンコウ属						
other Rosaceae	バラ科					1	
<i>Vicia</i>	ソラマメ属		1	1			
other Leguminosae	ソシギヤ属	1	1	1			
<i>Lysimachia</i>	オカトリノイ属						
<i>Menyanthes</i>	ミツガシワ属						
<i>Gentiana</i>	シンドウ属	1		1			
<i>Galium</i>	モクシナ属						
<i>Labiatae</i>	シソ科						
<i>Urticularia</i>	タヌキモ属	1					
<i>Plantago</i>	オオバコ属					1	
<i>Portaria</i>	アリドウドウ属						2
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	4	9	5	1		1
<i>Artemisia</i>	セリ科	7	13	10	4	1	1
<i>Carduoideae</i>	オカトラノイ属						
<i>Cichorioideae</i>	ミツガシワ属						
1 - late type FS	早冬型シダ胞子	45	34	28	33	7	9
3 - late type FS	三冬型シダ胞子	3		3	3		1
<i>Osmundaceae</i>	ゼンマイ科	2			1	1	2
<i>Salvinia</i>	サンショウモ属	4					
<i>Sphagnum</i>	ミズブケ属						
<i>Trees</i>	高木花粉	290	296	262	274	286	244
<i>Shrubs</i>	低木花粉	32	28	16	36	28	17
<i>Herbs</i>	草本花粉	513	688	461	432	377	825
<i>Ferns</i>	シダ胞子	54	34	31	37	8	12
Unknown	不明	34	44	30	36	40	33
<i>Oryza Type/Gramineae</i>	イネ属型 / イネ科	0/100	1/100	2/100	0/100	0/100	0/100

その2

No.27	No.28	No.29	No.30	No.31	No.32	No.33	No.34	No.35
18	10	4	11	6	7	5	10	7
				1			2	2
18	17	4	6	9	4	4	4	3
12	12	10	8	6	15	8	9	9
9	6	4	7	6	10	5	7	7
5	5	2	8	9	6	10	9	6
34	51	45	34	37	36	44	42	37
40	54	47	40	30	34	46	31	52
106	138	108	117	107	113	102	108	116
15	17	19	19	23	16	21	21	24
4	6	6	4	1	2	4	1	6
37	36	21	17	20	42	24	31	32
2	1	1	2	2	1	1	2	2
1	1	1	2	1	2	2	2	2
			1	2	2	1	1	1
2			1	1			2	
14	11	13	7	15	11	11	13	14
11	14	15	16	6	19	13	10	19
11	1	14	4	7	6	11	4	9
					1			
1			1			1		
					1			
1						1		
							1	
1	5	3	5	1	2	3	3	2
112	175	188	123	162	169	158	117	139
197	35	30	25	16	8	11	4	14
1	6	3	1	6	7	11	6	11
2		1		3		1	2	
1		1						1
		1	1	2		1	1	1
3	3	4	2	3	4	4	1	1
1								
1	3	1						
1	1	1		1	1	1		1
1	2	2	2	2	2	2	1	2
				4	2	1		
68	119	84	68	56	78	73	30	69
2	2	2					1	
3	10	8	9	7	3	12	7	10
1	2	2			1	3	2	3
1	1	1			1			
303	347	273	277	288	291	270	279	279
40	31	45	34	31	41	40	33	45
389	344	319	226	256	271	264	162	234
5	13	10	10	7	5	15	9	14
27	37	34	36	30	37	31	33	42
0/100	0/100	0/100	0/100	0/100	0/100	0/100	0/100	0/100

2-2. 下飯田遺跡（3区S R 4河川跡）の花粉分析

東北大学理学部 守田 益宗

はじめに

下飯田遺跡は、仙台市若林区下飯田および三本塚地内の名取川によって形成された仙台平野の浜堤列上に位置している。これまでの発掘の結果、古墳時代後期～奈良時代にかけての集落跡や河川跡が見つかっており、3区の河川跡からは、主にシジミからなる厚さ約10cmの貝層が見つかっている。貝層からは、7世紀頃の土器や木製品なども出土している。さらに、4区河川跡最下部からは弥生式土器の破片が出土しており、3区・4区の河川跡堆積物中には、10世紀前半に降下したとされる「灰白色火山灰」（山田・庄子 1981、山田・井上 1990）が挿在している。

本報告では、上記3区河川跡の堆積物の花粉分析結果をもとに、遺跡周辺の植生や堆積環境の変化などについて考察を加えた。とくに、貝層では、堆積物を平面的に採取・分析し、花粉・胞子の平面的な分布状態を明らかにすることにより、この貝層がどのような原因で形成されたかを知る手がかりを得ることに重点をおいた。

試料および方法

花粉分析用試料の堆積物は、3区の北壁断面の基本層1a～12b層およびその直下の層より計41試料を採取した。また、11c層上面では南北12m東西3mの区画を1mメッシュで区切り、その交点から計39試料を採取した。これらの試料の採取地点とその層位を第237、238～257図に示す。

試料は、KOH-ZnCl₂-Acetolysis法を用いて処理した。各試料について高木花粉（Tree Pollen）が200粒以上に達するまで同定することを目標とし、その間に出現する全ての花粉・胞子を記録した。イネ科花粉の区別は、中村（1974）に基づいて位相差顕微鏡の観察によって行ない、ブナ属（*Fagus*）花粉の区別は内山（1980）、イヌシデ（*Carpinus tschonoskii*）花粉の区別はYamanaka（1988）にそれぞれ従った。花粉・胞子の出現率は、北壁断面の基本層の41試料については高木花粉では高木花粉総数を、その他の花粉・胞子は高木花粉を除いた花粉・胞子の総数を、11c層上面の39試料では高木花粉総数をそれぞれ基本数として百分率で求めた。前者は4区の分析結果との比較を容易に、後者は地点間の出現率の違いをより強調するためである。なお、高木花粉に含めた花粉は、第42表-1に示したPinus～Tiliaまでの諸属である。

結果および考察

各試料について検出された花粉・胞子を第42表-1～15に示す。

a) 北壁断面基本層の花粉分析

基本層1a～12b層およびその直下の層の花粉・胞子の出現率の変化を第259、260図に示す。なお、図中、白ヌキで示した層準は、花粉・胞子の含量が少なくて高木花粉の総数が200粒に満たず、花粉出現率の計算に十分な信頼がないところである。

高木花粉は最上部の1a層-Aでは、マツ属とスギ属が優勢であり、ブナ属、コナラ亜属などの落葉広葉樹は比較的低率である。しかし、1a層-B以下では、マツ属とスギ属の出現率が低下し、かわって、コナラ亜属が最優勢でブナ属がこれに次ぎ、タマシデ属、ニレ属-ケヤキ属、サワグルミ属などの落葉広葉樹も出現率が比較的高くなる。低木花粉は全層にわたって低率であるが、ハノキ亜属は11b層以下で出現率がやや増加する傾向がある。草本花粉は、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が全層にわたって高率を示す。イネ科（イネ属型）は、12b層-A以上の所々で認められ、3層以下では出現率も低く断続的であるが、2b層以上では連続的で出現率も比較的高い。イネ科（トウモロコシ属型）は、1a層-Aで認められるのみである。その他の栽培植物では、ソバ属が1a

層-c、2a層-B、2b層-A、5c層で検出されている。水生植物のうち挺水植物のオモダカ属、ミズアオイ属などは12b層より断続的に検出されるが、イネ科（イネ属型）に同調するように2b層以上では連続的で出現率も比較的高い傾向を認める。一方、沈水植物のフサモ属は、11b層以下で目立つ傾向がある。コオホネ属は断続的に認められる。サンエタデ属、セリ科はほぼ全層にわたって検出されるが低率である。アブラナ科は、オモダカ属、ミズアオイ属などと同様な出現傾向を示す。オオバコ属は10層-B以下の所々で見られる。全花粉・胞子に対するシダ胞子の割合は比較的低率であるが、浮水植物のサンショウモ属はシダ胞子の中でも比較的多くほぼ連続して検出される。また、緑藻類の接合胞子もサンショウモ属と同様の傾向で検出される。スマミズキ属のような明らかな二次堆積花粉はほとんど検出されなかった。

高木花粉の変化から、下部より12b層～1a層-Bまでの時代（3区-I時代）と最上部の1a層-Aの時代（3区-II時代）を区別できる。さらに3区-I時代はイネ科花粉の出現率の変化から3層までと2b層以降の2つの時代に細分できる。なお、13層は花粉・胞子が少なく時代を区分できない。3区-I時代の始まりは11、12層より出土した遺物より7世紀後半からと推定され、終末は近世と考えられる。また、イネ属型花粉が多くなる2b層は近世と考えられる。3区-I時代は4区のIII時代に、3区-II時代は4区のIV時代に対比できる。両発掘区の花粉・胞子の出現率やその傾向および各時代の境界年代はかなり良く一致することから、4区の場合（守田 1995）と同様な植生や堆積環境が推定できるので、遺跡周辺の植生、耕作、堆積環境の変化などの論議は4区の報告書を参照してもらいたい。

ここでは4区とやや異なる点について補足する。3区ではサンショウモ属と緑藻類の接合胞子が連続的に認められ、出現率もやや高い。これらは止水域あるいは極めて緩やかな流水域に生育することから、4区よりもさらに停滞した水域が広がっていたと推定される。しかし、堆積物中に砂を所々に挟むことは、しばしば流速が速くなったりしたことがあることは4区と同様である。

b) 貝層（11c層）の花粉・胞子の平面分布

11c層上面の12m×3mの方形区について、39試料の花粉分析結果をもとにコンピューターにより主要な花粉・胞子の平面分布図を作図した。ただし、これら39試料中には高木花粉総数が200粒に満たない試料も多くあるため、高木花粉の信頼のおける平面分布を図化することはできない。一方、高木花粉以外の花粉・胞子総数は試料11を除きいずれも200粒を超えており、これらの花粉・胞子の図化を行なった。なお、コンピューター・プログラムは、ニアンドエー株式会社のコンターブロ日本語版を使用した。以下、その状況について説明する。

高木花粉（第238図）

高木花粉は方形区全面にわたってあまり出現率は高くないが、北から西方向にむけて30%以上の出現率を示す区域が認められ、東から南方向にかけては20%以下の区域が広がっている。

低木花粉（第239図）

低木花粉は低率であるが、北東方向の試料12、14と南西方向の試料34付近で8%以上のやや高い出現率の高い区域が見られる。

草本花粉（第240図）

草本花粉は方形区のはとんどの区域で50%を超す高い出現率を示しており、とくに南半では60%超える区域が広い面積を占める。50%以下の区域は北端の試料2付近に限られる。

シダ胞子（第241図）

シダ胞子は、北端付近と東側の試料21、24、30、33付近に6%以上のやや高い区域が見られるが、その他では比較的低率である。

ハンノキ亜属（第242図）

ハンノキ亜属は、南東端でやや高い区域が見られるほかは、10%前後の出現率の区域が広い面積を占め地点間の違いはある認められない。

ヤナギ属（第243図）

ヤナギ属の出現率は地点間による違いが大きく、0%から40%を超える区域まで認められる。高出現率の区域は北東方向の試料12から14付近と南西方向の試料34付近に見られるが、その他の区域では極めて低率である。

イネ科〔野生型〕（第244図）

イネ科〔野生型〕は出現率が高く50%を超える区域が方形区の大部分を占め、南端部付近や東部から中央部にかけての区域などでは100%を超えている。50%以下の区域は北側付近にわずかに認められる。

イネ科〔イネ属型〕（第245図）

イネ科〔イネ属型〕は試料10、12、17、27付近に20%以上の出現率の区域が見られ、北半部の広い区域で10%を超えている。南半部は5%以下の比較的低率な区域が広がるが、南西部付近の一部にも10%以上の区域が認められる。

カヤツリグサ科（第246図）

カヤツリグサ科は30%以下の区域が広い面積を占めるが、北東端、東端の試料24や南端付近に比較的高率の区域が存在する。

ガマ属（第247図）

ガマ属は方形区全域で2%以下の低い出現率であるが、東端の試料24や南東端付近でやや高い出現率の区域が認められる。

ミズアオイ属（第248図）

ミズアオイ属は南部ではほとんど出現しないが、北部では4%を超す区域が広がり、中には、10%を超すところも認められる。

クワ科（第249図）

クワ科は中央部や北寄りの区域で高い出現率を示す区域が存在し50%に達する場所もあるが、その他の区域ではほとんど出現しない。

サナエタデ属（第250図）

サナエタデ属は中央部や北寄りの試料14付近を中心として出現率の高い区域が見られるが、その他の区域では2%以下の出現率である。

アカザ科-ヒュ科（第251図）

アカザ科-ヒュ科は試料10、26、38付近で6%を超しているが、その他では4%以下の区域が広がっている。

ナデシコ科（第252図）

ナデシコ科は北端付近の試料5付近で6%を超す所も見られるが、その他では一部区域で4%を超す部分が見られるだけで、大部分の区域では4%以下の出現率である。

セリ科（第253図）

セリ科は南東端付近に高い出現率の区域が見られるが、その他では6%以下の比較的低率の区域が広がる。

オオバコ属（第254図）

オオバコ属は方形区域ではほとんど見られないが、それでも試料14付近に比較的多く見られる区域が存在する。

ヨモギ属（第255図）

ヨモギ属は南部で高率を示し200%を超える区域が広がっているが、北半部では150%以下の区域が大部分を占めている。

他のキク科（第256図）

他のキク科も南部で多く認められ10%以上の区域が広がるが、北半部では5%内外の区域が広い面積を占める。

サンショウモ属（第257図）

サンショウモ属は北部と東部の試料24付近にやや高い出現率の区域が認められるが、その他の大部分の区域では4%以下である。

方形区を北半部と南半部に分けて考えると、北半部では相対的に高木花粉の比率が高く草本花粉が低い傾向がある。草本花粉のうちイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科-ヒュ科、ヨモギ属など風によって花粉が飛ばされる傾向が強いものは南半部が多い。イネ科、カヤツリグサ科のように乾湿どちらの立地にも生育するものもあるが、アカザ科-ヒュ科、ヨモギ属は乾いた所を好み植物が多い。これに対し北半部では、ミズアオイ属、サンショウモ属のような水生植物やサナエタデ属、クワ科が多い傾向がある。サナエタデ属は乾いた所に生育する種類もあるが、その多くは水湿地を好み。クワ科は水路沿いや河原の土手などに多く見られるカヌムグラであろう。こうしたことから、北半部では南半部に比べより湿润な環境であったと考えられる。北半部では湿润なため花粉生産量の大きな植被が南半部より少なかったため、相対的に高木花粉が多く表現されたとみなし。ただし、南北いずれにも風によって運ばれにくくサンショウモ属が見られることから、南半部でも湿润な環境であったが、北半部に比べその継続期間が短かったと考えるべきであろう。すなわち、ある時期には方形区全域が水湿な環境下におかれたが、南半部では早く水がひいたのにに対し北半部では遅くまで水湿な環境が続いた。このことは、方形区の北半部に貝の集積層が多くみられることと関連して注目される。ミズアオイ属、サナエタデ属は水がひたるほどから地面が現れているような場所、いわゆる水辺に生育するのが普通である。このような場所にシジミが生活していたとは考えにくいので、この貝層は人為的なもの（貝塚）である可能性が高い。花粉・胞子の堆積した後に、貝が下にもぐって貝層が形成された可能性も考えられるが（自然貝層）、ここでは前者の考え方をとりたい。

こうした水湿な環境に生育する樹木のうちハンノキ亜属は、南北で分布の片寄りが見られるが、差は小さく出現率も高くなないので、方形区の近辺に生育していたとしても背丈が低く本数も極めて少ないのであったろう。ヤナギ属は分布の片寄りも大きく出現率も高いことから、近辺に確実に生育していたといえる。

なお、分布図を書くほど出現しないが注目される花粉・胞子としては、試料13よりキュウリ属が1粒検出されている。

引用文献

守田益宗（1995）：下飯田遺跡の花粉分析。（4区S R 1 河川跡）

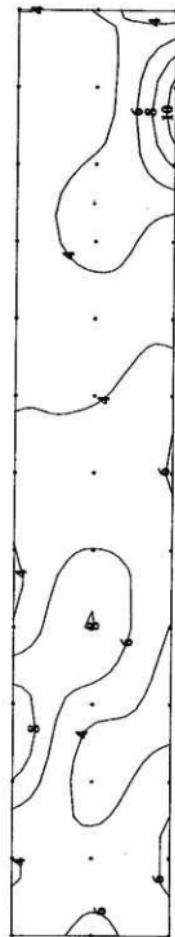
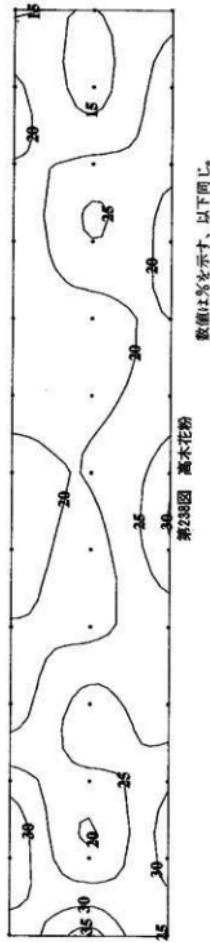
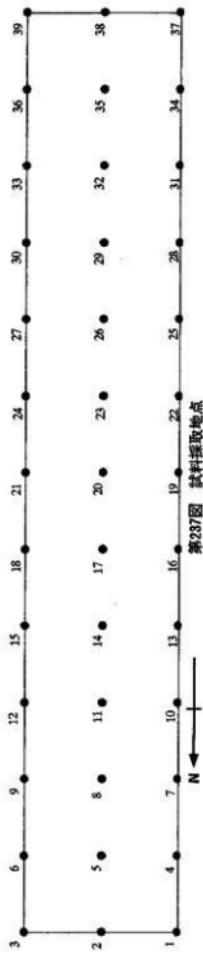
中村 純（1974）：イネ科花粉について、とくにイネ (*Oryza sativa*)を中心として。第四紀研究、13、187～193.

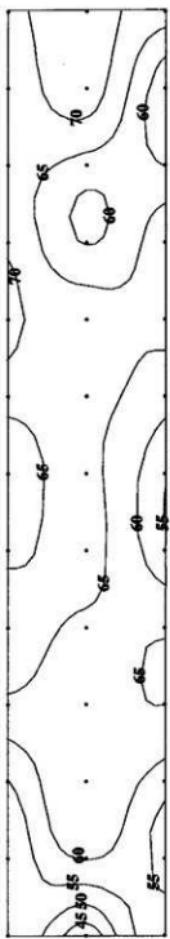
内山 隆（1980）：ブナ属花粉の形態について。花粉、15、2～10.

山田一郎・庄子真雄（1981）：宮城県に分布する新期の灰白色火山灰について。土肥誌、52、155～158.

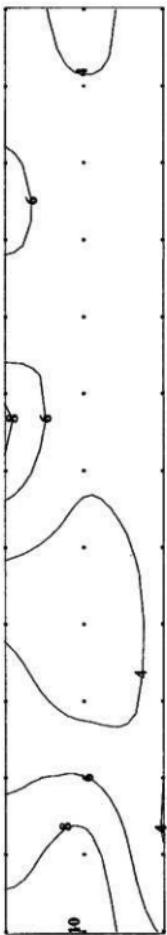
山田一郎・井上克弘（1990）：東北地方を覆う古代の珪長質テフラ“十和田一大湯浮石”的同定。第四紀研究、29、121～130.

Yamanaka, M. (1988) : The size-frequency and number of pore of pollen grain in Japanese species of genus *Carpinus*. Mem. Fac. Sci. Kochi Univ. Ser. D (Biol.), 9, 21～24.

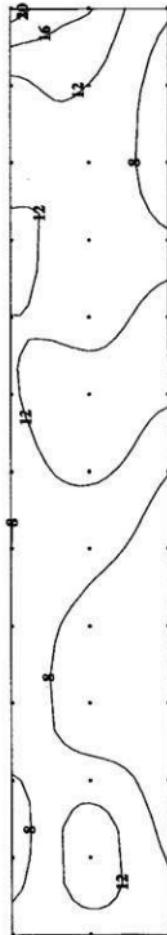




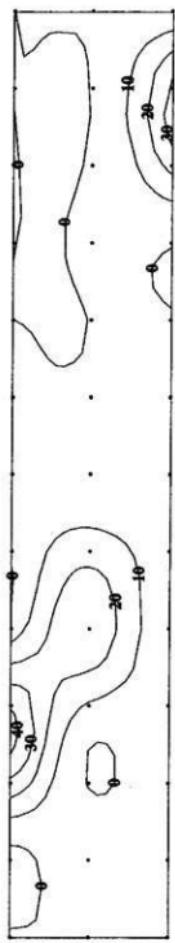
第240図 草本花粉



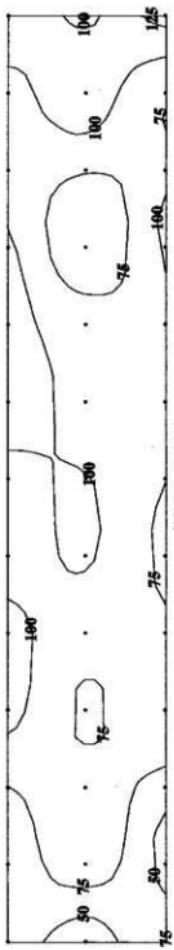
第241図 シタ胞子



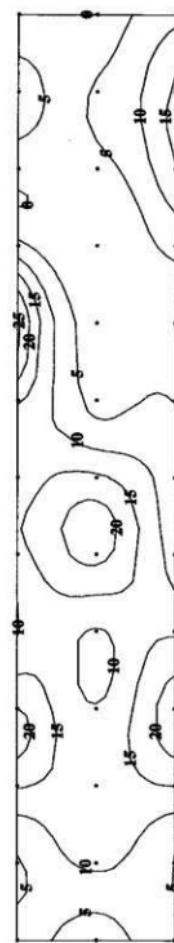
第242図 ハンノキモ花粉



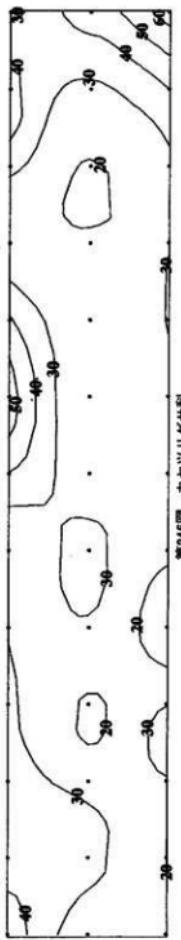
第243図 ヤナギ属



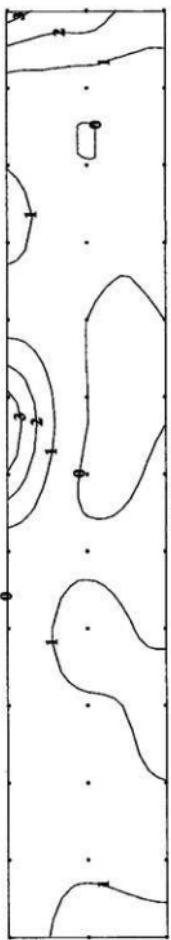
第244図 野生型



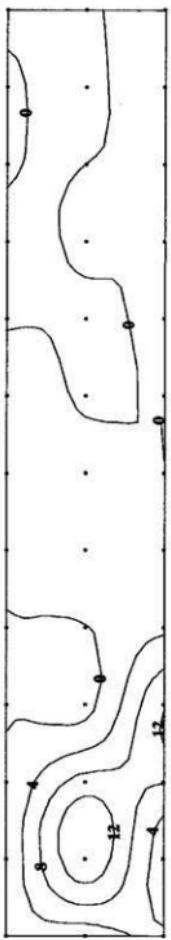
第245図 イセ型



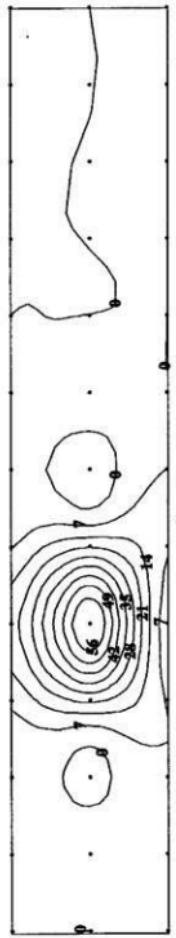
第246図 カヤツリグサ科



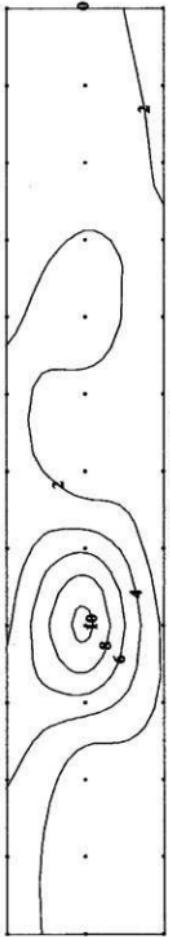
第247図 ガマ属



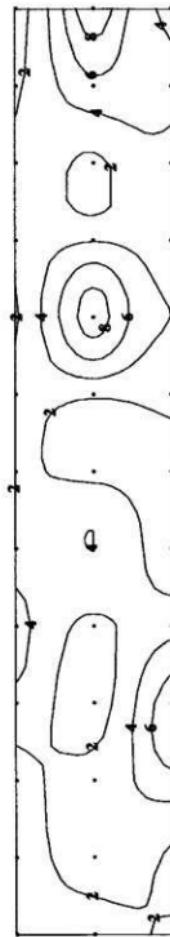
第248図 ミズフオイ属



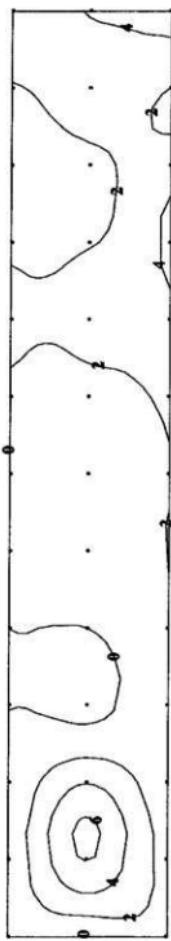
第249図 クワ科



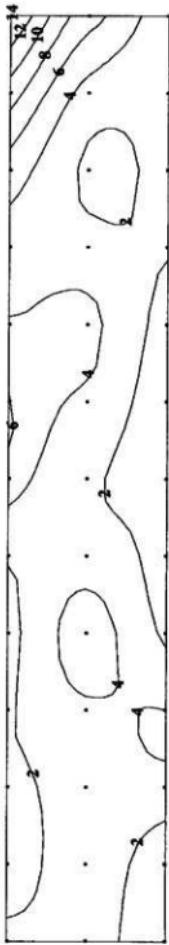
第250図 サナエタデ属



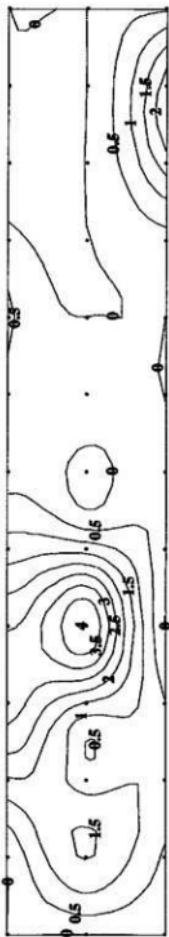
第251図 アカザ科-ヒユ科



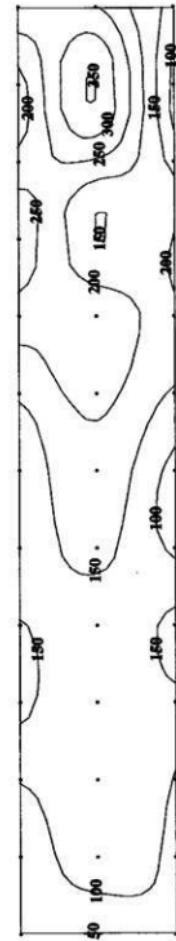
第232図 ナデシコ科



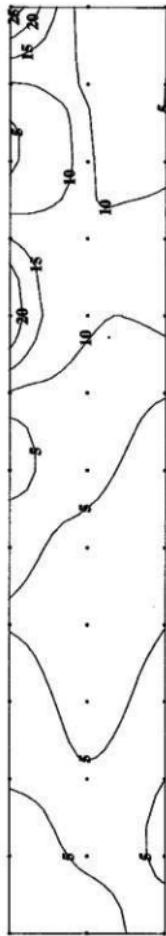
第233図 セリ科



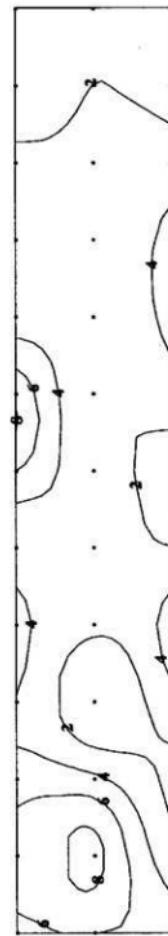
第234図 オオバコ科



第255図 ヨモギ属



第256図 他のキク科



第257図 サンショウウモ属

第42表 花粉分析結果一覧表

学名	種名	1.1月 A	1.1月 B	1.1月 C	1.2月 A	1.2月 B	1.2月 C	1.2月 D	1.2月 E	1.2月 F	1.2月 G	1.2月 H	1.2月 I	1.2月 J	1.2月 K	1.2月 L	1.2月 M	1.2月 N	1.2月 O	1.2月 P	1.2月 Q	1.2月 R	1.2月 S	1.2月 T	1.2月 U	1.2月 V	1.2月 W	1.2月 X	1.2月 Y	1.2月 Z	
<i>Pinus</i>	マツ属	36	39	23	37	30	16	40	22	24	40	43	69	46																	
<i>Abea</i>	モミ属	1	5	6	13	20	4	5	10	4	6	6	15	10																	
<i>Ficus</i>	トウヒ属																														
<i>Taxa</i>	ツガ属	1																													
<i>Cyprisemaria</i>	スギ属	69	24	31	29	24	24	39	31	22	22	28	27	33																	
<i>Schizopeltis</i>	コノキマキ属																														
<i>Cupressaceae-Taxaceae</i>	ヒノキ科・イチイ科																														
<i>Phenopoma</i>	サワダリ属	3	10	25	16	18	8	14	14	22	25	22	16	14																	
<i>Juglans</i>	クルミ属	1	2	3	2	2	4	4	2	4	2	4	2	4																	
<i>Platycarya</i>	ノグリ属																														
<i>Betula</i>	シラカバ属	1	4	7	5	10	6	8	10	2	2	2	2	2																	
<i>Carpinus betulus</i>	イヌシンド属	10	4	2	3	4	8	4	7	4	7	4	7	4																	
<i>Other Cupressaceae</i>	他のマシダ属	22	25	61	48	32	42	39	28	16	30	18	33	13																	
<i>Fagus crenata type</i>	ブナ型	24	78	99	76	78	77	78	64	81	66	74	49	74																	
<i>F. japonica type</i>	イヌチヂク型	6	12	10	21	18	16	21	30	21	29	10	10	6																	
<i>Quercus</i>	コナラ属	42	112	120	146	131	74	122	101	101	112	118	95	136																	
<i>Quercus ilex</i>	アカガシ属	2	14	10	10	8	10	8	10	11	11	11	3	10	11																
<i>Casuarina</i>	クリ属	2	20	12	14	8	4	6	8	12	14	12	14	2																	
<i>Ulmus</i>	ニレ属	9	29	23	32	17	24	18	19	28	20	6	23	11																	
<i>Celtis australis</i>	エノキ属・ムクノキ属																														
<i>Cercidiphyllum</i>	カツラ属																														
<i>Acer</i>	カエデ属	2	2	3	1	1	1	1	2	2	2	2	2	2																	
<i>Aesculus</i>	オニグルミ属	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1																	
<i>Tilia</i>	シナノキ属		1																												
<i>Ephedra</i>	マツモ属	14	6	28	10	9	4	2	4	8	30	2	1	6																	
<i>Salsix</i>	ヤマモモ属																														
<i>America</i>	ヘンゼンモ属	17	22	33	35	26	18	26	24	16	35	32	12	7																	
<i>Celtis</i>	ハシナガモ属	43	15	37	60	41	36	48	56	16	24	24	6	4																	
<i>Aleurites</i>	ヤシナガモ属	7	12	18	6	8	7	20	12	14	2	2	2	4																	
<i>Hamelia</i>	マンサク属																														
<i>Francoa</i>	サクラ属																														
<i>Mitchella</i>	アカネ属																														
<i>Elaeagnus</i>	アカネ属	1																													
<i>Sophora</i>	シラキ属																														
<i>Olea</i>	コクサギ属																														
<i>Rhus javanica</i>	ヌルデリ属																														
<i>Other Rhus</i>	他のヌルデリ属																														
<i>Corchorus</i>	セナノキ属	2																													
<i>Ilex</i>	セドンナ属																														
<i>Vitis</i>	ブドウ属																														
<i>Parthenocissus</i>	ツクバネ属																														
<i>Araliaceae</i>	ウコギ属																														
<i>Eriobotryaceae</i>	トリヅル属																														
<i>Fraxinaceae</i>	トネリコ属	2																													
<i>Ligustrum</i>	イボガラス属	1																													
<i>Lonicera</i>	スイカズラ属																														
<i>Viburnum</i>	ガマズミ属																														

(第42表) 花粉分析結果一覽表2

(第42表) 花粉分析結果一覽表 3

(第42表) 花粉分析結果一覽表 4

(第42表) 花粉分析結果一覽表 5

(第42表) 花粉分析結果一覽表 6

(第42表) 花粉分析結果一覽表 7

(第42表) 花粉分析結果一覽表 8

(第42表) 花粉分析結果一覽表 9

第42表 花粉分析结果一览表10

No.9	No.10	No.11	No.12	No.13	No.14	No.15	No.16	No.17	No.18	No.19	No.20	No.21	No.22	No.23	No.24	No.25	No.26
26	10	3	5	14	4	6	8	10	15	15	16	11	12	10	16	9	10
6	1	2	3	5	2	1	6	5	5	6	4	6	6	10	6	7	2
27	16	7	4	19	10	6	8	18	2	10	15	9	13	13	18	36	1
1	4	4	2	4	7	2	7	3	4	5	5	2	1	1	1	1	1
10	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1
5	1	1	1	2	2	1	3	2	4	1	2	2	2	1	1	1	1
6	1	1	2	6	9	7	16	5	20	7	13	7	6	2	7	44	5
21	8	1	1	26	19	14	30	28	44	7	31	8	24	10	71	12	12
81	12	21	8	3	9	6	6	10	7	20	2	8	1	7	23	4	1
26	4	4	25	20	27	30	20	36	11	26	16	21	11	94	23	16	16
88	30	13	2	2	1	1	3	3	3	3	2	1	1	8	1	1	1
4	2	2	1	1	1	1	4	4	3	2	1	3	1	8	1	1	1
6	13	12	3	5	15	11	4	17	2	16	4	7	6	17	4	18	9
13	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1
2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1	1
2	6	40	1	36	4	5	13	5	7	2	3	3	10	1	1	1	1
13	5	2	2	8	4	3	5	7	9	2	7	4	5	3	8	1	3
19	4	3	7	9	8	6	10	11	6	17	9	15	9	36	21	7	7
3	1	2	1	3	2	2	5	3	4	1	3	3	3	12	1	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1
1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

〈第42表〉 花粉分析結果一覽表

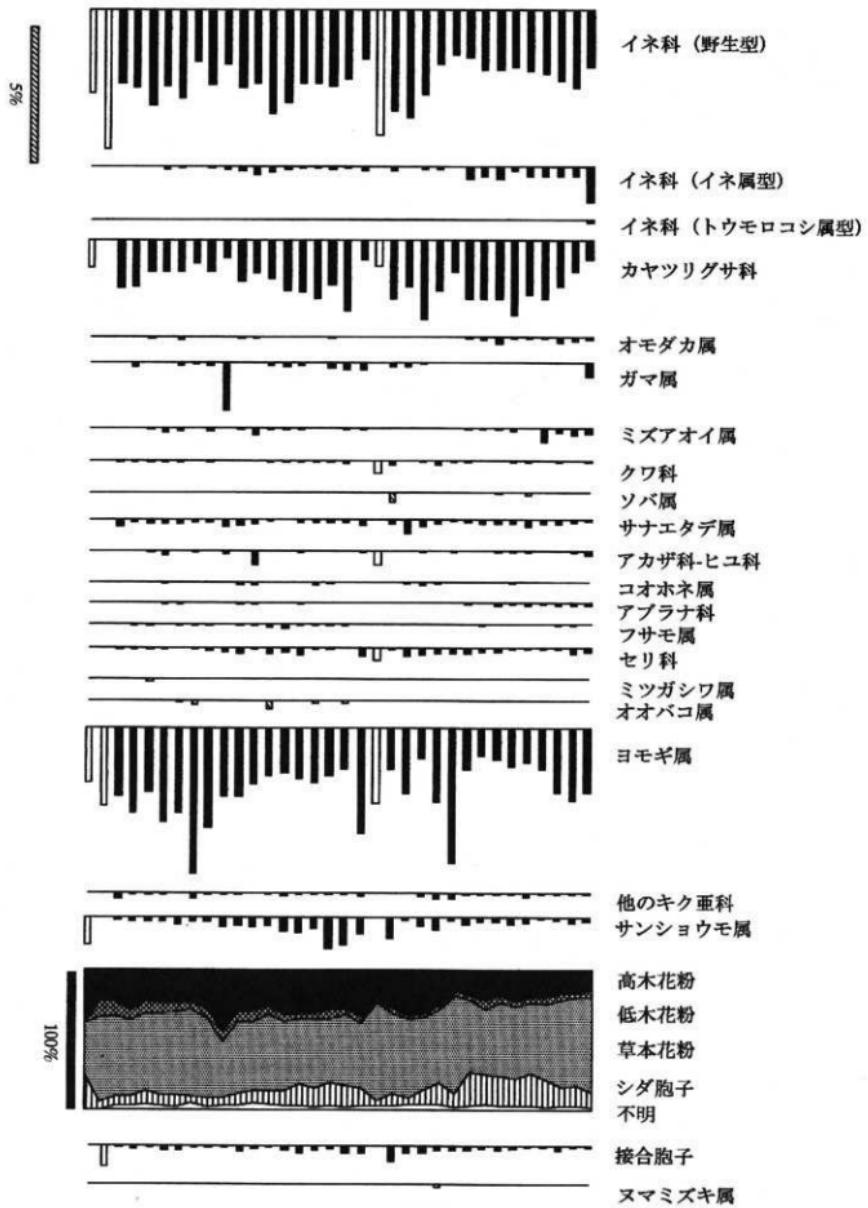
(第42表) 花粉分析結果一覧表12

(第42表) 花粉分析結果一覽表13

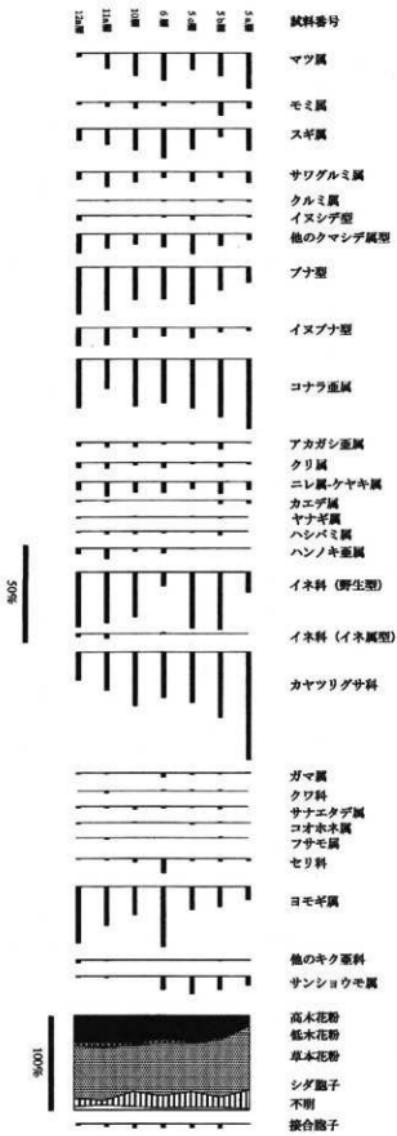
(表42表) 花粉分析結果一覽表14

242	298	95	76	113	121	66	179	218	173	315	70	53
69	57	44	12	44	29	18	69	43	102	143	33	23
2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
1	1	1	2	1	1	1	1	1	1	3	2	3
1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	2	1	1
1	1	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1
1	2	1	8	2	2	7	2	1	1	3	1	1
1	3	4	5	1	3	6	1	5	8	6	1	1
5	14	3	6	1	6	1	3	1	1	10	48	3
3	6	2	2	3	2	1	3	5	2	2	12	3
1	1	1	1	1	3	2	10	7	8	7	1	1
2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2	1
1	1	1	1	1	1	1	2	1	1	1	1	1
1	7	4	4	3	5	4	1	5	4	18	6	5

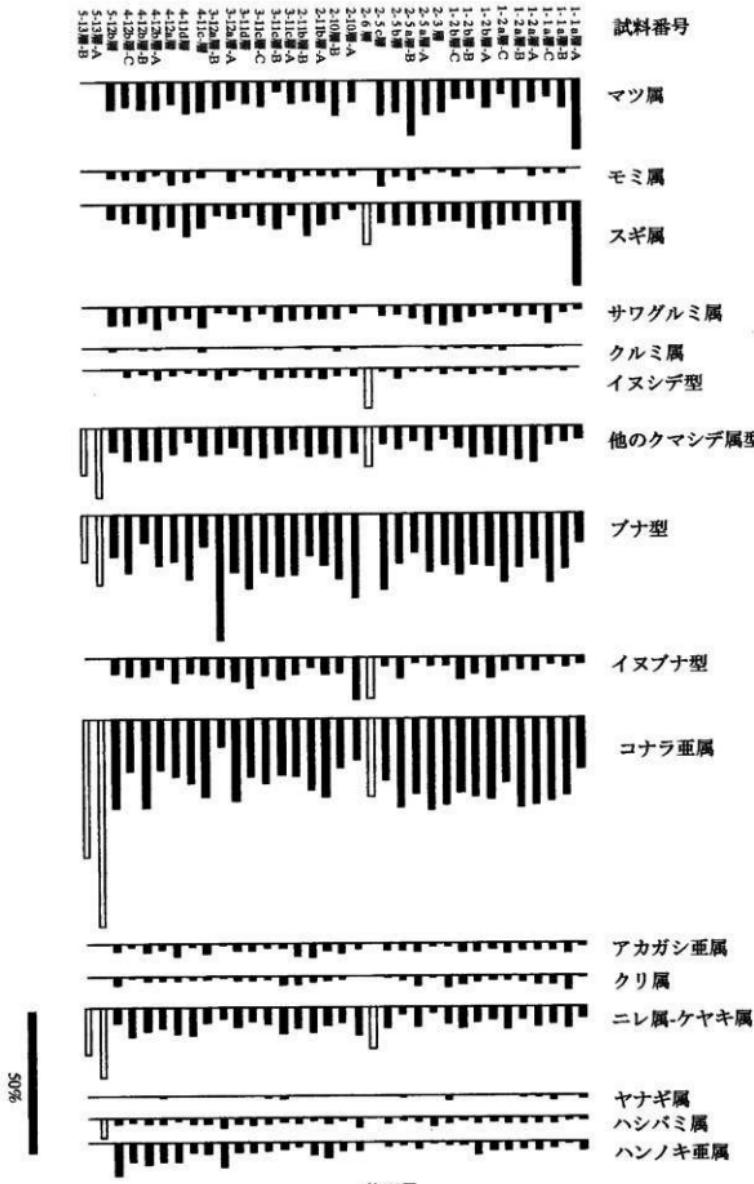
(第42表) 花粉分析結果一覽表15



第258図



第259図



第260図

3. 仙台市下飯田遺跡出土材の樹種

高橋 利彦（木工舎「ゆい」）

1. 試料

試料は土木・建築材や日用品とみられる木製品・加工材219点で、7世紀代および7世紀末～8世紀、中世のものと考えられている種々の遺構から検出されたものである。なお、所属時期検討中とされているものも2点含まれている。また、本稿中の試料番号の頭に「-」を付したものが遺物番号となる。

2. 方法

剥刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の3面の箇手切片を作製、ガム・クロラール（Gum Chloral）で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版（写真図版6～11）も作製した。なお作製したプレパラートはすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料の中には劣化や変形が進んでいたため確実な同定ができるず類似種としたものや、手元の現生標本中には該当するものが見あたらず同定できなかったものもあったが、215点が以下の18種類〔分類群（Taxon）、複数形 Taxa〕をさす。ここでは属・亜属・節・種の異なる階級の分類単位を総称している。〕に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、各Taxonの科名・学名・和名およびその配列は「二本の野生植物 木本I・II」（1989）にしたがい、一般的な性質などについては「木の辞典 第1巻～第17巻」（1979～1982）も参考にした。また、（ ）のついた試料番号は類似種としたものを示している。

●マツ属単維管束亜属の一種 (*Pinus subgen. Haploxyylon* sp.) マツ科 №292.

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエビセリウム細胞よりなり、仮道管内壁は滑らか、分野壁孔は窓状、單列、1～15細胞高のものと樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

単維管束亜属（いわゆる五葉松類）には、ハイマツ (*Pinus pumila*)、チヨウセンゴヨウ (*P. koraiensis*)、ヤクタネゴヨウ (*P. armandii* ver. *amamiana*)、ゴヨウマツ (*P. parviflora*) といいくつかの変・品種がある。ハイマツは北海道・本州（中部地方以北）の高山・寒冷地に、チヨウセンゴヨウは本州（中部地方および愛媛県）の亜高山帯に、ヤクタネゴヨウは種子島・屋久島に特産し、ゴヨウマツは北海道（日高・渡島・奥尻島）・本州・四国・九州に分布する。ゴヨウマツは尾根筋や斜面に生育する常緑高木で、まれに植栽される。材の硬さは中程度で、加工や乾燥は容易、保存性は中程度である。建築・建具・器具・家具材などの用途がある。

●マツ属複維管束亜属の一種 (*Pinus subgen. Diploxyylon* sp.) マツ科 №120.

早材部から晩材部への移行は急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエビセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状、放射組織は単列、1～15細胞高のものと樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

複維管束亜属（二葉松類）には、クロマツ (*Pinus thunbergii*)・アカマツ (*P. densiflora*) と琉球列島特産のリュウキュウマツ (*P. luchuensis*) の3種がある。アカマツは北海道南部から九州に、クロマツは本州から琉球に分布するが暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

●モミ属の一種 (*Abies* sp.) モミ科 №1, 4, 9, 14, 20, 21, 22, 30, 34, 35, 48, 62, 70, 72, 86, 117, 142, 143, 146, 147, 148, 192, 215, 219, 230, 231, 232, 233, 234, 235, 236, 237, 238, 239, 240, 241, 242, 243, 244, 245, 246, 247, 248, 249, 250,

251, 252, 253, 254, 256, 257, 258, 260, 261.

早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はないが、傷害樹脂道が認められることがある。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の末端壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型 (Taxodoid) で1~4個。放射組織は単列、1~30細胞高。

モミ属には、ウラジロモミ (*Abies homolepis*)・トドマツ (*A. sachalinensis*)・モミ (*A. firma*)・シラビソ (*A. veitchii*)・オオシラビソ (*A. mariesii*)の5種があり、トドマツを除く4種はいずれも日本特産種である。モミは本州（秋田・岩手県以南）・四国・九州の低地～山地に、ウラジロモミは本州中部（福島県以南）・紀伊半島・四国の山地～亜高山帯に、オオシラビソは本州（中部地方以北）の亜高山帯に、シラビソは本州中部（福島県以南）・奈良県・四国に、トドマツは北海道に分布する常緑高木である。モミを除いては山地～高山・寒冷地に生育する。モミの材はやや軽軟で、強度は小さく、割裂性は大きい。加工は容易で、保存性は低い。棺や卒塔婆など葬祭具に用いられるほか、建具・器具・家具・建築材など各種の用途が知られている。

●スギ (*Cryptomeria Japonica*) スギ科 №10, 26, 29, 71, 74, 80, 89, 138, 139, 141, 144, 216.

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型で2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では現在ヒノキに次ぐ植林面積をもち、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・構築類・舟材など各種の用途がある。

●ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis sp.*) ヒノキ科 №8, 12, 44, 45, 46, (47), 124, 127, 135, 136, 145, 149.

早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型 (Cupressoid) で1~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。№47は劣化が進んでいたため類似種とした。

ヒノキ属にはヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州（福島県以南）・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内では現在植林面積第1位の重要な樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きいが強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州（岩手県以南）・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが、耐水性が高いため樽や桶にするほか各種の用途がある。

●アスナロ (*Thujopsis dolabrata*) ヒノキ科 №(85), 103, 150.

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔は小さくヒノキ型～スギ型で1~6個。放射組織は単列、1~15細胞高。№85は劣化が進んでいた。

アスナロは本州・四国・九州に分布する日本特有的常緑高木で、時に植栽される。北海道（渡島半島以南）・本州北部には変種ヒノキアスナロ（ヒバ） (*T. dolabrata var. hondai*) がある。材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

●カヤ (*Torreya nucifera*) イチイ科 №310, 311.

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞・樹脂道はない。放射仮道管ではなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はヒノキ型で1~4個。放射組織は単列、1~10細胞高。仮道管内壁には対をなせん肥厚が認められる。

カヤは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州の常緑広葉樹林中に点生する常緑高木で、樹高25~30mにもなるが生長は極めて遅い。庭木として植栽されることも多く、いくつかの変・品種がある。その材は針葉樹としては重

い方で、強度は中程度、割裂性は大きく、加工は容易、保存性とくに耐水性に優れる。建築・各種桶類・木地・器具・家具など各種の用途が知られ、基盤としては最高級品とされる。

- ヤナギ属の一種 (*Salix* sp.) ヤナギ科 №152, 154, 155, 156, 157, 159, 161, 162, 163, 164, 165, 166, 167, 168, 170, 171, 172, 173, 174, 175, 176, 177, 178, 179, 180, 181, 182, 183, 184, 185, 186, 187, 188, 189, 190, 194, 195, 196, 197, 198, 199, 200, 201, 202, 204, 206, 207, 287, 293.

散孔材で、道管は年輪全体にはば一様に分布するが年輪界付近でやや管径を減少させる。道管は横断面では梢円形～やや角張った梢円形、単独および2～3個が複合する。單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は異性、単列、1～15細胞高。柔組織は隨伴散在状およびターミナル状。年輪界はやや明瞭。

ヤナギ属は国内に約35種が知られ、種間雜種も多く分類の困難な植物群である。属としては全国に分布し、時に植栽される落葉低木または高木である。ネコヤナギ (*Salix gracilistyla*) などのように水辺に生育する種が多いが、バッコヤナギ (*S. bakkō*)、ノヤナギ (*S. subopposita*) などのように乾燥した立地に生育するものや、シライヤナギ (*S. shiraii*)、コマイワヤナギ (*S. rupifraga*) のように岩場に生育するものもある。材は一般に軽軟で、割裂性が大きく、保存性は低い。大径木が少ないため小細工物にする程度で、特に重要な用途は知られていない。

- ハンノキ属の一種 (*Alnus* sp.) カバノキ科 №75, 282, 283, 284, 285, 286, 307, 308.

散孔材で、管孔は放射方向に2～4個が複合または単独で配列、横断面では梢円形、管壁は薄い。道管は階段穿孔をもち、段 (bar) 数は10～30、壁孔は密に対列状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は同性、単列、1～30細胞高で集合組織が認められることがある。柔組織は短接線状～散在状。年輪界はやや不明瞭。

ハンノキ属は国内に約10種が自生し、ハンノキ (*Alnus japonica*) の仲間 (=ハンノキ亜属) とヤシャブシ (*A. firma*) やミヤマハンノキ (*A. maximowiczii*) の仲間 (=ヤシャブシ亜属) に分けられる。属としては全土に分布し、いずれも根に根瘤菌が共生しているため複地でもよく生育する。材はやや軽軟～やや重硬で、加工は容易、薪炭材や各種器具などとして用いられる。

- コナラ属コナラ亜属クヌギ節の一種 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* sp.) ブナ科 №203, 224.

散孔材で孔眼部は1～3列、孔眼外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射上に配列する。大道管は横断面では円形、小道管は管壁は厚く、横断面では角張った円形、ともに単独。單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で果実(いわゆるドングリ)が2年目に熟するグループで、クヌギ (*Quercus acutissima*) とアベマキ (*Q. variabilis*) の2種がある。クヌギは本州(岩手・山形県以南)・四国・九州・琉球に、アベマキは本州(山形・静岡県以西)・四国・九州(北部)に分布するが、中国地方に多い。材の解剖学的特徴のみで両者を区別することはできないが、試料はクヌギである可能性が高い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されること多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・枕材・橋木などの用途が知られる。

- コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinns* sp.) ブナ科 №81, (115), 264.

環孔材で孔眼部は1～2列、孔眼外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形～梢円形、小道管は管壁はやや薄く、横断面では多角形、ともに単独。單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭、№115は組織の変形が著しい。

コナラ節は、コナラ亜属の中で果実が1年目に熟するグループで、カシワ (*Quercus dentata*)・ミズナラ (*Q.*

crispula)・コナラ (*Q. serrata*)・ナラガシワ (*Q. aliena*)といいくつかの変・品種を含む。ミズナラ・カシワ・コナラは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州(岩手・秋田県以南)・四国・九州に分布する。このうち平野部で普通に見られるのはコナラである。コナラは樹高20mにもなる高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクスギに次ぐ優良材である。

●クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 №3, 52, 68, 69, 121, 123, 193, 225, 226, 227, 228, 229, 255, 259, 262, 263, 265, 266, 267, 268, 269, 270, 279, 280, 281, 288, 289, 290, 291, 294, 295, 296, 297, 298, 299, 300, 301, 302, 303, 304, 305, 306, 312, 313, 314, 315.

環孔材で孔周部は1~4列またはそれ以上、孔周外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形~橢円形、小道管は単独および2~3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った橢円形~多角形。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状~網目状となる。放射組織は同性、单(~2)列、1~15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、又植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、梢木や海苔粗朶などの用途が知られている。

●ケヤキ (*Zelkova serrata*) ニレ科 №2, 39, 97, 132, 153, 271, 272, 274, 275, 276, 277, 278.

環孔材で孔周部は1~2列、孔周外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線~斜方向の紋様をなす。大道管は、横断面では円形~橢円形、単独、小道管は管壁はやや薄く、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1~10細胞幅、1~30細胞高であるが時に60細胞高を越える。しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状、年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木で、時に樹高50mにも達する。材はやや重硬で、強度は大きいが加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途が知られ、国産広葉樹材の中で最良のもの一つに上げられる。

●イスノキ (*Distylium racemosum*) マンサク科 №(5), 6, 7.

散孔材で、ほとんど単独、横断面では多角形。道管は階段穿孔をもち、段数は10前後。放射組織は異性Ⅱ型、1~3細胞幅、1~10細胞高。柔組織は独立帶状または短接線状で目だつ。年輪界はきわめて不明瞭。№5は道管内や柔細胞内腔に黒い物質(塗か?)が詰まっていた。

イスノキは本州(関東南部以西)・四国・九州・琉球の常緑樹林内に生育する常緑高木である。イスノキ属には他に小笠原に分布するシマイスノキ (*D. lepidotum*)がある。材は重硬で加工困難、強度・耐朽性は大きい。家具・器具・建築材として用いられるほか、櫛としてはツゲに次ぐ良材とされている。

●サクラ属の一種 (*Prunus sp.*) バラ科 №309.

散孔材で、横断面では角張った橢円形、単独または2~5個が複合、晚材部へ向かって管径を漸減させる。道管は單穿孔をもち、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1~5細胞幅、1~30細胞高。柔組織は周囲状および散在状。年輪界はやや明瞭。

サクラ属は、ヤマザクラ (*Prunus jamasakura*) やウツミザクラ (*P. grayana*)など15種が自生し、多くの変・品種がある。また、モモ (*P. persica*) やスモモ (*P. salicina*)など古い時代に伝えられ栽培されているものもある。このうちヤマザクラは本州(宮城・新潟県以南)・四国・九州の山野に分布する落葉高木で、材は中程度~やや重硬・強韌で、加工は容易、保存性は高い。各種器具材をはじめ、機械・家具・楽器・建築・薪炭材など様々な

用途が知られている。また樹皮は棒皮細工に用いられる。

●トチノキ (*Aesculus turbinata*) トチノキ科 №40.

散孔材で、横断面では角張った橢円形、単独または2~4個が複合する。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では網目状~櫛状となり、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、單列、1~15細胞高で階層状に配列し、肉眼では横溝のリップル・マーク (ripple mark) として認められる。柔組織はターミナル状。年輪界はやや不明瞭。

トチノキは北海道(南西部)・本州・四国・九州の主として谷沿いの肥沃地に生育する落葉高木で、東北地方に多く九州には少ない。材は軽軟で、加工・乾燥が容易で、耐朽性は小さい。器具・家具材や旋作材・木地などに用いられる。

●エゴノキ属の一種 (*Styrax sp.*) エゴノキ科 №33, 273.

散孔材で管壁は薄く、横断面では橢円形、2~4個が複合または単独で配列、年輪界付近で管径を減ずる。道管は階段穿孔をもち、段数は5~10。放射組織は異性II型、1~6細胞幅、1~30(50)細胞高。柔組織は短接線状および散在状。年輪界はやや不明瞭。

エゴノキ属にはエゴノキ (*styrax japonica*)、ハクウンボク (*S. obassia*)、コハクウンボク (*S. shiraiana*) の3種がある。エゴノキは北海道(渡島)・本州・四国・九州・琉球に、ハクウンボクは北海道(北見・石狩以南)・本州・四国・九州に、コハクウンボクは本州(栃木県以南)・四国・九州に分布する落葉高木~低木である。材はやや重硬で割裂しにくく、加工はやや容易、旋作・器具・薪炭材などに用いられる。

●ニワトコ (*Sambucus racemosa* subsp. *sieboldiana*) スイカズラ科 №(160), 169, (205).

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形、2~5(10)個が複合または単独で、接線方向に配列することがある。道管は單穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は大型で異性II型、1~4細胞幅、1~30細胞高。直立細胞が鞘状となることがある。年輪界は不明瞭。№160は組織が変形していた。№205は当年枝であった。

ニワトコは本州・四国・九州の山野に普通な落葉低木~小高木で、いくつかの変・品種が知られときに植栽される。御幣など民俗的には重要な用途があり、若葉は綠肥とされ、花は民間薬として利用されたが、材の用途には重要なものはない。

№58は散孔材で、放射組織は異性II型で1~2細胞幅、多室結晶細胞が目立つなどの特徴があったが、劣化も進んでいたため種類は明かにできなかった。№151と№158も散孔材で、ともに灌木生の樹種と思われる。№158は1年生(枝)であったため不確実ではあるが、№151と同一Taxonの可能性もある。№191は環孔材であるが、道管配列や広放射組織が多いことなどから「つる」生のもの可能性がある。

以上の同定結果を推定されている用途や所属時期とともに一覧表で示す(第43表)。

4. 考察

同定対象となった219点からは針葉樹7Taxa、広葉樹11taxa(種類不明を含めると14~15Taxa)が認められた。試料数ではモミ属(54点)が最も多く使用され、ヤナギ属(49点)・クリ(46点)がこれに次ぎ、スギ・ケヤキ・ヒノキ属(各12点)なども多く用いられている(第44表)。推定されている用途別の使用樹種組成をみると、用途ごとに特定の樹種を用いている傾向が窺える。所属時期を古代(7世紀代および7世紀末~8世紀)と中世に2大別すると周期的に偏りが認められるが、これは古代の試料が杭に集中し、柱がやや多いものの他の用途がほとんどないことによるともいえ、必ずしも使用樹種が周期的に異なるとは言いきれない。

杭は57点が対象となったが、ヤナギ属(47点)を中心に、種類不明の広葉樹2または3Taxaを含め8~9Taxa

が用いられていた。ヤナギ属は上記のように低（湿）地に生育する種とは限らないが、試料のはほとんどが小径であることや、その中には後述するように樹皮付きで出土しているものも含まれていること¹⁾などから、ヤナギ属のはほとんどは出土地点近傍の湿性な立地に生育していた樹木に由来するものであり、その他の樹種も遺跡周辺に生育していた樹木や他用途に使われていた木材を転用したもの²⁾と考えている。また、その形状からは勿論のこと、樹種組成からみてもこれらの杭は本格的な土木工事用のものとは考えにくい。

井戸戸47点のうちSK60出土の45点の用材をみると、四隅の柱にはクリが、横枠にはクリ7点・コナラ節1点が、縦枠にはモミ属30点・クリ3点が用いられ、部材ごとに使用樹種に明かな偏りが認められた。このことは、主要構造材には強度と耐朽性に優れるクリを用い、これにモミ属（モミと考えている）の板³⁾を組み合わせたことを示しているといえよう。SK57の隅から検出された杭もクリと同定されたが、井戸戸という日常生活に欠かせない施設の構築材であることから、上記の杭とは明かに異なった用材となったものと思う。また、同定された針葉樹7 Taxaの中でもモミ属が最も多く用いられていることは、当時の森林植生の中にモミ属（モミ）が多く含まれていた、すなわち当時の人々にとってモミ（属）が身近な針葉樹であったことを示しているのかも知れない。ヒノキ属1点は曲物枠であり、これは容器の曲物とも共通する用材である。割裂性の良さや、加工性・耐朽性から選択されたものであろう。

柱にも井戸（構造）材と同様にクリが多用されている。この用材は掘立柱としては首肯できるものであるが、同時にハンノキ属やヤナギ属のように強度や耐朽性に難がありそうな樹種も用いられている。特にSI8検出試料では対象となった6点のうち5点がハンノキ属、1点がヤナギ属であった。また、SI14では、遺跡のある低（湿）地では入手できなかったと思われる単維管束亜属（わざわざ）使っており一方でヤナギ属も併用しているなど、用材が一貫性に欠けている印象を受ける。なお、筆者は以前富澤遺跡第15次調査出土材の検討に当たって、クリを含め杭に使用されていた樹種のはほとんどは低湿地には自生しないため自然堤防上などの乾性な微高地に生育していたものであろう（高橋 1987）としたが、少なくともクリは流水面との比高がそれほど大きくなない小河川の岸や、ヨシの生育しているような低湿地にも生育可能であるから、その生育地として周囲に微高地などの乾性な立地の存在をあえて想定する必要はなさそうである。したがって、上記の単維管束亜属などにより他所から運んできたと思える樹種もあるものの、多くは遺跡のある低地内で入手可能であったと思う。

漆器を中心とした容器類の用材はケヤキが多く、今日の用材と同様と言えよう。

曲物はヒノキ属が多く、モミ属・スギのいずれも針葉樹が用いられていた。モミ属の多用されている草履⁴⁾・箸・木簡状製品などとともに、木材を割って薄板や小角材を得ていた時代の樹種選択を表しているものといえよう。すなわち、割裂性の良さを理由にこれらの針葉樹を選んだものと考える。

櫛は古代のものとされる1点と中世とされるもの3点が対象とされ、中世とされる3点はいずれもイスノキに同定された。イスノキの現生種は上記のように関東南部以西南の常緑樹林内にのみ自生するとされていることから、試料も現地生の材料を加工したものではなく関東以西からもたらされたものであろう。本遺跡より南に位置するものの、やはり現生種の自生しない福島市御山千軒遺跡からも平安時代前期（9世紀後半）とされるイスノキ製の櫛1点の出土が報告され、同様に遠方から搬入されたものと考えられている（鶴倉 1983）。この点に関して報告書では‘他に多数の樹木が存在しながら櫛の木だけが他地方それも南の遠方からもとめて加工されたのか、製品として移入されたものは不明である’（鈴鹿 1983）としているが、原本を遠方から求めて当地で製品に加工したとするよりも、当時の物流や人的な交流の中で製品として搬入された可能性の方が大きいと筆者は考えている。

〈木材の伐採季節について〉

杭とされる試料の中に樹皮の残存したものが7点（No152、154、167、170、199、202、207）認められた。いず

れもヤナギ属に同定されたが、4点（No167、170、201、207）は道管が放射方向に2～4個作られたばかりの春季⁵⁾に、3点（No152、154、199）はほぼ当年の生長を終えようとするか終えてしまったと思われる秋季⁶⁾に伐採されたものと判断できた（写真図版12）。伐採時期の違いが使用時期の違いを示しているとするにはいくつかの前提条件や仮定が必要になるが（高橋 1988）、伐採後長期間乾燥すると樹皮の剥離をもたらすこのような試料は得られないであろうから、おそらく伐採直後に使われたものと考えている。秋季としたものはかなりの時間幅をもっている可能性はあるものの、ここでは一連の杭列に使用されていた杭材の中に明らかに伐採時期の異なるものが含まれていることと、そのことから考えて全ての杭が一時期に打ち込まれたものではない可能性があることを指摘したい。

また、柱とされる試料の中にも2点（No309、312）の樹皮付きの試料が認められた。これらは出土遺構も樹種も異なっていたが、ともに秋季に伐採されたものと判断できた。木材利用の立場では、落葉時（晚秋～晩冬）に伐採した材料の方が狂いや割れなどが少ないとされているが、これらの試料はそうした利用が当時から行われていたことを示しているものかも知れない。

注

- 1) 遠方から運搬するすれば、伐採から使用までの間に多少とも乾燥が進むことが考えられる。その場合には乾燥時間の長さに比例して樹皮の剥離の程度も大きくなるであろう。したがって、樹皮付きの試料の存在は伐採後間もない時期での使用、ひいては遠方からの運搬のなかったことを示していると考える。
- 2) 高木性の樹種4 Taxa（モミ属・クヌギ属・クリ・ケヤキ）4点のうち、モミ属（No192）は板材、クリ（No. 193）は角材と他の試料とは形状が異なっていることから転用の可能性を考えた。
- 3) クリ3点のうち2点は明らかに他の板材とは形状が異なり、補強材と考えられている。
- 4) 群馬県高崎市吹屋遺跡出土の中世（13c 後半～14c 前半）のものとされる板草履8点（板草履かとされるもの1点を含む）は、いずれもヒノキ属（報文中ではヒノキ類と表記）に同定されている（鈴木・能城 1982）。これはヒノキの現生種の自然分布域内にある吹屋遺跡と、ヒノキの分布北限より北に位置し、モミが潜在自然植生の主要構成種と考えられている本遺跡の周辺植生の違いを反映しているものかもしれない。
- 5) ここでは生物季節的な意味での春を指し、必ずしも気象学的な季節とは一致しない。ヤナギ属は種によって開花が開葉に先行するものとほぼ一致するものがあるが、材形成（細胞分裂）の開始が開花（開葉）に先行するものかどうか、先行する場合にはどの程度の日数なのかはわからない。しかし、形成された細胞数が少ないことから、これらの試料は開花または開葉の前後に伐採されたものと考えている。ただし、これらがすべて同一年に伐採された保証はないことはいうまでもないだろう。
- 6) 同じく生物季節的な意味での秋であって、正確には晩夏以降冬季（翌春の生長開始以前）のかなり長い期間のどこかで伐採されたとしか言えない。

引用文献

- 平井 信二 1979～1982 「木の事典 第1巻～第17巻」、かなえ書房。
- 佐竹 義輔・原 寛・亘理 俊次・富成 忠夫（編） 1989 「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」、平凡社、321・305pp.
- 崎倉巳三郎 1983 御山千軒遺跡から出土した木質遺物、「福島県文化財調査報告書第109集 東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅵ 御山千軒遺跡」、福島県教育委員会・日本国有鉄道、付編 9-30.
- 鈴鹿八重子 1983 木製品の材質について、同上（本編）、307-310.

- 鈴木 三男・能城 修… 1982 吹屋遺跡出土木材の樹種、「元島名B・吹屋遺跡 一関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第4集－」、群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団、122-123.
- 高橋 利彦 1987 富沢遺跡出土材同定、「仙台市文化財調査報告書第98集 富沢 仙台市都市計画道路長町・折立線建設に伴なう富沢遺跡第15次発掘調査報告書」、仙台市教育委員会、397-412.
- 1988 富沢遺跡（総合支所予定地）出土材同定、「仙台市文化財調査報告書第114集 富沢遺跡－第28次発掘調査報告書－」、仙台市教育委員会、131-136.

第43表 下飯田遺跡出土材の樹種

試料番号	用 途	時 代	樹 種	試料番号	用 途	時 代	樹 種
1	草履	中世	モミ属の一種	74	木座状	中世	スギ
2	下駄	中世	ケヤキ	75	不明	中世	ハンノキ属の一種
3	下駄	中世	タリ	76	虫物	中世	スギ
4	草履	中世	モミ属の一種	81	木縫		コナラ属コナラ亞属コナラ節の一種
5	櫛	中世	イスノキ属類似種	85	箸	中世	アスナロ類似種
6	櫛	中世	イスノキ属の一種	86	木箆状	中世	モミ属の一種
7	櫛	中世	イスノキ属の一種	89	草履	中世	スギ
8	曲物底	中世	ヒノキ属の一種	97	漆塗椀	中世	ケヤキ
9	木彫状	中世	モミ属の一種	103	不明板状	中世	アスナロ
10	木彫状	中世	スギ	115	柱	7c	コナラ属コナラ亞属コナラ節類似種
12	曲物底	7c末~8c?	ヒノキ属の一種	117	不明	7c末~8c	モミ属の一種
14	木彫状	中世	モミ属の一種	120	不明	7c?	マツ属複管束亞属の一種
20	草履	中世	モミ属の一種	121	柱	7c	タリ
21	草履	中世	モミ属の一種	123	不明板状	中世	タリ
22	木彫状	中世	モミ属の一種	124	曲物底		ヒノキ属の一種
26	草履	中世	スギ	127	容器底	中世	ヒノキ属の一種
29	桶底?	中世	スギ	132	容器	7c?	ケヤキ
30	木彫状	中世	モミ属の一種	135	容器底	7c?	ヒノキ属の一種
33	杓	中世	エゴノキ属の一種	136	容器底?	7c?	ヒノキ属の一種
34	箸	中世	モミ属の一種	138	不明板状	中世	スギ
35	箸	中世	モミ属の一種	139	不明板状	中世	スギ
39	杓	中世	ケヤキ	141	不明板状	中世	スギ
40	容器	中世	トチノキ	142	有孔木筒状	中世	モミ属の一種
44	曲物底	中世	ヒノキ属の一種	143	有孔木筒状	中世	モミ属の一種
45	曲物底	中世	ヒノキ属の一種	144	不明板状	中世	スギ
46	曲物底	7c末~8c?	ヒノキ属の一種	144	不明板状	中世	ヒノキ属の一種
47	井戸曲物	中世	ヒノキ属類似種	146	草履	中世	モミ属の一種
48	木彫状	中世	モミ属の一種	147	へら状	中世	モミ属の一種
52	柱	中世	タリ	148	へら状	中世	モミ属の一種
58	櫛	7c?	広葉樹(散孔材)	149	不明板状	中世	ヒノキ属の一種
62	箸	中世	モミ属の一種	150	不明	中世	アスナロ
68	柱?	中世	タリ	151	杭	7c末~8c	広葉樹(散孔材)
69	柱?	中世	タリ	152	杭	7c末~8c	ヤナギ属の一種
70	曲物底?	中世	モミ属の一種	153	杭	7c末~8c	ケヤキ
71	不明板材	中世	スギ	154	杭	7c末~8c	ヤナギ属の一種
72	不明板材	中世	モミ属の一種	155	杭	7c末~8c	ヤナギ属の一種

試料番号	用途	時代	樹種	試料番号	用途	時代	樹種
156	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	193	杭	7c末-8c	タリ
157	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	194	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種
158	杭	7c末-8c	広葉樹(散孔材)	195	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種
159	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	196	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種
160	杭	7c末-8c	ニワトコ類似種	197	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種
161	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	198	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種
162	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	199	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種
163	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	200	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種
164	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	201	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種
165	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	202	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種
166	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	203	杭	7c末-8c	コナラ属コナラ亜属タヌキ節の一種
167	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	204	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種
168	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	205	杭	7c末-8c	ニワトコ類似種
169	杭	7c末-8c	ニワトコ	206	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種
170	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	207	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種
171	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	215	不明板状	中世	モミ属の一種
172	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	216	筈	中世	スギ
173	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	219	柄?	7c?	モミ属の一種
174	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	224	杵	7c末-8c?	コナラ属コナラ亜属タヌキ節の一種
175	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	225	井戸柱	中世	タリ
176	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	226	井戸柱	中世	タリ
177	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	227	井戸柱	中世	タリ
178	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	228	井戸柱	中世	タリ
179	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	229	井戸継続	中世	タリ
180	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	230	井戸継続	中世	モミ属の一種
181	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	231	井戸継続	中世	モミ属の一種
182	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	232	井戸継続	中世	モミ属の一種
183	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	233	井戸継続	中世	モミ属の一種
184	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	234	井戸継続	中世	モミ属の一種
185	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	235	井戸継続	中世	モミ属の一種
186	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	236	井戸継続	中世	モミ属の一種
187	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	237	井戸継続	中世	モミ属の一種
188	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	238	井戸継続	中世	モミ属の一種
189	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	239	井戸継続	中世	モミ属の一種
190	杭	7c末-8c	ヤナギ属の一種	240	井戸継続	中世	モミ属の一種
191	杭	7c末-8c	広葉樹(散孔材)	241	井戸継続	中世	モミ属の一種
192	杭	7c末-8c	セイ属の一種	242	井戸継続	中世	モミ属の一種

試料番号	用 途	時 代	樹 種	試料番号	用 途	時 代	樹 種
243	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	280	柱	7c?	タリ
244	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	281	柱	7c?	タリ
245	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	282	柱	7c?	ハンノキ属の一種
246	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	283	柱	7c?	ハンノキ属の一種
247	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	284	柱	7c?	ハンノキ属の一種
248	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	285	柱	7c?	ハンノキ属の一種
249	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	286	柱	7c?	ハンノキ属の一種
250	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	287	柱	7c?	ヤナギ属の一種
251	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	288	柱	7c?	タリ
252	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	289	柱	7c?	タリ
253	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	290	柱	7c?	タリ
254	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	291	柱	7c?	タリ
255	井戸縦枠	中世	タリ	292	柱	7c?	マツ属单球管束亞属の一種
256	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	293	柱	7c?	ヤナギ属の一種
257	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	294	柱	7c?	タリ
258	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	295	柱	7c?	タリ
259	井戸縦枠	中世	タリ	296	柱	7c?	タリ
260	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	297	柱	7c?	タリ
261	井戸縦枠	中世	モミ属の一種	298	柱	7c?	タリ
262	井戸横枠	中世	タリ	299	柱	7c?	タリ
263	井戸横枠	中世	タリ	300	柱	7c?	タリ
264	井戸横枠	中世	コナラ属コナラ亞属コナラ組の一種	301	柱	7c?	タリ
265	井戸横枠	中世	タリ	302	柱	7c?	タリ
266	井戸横枠	中世	タリ	303	柱	7c?	タリ
267	井戸横枠	中世	タリ	304	柱	7c?	タリ
268	井戸横枠	中世	タリ	305	柱	中世	タリ
269	井戸横枠	中世	タリ	306	柱	中世	タリ
270	桺	中世	タリ	307	柱	中世	ハンノキ属の一種
271	漆塗椀	中世	ケヤキ	308	柱	中世	ハンノキ属の一種
272	漆塗椀	中世	ケヤキ	309	柱	中世	サクラ属の一種
273	漆塗椀	中世	エゴノキ属の一種	310	柱	中世	カヤ
274	漆塗椀	中世	ケヤキ	311	柱	中世	カヤ
275	漆塗椀	中世	ケヤキ	312	柱	中世	タリ
276	漆塗椀	中世	ケヤキ	313	柱	中世	タリ
277	漆塗椀	中世	ケヤキ	314	柱	中世	タリ
278	漆塗椀	中世	ケヤキ	315	柱	中世	タリ
279	柱	7c?	タリ				

第44表 主な用途別の使用樹種組成

所属時期は古代（7世紀代および7世紀末～8世紀；古）と中世（中）に2大別した。
類似種としたものと？のついた用途・時期もそれぞれの樹種・用途・時期に含めた。

用 途	枕	井戸	柱		容器		曲物		草履		箸		櫛		下駄		その他		合 計
			古	中	古	中	古	中	中	中	古	中	中	中	中	中	中		
単維管束亞属			1															1	
複維管束亞属																		1	
モミ属	1	30							1	5	3					2	12	54	
スギ							1		1	2	1						7	12	
ヒノキ属*		1			2	1	2	3									2	12	
アスナロ											1						2	3	
カヤ					2													2	
ヤナギ属	47		2															49	
ハンノキ属			5	2												1		8	
クスギ節	1															1		2	
コナラ属*			1	1														3	
クリ	1	15	19	9											1		1	46	
ケヤキ	1				1	9									1			12	
イスノキ														3				3	
サクラ属					1													1	
トチノキ							1											1	
エゴノキ属							1										1	2	
ニワトコ	3																	3	
不明広葉樹	3												1					4	
小 計	57	47	28	14	3	13	2	5	7	5	1	3	2	4	26		219		
合 計	57	47	42		16		8	7	5	4		2		31					

* : 時期の確定していないもの各1点があるため用途別の組成と合計値は一致しない。

写真図版6 1. マツ属単維管束亞属の一種 №292

2. マツ属複維管束亞属の一種 №120

3. モミ属の一様 №245

写真図版7 4. スギ №26

5. ヒノキ属の一様 №8

6. アスナロ №103

写真図版8 7. カヤ №311

8. ヤナギ属の一様 №162

9. ハンノキ属の一様 №285

写真図版9 10. コナラ属コナラ亞属クスギ節の一様 №203

11. コナラ属コナラ亞属コナラ節の一様 №264

12. クリ №262

写真図版10 13. ケヤキ №2

14. イスノキ №7

15. サクラ属の一様 №309

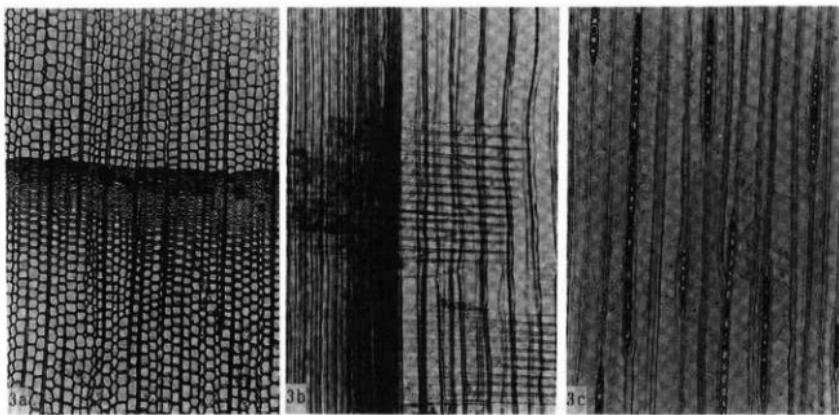
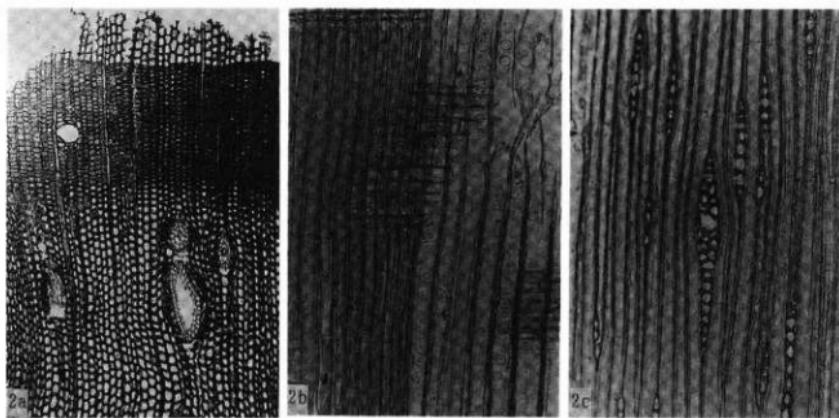
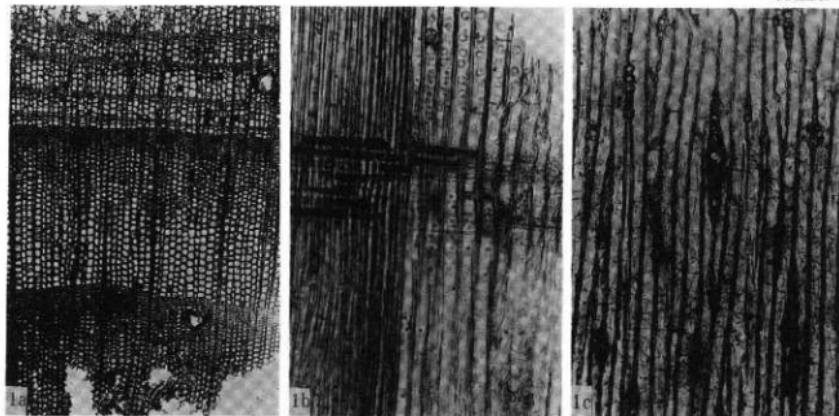
写真図版11 16. トチノキ №40

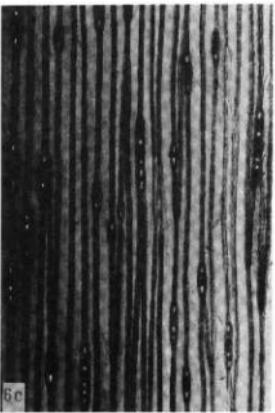
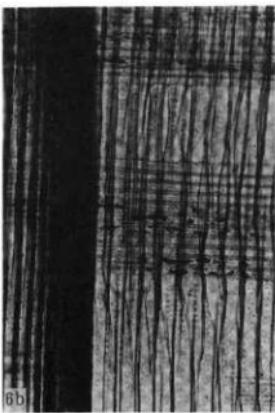
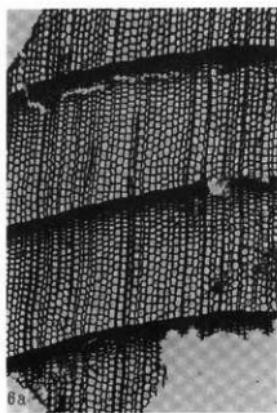
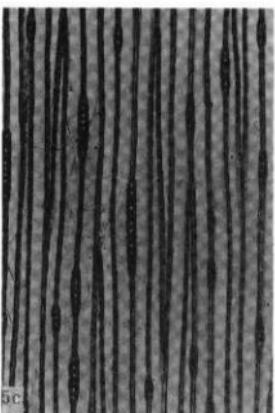
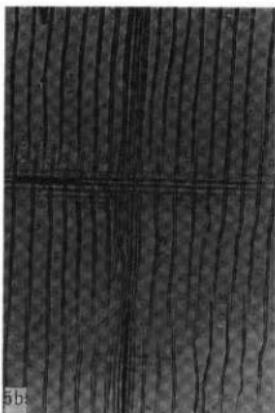
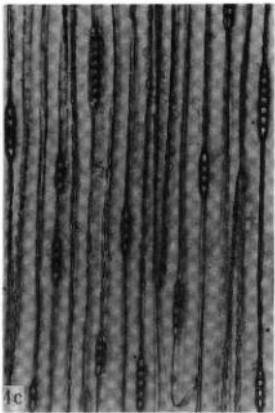
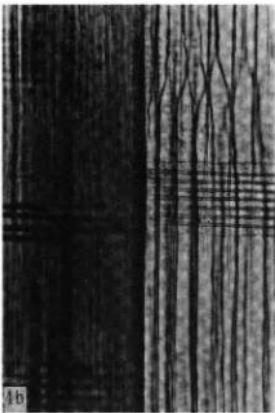
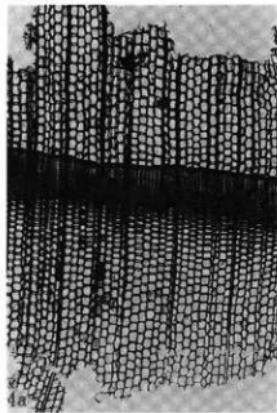
17. エゴノキ属の一様 №273

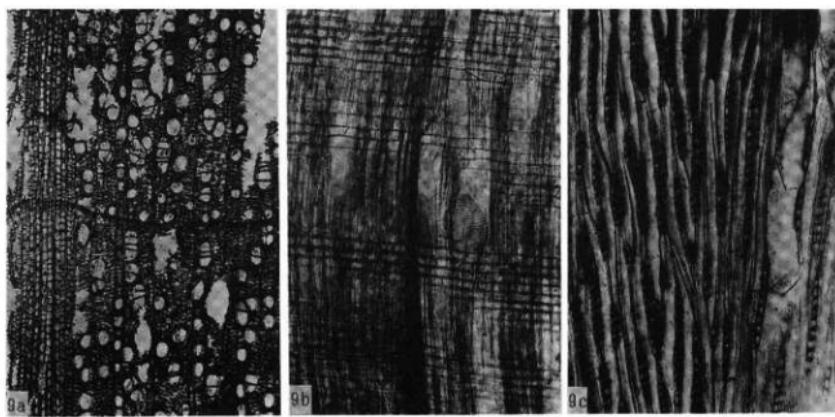
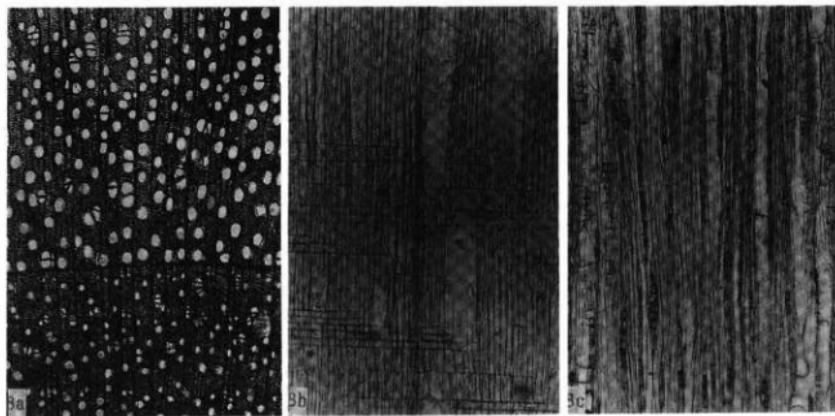
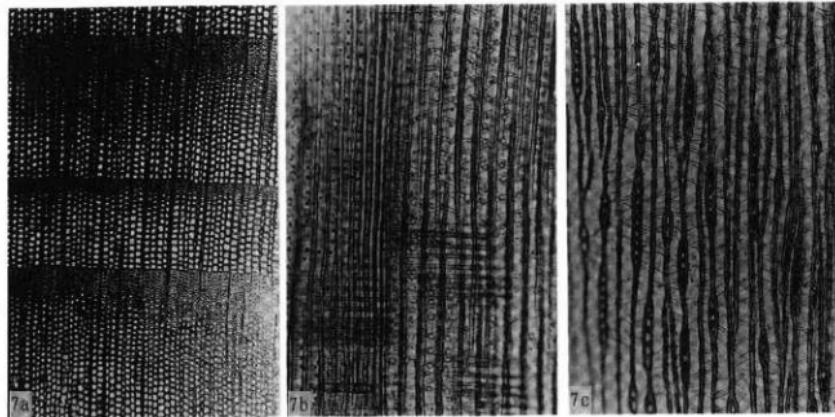
18. ニワトコ №169

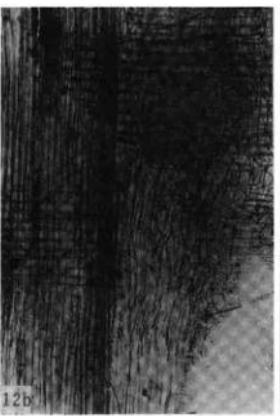
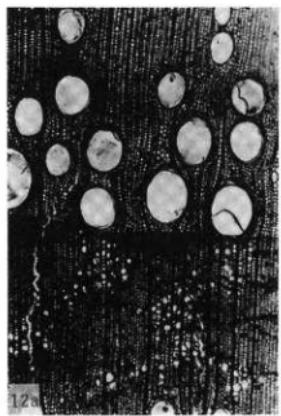
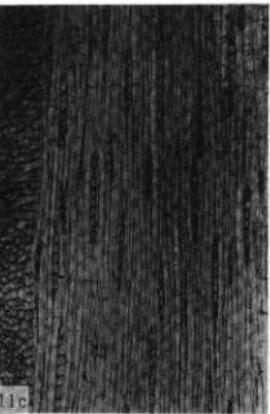
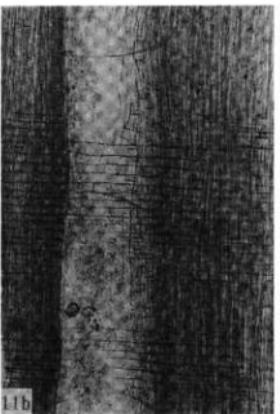
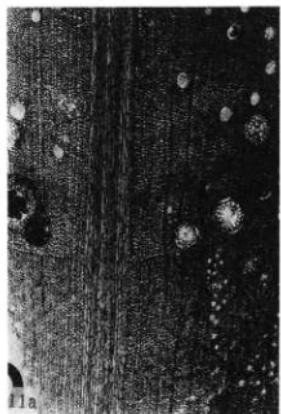
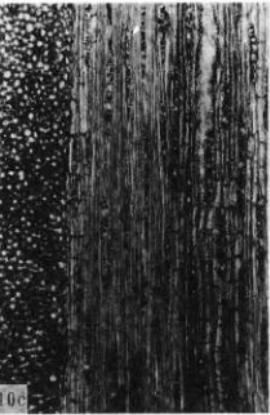
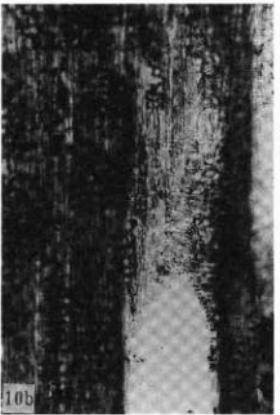
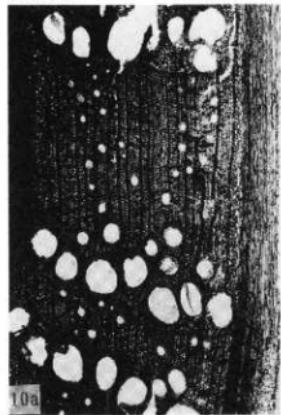
a. 木口 x40 b: 痕目 x100 c: 板目 x100

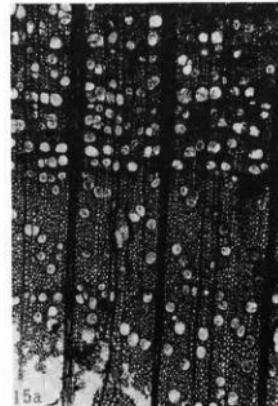
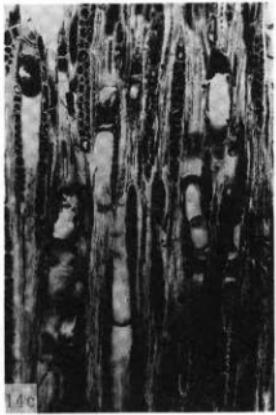
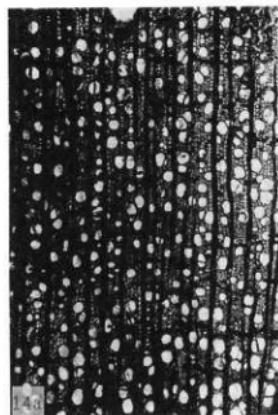
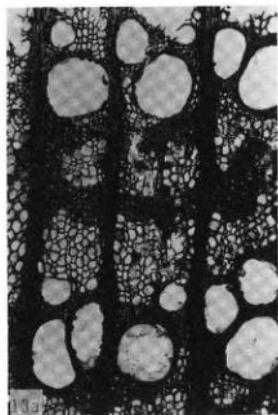
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上、痕目では左から右。

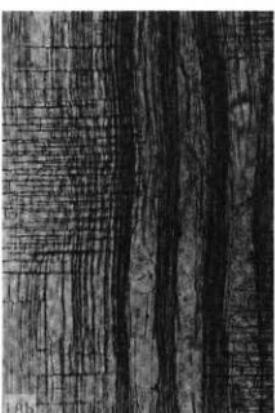
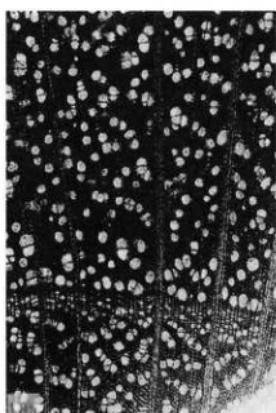
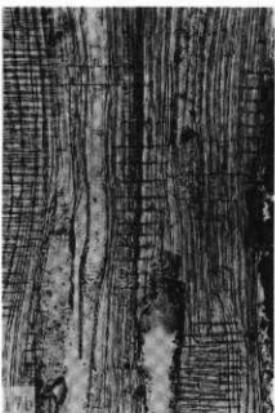
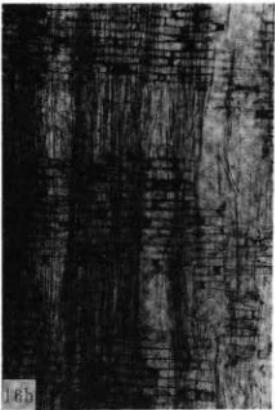
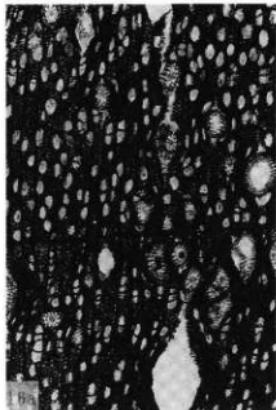


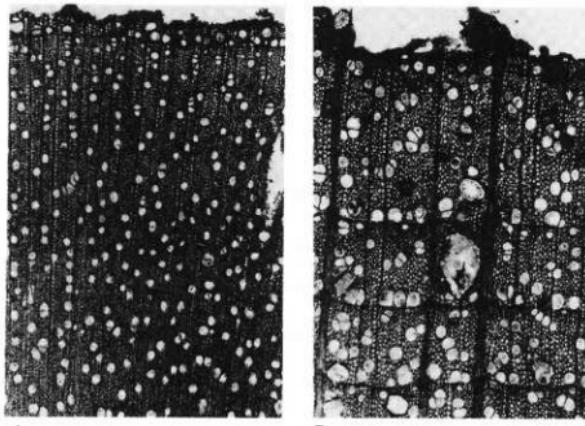












写真図版12 樹皮の残存していた試料の水口写真 ($\times 40$)。

A : 春季に伐採されたと判断した例 (ヤナギ属, No.167)。

B : 秋季に伐採されたと判断した例 (サクラ属, No.309)。

両者の最終年輪の構成は明かに異なっている。その最終年輪の外側 (画面最上部) に不連続な黒い塊となって見えているのが樹皮細胞。

4. 下飯田遺跡出土の貝類

石巻専修大学理工学部 大越 健嗣

はじめに

下飯田遺跡は、仙台市若林区下飯田および三本塚赤沼にかけて所在し、仙台平野に認められる三列の浜堤列のうちその最も内陸の第1浜堤列上に立地している。現標高は1.0m前後、遺構検出面である浜堤堆積物上面標高は0.9m前後である。発掘調査は1991年から1992年にかけて仙台市教育委員会によって実施され、7世紀後半代の集落跡および13世紀代と推定される中世屋敷跡、および4条の自然流路跡が確認された。

貝層は1992年7月、3区S R 4河川跡の調査に伴って発見された。S R 4河川跡は3区北東コーナー部で確認された浜堤列を切る河川跡であるが部分的な検出であるために全体的な規模、形状、方向などは明らかではない。全体的に堆積物中に泥炭状の植物遺体が目立ち、また花粉分析の結果（守山、1994）からも流速のよわい比較的停滞した水城環境が予測される。貝層は堆積物11層中に形成されたものである。貝殻の破片や殻皮は11層全域で見られるが、とりわけ11a、b、c、d層で顕著である。このうち11c、d層では貝層層厚が10cm前後によう純貝層に近い状況を呈している。貝層中からは土器、土製品、木製品等の人工遺物が多量に出土したが、これらはいずれも考古学的に7世紀後半代の年代観を有するものに限定され、貝層形成時期の年代を示すものと判断される。

本報告では、今回の発掘調査によって採集された貝層から得られた貝類について、その種組成、貝殻や殻皮の存在状態について検討するとともに、これらの貝層が自然貝層か投棄貝層かという点についてもあわせて検討した。本報告に先立ち、計測を担当された伊藤晋也氏、坂垣富士子氏、大友泰子氏、松葉美代子氏、関内文子氏、相沢せい子氏、考古学的見地からいろいろとご指導いただいた東北大学文学部考古学研究室の富岡直人氏に感謝の意を表する。

材料および方法

貝層の調査は8か所のトレチに限定して実施した。このうち7トレチでは3×12mの範囲に1mメッシュの方形区を設けた。各メッシュから出土した貝類について種同定を行ない、一部の種については殻高、殻長等の計測を行なった。出土サンプルは殻皮のみのものがほとんどで殻質層をともなったサンプルはごくわずかであったため、種同定、計測等は殻皮を用いて行ない、貝殻破片や巻貝のふた等のサンプルは实体顕微鏡で観察し、貝殻内表面のいわゆる内殻層が確認できるサンプルについては金属顕微鏡で構造観察を行なった。

結果および考察

確認された種はヤマトシジミ、イガイ、イシガイ、マツカサガイ、アサリ、スガイの6種であった。通常種同定は殻皮を含め、貝殻の形態や構造の特徴をもとに進行なわれるが、本調査のサンプルは、ヤマトシジミ、イガイ、イシガイ、マツカサガイについては殻皮のみ、アサリは貝殻破片、スガイはふたのみであったため、それらの形態や構造をもとに種同定を行なった。

ヤマトシジミは形態的にはマシジミと似ているが、出土サンプルの殻皮の輪肋が現生種のマシジミと比較して弱いこと、マシジミ殻皮に見られる焦げあと状の小黒斑がほとんど認められないこと等からヤマトシジミと同定した。一部のサンプルには弱い光沢が認められた。ヤマトシジミは後述のように多くのグリットから出土し、出土した貝殻の中では量的に最もも多い種であり、すべてのサンプルを調査できなかった。サンプルにはイシガイやマツカサガイも認められたことから、一部淡水性のマシジミが混在している可能性も考えられる。

イガイも殻皮のみのサンプルで完全個体は得られなかつたが、腹縫部の特徴等から近縁種のエゾイガイとは区別される。現生種のイガイ標本とも比較して同定した。一部の個体には真珠光沢の内殻層が残っていた。

イシガイとマツカサガイも殻皮等の特徴から同定した。イシガイでは殻頂部の彫刻や腹縁にわずかな湾入がみられること、マツカサガイでは、殻表の大きなさざ波模様とイシガイのような腹縁部の湾入がみられないことなどの特徴からそれぞれ同定した。

アサリは、貝殻破片の表面彫刻から、スガイはふたの形状から同定した。このほかに同定できなかった種（ふたのみの出土）が数種あった。

本調査で出土した貝類の多くは殻皮のみで出土し、殻質層は溶解または脱落したものと考えられる。殻質層の主成分は炭酸カルシウムと貝殻有機基質（organic matrix）であり、酸性溶液中では炭酸カルシウムは溶解し二酸化炭素が放出される。本調査で確認された貝類のうち、ヤマトシジミ、イガイ、イシガイ、マツカサガイは黒褐色の厚い殻皮層を持つという共通点があるが、これらの貝類だけが多数出土したことから酸性土壤により殻皮層の薄い貝類の貝殻（たとえばアサリ、マガキ等）が発掘までに失われてしまった可能性が考えられ、出土貝類相は貝層形成時の貝類組成を反映していないかもしれない。

本調査で出土した貝類は、海産種で通常潮下帯岩礁域に生息がみられるイガイ、内湾の潮間帯に生息するアサリ、スガイ、汽水産のヤマトシジミ、淡水産のイシガイ、マツカサガイとなり、生息域がそれぞれ異なっている貝類が同所的に出土しているのが特徴である。同所的出土の要因としては、まず、人為的な投棄貝層（貝塚）の可能性が考えられる。(1)出土し同定された貝類がすべて食用可能な貝類であること、(2)海産種から淡水産種まで含まれ、同所的な生息は不可能であることが投棄貝層である可能性を支持している。第261、262図には7トレーナーに設定した1mメッシュ、計36グリッドから出土したヤマトシジミ殻皮のうち、殻高、殻長の計測（推定値）が可能なものの1793個体についてそれぞれ計測を行なった結果を示した。横軸は2mmごとに殻高または殻長をとり、縦軸は個体数を示した。殻高は20mmにモードを持つ単峯型で平均値土標準偏差は 21.07 ± 2.46 であった。一方、殻長は24mmにモードを持つ単峯型で 24.23 ± 2.91 （平均値土標準偏差）の値をとった。殻高、殻長とも10mm以下の個体は認められなかった。現生のヤマトシジミの自然個体群では（実際には漁獲等の影響があり厳密には自然個体群とはいえないが）、谷田・平野（1952）の宮城県東名運河の殻長組成の調査では、殻長約7mm、11mm、16mmに3つの山があり（第263図）、10mm以下の小型個体も多数みられることが報告されている。高城川、貞山運河では山は1つのようにもみえるが、両者とも10mm以下の個体が多数含まれている。これらの結果は、本調査の小型個体がみられず、単峯型の殻長組成とは異なるており、本調査の殻長組成は自然個体群のある一部が抽出されたものと考えることができ、食料としての人為的な採集・投棄の可能性が考えられる。守田（1994）の花粉分析のデータも投棄貝層の可能性を支持している。

これに対して自然貝層の可能性も考えられる。(1)松本（1994）の推定海水準の調査から自然貝層の可能性が指摘されていること、(2)網走湖のヤマトシジミの調査によると、複数年稚貝の発生がほとんど認められないことがあり（宇藤、1981）、小型個体の認められない個体群が存在する場合があること、(3)イガイ等の貝類は前述のように殻皮が厚いが、自然死亡により足糸がはずれる場合や台風などにより海が荒れ足糸が岩礁からはずされ浜に打ち上げられた場合、貝殻の乾燥とともに殻皮が殻質層からはずることがしばしば認められる（第264図）。この場合、有機質で軽い殻皮は風によって波打際から海浜植物が自生しているところまで運ばれことがある。(4)本調査のヤマトシジミの殻長分析では10mm以下の小型個体は確認されなかつたが、小型個体は殻皮が相対的に薄く破壊されやすいうことを考えれば10mm以下の個体の殻皮は発見できなかった可能性もある。以上のことから川の上流から流されてきたイシガイ、マツカサガイの貝殻とはされてとばされてきたイガイの殻皮が汽水域のヤマトシジミの分布域に同所的に存在しそれが集積し貝層を形成したという可能性も否定できないものと思われる。ただ、計36のグリッドから採集されたイガイの殻皮が710で、同じグリッドのヤマトシジミの殻皮総数4056の2割弱になっており（第45表）、これだけの量のイガイ殻皮が自然状態で波打際から運ばれるのはかなり特殊な状態を想定しなければならぬ。

いだろう。

引用文献

松本秀明 (1994)

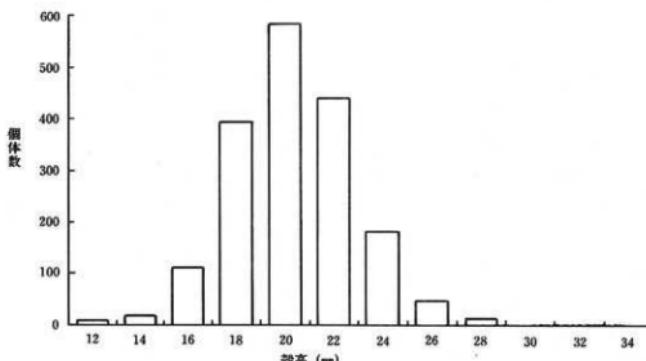
守田益宗 (1994) : 下飯田遺跡の花粉分析

谷田専治・平野和夫 (1952) : 松島湾附近のシジミに関する研究、東北水研報、1、68-81。

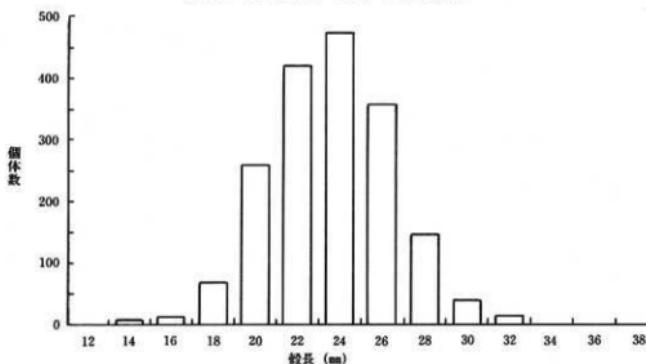
宇藤 均 (1981) : 網走湖産ヤマトシジミ *Corbicula Japonica* PRIME の生長、北水試報、23、65-81。

第45表 トレンチより出土した貝類

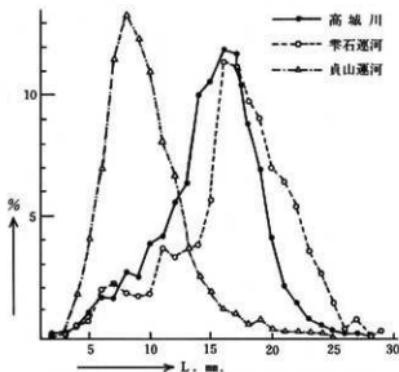
グリッド	貝						巻貝(フタ)	
	ヤマトシジミ			イガイ	イシガイ	マツカサガイ		
	計測可	計測不可	総数					
A-1								
A-2				4				
A-3	114	258	372	39	3			
A-4								
A-5	2	3	5	1				
A-6								
A-7	1	0	1		1			
A-8								
A-9	31	4	35					
A-10								
A-11								
A-12								
B-1	689	473	1,162	362	60	1	3	
B-2	731	1,106	1,837	179	24		2	
B-3	1	0	1		1			
B-4	133	303	436	32				
B-5								
B-6	2	15	17	2				
B-7								
B-8	4	16	20					
B-9								
B-10								
B-11				4				
B-12								
C-1	59	54	113	76	5	2		
C-2	25	26	51	8				
C-3								
C-4				2				
C-5								
C-6								
C-7								
C-8								
C-9								
C-10	1	5	6	1				
C-11								
C-12								
計	1,793	2,263	4,056	710	94	3	6	



第261図 出土したヤマトシジミの殻高分布



第262図 出土したヤマトシジミの殻長分布



第263図 3調査地区的ヤマトシジミの殻長の組成



第264図 殼皮と殻質層が分離したイガイ
(現生. 宮城県牡鹿町清崎産)

5. 下飯田遺跡出土脊椎動物遺存体

東北大学考古学研究室 富岡 直人

I はじめに

下飯田遺跡からは古墳時代後期から平安時代初頭（7～8世紀）と平安時代（10世紀）、中・近世に属する脊椎動物遺存体を出土した。

2 出土動物遺存体の内容

出土した動物遺存体の種名を第46a表に掲げる。これらの出土量と各属性は第46b表にまとめて記載している。以下に種類ごとに内容を詳述する。

魚類 1科1種、スズキのみが古墳時代後期に形成されたSR4河川跡の貝層からまとまって検出されている。左歯骨の骨高は9.6mmで体長50～60cm程度の成魚であったと推定される。付近の汽水域に入り込んだときに捕獲されたものであるとすると、4～9月に捕獲された可能性が高い（小坂 1969参照）。

鳥類 7世紀後半に属する遺構と考えられるSI9の第6床面から火を受けて白色に変化した骨片が出土しており、そのうち1点は趾骨であったが、いずれも目・科・種は特定できなかった。

哺乳類 ニホンジカは奈良時代末期前後に形成されたSR2河川跡の18層から左踵骨、時期不明のSR2の12層から左脛骨、SR4の貝層から右腸骨（寛骨）が出土している。

ウシは奈良時代末期前後に形成されたSR2の18層から右脛骨、右腸、時期不明のSR4の貝層から左基節骨、萌出直前下顎の左第4乳臼歯、SR4の12層からは左肋骨破片が出土している。仙台平野周辺でのウシの飼育開始年代は不明であるが、出土した乳臼歯は胎児あるいは出産直後の個体のものであると考えられ、この地域で種付けと出産といったウシ飼育がおこなわれていたことを明らかにした。また所属時期は不明であるがSR4の貝層から出土した基節骨は最大長46.5mmであり、西中川他（1988）が示す日本在来牛での平均値を6～10mm程度回っている。これは本資料が若齢であることを考え合わせれば大きな差ではないことが予想され、小型ウシが飼育・再生産されていたと考えられる。

ウマは所属時期が不明であるSR2から左第1大臼歯が1点出土しているのみである。

イエネコはやはり所属時期が不明であるSR2の11層から左右大腿骨、上腕骨、肩甲骨が出土している。これらはまとめて出土しており同一個体の可能性がある。所属時期は不明であるものの古代から中世（？）の時期と推定されることから、周辺の遺跡ではまだ類例がほとんど知られていない貴重な資料である。

3 下飯田遺跡における家畜と野生動物のあり方

出土した哺乳類遺存体は、ウシ、ウマやイエネコのように家畜として利用されたものと、ニホンジカのように野生動物として狩猟の対象となっていたものとに分けられる。家畜は動力として農耕、建築に利用される一方、狩猟獣とともに解体された痕跡がみられる。ニホンジカでは脛骨と腸骨、ウシでは脛骨と腸骨、イエネコでは大腿骨、上腕骨に銛利な刃器で傷つけた切痕がみられた。これらは食用となったり、膠の原料、雑具類に加工された可能性が考えられる。

ニホンジカの脛骨は近位端前方を長さ2cm程にわたってそぎ落とされている。これは膝関節部をはずすために膝蓋骨のわずかに下の部分から切り込むことによって膝関節をはずし、手際よく解体されたものである。

ウシの腸骨には激しく何回にもわたって両面（背側・腹側）から切りつけられた痕跡がある。これは仙椎近くの胴部から下肢特に腰肉・腿肉へをはずすために残された痕跡であり、肉食のためにこそ意義がある解体法が採られたと考えられる。ウシの脛骨の遠位端にも鋭利な刃器の切痕と、骨体を横位に折り割った痕跡（螺旋状の割れ）が観察される。また、S R 4の12層から出土したウシの左肋骨にも鋭利な刃器の切痕がみられ、肋骨周辺の肉（バラ）をはずす際に残された痕跡であると考えられる。

これらは奈良時代末頃におこなわれた解体方法を具体的に示唆する好資料であるとともに、肉食の風習、あるいは資材とする風習が盛んであったことを示す資料である。

また、イエネコの遺存体のはほとんどにも鋭利な切痕がみられる。これらはニホンジカやウシでみられたような深い傷を残すような激しい切痕ではなく、骨に1mm未満程度の切痕を残す程度の軽微な解体痕跡であり、処理具の違いを伺わせる。

古墳時代の堅穴住居跡の床面から出土した焼けた骨片には、鳥類と哺乳類が含まれていた。これらはカマドなどで長時間強い火を受けたため骨体が白色に変化し破片になってしまっている。同じように哺乳類骨が破片化した資料は仙台市山口遺跡の奈良時代のカマドからも出土しており（富岡1991）、食料残渣あるいは祭祀にかかる残渣であると考えられる。

本遺跡で出土量が多かった脊椎動物遺存体はウシであったが、これは周囲の湿潤な環境においてウシの踏破性が適応していたことの反映と考えられる。特にS I 9堅穴住居跡から検出された巨大なクリ材を当時の悪路の中から搬入するには、ウシが欠かせない動力であったのではないだろうか。

引用文献

- 小坂昌也 1969 「仙台湾岸スズキの生態」『東海大学海洋科学部』3: pp. 67-85
富岡直人 1991 「出土骨同定 仙台市山口遺跡第10次調査 S12堅穴住居跡カマド出土骨片について」『山口遺跡 第9次・第10次発掘調査報告書』(仙台市文化財調査報告書第151集) : pp. 96-97
西中川駿、松元光春 1989 「日本在来牛および現代和牛（黒毛和種）の骨に関する形態計測学的研究」『古代遺跡出土骨からみたわが国の牛、馬の起源、系統に関する研究 一とくに日本在来種との比較ー』(昭和63年度文部省科学研究費研究成果報告書) : pp. 3-14

脊椎動物門 VERTEBRATA

硬骨魚綱 OSTEICHTHYES

スズキ科 Serranidae

スズキ *Lateolabrax japonicus*

哺乳綱 MAMMALIA

ウマ目（奇蹄目） Perissodactyla

ウマ科 Equidae

ウマ *Equus caballus*

ウシ目（偶蹄目） Artiodactyla

イノシシ科 Suidae

イノシシ *Sus scrofa*

シカ科 Cervidae

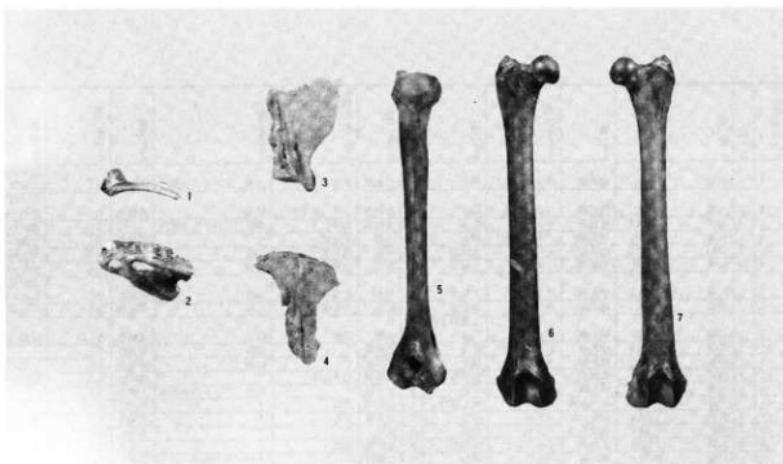
ニホンジカ *Cervus nippon*

ネコ目（食肉目） Carnivora

ネコ科 Felidae

イエネコ *Felis catus*

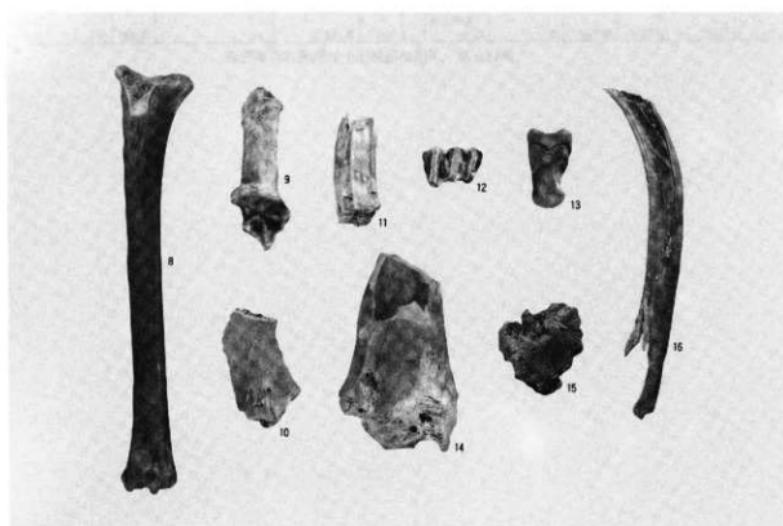
第46a表 下飯田遺跡出土脊椎動物遺存体種名表



写真図版13-1 出土動物遺存体

(scale 3/4)

魚類 1・2 スズキ (1 左前上顎骨 2 左歯骨)
哺乳類 3～6 イエネコ (3・4 右肩甲骨 5 左上腕骨 6 右大腿骨 7 左大脛骨)



写真図版13-2 出土動物遺存体

(scale 3/8)

哺乳類 8～16 ニホンジカ (8 左脛骨 9 左踵骨 10 右脛骨)
11 ウマ (左第1大臼歯)
12～16 ウシ (12 左第4乳臼歯 13 左基節骨 14 右脛骨遠位端
15 右脛骨 16 左肋骨)

遺跡番号 No.	層位 layer	剖面 stratigraphic profile	骨 bone	種名 species	部位 part	部分位置 part position	測定値 measured value	傷害 damage	色調 color	風化 weathering	備考 Remarks	
1	3	12層	SR4	哺乳類	ウツボウシ	肋骨	L R	骨幹部 骨干部	赤黒	切痕、スパイアル割れ	茶褐色	なし
2	2	11層	SR2	哺乳類	ニホンジカ	腰骨	L R	骨幹部 骨干部	じなご化骨化了	切痕	茶褐色	なし
3	2	10層	SR2	哺乳類	ウシ	腰骨	L R	骨幹部 骨干部	骨化了	切痕、スパイアル割れ	3	全長29.0mm 幅6.70mm
4	2	10層	SR2	哺乳類	ニホンジカ	腰骨	L R	骨幹部 骨干部	骨化了	?	茶褐色	なし
5	2	12層	SR2	哺乳類	イヌ科	大腿骨	R	完形	骨化了	切痕	茶褐色	なし
6	2	12層	SR2	哺乳類	イヌ科	大腿骨	L	完形	骨化了	切痕	茶褐色	なし
7	2	12層	SR2	哺乳類	イヌ科	上腕骨	L	完形	化骨化了	切痕	茶褐色	なし
8	3	5層	SR4	哺乳類	ウシ	上腕骨	L	完形	骨化化了	なし	茶褐色	なし
9	2	12層	SR2	哺乳類	ウツボウシ	臼齒	L	完形	赤黒	なし	茶褐色	なし
10	3	5層	SR2	哺乳類	ニホンジカ	歯骨	?	骨幹部	?	切痕	茶褐色	なし
11	2	10層	SR2	哺乳類	ウシ	腰骨	R	骨幹部	?	切痕	茶褐色	なし
12	2	12層	SR2	哺乳類	イヌ科	足甲骨	R	部位	化骨化了	?	茶褐色	なし
13	3	5層	SR2	哺乳類	不明	不明	?	骨幹部	?	切痕、スパイアル割れ	茶褐色	なし
14	3	5層	SR2	哺乳類	スズキ	前上顎骨	L	部位	大形	?	茶褐色	なし
15	3	5層	SR2	哺乳類	スズキ	歯骨	L	部位	大形	?	茶褐色	なし
16	3	5層	SR2	哺乳類	スズキ	腹骨	M	部位	?	?	茶褐色	なし
17	3	5層	SR2	哺乳類	スズキ	腹骨	M	部位	?	?	茶褐色	なし
18	2	12層	SR1	哺乳類	イヌ科?	肩甲骨	R	部位	赤黒	?	茶褐色	なし
19	3	5層	SR4	哺乳類	不明	不明	?	骨幹部	?	スパイアル割れ	茶褐色	なし
20	4	?	SD5	哺乳類	ウツボウシ	上顎後臼齒	?	歯片	歯缺?	なし	茶褐色	なし
21a	3	第6床底	S19	哺乳類	不明	不明	?	骨幹部	?	?	白色	チャート化
21b	3	第6床底	S19	鳥類	不明	不明	?	骨幹部	?	?	白色	チャート化
22	3	第6床底	S19	哺乳類	不明	不明	?	骨幹部	?	?	白色	チャート化
23	3	第6床底	S19	鳥類	小形鳥類	尾骨	R	部位	?	?	白色	チャート化
24	3	第1床底	S19	哺乳類	不明	不明	?	骨幹部	?	?	白色	なし
25	4	カマド前灰岩	S12	哺乳類	不明	不明	?	骨幹部	?	?	白色	チャート化
26	3	5層	SR4	哺乳類	ウシ	下顎第4歯臼齒	L	完形	唇山過大	なし	茶褐色	なし

第46b表 下飯田遺跡出土動物遺存体属性表

6. 仙台市下飯田遺跡から検出された穀物の灰像

東京大学総合研究資料館 松谷 晓子

1 はじめに

遺跡から出土する灰を顕微鏡で観察すると、さまざまな形態の細胞が観察されることがある。これらの大部分は、イネ科植物の表皮細胞に由来する珪酸形骸（シリカスケレトン）である。イネ科植物の表皮細胞には高温や酸に耐性のある珪酸が多く含まれているため、燃焼によって有機物が消失した後の灰の中に、珪酸の含まれていた部分が残る。灰像というのは植物を灰化したときに顕微鏡で観察される組織像を指し、この時に残った無機物には珪酸ばかりではなくカルシウムも含まれるが、カルシウムは酸に溶けてしまうことが多く、長期間にわたって埋もれていた遺跡の灰に残っているのは、珪酸による表皮細胞の形骸であり、イネやアワなどに特徴的な灰像を見いだすことによって、イネやアワなど穀物の存在を知ることが出来る（渡辺 1973、1974、1981）。

筆者はこれまで仙台市諸遺跡で灰像による観察を行なっているが、下飯田遺跡でも、7世紀後半のカマド跡や中世の土壌から灰が採取されており、イネ科の栽培植物が存在したかどうかを知るため、顕微鏡による観察を行なった。

試料は、第47表に示してあるように、7世紀後半のカマド跡と土壌から採取されたもの17点および中世の土坑5点の計22点である。

2 方法

灰像の検出は、以下のような手順で操作を行なった。

- i 試料の一部を時計皿に移し、稀塩酸を注ぐ。カルシウムが多いときは発泡して溶解する。
- ii 時計皿を回転させながら砂や土が沈んだ頃を見計らって、懸濁液をるつぼに空け、しばらく放置する。
- iii 上澄みを捨て、残った部分を蒸留水にて水洗する。この操作を3回繰り返す。
- iv 洗浄および乾燥の目的でアセトンで処理を行なう。
- v ホットプレートで乾燥させる。
- vi 封入剤で封入し、検鏡用プレパラートを作成する。
- vii 検鏡および写真撮影を行なう。

3 結果

下飯田遺跡の試料は22点とも稀塩酸処理で発泡しなかった。すなわち、カルシウムは存在しないことを意味している。作成されたプレパラートを検鏡した結果、さまざまな灰像が検出された。スキ属やヨシの稈と考えられる灰像も含まれているが、イネ科の作物としては、藁と粉穀の灰像によりイネの存在が判明した。

イネ粉穀は、長い側枝を持ち、側壁が波状で、大きな乳頭突起を有する長細胞の存在が特徴的である（写真図版14の1-3）。この突起は側面観では「先端の尖ったくちばし状」（渡辺 1974、57頁）をしている（写真図版14の2、3）。イネ藁は、イネ細胞とも呼ばれるまゆ状をした細胞列の存在が目印になる（写真図版14の4-9）。イネ細胞は「蝶がはねをひろげて葉の縦の方向に1列に飛んでいるような恰好の細胞」（渡辺 1973、71頁）と表現されているように、まゆ状細胞は長軸方向に直角に連続して配列している。しかし、マコモやヤヤスカグサ属などイネ連（イネ族）にも同様の細胞列が存在するので、この細胞だけではイネとの断定は出来ない。刺毛（写真図版14の4）や乳頭突起のある独特的の汽孔（写真図版14の4、6、7）の存在などを合わせるとイネの可能性が高くなる。

イネの粉穀または藁と考えられる灰像が認められたのは、以下の試料である。

試料番号	試料	時代	灰像
No.1	S I 2	カマド前	7世紀後半 葦、初穀
No.5	S I 8	カマド堆積物	7世紀後半 葦
No.7	S I 9	カマド前第1床面	7世紀後半 葦
No.8	同上	カマド前第6床面	7世紀後半 葦
No.10	S I 10	床面	7世紀後半 葦
No.14	S I 14	カマド堆積物	7世紀後半 葦
No.17	S I 2	カマド堆積物	7世紀後半 葦
No.32	S K 30	土坑堆積物4層	7世紀後半 葦
No.33	S K 9	土坑堆積物	中世 葦、初穀
No.51	S K 74	土坑堆積物1層	中世 葦、初穀
No.52	同上	土坑堆積物2層	中世 葦、初穀
No.53	同上	土坑堆積物3層	初穀

このように、7世紀後半の遺構では17試料のうち7遺構8試料から主としてイネ藁と考えられる灰像および少量ではあるが初穀に相当する灰像も認められ、イネの存在が推定できた。このうち7試料はカマドの燃料と考えられるもので、ススキ属やヨシ、タケなどの灰像も存在するが、イネもカマドで燃やされたことを示している。土壤からの1試料は起源不明ということであるが、やはりイネ藁が含まれていた。観察されたイネの灰像の量は試料によってことなり、No.1とNo.8では多いが他の試料では少なかった。中世の試料5試料では、2遺構4試料からイネの存在が認められた。中世の土壤からの試料は、イネ初穀および藁の灰像がきわめて多く、他の灰像は混在していないと言えるくらいである。一方、ムギ類やアワ、ヒエ、キビなどの穀物の存在はどの試料についても確認することが出来なかつた。

4 考察

上記のように下飯田遺跡の7世紀後半のカマド跡と土壤および中世の土壤からの灰試料からはイネの初穀やイネ藁に由来すると考えられる灰像が検出された。仙台市の他の遺跡では、六反田遺跡の1号住居カマド灰（古墳時代以降）からは、イネ藁と初穀が、また7号住居（古墳時代以降）床面からもイネ初穀が灰像によって検出されている（松谷1987）。古墳時代の郡山遺跡（84次）のカマドからもイネ藁とイネ初穀の灰像が見いだされている（松谷1990a）。また、山口遺跡では奈良時代の住居3件と中世の井戸跡5、中世土倉跡2について、灰像を調べたが、住居跡、井戸跡、土倉からの試料のはほとんどに、イネ初穀およびイネ藁の灰像が観察されており、特に、井戸跡、土倉からの試料にイネ初穀とイネ藁の灰像が多かった（松谷1991）。井戸跡からの灰像でイネの初穀と藁が多かった例として、岡山大学構内遺跡での観察（松谷1990b）があるが、祭祀跡と考えられている。土坑や井戸からのイネの灰像はイネの存在を示すが、必ずしも燃焼されたことを意味しない。腐植によって珪酸分が残った可能性が高い。

文献

- 松谷曉子 1987 六反田遺跡出土物の灰像。「六反田遺跡Ⅲ」 仙台市教育委員会、397-399。
 松谷曉子 1990 a 仙台市郡山遺跡（第84次調査）の灰像。「郡山遺跡第84次・第85次発掘調査報告書」 仙台市教育委員会、101-106。

- 松谷曉子 1990 b 岡山大学構内遺跡から出土した炭化種子と灰像について。「鹿田遺跡Ⅱ」 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター、103-106。
- 松谷曉子 1993 山口遺跡出土試料の灰像。「山口遺跡－第9次・10次調査報告書」仙台市教育委員会。
- 渡辺直経 1973 灰像による穀物遺残の検出法（上）。考古学研究20-2、65-73。
- 渡辺直経 1974 灰像による穀物遺残の検出法（下）。考古学研究21-1、56-62。
- 渡辺直経 1981 遺跡の灰から穀物をさぐる－灰像による鑑別。「考古学のための化学10章」 東京大学出版会。

写真図版14説明

- イネ糊殻に特有の長細胞由来と考えられる灰像。視野を広範囲になるように低倍率で示してあるが、ほとんど純粹にイネ糊殻の灰像で構成されている。試料53。
- 側面観で観察された、イネ糊殻特有の長細胞由来と考えられる灰像。右方の黒いのはイネ細胞らしい。試料33。
- イネ糊殻（側面観）に由来すると考えられる灰像。試料5。
- まゆ状細胞の配列（イネ細胞）と刺毛および独特の気孔からイネ葉由来と考えられる灰像。試料1。
- まゆ状細胞列（イネ細胞）。試料14。
- 橢円形で内側に突起のある独特の気孔とイネ細胞（右上のX字状）。試料8。
- まゆ状細胞列（イネ細胞）と突起のある気孔。試料33。
- まゆ状細胞列（イネ細胞）。試料32。
- まゆ状細胞列（イネ細胞）。試料5。

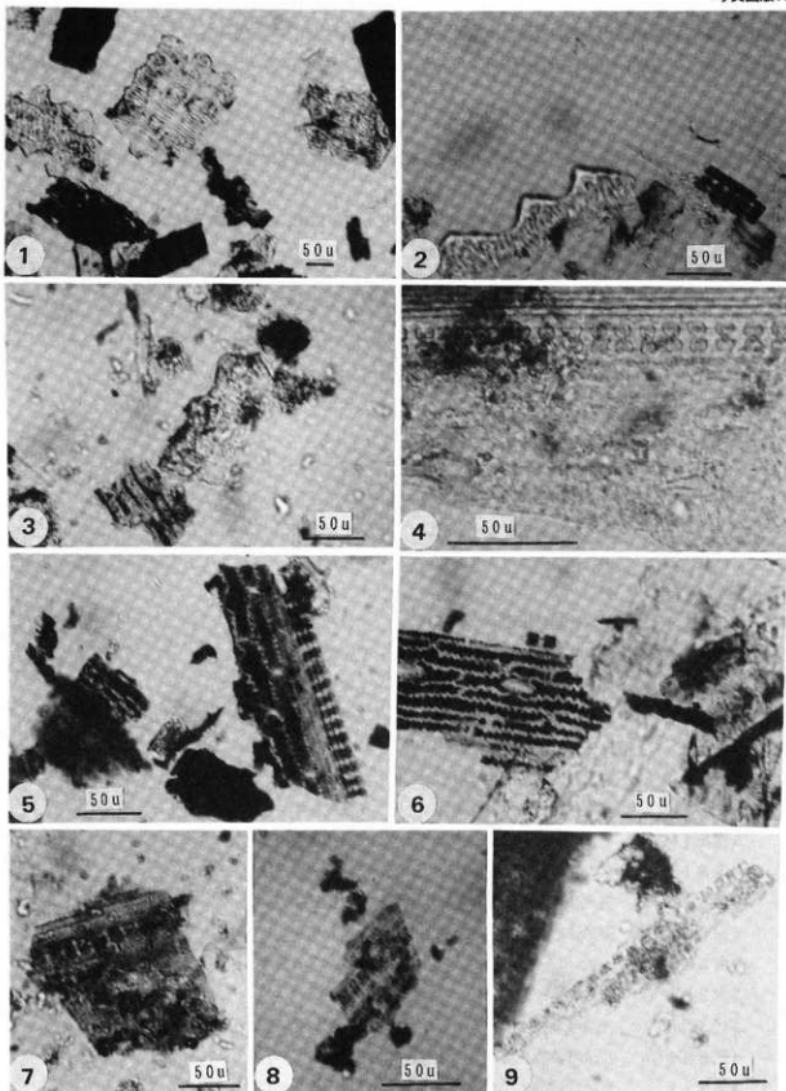
第47表 下飯田遺跡の灰像試料一覧

No.1	4区S I 2	堅穴住居跡床面カマド前	7世紀後半
No.2	3区S I 3	堅穴住居跡カマド堆積物	7世紀後半
No.3	同上	同上	7世紀後半
No.4	3区S I 4	堅穴住居跡床面カマド前	7世紀後半
No.5	3区S I 8	堅穴住居跡カマド堆積物4層	7世紀後半
No.6	同上	同上 9層	7世紀後半
No.7	3区S I 9	堅穴住居跡第1床面カマド前	7世紀後半
No.8	同上	同上 第6床面カマド前	7世紀後半
No.10	3区S I 10	堅穴住居跡床面	7世紀後半
No.13	3区S I 18	堅穴住居跡カマド堆積物	7世紀後半
No.14	3区S I 14	堅穴住居跡カマド堆積物	7世紀後半
No.15	4区S I 25	堅穴住居跡カマド堆積物	7世紀後半
No.16	3区S I 5	堅穴住居跡床面1号土壤	7世紀後半
No.17	4区S I 2	堅穴住居跡カマド堆積物	7世紀後半
No.30	3区SK26	土坑	古代（7c後半？）
No.31	3区SK27	土坑	中世以降
No.32	3区SK30	土坑堆積物4層	7世紀後半
No.33	4区SK9	土坑堆積物2層	中世
No.34	3区S I 5	堅穴住居跡カマド堆積物	7世紀後半

No.51 4区SK4 土坑堆植物1層
No.52 同上 2層
No.53 同上 3層

中世
中世
中世

写真図版14



7. 仙台市下飯田遺跡におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

1. はじめに

下飯田遺跡では、発掘調査によって、水田土壤と考えられる土層および畑作跡と考えられる遺構が検出されていた。この調査は、プラント・オパール分析を用いて、これらの土層や遺構における稲作跡の検証およびイネ科栽培植物の検討を試みたものである。

2. 試料

試料は、遺跡の調査担当者によって容量50cm³の採土管を用いて採取され、当研究所に送付されたものである。試料数は計20点である。

3. 分析法

プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原、1976）」をもとに、次の手順で行った。

- (1) 試料土の絶乾（105°C・24時間）、仮比重測定
- (2) 試料土約1gを秤量、ガラスピーブ添加（直徑約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
- (3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
- (4) 超音波による分散（300W・42KHz・10分間）
- (5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
- (6) 封入剤（オキット）中に分散、プレベラート作成
- (7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスピーブ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレベラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスピーブ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスピーブ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10⁻⁵g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケア科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である（杉山・藤原、1987）。

4. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を第48表および第49表に示す。なお、農耕跡の検証が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケア科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。卷末に各分類群の顕微鏡写真を示す。

5. 考察

水田跡（稲作跡）の検証や探査う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にプラント・オパール密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲

作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて、稲作の可能性について検討を行った。

2区河川跡（SR3）の2層と3a層、および4区河川跡（SR1）の2層は、土層の肉眼観察によって水田土壤と推測されていた。分析の結果、これらのすべての試料からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、近世とされる2層ではプラント・オパール密度が1,300～3,200個/gと比較的低い値である。直上の1層（現代の水田耕作土）ではイネのプラント・オパールが5,000個/g前後と高い密度で検出されていることから、2層で稲作が行われていた可能性は考えられるものの、1層から比較的最近のプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。中世とされる3a層では密度は800個/gと微量である。このことから、同層で稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層からの混入の危険性も否定できない。上記以外の層では、イネのプラント・オパールはまったく検出されなかった。

3区と4区の小溝遺構（SD57、SD82、SD18）および4区の鋤痕跡（SD13）は、畑作跡などの農耕跡と考えられていた。これらの遺構内の堆積土について分析を行った結果、SD57を除く各試料からイネのプラント・オパールが検出された。密度は600～1,700個/gと比較的低い値である。直上の1層（現代の水田耕作土）ではイネのプラント・オパールが7,000個/g前後と高い密度で検出されていることから、これらの遺構で稲作が行われていた可能性は考えられるものの、1層から比較的最近のプラント・オパールが混入した危険性も否定できない。

なお、プラント・オパール分析で同定される分類群のうち、栽培植物が含まれるものは、イネ以外では、キビ族（ヒエなどが含まれる）やムギ類、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）などがある。しかし、本遺跡ではいずれの試料からもこれらのプラント・オパールは検出されなかった。

6.まとめ

以上のように、水田耕作土（近世および中世？）と考えられていた土層では、いずれもイネのプラント・オパールが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。また、畑作跡と考えられていた遺構（奈良時代～平安時代）でも、ほとんどの試料からイネのプラント・オパールが検出され、稲作が行われていた可能性が認められた。ただし、プラント・オパール密度はいずれも比較的低い値であることから、土層（現代の水田耕作土）などからの混入の危険性も考えられる。

なお、イネ以外のイネ科栽培植物に由来するプラント・オパールはいずれの試料からも検出されなかった。

【参考文献】

- 杉山真二・藤原宏志（1987）川口市赤山陣屋跡遺跡におけるプラント・オパール分析、赤山—古環境編ー、川口市遺跡調査会報告、10：281-298。
- 藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の硅酸体標本と定量分析法ー、考古学と自然科学、9：15-29。
- 藤原宏志（1979）プラント・オパール分析法の基礎的研究(3)－福岡・板付遺跡（夜日式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（*O. sativa L.*）生産量の推定ー、考古学と自然科学、12：29-41。
- 藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査ー、考古学と自然科学、17：73-85。

第48表 仙台市下飯田遺跡におけるイネのプラント・オパールの検出状況

EC	地点(遺構)	層番(試料)	密度 (g/cm³)	備考
2区	河川跡(SR3)	1層	5,600	現代の水田耕作土
		2層	3,200	水田土壤(近世)
		3a層	800	水田土壤(中世?)
		4b層	0	
		5層	0	
3区	小溝遺構(SD57)	1層	7,400	現代の水田耕作土
		露内地質土	0	奈良時代~平安時代
	小溝遺構(SD82)	2層(同上層)	700	
		露内地質土	600	奈良時代~平安時代
		2層(同上層)	700	
4区	河川跡(SR1)	1層	4,700	現代の水田耕作土
		2層	1,300	水田土壤(近世)
		3層	0	擬似畦畔B
		4層	0	
		5層	0	
4区	動底内堆積土	1層	6,700	現代の水田耕作土
		動底内堆積土	1,700	奈良時代~平安時代
	小溝遺構(SD18)	2層(同上層)	0	
		露内地質土	1,500	奈良時代~平安時代
		2層(同上層)	0	

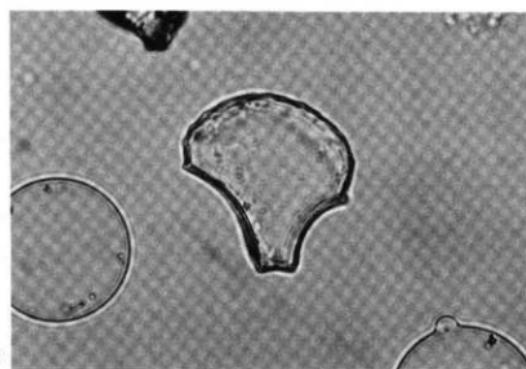
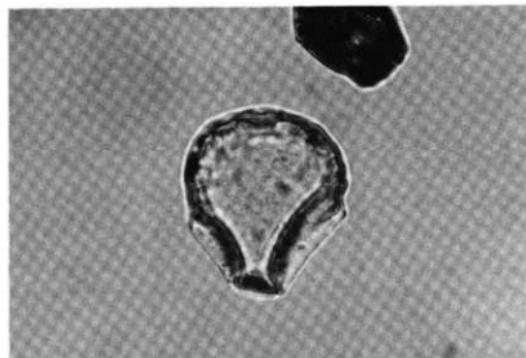
第49表 プラント・オパール分析結果

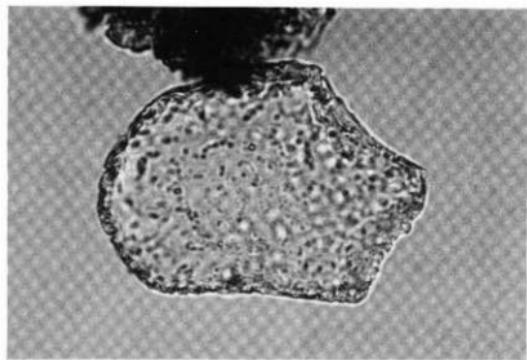
仙台市下飯田遺跡

地点	試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(初期量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ属科 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
2区 SR3地点	1	0	10	1.10	5,600	6.28	1,600	4,800	1,600	0
	2	10	33	1.16	3,200	12.58	0	5,600	800	0
	3a	43	8	0.92	800	0.58	1,600	800	800	0
	4b	51	24	1.03	0	0.00	0	2,200	700	0
	5	75	30	1.27	0	0.00	0	2,400	800	0
3区地点	1	-	-	1.27	7,400	-	700	8,100	0	0
3区 SD57地点	埋土	-	-	1.50	0	-	0	0	0	0
	比較土	-	-	1.45	700	-	0	700	0	0
3区 SD82地点	埋土	-	-	1.47	600	-	0	0	0	0
	比較土	-	-	1.37	700	-	0	0	0	0
4区 SR1地点	1	0	18	1.05	4,700	9.08	0	7,000	700	0
	2	18	27	0.87	1,300	3.06	2,700	4,700	0	0
	3	45	14	0.23	0	0.00	1,400	2,100	0	0
	4	59	4	0.84	0	0.00	0	0	0	0
	5	63	3	0.26	0	0.00	800	3,300	0	0
4区地点	1	-	-	1.31	6,700	-	0	6,700	0	0
4区 SD13地点	埋土	-	-	1.23	1,700	-	800	800	0	0
	比較土	-	-	1.58	0	-	800	1,600	0	0
4区 SD18地点	埋土	-	-	1.31	1,500	-	0	3,100	700	0
	比較土	-	-	1.42	0	-	0	800	0	0

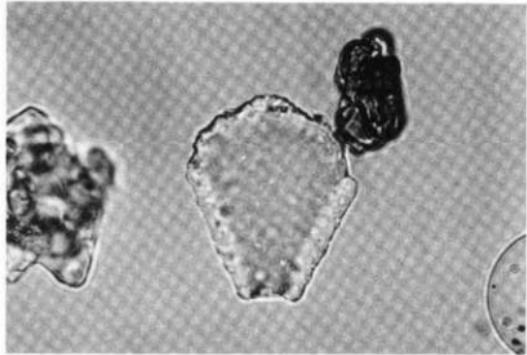
写真図版15 下飯田遺跡から検出されたプランクトン・オバールの顕微鏡写真

No.	分類群	地 点	試料名	倍率
1	イネ	3区	1層	400
2	イネ	3区	1層	400
3	ヨシ属	2区S R 3	1層	400
4	タケ亞科	3区	1層	400
5	ウシクサ族	3区	1層	400

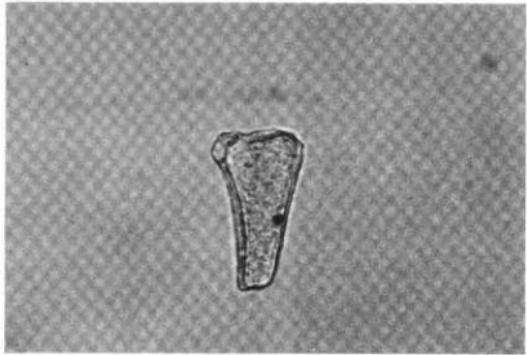




3



4



5

8. 下飯田遺跡出土土師器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三辻 利一

粘土は岩石が風化して生成したものであるが、その分布状況と化学特性については不明確な点が多い。しかし、須恵器や中世陶器の陶土の化学特性については窯跡出土須恵器や中世陶器の蛍光X線分析により、日本全域にわたってある程度は明らかにされている。しかし、同一地域内にある窯跡出土陶器胎土と、土師器・埴輪などの窯跡が残っていない土器の胎土は必ずしも同質ではなく、そのため、これらの土器の产地推定には窯跡出土須恵器の化学特性がそのままストレートに適用できない場合が多い。それでも、窯跡が残されていない土器類の胎土分析の研究は土器形式と胎土の化学特性との対応という形で基礎データが集積されつつある。これまでのデータでは土器形式と化学特性が対応しない場合がかなりあるということである。このことは何を意味するのか。同じ形式の土器があちこちで作られたために、化学特性と対応しなくなってしまったのではないか。したがって、同じ形式の土器が各地で作られたということは人が動き、土器形式が拡散して伝播したと考えてもよいのではないか。このような観点に着目して、基礎研究が進められている。

本報告では、7世紀代後半と推定されている飯田遺跡から出土した形式の異なる土師器胎土の蛍光X線分析の結果について報告する。すなわち、形式的に在地産とみられる土師器と、関東地域からの搬入品である可能性をもつ土師器の胎土が同質か、それとも、異質かについて検討した結果を報告する。

土師器試料はすべて、表面を研磨してのち100メッシュ以下に粉碎された。粉末試料は15トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3~5mmの鉛剤試料を作成して蛍光X線分析を行った。波長分散型の完全自動式の蛍光X線分析装置が使用された。標準試料には岩石標準試料J G-1が使用された。そして、全分析値はJ G-1の各元素の蛍光X線強度を使って標準化した値で表示された。

全分析値は表1にまとめられている。今回分析した土師器杯は形式からA群、B群、C群、D群、E群の5グループに分けられている。このうち、在地産と推定されるのはE群杯で、A、B、C群の杯は関東地域からの搬入品である可能性をもつ。果して、形式によって胎土の化学特性は異なるのであろうか。

はじめに、K、Ca、Rb、Sr因子を使って群平均法でクラスター分析を行った結果を第265図に示す。下段に並べた数字はコンピューターへの入力順番号であるとともに、試料番号でもある。そのうちNo.1~4はA群杯、No.5~7はB群杯、No.8~42はC群杯、No.43、44はD群杯、No.45~84はE群杯である。デンドログラムを点検すると、No.1、2のA群杯はNo.54のE群杯とともに1つの枝に結び付けられており、これらの杯の胎土は類似していることを示している。No.1、2は土器形式と胎土の化学特性とは一致した証である。しかし、No.54とは一致しない例となる。さらに、形式的には同じA群杯のNo.3とNo.4は別の枝で結び付けられており、No.1、2とは異質の胎土をもつことを示している。このことは図2のA群杯のRb-Sr分布図でもよく理解できる。Rb-Sr分布図は全国各地の窯跡出土須恵器の分析データから有効に地域差を表示する分布図であることが見つけられた。なお、第266図に描かれている領域はC、D杯をすべて包含するようにして描いた定性的な領域である。

B群杯のNo.5、6、7の3点のうち、No.5は他のどの土師器胎土とも似ておらず、デンドログラムでは最右端に孤立している。このことは第267図のB群杯のRb-Sr分布図でもわかる。No.6、7はC群杯領域に分布している。

クラスター分析法の欠点は類似度の違いがある、どこで区切るかについての客観的な判断基準がない点である。第265図でもNo.3に結びつくNo.3~No.29を一括すべきなのか、それともNo.8に結びつくNo.8~No.29を一括すべきなのかの判別基準はない。筆者は通常、Rb-Sr分布図における分布を参考にして区切ることにしている。第268図にみられるように、C、D群杯はよくまとめて分布していることがわかる。そこでC、D群杯（No.8~No.44）を含む枝をデンドログラムで探してみた。その結果、No.3からNo.29までを一括して区切らなければならないことが

わかった。C、D群杯はNo.8～No.29のグループにも、No.3～No.81のグループにも含まれるからである。そうすると今日分析したほとんどの土器部がNo.3～No.29のグループに含まれることになる。当然、このグループの中にA、B、C、D、E群杯が含まれる。E群杯の大部分もこの中に含まれることは第269図のE群杯のR b - S r 分布図からわかる。

以上の結果から、今回分析した土器部は形式に無関係に同じ胎土をもつことが明らかになった。E群杯が在地産の土器部だとすれば、それと同じ胎土をもつA、B、C、D群杯も形式が異なるとはいえ、在地産の土器部と考えざるを得ない。

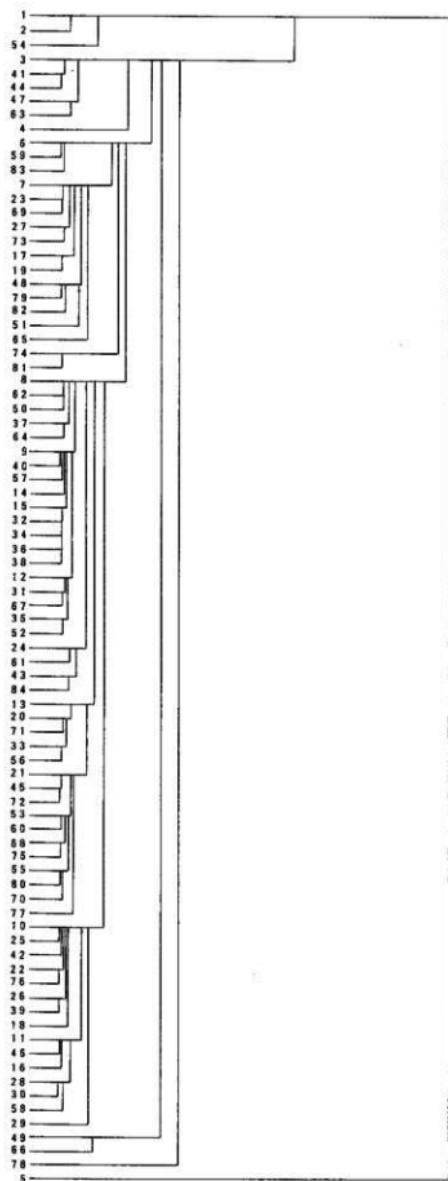
なお、第269図のE群杯のR b - S r 分布図で大部分のE群はC、D群領域に分布するが、No.49、54、66、78の4点は明らかにC、D領域を離れる。また、図1のデンドログラムでも別の枝に結び付いている。これら4点は異質の胎土をもつと判断される。このうち、No.54はNo.1、2のA群杯と同質の胎土である。これら3点の土器胎土の特徴はK、R b量が多いことである。この特徴は宮城県を中心とした地域の土器胎土のものではない。この点からNo.1、2、54の3点は外部地域からの搬入品と推定される。他のすべての土器部はK、R b量の少ない、宮城型の胎土の特徴をもっており、在地産と判別してもおかしくはない。

そして、A、B、C、Dの杯は型式的に関東型であれば、関東型を模倣した在地産の土器部であると考えざるを得ない。

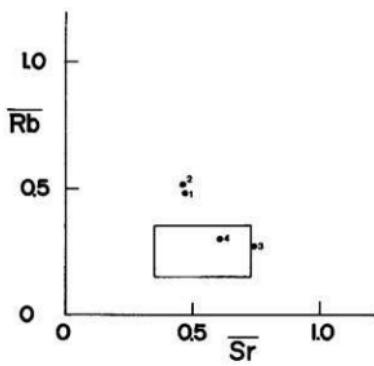
以上が今回の分析結果の結論である。

仙台市下飯田遺跡土器

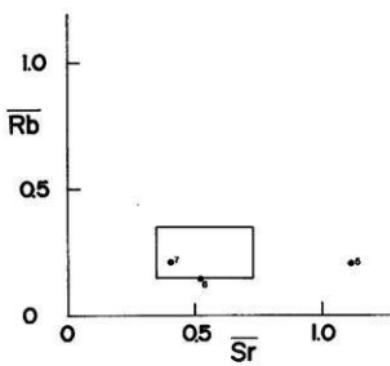
	No	K	Ca	Fe	R b	S r	N a		No	K	Ca	Fe	R b	S r	N a		
环A	5-4516	1	0.411	0.348	3.18	0.484	0.471	0.326	环D	5-4558	43	0.279	0.397	1.58	0.325	0.603	0.238
"	4517	2	0.399	0.225	2.66	0.507	0.462	0.311	"	4559	44	0.324	0.571	2.17	0.243	0.702	0.391
"	4518	3	0.342	0.620	2.63	0.266	0.733	0.453	环E	5-4560	45	0.231	0.434	2.29	0.199	0.466	0.267
"	4519	4	0.438	0.477	4.21	0.300	0.605	0.507	"	4561	46	0.267	0.462	2.26	0.307	0.462	0.202
环B	4520	5	0.210	0.878	2.34	0.201	1.11	0.408	"	4562	47	0.294	0.729	2.58	0.229	0.731	0.338
"	4521	6	0.178	0.520	2.29	0.140	0.524	0.272	"	4563	48	0.206	0.319	1.14	0.190	0.541	0.239
"	4522	7	0.202	0.322	1.63	0.205	0.405	0.137	"	4564	49	0.288	0.388	1.29	0.489	0.577	0.237
环C	4523	8	0.260	0.481	1.16	0.287	0.659	0.263	"	4565	50	0.263	0.467	1.47	0.308	0.606	0.266
"	4524	9	0.301	0.476	3.01	0.260	0.549	0.386	"	4566	51	0.146	0.286	1.68	0.147	0.444	0.212
"	4525	10	0.305	0.338	2.11	0.248	0.471	0.346	"	4567	52	0.298	0.507	2.36	0.347	0.633	0.271
"	4526	11	0.279	0.448	2.58	0.282	0.464	0.349	"	4568	53	0.228	0.501	2.70	0.278	0.493	0.288
"	4527	12	0.285	0.529	2.30	0.297	0.602	0.347	"	4569	54	0.512	0.234	1.77	0.512	0.364	0.230
"	4528	13	0.321	0.609	4.15	0.219	0.508	0.401	"	4570	55	0.231	0.399	1.91	0.260	0.566	0.335
"	4529	14	0.288	0.498	0.38	0.289	0.529	0.325	"	4571	56	0.301	0.531	4.85	0.196	0.434	0.369
"	4530	15	0.317	0.496	2.33	0.266	0.575	0.394	"	4572	57	0.285	0.473	2.28	0.265	0.552	0.363
"	4531	16	0.290	0.446	1.96	0.314	0.497	0.358	"	4573	58	0.288	0.377	2.72	0.384	0.405	0.164
"	4532	17	0.247	0.239	1.81	0.204	0.423	0.365	"	4574	59	0.183	0.553	1.71	0.160	0.535	0.225
"	4533	18	0.269	0.234	1.96	0.266	0.397	0.349	"	4575	60	0.210	0.502	1.99	0.272	0.543	0.229
"	4534	19	0.267	0.259	2.58	0.191	0.436	0.354	"	4576	61	0.285	0.393	1.27	0.245	0.688	0.270
"	4535	20	0.252	0.555	2.50	0.209	0.480	0.364	"	4577	62	0.248	0.485	1.94	0.271	0.612	0.217
"	4536	21	0.229	0.429	1.32	0.212	0.525	0.171	"	4578	63	0.275	0.620	1.47	0.245	0.795	0.292
"	4537	22	0.290	0.309	2.83	0.269	0.405	0.329	"	4579	64	0.237	0.551	1.72	0.256	0.611	0.285
"	4538	23	0.226	0.354	2.35	0.196	0.361	0.252	"	4580	65	0.140	0.377	3.51	0.213	0.347	0.137
"	4539	24	0.279	0.321	1.44	0.234	0.588	0.390	"	4581	66	0.204	0.412	3.21	0.422	0.443	0.207
"	4540	25	0.292	0.348	2.18	0.232	0.461	0.348	"	4582	67	0.294	0.478	2.15	0.307	0.588	0.440
"	4541	26	0.292	0.263	1.32	0.276	0.469	0.370	"	4583	68	0.234	0.474	3.39	0.244	0.450	0.227
"	4542	27	0.207	0.247	1.94	0.232	0.382	0.145	"	4584	69	0.198	0.329	3.06	0.184	0.350	0.197
"	4543	28	0.312	0.365	2.74	0.348	0.430	0.360	"	4585	70	0.236	0.398	2.10	0.266	0.502	0.192
"	4544	29	0.361	0.281	1.18	0.312	0.541	0.349	"	4586	71	0.285	0.539	3.95	0.228	0.504	0.374
"	4545	30	0.308	0.390	2.32	0.324	0.434	0.367	"	4587	72	0.220	0.458	3.03	0.190	0.471	0.219
"	4546	31	0.297	0.454	2.67	0.331	0.594	0.402	"	4588	73	0.176	0.234	1.39	0.201	0.388	0.181
"	4547	32	0.312	0.486	2.66	0.272	0.559	0.380	"	4589	74	0.188	0.334	1.12	0.223	0.706	0.238
"	4548	33	0.291	0.480	2.09	0.188	0.466	0.374	"	4590	75	0.213	0.497	2.39	0.234	0.478	0.169
"	4549	34	0.317	0.506	2.27	0.288	0.578	0.360	"	4591	76	0.303	0.332	3.18	0.272	0.387	0.311
"	4550	35	0.327	0.527	2.01	0.336	0.633	0.361	"	4592	77	0.212	0.368	2.02	0.254	0.438	0.191
"	4551	36	0.324	0.484	2.84	0.285	0.587	0.400	"	4593	78	0.251	0.196	3.51	0.300	0.234	0.134
"	4552	37	0.251	0.552	1.73	0.260	0.664	0.295	"	4594	79	0.217	0.284	1.18	0.203	0.549	0.199
"	4553	38	0.327	0.495	2.84	0.277	0.601	0.387	"	4595	80	0.228	0.436	1.60	0.263	0.555	0.376
"	4554	39	0.288	0.280	1.06	0.272	0.513	0.388	"	4596	81	0.208	0.323	1.19	0.231	0.708	0.269
"	4555	40	0.301	0.486	2.48	0.265	0.574	0.374	"	4597	82	0.174	0.316	1.06	0.210	0.517	0.200
"	4556	41	0.337	0.522	2.33	0.246	0.715	0.345	"	4598	83	0.155	0.489	1.75	0.140	0.498	0.203
"	4557	42	0.286	0.313	2.42	0.229	0.425	0.347	"	4599	84	0.261	0.338	1.20	0.312	0.693	0.226



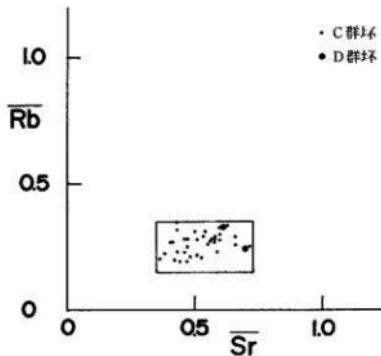
第265図 クラスター分析 (K, Ca, Rb, Sr因子使用)



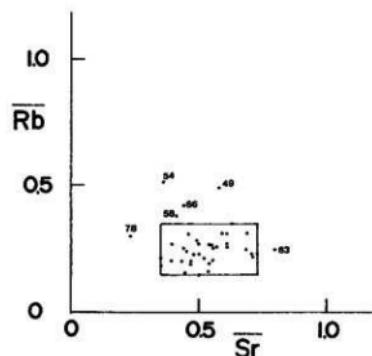
第266図 A群環のRb-Sr分布図



第267図 B群環のRb-Sr分布図



第268図 C群環、D群環のRb-Sr分布図



第269図 E群環のRb-Sr分布図

VI まとめ

1. 海岸から約3km、標高1mの浜堤上にある当遺跡では縄文から近世までの遺物が発見されているが、その中心となるのは古墳時代後期から奈良時代にかけてのものである。これらについては以下に集成図(第270図~296図)として提示した。

今回発見された河川跡からは栗田式土師器と関東系の鬼高式土師器(7世紀後半)等が多量に出土していることから、周囲から発見された竪穴住居跡の年代の主体もこの時期に見て大過ないだろう。Vに掲載している灰像分析の結果もこのことを裏付けている。

一方、同一浜堤上北側に位置する藤田新田遺跡が古墳時代前期から平安時代と、各時代それぞれに主体となる遺構・遺物が多く(1994;宮城県教育委員会・日本道路公団)、浜堤上の時代による土地利用の差異が伺われる。

集成図のうち、土師器のA群は塩釜式(4世紀)、B群は南小泉式(5世紀)、C群は住社式(6世紀)、D群は栗田式(7世紀)、E群は関東系の鬼高式(7世紀)を主体とする一群、F群は国分寺下層式(8世紀)、G群は表杉ノ入式期に入ると思われるものであり、9世紀以降のものである。

2. 関東系土器の出土は、当遺跡の西側にある南小泉遺跡や郡山遺跡などで確認されているが、今回の出土は一括して多量というところに特徴があり、また藤田新田遺跡に見られない特徴である。

またVに掲載した胎土分析結果からは、ここで出土した関東系土師器は殆どは搬入品ではなく、こちらで成形・焼成したものであることが分かった。

3. 藤田新田遺跡、下飯田遺跡が仙台平野浜堤の最初の発掘調査となつたが、今後、海岸部の遺跡の実態を把握するためにも、海と川を利用した人の移動や物の搬入・搬出、浜堤から内陸自然堤防上などへの人と物の展開などを注意して確認していく必要があるだろう。

4. 第6、25、26号溝などからは7世紀頃に作られたとみられる布目瓦片が出土している。大部分は丸瓦の破片である。

一般的に集落跡から瓦が出土することは少ないが、この遺跡からは比較的多く出土する。付近に瓦を使用した建物が存在するのか、瓦の運搬等に関係するものなのか、今後の検討課題である。

5. S R 4 河川跡のII層はD、E群土器を出土する7世紀後半堆積したヤマトシジミを主とする貝層である。発見された住居跡での食生活の一部を示すものであり、貝塚形成の初期状態を示すものであろう。市内で初めての貝塚確認例と言える。

古代の漁網の重りである土錘が第25、26号溝跡などから出土しており、これらも海や川に近いこの集落の生活跡を示すものである。

また、Vに各資料を分析・同定した結果を掲載しているが、そこからも生活の様子が再現できる。

6. 調査区南側の3、4区からは、「コ」の字型と考えられる溝(S D 2)で埋まれた13~14世紀ごろの屋敷跡も検出された(S B 6~8掘立柱建物跡等)。常滑産の陶器や青磁片、下駄、草履、箸等の生活用具も多量出土している。

7. 発見遺構のまとめ

(1) 竪穴住居跡

4区の北半から3区にかけて、河川跡に挟まれた地域を中心として21軒発見された。

S I 9 竪穴住居跡からは、東日本最大級のクリ材と見られる柱の一部が4本検出された。直径約30cm、長さ約50cmのものもある。

S I 9 竪穴住居跡はD、E群の遺物が多く出土しており、灰像分析では7世紀後半の年代が出されている。この住居跡はS I 11、19竪穴住居跡とSD109円形周溝を切っている。

この遺跡の住居跡の特徴として、崩れやすい砂地にカマドとその煙道を作るときに、灰白色の良質の粘土を大量に使用することがあげられる。

(2) 挖立柱建物跡

2号溝周辺には特にピットが集中して検出され、それらには柱根が残存しているものや柱痕跡の見られるもののが多数存在している。(中世の)建物がその周囲にあったことを示すものであり、ここでは7軒認められた。

(3) 溝跡

掘削の目的と形成時期に多様性がある。主なものについてみると、2号溝は中世以降の堀または用水路、5号溝は1号河川が埋没する以前(10世紀前半以前)の河川と接続する水路、6号溝は中世以降の水路、8号溝は1号河川の調査課程で検出された近世以降の水田跡に伴う水路、26号溝は古代の水路と考えられる。

なお5号溝と26号溝は改修の痕跡が認められる。

(4) 土坑

これらの性格(機能)は不明である。ただ4号土坑については、堆積土中に古墳時代末期から奈良時代にかけての土器片が多量に含まれていることから、捨て場として掘られた可能性が指摘できる。

(5) 井戸跡

SD2溝跡に囲まれた中に3基発見された。溝と掘立柱建物跡等と組み合って、中世屋敷跡を構成するものである。

(6) 円形周溝

直径4m前後の円形に、幅50cm前後の溝を巡らした遺構である。削平された小円墳や円形周溝墓ということも考えられるが、性格については不明である。27号溝とした円形周溝の年代は、出土遺物から古墳時代中期以降と考えられる。

(7) 小溝状遺構群

幅30cm前後の比較的幅の狭い溝が、広い範囲に渡って、同一方向に規則的に並んでいるもので、「畑」に関係する遺構と考えられつつある。

今回の調査では、3区の中央から南部にかけて検出された43~50号溝跡等がこれに相当するものである。年代としては、8号住居跡に切られているので、奈良時代ないし古墳時代末期以前である。

(8) 水田跡

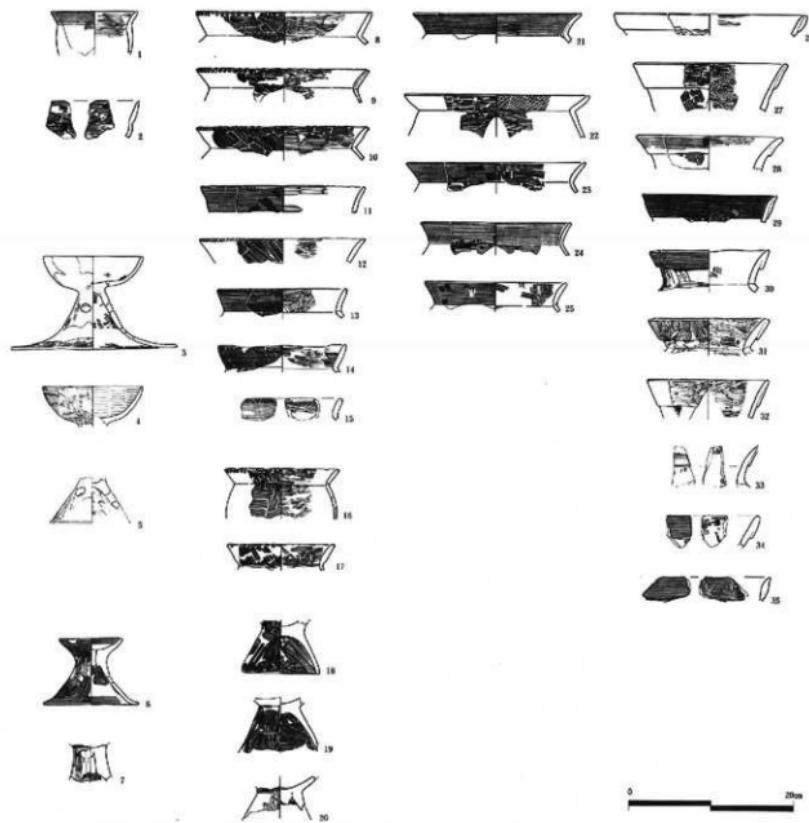
1号河川跡堆積土上面の東半部で畦畔の痕跡が検出された。1号河川跡の中央部に、河川を横断して幅1.2~2mの大畦があり、その東側は幅30~60cmの小畦で水田が区画されているという状況である。その年代は近世以降と考えている。

3号河川跡の調査課程においても、水田畦畔を若干検出している。

(9) 河川跡

調査区それぞれで番号を付したのでSR1~4河川跡まであるが、4号とした河川跡は2号か3号河川跡と同一と考えられるので、基本的には1~3号である。

A群土器



番号	登錄番号	器 形	分類	出土遺跡	層 位	番号	登錄番号	器 形	分類	出土遺跡	層 位
1	C-408	环	A-1	SR3		19	C-399	台付壺	A-1C	SR3	
2	C-153	环	A-2	SR3		20	C-400	台付壺	A-1C	SR3	
3	C-9	高 环	A-1	SR3		21	C-407	壺	A-1	SR3	
4	C-409	高 环	A-1	SR2		22	C-353	壺	A-2	SR4	
5	C-76	凸 环	A-2	SR1		23	C-406	壺	A-2	SR3	
6	C-402	腹 台	A-1	SR3		24	C-352	壺	A-2	SR4	
7	C-402	腹 台	A-1	SR2		25	C-154	壺	A-2	SR3	
8	C-159	台付壺	A-1 a	SR3		26	C-405	壺	A-1	SR3	
9	C-484	台付壺	A-1 a	SR3		27	C-132	壺	A-1	SD29	
10	C-2	台付壺	A-1 a	SR3		28	C-355	壺	A-1	SR4	
11	C-148	台付壺	A-1 a	SR3		29	C-360	壺	A-1	SD5	
12	C-147	台付壺	A-1 a	SR3		30	C-367	壺	A-1	SR3	
13	C-152	台付壺	A-1 a	SR3		31	C-15	壺	A-1	SR2	
14	C-149	台付壺	A-1 a	SR3		32	C-181	壺	A-1	SD29	
15	C-359	台付壺	A-1 a	SD118		33	C-356	壺	A-1	SR4	
16	C-134	台付壺	A-1 b	SD28		34	C-129	壺	A-1	SD26	
17	C-151	台付壺	A-1 b	SR3		35	C-357	壺	A-1	SR4	
18	C-54	台付壺	A-1 C	SD28							

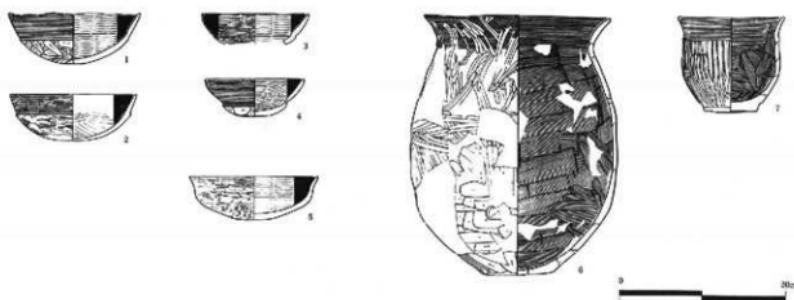
第270図 A群土器集成図

B群土器



第271図 B群土器集成図

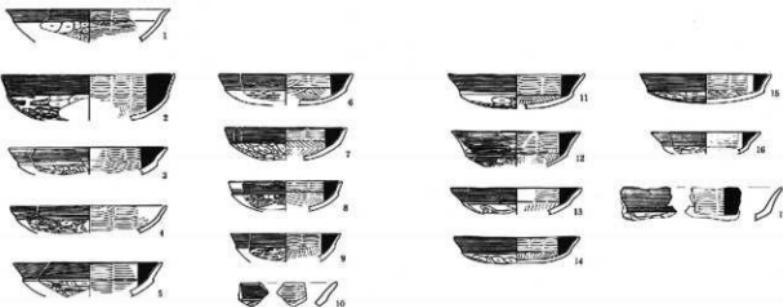
C群土器



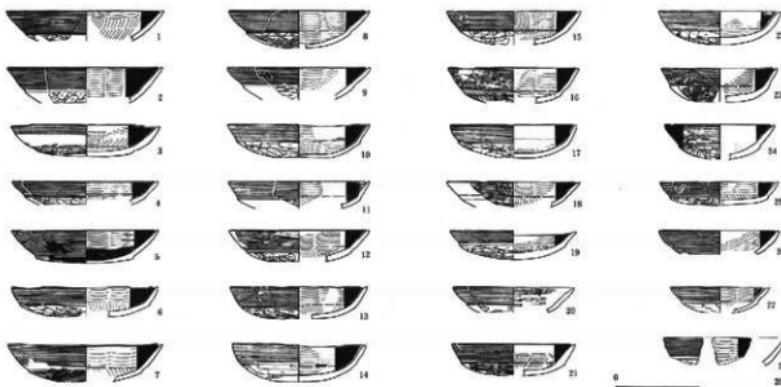
番号	印記番号	分	出土地	層	口	底	壁	高	径	幅	体	幅/径	底	外曲周長	内曲周長
1	C-190	C-1	SR4		(18.8)	—	6.2	3.0	6.48	(18.0)	1.4	743.6	(0.39)	B 2	A
2	C-222	C-1	SR4		(15.2)	—	5.7	3.2	6.55	(15.4)	0.7	765.6	(0.38)	B 2	A
		平均			15.5	—	6.0	3.1	6.51	15.4	1.1	754.6	0.38		
		標準偏差			4.24	—	3.53	1.41	6.85	5.66	4.94	15.56	0.91		
番号	印記番号	分	出土地	層	口	底	壁	高	径	幅	体	幅/径	底	外曲周長	内曲周長
3	C-242	C-2	SR4		(18.2)	—	7.4	(7.1)	(0.32)	(16.0)	1.6	668.2	(0.33)	B 3	A
4	C-214	C-2	SR4		(12.2)	—	4.6	1.2	0.26	(7.8)	2.2	325.7	(0.38)	B 2	A
		平均			12.7	—	4.1	1.3	0.29	8.9	1.9	397.0	0.35		
		標準偏差			7.07	—	2.82	1.06	0.84	15.56	4.24	100.76	0.94		
番号	印記番号	分	出土地	層	口	底	壁	高	径	幅	体	幅/径	底	外曲周長	内曲周長
5	C-215	C-3	SR4		(15.6)	—	5.3	2.0	0.35	(12.8)	1.4	564.2	(0.34)	B 3	A
番号	印記番号	形	分	出土地	層	番号	印記番号	形	分	出土地	層				
6	C-380	便	C-1	SR4		7	C-372	鉢	C-1	SR4					

第272図 C群土器集成図

D 群土器



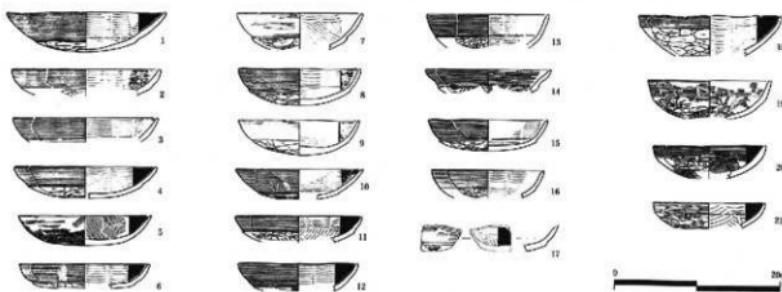
番号	登録番号	分類	出土遺物	層位	口径	底径	器高	深高	段位置	段径	周長	体積	器底/口径	底部	外周測定	内周測定
1	C-217	D-1	S R 4	(19.6)	—	—	(17.8)	0.9	—	—	—	—	B 2	A		
2	C-256	D-2	S R 4	(20.9)	—	(5.9)	(3.4)	(0.37)	(19.4)	0.8	1500	(0.28)	E 2	A		
3	C-420	D-2	S R 4	(18.8)	—	(4.4)	(2.2)	(0.49)	(16.6)	1.1	780.3	(0.23)	B 2	A		
4	C-389	D-2	S D106	(18.6)	—	(4.0)	(2.4)	(0.59)	(17.0)	0.8	754.2	(0.22)	B 2	A		
5	C-267	D-2	S R 4	(17.8)	—	(4.9)	(2.7)	(0.54)	(15.6)	1.0	786.6	(0.28)	B 1	A		
6	C-72	D-2	S R 1	(16.3)	—	(3.9)	(2.0)	(0.31)	(14.7)	0.8	578.3	(0.24)	B 2	A		
7	C-165	D-2	S 1 9	(14.8)	—	(4.1)	(2.1)	(0.32)	(13.5)	0.7	485.9	(0.27)	B 2	A		
8	C-315	D-2	S R 4	(13.8)	—	(3.9)	(2.3)	(0.59)	(13.0)	0.4	414.5	(0.28)	E 2	A		
9	C-213	D-2	S R 4	(13.4)	—	(4.4)	(2.7)	(0.41)	(12.1)	0.7	394.5	(0.33)	C 2	A		
10	C-435	D-2	S R 4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	B 2	A		
平均				16.8	—	4.4	2.5	0.55	15.2	0.7	711.8	0.27				
標準偏差				26.69	—	6.84	4.41	0.04	24.13	2.15	356.82	0.04				
番号	登録番号	分類	出土遺物	層位	口径	底径	器高	深高	段位置	段径	周長	体積	器底/口径	底部	外周測定	内周測定
11	C-92	D-3	S 1 9	(16.7)	—	(4.2)	(1.8)	(0.43)	(13.9)	1.4	631.1	(0.25)	B 2	A		
12	C-4	D-5	S R 3	(15.8)	—	(4.8)	(1.9)	(0.40)	(12.5)	1.7	567.8	(0.36)	D 1	A		
13	C-117	D-3	S 1 14	(16.0)	—	(3.4)	(1.3)	(0.38)	(13.0)	1.5	483.2	(0.21)	B 2	A		
14	C-93	D-3	S 1 9	15.4	—	3.3	1.2	0.36	13.3	1.1	451.9	0.21	B 2	A		
15	C-55	D-3	S D26	(15.8)	—	3.6	1.4	0.29	(14.0)	0.9	497.9	(0.23)	B 2	A		
16	C-210	D-3	S R 4	(13.1)	—	(3.3)	(1.3)	(0.39)	(10.0)	1.5	254.4	(0.25)	B 2	A		
17	C-434	D-3	S 1 26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	B 2	A		
平均				15.5	—	3.8	1.5	0.39	12.8	1.3	477.7	0.24				
標準偏差				12.55	—	6.89	2.93	0.02	14.67	2.94	128.68	0.05				



第273図 D群土器集成図(1)

D 群十器

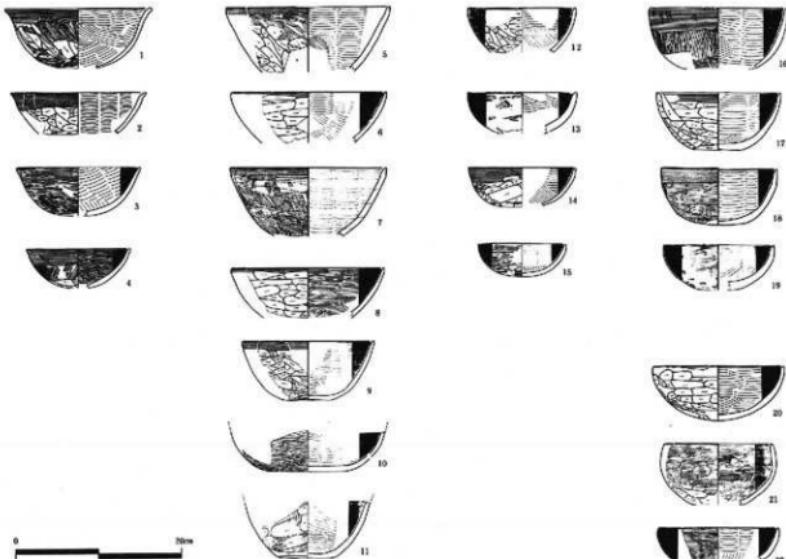
號	發音部位	分類	出土地點	層位	口徑	底徑	壁高	底高	底位置	統徑	開口	件數	高度(U)	直徑	厚度	外圓面	內圓面
1	C-104	D-4	S 19		(18.8)	—	(4.5)	(1.7)	(0.28)	(14.2)	2.3	779.3	(0.24)	B 2	A		
2	C-111	D-4	S 18		(18.6)	—	(4.7)	(1.7)	(0.26)	(14.4)	2.1	845.5	(0.25)	B 2	A		
3	C-20	D-4	S R 2		17.7	—	4.0	0.8	0.29	11.6	3.1	661.2	0.22	C 2	A		
4	C-88	D-4	S 114		(17.6)	—	(3.5)	(1.6)	(0.44)	(14.4)	1.6	—	(0.20)	B 2	A		
5	C-36	D-4	S R 2		17.6	—	4.3	0.7	0.16	11.7	3.0	633.8	0.23	B 2	A		
6	C-33	D-4	S R 2		17.6	—	(3.7)	(1.5)	(0.41)	(15.3)	1.6	658.8	0.21	C 2	A		
7	C-42	D-4	S R 2		(18.4)	—	(5.0)	(1.5)	(0.30)	(13.3)	2.6	816.5	(0.27)	A 1	A		
8	C-200	D-4	S R 4		(17.0)	—	(4.6)	(1.8)	(0.39)	(12.6)	2.2	636.4	(0.27)	C 2	A		
9	C-212	D-4	S R 4		(17.4)	—	—	—	(13.6)	1.9	—	—	—	—	B 2	A	
10	C-29	D-4	S R 2		17.3	—	4.2	1.9	0.46	15.0	1.2	652.8	0.24	B 2	A		
11	C-413	D-4	S R 3		(17.2)	—	(3.9)	(1.8)	(0.46)	(15.6)	1.0	614.5	(0.23)	B 2	A		
12	C-1	D-4	1層		(16.9)	—	(4.0)	(1.3)	(0.33)	(12.7)	2.1	591.9	(0.24)	E 2	A		
13	C-23	D-4	S R 4		(16.6)	—	(3.9)	(1.3)	(0.32)	(13.7)	1.5	612.7	(0.23)	C 2	A		
14	C-23	D-4	S R 2		16.1	—	4.7	2.2	0.47	14.0	1.1	674.9	0.29	B 2	A		
15	C-247	D-4	S R 4		(16.3)	—	(4.3)	(1.9)	(0.44)	(13.2)	1.6	564.3	(0.26)	B 2	A		
16	C-31	D-4	S R 2		16.8	—	(4.5)	(1.4)	(0.31)	(11.9)	2.1	590.6	(0.28)	E 3	A		
17	C-27	D-4	S R 2		15.5	—	4.1	2.0	0.48	13.6	1.0	527.7	0.26	B 2	A		
18	C-113	D-4	S 19		(16.0)	—	(3.9)	(1.7)	(0.44)	(12.3)	1.9	451.0	(0.24)	F 2	A		
19	C-89	D-4	S 19		15.4	—	3.6	1.7	0.45	13.8	1.0	419.1	0.23	B E	A		
20	C-197	D-4	S R 4		(14.7)	—	(3.8)	(1.7)	(0.43)	(11.4)	1.7	396.1	(0.30)	B 1	B		
21	C-108	D-4	S 19		(15.0)	—	(4.0)	(1.6)	(0.39)	(12.7)	1.2	480.3	(0.26)	C 2	A		
22	C-32	D-4	S R 2		14.8	—	4.1	1.7	0.41	12.3	1.3	461.7	0.29	H 1	A		
23	C-229	D-4	S R 4		(14.0)	—	(4.1)	(2.0)	(0.49)	(12.0)	1.0	445.5	(0.29)	C 3	A		
24	C-232	D-4	S R 4		(13.2)	—	(4.3)	(1.5)	(0.35)	(9.9)	1.7	356.6	(0.32)	B 2	A		
25	C-6	D-4	S R 3		(14.3)	—	(2.8)	(0.9)	(0.32)	(11.9)	1.2	322.6	(0.26)	B 2	A		
26	C-430	D-4	S 12		(14.4)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	B 2	A	
27	C-177	D-4	S 125		(12.8)	—	(3.2)	(1.3)	(0.43)	(9.92)	1.1	206.9	(0.27)	B 2	A		
28	C-433	D-4	S 123		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	B 2	A	
平均		16.2	—		4.9	1.5	0.39	12.9	1.7	558.4	0.25						
標準差		17.95	—		4.87	3.79	0.56	15.36	6.01	357.05	0.29						



番号	登録番号	分類	出土遺物	層位	層	幅	高	深	高	段位置	段	径	間	隙	斜面	厚さ	頂面	底面	外側調査	内側調査
1	C-237	D-5	S K 4		(19.4)	-	4.9	1.3	0.27	12.1	3.7	544.6	0.0	544.6	(0.25)	B 2	A			
2	C-414	D-5	S K 5		(18.2)	-	(4.2)	(2.0)	(0.47)	(16.0)	1.1	240.4	(0.23)	240.4	(0.23)	B 2	A			
3	C-119	D-5	S K 4		(17.8)	-	-	-	(34.6)	1.6	-	-	-	-	-	-	不明	A		
4	C-222	D-5	S R 4		(17.2)	-	(3.9)	(1.5)	(0.37)	(13.6)	1.7	612.3	(0.23)	612.3	(0.23)	B 2	A			
5	C-203	D-5	S R 4		(16.2)	-	3.7	1.2	0.33	(12.3)	2.0	519.6	(0.23)	519.6	(0.23)	F 1	A			
6	C-137	D-5	S K 3		(15.9)	-	(3.1)	(0.7)	(0.23)	(12.4)	1.8	444.9	(0.20)	444.9	(0.20)	B 2	A			
7	C-386	D-5	S K 90		(15.4)	-	(4.6)	(1.5)	(0.33)	(11.6)	1.9	588.7	(0.30)	588.7	(0.30)	F 2	A			
8	C-21	D-5	S R 2		(15.0)	-	4.5	1.7	0.38	12.4	1.3	539.1	0.30	539.1	0.30	E 2	A			
9	C-28	D-5	S K 2		(14.8)	-	4.3	1.9	0.44	12.1	1.4	448.1	0.29	448.1	0.29	B 2	A			
10	C-209	D-5	S R 4		(15.6)	-	(3.7)	(0.7)	(0.19)	(9.6)	(3.0)	408.1	(0.24)	408.1	(0.24)	B 2	A			
11	C-74	D-5	S R 1		(15.5)	-	(3.7)	(1.7)	(0.46)	(13.7)	0.9	473.6	(0.24)	473.6	(0.24)	B 2	A			
12	C-163	D-5	S I 9		(14.8)	-	(3.9)	(0.9)	(0.23)	(10.8)	2.8	597.8	(0.26)	597.8	(0.26)	A 1	A			
13	C-249	D-5	S R 4		(14.6)	-	(5.2)	(2.4)	(0.46)	(12.6)	1.8	586.0	(0.35)	586.0	(0.35)	B 2	A			
14	C-230	D-5	S R 4		(15.1)	-	-	-	(12.0)	1.6	-	-	-	-	-	B 2	B			
15	C-234	D-5	S R 4		(14.4)	-	3.9	1.2	0.30	(11.6)	1.4	439.7	(0.27)	439.7	(0.27)	B 2	A			
16	C-412	D-5	S R 2		(13.4)	-	(4.2)	(2.0)	(0.46)	(11.5)	1.5	400.0	(0.31)	400.0	(0.31)	C 3	A			
17	C-186	D-5	S B 3		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	F 2	A			
平均						15.8	-	4.1	1.5	0.35	12.4	1.7	546.0	0.26	-	-	-	-		
標準偏差						15.8	-	5.45	5.90	0.10	15.2	7.35	128.5	0.53	-	-	-	-		
番号	登録番号	分類	出土遺物	層位	層	左	右	底	高	段	段	径	間	隙	斜面	厚さ	頂面	底面	外側調査	内側調査
						左	右	底	高	段	段	径	間	隙	斜面	厚さ	頂面	底面	外側調査	内側調査
18	C-243	D-6	S R 4		(17.3)	-	-	-	(16.8)	0.3	-	-	-	-	-	-	-	B 2	A	
19	C-224	D-6	S R 4		(15.0)	-	(5.1)	(3.1)	(0.61)	(13.0)	0.5	599.0	(0.34)	599.0	(0.34)	E 2	B			
20	C-244	D-6	S R 4		(13.8)	-	(4.2)	(2.8)	(0.67)	(13.0)	0.4	404.0	(0.30)	404.0	(0.30)	C 2	B			
21	C-248	D-6	S R 4		(13.6)	-	(3.7)	(2.4)	(0.65)	(13.0)	0.3	370.6	(0.27)	370.6	(0.27)	F 2	A			
平均						149.3	-	4.3	2.8	0.64	34.2	0.4	457.9	0.31	-	-	-	-		
標準偏差						17.08	-	7.09	3.51	0.03	17.96	1.11	121.36	0.03	-	-	-	-		

第274図 D群土器集成図(2)

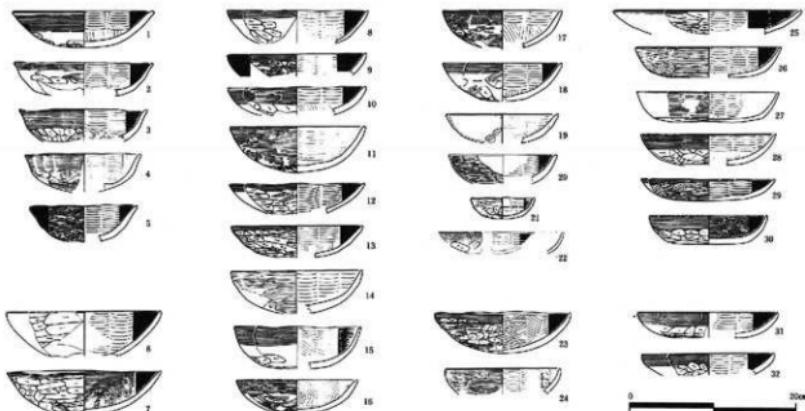
D 群土器



番号	登録番号	分類	出土遺跡	場位	口径	底径	厚さ	段高	段位置	段径	周	体積	容積/(口径)	底面	外周測定	内面測定
1	C-204	D-7a	SR 4		(17.0)	-	(7.5)	-	-	-	-	1102.8	(0.62)	I 2	A	
2	C-191	D-7a	SR 4		(16.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	H2	A	
3	C-239	D-7a	SR 4		(15.1)	-	(5.9)	-	-	-	-	619.3	(0.39)	L 1	A	
4	C-206	D-7a	SR 4		(12.6)	-	(5.9)	-	-	-	-	406.1	(0.39)	H 1	A	
平均					15.5	-	6.1	-	-	-	-	709.5	0.42			
標準偏差					2.2	-	1.2	1.2	-	-	-	356.90	0.02			
番号	登録番号	分類	出土遺跡	場位	口径	底径	厚さ	段高	段位置	段径	周	体積	容積/(口径)	底面	外周測定	内面測定
5	C-228	D-7b⑤	SR 4		(20.0)	-	-	-	-	-	-	-	-	I 2	A	
6	C-111	D-7b⑤	SR 2		(19.1)	-	-	-	-	-	-	-	-	H2	A	
7	C-86	D-7b⑤	S 114		(19.9)	-	-	-	-	-	-	-	-	I 2	A	
8	C-128	D-7b⑤	SR 2		(18.0)	-	-	-	-	-	-	-	-	H3	A	
9	C-34	D-7b⑤	SR 2		(16.4)	(5.4)	7.2	-	-	-	-	999.1	(0.44)	H 2	A	
10	C-156	D-7b⑤	SR 3		-	(9.3)	-	-	-	-	-	-	-	N 2	A	
11	C-157	D-7b⑤	SR 3		-	(7.0)	-	-	-	-	-	-	-	M 1.7	A	
平均					18.7	7.4	-	-	-	-	-	-	-			
標準偏差					13.95	19.50	-	-	-	-	-	-	-			
番号	登録番号	分類	出土遺跡	場位	口径	底径	厚さ	段高	段位置	段径	周	体積	容積/(口径)	底面	外周測定	内面測定
12	C-35	D-7b⑤	SR 2		(13.4)	-	(5.8)	-	-	-	-	-	(0.43)	J 1	A	
13	C-64	D-7b⑤	S 118		(13.4)	-	(5.3)	-	-	-	-	503.9	(0.40)	N 2	A	
14	C-24	D-7b⑤	SR 2		13.2	-	6.8	-	-	-	-	474.8	0.37	I 2	A	
15	C-26	D-7b⑤	SR 2		10.7	-	6.1	-	-	-	-	224.6	0.38	M 1	A	
平均					12.7	-	5.9	-	-	-	-	401.1	0.39			
標準偏差					3.14	-	7.47	-	-	-	-	153.54	0.03			
番号	登録番号	分類	出土遺跡	場位	口径	底径	厚さ	段高	段位置	段径	周	体積	容積/(口径)	底面	外周測定	内面測定
16	C-18	D-7C	SR 2		16.8	-	(7.7)	-	-	-	-	1266.1	(0.46)	G 1	A	
17	C-91	D-7C	S 19		(15.9)	(6.0)	7.0	-	-	-	-	883.4	(0.47)	I 2	A	
18	C-19	D-7C	SR 2		13.9	-	6.9	-	-	-	-	758.5	0.5	C 1	A	
19	C-90	D-7C	S 19		(13.3)	-	(5.5)	-	-	-	-	557.6	(0.47)	N 2	A	
平均					14.8	-	6.8	-	-	-	-	866.4	0.46			
標準偏差					1.37	-	9.21	-	-	-	-	298.36	0.03			
番号	登録番号	分類	出土遺跡	場位	口径	底径	厚さ	段高	段位置	段径	周	体積	容積/(口径)	底面	外周測定	内面測定
20	C-220	D-7d	SR 4		(15.6)	-	6.7	-	-	-	-	817.4	(0.43)	J 1	A	
21	C-135	D-7d	SR 2		(13.2)	-	(7.8)	-	-	-	-	896.6	(0.59)	M 1	A	
22	C-163	D-7d	SD 10		(14.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	N 2	A	
平均					14.4	-	7.2	-	-	-	-	857.0	0.51			
標準偏差					12.90	-	7.42	-	-	-	-	56.00	0.11			

第275図 D群土器集成図(3)

D 群土器



番号	出土地番号	分類	出土遺物	層位	口 徑	底 径	壁 高	残 高	焼付質	残 住	開 口	体 形	器高/口径	底 形	外側調査	内面調査
1	C-194	D-8 a	SR 2	(17.0)	-	4.5	-	-	-	-	-	611.6	(0.26)	H 2	A	
2	C-241	D-8 a	SR 4	(16.7)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	L 1	A	
3	C-192	D-8 a	SR 4	(15.4)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	H 2	A	
4	C-193	D-8 a	SR 4	(15.9)	-	(4.8)	-	-	-	-	-	485.1	(0.34)	L 2	A	
5	C-219	D-8 a	SR 4	(18.8)	-	4.1	-	-	-	-	-	342.3	(0.34)	L 1	A	
平均				15.2	-	4.5	-	-	-	-	-	473.0	0.32			
標準偏差				16.01	-	1.80	-	-	-	-	-	134.82	0.05			
番号	出土地番号	分類	出土遺物	層位	口 徑	底 径	壁 高	残 高	焼付質	残 住	開 口	体 形	器高/口径	底 形	外側調査	内面調査
6	C-156	D-8 b	SR 3	(18.0)	-	(5.9)	-	-	-	-	-	1023.9	(0.31)	J 1	A	
7	C-41	D-8 b	SR 2	(18.5)	-	5.4	-	-	-	-	-	180.8	0.29	J 2	B	
8	C-195	D-8 b	SR 2	(17.0)	-	(4.5)	-	-	-	-	-	671.8	(0.26)	H 2	A	
9	C-118	D-8 b	S 114	(16.8)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	J 2	A	
10	C-6	D-8 b	SR 2	(16.8)	-	(3.8)	-	-	-	-	-	696.6	(0.21)	E 1	A	
11	C-29	D-8 b	SR 2	(16.4)	-	5.6	-	-	-	-	-	731.6	0.34	J 1	A	
12	C-186	D-8 b	S 19	(16.4)	-	(3.8)	-	-	-	-	-	498.2	(0.23)	L 2	A	
13	C-189	D-8 b	SR 4	(16.0)	-	(3.9)	-	-	-	-	-	568.3	(0.24)	H 2	A	
14	C-58	D-8 b	J 1	(16.0)	-	(5.0)	-	-	-	-	-	760.1	(0.34)	N 2	A	
15	C-183	D-8 b	S 122	(15.5)	-	(5.2)	-	-	-	-	-	674.2	(0.25)	H 2	A	
16	C-205	D-8 b	SR 4	(14.8)	-	4.0	-	-	-	-	-	453.8	(0.27)	L 1	A	
17	C-269	D-8 b	SR 4	(14.6)	-	(4.8)	-	-	-	-	-	636.0	(0.33)	L 1	A	
18	C-119	D-8 b	S 15	(14.6)	-	(4.7)	-	-	-	-	-	482.7	(0.32)	J 2	A	
19	C-65	D-8 b	S 111	(13.6)	-	(3.6)	-	-	-	-	-	346.6	(0.26)	不明	A	
20	C-187	D-8 b	S 14	(13.9)	-	(3.9)	-	-	-	-	-	361.7	(0.30)	M 1	A	
21	C-225	D-8 b	SR 4	7.9	-	2.7	-	-	-	-	-	826.4	0.34	E 2	A	
22	C-429	D-8 b	SB 2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	H 2	A	
平均				15.4	-	4.5	-	-	-	-	-	580.6	0.29			
標準偏差				25.31	-	0.94	-	-	-	-	-	714.82	0.04			
番号	出土地番号	分類	出土遺物	層位	口 徑	底 径	壁 高	残 高	焼付質	残 住	開 口	体 形	器高/口径	底 形	外側調査	内面調査
23	C-22	D-8 C	SR 2	(16.6)	-	5.1	-	-	-	-	-	658.1	0.30	J 2	A	
34	C-137	D-8 C	SR 2	(14.0)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	J 3	A	
平均				15.3	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
標準偏差				18.38	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
番号	出土地番号	分類	出土遺物	層位	口 徑	底 径	壁 高	残 高	焼付質	残 住	開 口	体 形	器高/口径	底 形	外側調査	内面調査
25	C-187	D-9 a	S 19	(22.8)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	H 2	A	
26	C-178	D-9 a	S 125	(17.6)	-	(3.8)	-	-	-	-	-	701.5	(0.22)	N 2	A	
27	C-181	D-9 a	S 125	(17.2)	-	3.7	-	-	-	-	-	666.9	(0.22)	N 2	A	
28	C-43	D-9 a	SK27	(16.3)	-	(3.8)	-	-	-	-	-	554.2	(0.23)	H 2	A	
29	C-44	D-9 a	SK30	(16.2)	-	2.7	-	-	-	-	-	391.1	(0.17)	J 3	A	
30	C-37	D-9 a	SR 2	14.2	6.0	3.5	-	-	-	-	-	435.6	0.35	H 2	B	
平均				17.4	-	3.5	-	-	-	-	-	549.9	0.22			
標準偏差				29.03	-	4.83	-	-	-	-	-	136.90	0.03			
番号	出土地番号	分類	出土遺物	層位	口 徑	底 径	壁 高	残 高	焼付質	残 住	開 口	体 形	器高/口径	底 形	外側調査	内面調査
31	C-211	D-9 b	SR 4	(17.0)	-	(3.2)	-	-	-	-	-	562.5	(0.19)	J 2	A	
32	C-246	D-9 b	SR 4	(16.0)	-	-	-	-	-	-	-	-	-	J 2	A	
平均				16.5	-	-	-	-	-	-	-	-	-			
標準偏差				7.07	-	-	-	-	-	-	-	-	-			

第276図 D群土器集成図(4)

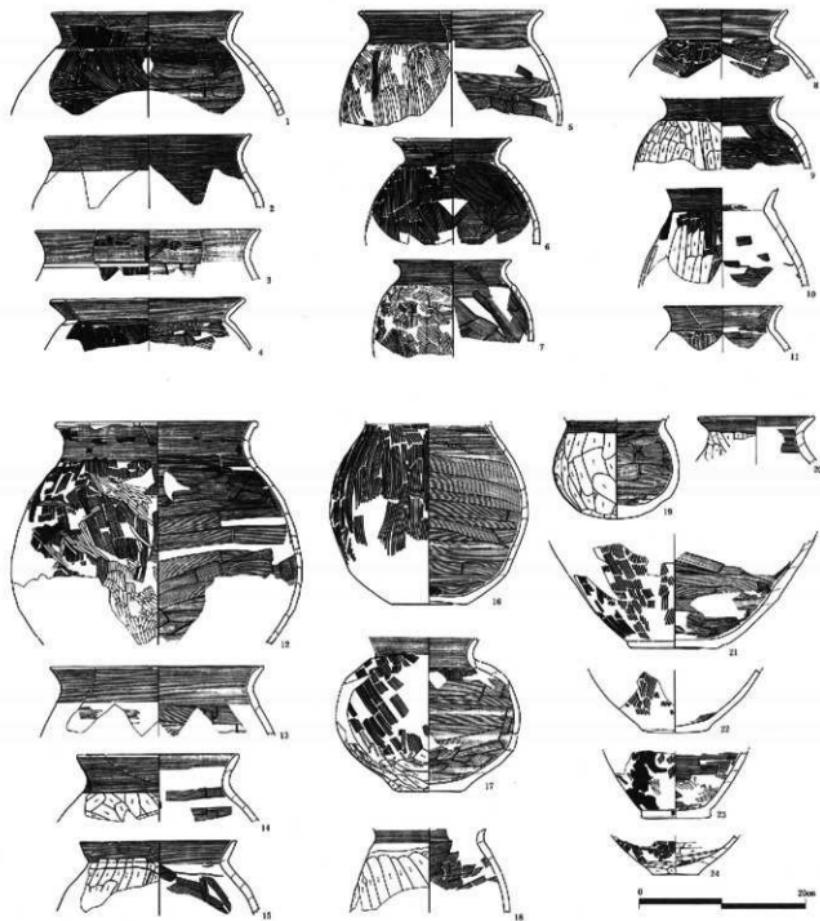
D 群 土 器



通号	登記番号	器 形	分 類	出土遺構	層 位	通号	登記番号	器 形	分 類	出土遺構	層 位
1	C-225	高环	D-1	S R 4		3	C-367	高环	D-3	S R 4	
2	C-77	高环	D-2	S R 1		4	C-368	高	D-1	S I 5	

第277図 D群土器集成図(5)

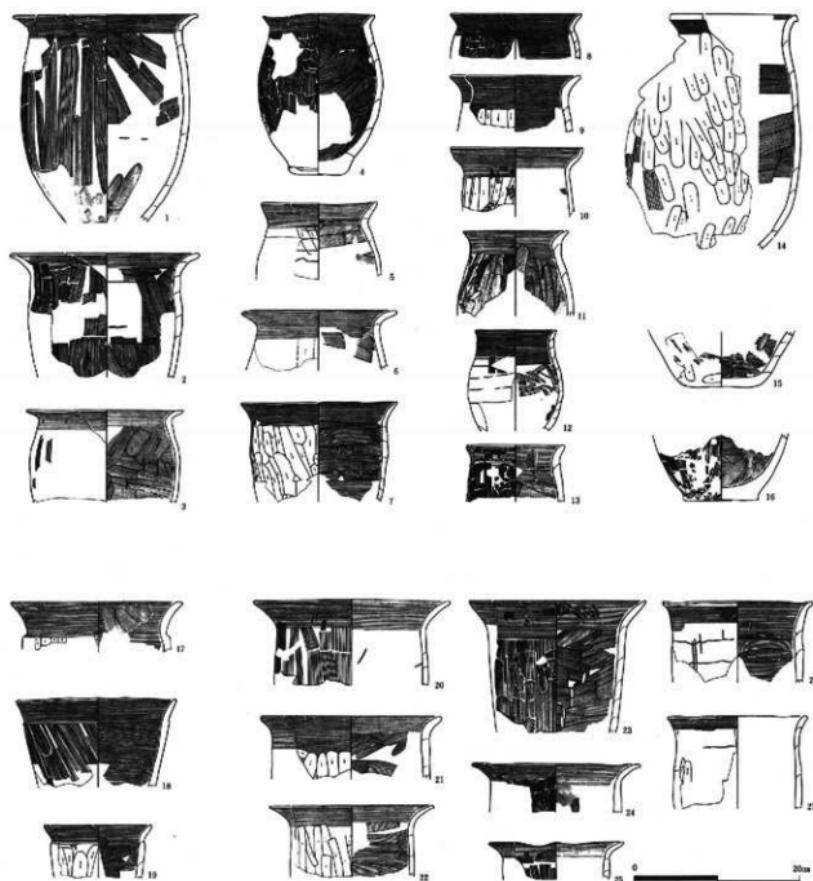
D 群 土 器



番号	登錄番号	器 形	分 類	出土遺物	解 釋	番号	登錄番号	器 形	分 類	出土遺物	解 釋
1	C-343	壺	D-1 a	SR 4		13	C-130	壺	D-1 b	SR 4	
2	C-366	壺	D-1 a	SK101		14	C-365	壺	D-1 b	S D 5	
3	C-69	壺	D-1 a	S X 5		15	C-122	壺	D-1 b	S I 8	
4	C-146	壺	D-1 a	SR 2		16	C-379	壺	D-1 b	SR 4	
5	C-11	壺	D-1 a	SR 2		17	C-378	壺	D-1 b	SR 4	
6	C-364	壺	D-1 a	SD140		18	C-382	壺	D-1 b	SR 4	
7	C-369	壺	D-1 a	SR 4		19	C-373	壺	D-1 b	S I 24	
8	C-15	壺	D-1 a	SR 2		20	C-124	壺	D-1 b	S D 26	
9	C-79	壺	D-1 a	S D 5		21	C-383	壺	D-1 b	SR 4	
10	C-47	壺	D-1 a	SK36		22	C-98	壺	D-1 b	S I 9	
11	C-344	壺	D-1 a	SR 4		23	C-374	壺	D-1 b	SR 4	
12	C-17	壺	D-1 b	SR 2		24	C-397	壺	D-1 b	SR 2	

第278図 D群土器集成図(5)

D 群土器



番号	形	分類	出土場所	附 記	番号	形	分類	出土場所	附 記
1	C-96	壺	D-2	S I 9	15	C-396	壺	D-2	S R 2
2	C-95	壺	D-2	S I 9	16	C-394	壺	D-2	S R 4
3	C-78	壺	D-2	S D 5	17	C-347	壺	D-3 a	S R 4
4	C-376	壺	D-2	S R 4	18	C-81	壺	D-3 a	S Q 26
5	C-10	壺	D-2	S R 2	19	C-99	壺	D-3 a	S I 8
6	C-370	壺	D-2	S I 25	20	C-82	壺	D-3 b	S I 14
7	C-34	壺	D-2	S I 9	21	C-164	壺	D-3 b	S D 5
8	C-428	壺	D-2	S R 2	22	C-45	壺	D-3 b	S K 39
9	C-62	壺	D-2	S I 18	23	C-48	壺	D-3 b	S K 39
10	C-46	壺	D-2	S K 30	24	C-67	壺	D-3 b	S I 10
11	C-53	壺	D-2	S D 26	25	C-66	壺	D-3 b	S I 10
12	C-83	壺	D-2	S I 14	26	C-342	壺	D-3 b	S I 4
13	C-341	壺	D-2	S R 4	27	C-81	壺	D-3 b	S I 14
14	C-381	壺	D-2	S I 3					

第279図 D群土器集成図(7)

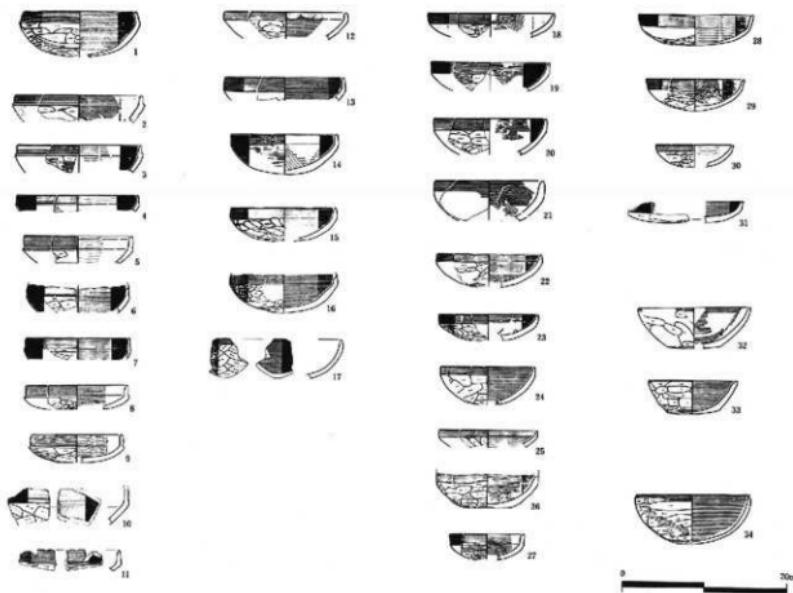
D 群 土 器



器号	號標番号	器 形	分 類	出土遺物	層 位	器号	號標番号	器 形	分 類	出土遺物	層 位
1	G-75	瓶	D-1 a	SR 1		11	C-121	甕	D-1	SK 4	
2	G-60	瓶	D-1 b	SD 39		12	C-354	甕	D-1	SR 4	
3	C-350	瓶	D-1 b	SR 4		13	C-12	甕	D-2 a	SR 2	
4	C-348	瓶	D-2 a	S 15		14	C-156	甕	D-2 a	S 1 8	
5	G-59	瓶	D-2 b	SD 39		15	C-351	甕	D-2 b	SR 4	
6	C-100	瓶	D-1	S 19		16	C-50	甕	D-2 b	SR 2	
7	G-41	瓶	D-1	S 118		17	C-87	甕	D-3	S 114	
8	C-223	瓶	D-2	SR 4		18	C-416	甕	D-3	SD 45	
9	C-85	瓶	D-2	ST 14		19	C-385	甕	D-4	SR 4	
10	C-371	瓶	D-2	S 14							

第280圖 D群土器集成圖(8)

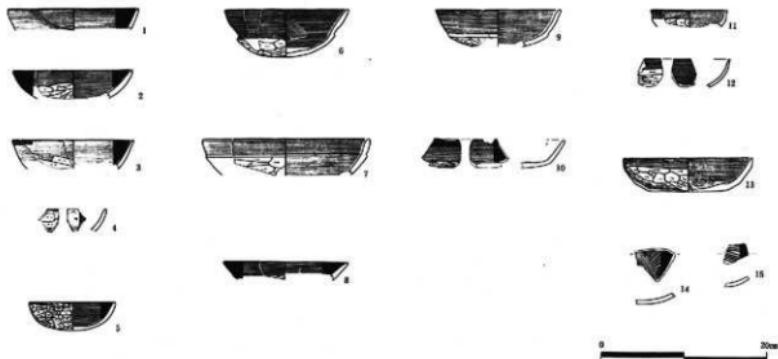
E 群 土 器



番号	目録番号	分類	出土遺跡	層位	口 径	底 径	壁 高	底 高	容積	体 積	外 囲 様 標	内 围 様 標
1	C-314	E-1 a	S.R.4		(13.6)	—	(5.6)	(4.3)	(0.77)	677.1	深丸型	深丸型
2	C-144	E-1 b	S.D25		(15.7)	—	—	—	—	—	深丸型	深丸型
3	C-317	E-1 b	S.R.4		(15.2)	—	—	—	—	—	—	黑色丸型
4	C-208	E-1 b	S.R.4		(14.8)	—	—	—	—	—	深丸型	深丸型
5	C-320	E-1 b	S.R.4		(13.2)	—	—	—	—	—	—	—
6	C-272	E-1 b	S.R.4		—	—	—	—	—	—	深丸型	深丸型
7	C-272	E-1 b	S.R.4		(12.4)	—	—	—	—	—	深丸型	深丸型
8	C-56	E-1 b	S.R.4		(12.4)	—	2.0	1.6	0.52	326.4	—	—
9	C-270	E-1 b	S.R.4		(11.0)	—	(3.4)	(1.6)	(0.51)	282.2	—	深丸型
10	C-318	E-1 b	S.R.4		—	—	—	—	—	—	口縁部のみ深丸型	深丸型
11	C-127	E-1 b	S.D25		—	—	—	—	—	—	口縁部のみ深丸型	深丸型
12	C-216	E-2 a	S.R.4		(14.6)	—	—	—	—	—	—	—
13	C-259	E-2 a	S.I.23		(14.6)	—	—	—	—	—	口縁部のみ深丸型	深丸型
14	C-269	E-2 a	S.R.4		12.9	—	5.0	3.9	0.78	457.4	黑色丸型	黑色丸型
15	C-260	E-2 a	S.R.2		(12.9)	—	(4.2)	(2.9)	(0.69)	404.2	口縁部のみ深丸型	圓筒形
16	C-305	E-2 a	S.R.4		—	—	—	3.7	—	—	口-黑色丸型-一部深丸型、統一黑色丸型	黑色丸型-深丸型
17	C-218	E-2 a	S.R.4		—	—	—	—	—	—	深丸型	深丸型
18	C-257	E-2 a	S.I.23		(15.2)	—	(3.4)	(2.1)	(0.62)	443.7	深丸型	深丸型
19	C-168	E-2 a	1周		(14.3)	—	(4.6)	(2.7)	(0.66)	497.3	口縁部のみ深丸型	深丸型
20	C-418	E-2 b	S.R.4		(15.4)	—	(5.6)	(3.5)	(0.71)	517.9	深丸型	深丸型
21	C-65	E-2 b	S.I.15		(13.2)	—	(5.8)	—	—	632.5	—	—
22	C-159	E-2 b	S.I.15		(12.6)	—	(4.8)	(3.2)	(0.79)	360.6	(1)斜面のみ深丸型	深丸型
23	C-271	E-2 b	S.R.4		(12.0)	—	(3.2)	(2.1)	(0.66)	367.1	(1)-深丸型、底-凹凸底型	深丸型
24	C-295	E-2 b	S.R.4		(11.4)	—	(4.6)	3.6	(0.78)	276.2	—	—
25	C-256	E-2 b	S.I.22		(11.9)	—	—	—	—	—	—	—
26	C-306	E-2 b	S.R.4		—	—	3.0	—	—	—	黑色丸型	黑色丸型
27	C-311	E-2 b	S.R.4		(9.9)	—	(3.2)	(1.8)	(0.56)	147.9	深丸型	深丸型
28	C-364	E-2 c	S.R.4		14.1	—	3.6	2.4	0.64	427.7	口縁部のみ深丸型	深丸型
29	C-417	E-2 c	S.R.4		(12.0)	—	3.9	2.5	0.64	291.9	口縁部のみ深丸型	深丸型
30	C-133	E-2 c	S.D30		(9.4)	—	(2.6)	(2.0)	(0.71)	133.5	—	—
31	C-142	E-2 c	S.D25		—	—	—	—	—	—	—	—
32	C-49	E-3	S.K.30		(13.7)	(6.4)	(5.0)	—	—	479.0	—	—
33	C-38	E-3	S.R.2		19.8	—	4.1	—	—	252.0	—	—
34	C-233	E-4	S.R.4		13.8	—	6.9	5.6	0.93	630.4	—	—

第281図 E群器集成図(1)

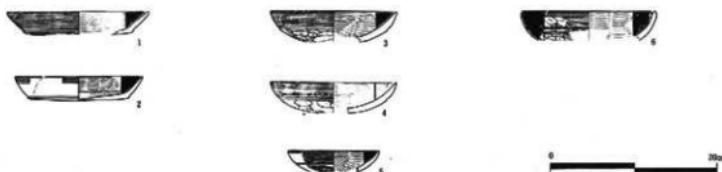
E群土器



番号	登録番号	分類	出土遺物	層位	口 径	底 径	厚 高	底 高	焼付部	体 積	外 壁 处 理	内 壁 处 理
1	C-288	E-5 a	S R 4		(15.8)	—	—	—	—	—	—	漆地灰
2	C-287	E-5 a	S R 4		(14.4)	—	—	—	—	—	漆地灰	漆地灰
3	C-419	E-5 a	S R 4		(14.6)	—	—	—	—	—	口縁部のみ漆處理	漆地灰
4	C-258	E-5 a	S I 4		—	—	—	—	—	—	漆地灰	漆地灰
5	C-25	E-5 b	S R 2		10.5	—	3.4	—	—	217.8	—	漆地灰
6	C-295	E-6 a	S R 4		15.6	—	5.9	2.3	0.38	659.6	—	—
7	C-411	E-6 b	S R 2		(20.2)	—	—	—	—	—	—	—
8	C-277	E-6 c	S R 4		(15.2)	—	—	—	—	—	漆地灰	漆地灰
9	C-304	E-6 d	S R 4		(15.3)	—	(4.8)	(1.8)	(0.31)	576.9	—	—
10	C-276	E-6 e	S R 4		—	—	—	—	—	—	口縁部のみ漆處理	漆地灰
11	C-352	E-7	S I 1		(9.3)	—	—	—	—	—	—	—
12	C-114	E-7	S I 9		—	—	—	—	—	—	—	—
13	C-167	E-8	S I 16		(15.6)	—	4.1	2.8	0.68	682.1	—	—
14	C-313	E-9	S R 4		—	—	—	—	—	—	漆地灰	漆地灰
15	C-126	E-9	S D 25		—	—	—	—	—	—	漆地灰	漆地灰

第282図 E群土器集成図(2)

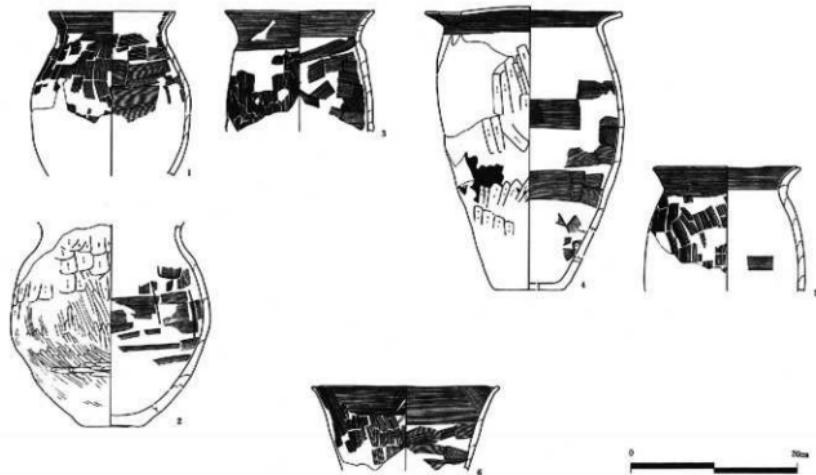
F群土器



番号	登録番号	分類	出土遺物	層位	口 径	底 径	厚 高	底 高	焼付部	体 積	各 断面	壁高/口径	底、部	外側調査	内側調査
1	C-90	F-1	S D 5		(17.4)	—	2.9	8.5	0.17	(13.5)	2.0	330.9	(6.17)	C 2	A
2	C-70	F-1	S D 2		(15.6)	—	3.0	8.4	0.13	(12.5)	1.7	450.3	(6.19)	B 2	A
手 納															
3	C-179	F-2 a	S I 25		(15.3)	—	(4.0)	(1.7)	(0.43)	(13.1)	1.1	497.9	(0.36)	C 2	A
4	C-180	F-2 a	S I 25		(15.3)	—	(3.8)	(1.6)	(0.42)	(12.8)	1.3	473.1	(0.35)	B 2	A
5	C-235	F-2 a	S R 4		(11.0)	—	(3.1)	(1.5)	(0.47)	(9.0)	1.0	170.4	(0.38)	E 3	A
手 納															
6	標準標本	24.83	—	—	13.9	—	3.6	1.6	0.44	11.6	1.1	380.5	0.26	—	—
7	標準標本	24.83	—	—	4.54	—	1.26	0.02	—	22.57	1.38	182.35	0.02	—	—
番号	登録番号	分類	出土遺物	層位	口 径	底 径	厚 高	底 高	焼付部	体 積	各 断面	壁高/口径	底、部	外側調査	内側調査
8	C-180	F-2 b	S D 5		(16.1)	—	—	—	(15.0)	—	0.6	—	—	C 2	A

第283図 F群土器集成図(1)

F群土器



番号	登錄番号	器 形	分 類	出土遺物	層 位	番号	登錄番号	器 形	分 類	出土遺物	層 位
1	C-362	壺	F-1	S 135		4	C-166	壺	F-2 b	S 116	
2	C-377	壺	F-1	S 135		5	C-375	壺	F-2 b	S 125	
3	C-363	壺	F-2 a	S 135		6	C-361	壺	F-1	S 125	

第284図 F群土器集成図(2)

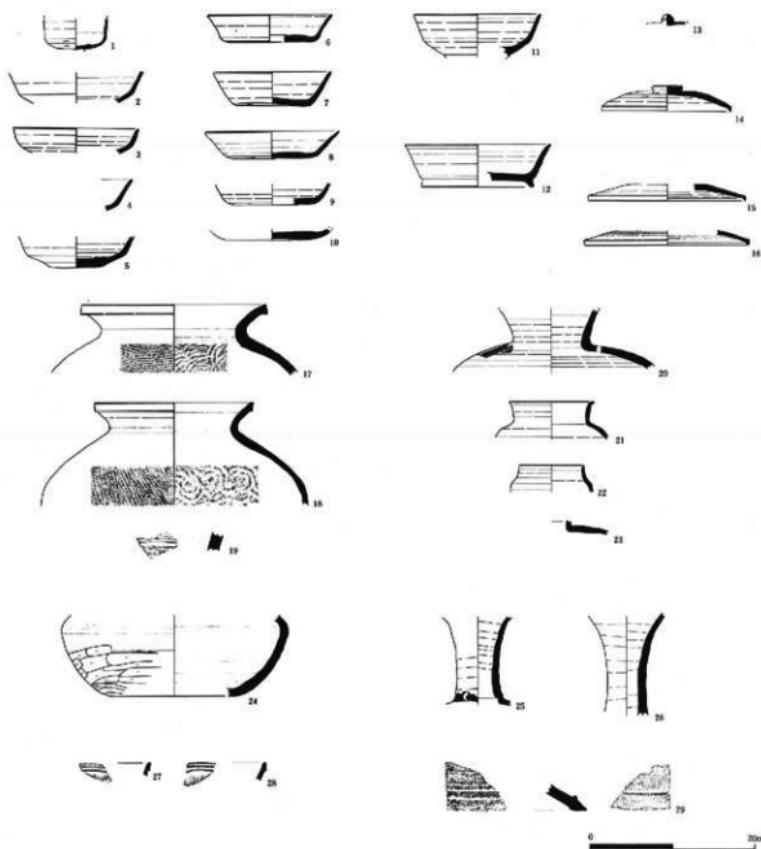
G群土器



番号	登錄番号	器 形	分 類	出土遺物	層 位	番号	登錄番号	器 形	分 類	出土遺物	層 位
1	D-2	环	G-1	SD140		2	D-4	环	G-2	SD119	

第285図 G群土器集成図

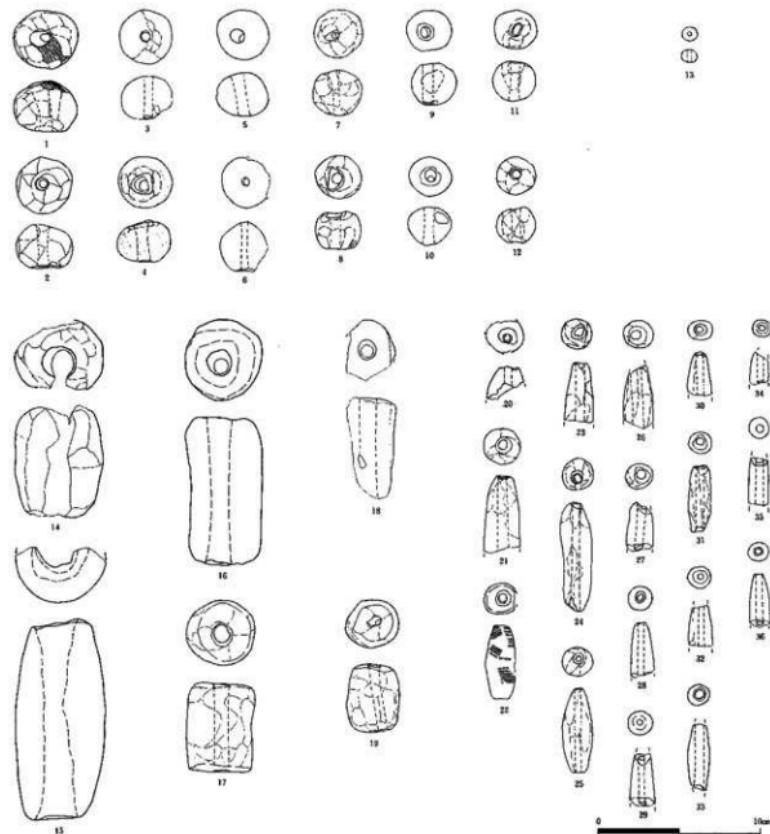
須恵器



番号	號	形	分類	出土遺跡	層位	番号	號	形	分類	出土遺跡	層位
1	E-6	平	1	SR 4		16	E-8	曲	1	SR 4	
2	E-46	环	2	SR 3		17	E-5	卷	1	SR 4	
3	E-90	环	2	S 19		18	E-32	卷	1	SR 4	
4	E-45	环	2	SR 3		19	E-47	卷	2	S 13	
5	E-26	环	3	SR 4		20	E-25	直	1	SR 1	
6	E-7	环	4	SR 4		21	E-12	直	2	SR 1	
7	E-24	环	5	SR 4		22	E-29	直	3	S 125	
8	E-1	环	6	SR 2		23	E-21	直	4	S 14	
9	E-59	环	6	SD 25		24	E-28	平直	1	SR 1	
10	E-11	环	6	S 18		25	E-23	長曲直	1	SD 7	
11	E-2	高台付环	1	SR 2		26	E-22	長曲直	1	S 125	
12	E-30	高台付环	2	SR 4		27	E-31	直	1	SR 4	
13	E-27	直	1	SR 4		28	E-36	直	1	S 125	
14	E-9	直	2	SD 5		29	E-3	不明	1	SD 26	
15	E-49	直	3	SR 3							

第285図 須恵器集成図

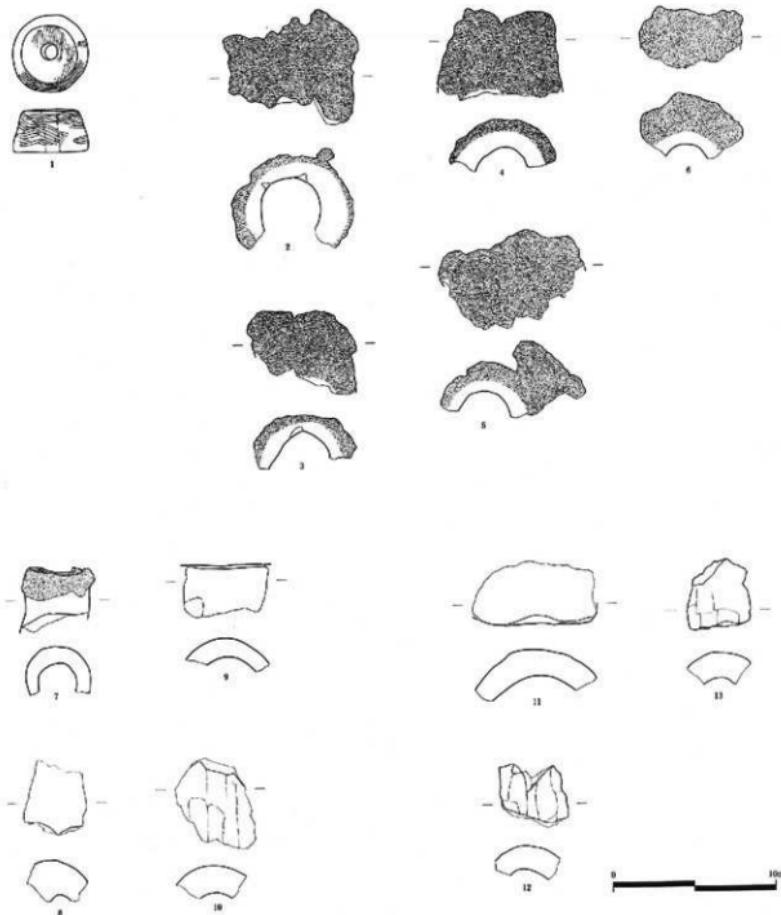
土 製 品



番号	登記番号	型 形	分類	出土遺物	層 位	番号	登記番号	型 形	分類	出土遺物	層 位
1	P-24	土 玉	I	S R 4		19	P-27	土 素	I C	S R 4	
2	P-19	土 玉	I			20	P-16	土 素	2		
3	P-2	土 玉	I	S R 2		21	P-34	土 素	2	S I 3	
4	P-22	土 玉	I	S R 4		22	P-20	土 素	2	S R 1	
5	P-30	土 玉	I	S T 22		23	P-38	土 素	2	S D 26	
6	P-1	土 玉	I	S R 2		24	P-5	土 素	2	S R 2	
7	P-49	土 玉	I			25	P-33	土 素	2	S R 1	
8	P-29	土 玉	I	S R 4		26	P-27	土 素	2	S D 26	
9	P-25	土 玉	I	S R 4		27	P-29	土 素	2	S D 26	
10	P-3	土 玉	I	S R 2		28	P-11	土 素	2	S D 6	
11	P-23	土 玉	I	S R 4		29	P-12	土 素	2	S D 5	
12	P-32	土 玉	I			30	P-13	土 素	2	S D 5	
13	P-31	土 玉	I	S T 24		31	P-26	土 素	2	S R 1	
14	P-5	土 素	I a	S D W		32	P-18	土 素	2	S D 5	
15	P-35	土 素	I a	S D 9		33	P-17	土 素	2		
16	P-4	土 素	I b	S R 2		34	P-14	土 素	2	S D 6	
17	P-6	土 素	I b	S D 26		35	P-19	土 素	2	S I 8	
18	P-21	土 素	I c	S D H		36	P-15	土 素	2		

第287図 土製品集成図(1)

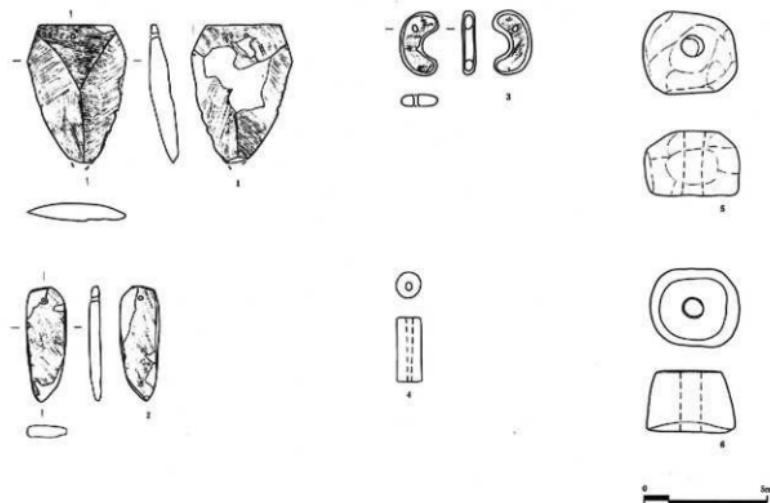
土 製 品



番号	登錄番号	器 形	分 類	出土遺跡	層 位	番号	登錄番号	器 形	分 類	出土遺跡	層 位
1	P-36	鉢形器		SD2		8	P-50	網口		S 112	
2	P-41	網口	中世	S R 2		9	P-6	網口	古代	S 113	
3	P-43	網口	中世	S R 2		10	P-56	網口	古代	S R 3	
4	P-42	網口	中世	S R 2		11	P-52	網口	時期不明	S K 32	
5	P-49	網口	中世	S R 2		12	P-51	網口	時期不明	S K 32	
6	P-44	網口	中世	S R 2		13	P-53	網口	時期不明	S K 32	
7	P-7	網口	古代	S 113							

第288図 土製品集成図(2)

石製品



番号	登録番号	器 形	分 類	出土遺構	層 位	番号	登録番号	器 形	分 類	出土遺構	層 位
1	K-5	貝(貝壳)		SR 4		4	K-4	管玉		SR 4	
2	K-1	劍(劍形品)		SR 2		5	K-2	鉤環耳		SR 2	
3	K-3	勾玉(勾形品)		SD 8		6	K-9	鉤環耳		SR 4	

第289図 石製品集成図

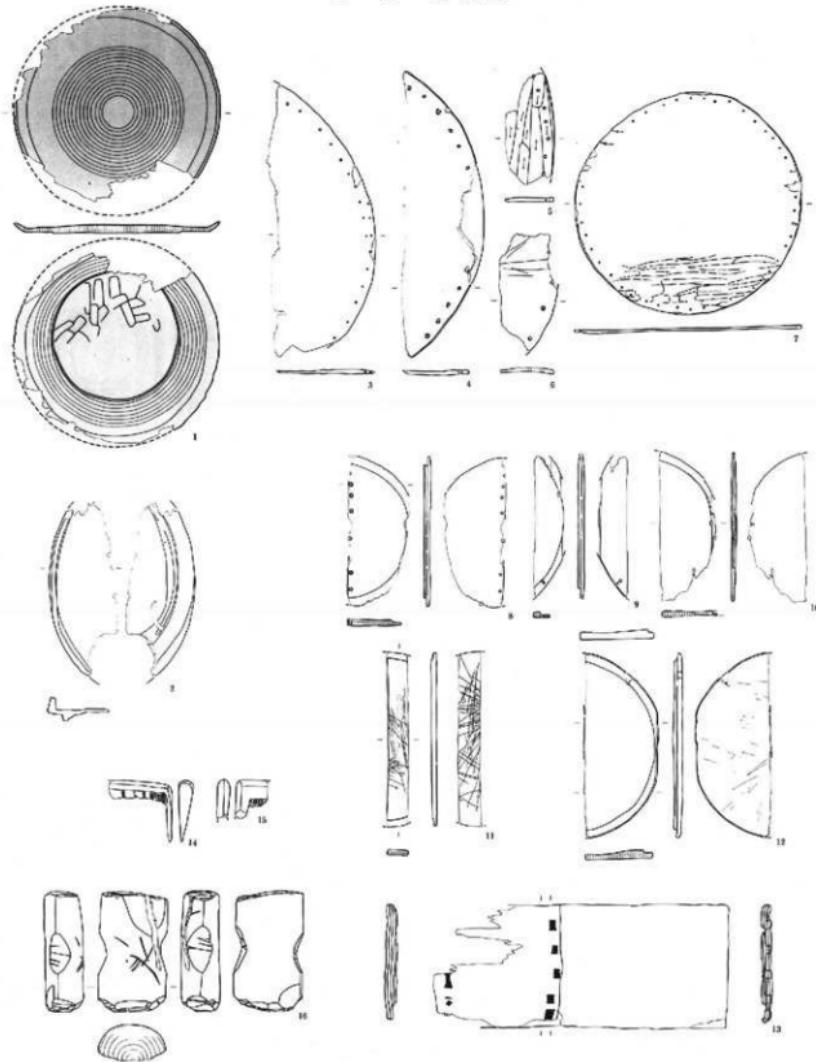
金属製品



番号	登録番号	器 形	分 類	出土遺構	層 位	番号	登録番号	器 形	分 類	出土遺構	層 位
1	N-10	耳環		SR 4		3	N-9	耳環		SD 59	
2	N-7	耳環		SI 24		4	N-8	耳環		SR 4	

第290図 金属製品集成図

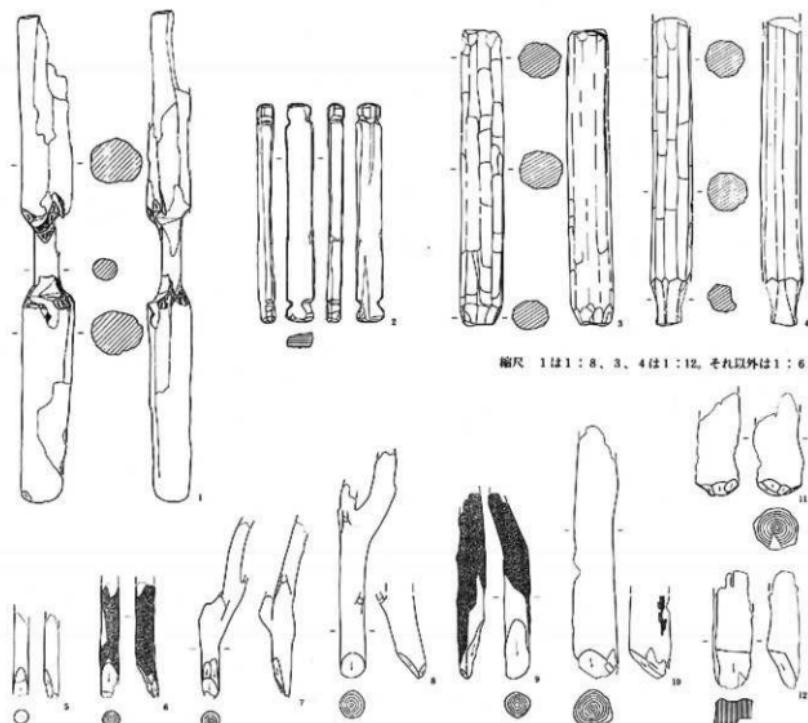
木製品(古代)



縮尺 1, 3, 13は1:8, 7は1:12, 14, 15は1:3。それ以外は1:6

番号	登録番号	器 形	規 準	出土遺跡	編 号	番号	登録番号	器 形	規 準	出土遺跡	編 号
1	L-122	盆	サヤケ	SR 4		9	L-12	容器(底)	ヒノキ板の一種	SD 5	
2	L-49	高台付骨器	トナ	SD 25		10	L-124	容器(底)	ヒノキ板の一種	SD 5	
3	L-123	川越不明木製品	(樹皮)	SR 4		11	L-125	容器(底)	ヒノキ板の一種	SR 4	
4	L-41	川越不明木製品	(樹皮)	SR 4		12	L-66	容器(底)	ヒノキ板の一種	SR 4	
5	L-67	川越不明木製品	(樹皮)	SR 4		13	L-124	向物(横板)	(樹皮)	SR 4	
6	L-125	川越不明木製品	(樹皮)	SR 4		14	L-5	器	イノノ+楓葉以種	SR 4	
7	L-120	容器(底)	SR 4			15	L-58	器	松子樹(丸丸)	SR 4	
8	L-44	容器(底)	シノキ板の一種	SD 25		16	L-81	木鏡	コテ板コラ葉與シノキ板の一種	SR 4	

第291図 木製品集成図(1)



縮尺 1は1:8、3、4は1:12。それ以外は1:6

番号	登録番号	圖 形	圖 横	出土場所	解 位	番号	登録番号	圖 形	圖 横	出土場所	解 位
1	L-224	井	コナラ属コラ葉属タケザキの一種	SR 2		7	L-169	杭 (I B a)	ムツトコ	SR 1	
2	L-119	浮子	マツ属種管葉松の一種	SR 4		8	L-159	杭 (I B b)	ヤナギ属の一種	SR 1	
3	L-318	用途不明木製品	-	SR 4		9	L-157	杭 (I B B)	ヤナギ属の一種	SR 1	
4	L-214	用途不明木製品	-	SR 4		10	L-204	杭 (I C a)	ヤナギ属の一種	SR 1	
5	L-172	杭 (I A a)	ヤナギ属の一種	SR 1		11	L-191	杭 (I C b)	広葉樹(麻孔付)	SR 1	
6	L-197	杭 (I B a)	ヤナギ属の一種	SR 1		12	L-193	杭 (I C)	クリ	SR 1	

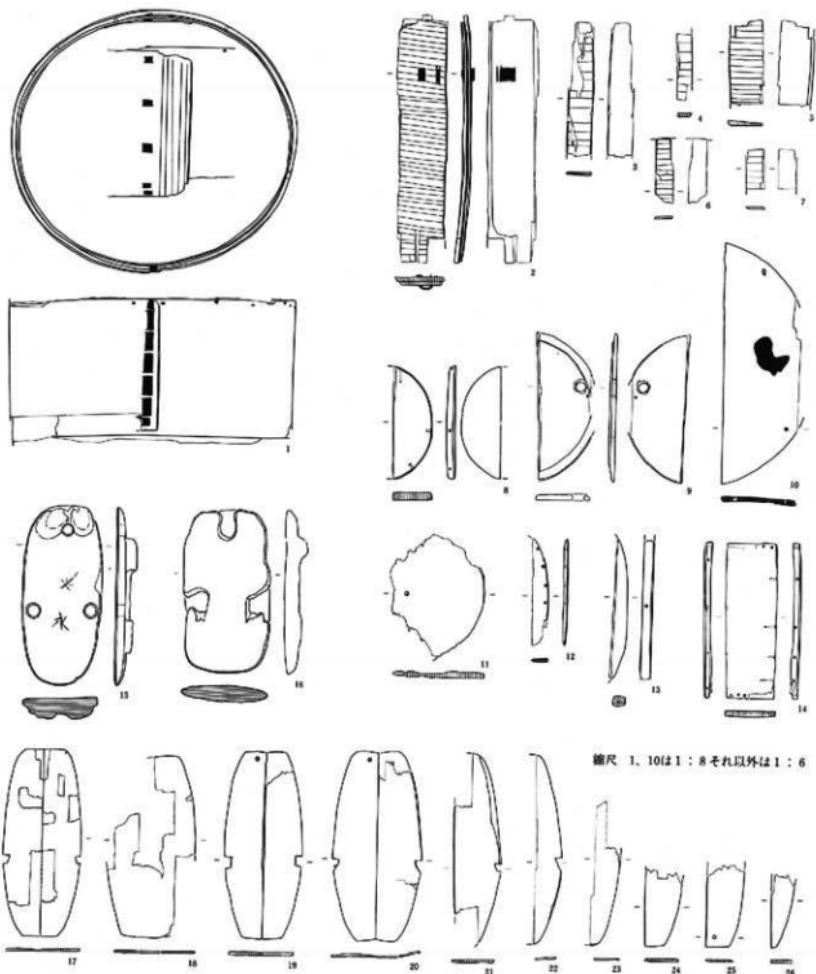
第292図 木製品集成図(2)



縮尺 1~8 1:6

番号	登録番号	圖 形	圖 横	出土場所	解 位	番号	登録番号	圖 形	圖 横	出土場所	解 位
1	L-270	漆器鉢	ケヤキ	SK 78		5	L-271	漆器皿	ケヤキ	SK 81	
2	L-272	漆器鉢	ケヤキ	SK 80		6	L-276	漆器皿	ケヤキ	SE 1	
3	L-274	漆器皿	ケヤキ	SK 1		7	L-97	漆器皿	ケヤキ	SE 1	
4	L-275	漆器皿	ケヤキ	SK 2		8	L-273	漆器(別物)	エゾノキ属	SK 78	

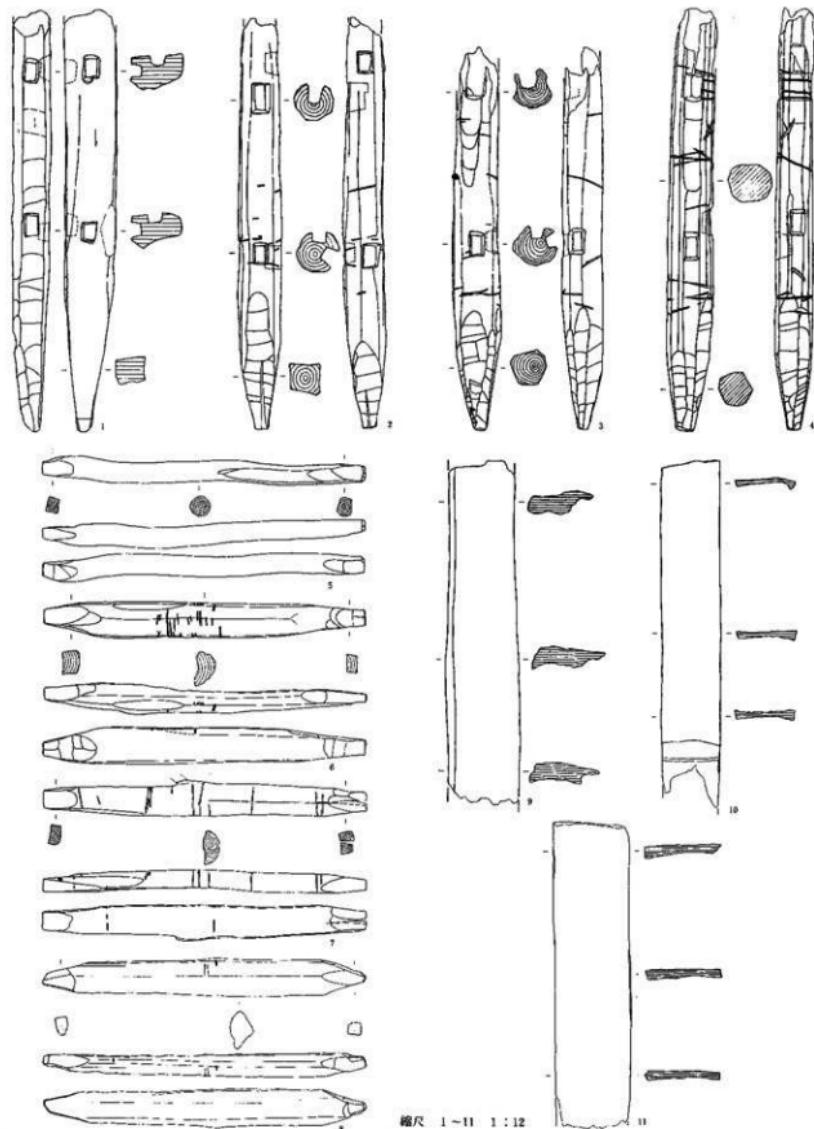
第293図 木製品集成図(3)



縮尺 1, 10は1:8 それ以外は1:6

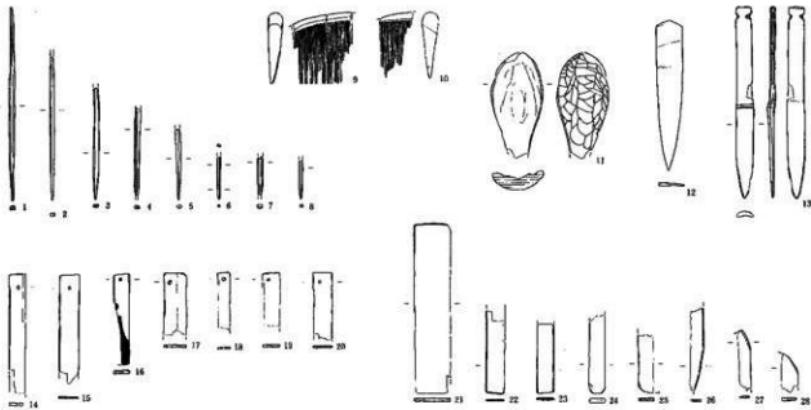
番号	出土地點番号	圖 形	規 格	出土遺物	層 位	番号	出土地點番号	圖 形	規 格	出土遺物	層 位
1	L-47	片戸舟物	セノキ堅板柾目	SE 2		14	L-149	用途不明木製品	セノキ属の一種	SE 1	
2	L-80	舟物(削板)	スギ	SE 3		15	L-2	下駄	ケヤキ	SR 2	
3	L-90	舟物(削板)	—	SK61		16	L-3	下駄	タリ	SD139	
4	L-98	舟物(削板)	—	SE 1		17	L-49	車輪	スギ	SK61	
5	L-71	舟物(削板)	スギ	SK61		18	L-319	車輪	—	SK75	
6	L-82	舟物(削板)	スギ	SK61		19	L-4	京版	セイ:属の一種	SK78	
7	L-113	舟物(削板)	—	SE 1		20	L-1	京版	セイ:属の一種	SE 1	
8	L-29	舟盤(瓦)	スギ	SK81		21	L-146	京版	セイ:属の一種	SE 1	
9	L-8	舟盤(瓦)	セノキ属の一種	SD 2		22	L-20	京版	セイ:属の一種	SE 1	
10	L-127	舟盤(瓦か瓦)	セノキ属の一種	SE 2		23	L-21	京版	セイ:属の一種	SE 1	
11	L-111	舟盤(瓦)	—	SR 1		24	L-26	京版	スギ	SE 1	
12	L-76	舟盤(瓦)	セイ:属の一種	SK61		25	L-27	京版	—	SE 1	
13	L-150	用途不明木製品	アヌコロ	SE 1		26	L-28	京版	—	SE 1	

第294図 木製品集成図(4)



第295図 木製品集成図(5)

番号	目 形	圖 像	出 土 標	層 位	番号	目 形	圖 像	出 土 標	層 位
1	L-225 井戸枠木支柱	アリ	S E 3		7	L-269 井戸枠木支柱	アリ	-	S E 3
2	L-226 月戸枠木支柱	アリ	S E 3		8	L-263 月戸枠木支柱	アリ	-	S E 3
3	L-228 井戸枠木支柱	アリ	S E 3		9	L-230 井戸枠木支柱	*木の一枚	-	S E 3
4	L-227 月戸枠木支柱	アリ	S E 3		10	L-234 井戸枠木支柱	*木の一枚	-	S E 3
5	L-264 月戸枠木支柱	コラ風コナラ風コナラ筋の一板	S E 3		11	L-241 井戸枠木支柱	*木の一枚	-	S E 3
6	L-265 月戸枠木支柱	アリ	S E 3						



縮尺 9, 10は1:3。それ以外は1:6

番号	登録番号	器 形	材 種	出土遺物	層 位	番号	登録番号	器 形	材 種	出土遺物	層 位
1	L-34	筆	セイ高の一握	SK80		15	L-16	用途不明木製品	-	SE1	
2	L-215	筆	セイ高の一握	SD8		16	L-14	用途不明木製品	セイ高の一握	SK75	
3	L-35	筆	セイ高の一握	SK61		17	L-22	用途不明木製品	セイ高の一握	SK61	
4	L-36	筆	-	SK61		18	L-145	用途不明木製品	セイ高の一握	SE1	
5	L-65	筆	アヌコ開拓器	SK61		19	L-142	用途不明木製品	セイ高の一握	SE1	
6	L-37	筆	-	SK61		20	L-20	用途不明木製品	セイ高の一握	SK75	
7	L-42	筆	セイ高の一握	SK61		21	L-138	用途不明木製品	スギ	SK80	
8	L-38	筆	-	SK61		22	L-17	用途不明木製品	-	SE1	
9	L-6	筆	イヌノキ高の一握	SD146		23	L-19	用途不明木製品	-	SE1	
10	L-7	筆	イヌノキ高の一握	SE1		24	L-13	用途不明木製品	-	SE1	
11	L-33	杓	ニグノヤ高の一握	SK77		25	L-145	用途不明木製品	セイ高の一握	SE1	
12	L-9	木鑽?	セイ高の一握	SK61		26	L-49	用途不明木製品	-	SK80	
13	L-32	竹へら	竹へら	SE3		27	L-48	用途不明木製品	セイ高の一握	SK80	
14	L-16	用途不明木製品	-	SE1		28	L-50	用途不明木製品	-	SK80	

第296図 木製品集成図(6)

参考・引用文献

Vの分析・同定についての文献は個別に掲載しており、以下には再掲していない。

- 宝文堂 1971 『仙台叢書』第4巻（復刻版）
- 東北学院大学考古学研究部1979「仙台市中田町渠遺跡発掘調査報告書」『温故』第11号
- 木村浩二他 1981 「郡山遺跡I—昭和55年度発掘調査概報—」『仙台市文化財調査報告書』第29集 仙台市教育委員会
- 丹羽 茂他 1981 「清水遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第77集 宮城県教育委員会・日本国有鉄道新幹線工事局
- 早坂春一 1981 「日向横穴古墳」『宮城県文化財調査報告書』第77集 宮城県教育委員会・日本国有鉄道新幹線工事局
- 木村浩二他 1982 「郡山遺跡II—昭和56年度発掘調査概報—」『仙台市文化財調査報告書』第38集 仙台市教育委員会
- 工藤哲司他 1982 「栗遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第43集 仙台市教育委員会
- 木村浩二他 1983 「郡山遺跡III—昭和57年度発掘調査概報—」『仙台市文化財調査報告書』第46集 仙台市教育委員会
- 木村浩二他 1984 「郡山遺跡IV—昭和58年度発掘調査概報—」『仙台市文化財調査報告書』第64集 仙台市教育委員会
- 松本秀明 1984 「海岸平野にみられる浜堤列と完新世後期の海水準変動」『地理学評論』第57巻第10号
- 木村浩二他 1985 「郡山遺跡V—昭和59年度発掘調査概報—」『仙台市文化財調査報告書』第74集 仙台市教育委員会
- 結城慎一他 1985 「仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書」『仙台市文化財調査報告書』第76集 仙台市教育委員会
- 木村浩二他 1986 「郡山遺跡VI—昭和60年度発掘調査概報—」『仙台市文化財調査報告書』第86集 仙台市教育委員会
- 木村浩二他 1987 「郡山遺跡VII—昭和61年度発掘調査概報—」『仙台市文化財調査報告書』第96集 仙台市教育委員会
- 佐藤 洋 1987 「六反田遺跡」『仙台市文化財調査報告書』第102集 仙台市教育委員会・日本電信電話株式会社東北総支社
- 永嶋正春 1987 「鹿沼市稻荷塚遺跡出土品の材質と技法—古墳時代後期の漆による表面仕上げを施した土師器を中心にして—」『稻荷塚・大野原—運転免許センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 栃木県教育委員会
- 木村浩二他 1988 「郡山遺跡VIII—昭和62年度発掘調査概報—」『仙台市文化財調査報告書』第110集 仙台市教育委員会
- 加藤道男 1989 「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
- 藤沼邦彦、小井川和夫1989「宮城県の貝塚」『東北歴史資料館資料集』25 東北歴史資料館

- 広島県立博物館 1989 『広島県立博物館展示案内』
- 栗木誠、田熊清彦 1989 「古代下野の土器様相—古墳時代後期から奈良時代を中心として—」『栃木県考古学会誌』第11号 栃木県考古学会
- 辻 秀人 1990 「東北古墳時代の画期について（その2）－7世紀史の理解をめざして－」『考古学古代史論文』伊東信雄先生追悼論文集刊行会
- 手塚 均他 1990 「一里塚遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第135集 宮城県教育委員会
- 日本貨幣商共同組合 1990 『日本貨幣カタログ』
- 阿部 恵他 1991 「新峯崎遺跡」『宮城県村田町文化財調査報告書』第9集 宮城県村田町
- 中村方彦他 1991 「住社遺跡」『角田市文化財調査報告書』第7集 角田市教育委員会
- 名久井文明 1991 『北国の樹皮文化』岩手県立博物館
- 真山 悟他 1991 「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第142集 宮城県教育委員会・日本道路公団
- 石本 弘他 1992 「山崎遺跡（第2次）」『矢吹地区遺跡発掘調査報告』10 福島県教育委員会・鶴福島県文化センター
- 後藤秀一他 1992 「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第148集 宮城県教育委員会・日本道路公団
- 白鳥良一 1992 「陸奥の国における城柵、官衙の土器」『古代の土器研究会第1回シンポジウム 古代の土器研究—律令的土器様式の西・東—』古代の土器研究
- 仙台市教育委員会 1992 「下飯田遺跡一年報13」『仙台市文化財調査報告書』第167集
- 朝日新聞社 1993 『日本の歴史』2—中世—
- 篠原信彦 1993 「大蓮寺窯跡—第2・3次発掘調査報告書—」『仙台市文化財調査報告書』第168集 仙台市教育委員会
- 仙台市教育委員会 1993 「下飯田遺跡一年報14」『仙台市文化財調査報告書』第176集
- 永嶋正春 1993 「土師器表面の漆仕上げ処理について」『太宰府・佐野地区遺跡群 一尾崎遺跡第1次調査』太宰府市教育委員会
- 中山正典 1993 「曲物の製作技法と形態—弁当としての機能に注視して—」『食生活と民具』 日本民具学会編（雄山閣）
- 長谷川 厚 1993 「関東から東北へ—律令制成立前後の関東地方と東北地方の関係について—」『21世紀への考古学』雄山閣
- 長谷川 厚 1993 「赤い土器・黒い土器」『翔古論聚—久保哲三先生追悼論文集』抜粋
- 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 1993 『草戸千軒町遺跡発掘調査報告—北部地域北半部の調査—』広島県教育委員会
- 岩見和泰他 1994 「藤田新田遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第163集 宮城県教育委員会・日本道路公団

写真図版 16

(遺跡・遺構写真)



西方向から見た下飯田遺跡全景（上部は太平洋）



写真1 南上空から見た下飯田遺跡周辺



写真2 東上空から見た下飯田遺跡

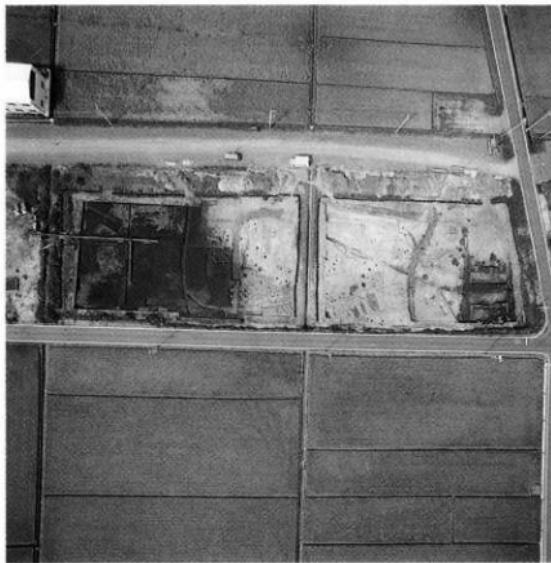


写真3 3区・4区完掘状況

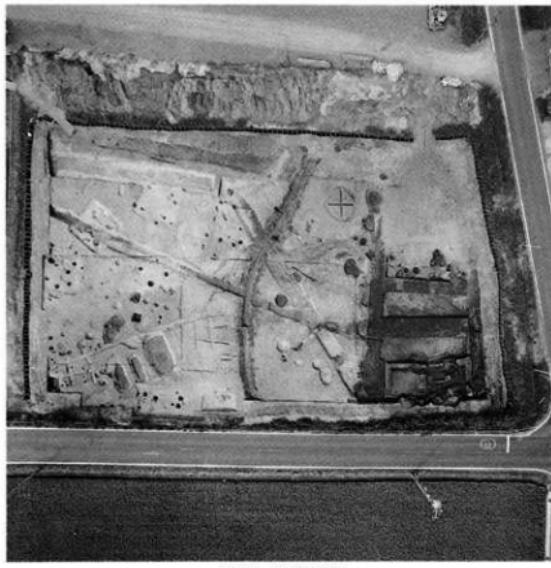


写真4 3区完掘状況



写真5 4区完掘状況



写真6 91年3区連續換出状況（北より）



写真7 92年3区造耕検出状況（南より）



写真8 91年4区造耕検出状況



写真9 92年4区造耕検出状況

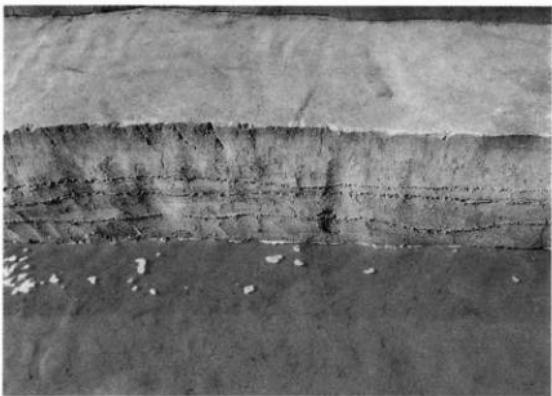


写真10 基本層断面



写真11 4区S12号穴住居跡



写真12 3区S13号穴住居跡



写真13 3区S13堅穴住跡力マド換出状況



写真14 3区S14堅穴住跡



写真15 3区S15堅穴住跡



写真16 3区S16整穴住居跡



写真17 3区S18整穴住居跡

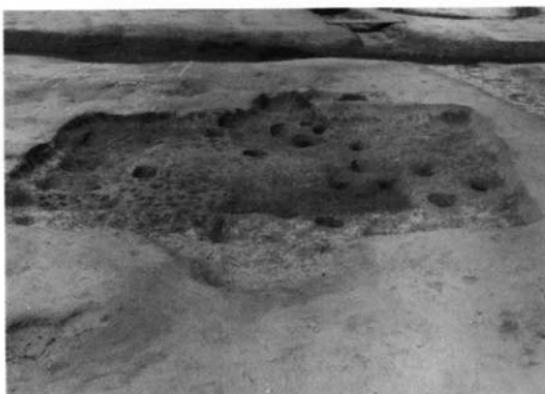


写真18 3区S18整穴住居跡掘り方



写真19 3区S19壁穴住居跡



写真20 3区S19壁穴住居跡マド付近断面（西上り）

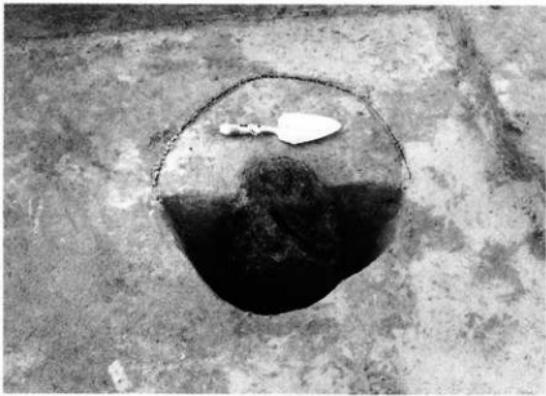


写真21 3区S19壁穴住居跡柱材



写真22 3区S19堅穴住居跡柱材



写真23 3区S19堅穴住居跡掘り方底面の鉛直



写真24 3区S19堅穴住居跡裏方



写真25 3区S113号穴住居跡



写真26 3区S114号穴住居跡カド検出状況

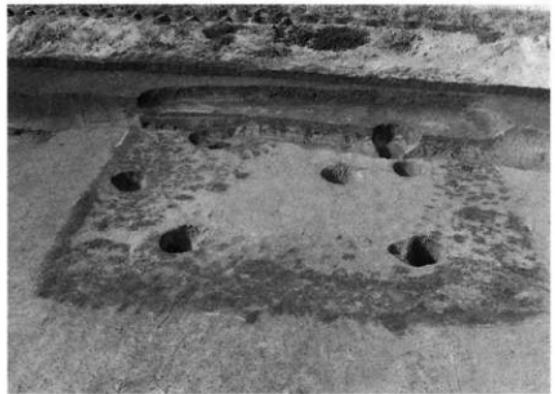


写真27 2区S115号穴住居跡



写真28 2区S116堅穴住居跡



写真29 3区S118堅穴住居跡



写真30 3区S122堅穴住居跡



写真31 4区S12・24・25号穴住居跡



写真32 4区S124号穴住居跡



写真33 4区S125号穴住居跡



写真34 4区 S 125号穴住居跡カマド検出状況



写真35 3区 S 126号穴住居跡



写真36 4区 S B 1掘立柱建物跡



写真37 4区S B 2・3掘立柱建物跡

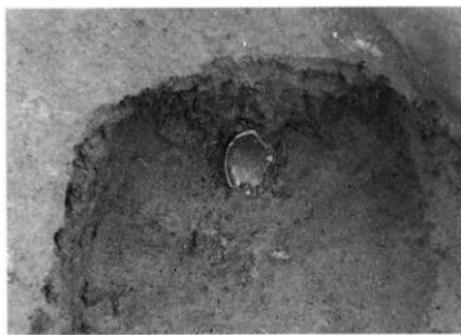


写真38 4区S B 2掘立柱建物跡
柱穴遺物出土状況



写真39 4区S B 2掘立柱建物跡柱穴断面



写真40 3区SK30土坑遺物出土状況



写真41 3区SK61土坑



写真42 4区SK74土坑断面



写真43 3区SK80土坑



写真44 3区SK81土坑

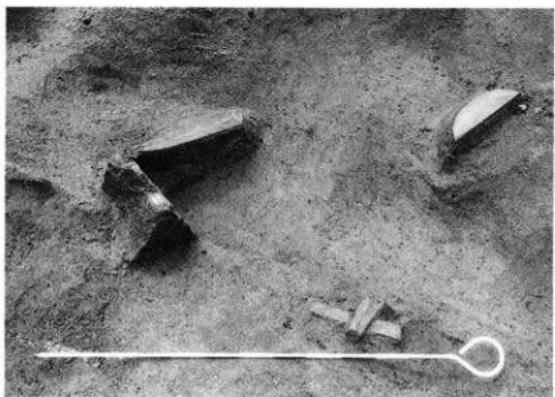


写真45 3区SK81土坑遺物出土状況



写真46 3区SK110土坑



写真47 3区SE1井戸跡

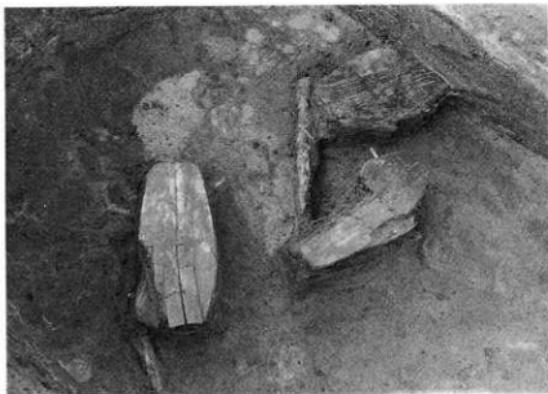


写真48 3区SE1井戸跡遺物出土状況



写真49 3区SE1井戸跡遺物出土状況



写真50 3区SE2井戸跡



写真51 3区SE3井戸跡

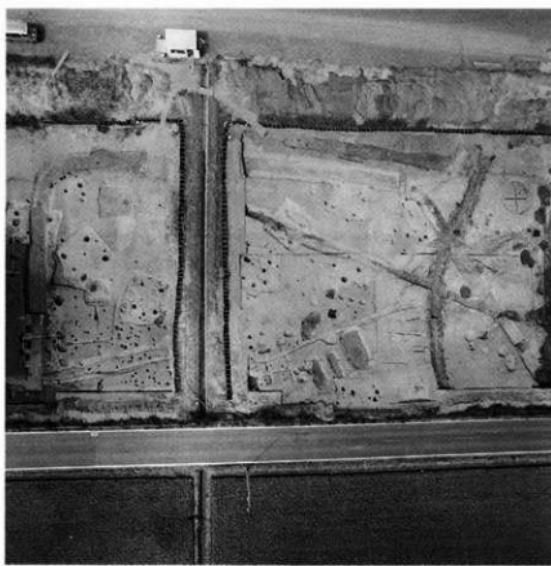


写真52 3区・4区SD2溝跡全景



写真53 4区SD2溝跡

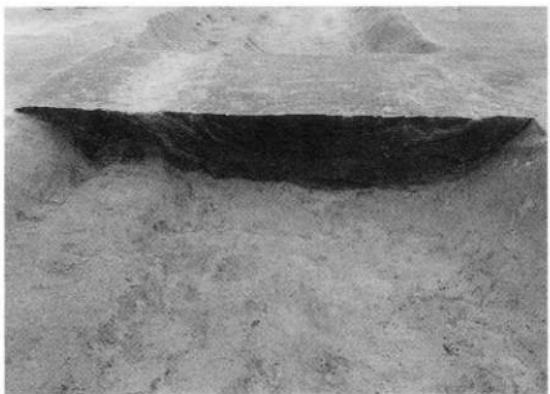


写真54 3区SD2溝跡断面



写真55 4区SD2溝跡断面



写真56 4区 S D 5 溝跡底面の鉛直

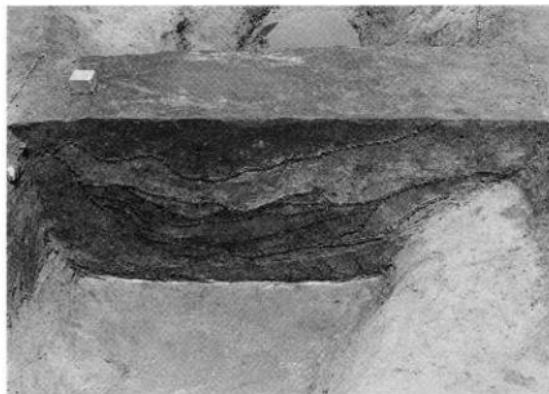


写真57 3区 S D 5 溝跡断面

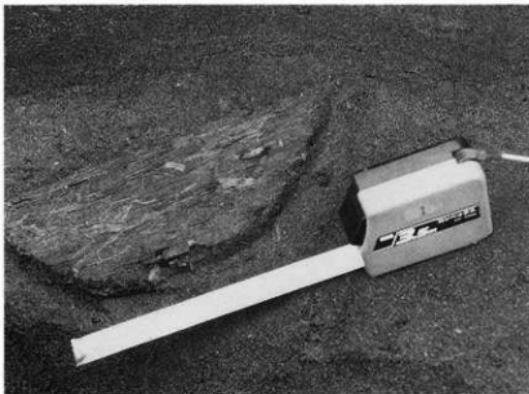


写真58 3区 S D 5 溝跡遺物出土状況



写真59 4区SD6清跡

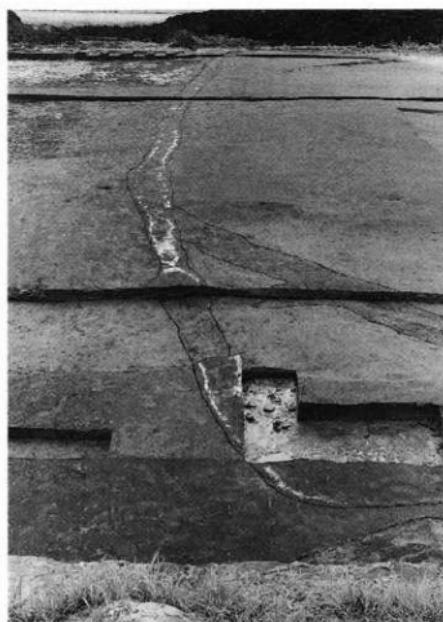


写真60 4区SD7清跡確認状況



写真61 4区SD7清跡断面



写真62 4区SD7清跡遺物出土状況



写真63 4区SD8清跡

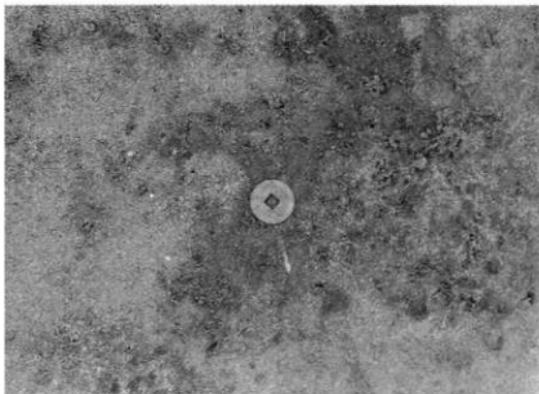


写真64 4区SD8清跡底面遺物出土状況



写真65 4区SD15・16清跡

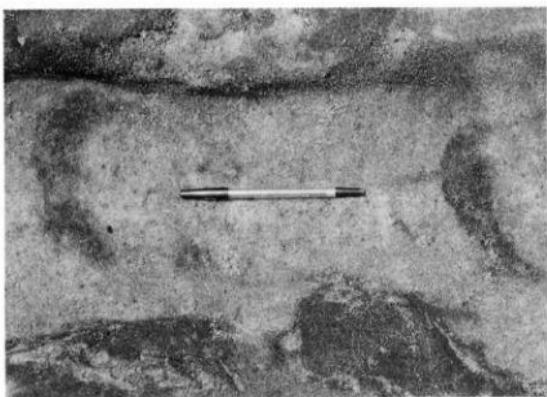


写真66 4区 S D 18清跡底面の鉛直



写真67 3区 S D 26清跡断面



写真68 3区 S D 26清跡底面遺物出土状況



写真69 3区小溝造模群確認状況（H群）



写真70 3区小溝造模群（H群）



写真71 3区小溝造模群断面（H群）

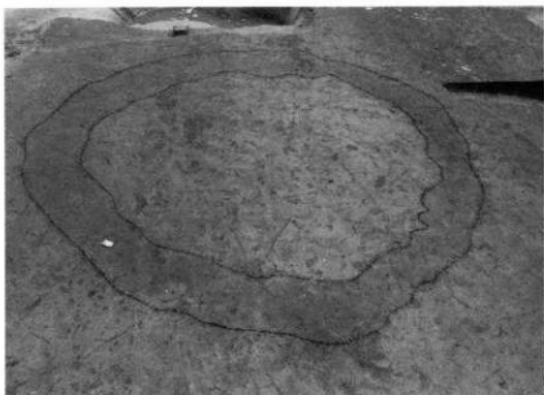


写真72 3区S D27円形周溝確認状況



写真73 3区S D27円形周溝



写真74 3区S D31円形周溝



写真75 3区 S D 56円形周溝



写真76 3区 S D 90円形周溝



写真77 2区 S D 97円形周溝



写真78 3区 S D 109円形周溝



写真79 4区 S R 1 河川跡断面

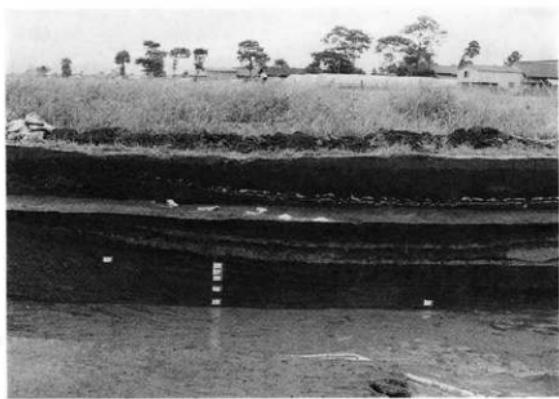


写真80 4区 S R 1 河川跡断面



写真81 4区SR1河川跡続列

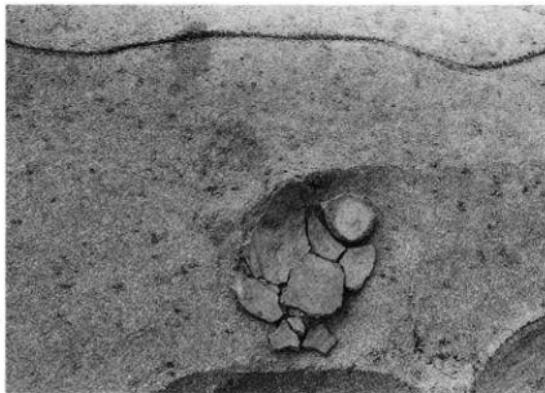


写真82 4区SR1河川跡遺物出土状況(16層)



写真83 2区SR2河川跡



写真84 2区 S R 2 河川跡断面



写真85 2区 S R 2 河川跡遺物出土状況

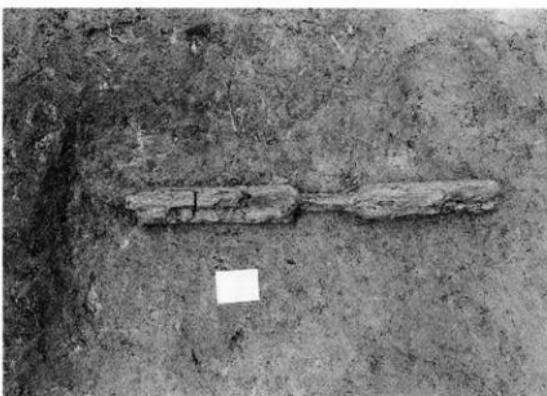


写真86 2区 S R 2 河川跡遺物出土状況



写真87 2区SR2+3河川跡



写真88 2区SR3河川跡断面



写真89 3区SR4河川跡具層検出状況

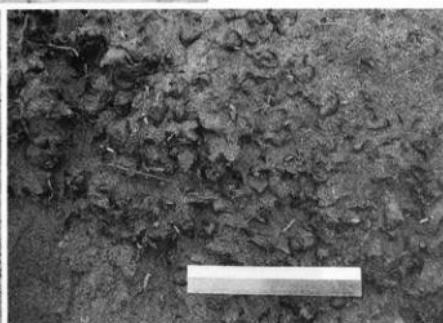


写真90 3区SR4河川跡具層検出状況

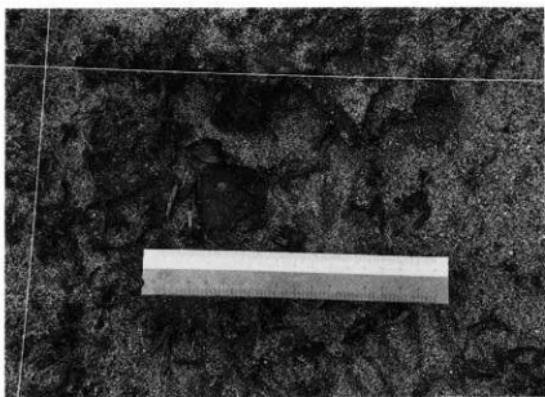


写真91 3区SR4河川跡貝層検出状況



写真92 3区SR4河川跡貝層検出状況

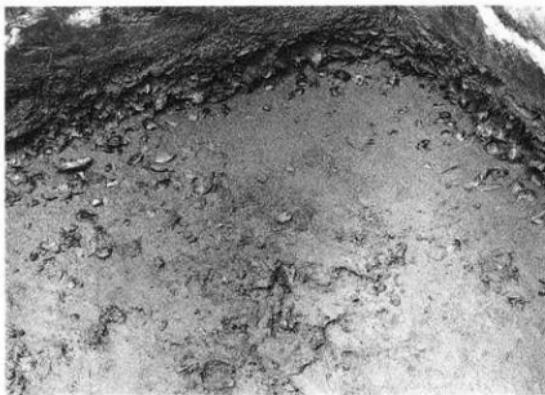


写真93 3区SR4河川跡貝層断面



写真94 3区S R 4河川跡貝層遺物出土状況



写真95 3区S R 4河川跡貝層遺物出土状況



写真96 3区S R 4河川跡貝層遺物出土状況

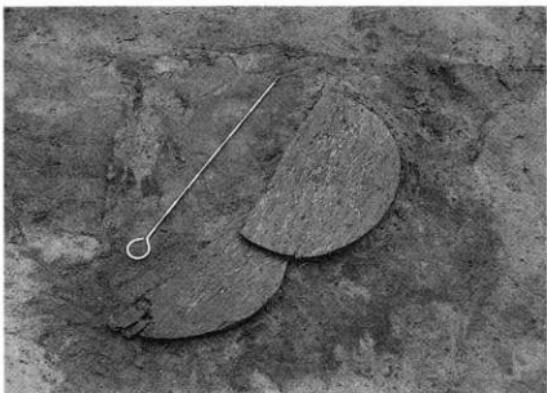


写真87 3区S R 4 河川跡貝層遺物出土状況

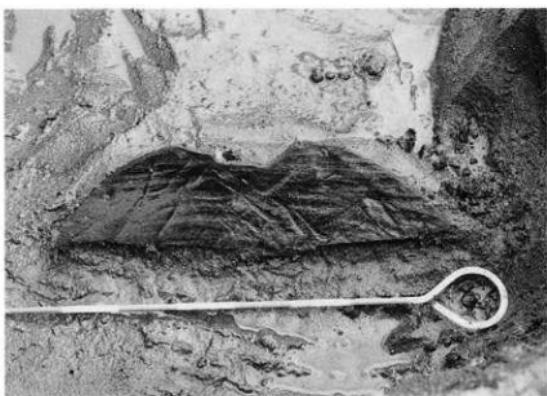


写真88 3区S R 4 河川跡貝層遺物出土状況

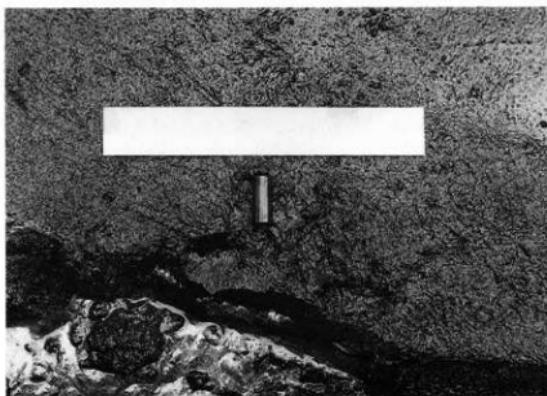


写真89 3区S R 4 河川跡貝層遺物出土状況



写真100 3区S R 4 河川跡貝層遺物出土状況



写真101 3区S R 4 河川跡貝層遺物出土状況



写真102 3区S R 4 河川跡貝層遺物出土状況

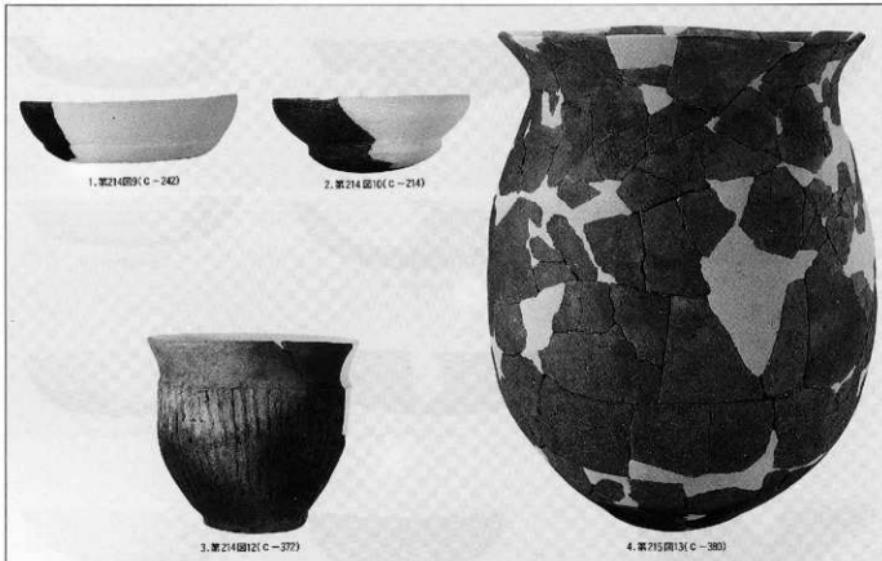


写真103 3区SR4河川跡貝層遺物出土状況



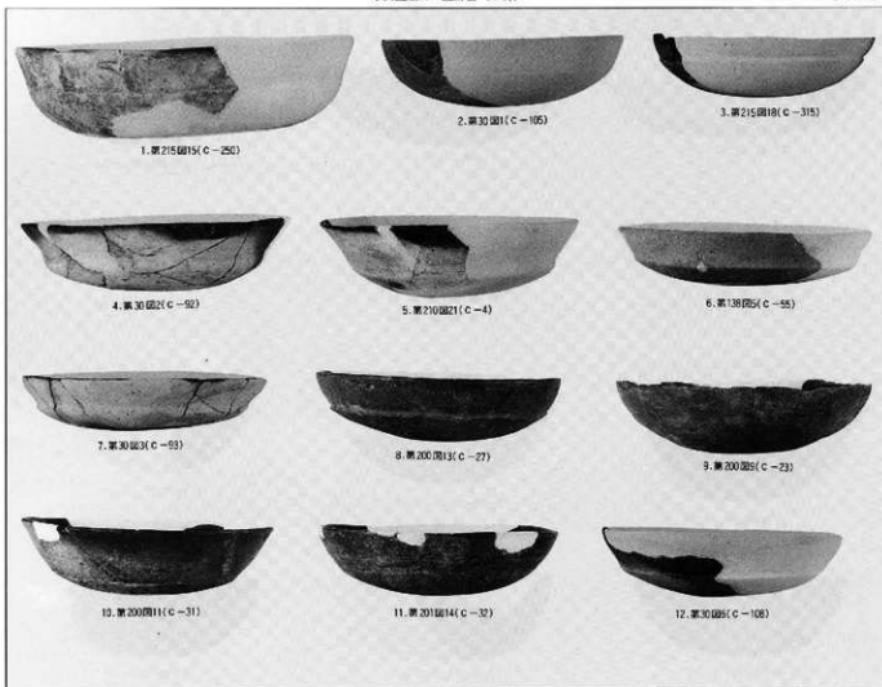
写真104 3区SR4河川跡貝層遺物出土状況





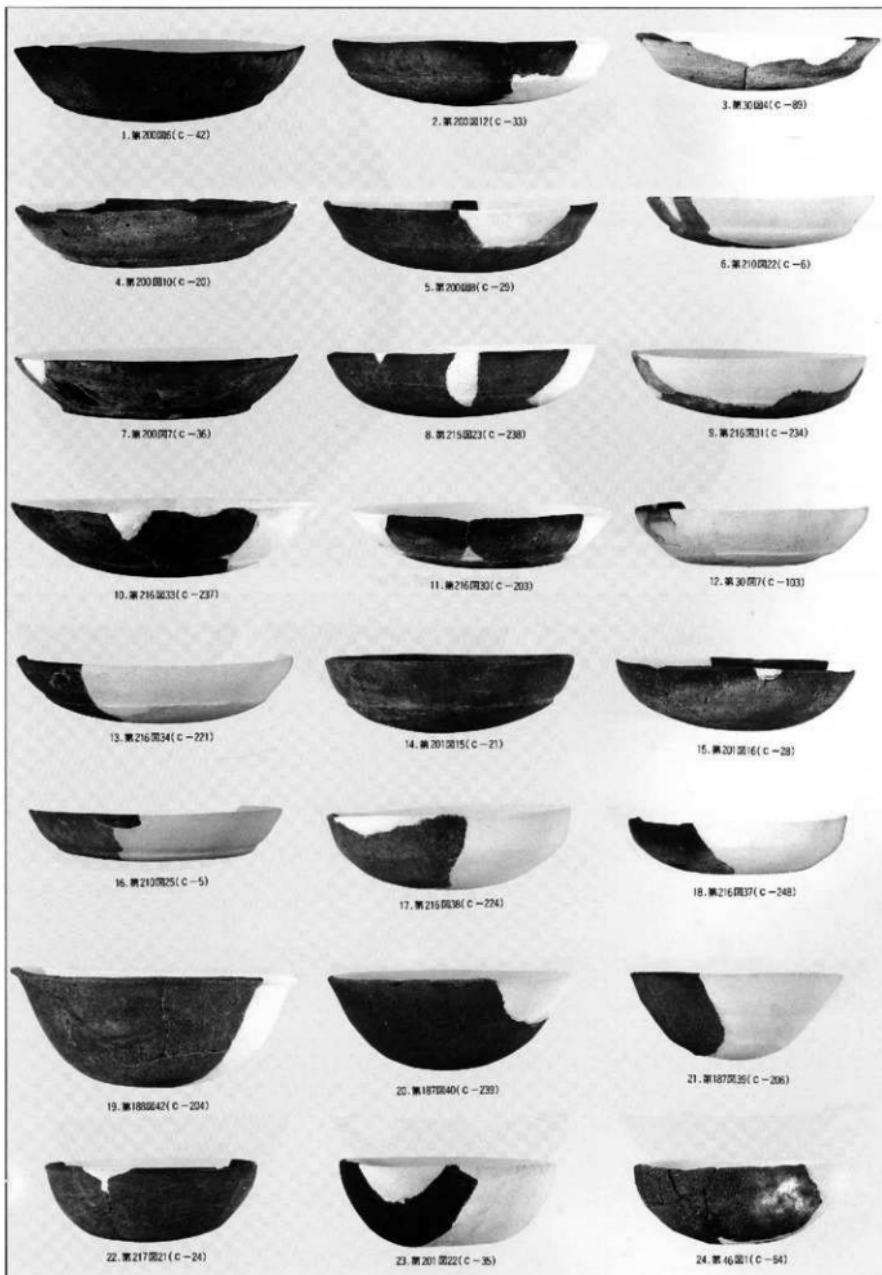
写真図版20 土師器（C群）

(1 : 3)



写真図版21 土師器（D群）

(1 : 3)
377



写真版22 土師器（D群）

(1 : 3)



1. 第201図23(C-26)



2. 第30図10(C-90)



3. 第201図25(C-18)



4. 第201図24(C-19)



5. 第30図11(C-91)



6. 第201図26(C-135)



7. 第21図44(C-220)



8. 第217図46(C-193)



9. 第217図47(C-219)



10. 第217図48(C-241)



11. 第50図1(C-183)



12. 第217図51(C-199)



13. 第217図52(C-240)



14. 第201図28(C-41)



15. 第217図53(C-220)



16. 第201図27(C-39)



17. 第202図31(C-22)



18. 第202図33(C-37)



19. 第55図2(C-178)



20. 第75図1(C-43)



21. 第77図1(C-44)



1. 第219図85(C-225)



2. 第190図7(C-77)



3. 第21図1(C-368)



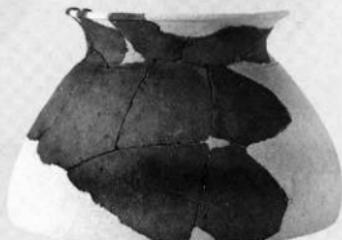
4. 第202図39(C-11)



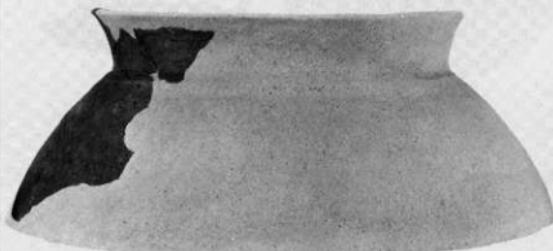
5. 第77図3(C-47)



6. 第95図1(C-366)



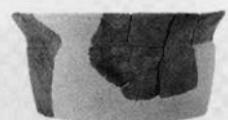
7. 第134図2(C-364)



8. 第223図90(C-343)



9. 第220図89(C-369)



1. 第311図17(C-99)



2. 第202図38(C-15)



3. 第202図37(C-146)



4. 第221図91(C-378)



5. 第221図94(C-382)



7. 第54図1(C-373)



6. 第221図95(C-383)



8. 第221図93(C-374)



1. 第203回44(C-17)



4. 第55回44(C-370)



5. 第138回29(C-53)



2. 第220回21(C-375)



6. 第202回42(C-10)



3. 第46回4(C-62)



7. 第221回97(C-376)



1. 第30回15(c-95)



2. 第16回2(c-381)



3. 第12回24(c-78)



4. 第77回4(c-46)



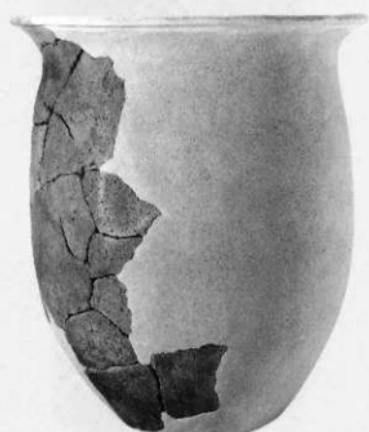
5. 第30回14(c-94)



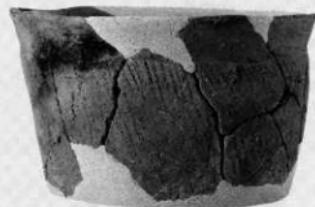
6. 第22回29(c-384)



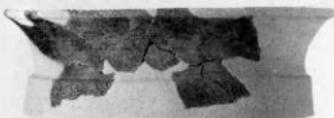
7. 第30回5(c-83)



8. 第31回16(c-95)



1. 第138回7(C-51)



2. 第221回100(C-347)



3. 第77回5(C-45)



4. 第39回7(C-82)



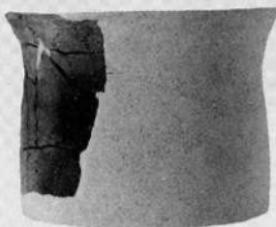
5. 第31回19(C-67)



6. 第77回6(C-48)



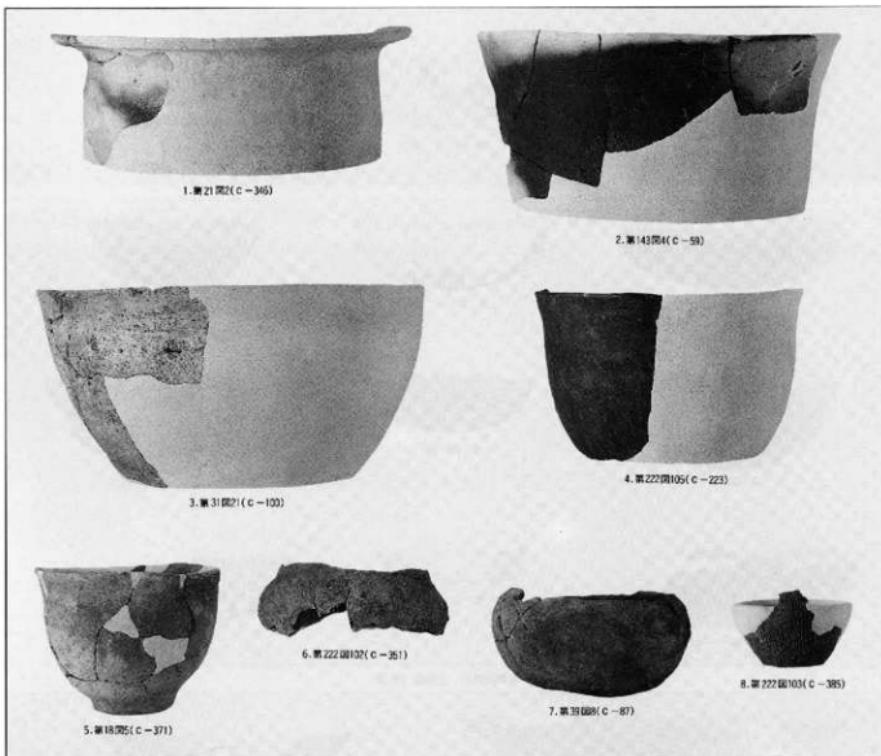
7. 第18回4(C-342)



8. 第29回6(C-81)

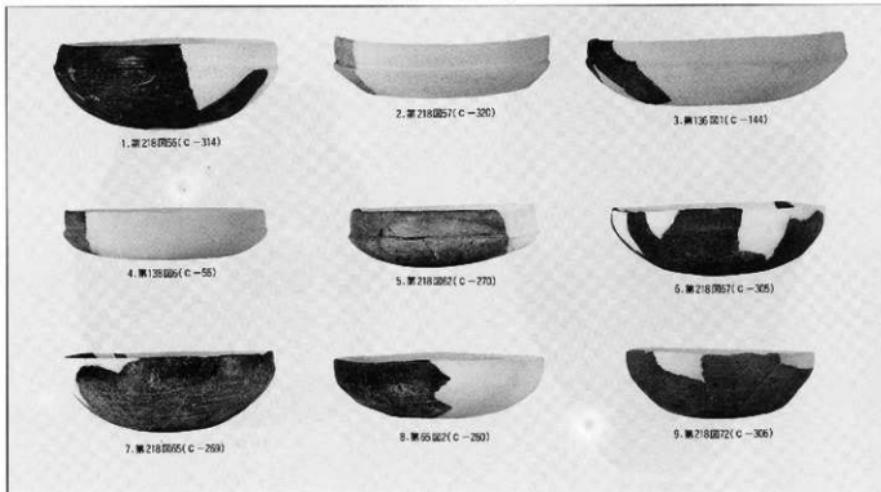


9. 第143回3(C-82)



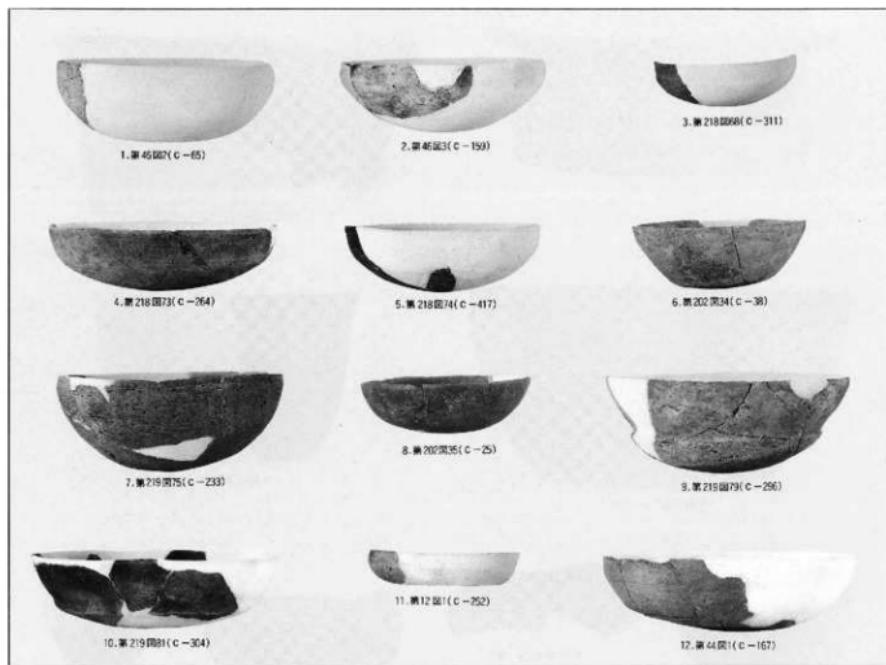
写真図版29 土師器(D群)

(1 : 3)



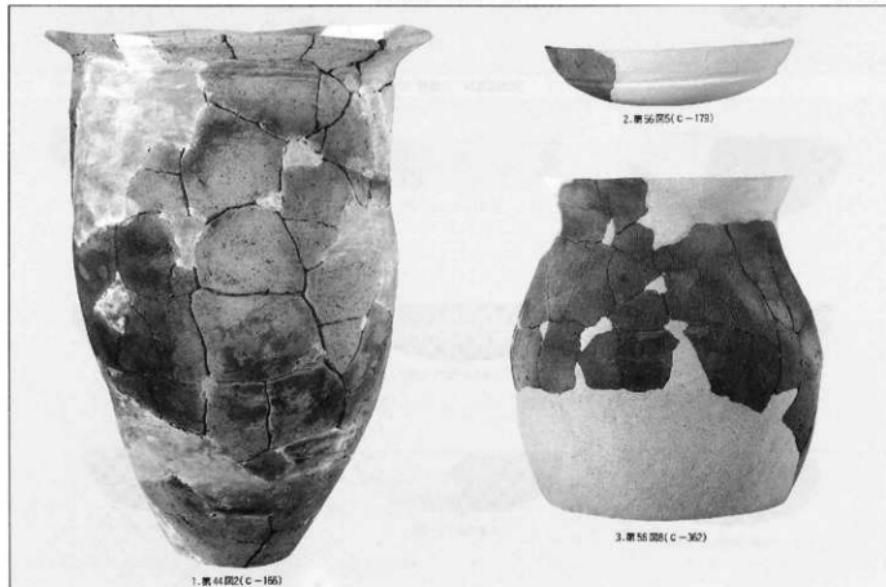
写真図版30 土師器(E群)

(1 : 3)
385



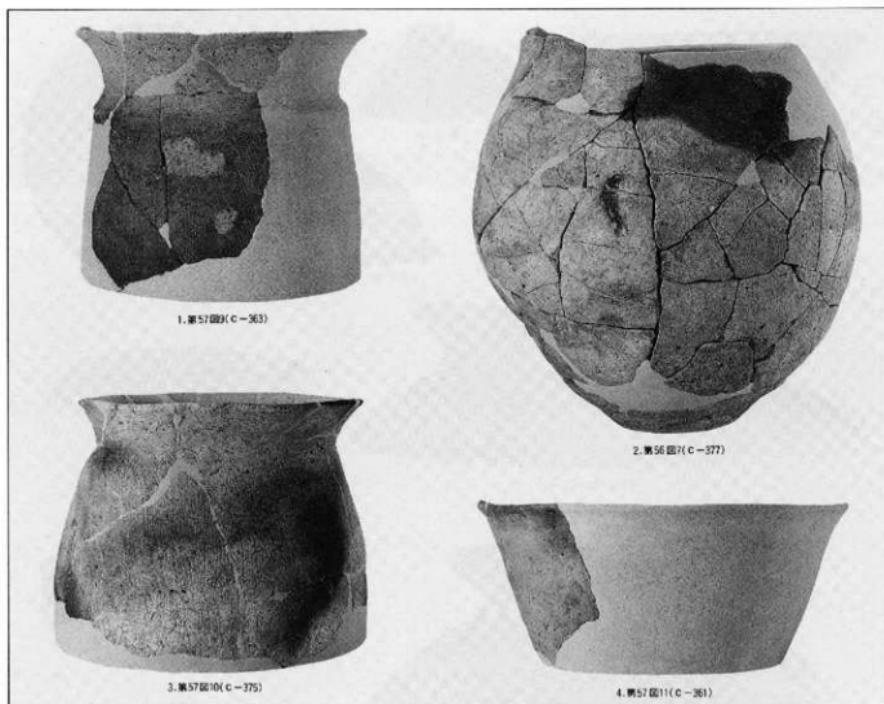
写真図版31 土師器（E群）

(1 : 3)



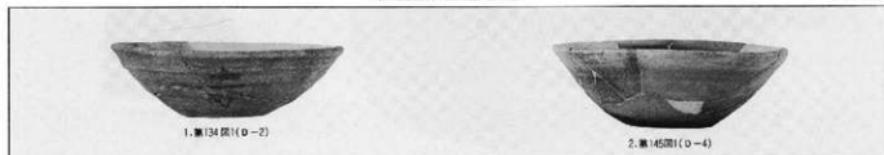
写真図版32 土師器（F群）

(1 : 3)



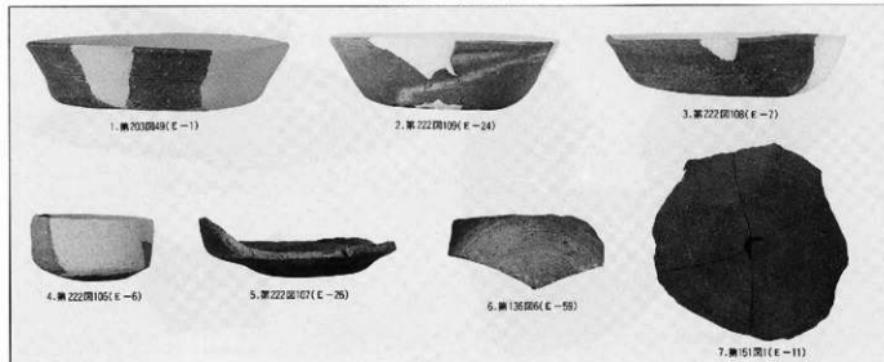
写真図版33 土器器(F群)

(1 : 3)



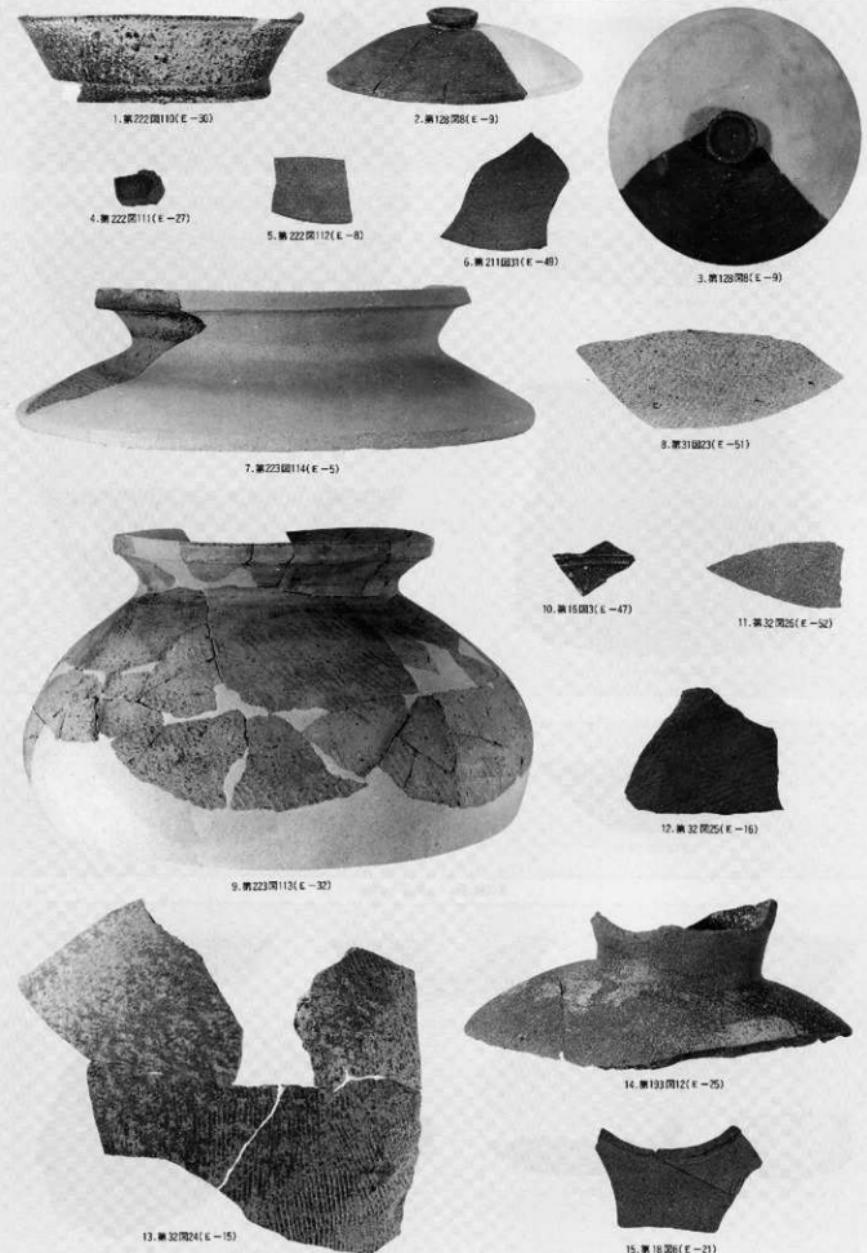
写真図版34 土器器(G群)

(1 : 3)



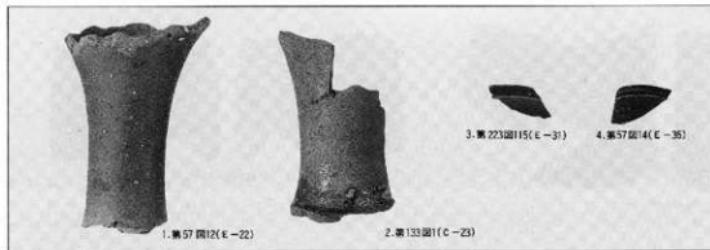
写真図版35 瓢器

(1 : 3)



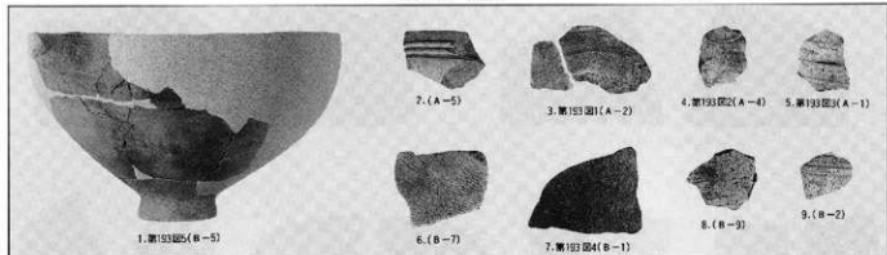
写真図版36 須恵器

(1 : 3)



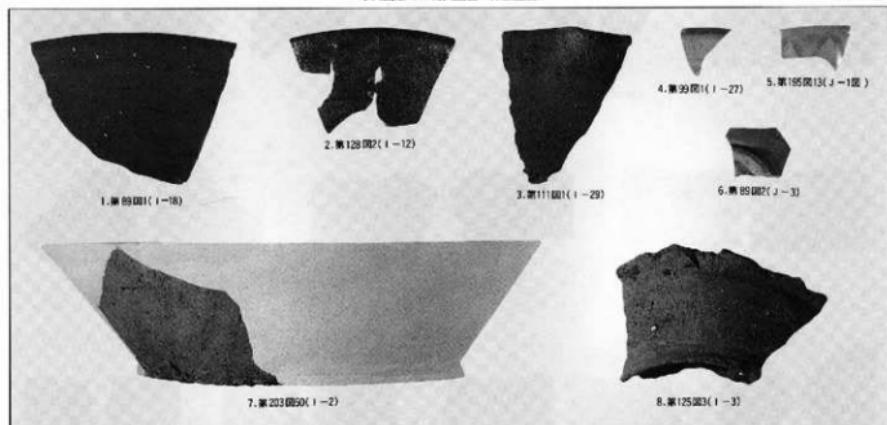
写真図版37 須恵器

(1 : 3)



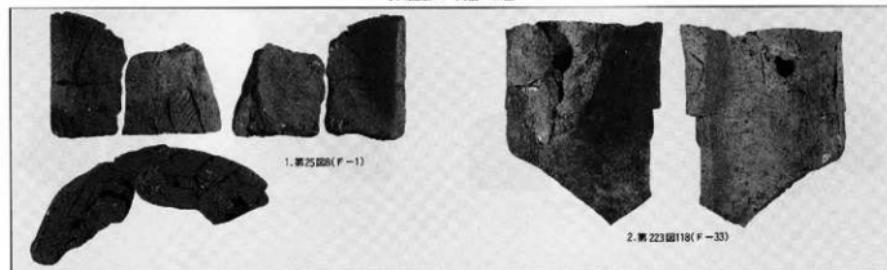
写真図版38 縄文土器・弥生土器

(1 : 3)



写真図版39 陶器・磁器

(1 : 3)



写真図版40 瓦

(1 : 4)



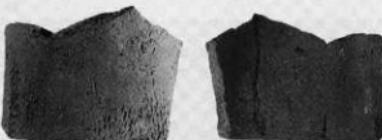
1. 第125号(F-10)



2. 第25号(F-2)



3. 第223号(F-32)



4. 第223号(F-35)



5. 第223号(F-34)



6. 第139号(F-17)



7. 第128号(F-28)



8. 第25号(F-3)



9. 第131号(F-29)



10. 第204号(F-42)



11. 第138号(F-27)



12. 第211号(F-35)



13. 第136号(F-12)



14. 第139号(F-25)



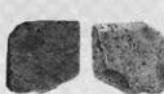
15. 第138号(F-18)



16. 第211号(F-40)



17. 第136号(F-11)



18. 第211号(F-37)

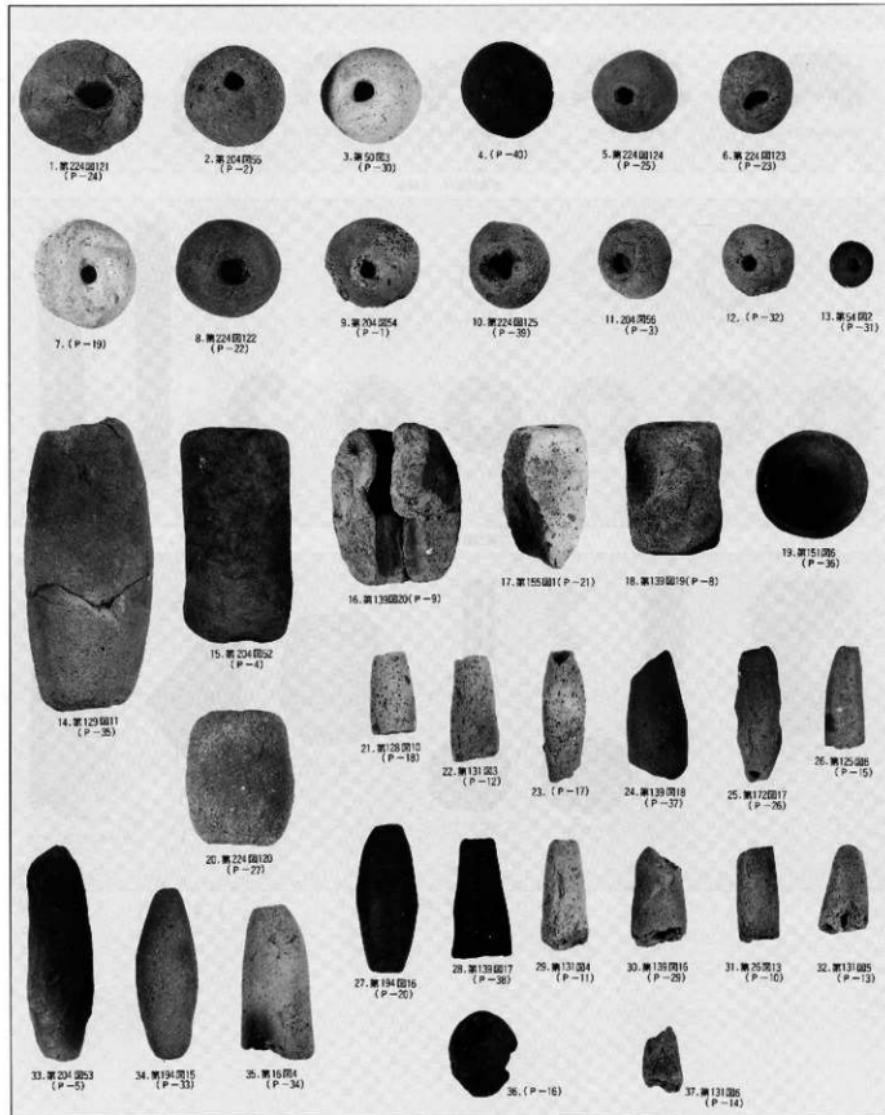


19. 第26号(F-7)



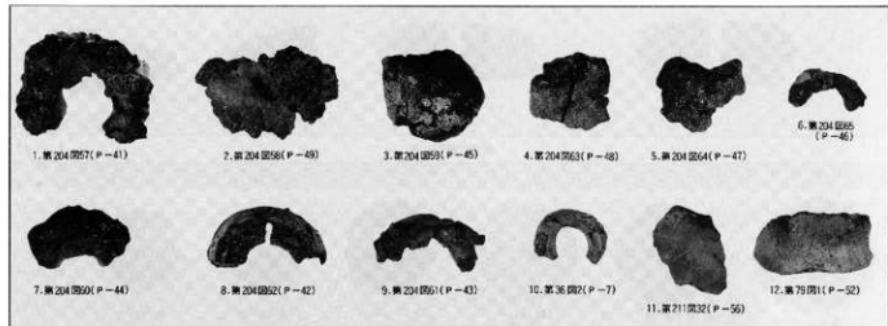
写真図版42 瓦

(1 : 4)

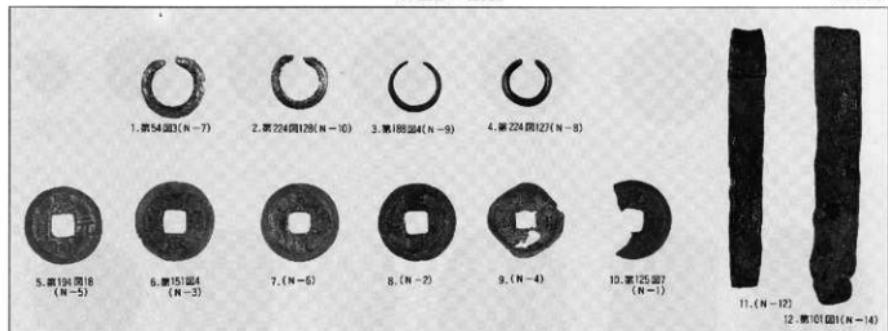


写真図版43 土製品

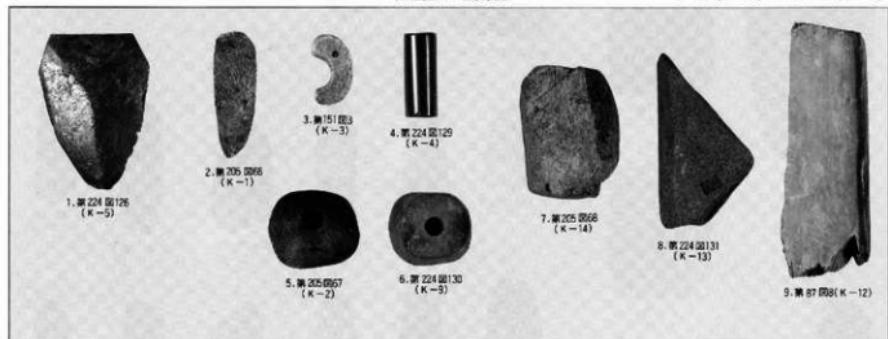
1~12 (2 : 3)
13 (1 : 1)
14~19 (1 : 2)
20~37 (2 : 3)



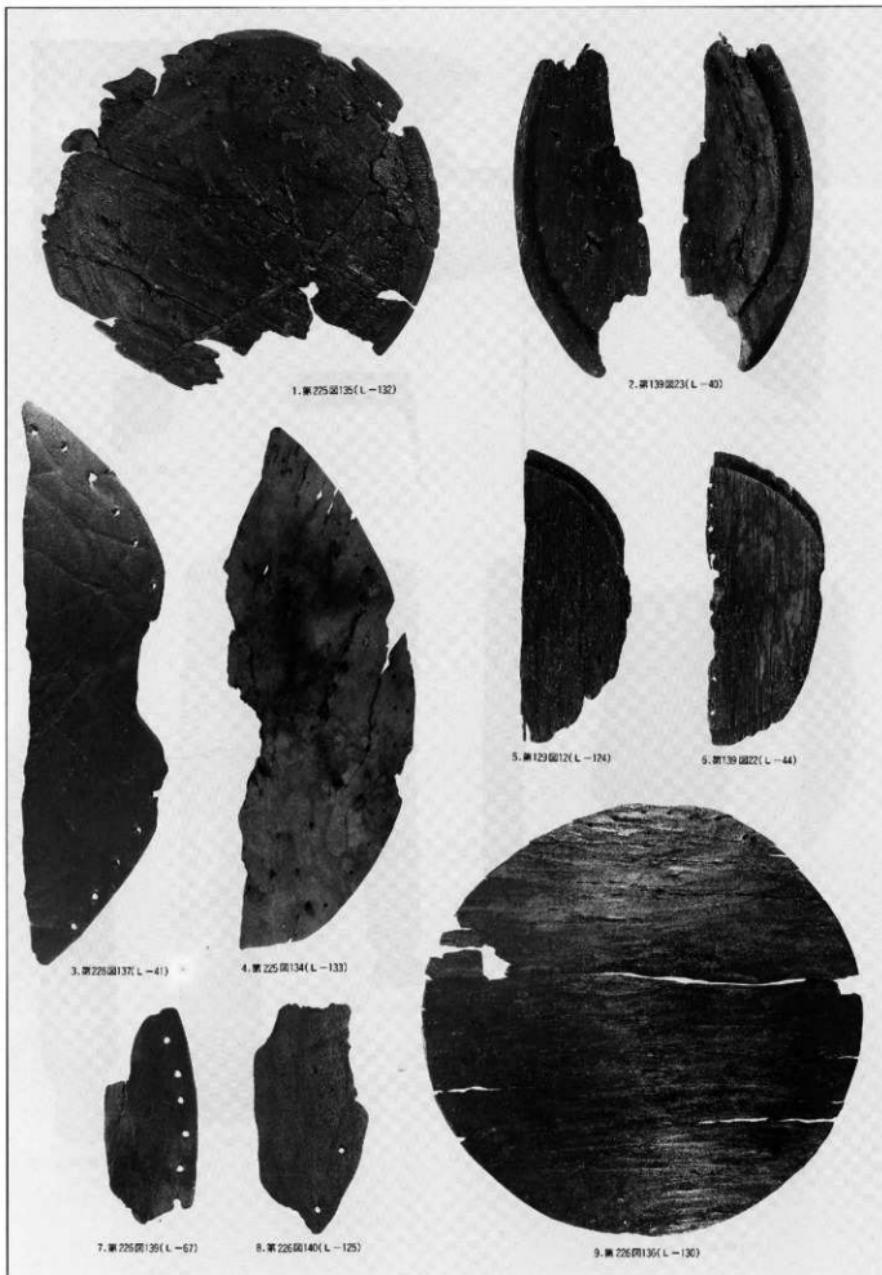
(1 : 3)



1 ~ 10 (2 : 3) 11 ~ 12 (1 : 2)



1 ~ 4 (2 : 3) 5 ~ 6 (1 : 2)
7 ~ 9 (1 : 3)



写真図版47 木製品(1)

1・4 (1:4)
9 (1:6)

2・3・5~8 (1:3)



1. 第226図138(L-45)



2. 第227図141(L-134)



4. 第228図147(L-5)



5. 第228図146(L-58)



3. 第228図145(L-53)



7. 第229図145(L-81)



6. 第229図13(L-12)



8. 第225図132(L-125)



9. 第228図150(L-119)



10. 第227図143(L-318)



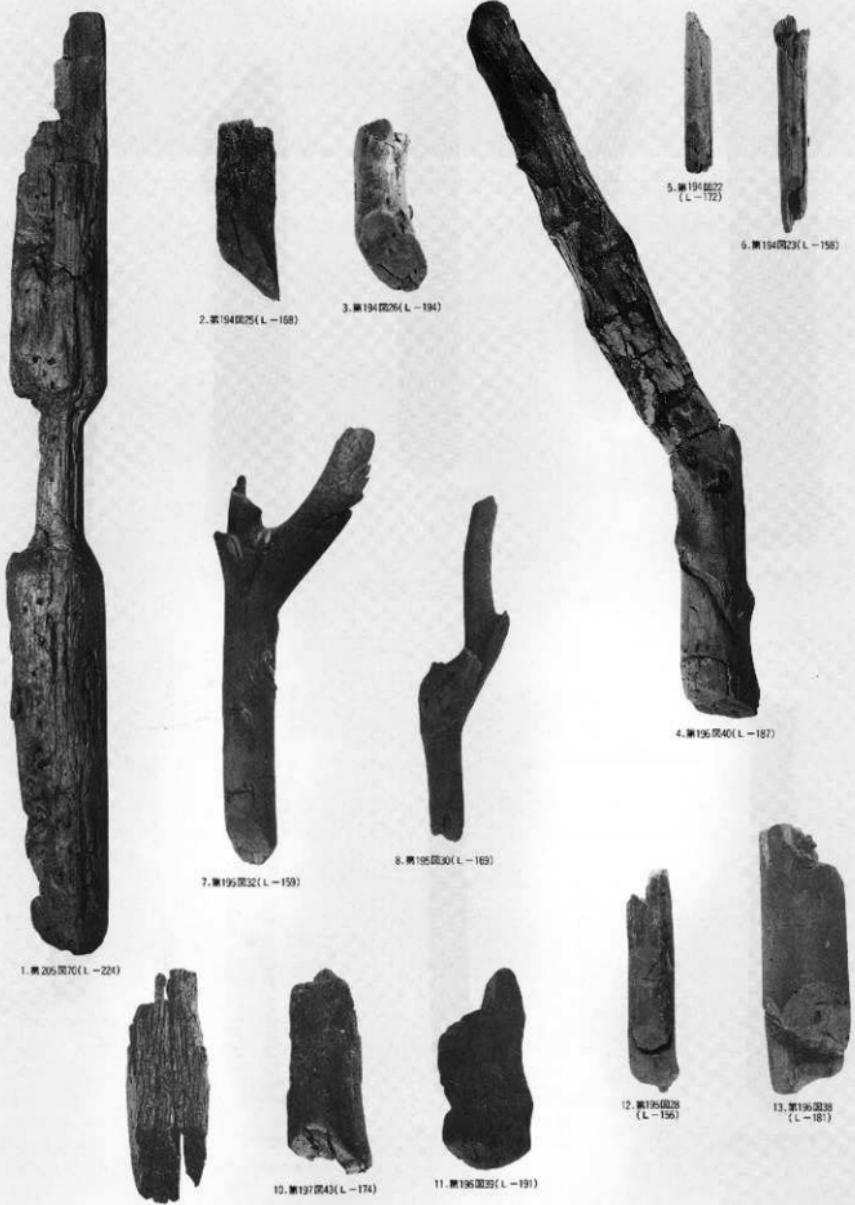
11. 第227図142(L-214)

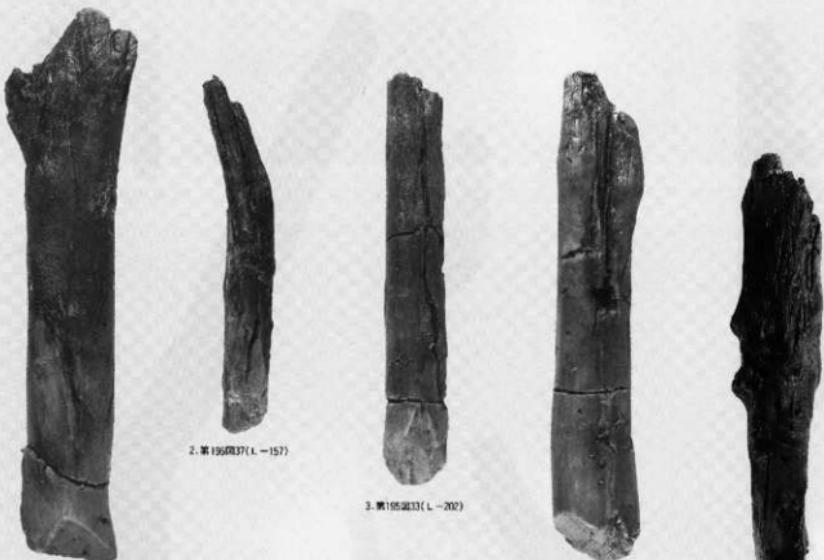


12. 第185図25(L-184)



13. 第185図27(L-197)





1.第197回44(L-188)

2.第195回37(L-157)

3.第195回33(L-202)

4.第197回42(L-204)



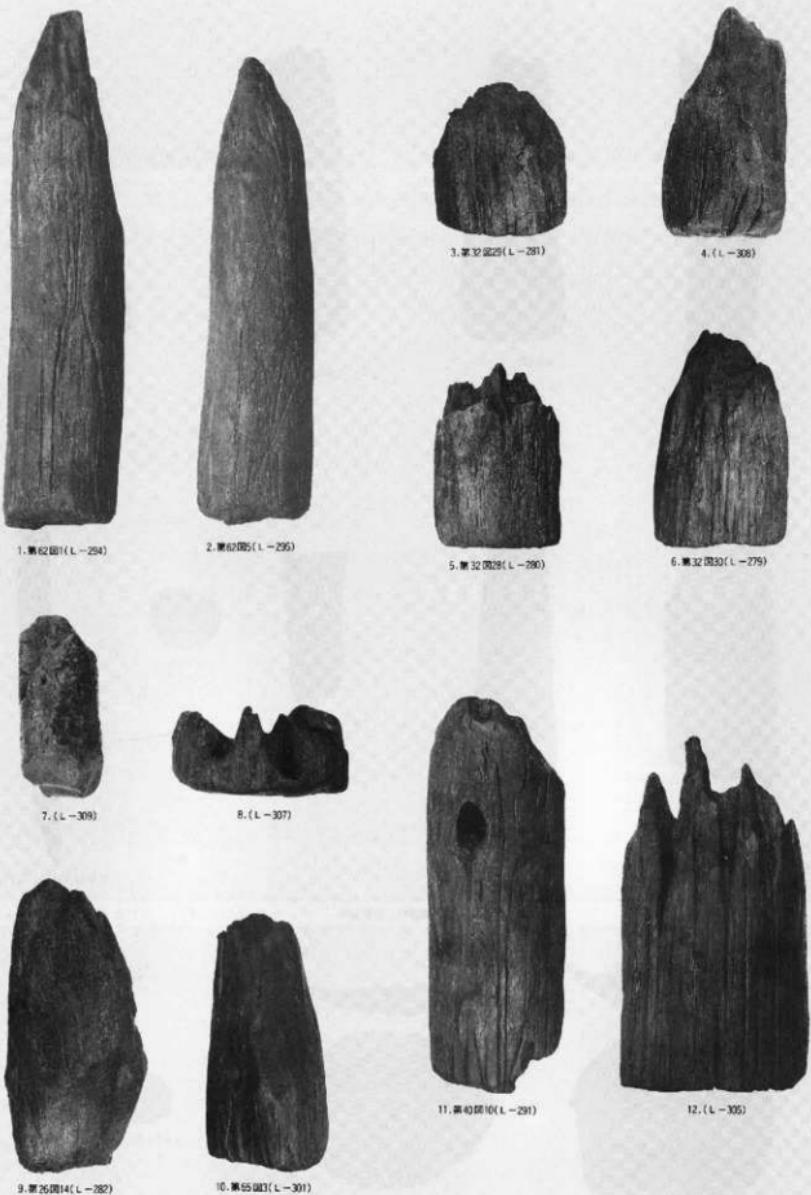
5.第195回34(L-190)

6.第195回31(L-200)

7.第195回35(L-162)

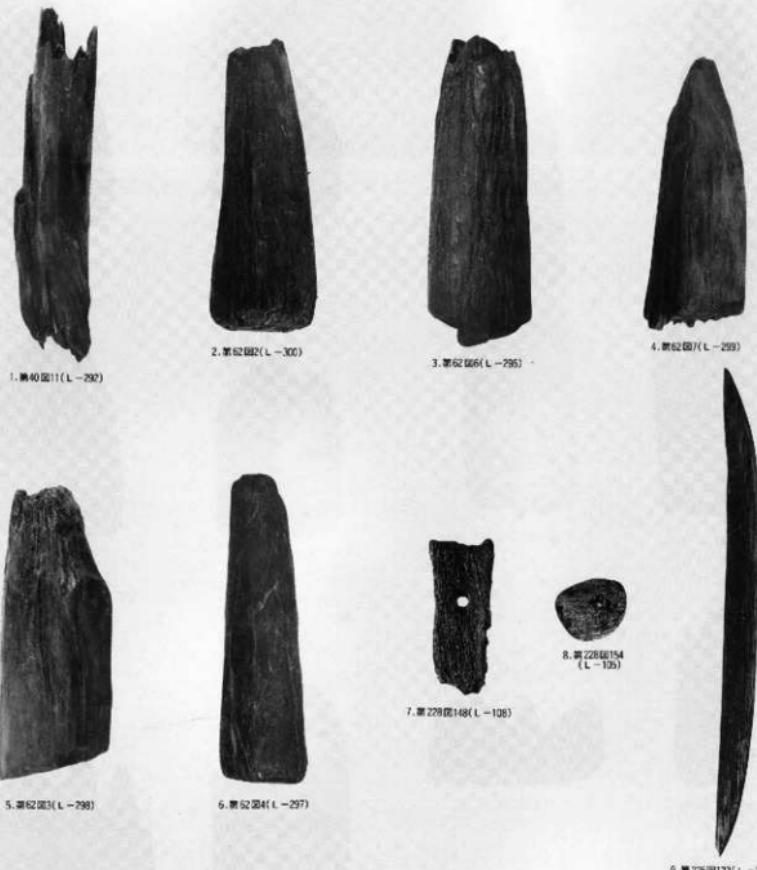
8.第195回36(L-186)

9.第197回41(L-189)



写真図版51 木製品(5)

1・2・4・7~12 (1:6)
3・5・6 (1:12)

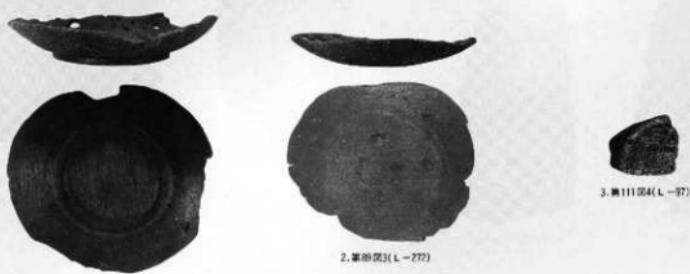


写真図版52 木製品(6)

1~6 (1:6)

7~8 (1:3)

9 (1:4)



写真図版53 木製品(7)

(1:3)



1.第111号6(L-274)



2.第81号6(L-271)



3.第122号24(L-275)



4.第81号4(L-88)



5.第111号3(L-98)



6.第81号2(L-90)



7.第111号3(L-113)



8.第91号1(L-29)



9.第25号11(L-8)



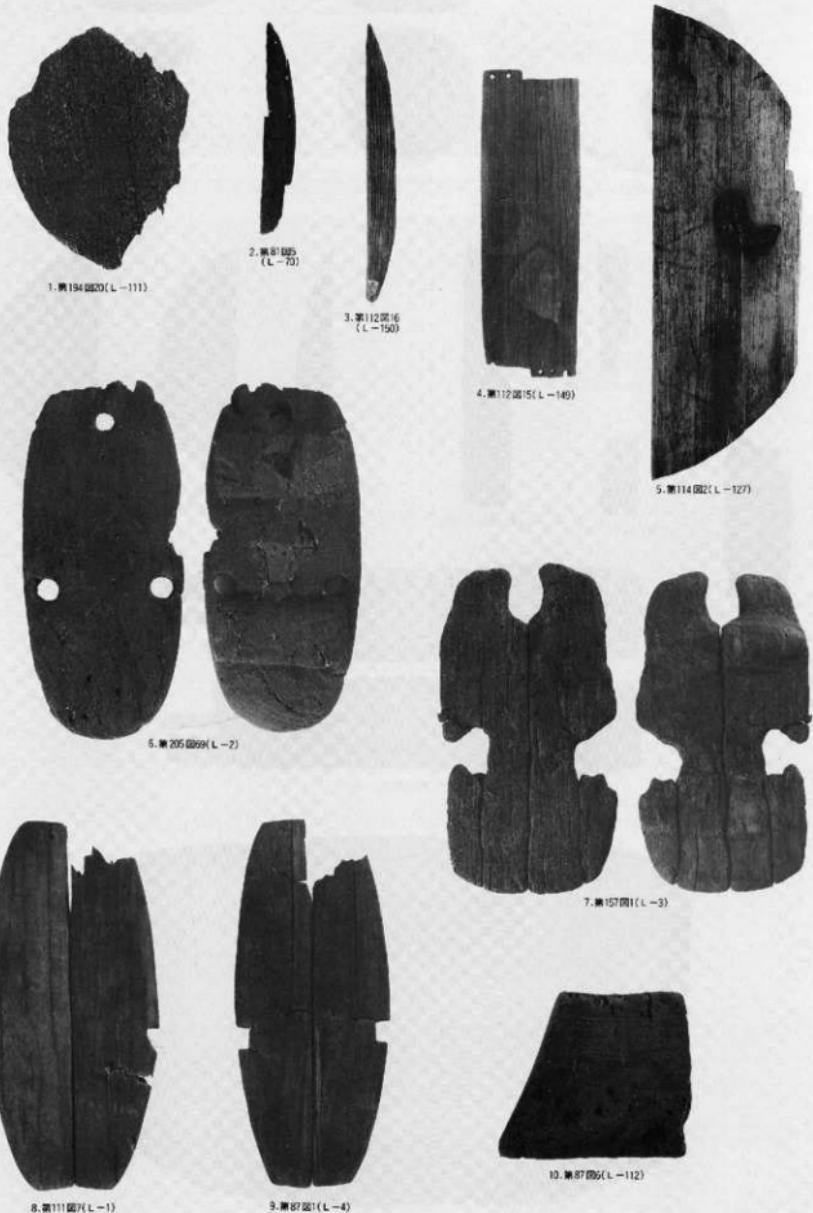
10.第81号3(L-71)



11.第25号11(L-8)

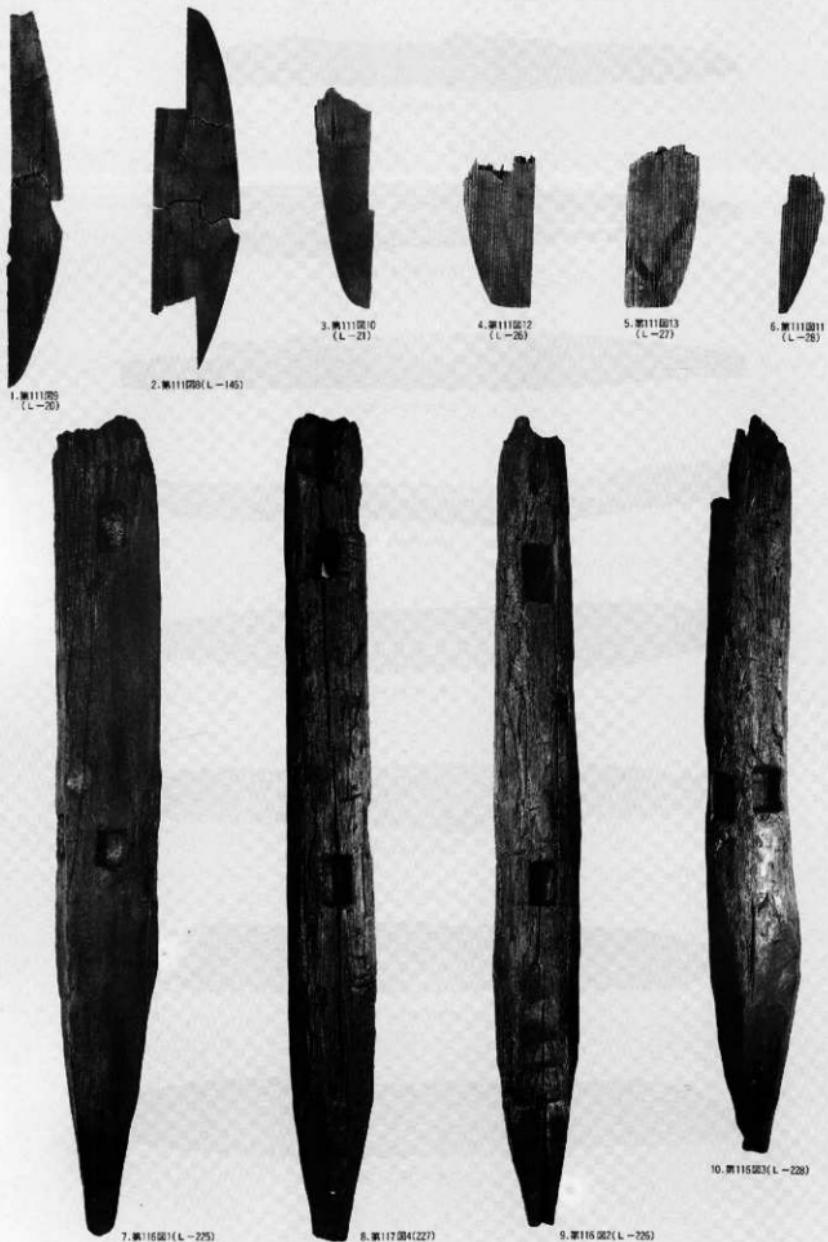


13.第114号1(L-47)



写真図版55 木製品⑨

1~4・6~10 (1:3) 5 (1:4)





1. 第121図20(L-265)



2. 第120図18(L-268)



3. 第122図22(L-267)



4. 第120図15(L-264)



5. 第121図13(L-266)



6. 第121図19(L-269)



7. 第120図17(L-263)



8. 第122図21(L-267)



1. 第118-205 (L-241)



2. 第118-208 (L-229)



3. 第117-205 (L-234)



4. 第118-207 (L-230)



10. 第119-204
(L-34)



11. 第151-206
(L-216)



12. 第119-207
(L-35)



5. 第167-201 (L-6)



6. 第112-204 (L-7)



7. 第117-201 (L-33)



8. 第91-202
(L-92)



9. 第119-203 (L-32)



1. 黒119図11(L-245)



2. 黒119図10(L-245)



3. 黒119図12(L-230)



4. 黒117図5(L-250)



5. 黒81図18(L-73)

6. 黒112図25
(L-225)7. 黒122図26
(L-16)8. 黒83図2
(L-14)9. 黒81図14
(L-24)

14. 黒151図5(L-215)



15. 黒119図13(L-255)

10. 黒81図13
(L-22)11. 黒83図3
(L-30)12. 黒112図28
(L-142)13. 黒112図27
(L-143)



1. 第81回17(L-72)



2. 第89回5(L-138)



3. 第89回5(L-139)



4. 第112回18(L-144)



5. 第108回1(L-25)



6. 第112回20
(L-145)



7. 第112回22
(L-72)



8. 第112回24
(L-17)



9. 第112回23
(L-19)



10. 第112回21
(L-148)



11. 第112回19
(L-147)



12. 第89回7
(L-50)



13. 第81回16
(L-98)



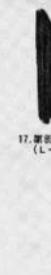
14. 第81回15
(L-87)



15. 第89回11
(L-64)



16. 第89回8
(L-48)



17. 第89回8
(L-48)



18. 第87回7
(L-10)



1



3



4



5



6

- | | | | | |
|---|-------|-----|----|------------|
| 1 | C-406 | 甕 | 外面 | ハケ目、横ナデ |
| 2 | C-352 | 甕 | 外面 | ハケ目、横ナデ |
| 3 | C-132 | 甕 | 外面 | 口縁一ハケ目、ミガキ |
| 4 | C-150 | 台付甕 | 外面 | 口縁一ハケ目、押庄 |
| 5 | C-151 | 台付甕 | 外面 | 口縁一ハケ目、押庄 |
| 6 | C-404 | 台付甕 | 外面 | 口縁一ハケ目、押庄 |

写真図版61 土器試大写真(1)



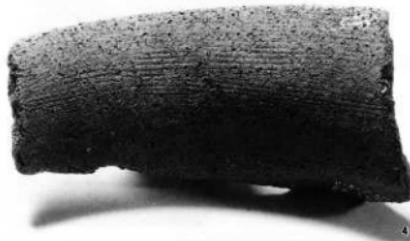
1



2



3



4

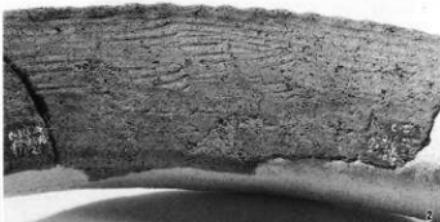


5

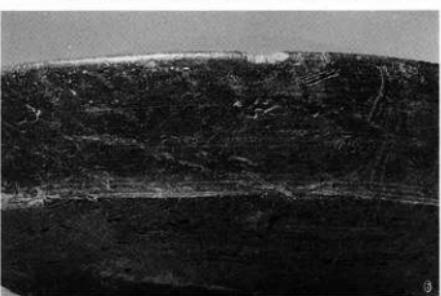


6

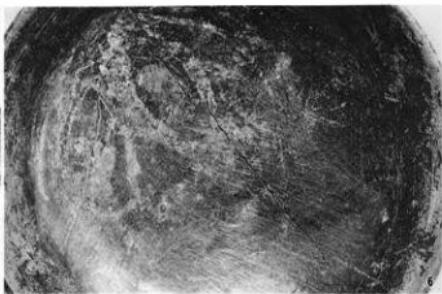
- | | | | | |
|---|-------|-----|----|---------------|
| 1 | C-148 | 台付甕 | 外面 | 口縁一ハケ目、横ナグ、刻み |
| 2 | C-134 | 台付甕 | 外面 | 口縁一ハケ目、押圧 |
| 3 | C-2 | 台付甕 | 外面 | 口縁一ハケ目、押圧 |
| 4 | C-406 | 甕 | 内面 | 口縁一ハケ目 |
| 5 | C-48 | 甕 | 内面 | 口縁一ハケ目 |
| 6 | C-132 | 甕 | 内面 | 口縁一ハケ目、ミガキ |



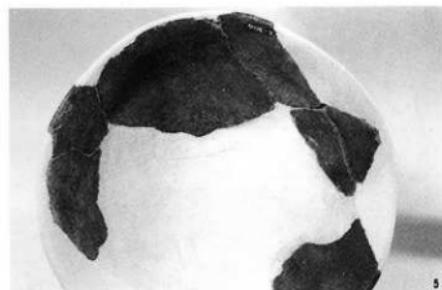
- | | | | | |
|---|-------|-----|----|-----------------------|
| 1 | C-404 | 台付甕 | 内面 | 口縁一ミガキ |
| 2 | C-2 | 台付甕 | 内面 | 口縁一ハケ目、ミガキ |
| 3 | C-29 | 坏 | 外面 | 口縁一横ナギ、底部一割り |
| 4 | C-32 | 坏 | 外面 | 口縁一横ナギ、輪筋み痕、底部一ハケ目、削り |
| 5 | C-21 | 坏 | 外面 | 口縁一横ナギ、輪筋み痕 |
| 6 | C-4 | 坏 | 外面 | 口縁一ハケ目 |



- | | | | | |
|---|-------|---|----|--------|
| 1 | C-42 | 坏 | 外面 | 底部一ハケ目 |
| 2 | C-203 | 坏 | 外面 | 底部一ハケ目 |
| 3 | C-18 | 坏 | 外面 | 体部一ハケ目 |
| 4 | C-206 | 坏 | 外面 | 体部一ハケ目 |
| 5 | C-27 | 坏 | 外面 | 底部一削り |
| 6 | C-29 | 坏 | 外面 | 底部一削り |



- | | | | | |
|---|-------|---|----|---------|
| 1 | C-204 | 坏 | 外面 | 体部-割り |
| 2 | C-31 | 坏 | 外面 | 口縁-ミガキ |
| 3 | C-44 | 坏 | 外面 | 底部-ミガキ |
| 4 | C-22 | 坏 | 外面 | 巻き上げ底 |
| 5 | C-41 | 坏 | 内面 | 横ナギ、ミガキ |
| 6 | C-21 | 坏 | 内面 | ミガキ |



- | | | | | |
|---|-------|---|----|--------|
| 1 | C-42 | 环 | 内面 | ミガキ |
| 2 | C-22 | 环 | 内面 | ミガキ |
| 3 | C-296 | 环 | 内面 | ナゲ |
| 4 | C-38 | 环 | 内面 | ナゲ |
| 5 | C-304 | 环 | 内面 | ナゲ |
| 6 | C-379 | 甌 | 外面 | 体部一ハケ目 |



1 C-346 壺 外面 口縁一ハケ目 体部一ハケ目

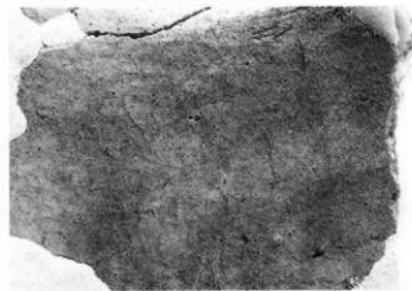
2 C-376 壺 外面 体部一ハケ目

3 C-343 壺 外面 体部一ハケ目

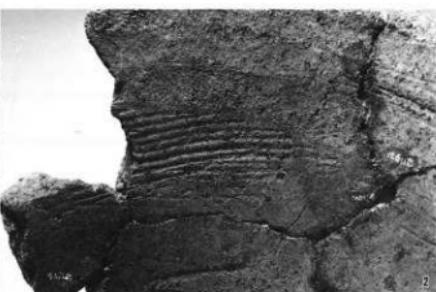
4 C-372 袋 外面 体部一ハケ目

5 C-369 壺 外面 体部一削り

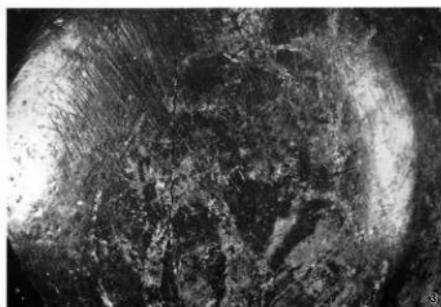
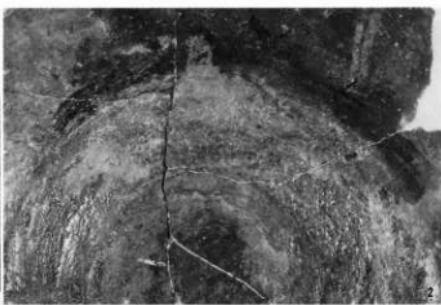
6 C-94 壺 外面 体部一削り



- | | | | | |
|---|-------|---|----|---------------|
| 1 | C-45 | 壳 | 外面 | 体部-割り |
| 2 | C-59 | 壳 | 外面 | 口縁-横ナデ 体部-ミガキ |
| 3 | C-374 | 壳 | 外面 | 体部-煤状付着物 |
| 4 | C-53 | 壳 | 内面 | ヘラナデ |
| 5 | C-343 | 壳 | 内面 | ヘラナデ |
| 6 | C-48 | 壳 | 内面 | ヘラナデ |



- | | | | | |
|---|-------|---|----|----------|
| 1 | C-362 | 壳 | 内面 | ハケ目、ヘラナゲ |
| 2 | C-374 | 壳 | 内面 | ハケ目、ナゲ |
| 3 | C-59 | 瓶 | 内面 | ミガキ |



1 C-36 壱 外面 底部-漆付着状況

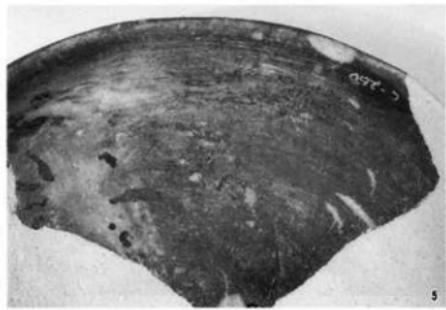
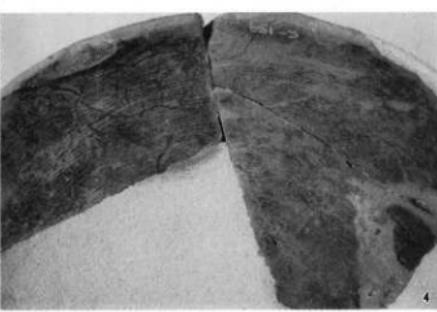
2 C-36 壱 内面 底部-漆付着状況

3 C-21 壱 内面 ミガキ、黒色処理

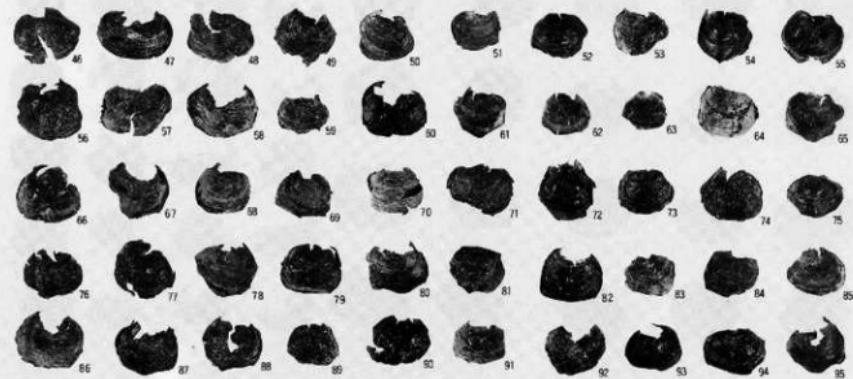
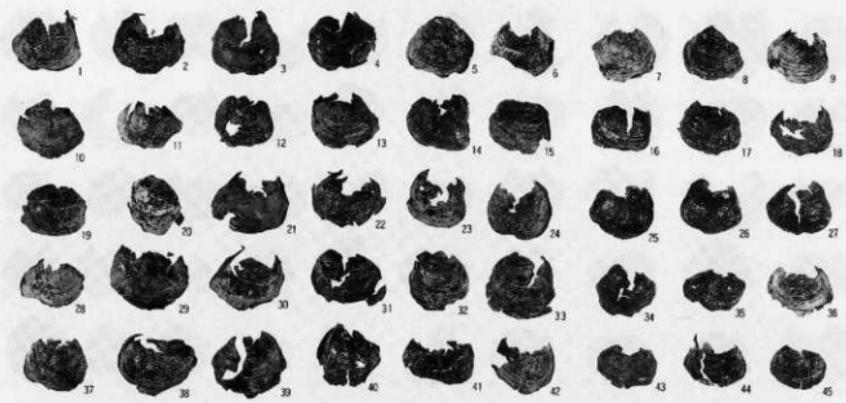
4 C-91 壱 裂れ口 漆付着状況

5 C-178 壱 外面 赤彩

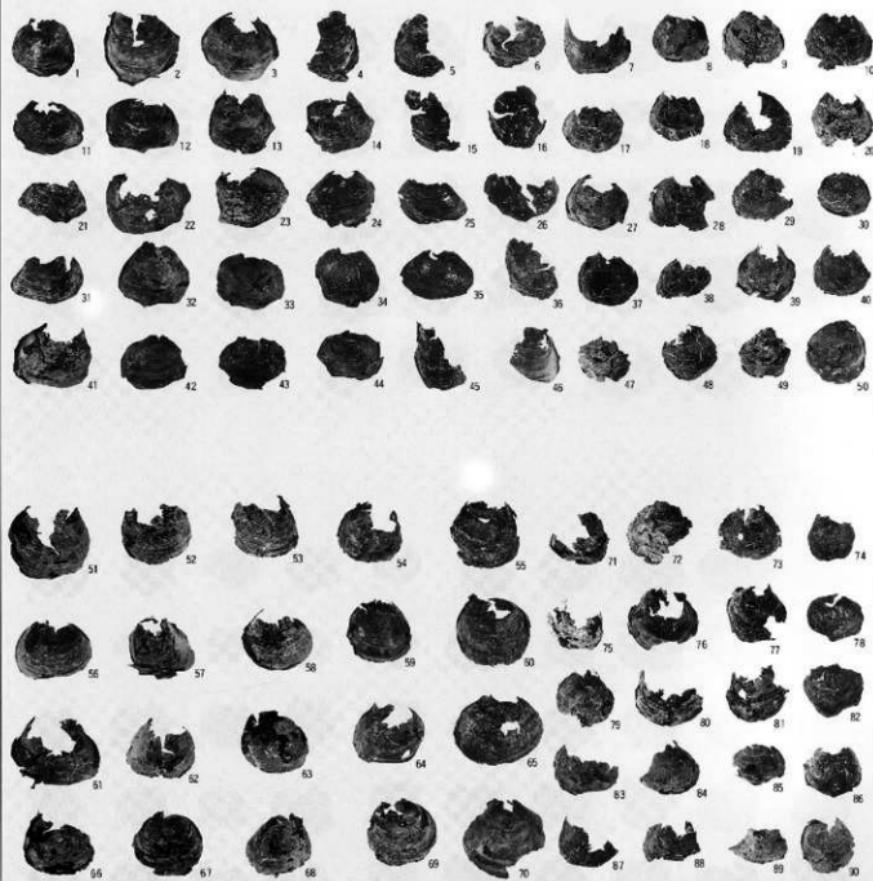
6 C-314 壱 内面 漆処理



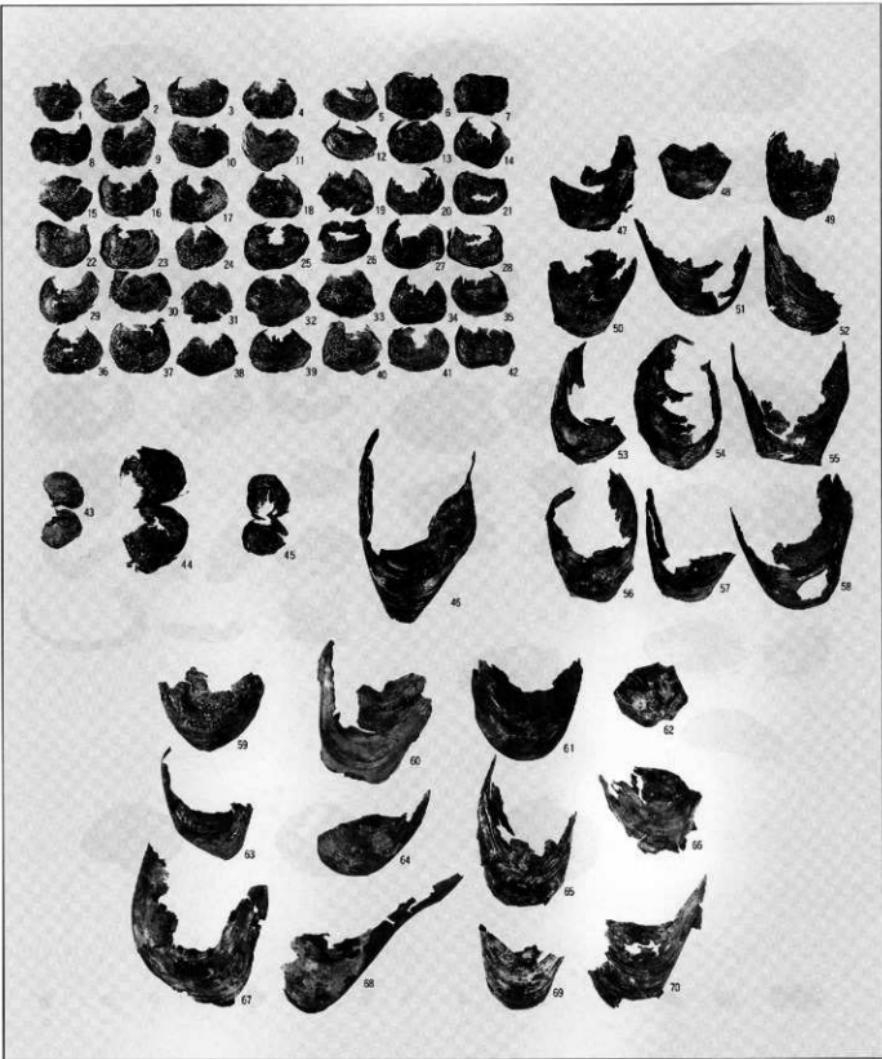
1	C-305	环	内面	漆处理
2	C-315	环	内面	黑色处理
3	C-417	环	内面	漆处理
4	C-159	环	内面	漆处理
5	C-260	环	内面	漆处理
6	C-264	环	内面	漆处理
7	C-25	环	内面	漆处理



1~95 シジイ (SR 4)



1~90 シジミ (SR 4)



1~45 シジミ (SR 4)

46~70 イガイ (SR 4)



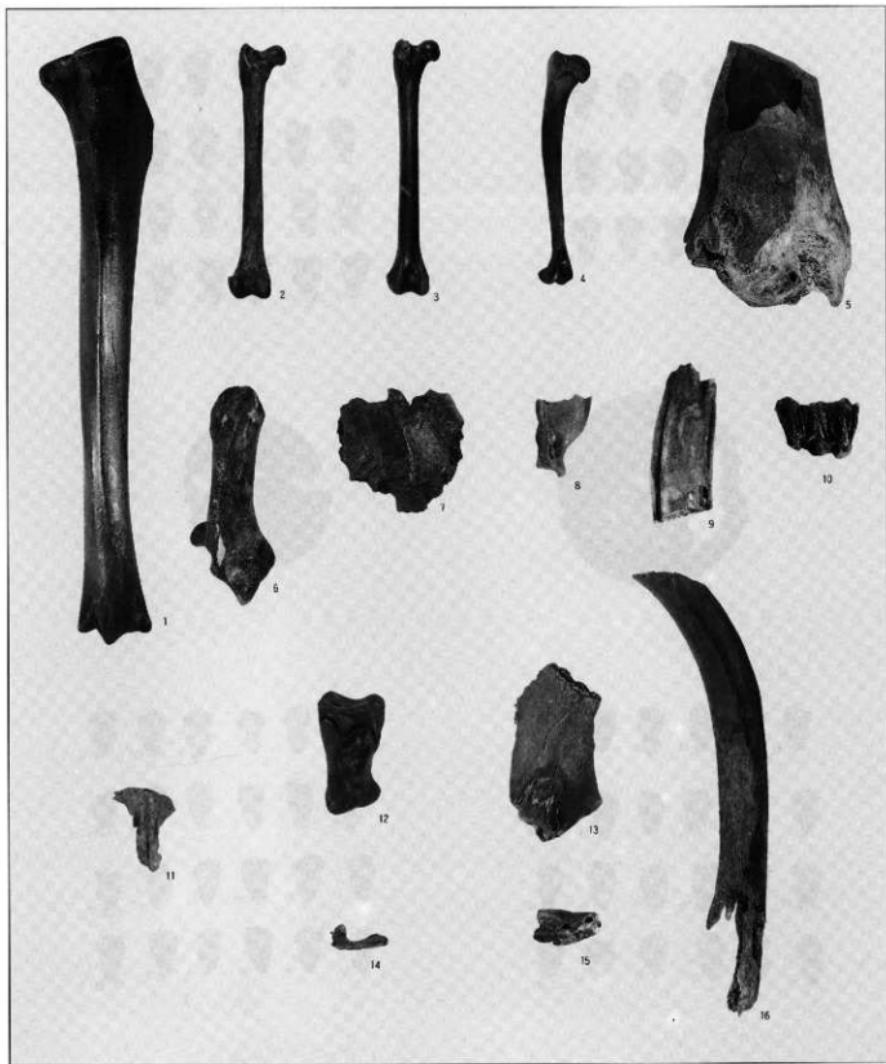
1~31 イシガイ (SR 4)

32~34 マツカサガイ (SR 4)

35~38 アサリ (SR 4)

39~42 スガイ (SR 4)

43~47 亀貝のフタ (SR 4)



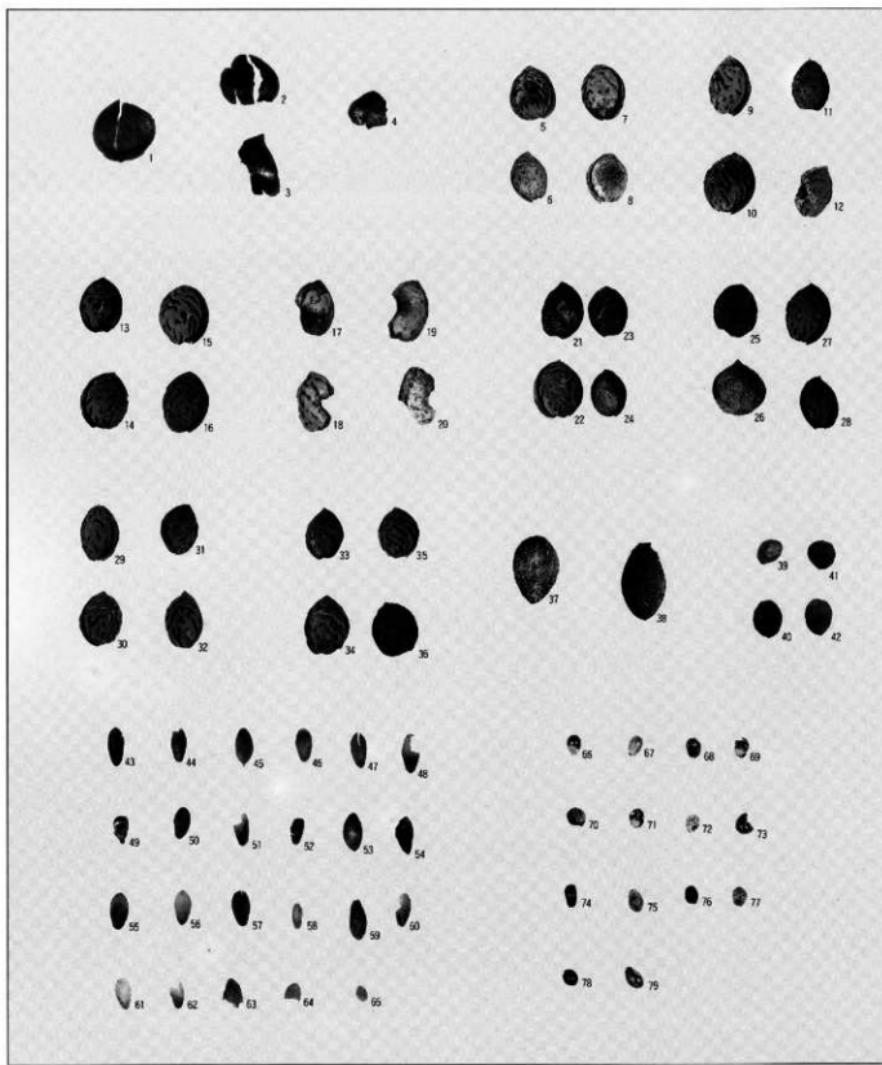
1~10 (S R 2) ニホンジカ (1~6) イエネコ (2~3~4~8) ウマ (9) ウシ (5~7~10)

11 (S R 1) イエネコ

12~16 (S R 4) ウシ (12) ニホンジカ (13) スズキ (14~15) ウシ (16)



1~92 種子類 (S R 4)



1~79 種子類 (S R 4)

報告書抄録

ふりがな	しもいいだいせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	下飯田遺跡発掘調査報告書						
副書名							
巻次							
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第191集						
編著者名	中富 洋・松本秀明・守田益宗・高橋利彦・大越龍嗣・富岡直人・松谷曉子・三辻利一 古環境研究所						
編集機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980 8671 仙台市青葉区国分町三丁目7-1						
発行年月日	平成7年3月						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
下飯田遺跡	仙台市若林区 下飯田	4100 01434	38°12'44"	140°57'15"	平成3年5月～ 平成4年9月	約7,500	東部道路建設
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
下飯田遺跡	集落跡・墓跡 屋敷跡	古墳時代・ 中世	住居跡・河川跡・溝跡 掘立柱建物跡	土師器・須恵器 木製品・石製模造品			

仙台市文化財調査報告書第191集

下飯田遺跡発掘調査報告書

1995年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町三丁目7-1
文化財課 022-214-8894

印刷 株式会社 共新精版印刷

仙台市宮城野区日の出町2-4-2
TEL 236-7181

